佐倉市腰巻(こしまき)遺跡

— 佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ —

1987.3

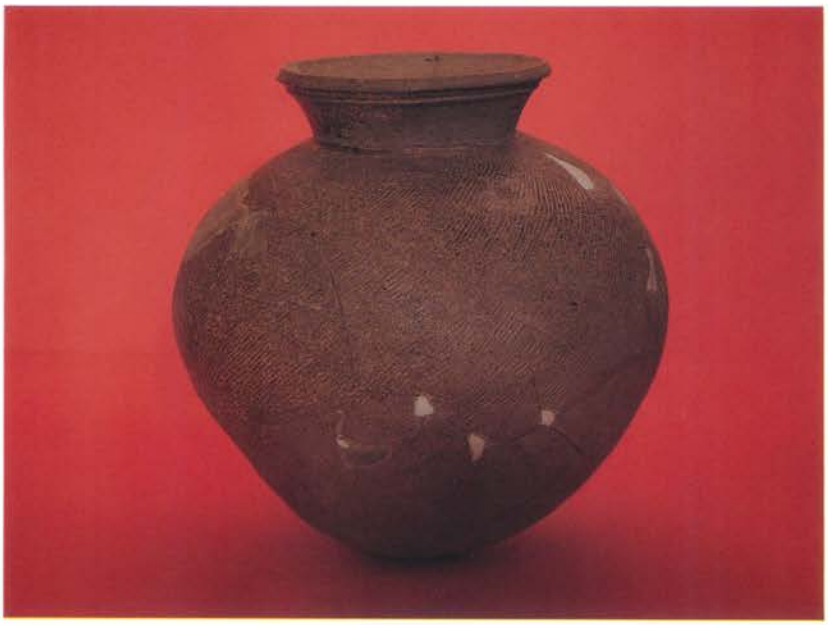
千葉県土地開発公社
財団法人 千葉県文化財センター

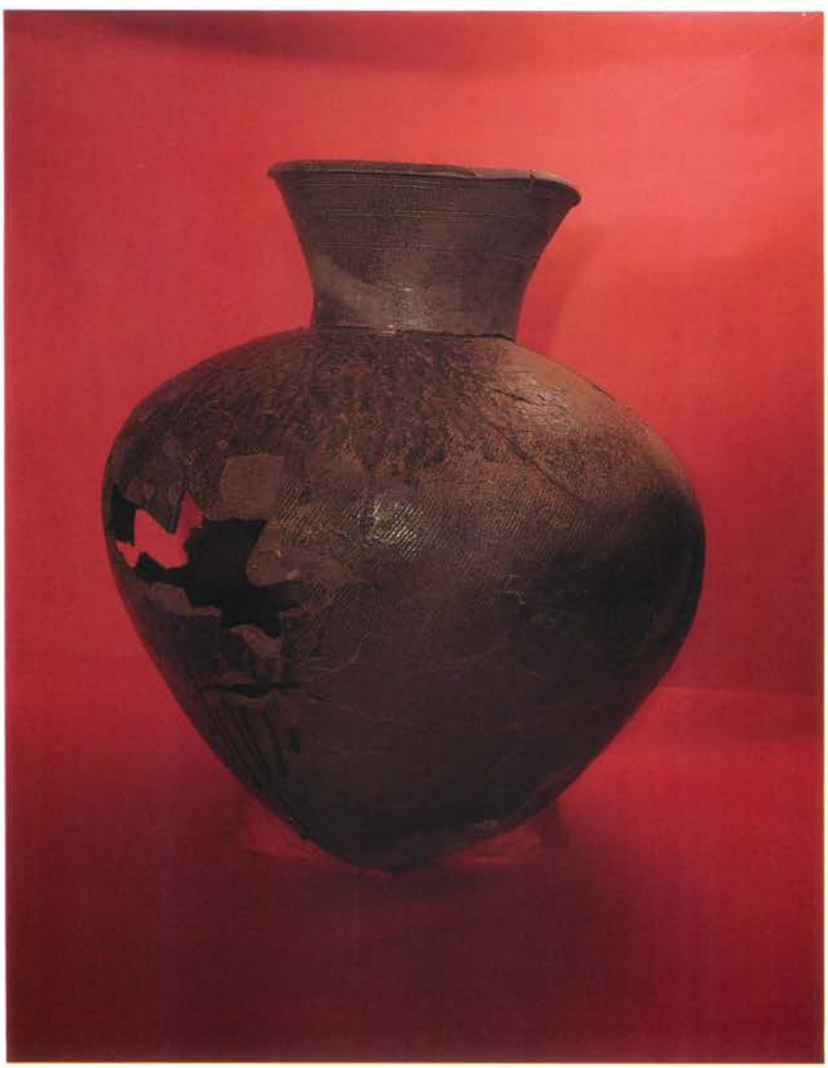
佐倉市腰巻(こしまき)遺跡

— 佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ —

1987.3

千葉県土地開発公社
財団法人 千葉県文化財センター





序　　文

佐倉市内には、旧石器時代から近・現代に至るまでの歴史的文化遺産が数多くあり、この地が人々の生活や生産活動にとって最適な場所であることを物語っています。

このことは、科学の進歩した現代においても変ることがなく、既に第１・第２工業団地や住宅団地が建設され、大きく発展しつつあります。そしてまた、この地に千葉県の内陸部の工業を育成するための一環として、佐倉第三工業団地の建設が、千葉県土地開発公社によって計画されました。

そこで、千葉県教育委員会は、事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、千葉県土地開発公社、佐倉市教育委員会等関係諸機関と協議を重ねてきました。その結果、公園や緑地として古墳やその他の埋蔵文化財が現状保存されることとなりましたが、建設の都合上やむをえない地域については、発掘調査を実施して記録保存の措置を講じることとなりました。

発掘調査は、財団法人千葉県文化財センターが、千葉県教育委員会から指名を受け、昭和50年に、そして一時中断して昭和54年から実施し、昭和60年度に終了致しました。このたび、昭和54年度及び昭和56年度から昭和58年度にかけて発掘調査を実施した腰巻遺跡の成果を報告書として刊行する運びとなりました。腰巻遺跡は、旧石器時代から中・近世までの各時代にわたる遺構・遺物が発見されています。その中でも、古墳時代後期の集落の立地は、東側に開く谷の斜面から谷底にかけて住居が営まれており、従来からの集落立地概念を一変させるもので、古墳時代の集落研究にとって貴重な資料であります。

この報告書が、学術研究のみならず学校教育や社会教育の資料として広く活用され、文化財保護思想の啓蒙と普及に役立つことを願ってやみません。

おわりに、発掘調査から整理作業に至るまで御指導・御協力をいただいた千葉県教育委員会、千葉県土地開発公社、佐倉市教育委員会及び関係諸機関の皆様に厚く御礼申し上げます。また、発掘調査、整理作業、見学会等に御協力をいただいた調査補助員、地元の皆様に心から感謝いたします。

昭和62年３月

財団法人千葉県文化財センター
理事長　山　本　孝　也

例　　言

1．本報告書は、千葉県土地開発公社による佐倉第三工業団地造成に伴う、千業県佐倉市腰巻(こしまき)遺跡（212—007及び026）の埋蔵文化財調査報告書である。

2．発掘調査及び本報告書作成の業務は、千葉県土地開発公社の委託を受け、千葉県教育委員会の指導に基づき、㈶千葉県文化財センターが行なった。

3．佐倉第三工業団地内の埋蔵文化財調査は、次の構成で実施された。

調査部長　白石竹雄（昭和54年度～昭和58年度）
　　鈴木道之助（昭和59年度～昭和61年度）

部長補佐　山田友治（昭和54年度）
　　栗本佳弘（昭和55年度）
　　中山吉秀（昭和56年度）
　　岡川宏道（昭和57年度・昭和59年度～）
　　根本弘（昭和58年度）

班　　長　沼沢豊（昭和54年度～昭和55年度）
　　阪田正一（昭和56年度）
　　根本弘（昭和57年度）
　　矢戸三男（昭和58年度～昭和61年度）

主任調査研究員
　　矢戸三男（昭和56年度～昭和57年度）
　　鈴木定明（昭和57年10．1～昭和58年9．30）
　　西川博孝（昭和58年4．1～昭和58年9．30）
　　雨宮龍太郎（昭和59年12．1～昭和60年2．28）
　　石倉亮治（昭和60年7．1～昭和60年11．30・昭和61年3．1～）

調査研究員
　　阪田正一（昭和54年度～昭和55年度）・**金丸誠**（昭和54年度～昭和56年度）
　　蔀淳一（昭和55年度～昭和61年度）・**石倉亮治**（昭和56年4．1～昭和60年6．30）
　　関根重夫（昭和56年4．1～昭和58年9．30）・**石井ひろみ**（昭和57年度）
　　服部哲則（昭和57年4．1～昭和59年6．30）・榊原弘二（昭和57年12．1～昭和58年3．31）・白石浩（昭和57年12．1～昭和58年3．31）・藤崎芳樹（昭和58年度）
　　加藤正信（昭和58年4．1～昭和58年9．30）・倉内郁子（昭和58年4．1～昭和59年11．30）・岩井正（昭和58年度）・田村隆（昭和59年度）・田島新（昭和59年度）
　　小畑巌（昭和60年度～昭和61年度）

4．腰巻遺跡の整理作業は、昭和59年度に基礎整理作業の一部を田村隆・石倉亮治が行ない、実測作業は矢戸三男・石倉亮治・蔀淳一・小畑巌が共同し、本報告書の編集・執筆は調査部長鈴木道之助、部長補佐岡川宏道、班長矢戸三男の指導のもとに石倉亮治が行なった。

5．発掘調査及び報告書の刊行に際して、下記の方々の御協力を賜り、感謝の意を表します。

千葉県土地開発公社、千葉県教育庁文化課、㈶印旛郡市文化財センター、佐倉市教育委員会社会教育課、佐倉市中央公民館、国立歴史民俗博物館平川南助教授、神門・岩富・篠塚・和田をはじめとする地元の皆様及び本報告書作成にあたり諸作業を担当された佐倉第三事務所所属の内勤の皆様。

目　　次

序　　文
例　　言
目　　次
凡　　例
第１章　調査の概要…… 1
　第１節　調査の経緯と経過…… 1
　第２節　遺跡と環境…… 1
　第３節　調査の方法と土層の観察…… 6
第２章　遺構と遺物…… 11
　第１節　先土器時代…… 11
　第２節　縄文時代…… 55
　第３節　古墳時代・歴史時代…… 123
第３章　考　察…… 271
　第１節　先土器時代…… 271
　第２節　縄文時代…… 273
　第３節　古墳時代・歴史時代…… 276
　　１．住居跡出土の遺物…… 276
　　２．腰巻遺跡における竪穴構築の背景…… 284
参考文献…… 289

挿　図　目　次

第１図　佐倉市南部の周辺遺跡図（50,000分の１）…… 2
第２図　工業団地内遺跡分布図…… 3
第３図　腰巻遺跡地形図…… 4
第４図　腰巻遺跡グリッド配置図…… 5
第５図　腰巻遺跡の層序…… 7
第６図　先土器時代遺物の出土ブロック位置図…… 9
第７図　Ａブロック遺物出土状況図…… 12
第８図　Ａブロック出土遺物実測図…… 14
第９図　Ｂブロック遺物出土状況図…… 16
第10図　Ｂブロック出土遺物実測図(1)…… 17

第 11 図　Bブロック出土遺物実測図(2) …… 18
第 12 図　Bブロック出土遺物実測図(3) …… 19
第 13 図　Bブロック出土遺物実測図(4) …… 20
第 14 図　Cブロック遺物出土状況図 …… 23
第 15 図　Cブロック出土遺物実測図 …… 24
第 16 図　Dブロック遺物出土状況図 …… 25
第 17 図　E・Hブロック遺物出土状況図 …… 26
第 18 図　D・Eブロック出土遺物実測図 …… 27
第 19 図　Fブロック遺物出土状況図 …… 29
第 20 図　Fブロック出土遺物実測図(1) …… 32
第 21 図　Fブロック出土遺物実測図(2) …… 33
第 22 図　Fブロック出土遺物実測図(3) …… 34
第 23 図　Fブロック出土遺物実測図(4) …… 35
第 24 図　Fブロック出土遺物実測図(5) …… 36
第 25 図　Gブロック遺物出土状況図 …… 39
第 26 図　Gブロック出土遺物実測図 …… 40
第 27 図　No.1 地点　遺物出土状況図 …… 43
第 28 図　No.1 地点　出土遺物実測図(1) …… 44
第 29 図　No.1 地点　出土遺物実測図(2) …… 45
第 30 図　No.1 地点　出土遺物実測図(3) …… 46
第 31 図　No.2 地点　遺物出土状況図 …… 48
第 32 図　No.3 地点　遺物出土状況図 …… 49
第 33 図　No.2 地点、No.3 地点出土遺物実測図 …… 50
第 34 図　No.3 地点　出土遺物実測図(1) …… 51
第 35 図　No.3 地点　出土遺物実測図(2) …… 52
第 36 図　一括資料　出土遺物実測図 …… 53
第 37 図　縄文時代　土器拓影図(1)　1 類土器 …… 57
第 38 図　縄文時代　土器拓影図(2)　2 類土器(1) …… 59
第 39 図　縄文時代　土器拓影図(3)　2 類土器(2) …… 61
第 40 図　縄文時代　土器拓影図(4)　2 類土器(3) …… 63
第 41 図　縄文時代　土器拓影図(5)　2 類(4)、3 類土器(1) …… 65
第 42 図　縄文時代　土器拓影図(6)　3 類土器(2) …… 67
第 43 図　縄文時代　土器拓影図(7)　4 類土器 …… 69
第 44 図　縄文時代　土器拓影図(8)　5 類、6 類土器(1) …… 71

第45図　繩文時代　土器拓影図(9)　6類土器(2) …… 73
第46図　繩文時代　土器拓影図(10)　6類(3)、7類土器(1) …… 75
第47図　繩文時代　土器拓影図(11)　7類土器(2) …… 77
第48図　繩文時代　土器拓影図(12)　8類、9類土器(1) …… 83
第49図　繩文時代　土器拓影図(13)　9類土器(2)…… 85
第50図　繩文時代　土器拓影図(14)　9類土器(3) …… 87
第51図　繩文時代　土器拓影図(15)　9類(4)、10類土器(1) …… 89
第52図　繩文時代　土器拓影図(16)　10類土器(2) …… 91
第53図　繩文時代　土器拓影図(17)　11類、12類、13類土器(1) …… 95
第54図　繩文時代　土器拓影図(18)　13類土器(2) …… 97
第55図　繩文時代　土器拓影図(19)　13類土器(3) …… 99
第56図　繩文時代　土器拓影図(20)　13類土器(4) …… 101
第57図　繩文時代　土器拓影図(21)　13類土器(5) …… 103
第58図　繩文時代　土器拓影図(22)　13類土器(6) …… 105
第59図　繩文時代　土器拓影図(23)　13類(7)、10類・13類土器把手及び底部 …… 109
第60図　繩文時代　土器拓影図(24)　14類土器(1) …… 111
第61図　繩文時代　土器拓影図(25)　14類土器(2) …… 113
第62図　繩文時代　石器実測図(1) …… 117
第63図　繩文時代　石器実測図(2) …… 118
第64図　繩文時代　石器実測図(3) …… 119
第65図　繩文時代　石器実測図(4) …… 120
第66図　古墳時代、歴史時代の遺構配置図 …… 121
第67図　1号住居跡　遺物出土状況図 …… 124
第68図　1号住居跡　遺構図 …… 125
第68図　1号住居跡　カマド実測図 …… 125
第69図　1号住居跡　遺物実測図(1) …… 127
第70図　1号住居跡　遺物実測図(2) …… 128
第71図　2号住居跡　遺物出土状況図 …… 130
第72図　2号住居跡　遺構図 …… 131
第73図　2号住居跡　カマド実測図 …… 132
第73図　2号住居跡　遺物実測図(1) …… 132
第74図　2号住居跡　遺物実測図(2) …… 133
第75図　2号住居跡　遺物実測図(3) …… 134
第76図　3号住居跡　遺物出土状況図 …… 136

第77図　3号住居跡　カマド実測図 …… 137
第77図　3号住居跡　遺物実測図 …… 137
第78図　4号住居跡　遺物出土状況図 …… 138
第79図　4号住居跡　遺構図 …… 139
第80図　4号住居跡　カマド実測図 …… 141
第80図　4号住居跡　遺物実測図 …… 141
第81図　5号住居跡　遺物出土状況図 …… 142
第82図　5号住居跡　遺構図 …… 143
第82図　5号住居跡　カマド実測図 …… 143
第83図　5号住居跡　遺物実測図 …… 145
第84図　6号住居跡　遺物出土状況図 …… 146
第85図　6号住居跡　遺構図 …… 147
第86図　6号住居跡　カマド実測図 …… 149
第86図　6号住居跡　遺物実測図(1) …… 149
第87図　6号住居跡　遺物実測図(2) …… 150
第88図　7号住居跡　遺物出土状況図 …… 152
第89図　7号住居跡　遺構図 …… 153
第90図　7号住居跡　カマド実測図 …… 154
第90図　7号住居跡　遺物実測図 …… 154
第91図　8号住居跡　遺物出土状況図 …… 156
第92図　8号住居跡　遺構図 …… 157
第93図　8号住居跡　カマド実測図 …… 159
第93図　8号住居跡　遺物実測図(1) …… 159
第94図　8号住居跡　遺物実測図(2) …… 160
第95図　9号住居跡　遺物出土状況図 …… 162
第96図　9号住居跡　遺構図 …… 163
第97図　9号住居跡　カマド実測図 …… 166
第97図　9号住居跡　遺物実測図(1) …… 166
第98図　9号住居跡　遺物実測図(2) …… 167
第99図　9号住居跡　遺物実測図(3) …… 168
第100図　9号住居跡　遺物実測図(4) …… 169
第101図　9号住居跡　遺物実測図(5) …… 170
第102図　10号住居跡　遺物出土状況図 …… 172
第103図　10号住居跡　遺構図 …… 173

第104図　10号住居跡　カマド実測図 …… 174
第104図　10号住居跡　遺物実測図(1) …… 174
第105図　10号住居跡　遺物実測図(2) …… 175
第106図　11号住居跡　遺物出土状況図 …… 176
第107図　11号住居跡　遺構図 …… 177
第108図　11号住居跡　カマド実測図 …… 179
第108図　11号住居跡　遺物実測図 …… 179
第109図　12号住居跡　遺物出土状況図 …… 180
第110図　12号住居跡　遺構図 …… 181
第111図　12号住居跡　カマド実測図 …… 183
第111図　12号住居跡　遺物実測図 …… 183
第112図　13号住居跡　遺物出土状況図 …… 184
第113図　13号住居跡　遺構図 …… 185
第114図　13号住居跡　カマド実測図 …… 187
第114図　13号住居跡　遺物実測図(1) …… 187
第115図　13号住居跡　遺物実測図(2) …… 188
第116図　14号住居跡　遺物出土状況図 …… 190
第117図　14号住居跡　遺構図 …… 191
第118図　14号住居跡　カマド実測図 …… 192
第118図　14号住居跡　遺物実測図(1) …… 192
第119図　14号住居跡　遺物実測図(2) …… 193
第120図　15号住居跡　遺物出土状況図 …… 194
第121図　15号住居跡　遺構図 …… 195
第122図　15号住居跡　カマド実測図 …… 197
第122図　15号住居跡　遺物実測図 …… 197
第123図　16号住居跡　遺物出土状況図 …… 198
第124図　16号住居跡　遺構図 …… 199
第125図　16号住居跡　カマド実測図 …… 201
第125図　16号住居跡　遺物実測図(1) …… 201
第126図　16号住居跡　遺物実測図(2) …… 202
第127図　17号住居跡　遺物出土状況図 …… 203
第127図　17号住居跡　遺構図 …… 203
第128図　17号住居跡　カマド実測図 …… 204
第128図　17号住居跡　遺物実測図 …… 204

第129図　18号住居跡　遺物出土状況図 …… 206
第130図　18号住居跡　遺構図 …… 207
第130図　18号住居跡　カマド実測図 …… 207
第131図　18号住居跡　遺物実測図 …… 209
第132図　19号住居跡　遺物出土状況図 …… 210
第133図　19号住居跡　遺構図 …… 211
第133図　19号住居跡　遺物実測図 …… 211
第134図　20号住居跡　遺物出土状況図 …… 214
第135図　20号住居跡　遺構図 …… 215
第135図　20号住居跡　遺物実測図 …… 215
第136図　21号住居跡　遺物出土状況図 …… 216
第137図　21号住居跡　遺構図 …… 217
第137図　21号住居跡　遺物実測図 …… 217
第138図　22号住居跡　遺物出土状況図 …… 220
第139図　22号住居跡　遺構図 …… 221
第140図　22号住居跡　カマド実測図 …… 222
第140図　22号住居跡　遺物実測図 …… 222
第141図　23号住居跡　遺物出土状況図 …… 223
第142図　23号住居跡　遺構図 …… 224
第143図　23号住居跡　カマド実測図 …… 225
第143図　23号住居跡　遺物実測図 …… 225
第144図　24号住居跡　遺物出土状況図 …… 226
第145図　24号住居跡　遺構図 …… 227
第146図　1号掘立柱跡柱列配置図 …… 228
第147図　1号掘立柱跡柱穴実測図 …… 229
第148図　特殊遺構　遺物出土状況図 …… 231
第149図　特殊遺構　遺物実測図(1) …… 233
第150図　特殊遺構　遺物実測図(2) …… 234
第151図　特殊遺構　遺物実測図(3) …… 235
第152図　特殊遺構　遺物実測図(4) …… 236
第153図　一括遺物 …… 237
第154図　1号方形周溝状遺構図 …… 239
第155図　2号方形周溝状遺構図 …… 240
第156図　1号円形周溝状遺構図 …… 241

第157図　2号円形周溝状遺構図 …… 242
第158図　3号円形周溝状遺構図 …… 243
第159図　土坑状炭窯遺構図(1) …… 245
第160図　土坑状炭窯遺構図(2) …… 247
第161図　土坑状炭窯遺構図(3) …… 248
第162図　土坑状炭窯遺構図(4) …… 249
第163図　土坑状炭窯遺構図(5) …… 250
第164図　土坑状炭窯遺構図(6) …… 251
第165図　土坑状炭窯遺構図(7) …… 252
第166図　土坑状炭窯遺構図(8) …… 253
第167図　土坑状炭窯遺構図(9) …… 254
第168図　土坑状炭窯遺構図(10) …… 255
第168図　瓢形炭窯遺構図 …… 255
第169図　1号窯跡遺構図 …… 256
第170図　土坑遺構図(1) …… 258
第171図　土坑遺構図(2) …… 259
第172図　土坑遺構図(3) …… 260
第173図　土坑遺構図(4) …… 261
第174図　土坑遺構図(5) …… 262
第175図　土坑遺構図(6) …… 263
第176図　溝遺構図(1) …… 266
第177図　溝遺構図(2) …… 267
第178図　溝遺構図(3) …… 268
第179図　溝遺構図(4) …… 269
第180図　溝遺構図(5) …… 270
第181図　縄文土器出土総量図 …… 275
第182図　腰巻遺跡古墳・歴史時代土器分類表 …… 279
第183図(1)　腰巻遺跡古墳・歴史時代土器分類表 …… 281
第183図(2)　腰巻遺跡古墳・歴史時代土器分類表 …… 283

図　版　目　次

図版1　昭和56年度腰巻遺跡調査区

図版１　昭和57、58年度腰巻遺跡調査区
図版２　腰巻遺跡の層序
図版３　先土器時代　Ａブロック
図版３　先土器時代　Ｂブロック
図版４　先土器時代　Ｃブロック
図版４　先土器時代　Ｄブロック
図版５　先土器時代　Ｆブロック
図版５　先土器時代　No.１地点
図版６　先土器時代　Ａブロック出土遺物
図版７　先土器時代　Ｂブロック出土遺物(1)
図版８　先土器時代　Ｂブロック出土遺物(2)
図版８　先土器時代　Ｃブロック出土遺物
図版９　先土器時代　Ｄブロック出土遺物
図版９　先土器時代　Ｈブロック、Ｅブロック出土遺物(1)
図版９　先土器時代　Ｅブロック出土遺物(2)
図版10　先土器時代　Ｆブロック出土遺物(1)
図版11　先土器時代　Ｆブロック出土遺物(2)
図版12　先土器時代　Ｆブロック出土遺物(3)
図版12　先土器時代　Ｇブロック出土遺物(1)
図版13　先土器時代　Ｇブロック出土遺物(2)
図版13　先土器時代　No.１地点出土遺物(1)
図版14　先土器時代　No.１地点出土遺物(2)
図版14　先土器時代　No.２地点、No.３地点出土遺物
図版15　縄文時代　１類土器(1)
図版16　縄文時代　１類(2)、２類土器
図版16　縄文時代　２類土器(1)
図版17　縄文時代　２類土器(2)
図版18　縄文時代　２類土器(3)
図版18　縄文時代　３類土器(1)
図版19　縄文時代　３類土器(2)
図版19　縄文時代　４類土器(1)
図版20　縄文時代　４類(2)、５類土器
図版20　縄文時代　６類土器(1)
図版21　縄文時代　６類土器(2)

図版22　縄文時代　6類土器(3)
図版22　縄文時代　6類(4)、7類土器(1)
図版23　縄文時代　7類土器(2)
図版24　縄文時代　8類土器(1)
図版24　縄文時代　8類(2)、9類土器(1)
図版25　縄文時代　9類土器(2)
図版26　縄文時代　9類土器(3)
図版27　縄文時代　9類土器(4)
図版28　縄文時代　10類土器(1)
図版29　縄文時代　10類土器(2)
図版30　縄文時代　11類、12類、13類土器
図版30　縄文時代　13類土器(1)
図版31　縄文時代　13類土器(2)
図版31　縄文時代　13類土器(2)
図版32　縄文時代　13類土器(3)
図版33　縄文時代　13類土器(4)
図版34　縄文時代　13類土器(5)
図版35　縄文時代　13類土器(6)
図版36　縄文時代　13類土器(7)
図版36　縄文時代　14類土器(1)
図版37　縄文時代　14類土器(2)
図版38　縄文時代　14類土器(3)
図版38　斜面に集まる住居跡
図版39　縄文時代　石器(1)
図版40　縄文時代　石器(2)
図版41　縄文時代　石器(3)
図版42　古墳・歴史時代　1号住居跡
図版43　古墳・歴史時代　2号住居跡
図版43　古墳・歴史時代　3号住居跡
図版44　古墳・歴史時代　4号住居跡
図版44　そ墳・歴史時代　5号住居跡
図版45　古墳・歴史時代　6号住居跡
図版45　古墳・歴史時代　7号住居跡
図版46　古墳・歴史時代　8号住居跡

図版46　古墳・歴史時代　9号住居跡
図版47　古墳・歴史時代　10号住居跡
図版47　古墳・歴史時代　11号住居跡
図版48　古墳・歴史時代　12号住居跡
図版48　古墳・歴史時代　13号住居跡
図版49　古墳・歴史時代　14号住居跡
図版49　古墳・歴史時代　15号住居跡
図版50　古墳・歴史時代　16号住居跡
図版51　古墳・歴史時代　17号住居跡
図版52　古墳・歴史時代　18号住居跡
図版52　古墳・歴史時代　19号住居跡
図版53　古墳・歴史時代　20号住居跡
図版53　古墳・歴史時代　21号住居跡
図版54　古墳・歴史時代　22号住居跡
図版54　古墳・歴史時代　23号住居跡
図版55　24号住居跡
図版55　古墳・歴史時代　1号掘立柱跡
図版56　古墳・歴史時代　特殊遺構
図版57　古墳・歴史時代　1号住居跡出土遺物
図版58　古墳・歴史時代　2号住居跡出土遺物
図版59　古墳・歴史時代　3号住居跡出土遺物
図版59　古墳・歴史時代　4号住居跡出土遺物
図版59　古墳・歴史時代　5号住居跡出土遺物
図版60　古墳・歴史時代　6号住居跡出土遺物
図版61　古墳・歴史時代　7号住居跡出土遺物
図版61　古墳・歴史時代　8号住居跡出土遺物
図版62　古墳・歴史時代　9号住居跡出土遺物(1)
図版63　古墳・歴史時代　9号住居跡出土遺物(2)
図版64　古墳・歴史時代　9号住居跡出土遺物(3)
図版65　古墳・歴史時代　9号住居跡出土遺物(4)
図版65　古墳・歴史時代　10号住居跡出土遺物(1)
図版66　古墳・歴史時代　10号住居跡出土遺物(2)
図版66　古墳・歴史時代　11号住居跡出土遺物
図版66　古墳・歴史時代　12号住居跡出土遺物

図版67　古墳・歴史時代　13号住居跡出土遺物
図版68　古墳・歴史時代　14号住居跡出土遺物
図版68　古墳・歴史時代　15号住居跡出土遺物(1)
図版69　古墳・歴史時代　15号住居躍出土遺物(2)
図版69　古墳・歴史時代　16号住居跡出土遺物
図版70　古墳・歴史時代　17号住居跡出土遺物
図版71　古墳・歴史時代　18号住居跡出土遺物
図版72　古墳・歴史時代　19号住居跡出土遺物
図版72　古墳・歴史時代　20号住居跡出土遺物
図版73　古墳・歴史時代　21号住居跡出土遺物
図版73　古墳・歴史時代　22号住居跡出土遺物
図版73　古墳・歴史時代　23号住居跡出土遺物
図版74　古墳・歴史時代　特殊遺構出土遺物(1)
図版75　古墳・歴史時代　特殊遺構出土遺物(2)
図版76　古墳・歴史時代　特殊遺構出土遺物(3)
図版77　古墳・歴史時代　一括遺物
図版78　古墳・歴史時代　1号方形周溝状遺構
図版78　古墳・歴史時代　2号方形周溝状遺構
図版79　古墳・歴史時代　1号円形周溝状遺構
図版79　古墳・歴史時代　2号円形周溝状遺構
図版80　古墳・歴史時代　3号円形周溝状遺構
図版80　瓢形炭窯
図版81　土坑状炭窯　12号炭窯
図版82　1号窯跡
図版83　1号土坑
図版83　2号土坑
図版84　3号土坑
図版84　4号土坑
図版85　5号、6号土坑
図版85　7号土坑
図版86　8号、9号土坑
図版86　10号、11号土坑
図版87　12号、13号土坑
図版87　14号、15号土坑

図版88　16号、17号土坑
図版88　18号、21号土坑
図版89　22号、23号土坑
図版89　26号、27号土坑
図版90　28号土坑
図版90　32号、33号土坑
図版91　1号、2号溝
図版91　3号溝
図版92　4号溝
図版92　昭和58年度調査区全景
図版93　5号溝
図版93　6号溝

表　目　次

第1表　先土器時代石器表　Aブロック…… 13
第2表　先土器時代石器表　Bブロック…… 15
第3表　先土器時代石器表　C・D・E・Hブロック…… 22
第4表　先土器時代石器表　Fブロック…… 37
第5表　先土器時代石器表　Gブロック…… 38
第6表　先土器時代石器表　No.1地点…… 42
第7表　先土器時代石器表　No.2、No.3地点一括遺物…… 53
第8表　縄文時代土器表　（1類土器～3類土器）…… 56
第9表　縄文時代土器表　（4類土器～7類土器）…… 72
第10表　縄文時代土器表　（8類土器～11類土器）…… 86
第11表　縄文時代土器表　（12類土器、13類土器、10・13類土器把手及び底部）…… 98
第12表　縄文時代土器表　（14類土器）……112
第13表　縄文時代石器表……115
第14表　古墳・歴史時代住居跡土器表　1号住居跡……126
第15表—(1)　古墳・歴史時代住居跡土器表　2号住居跡……129
第15表—(2)　古墳・歴史時代住居跡遺物計測表　2号住居跡……134
第16表　古墳・歴史時代住居跡土器表　3号住居跡……137
第17表　古墳・歴史時代住居跡土器表　4号住居跡……140
第18表　古墳・歴史時代住居跡土器表　5号住居跡……144

第19表—(1)　古墳・歴史時代住居跡土器表　6号住居跡……148
第19表—(2)　古墳・歴史時代住居跡遺物計測表　6号住居跡……148
第20表—(1)　古墳・歴史時代住居跡土器表　7号住居跡……151
第20表—(2)　古墳・歴史時代住居跡遺物計測表　7号住居跡……155
第21表　古墳・歴史時代住居跡土器表　8号住居跡……160
第22表—(1)　古墳・歴史時代住居跡土器表　9号住居跡……165
第22表—(2)　古墳・歴史時代住居跡遺物計測表　9号住居跡……170
第23表—(1)　古墳・歴史時代住居跡土器表　10号住居跡……171
第23表—(2)　古墳・歴史時代住居跡遺物計測表　10号住居跡……178
第24表—(1)　古墳・歴史時代住居跡土器表　11号住居跡……182
第24表—(2)　古墳・歴史時代住居跡遺物計測表　11号住居跡……182
第25表—(1)　古墳・歴史時代住居跡土器表　12号住居跡……186
第25表—(2)　古墳・歴史時代住居跡遺物計測表　12号住居跡……186
第26表　古墳・歴史時代住居跡土器表　13号住居跡……188
第27表　古墳・歴史時代住居跡土器表　14号住居跡……193
第28表—(1)　古墳・歴史時代住居跡土器表　15号住居跡……196
第28表—(2)　古墳・歴史時代住居跡遺物計測表　15号住居跡……196
第29表　古墳・歴史時代住居跡土器表　16号住居跡……199
第30表　古墳・歴史時代住居跡土器表　17号住居跡……205
第31表　古墳・歴史時代住居跡土器表　18号住居跡……209
第32表　古墳・歴史時代住居跡土器表　19号住居跡……212
第33表　古墳・歴史時代住居跡土器表　20号住居跡……213
第34表　古墳・歴史時代住居跡土器表　21号住居跡……218
第35表　古墳・歴史時代住居跡土器表　22号住居跡……219
第36表　古墳・歴史時代住居跡土器表　23号住居跡……225
第37表　1号掘立柱跡口柱穴計測表……230
第38表　古墳・歴史時代土器表　特殊遺構……232
第39表　古墳・歴史時代土器表　一括遺物……238
第40表　炭窯計測表……246
第41表　土坑計測表……264

凡　　例

1．第１図佐倉市南部の周辺遺跡に使用した地図は、国土地理院著作・発行の25,000分の１地図のうち、佐倉（千葉14号－２）、酒々井（千葉10号－４）、八街（千葉11号－３）、千葉東部（千葉15号－１）を合成して使用した。

2．挿図中の方位は、公共座標の北を用いている。

3．遺物実測図中の小番号は、出土時の遺物番号を示す。

4．挿図の縮尺は、住居跡1/40・1/60・1/120、掘立柱跡1/60、周溝状遺構1/40・1/80、土坑状炭窯1/60、窯跡1/60、土坑1/60であり、遺物は先土器時代の石器類2/3、縄文時代の土器実測図1/4、拓影図1/3、石器1/2・1/3、古墳・歴史時代の土師器及び須恵器実測図1/4・1/8である。

5．写真図版のうち、炭窯はタイプの異なるもの別に最も標準的なものを掲示し、他は割愛した。

6．挿図中の土器実測図は、左半分が正面からの器表面の観察図、右半分が断面図を示すが、中央線の左右で実測線のキれているものは遺存度が1/2未満、右側のみ切れているものは完形品ではないが遺存度が1/2以上であるか、断面の観察部分が任意であることを示している。

7．巻頭のカラー図版は、特殊遺構出土の須恵器甕（特殊遺構－８・９）である。

8．挿図中の記号は次の以下の内容を示している。

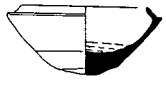
先土器時代

剝　片 ●	ナイフ形石器 ▲	彫　器 △
石　刃 ☆	尖　頭　器 ○	削　器 □
石　刻 ◉	小型砕片石器 ◎	掻　器 ■
錐 ⦶	敲　　石 ◬	焼土粒 ＊
		炭化物 ・

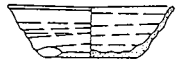
古墳・歴史時代

床面直上出土遺物 ●　　床面非直上遺物 ○

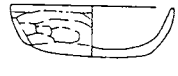
須恵器



土師質須恵器



土師器



第1章　調査の概要

第1節　調査の経緯と経過

佐倉第三工業団地に関連する遺跡としては、昭和50年に還元農地関連の星谷津遺跡が調査されその多大な成果は『星谷津遺跡』として報告され、千葉県内の初期の先土器時代調査としてその内容は高く評価されている。

諸般の事情から工業団地内の埋蔵文化財調査は中断されたものの、昭和54年に本格的な調査が再開された。

腰巻遺跡は、昭和54年6月4日から7月30日まで、千葉県土地開発公社の委託を受け、㈶千葉県文化財センターにより台地の先端部分6,800㎡について確認調査が行なわれ、その結果遺構等の検出が見られず、本調査は実施されないこととなった。

昭和56年に至り、隣接する25,300㎡について5月1日より8月31日まで確認調査を行なうとともに、その結果に基づき9月1日より45.00㎡分の本調査が行なわれた。

本調査の結果、標高30m以下の傾斜地においても住居跡の存在することが明らかとなり、従来の確認調査では遺構を補捉しきれないことが指摘された。

昭和57年4月1日より9月30日まで、前年度の確認調査に基づく5,500㎡分の本調査の他12,000㎡分の確認調査が行なわれ、その結果10,000㎡分の本調査が追加されることとなった。

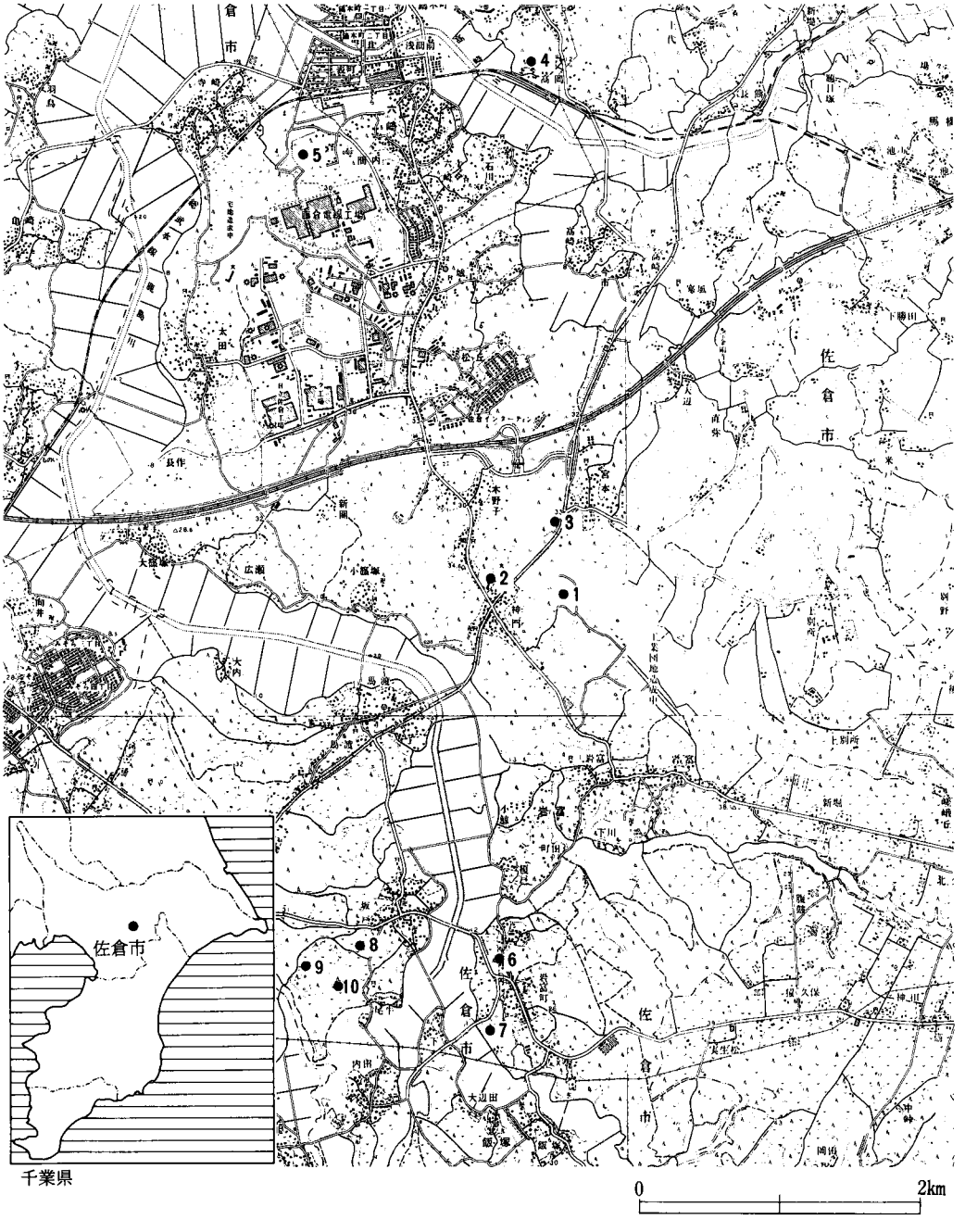
この間、谷津部分の調査の必要性を説く佐倉第三工業団地事務所根本弘班長と、県教育庁文化課文化財調査班鈴木道之助班長(当時)、㈶千葉県文化財センター調査部白石竹雄部長、千葉県土地開発公社企画課桜井氏及び工務課安藤氏による精力的な協議が重ねられ、谷津を含む斜面部についても期間内に調査を行なうことで調整が計られた。

腰巻遺跡において、担当の一調査研究員の率直な指摘に基づき、谷津を含む斜面部の調査が所定の期間内に円滑に行なわれるとともに、昭和57年当時その事例の稀であった地理的環境の中に所在する遺構と遺物を検出し、今回多大な成果としてまとめることができたのは、上記の関係各位の寛宥たる対応によるなみなみならぬ御努力と御尽力の賜物であることを記しておかねばならない。

第2節　遺跡と環境

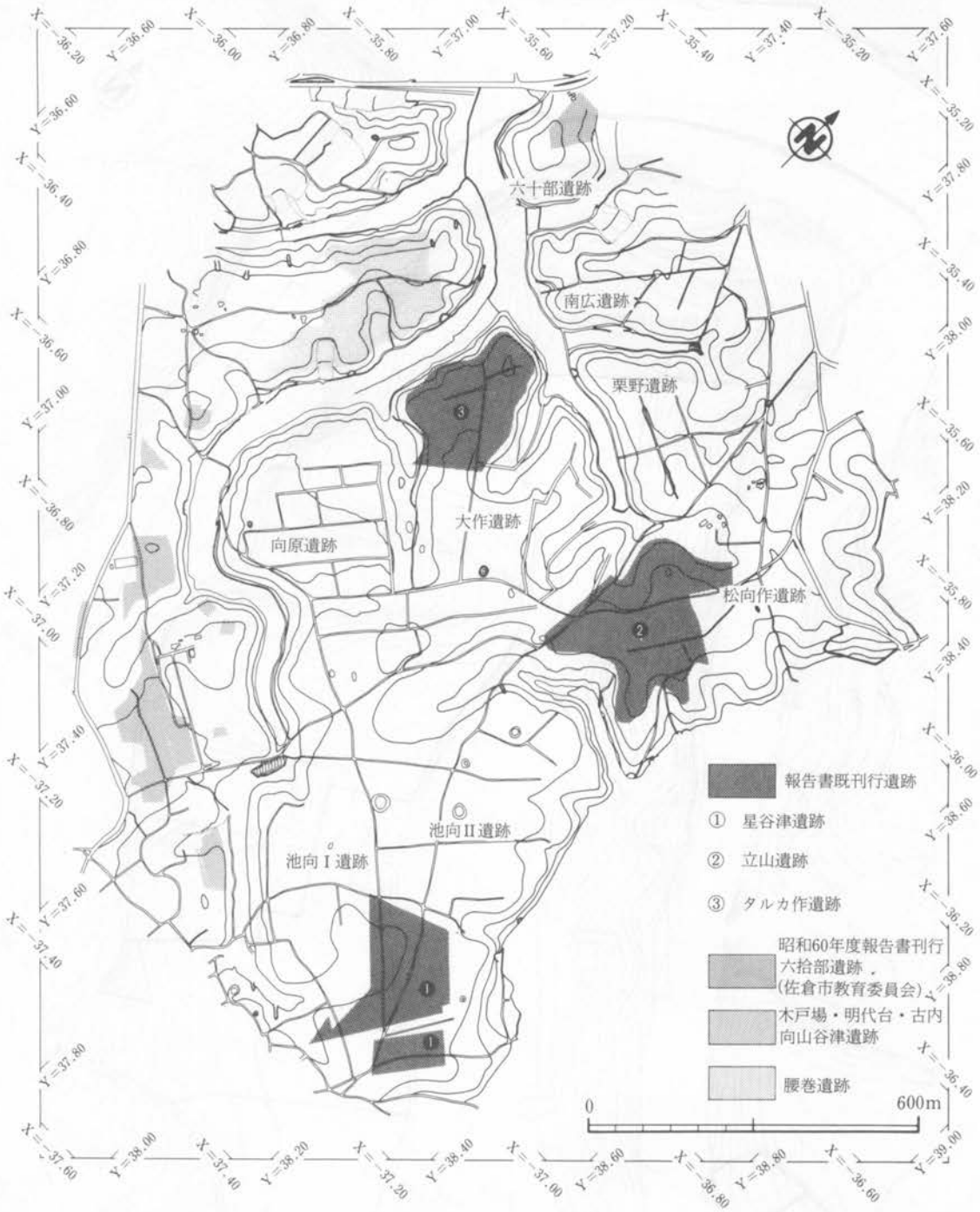
佐倉市は千葉県北部のほぼ中央、印旛沼の南に位置し、近世の武家屋敷にちなむ閑静な佇を現代に残す勝れた歴史的環境に恵まれている。

佐倉第三工業団地の造成地域は、佐倉市の中でも最も南にあたり、鹿島川から分岐した高崎川

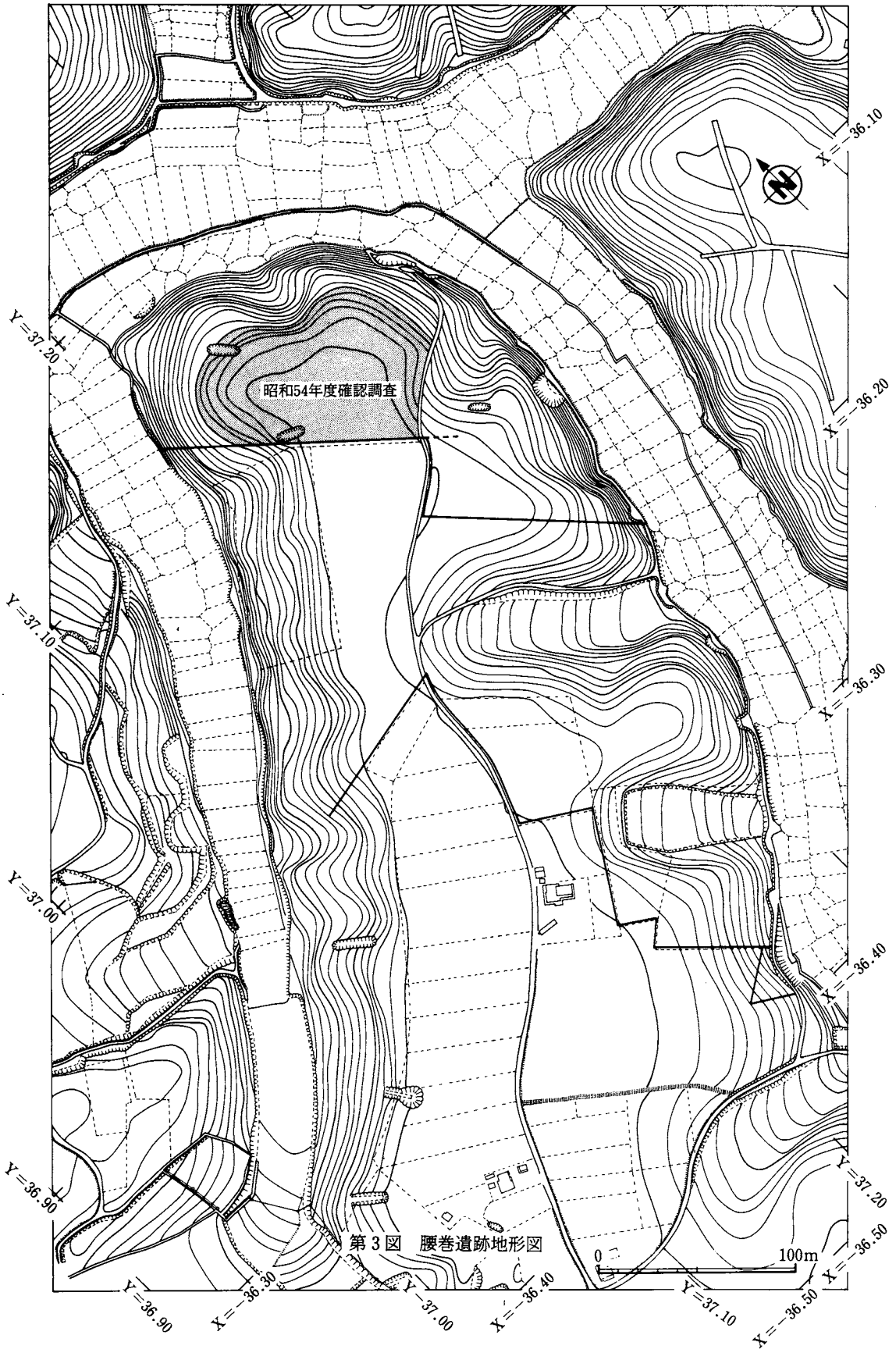


1. 腰巻遺跡
2. 南部中学校遺跡
3. 高崎新山遺跡
4. 高岡遺跡
5. 大崎台遺跡
6. 弥富城跡
7. 漆谷津遺跡
8. 長道遺跡
9. 清水作遺跡
10. 広　遺　跡

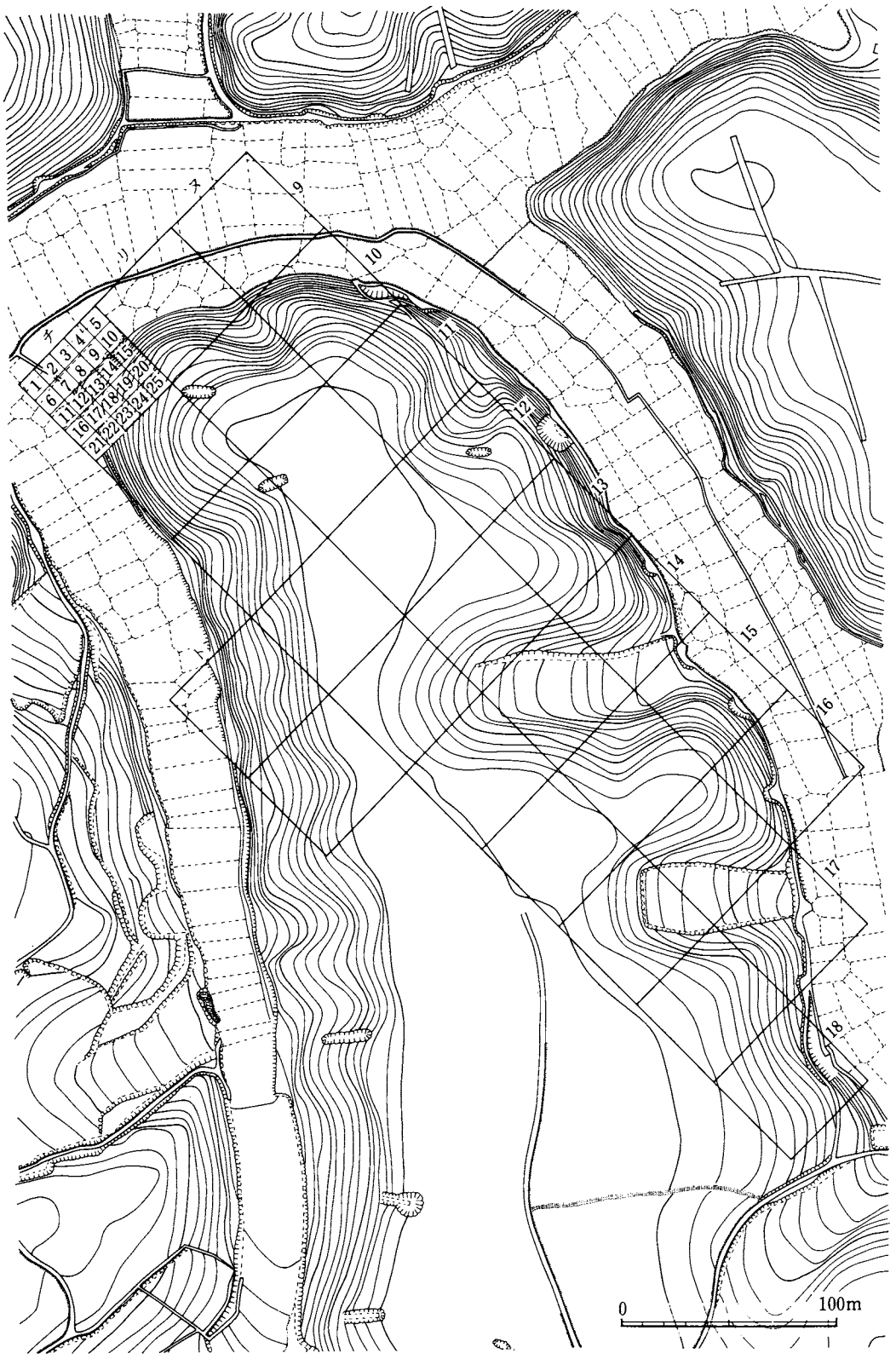
第1図　佐倉市南部の周辺遺跡(50,000分の1)



第2図　工業団地内遺跡分布図


昭和54年度確認調査
X=−36.10
X=−36.20
X=−36.30
X=−36.40
X=−36.50
Y=37.20
Y=37.10
Y=37.00
Y=36.90
0
100m

第3図　腰巻遺跡地形図



第4図　腰巻遺跡グリット配置図

の支流により形成された沼沢状の谷津をかかえた小規模な台地の一つに、腰巻遺跡は立地する。

谷津をはさんだ東の台地は、古墳時代後期の集落であるタルカ作遺跡、谷津をはさんだ北の台地には奈良・平安時代の集落である六拾部遺跡と対峙しており、こうした周辺の遺跡の調査は腰巻遺跡の性格を考察するうえで、きわめて思慮深いものであった。

従来、集落は平坦とは言えないまでも、一応台地上に展開することが常識とされていたが、本遺跡ではそれらの常識を越えた姿が確認された。

古代集落の展開について、かつて谷岡武雄の指摘のごとく整然としない任意の形態を示す村落の初源とも言うべき姿であり、谷頂部にあたる岩富地区には造成直前まで湧水地から流入すす水を溜めた池が存在していたことが確認されている。

この池は最近まで、神門地区の人々が谷の開口部付近の水田用として管理していたものであることも、地元では知られている。

この池が古代まで遡ることが可能か否か、今となっては検証できないが、古代の水稲栽培は常に水を浅くかぶる低湿地から、必要に応じて水を引く灌漑技術の導入による微高地の開墾の進行に乗ずることが知られている。

八賀晋は、弥生時代の湛水田及び湿田における排水と灌漑について、弥生時代の水田の多くが低湿地にあることから、むしろ排水技術の習得を強調している。

すなわち、古墳時代の水田は乾田を基本としており、排水、灌漑の両技術の習得が要求され、開墾に必要なこれらの技術は、古墳築造時の土木技術と共通するものであり、大陸から朝鮮半島を経て搬入された技術であろう。

岩富、神門地区の古墳時代後期の集落の突然の出現と、それに関連すると考えられる古墳群の存在は、印旛沼周辺の低湿地水田から内陸の微高地開墾へと生産拠点の拡大されたことを示すとともに、土盛・築堤・排水・灌漑等の土木技術の裾の広がりを示すものとして理解される。

しかし、奈良・平安時代には古墳時代以上に墾田の開発が行なわれたことが知られており、これらの墾田開発の余地を残す程度の開墾が、古墳時代の水稲栽培の実態であったと考えられる。

このように、台地を取り巻く谷津の存在は、当時の人々の暮にとり常に重要な位置付けをされたものであることを窺わせている。

腰巻遺跡の調査では、谷津の存在なくしては遺跡の性格を考えることが不可能なことを示す最初の例となったことにおいて、評価すべき成果を確認できたものと考えられる。

第3節　調査の方法と土層の観察

調査は、第4図腰巻遺跡のグリッド配置図に示したように、座標の北を基準として50mを単位とする方眼座標を設定し、これを大グリッドとした。

また、大グリッドの中に10mを単位とする小方眼座標を加設して、これを小グリッドとした。

小グリッドは、北西上端より東に向かい平行坪並式に1～25までの仮称番号で区別し、先土器時代の石器類や包含層出土の縄文土器の出土地点の記録は、おもにこれを使用した。

昭和56年度の調査では、表土は全体に篠竹に覆われており、ユンボ（UH 04 タイプ）にて50cm程を除去した後に確認調査を実施した。

本調査においても、確認調査以外の部分も重機（ユンボ）による表土剝ぎを行なった後に手掘り作業を行なった。

斜面部の表土除去は困難を極め、ユンボとブルドーザーの併用が最も効果的であることが判明した。

古墳時代・歴史時代の遺構・遺物は原則として簡易遺形方式で、包含層出土の縄文土器・石器及び先土器時代の石器類は平板で、それぞれ測量を実施した。

なお、先土器時代の本調査範囲内において、可能な限りVIII層上面下10cm程までを掘り下げている。

腰巻遺跡の一般的な層序を示したものが第5図である。

I層　表土層。篠竹の根を含む黒褐色土層。

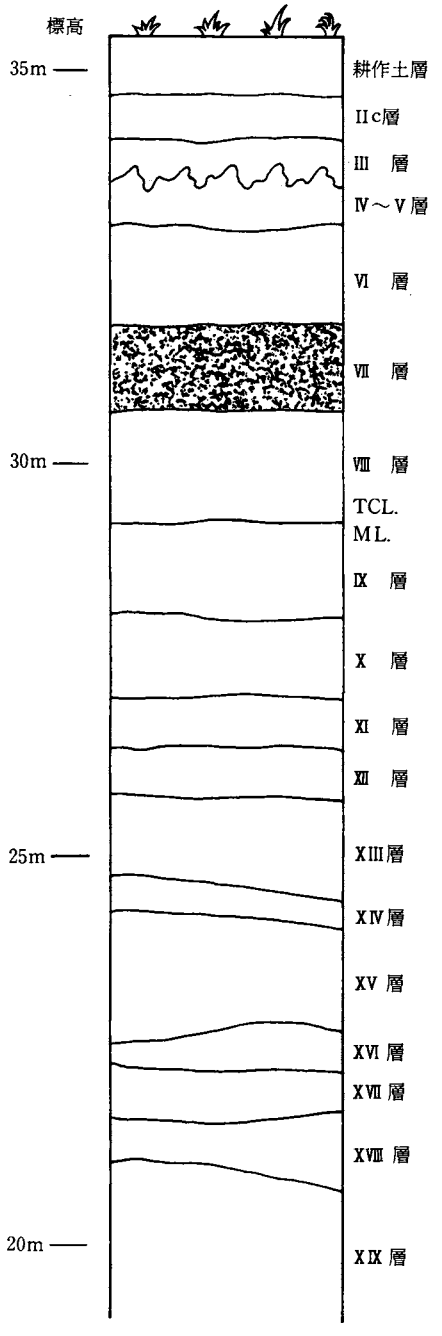
IIc層　暗褐色土層。縄文時代の遺物の包含層で、場所により、特に平坦面においてはI層との境に新期テフラの堆積の確認できるところがある。

III層　黄褐色土層。ソフトローム層に該当し、腰巻遺跡の先土器時代の上層の遺物はIIc層からIII層中にかけて検出されている。

IV層　ハードロームの最上層であり、III層との境はクラック化している。

V層　第1黒色帯と呼ばれる硬質の暗褐色土層と言われるが、腰巻遺跡では確認できない。

あるいは、色調に変化を来して肉眼では把らえら



第5図　腰巻遺跡の層序

れていないのか、堆積そのものが行なわれていないことに起因すると考えられている。

この現象は、佐倉第三工業団地造成地に隣接する星合津遺跡においても指摘されている。

VI層　姶良・丹沢パミスのガラス質の粒子を多量に含み、乾燥すると帯状に変色し、切り出された断面はブロック状に剝落する。

台地の起伏に注目すると、平坦部で比較的厚く堆積しているが斜面部では急速にその厚味を減じていく。

このことは南側の斜面よりも北側の斜面に著しい現象である。

あるいは、谷津に近いこともあり、堆積土壌の流出が原因とも考えられる。

VII層　暗褐色土層。第2黒色帯と呼ばれる硬質のローム土層。

層の厚味は一様ではなく、腰巻遺跡の場合には北東に向かい急速に薄くなっている。

本遺跡の先土器時代の下層の遺物は、VI層中からVII層を主体として検出されている。

VIII層　明褐色土層。立川ローム層中最下層に相当する硬質ローム層。

腰巻遺跡では、この層より検出された遺物はない。

IX履　黄褐色土層。武蔵野ローム層中最上層に相当する硬質ローム層。

色調的にはVIII層と大きな変化は見られないが、鎌による切り出し面の清掃時にはVIII層がサクサクと削り取れるのに比べてIX層は硬く小片として削り取るのが限界である。

X層　青灰色粘土層。上部に緑灰色の堆積物をブロック状に含む。

土壌が水分により化学変化をおこし、すなわち鉄分が亜酸化鉄の化合物となり、青灰色に変色したものと考えられ、きわめて水はけの悪い層である。

XI層　茶褐色土層。砂粒及びブロック状の粘土塊を含む。

XII層　暗褐色土層。ガラス質の微粒子を含む。下部にオレンジ色のパミスを含んでいる。

XIII層　灰白色粘土層。下末吉層に相当する粘性の強い白色粘土の堆積土層。

XIV層　黄緑色砂質土層。

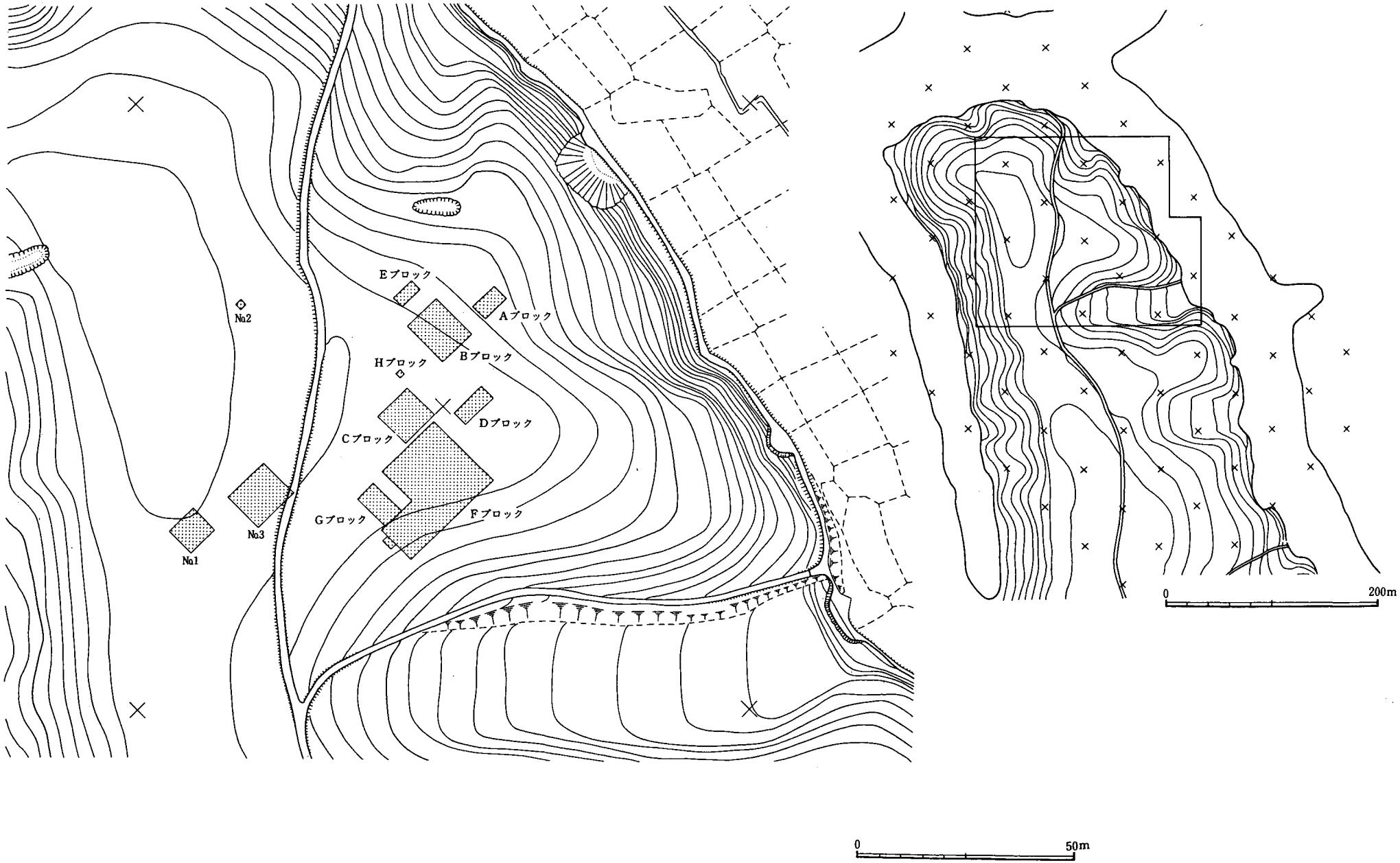
XV層　赤褐色砂質土層。

XVI層　緑灰色粘土層。

XVII層　黄緑色砂質土層。

XVIII層　黄灰色土層。砂質土層を主体とする。

XIX層　黄色粘土層。



第6図　先土器時代遺物の出土ブロック位置図

第2章　遺構と遺物

第1節　先土器時代

概　　観

先土器時代の遺物は出土の地点により単独の場合と、ある程度の遺物の集中する場合とがある。腰巻遺跡の先土器時代の遺物も、比較的集中する箇所と数点の出土点数の箇所が存在する。これらの遺物の集りをブロックと仮称する。

ブロックは、石器の器種の組成及び石核と剥片の結合関係とは無縁であり、記録としての遺物の集りの箇所を示すものである。

腰巻遺跡ではA～Hまでの8ブロックと、縄文時代の包含層を調査中に検出されたNo.1～No.3の3地点において、小規模の集中が確認された。

Aブロック　（第7・8図、図版3・6）

Aブロックの出土遺物総数は50点である。

石器はナイフ形石器5点、石刃1点、他42点は剥片である。

Aブロックの出土遺物の平面分布は、長径4m、短径2mの楕円域を範囲とする。

垂直分布では総数50点中49点がIII層の出土であり、同一の文化層内に属するものと考えられる。

出土遺物は1～5が安山岩を素材とするナイフ形石器である。

1は先端から基部にかけて片縁に調整をおこなうタイプのナイフ形石器である。

2は片縁調整で、調整部分の傾斜角の大きいナイフ形石器である。

3は両縁調整のナイフ形石器で、表側面からのみ調整を受けている。

4は片縁調整のナイフ形石器。

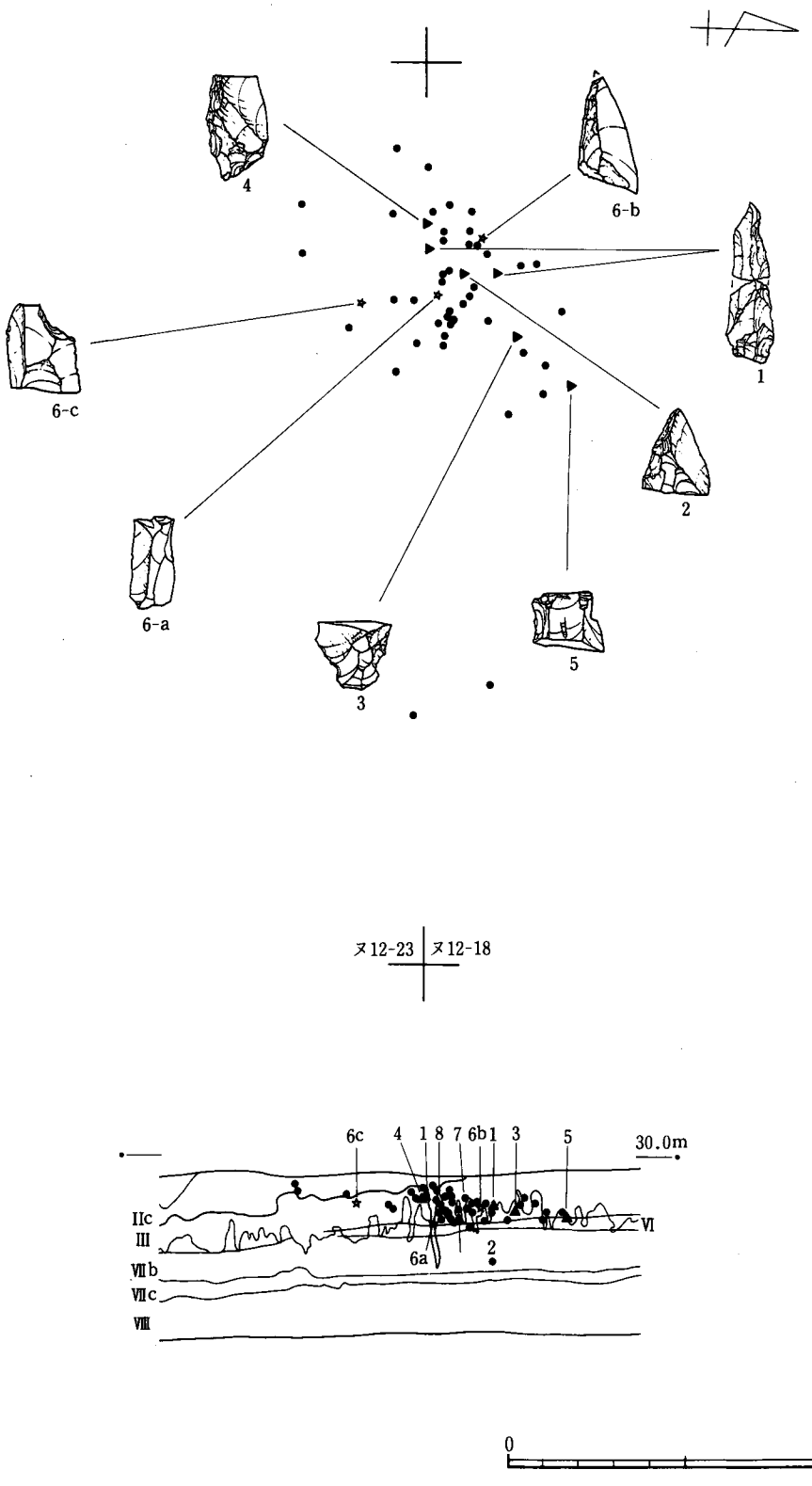
5は剥片を切断し、両縁部に調整を有するナイフ形石器。

6は、石刃技法によりつくり出された石刃6a・6b・6cの接合資料である。

この中で、6bは片縁に調整をおこなうタイプのナイフ形石器に近いものである。

7・8は、縦長タイプと横長タイプの中間的な形態の不整剥片である。

また、ともに素材剥片となりうるのか、調整剥片であるのかは断定し難い。



第7図　Aブロック遺物出土状況図

第1表

挿図番号	石器名	遺物番号	所属ブロック	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質
1	ナイフ形石器	接合						
		ヌ12—18—5	A	45.0	13.0	10.0	1.8	安山岩
		ヌ12-18-25					2.7	安山岩
2	ナイフ形石器	ヌ12—18—36	A	23.0	19.0	8.2	2.6	安山岩
3	ナイフ形石器	ヌ12—18—19	A	19.0	22.0	7.2	2.3	安山岩
4	ナイフ形石器	ヌ12—18—34	A	29.5	17.2	8.0	4.0	安山岩
5	ナイフ形石器	ヌ12—18—17	A	16.5	20.5	9.0	2.5	安山岩
6	石刃	接合		41.0	29.0	16.0		安山岩
a	石刃	ヌ12—18—48		26.2	13.3	4.5	1.7	安山岩
b	石刃	ヌ12—18—32	A	33.5	16.0	9.5	7.5	安山岩
c	石刃	ヌ12—23—11		23.5	21.5	4.5		安山岩
7	剝片	ヌ12—18—7	A	29.0	29.5	16.0	11.2	安山岩
8	剝片	ヌ12—18—10	A	32.0	37.5	11.0	11.0	安山岩

Bブロック　（第9・10・11・12・13図、図版3・7・8）

Bブロックの出土遺物総数は69点である。

石器はナイフ形石器2点、石刃2点、石核4点、剝片は54点である。

Bブロックの出土遺物の平面分布は、直径8m程の円周内を範囲とする。

垂直分布ではすべてⅦ層中の出土である。

第9図の垂直分布図におけるずれは、遺物出土地点と土層の観察地点に多少の距離があり、加えてBブロックが北東に傾斜する台地に所在していることに起因する。

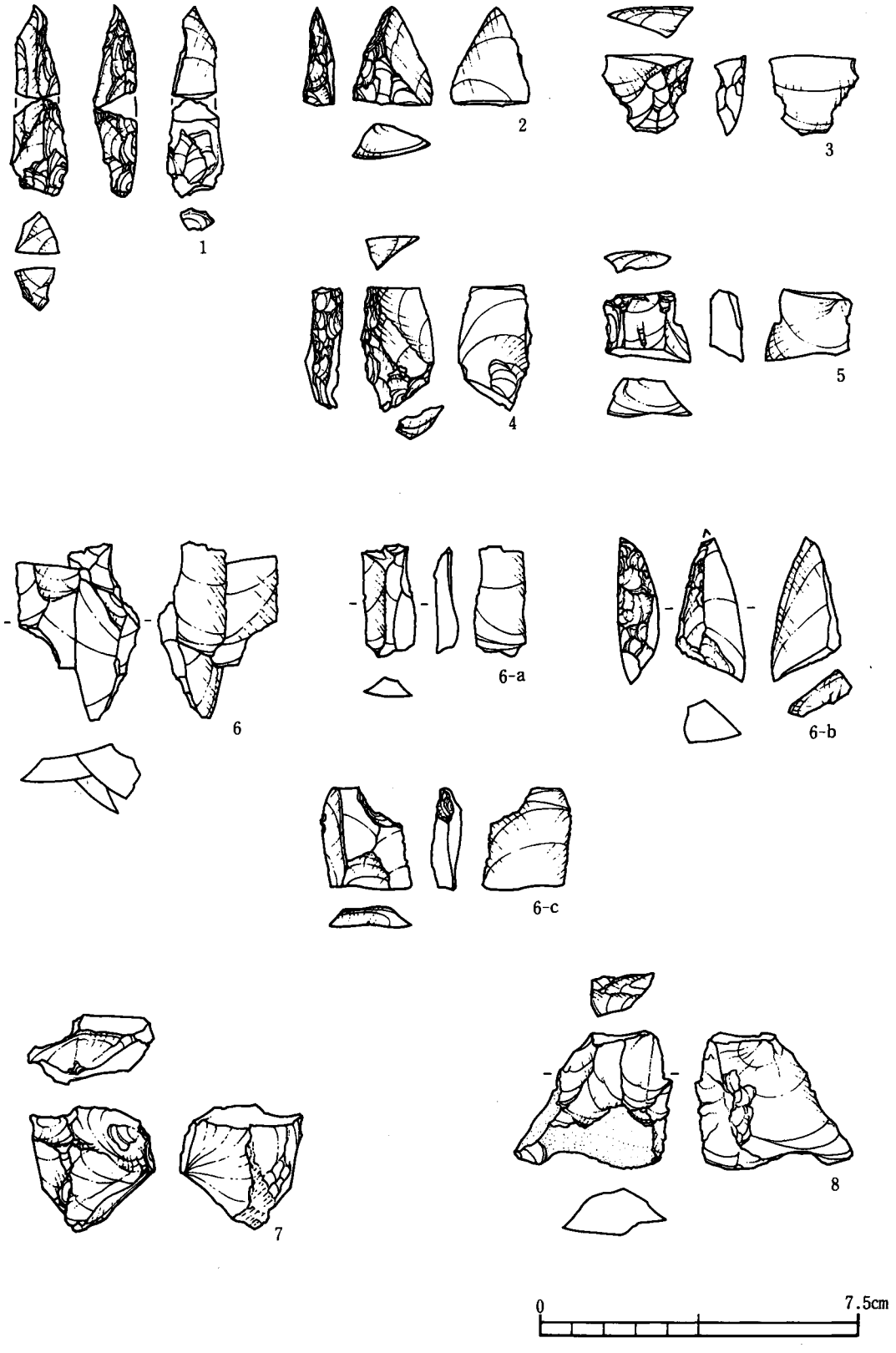
また、Bブロックの北西端には大粒の焼土粒及び炭化物の集中がみられ、垂直分布においてもBブロックの出土遺物と同一の層位内であることを確認した。

炭化物のうち、数点は炭化材と呼ぶことの可能な程度の大きさがあり、きわめて狭い範囲の中に集中している。

調査の過程において、上層には撹乱を受けておらず、土坑その他の遺構は伴わないが、これらの焼土粒及び炭化物がBブロックに関係するものである可能性は強い。

出土遺物1、2が安山岩製のナイフ形石器で、いづれも片縁部先端付近に調整を施している。

3は頁岩製で縦長の石刃。



第8図　Aブロック出土遺物実測図

4は安山岩製で小形の石刃。

5・6は安山岩を素材とする石核である。

このうち、6a・6b・6cはそれぞれ縦長剝片として分割されており、6bは厚味のあるどちらかと言えば横長の剝片である。

7・8は赤褐色の頁岩を素材とする石核である。

7a・7bは横長を基調とする、8a～8dは縦長を基調とするそれぞれの剝片を分割したものである。

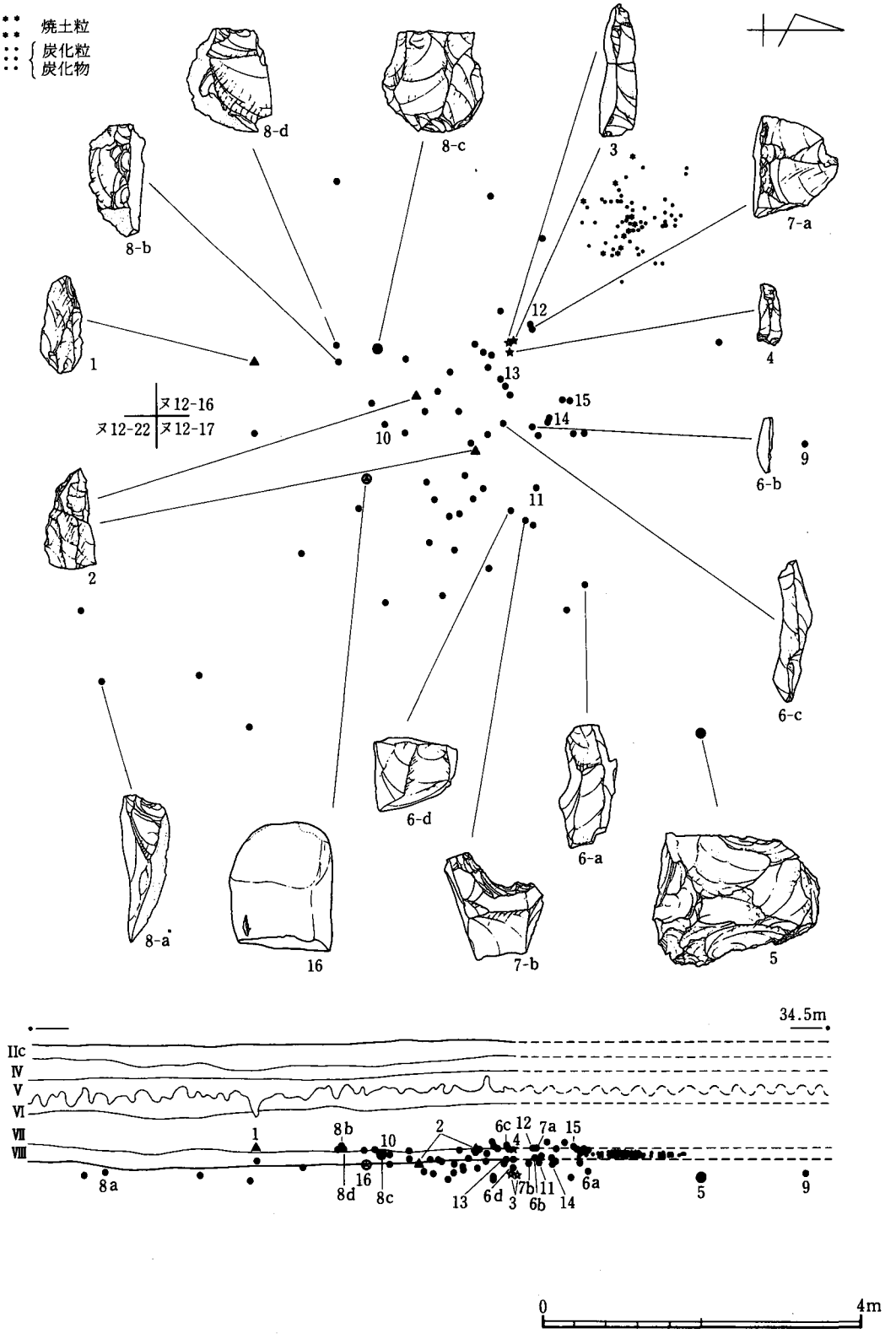
9は自然面を残したままの大型剝片で、10～15も石器としての刃部加工を受けるに至らない段階の剝片である。

また、16は大形の切断した礫岩を素材とする石器である。

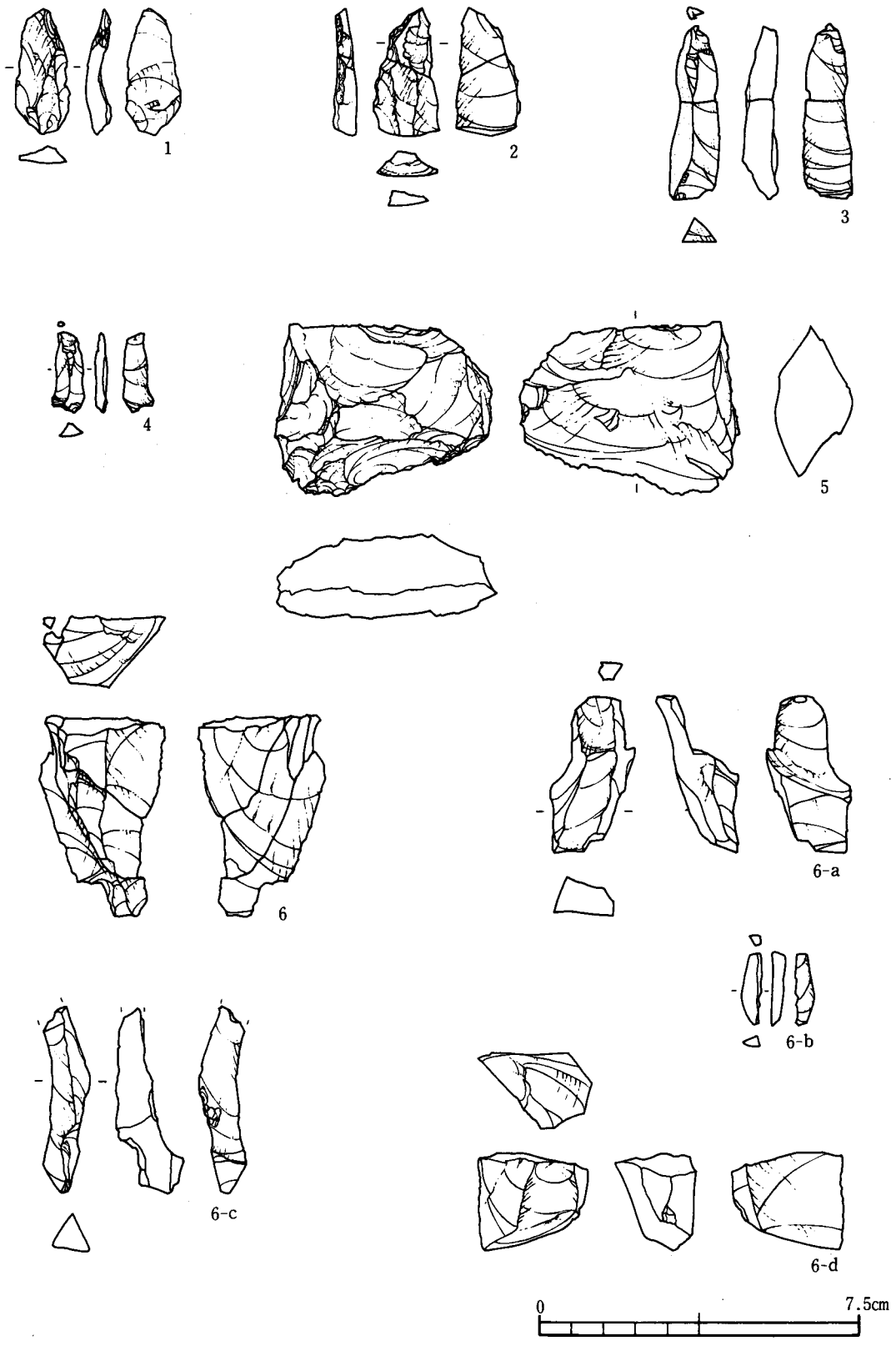
頂部両端に潰痕を残しているほか、平坦面には鼠歯状の痕跡みみられることから、複合的な用途に用いられたものと考えられるが、一応敲石としておきたい。

第2表

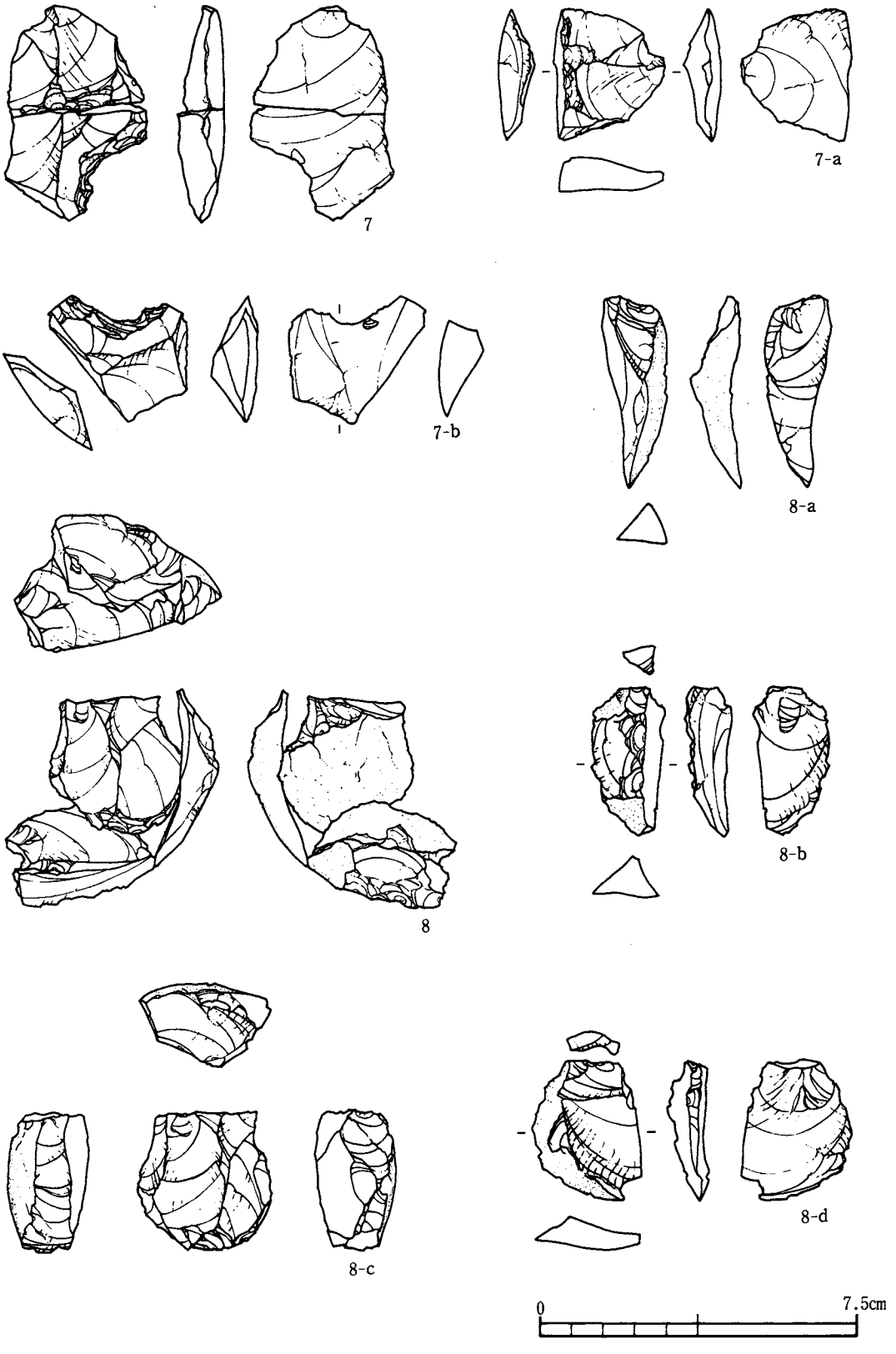
挿図番号	石器名	遺物番号	所属ブロック	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質
1	ナイフ形石器	ヌ12—16—4	B	30.0	12.5	4.0	1.9	安山岩
2	ナイフ形石器	接合						
		ヌ12—17—20	B	30.5	16.0	5.5	2.6	安山岩
		ヌ12—16—10	B					安山岩
3	石刃	接合						
		ヌ12—16—36	B	40.7	12.5	5.7	1.0	頁岩
		ヌ12—16—37	B				2.1	頁岩
4	石刃	ヌ12—16—15	B	19.0	8.0	3.0	0.3	安山岩
5	石核	ヌ12—17—26	B	40.0	51.5	19.0	39.6	安山岩
6	石核	接合		47.0	30.0	16.0		
a	剝片	ヌ12—17—37	B	36.5	20.5	9.0	a＋d 17.2	安山岩
b	剝片	ヌ12—17—52	B	16.5	5.0	2.5	0.1	安山岩
c	剝片	ヌ12—17—19	B	43.0	11.5	9.0	2.7	安山岩
d	剝片	ヌ12—17—51	B	23.0	25.5	18.0		安山岩
7	石核	接合		51.0	34.0	11.5		
a	剝片	ヌ12—16—18	B	31.0	26.0	8.0	5.8	頁岩
b	剝片	ヌ12—17—44	B	29.5	33.0	9.2	7.1	頁岩



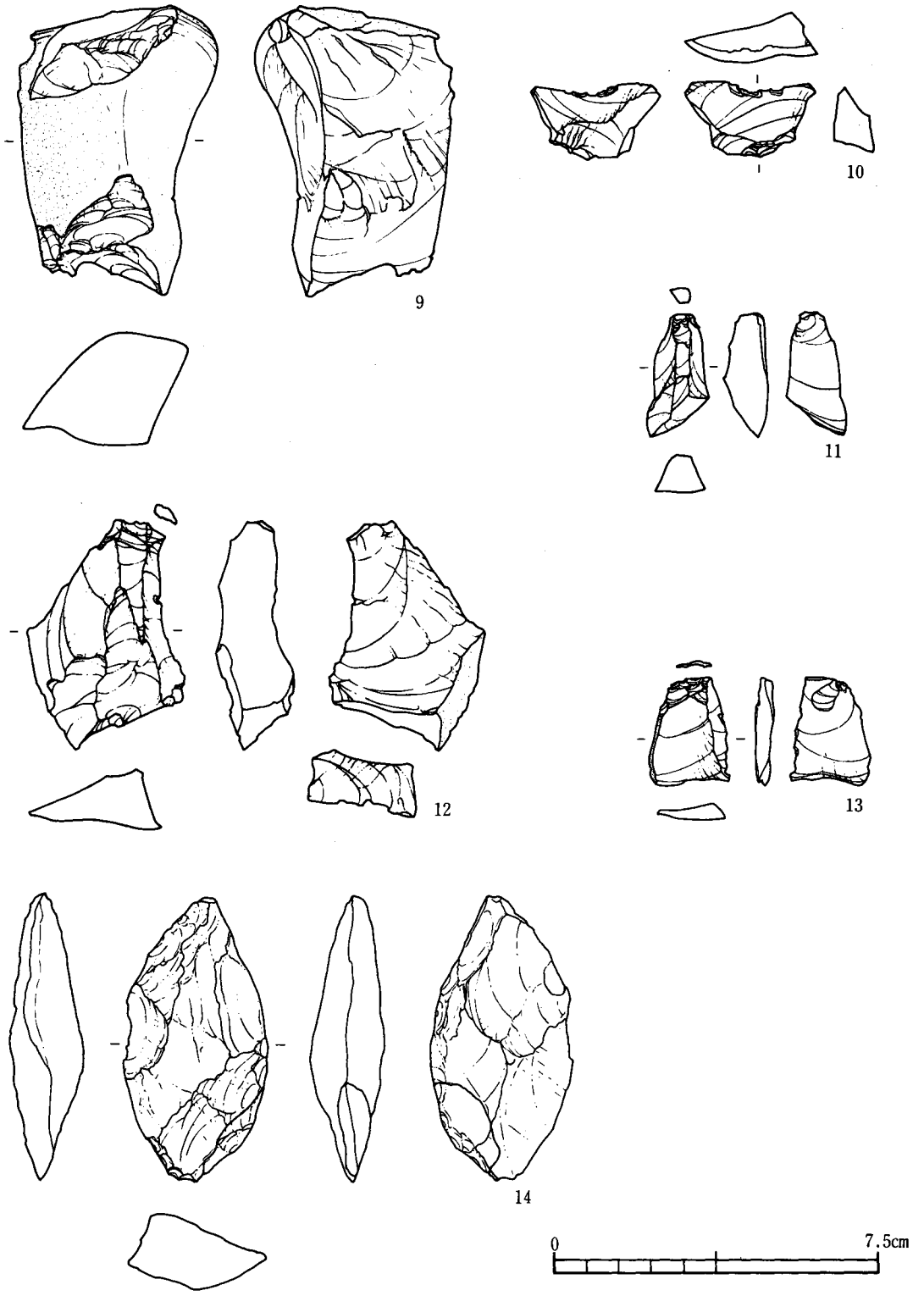
第9図　Bブロック遺物出土状況図



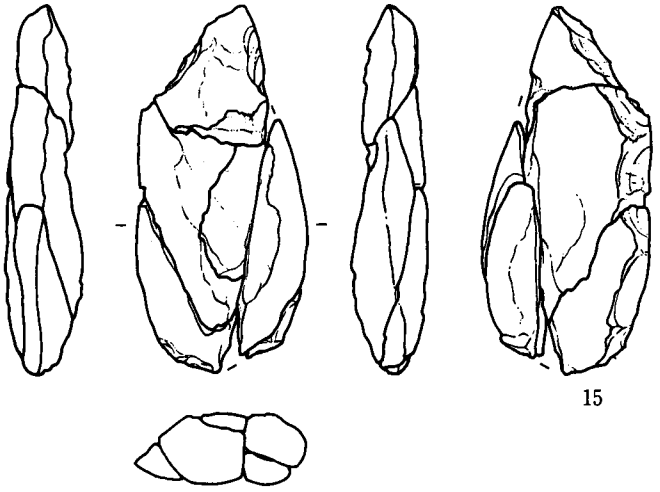
第10図　Bブロック出土遺物実測図(1)



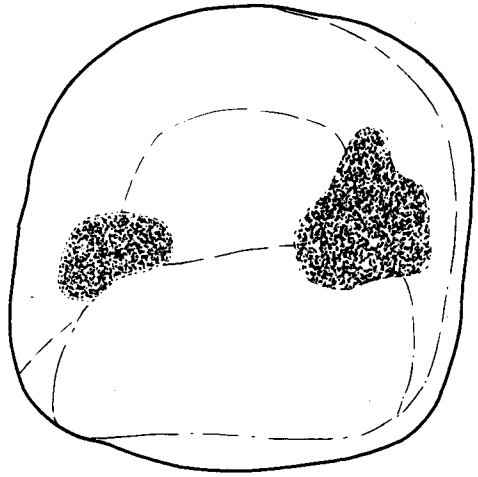
第11図　Bブロック出土遺物実測図(2)

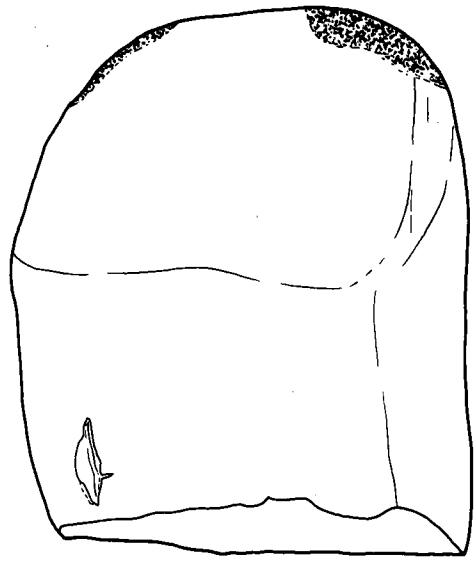


第12図　Bブロック出土遺物実測図(3)

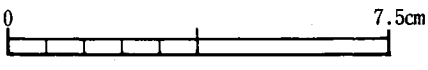


15





16



第13図　Bブロック出土遺物実測図(4)

8	石　　核	接合		50.0	51.0	32.0		
a	剝　　片	ヌ12—22—13		45.0	15.5	9.0	4.8	頁　　岩
b	剝　　片	ヌ12—16—5		34.2	18.0	10.0	4.9	頁　　岩
c	剝　　片	ヌ12—16—20	B	32.5	31.5	19.5	22.9	頁　　岩
d	剝　　片	ヌ12—16—8		32.0	26.5	8.0	6.0	頁　　岩
9	剝　　片	ヌ12—17—46	B	67.5	47.0	26.0	91.0	玄 武 岩
10	剝　　片	ヌ12—17—50	B	18.0	30.0	12.0	3.6	頁　　岩
11	剝　　片	ヌ12—17—45	B	28.0	14.5	9.0	3.1	頁　　岩
12	剝　　片	ヌ12—16—18	B	52.0	37.0	14.0	21.6	安 山 岩
13	剝　　片	ヌ12—16—34	B	25.0	19.0	4.0	1.5	頁　　岩
14	剝　　片	ヌ12—17—55	B	65.0	33.5	17.5	29.4	安 山 岩
15	剝　　片	ヌ12—16—22	B	72.5	34.0	14.5	31.6	安 山 岩
16	敲　　石	ヌ12—17—32	B	107.0	90.1	90.0	1,335	礫　　岩

Cブロック　（第14・15図、図版4・8）

Cブロックの出土遺物総数は16点である。

石器はなく、すべて剝片である。

Cブロックの出土遺物は、III層出土のものとVII層出土のものに大別される。上層であるIII層出土の遺物は、南北方向に5m幅2m程の帯状に分布し、垂直分布においてもIII層からIV～VI層にかけて分布している。

また、下層であるVII層出土の遺物は方向性は示さず、単独に近い形で点在する。

出土遺物は、1～3が安山岩を素材とする剝片。

石器の用途を意図した調整の痕跡はみられない。

4・5は黒曜石を素材とする剝片である。

CブロックではVI層中から33号土坑が掘込まれている。

土坑の土層は、撹乱を受けておらず、覆土も周囲の黒色化したVII層の土壌とは明らかに異なる明褐色土層のソフトロームに近い土壌が確認面では観察された。

Dブロック　（第16・18図、図版4・9）

Dブロックの出土遺物総数は5点である。

石器は石核1点、他の4点は剥片である。

Dブロックは、東に緩やかに傾斜する台地に位置し、出土遺物も東西方向に散在している。垂直分布は、いづれもⅣ～Ⅵ層中の出土を示している。

出土遺物は1、2が頁岩を素材とする剥片であり、4の頁岩を素材とする石核とは同一母岩であると考えられるが、接合関係はなく、4の石核から直接分離された剥片ではない。

3は安山岩を素材とする剥片。

Eブロック　（第17・18図、図版9）

Eブロックの出土遺物総数は3点である。

石器はナイフ形石器1点、他の3点は剥片である。

Eブロックは調査工程上の問題から、周囲に適当な土層観察面を残すことはできなかったが、すべてⅦ層中の出土である。

出土遺物は1が片縁調整のナイフ形石器である。

Hブロック　（第17図、図版9）

Hブロックの出土遺物総数は3点である。

石器はなく、すべて剥片である。

HブロックもEブロック同様土層の観察を表示できないが、すべてⅦ層からの出土である。

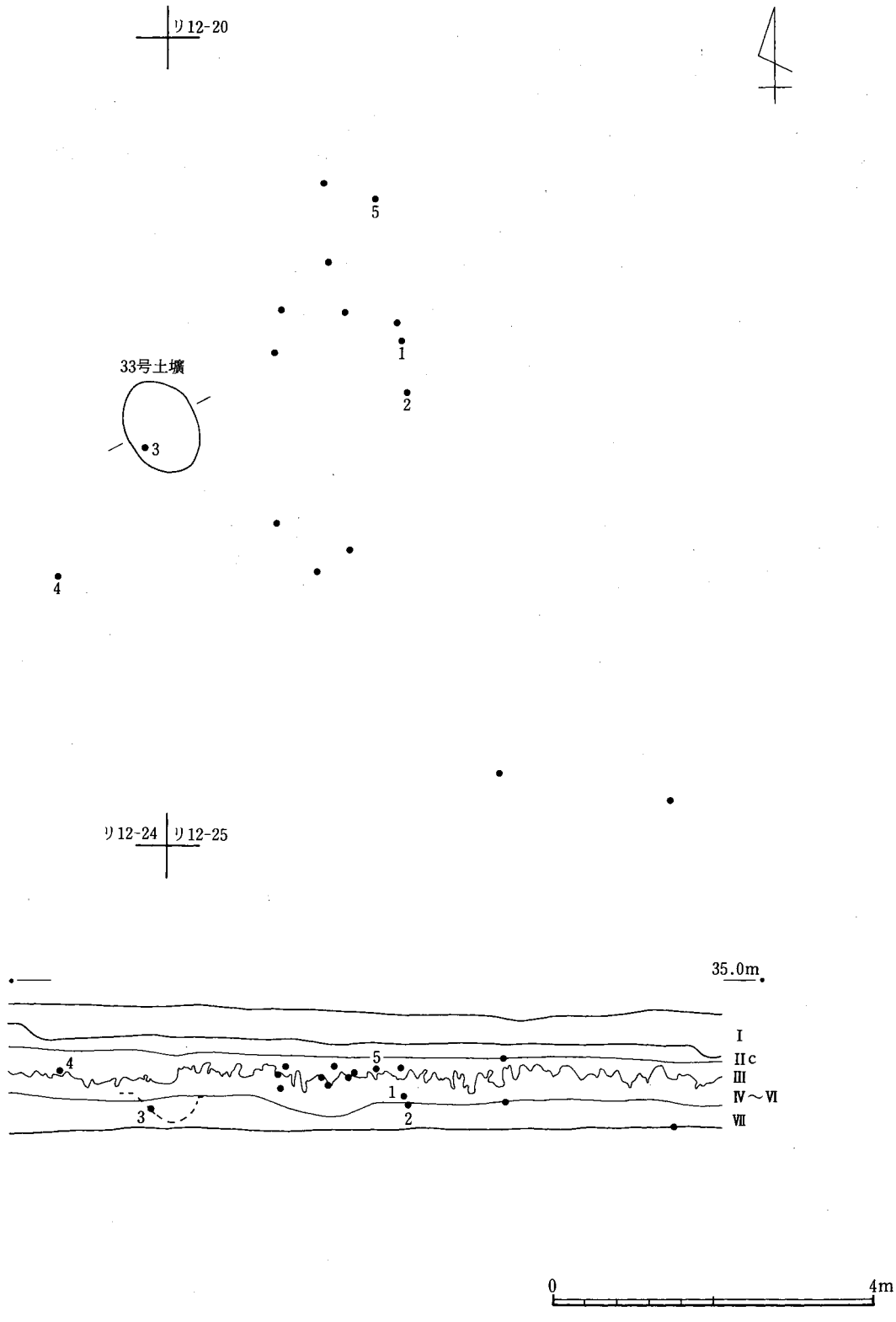
出土遺物は1・2が黒曜石を素材とする剥片。

3はチャートを素材とする剥片。

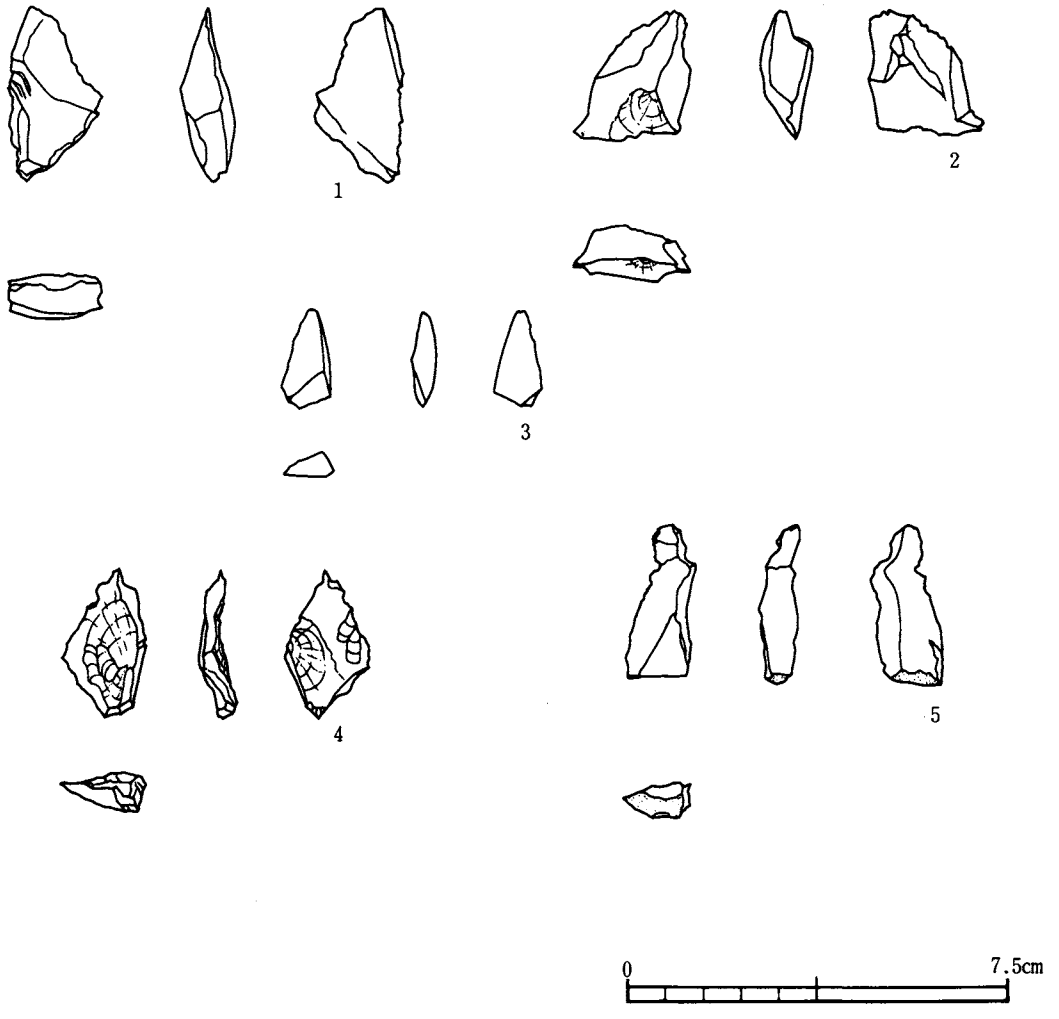
いづれも調整剥片の可能性が強い。

第3表

挿図番号	石　器　名	遺　物　番　号	所　属ブロック	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　質
Cブロック								
1	剥　片	リ12—25—12	C	35.0	19.0	9.0	4.7	安山岩
2	剥　片	リ12—25—13	C	26.0	23.5	11.0	4.1	安山岩
3	剥　片	リ12—24—3	C	20.0	10.0	5.0	0.5	安山岩

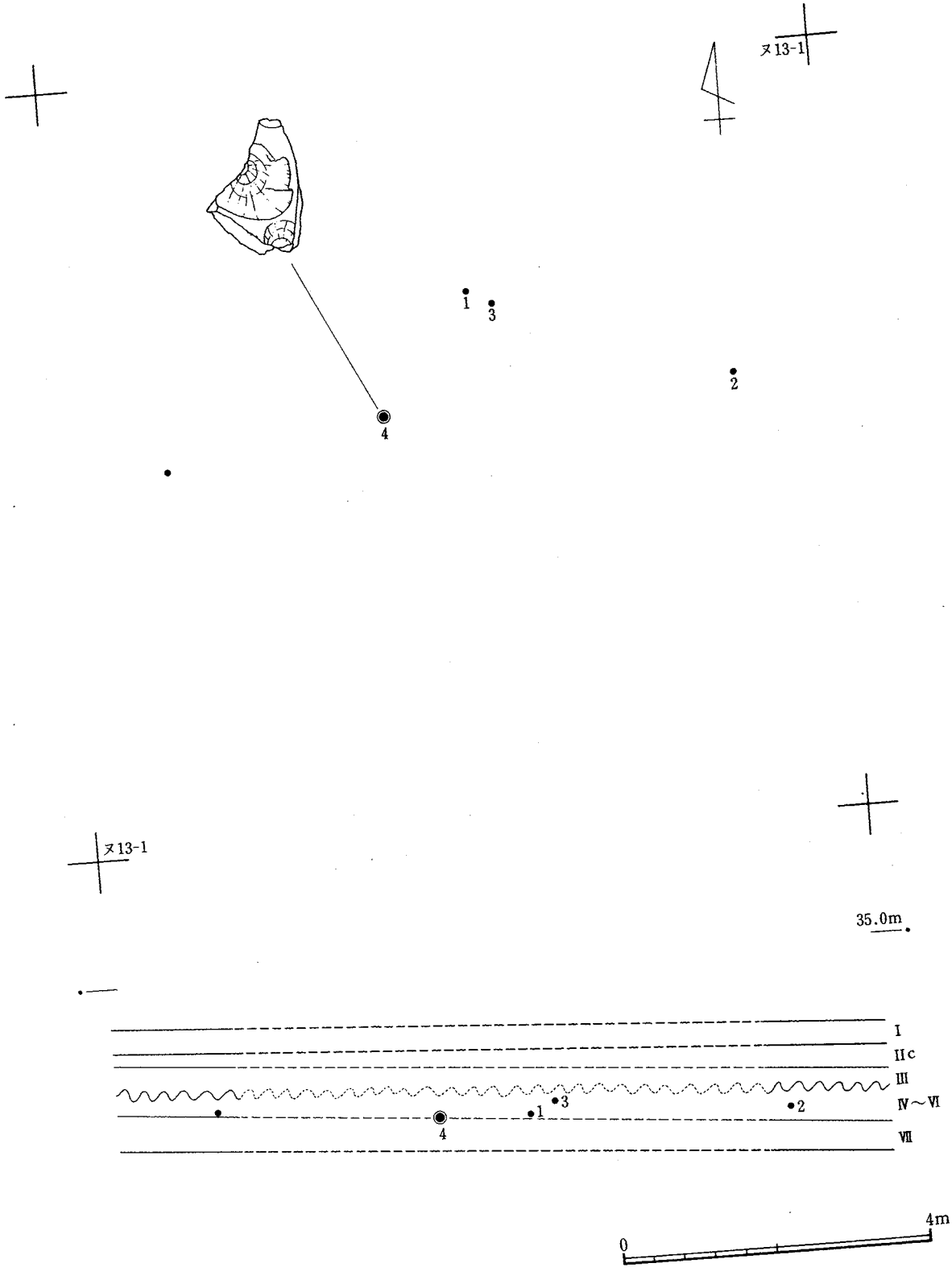


第14図　Cブロック遺物出土状況図

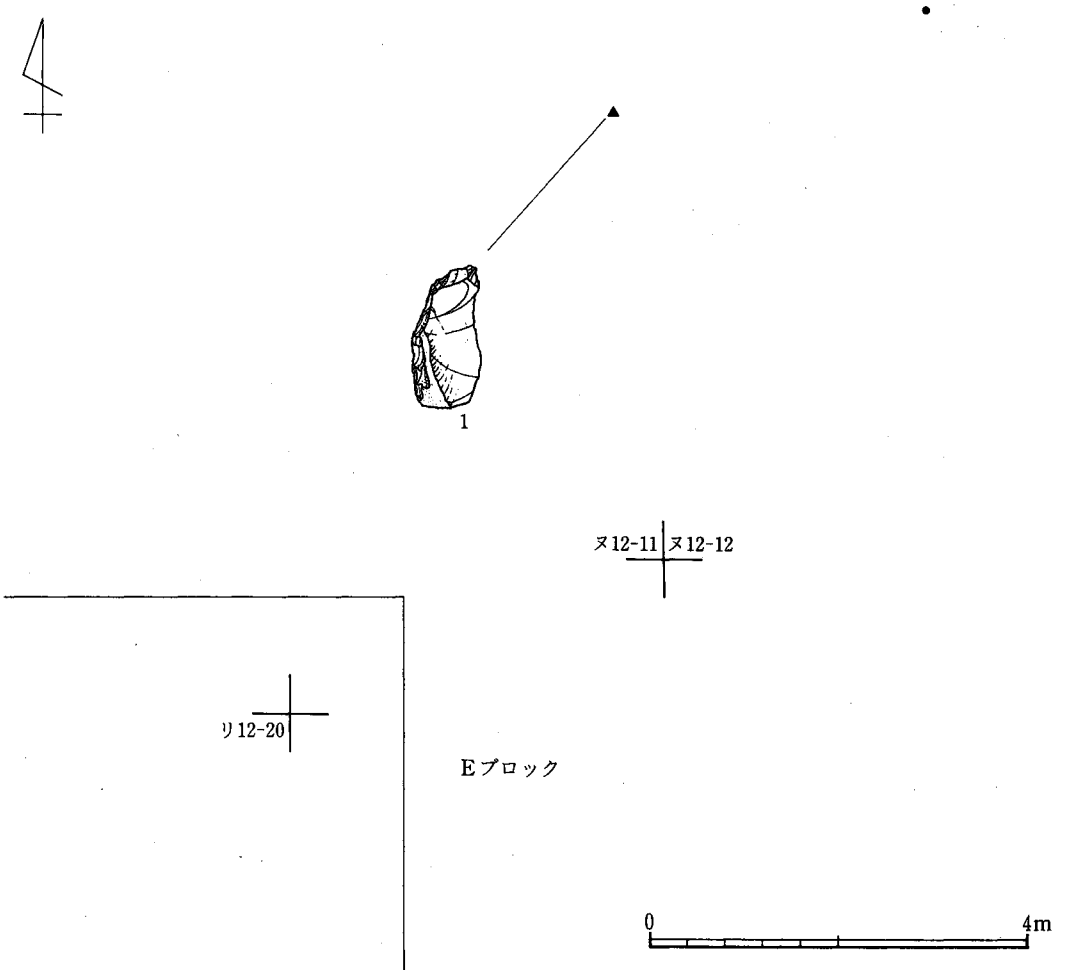


第15図　Cブロック出土遺物実測図

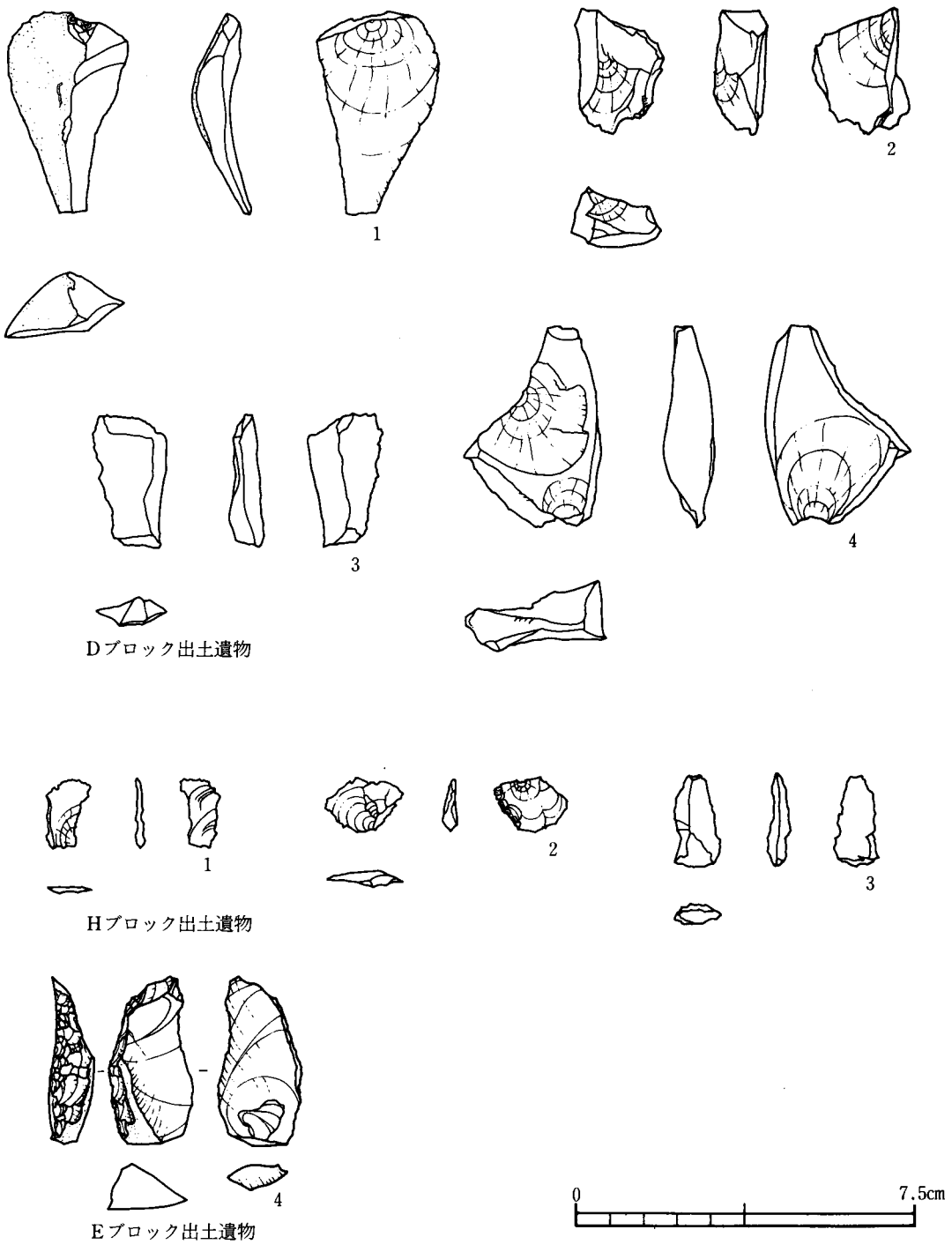
4	剝　　片	リ12—24—2	C	29.0	17.0	8.0	1.6	黒 曜 石
5	剝　　片	リ12—25—9	C	30.0	14.0	7.0	2.7	黒 曜 石
Dブロック								
1	剝　　片	ヌ13—1—6	D	45.0	27.0	15.0	9.1	頁　　岩
2	剝　　片	ヌ13—1—12	D	28.0	20.0	13.0	5.5	頁　　岩
3	剝　　片	ヌ13—1—4	D	29.0	17.0	6.5	2.5	安 山 岩
4	石　　核	ヌ13—1—14	D	44.0	31.0	13.5	12.8	頁　　岩



第16図　Dブロック遺物出土状況図



第17図　E、Hブロック遺物出土状況図



第18図　D・E・Hブロック出土遺物実測図

Eブロック								
1	ナイフ形石器	ヌ12—11—3	E	37.0	19.0	1.0	5.5	安山岩
Hブロック								
1	剥片	リ12—20—6	H	15.5	10.0	1.5	0.1	黒曜石
2	剥片	リ12—20—7	H	11.5	17.0	4.0	0.4	黒曜石
3	剥片	リ12—20—7	H	20.0	11.0	4.5	0.6	チャート

Fブロック　(第19・20・21・22・23・24図、図版5・10・11・12)

Fブロックの出土遺物総数は65点である。

石器は石刃20点、削器1点、石核3点、剥片39点である。

Fブロックの出土遺物の平面分布は、直径20m程の円周内を範囲とし、その中でも出土遺物の集中する2拠点と、2つの拠点を包み込む外側の部分が含まれる。

垂直分布では、III層からIV～VI層の最上部の出土（7・15・30）と、IV～VI層下部からVII層中の出土の遺物に分かれる。

また、第19図の垂直分布の南端付近の遺物が大きく沈み込んでいるのは、地形が南に傾斜していることに起因する。

出土遺物は、上層のものでは7が頁岩を素材とする石刃で、上下を切断しており用途に即した調整を受ける直前の素材と考えられる。

15も頁岩を素材とする石刃であるが、縦長で裏面にはバルブを残し、打点付近は衝撃のために破砕片が飛散した痕跡を残している。

30は頁岩を素材とする縦形剥片である。

つぎに、VII層を中心とする下層出土の遺物では、1～6、8～14、16～19が石刃である。

1は巾広で表側面に稜を有し、扁平なつくりのチャートを素材とする石刃である。
形態的には側縁が平行していない、不定形の石刃。

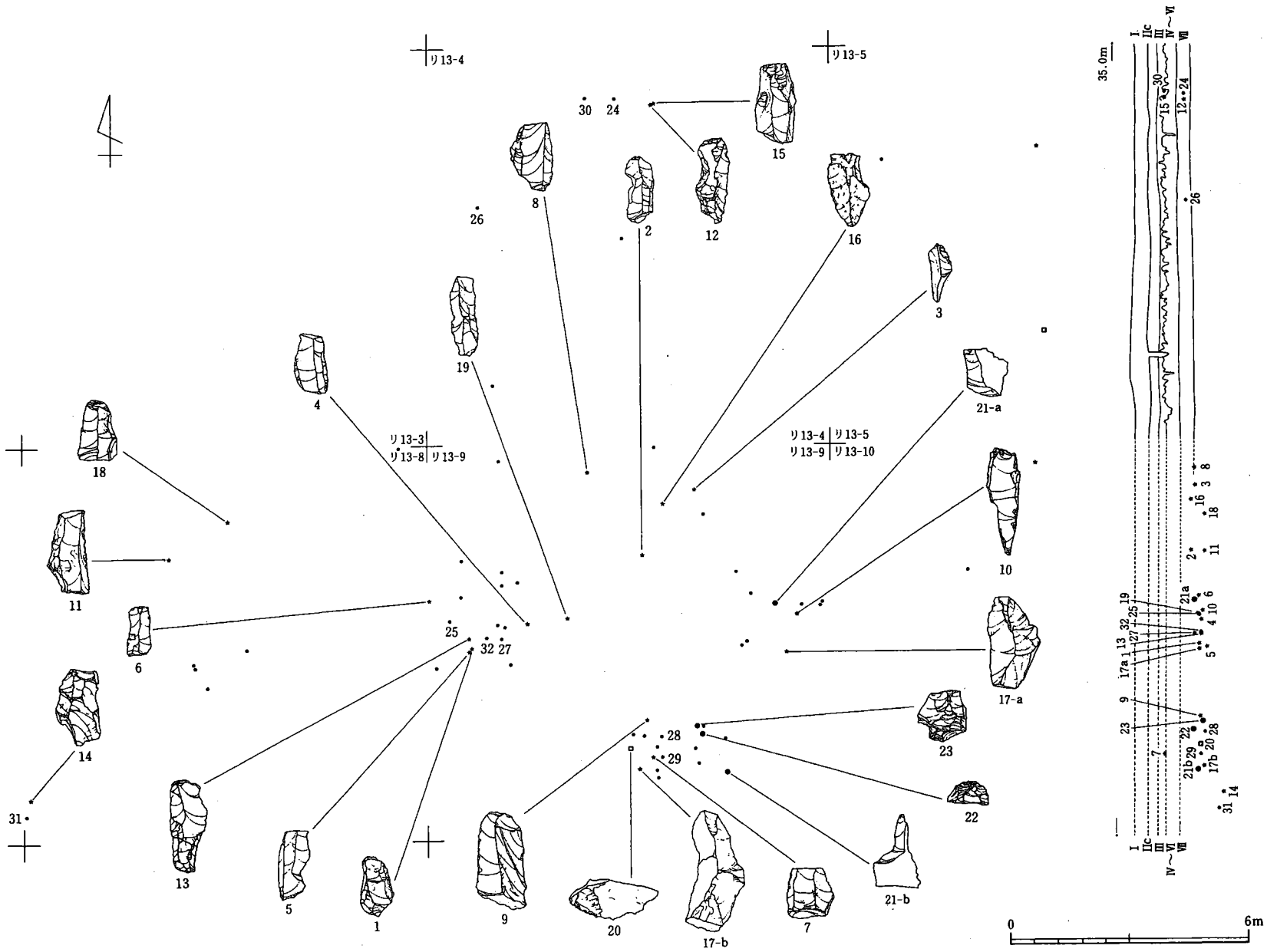
2はメノウを素材とし、左側縁に大きく抉状の欠損を有する石刃である。

3は頁岩を素材とするが、表面の稜は単独であり、一見調整剥片的な石刃である。

4は頁岩を素材とする縦長の石刃である。
裏面は打点方向よりのリングを残すのみである。

5は安山岩を素材とする石刃であるが、片縁の一部に表裏両面より調整を受けた痕跡が認められる。

6は頁岩を素材とするが、3同様に調整剥片的な石刃である。



第19図　Fブロック遺物出土状況図

裏面にはバルブを残している。

8は頁岩を素材とし、表面は平行する稜線が認められるが、両縁が平行しない不定形の石刃である。

9は頁岩を素材とし、厚味のある縦長の石刃。

裏面にはバルブを残している。

10は両縁の平行しない不定形の石刃であるが、表面の両縁部の一部に調整を加えた痕跡を有している。

表裏面には新旧のバルブを残し、弯曲状の扁平なつくりとなっている。

11はチャートを素材とする石刃で、両縁は平行せず不定形タイプとなっている。

12～14はいづれもチャートを素材とする石刃であるが、両縁は平行しない不定形タイプで、表面の稜線も複雑で、調整剝片的な要素を含むものである。

16は安山岩を素材とするが、両縁は平行しない不定形のタイプの石刃である。

17は17ａ・17ｂの接合資料である。

石刃技法により分割された17ａ・17ｂは、むしろ一連の工程の途中の段階である可能性を持っており、17ａ・17ｂはさらに打撃を加えられることにより、一層素材としての有効度を増していくものと考えられる。

この意味では、むしろ縦長剝片と呼ぶべきであるかもしれないが、石刃技法による工程が判明しているため、石刃としての扱いをしておきたい。

18は頁岩を素材とする石刃である。

裏面には明瞭なバルブを残し、刃部の加工を目的とする調整は見られない。

19は安山岩を素材とする石刃である。

裏面にはバルブを残し、打面は安定した平坦面を維持し、扁平なつくりとなっている。

20はチャート製の削器である。

横形剝片の端部の縁辺に刃部加工の調整を受けている。

21～23はチャートを素材とする石核である。

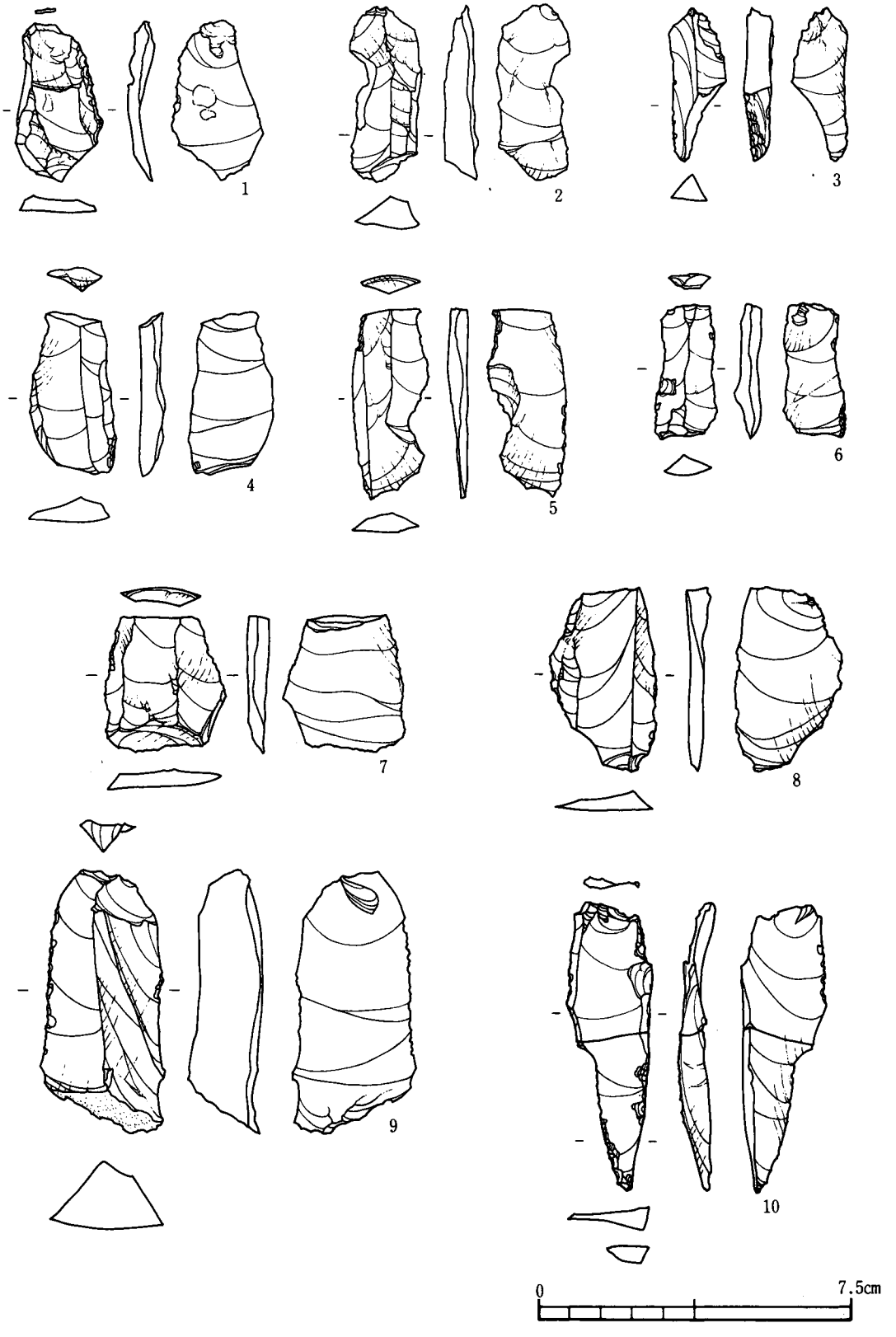
このうち、21は21ａ、21ｂの接合資料であるが、表裏両面に逆方向及び直交する方向の剝離面を有する。

22は片面のみの剝離面であり、23は表裏両面に直交する方向の剝離面を有する。

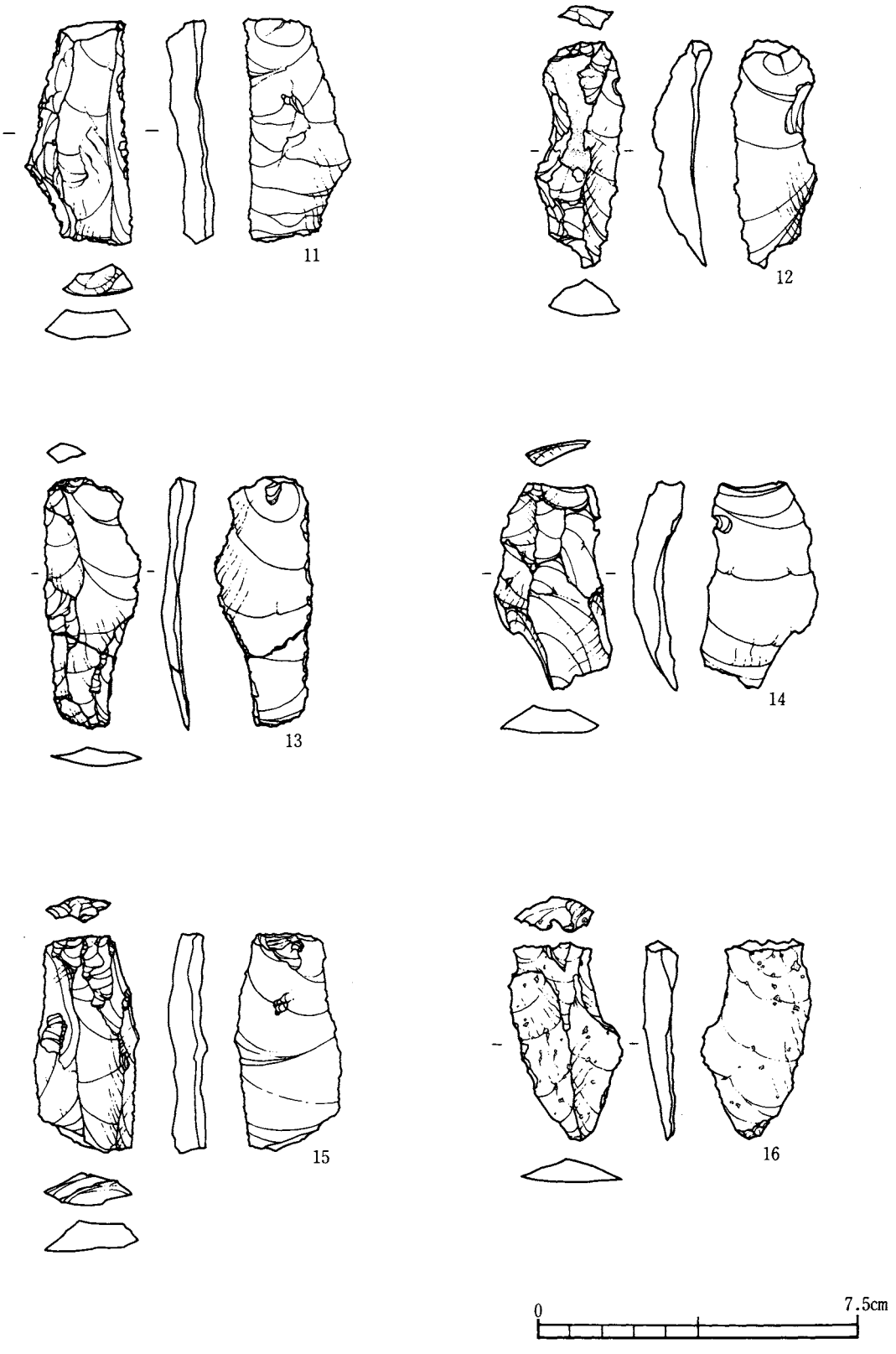
24～29・31・32は剝片である。

24・28・31は縦長剝片であり、石質では24がチャート、28がメノウ、31が頁岩を素材としており、いづれも素材剝片である可能性が強い。

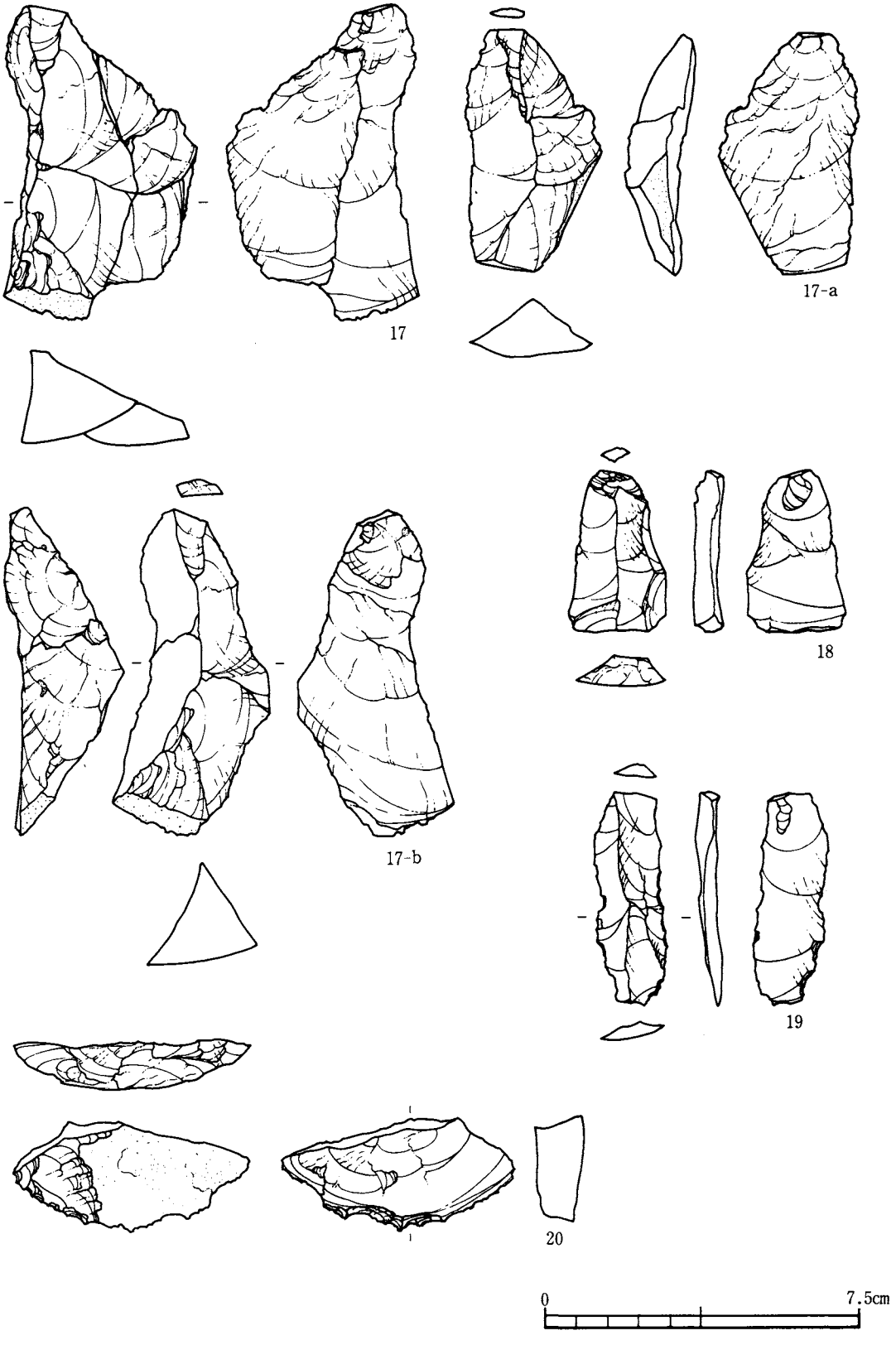
また、25～27・29・32は横長タイプの剝片で、石質は25・32がチャート、26は安山岩、27・29が頁岩を素材とし、いづれも素材剝片である。



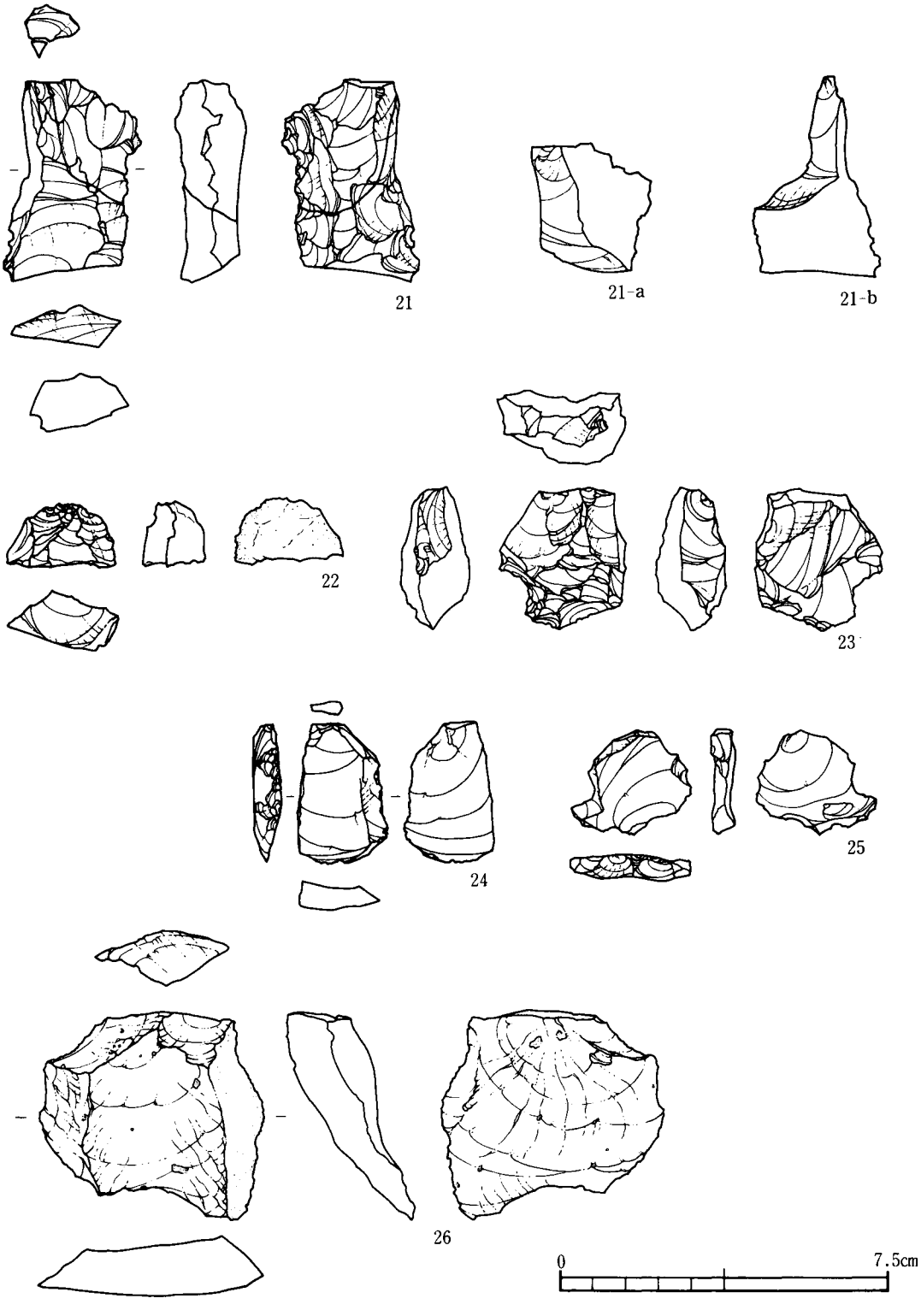
第20図　Fブロック出土遺物実測図(1)



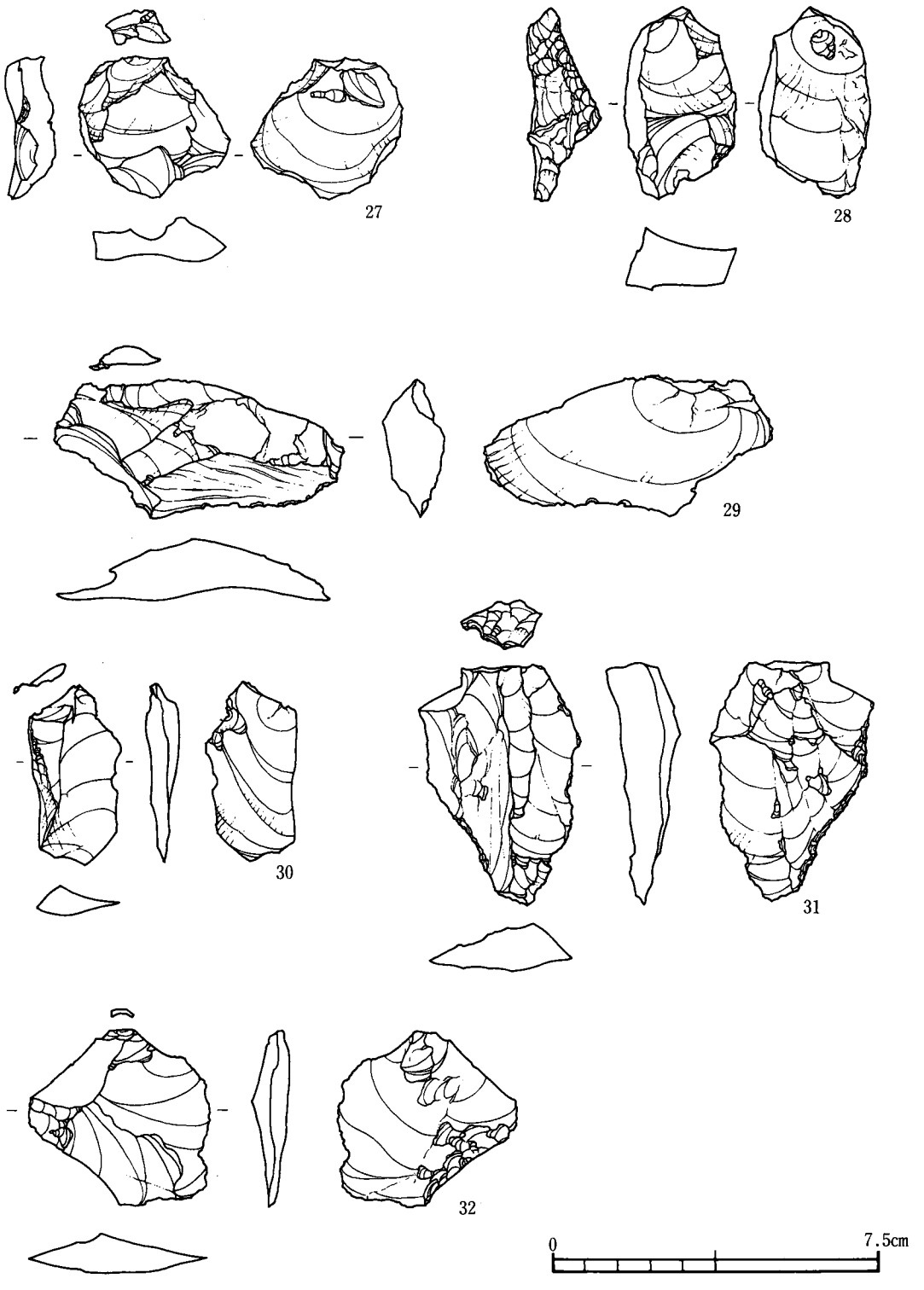
第21図　Fブロック出土遺物実測図(2)



第22図　Fブロック出土遺物実測図(3)



第23図　Fブロック出土遺物実測図(4)



第24図　Fブロック出土遺物実測図(5)

第4表

挿図番号	石器名	遺物番号	所属ブロック	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質
1	石刃	リ13－9－21	F	38.0	21.0	4.0	3.0	チャート
2	石刃	リ13－9－11	F	42.0	17.5	8.0	4.4	メノウ
3	石刃	リ13－9－14	F	36.5	14.0	6.5	2.3	頁岩
4	石刃	リ13－9－17	F	38.0	20.5	6.0	4.3	頁岩
5	石刃	リ13－9－50	F	45.0	19.0	4.5	3.4	安山岩
6	石刃	リ13－9－13	F	31.0	15.0	5.0	2.4	頁岩
7	石刃	リ13－9－41	F	32.0	29.0	5.0	4.5	頁岩
8	石刃	リ13－9－8	F	43.0	25.5	4.8	4.2	頁岸
9	石刃	リ13－9－28	F	62.0	30.0	16.0	22.4	頁岩
10		接合						
	石刃	リ13－9－44	F	68.0	21.0	6.5	6.0	頁岩
	石刃	リ13－9－55						
11	石刃	リ13－8－3	F	53.0	25.0	7.5	10.1	チャート
12	石刃	リ13－4－11	F	53.0	21.5	8.0	9.4	チャート
13	石刃	リ13－9－22	F	58.0	23.0	4.5	4.9	チャート
14	石刃	リ13－8－7	F	48.0	28.0	6.5	7.7	チャート
15	石刃	リ13－4－10	F	50.0	25.0	7.5	10.3	頁岩
16	石刃	リ13－9－10	F	46.0	26.5	5.5	6.5	安山岩
17		接合		76.0	45.0	23.0		
a	石刃	リ13－9－49	F	57.5	33.0	13.5	18.8	安山岩
b	石刃	リ13－9－40		76.0	37.0	24.0	35.1	安山岩
18	石刃	リ13－8－4	F	38.0	24.0	17.0	5.1	頁岩
19	石刃	リ13－9－16	F	50.0	17.0	4.5	3.5	安山岩
20	削器	リ13－9－31	F	26.0	56.5	11.5	14.0	チャート
21	石核	接合		46.5	31.5	10.0		チャート
a	石核	リ13－9－48	F	30.0	26.5		9.1	チャート
b	石核	リ13－9－39		46.0	29.5		10.6	チャート
22	石核	リ3－9－37	F	15.0	25.0	14.0	4.2	チャート
23	石核	リ13－9－35	F	32.0	30.0	16.5	15.8	チャート

24	剝片	リ13－4－12	F	31.5	21.0	6.5	4.3	チャート
25	剝片	リ13－9－23	F	23.5	27.5	6.0	2.9	チャート
26	剝片	リ13－4－2	F	48.0	52.0	13.5	34.1	安山岩
27	剝片	リ13－9－18	F	37.0	35.0	10.0	10.3	頁岩
28	剝片	リ13－9－32	F	44.5	26.0	14.5	14.7	メノウ
29	剝片	リ13－9－33	F	31.5	67.0	14.0	16.7	頁岩
30	剝片	リ13－4－7	F	41.0	21.5	7.0	4.0	頁岩
31	剝片	リ13－8－8	F	54.5	38.0	11.0	19.4	頁岩
32	剝片	リ13－9－20	F	40.0	42.0	9.5	8.7	チャート

Gブロック　(第25・26図、図版12・13)

Gブロックの出土遺物総数は8点である。

石器は、砕片状の小型剝片の両極に調整を受けた刃器2点、石刃4点、他の2点は剝片である。

Gブロックの出土遺物の水平分布は特定の範囲を示さず、あえて言及すれば、石器と未成品の出土地点が分かれていることが特徴といえる。

垂直分布ではVI層最下部からVII層中の出土であり、遺物相互間にややレベル差が感じられる。

出土遺物は1～4が石刃である。

このうち1・3・4は頁岩を素材とし、1・3は不定形タイプの石刃である。

4は表面の左側縁の中央部に、やや大きめの剝離痕を有する。

2は安山岩を素材とする不定形タイプの石刃である。

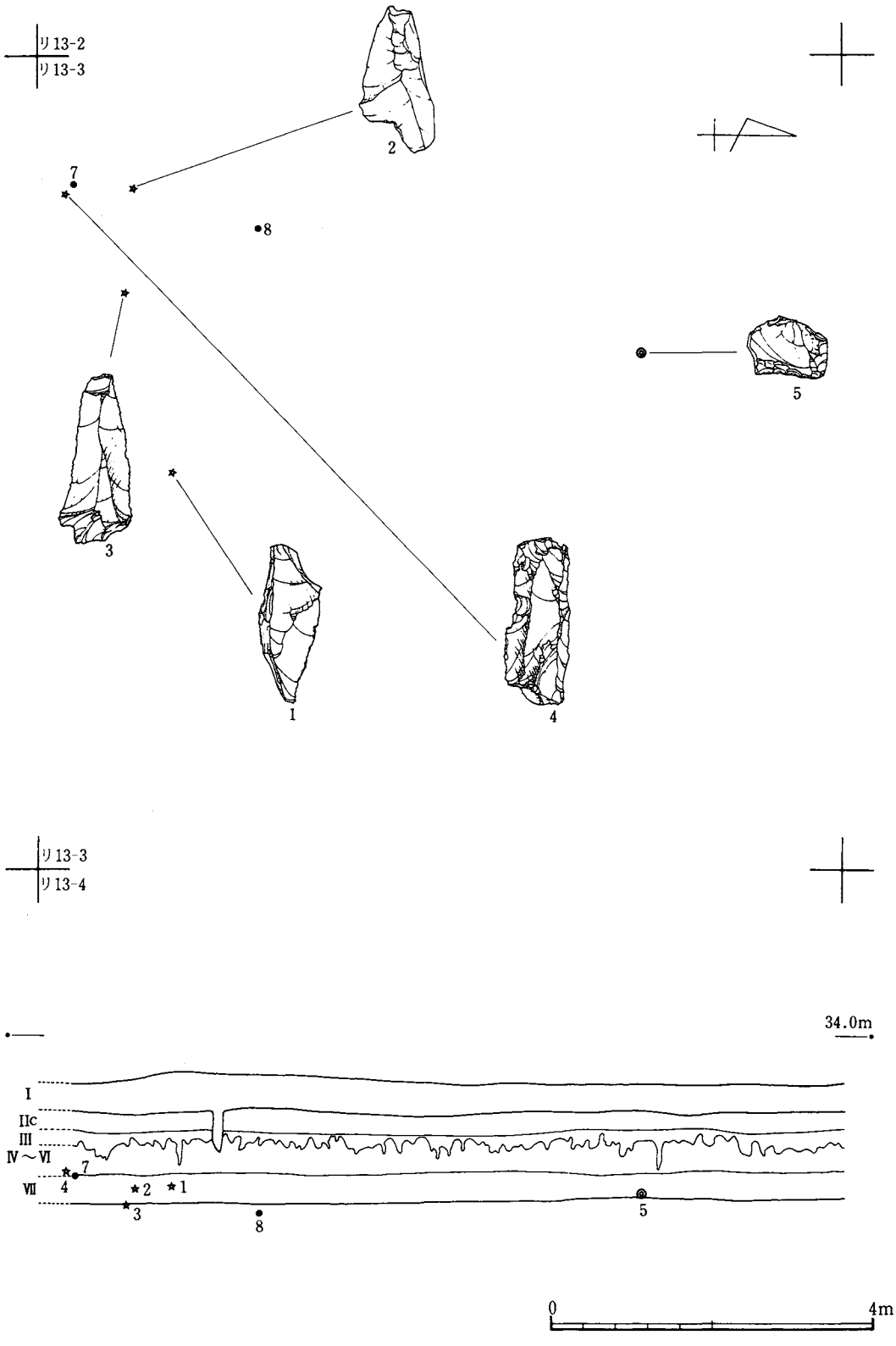
5・6は頁岩を素材とし、5の場合には両面の下端と裏面側上端より、6の場合は表面側では上端及び左側縁と裏面上端よりのそれぞれ両極打法による刃部加工剝離痕がみられる方形の小型砕片石器である。

なお、6はVII層面における一括遺物である。

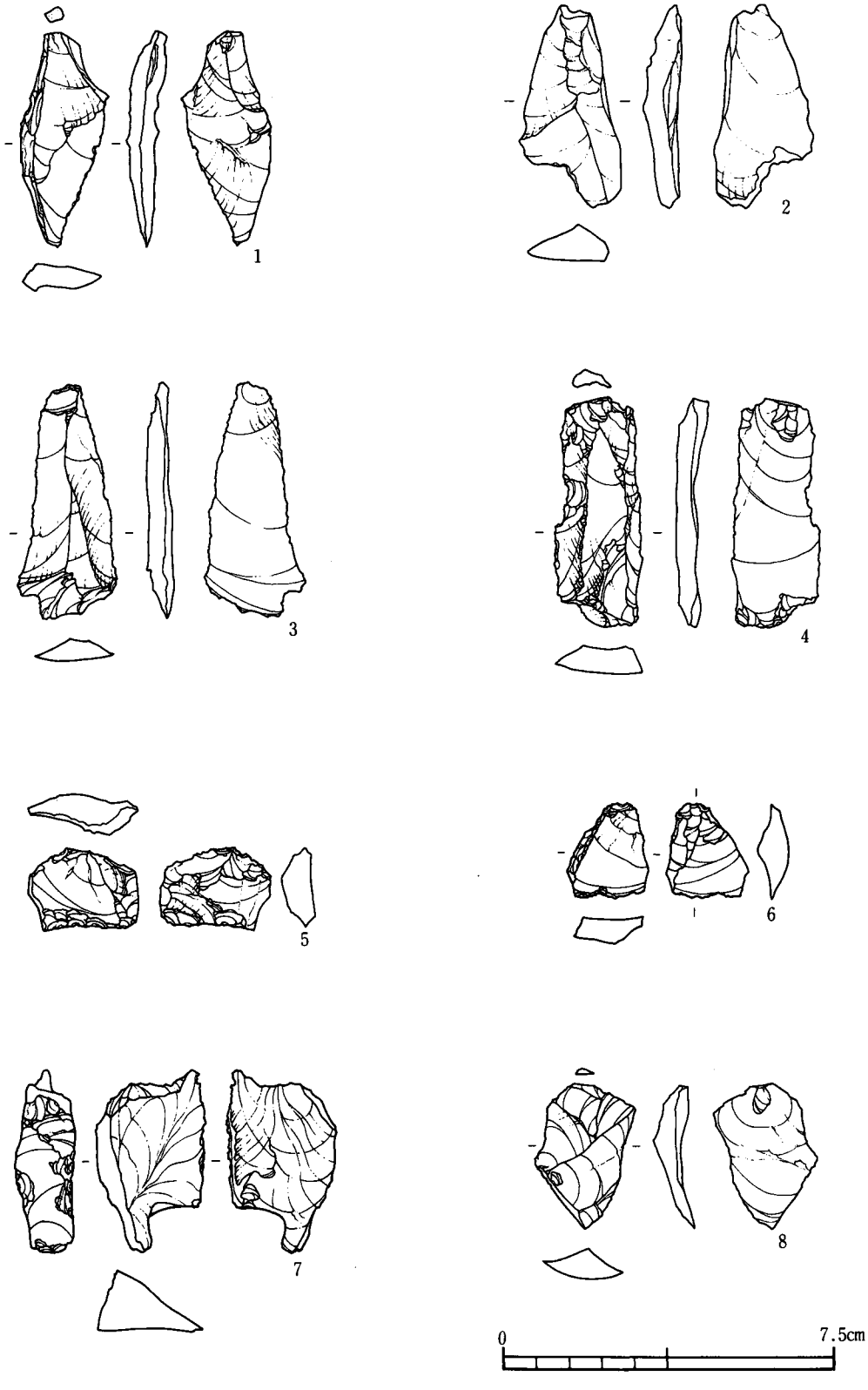
7・8は頁岩を素材とする剝片であるが、8は表裏両面に新旧のバルブを残す素材剝片である。

第5表

挿図番号	石器名	遺物番号	所属ブロック	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質
1	石刃	リ13－3－9	G	48.5	20.0	6.0	4.6	頁岩
2	石刃	リ13－3－8	G	46.0	23.0	8.5	5.3	安山岩



第25図　Gブロック遺物出土状況図



第26図　Gブロック出土遺物実測図

3	石　　刃	リ13－3－5	G	51.5	22.5	5.0	5.0	頁　岩
4	石　　刃	リ13－3－2	G	50.5	20.5	6.5	6.4	頁　岩
5	小型砕片石器	リ13－3－3	G	18.0	25.0	9.0	3.4	頁　岩
6	小型砕片石器	リ13－3－7	G	21.0	19.0	6.0	2.1	頁　岩
7	剝　　片	リ13－3－1	G	44.0	25.0	14.0	13.8	頁　岩
8	剝　　片	リ13－3－4	G	32.0	23.0	6.5	3.2	頁　岩

No.1地点　（第27・28・29・30図、図版5・13・14）

No.1地点の出土遺物総数は37点である。

石器は錐3点、尖頭器1点、削器3点、掻器1点、石核4点、他の24点は剝片である。

No.1地点の出土遺物の平面分布は、長軸8m、短軸4m程の長楕円内を範囲とする。

垂直分布では、縄文時代の包含層中からIII層ソフトローム層中にかけて出土遺物が検出された。

出土遺物は1～3が錐で、1は頁岩を素材として両縁部からの調整により突出した部分をつくり出し、先端付近に刃部加工の調整を有する。

2は安山岩製の錐であるが、表面側からのみ刃部加工がおこなわれている。

3は黒曜石を素材としており、両縁部からの調整によってつくり出された突出部の先端に、表裏両面より刃部加工が施されている。

4は頁岩製の尖頭器であるが、先端部を残し欠損している。

調整は表裏両面の側縁より調整を受けている。

5・6はチャート製の削器である。

このうち、5はわずかにリングの残る裏面の縁辺に調整をおこなうタイプであり、6は表面の右側縁部上方にえぐられた部分の縁辺に調整を受けている。

7は黒曜石を素材とする掻器。

表面の長軸上の端部に急な傾斜の刃部加工調整をおこない、裏面には側縁部上端に調整が施されている。

8は頁岩を素材とする削器。

横長剝片の鋭い端部に表裏両面より刃部加工の調整が施されている。

9はチャートを素材とする石核である。

表面及び裏面にはほぼ直交する剝離の痕跡がみられる。

10は10a・10bの接合資料であるが、頁岩を素材とする石核である。

↑印の打撃によるバルブとリングは明瞭にその痕跡を残している。

なお、10aは出土グリッドがリ・12－1であり、10bとは直線距離にしておよそ35m離れている。

11は頁岩を素材とする石核。

表裏面には不規則な剝離が周縁部よりおこなわれた痕跡を残す。

12はチャートを素材とする石核。

表面側に上端を主体とする剝離痕を有する。

13～17は剝片である。

13・14は安山岩を素材とするが、13は表面の下部の抉り部に調整がみられる。

14は14ａ・14ｂ・14ｃの接合資料であり、14ａ・14ｂは調整剝片、14ｃは素材剝片の可能性が強いものと考えられる。

また、15～17はチャートを素材とし、15は不定形の横長タイプの剝片である。

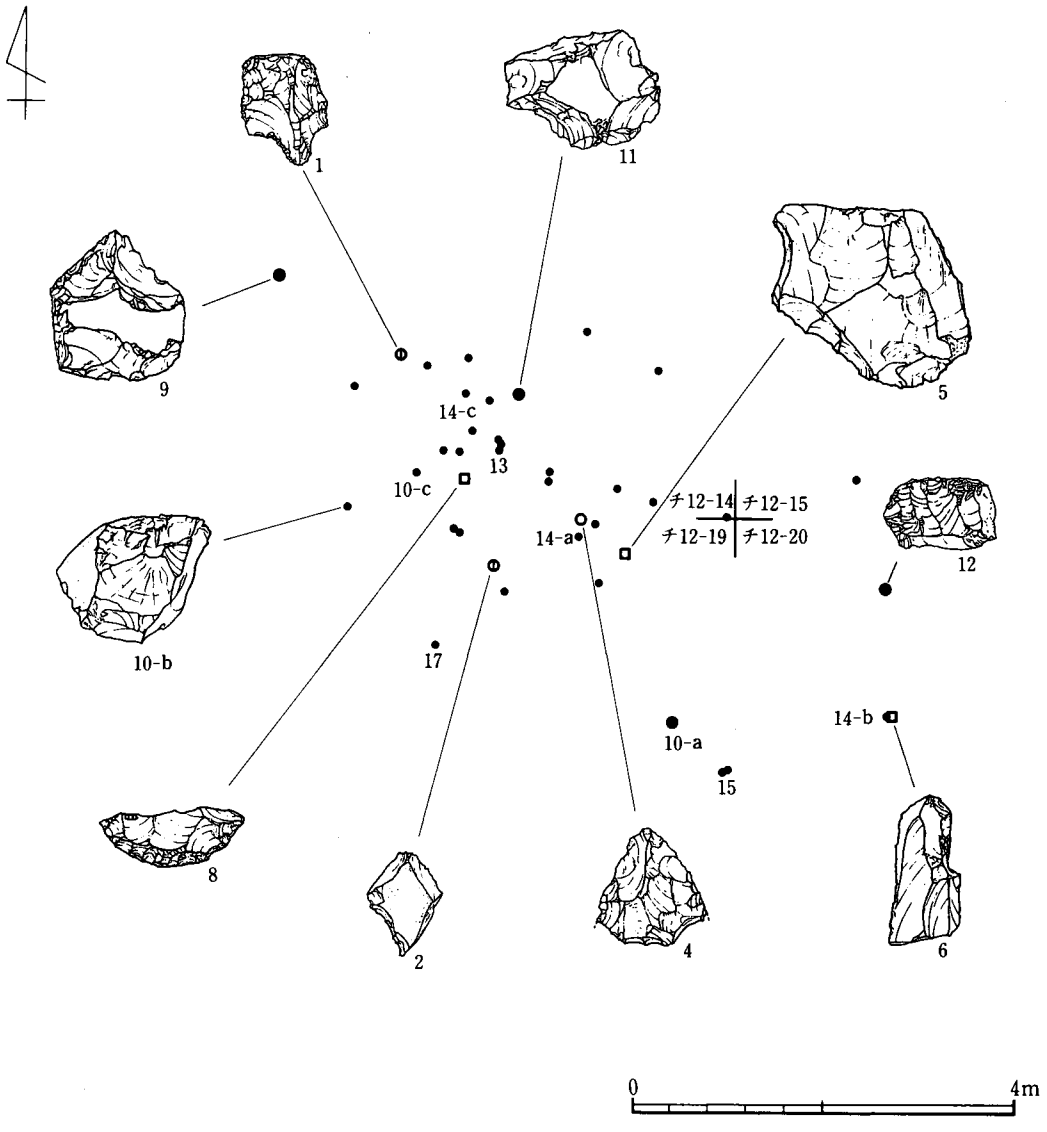
表裏両面には新旧の打撃の痕跡を残す素材剝片と考えられる。

16は縦長剝片の片側縁部に表裏面からやや不安定な調整を受けており、あるいは削器様の刃器を意図した完成度の高い素材剝片とも考えられる。

なお、第27図遺物出土状況図において、７・10ａ・16は、No.１地点からやや離れて単独で検出されたが、大グリッドから判断し本地点に編入している。

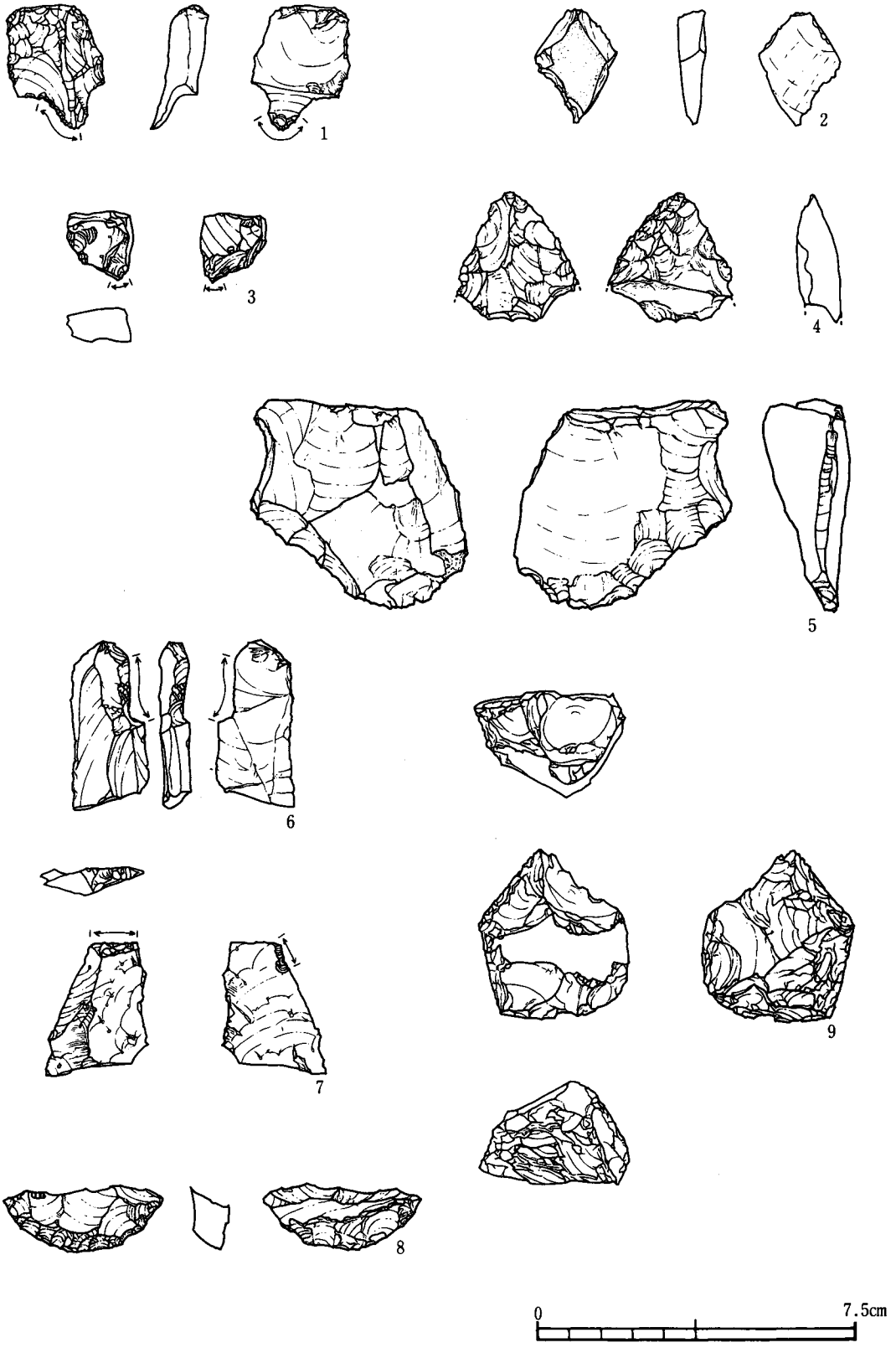
第６表

挿図番号	石器名	遺物番号	所属ブロック	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質
1	錐	チ12—14—25	No.1	29.0	23.0	8.5	4.5	頁岩
2	錐	チ12—19—13	No.1	27.0	20.0	6.5	3.1	安山岩
3	錐	チ12—17—2	No.1	16.0	16.0	8.0	2.2	黒曜岩
4	尖頭類	チ12—19—11	No.1	30.0	29.0	10.5	6.0	頁岩
5	削器	チ12—19—1	No.1	52.0	48.5	20.5	36.9	チャート
6	削器	チ12—20—1	No.1	39.0	18.0	7.0	4.1	チャート
7	掻器	チ12—17—1	No.1	30.0	25.0	6.5	4.0	黒曜岩
8	削器	チ12—14—21	No.1	15.0	38.0	15.0	4.1	頁岩
9	石核	チ12—14—8	No.1	39.0	36.0	24.0	26.6	チャート
10	石核	接合		39.0	39.0	35.0		
a	剝片	リ12—1—35		39.0	35.0	7.5	11.2	頁岩
b	剝片	チ12—14—14	No.1	37.0	36.5	33.5	46.6	頁岩
11	石核	チ12—14—12	No.1	32.0	42.0	24.0	23.0	頁岩
12	石核	チ12—20—3	No.1	26.5	41.0	13.5	12.8	チャート
13	剝片	チ12—24—30	No.1	60.0	57.0	16.5	48.2	安山岩

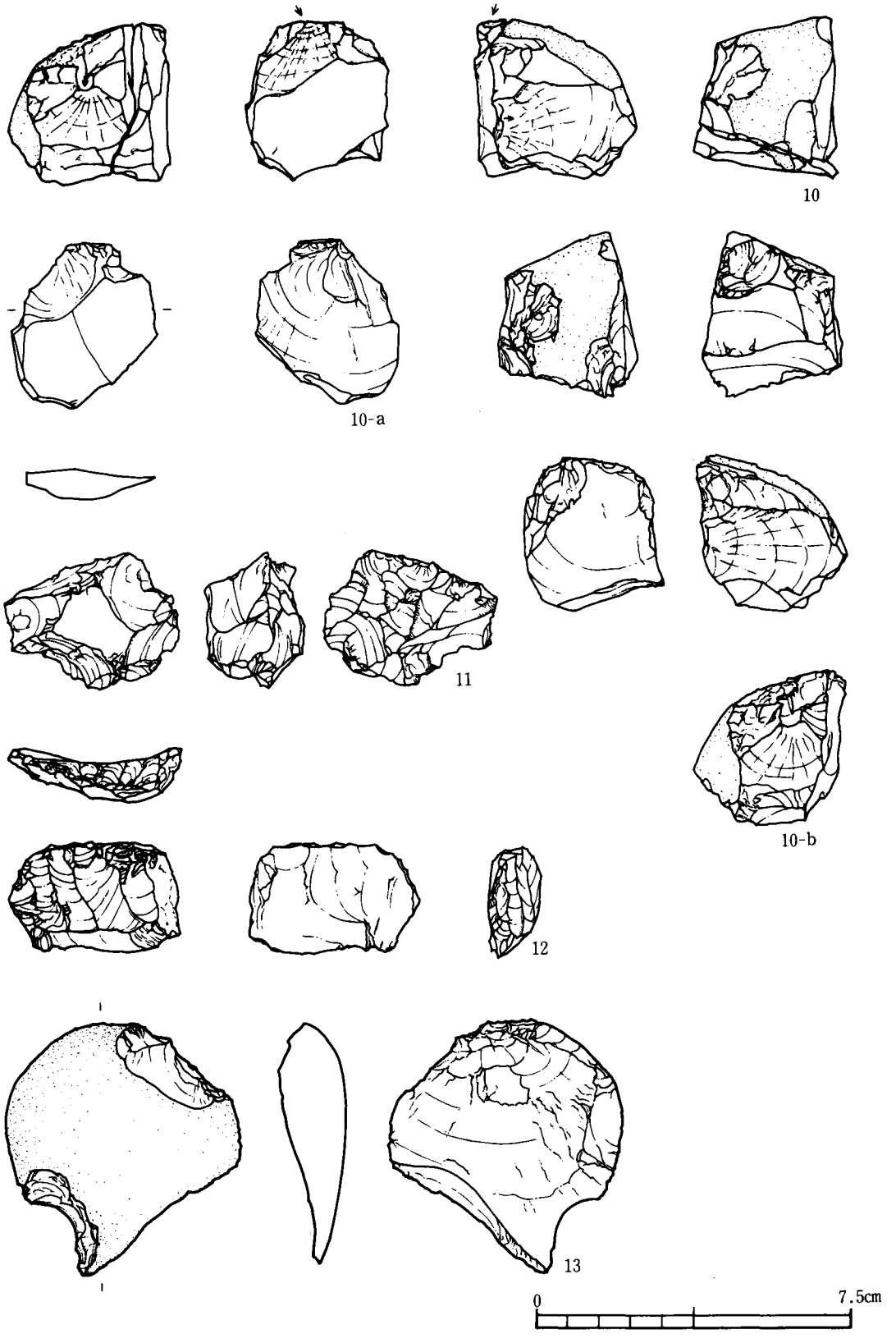


第27図　No.1地点遺物出土状況図

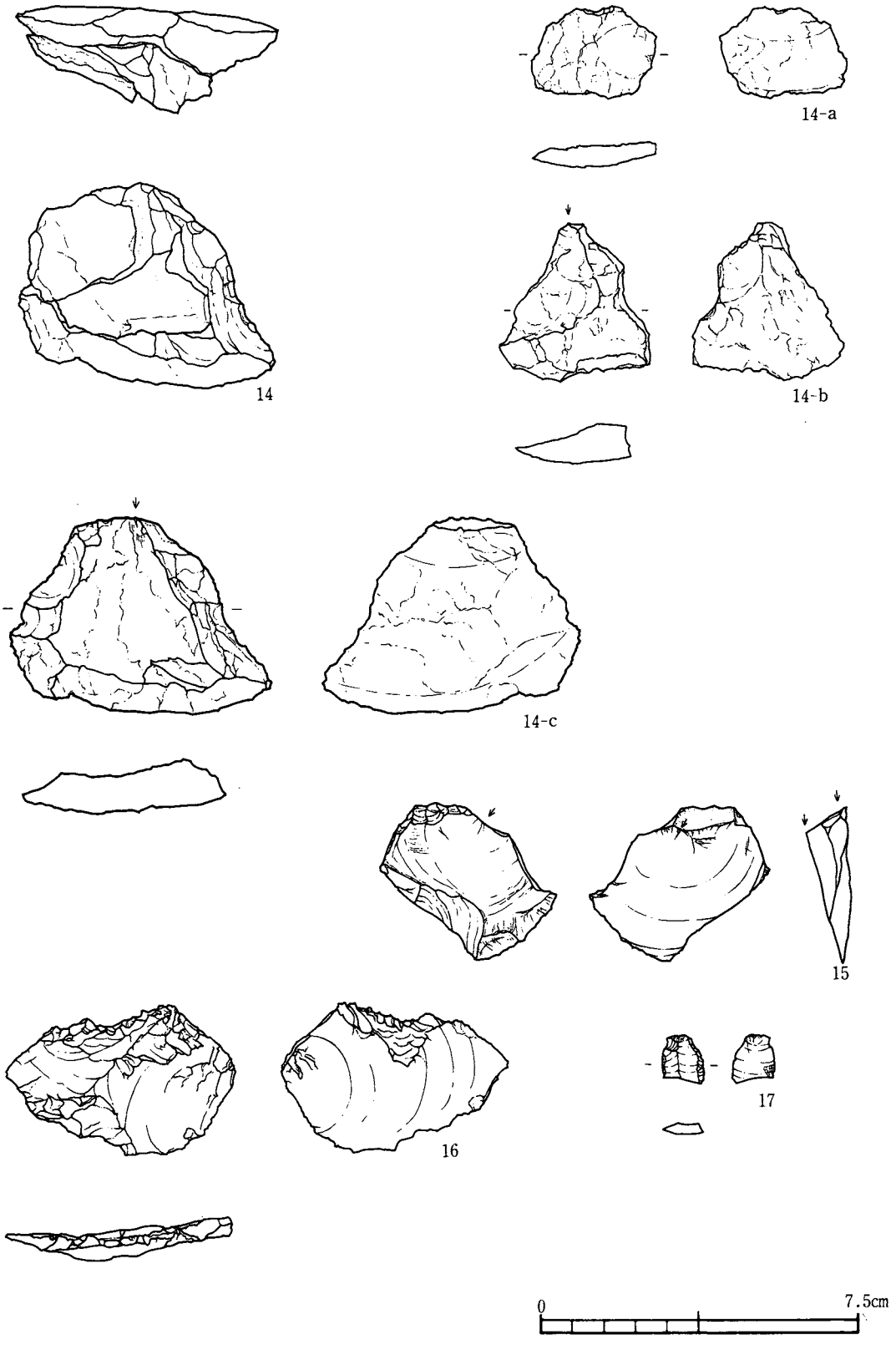
14	剥　　片	接合		48.0	61.0	25.0		
a	剥　　片	チ12—19—2		22.0	30.0	6.0	4.0	安 山 岩
b	剥　　片	チ12—20—1	No.1	37.0	36.0	9.0	12.0	安 山 岩
c	剥　　片	チ12—14—6		45.0	62.0	12.5	34.1	安 山 岩



第28図　№1地点出土遺物実測図(1)



第29図　No.1地点出土遺物実測図(2)



第30図　№1地点出土遺物実測図(3)

15	剥　　片	チ12−19−4	No.1	37.0	42.5	11.0	10.5	チャート
16	剥　　片	チ14−17−4	No.1	35.0	55.0	9.5	9.1	チャート
17	剥　　片	チ12−19−15	No.1	11.5	10.0	2.5	3.0	チャート

No.2地点　（第31・33図、図版14）・No.3地点　（第32・34・35図、図版14）

No.2地点の出土遺物総数は4点である。

石器は有舌尖頭器1点、他は剥片3点。

No.3地点の出土遺物総数は51点である。

石器は彫器1点、小型砕片状刃器1点、石核5点、他は剥片42点。

No.2地点・No.3地点ともに縄文時代の包含層からIII層中にかけて検出されている。

平面分布では、No.2が散在するのと比較すると、No.3は長径11m、短径8mの楕円域を範囲として集中している。

出土遺物はNo.2・No.3の第31～35図遺物出土状況図及び出土遺物実測図において、通し番号となっているが、これは作図上の取扱いにおける操作であり、No.2・No.3の両地点の何らかの関りを意図するものではない。

No.2地点の出土遺物は、1が安山岩製の有舌尖頭器である。

表裏両面より全面に調整を受けている。

2～3は剥片であり、2は黒曜石を素材とし、3は頁岩を素材とする横長剥片である。

4は頁岩製の、表面上端縁に刃部加工調整を有する彫器。

5は5a・5bの接合資料であるが、5aは一括資料である。

表面右上端部及び左下端部に刃部加工の調整痕が認められ、下端部の刃部は不安定なものとなっており、これが使用によるものであるかは断定し難く、裏面側にも同様の剝離痕の見られることから両極打法による四角形の小型砕片刃器としておきたい。

6はチャートを素材とする石核である。

表面には自然面と調整を目的とする剝離の痕跡がみられ、裏面には一方向からの剝離の痕跡がみられる、細石刃核の可能性を有する石核である。

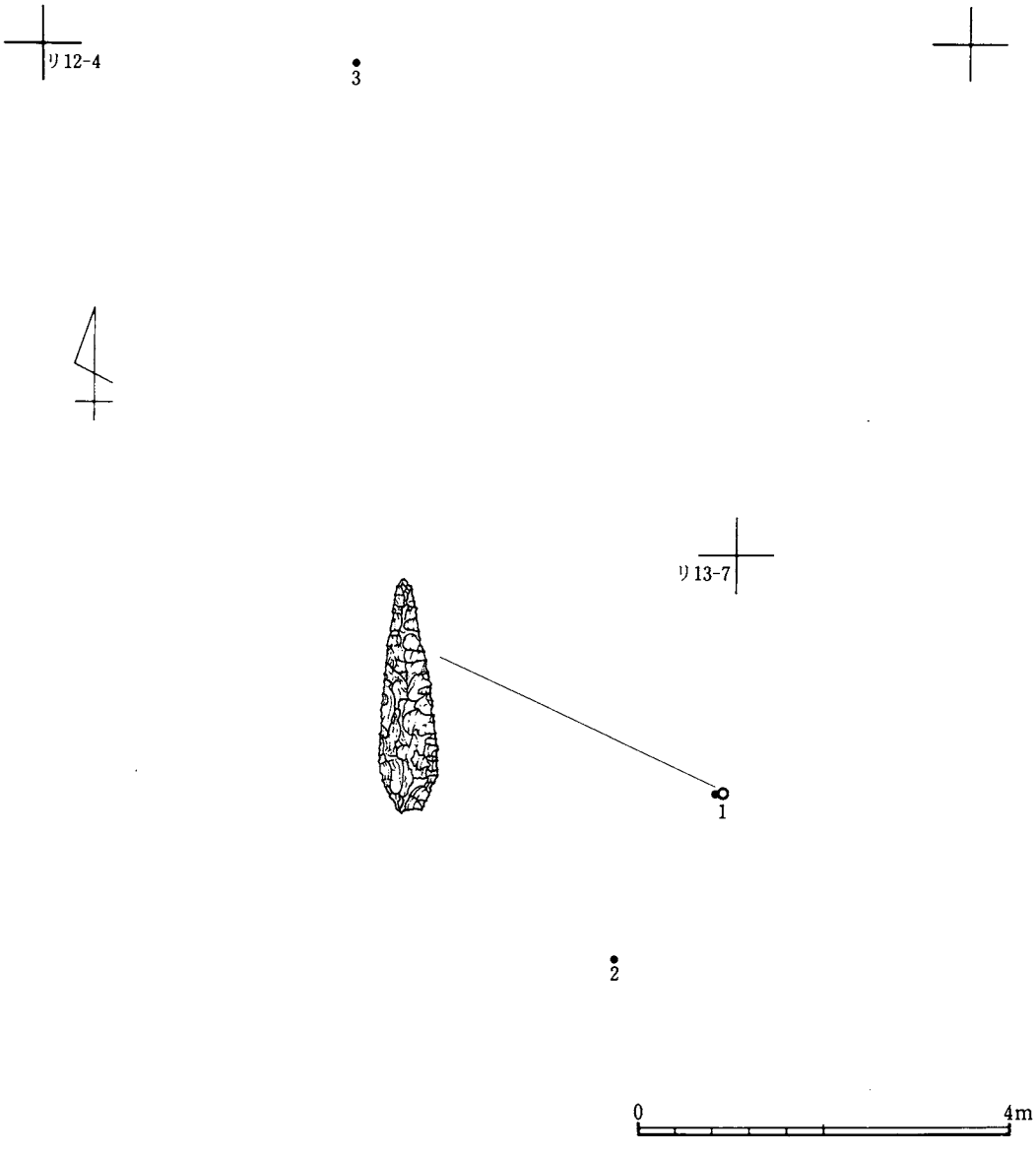
7は7a・7bの接合資料である。

チャートを素材とし、表面右側縁は調整加工痕であり、剝離面は表面左端部と右上端部及び裏面右下端部に認められる。

8は頁岩を素材とする石核で、No.3地点一括遺物である。

9はチャートを素材とする石核で、表裏両面にはほぼ直交する剝離面を有する。

10は砂岩を素材とする大形の石核。



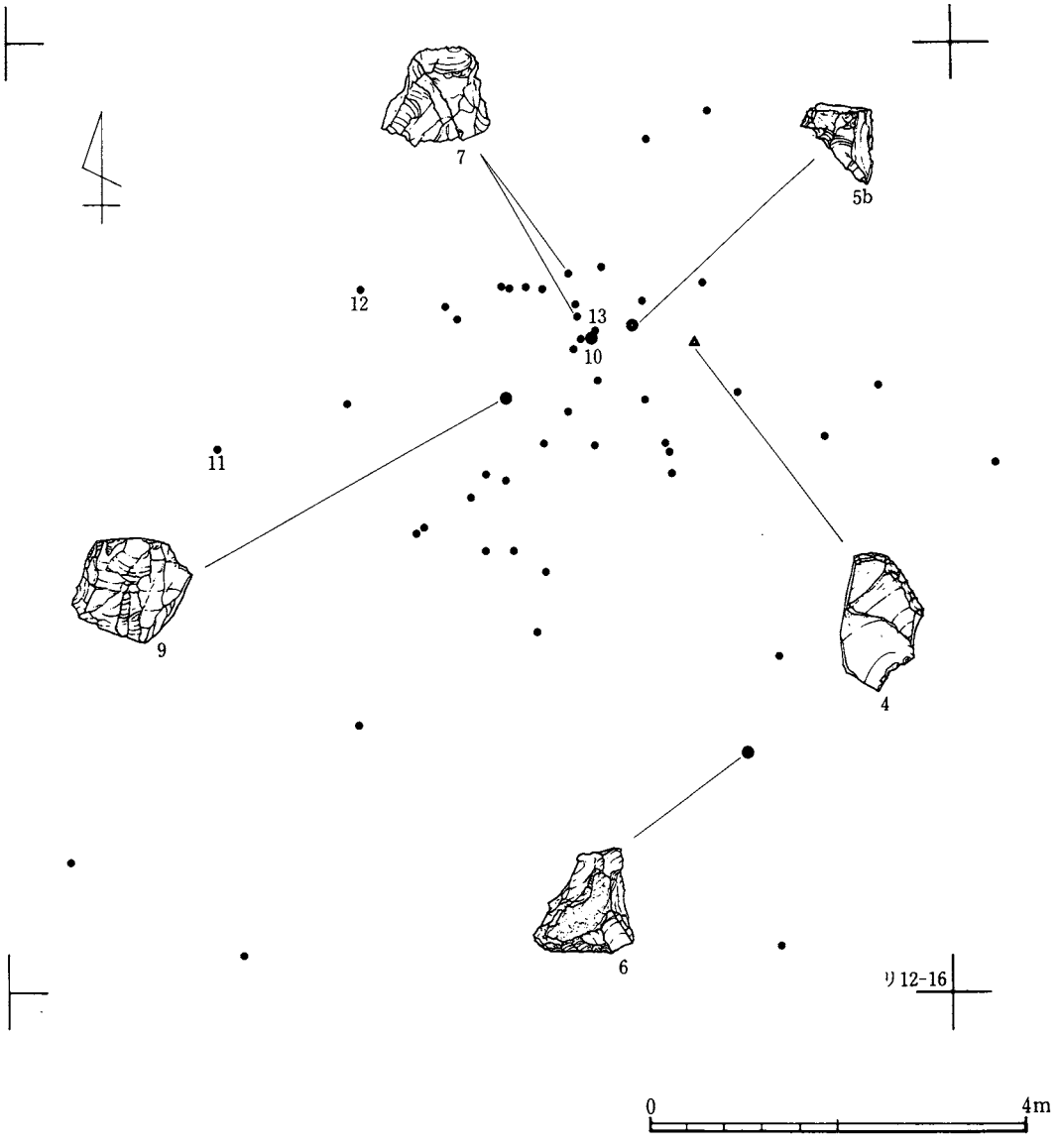
第31図　No.2地点遺物出土状況図

自然面を多く残したまま割れ口断面の中心から放射状に剝離の痕跡が認められる。

2・3・11～13は剝片である。

このうち、2・3はNo.2地点出土であり、2は黒曜石を素材とし、3は頁岩を素材とする。

なお、3は横長剝片の鋭利な端部を調整加工によりつくりだしており、削器様の刃器を意図した



第32図　No.3地点遺物出土状況図

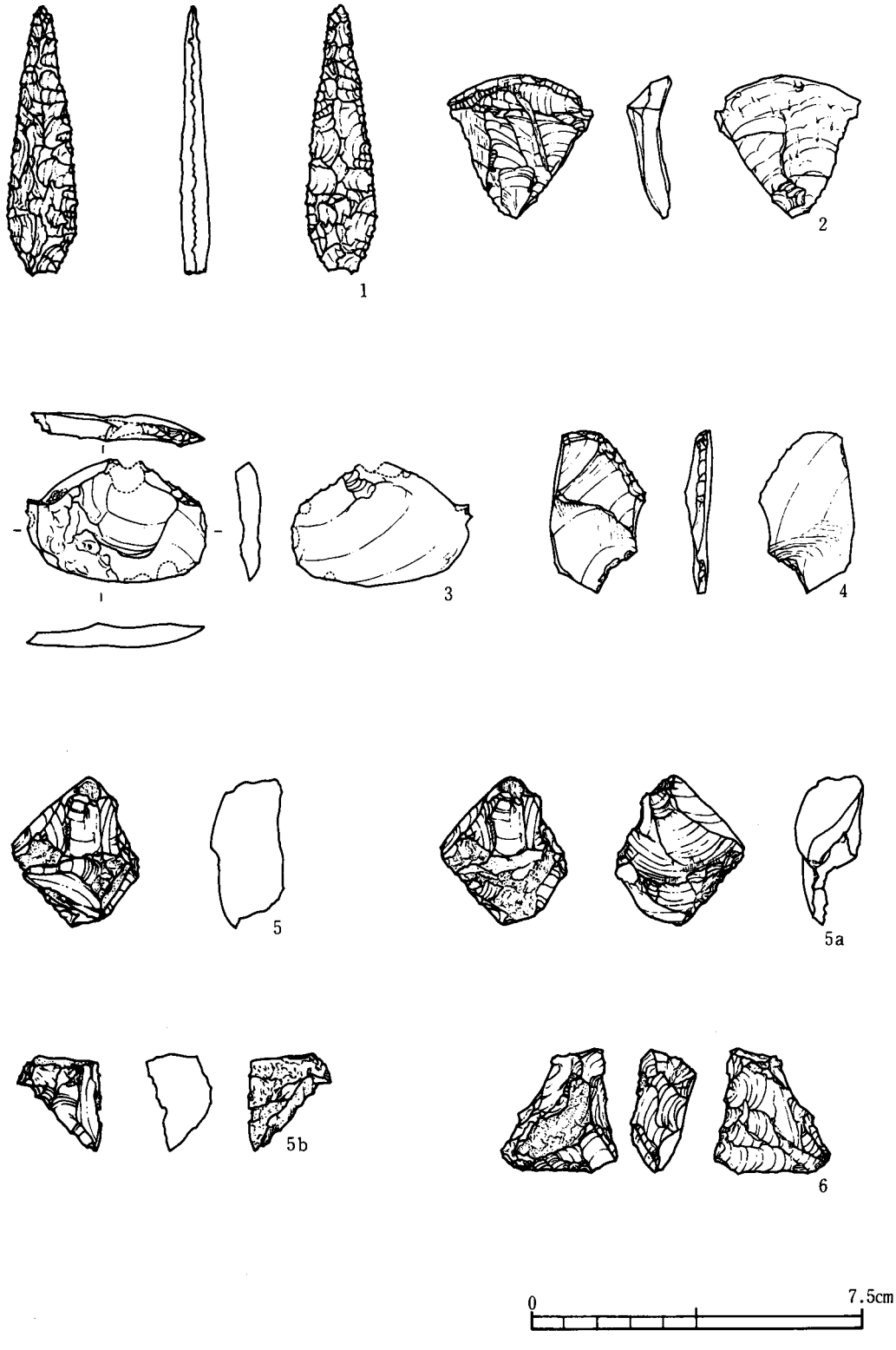
素材剥片と考えられる。

11・12はチャートを素材とする調整剥片。

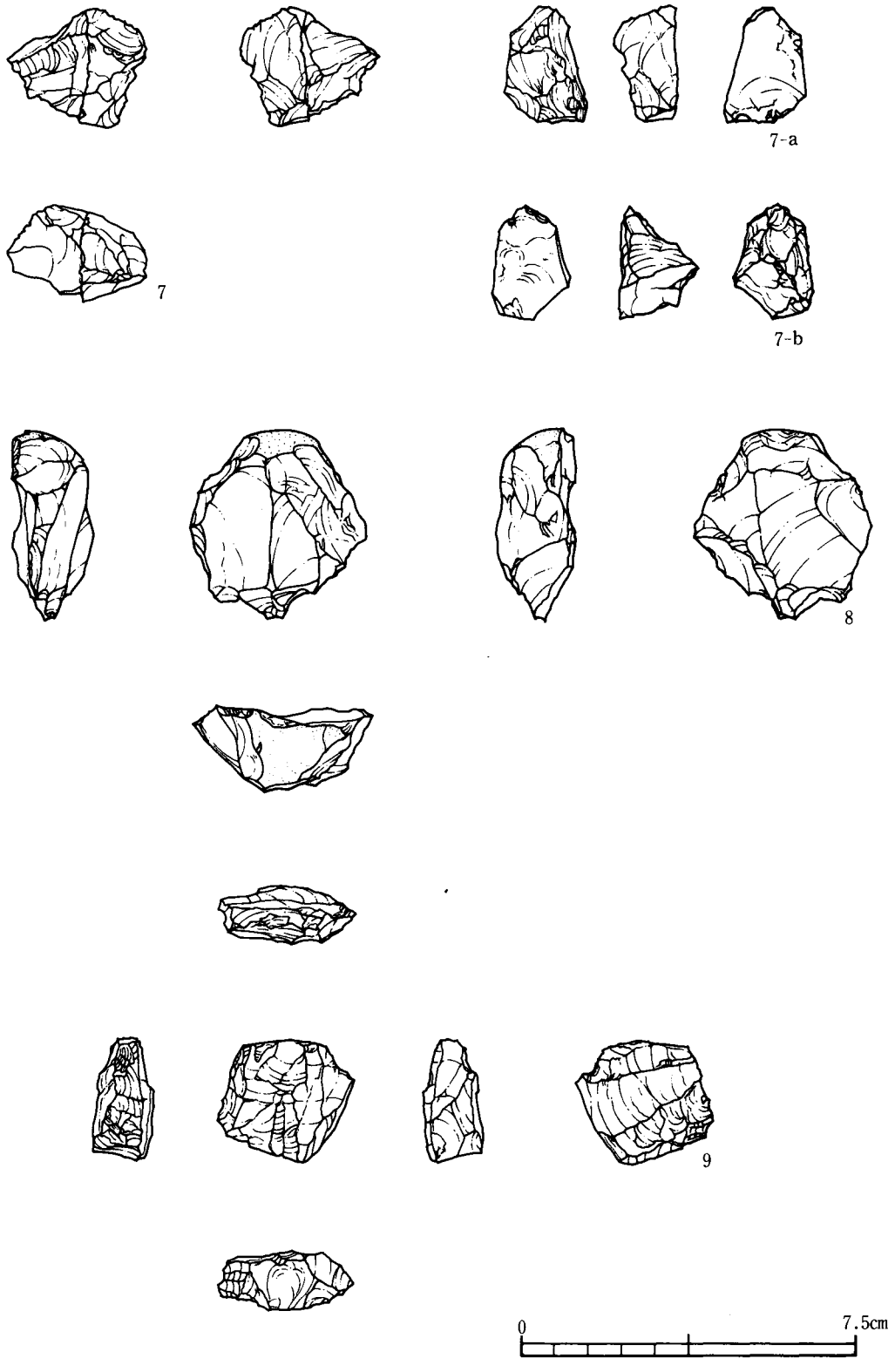
13は頁岩を素材とする縦長タイプの剥片。

また、第36図一括遺物実測図の1・2は黒曜石を素材とする剥片である。

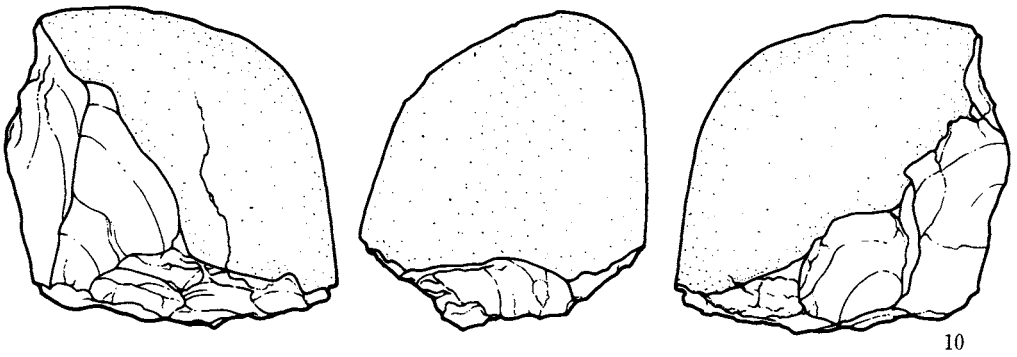
この2点はNo.2地点・No.3地点と直接関係するものではなく、腰巻遺跡の一括遺物である。

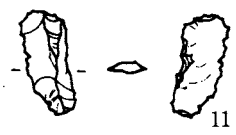


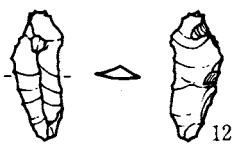
第33図　№2・№3地点出土遺物実測図

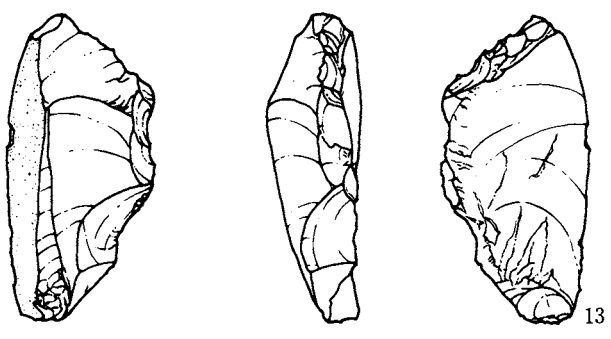


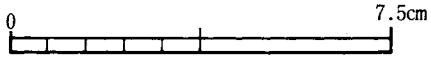
第34図　No.3 地点出土遺物実測図(1)



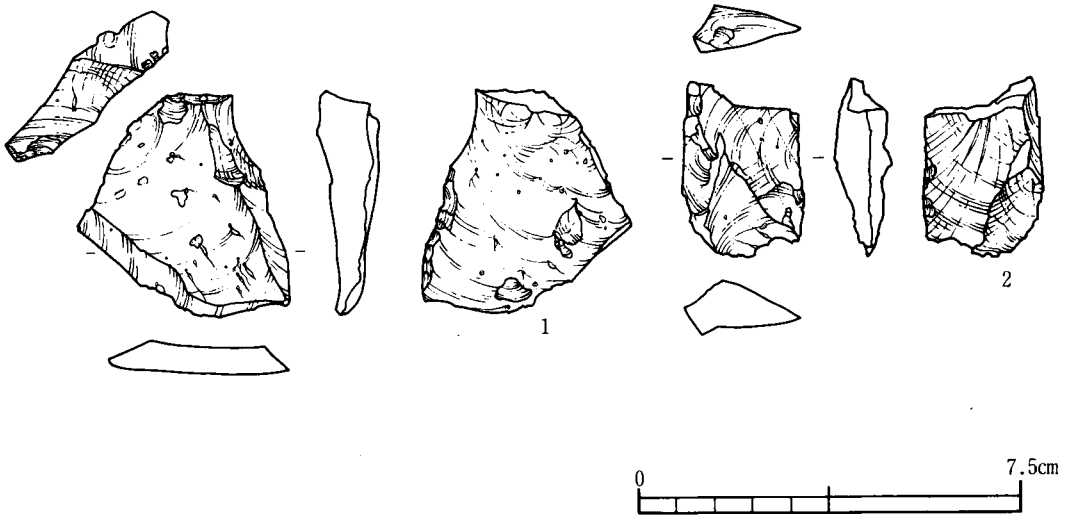








第35図　No.3 地点出土遺物実測図(2)



第36図　一括遺物実測図

第7表

挿図番号	石器名	遺物番号	所属ブロック	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質
1	(有舌) 尖頭器	リ13—7—2	No.2	61.5	16.0	7.0	5.0	安山岩
2	剝片	リ13—7—2	No.2	33.0	33.0	10.0	6.6	黒曜石
3	剝片	リ12—4—68	No.2	27.0	41.0	5.5	6.1	頁岩
4	彫器	リ12—16—7	No.3	36.0	22.0	6.5	3.8	頁岩
5	小型砕片石器	接合		33.0	29.0	17.0		安山岩
a		007一括	No.3	33.0	29.0	15.5	10.1	安山岩
b		リ12—16—5	No.3	21.5	19.0	14.5	3.5	安山岩
6	石核	リ12—16—63	No.3	28.0	27.0	14.5	8.1	チャート
7	石核	接合		27.0	32.0	22.0		
a		リ12—16—36	No.3	26.0	19.0	14.5	6.2	チャート
b		リ12—16—39	No.3	26.0	18.0	18.0	5.5	チャート
8	石核	007一括	No.3	42.0	39.0	19.0	23.4	頁岩
9	石核	リ12—16—26	No.3	27.5	31.0	13.0	11.2	チャート

10	石　　核	リ12—16—33	No.3	63.0	67.0	58.0		砂　　岩
11	剝　　片	リ12—16—51	No.3	19.5	11.5	2.0	3.0	チャート
12	剝　　片	リ12—16—28	No.3	25.5	10.5	2.5	4.0	チャート
13	剝　　片	リ12—16—1	No.3	59.5	29.5	19.0	27.8	頁　　岩
(一括)								
1	剝　　片	チ12—3—2		44.0	41.5	7.0	16.4	黒曜石
2	剝　　片	チ12—3—1		34.5	24.5	11.0	6.7	黒曜石

第2節　縄　文　時　代

概　　観

腰巻遺跡の縄文時代の遺構と明確に判定できるものは検出されなかった。
出土遺物は包含層出土のものが大勢を占め、それらの遺物は具備する諸特徴によりいくつかの分類として扱うことができる。

縄文土器の観察に際し、土器表面の文様と施文具、胎土と含有物、焼成と成形・調整といった特徴に注目し、1類から14類にわたる土器それぞれを拓影図と断面により表すこととする。
さらに細密な区別を要するものには種別をおこない、これを補足した。

1類から14類の土器は時間的前後を示すものではなく、昨今の縄文土器の細分研究同様な施文様の系統化による編年操作を追随するものではない。

出土遺物

1類土器　(第37図、図版15・16)

1類土器は、口唇部に斜めまたは横位の縄文・撚糸文を施文するもの。

A種　(1～10・16～22・24)

撚糸文系土器群のうち、口縁部外面から口唇部にかけて斜めまたは横位の縄文を有するもの。
1～6は胴部に縦位を主とするRL縄文を特徴とする。
7～9・24はRの無節縄文を特徴とし、10は胴部にLの無節縄文を特徴とする。
16～22は撚りがLR縄文となり、胴部施文も斜行するものと縦位のものが見られる。

B種　(11～15・23・25・26)

撚糸文系土器群のうち、口縁部外面から口唇部にかけて斜めまたは横位の撚糸文を有するもの。
11～15・26は施文原体がRの撚糸文であり、口縁部の施文は斜行または横位となっている。
胴部の施文は斜行するものと縦位のものが含まれる。

1～10・16～22は井草式土器、11～15・23・25・26は大丸式土器にそれぞれ該当するものである。

2類土器　(第38・39・40・41図、図版16・17・18)

2類土器は、撚糸文系土器群のうち、口唇部から施文様の消失した一連の土器である。
口縁部以下胴部には、縄文・撚糸文を縦位または斜めに施文される。
1～50は口縁部以下胴部にRの撚糸文を縦位または斜行して施文している。
51～70は口縁部以下の施文がLの撚糸文となり、縦位または斜行して施文している。

71は施文が無節のＬ縄文となり、72～91は口縁部以下の胴部にRL縄文を縦位に施文するグループである。

92～104は胴部にはLR縄文を縦位に施文するグループである。

また、105は胴部にはやや広めのＬ撚糸文を縦位に施文している。

１～104は夏島式土器、105は稲荷台式土器にそれぞれ該当するものである。

３類土器　（第41・42図、図版18・19）

３類土器は胎土中に繊維を含む尖底状の土器群である。

A種　（第41図１）

曲線状の沈線文をもち、胎土中に繊維を含む田戸上層式相当の土器。

B種　（第41図２～４）

指頭によるナデ痕の明瞭な一群で、やはり胎土中に繊維を含む子母口式相当の土器。

焼成はいづれも良好で、内面も比較的丁寧なナデ調整が行なわれている。

C種　（第41図５～第42図）

貝殻による条痕文を土器の表裏両面に施文する広義の茅山式土器である。

胎土には多量の繊維を含み、焼成は良いが器面の荒れは表裏面ともに著しい。

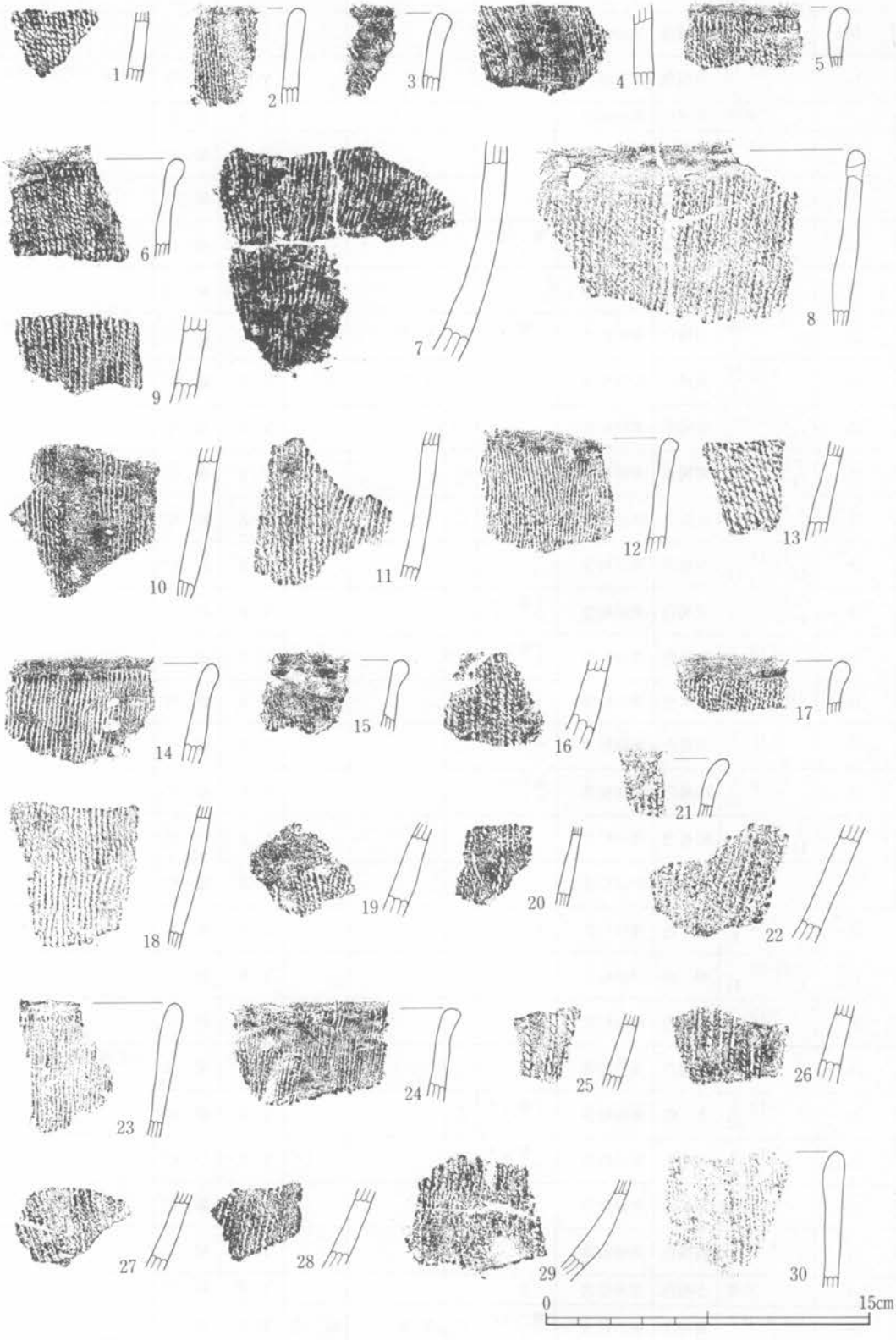
第８表

挿図番号	グリッド 遺物番号	色調	胎土	調整(内面)	焼成	施文				備考
						口唇・口縁	方向	胴部	方向	
１類土器										
1	リ12-4 46	黄褐色	石英粒多含	荒いナデ	○	(外縁)RL	斜行	RL	縦位	
2	リ12-25 1	黄褐色	微砂粒含		△	(外縁)RL	斜行	RL	縦位	口縁のみ外反
3	リ15-23 7	赤褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	(外縁)RL	斜行	RL	縦位	
4	010 78	赤褐色	微砂粒含		○	RL	斜行	RL	縦位	折返し口縁、口唇部扁平
5	ヌ13-2 13	明褐色	微砂粒含		○	RL	斜行	RL	縦位	口唇部扁平
6	ヌ13-11 2	赤褐色	微砂粒含		○	RL	斜行	RL	縦位	口縁部外反、器厚薄
7	ヌ13-6 3	暗褐色	微砂粒含		○	(外縁)J-R	横位	J-R	縦位	口縁のみ外反
8	ヌ12-22 4①	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	J-R	横位	J-R	縦位	
9	ヌ12-22 2①	暗褐色	微砂粒含		△	J-R	斜行	J-R	斜行	折返し口縁
10	010 73	黄褐色	微砂粒含		○			J-R	口縁直立 縦位	
11	ヌ13-10 4	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○			Y-R	斜行	口縁緩やかに外反
12	011 3	黒褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	△	Y-R	横位	Y-R	縦位	

第37図　1類土器

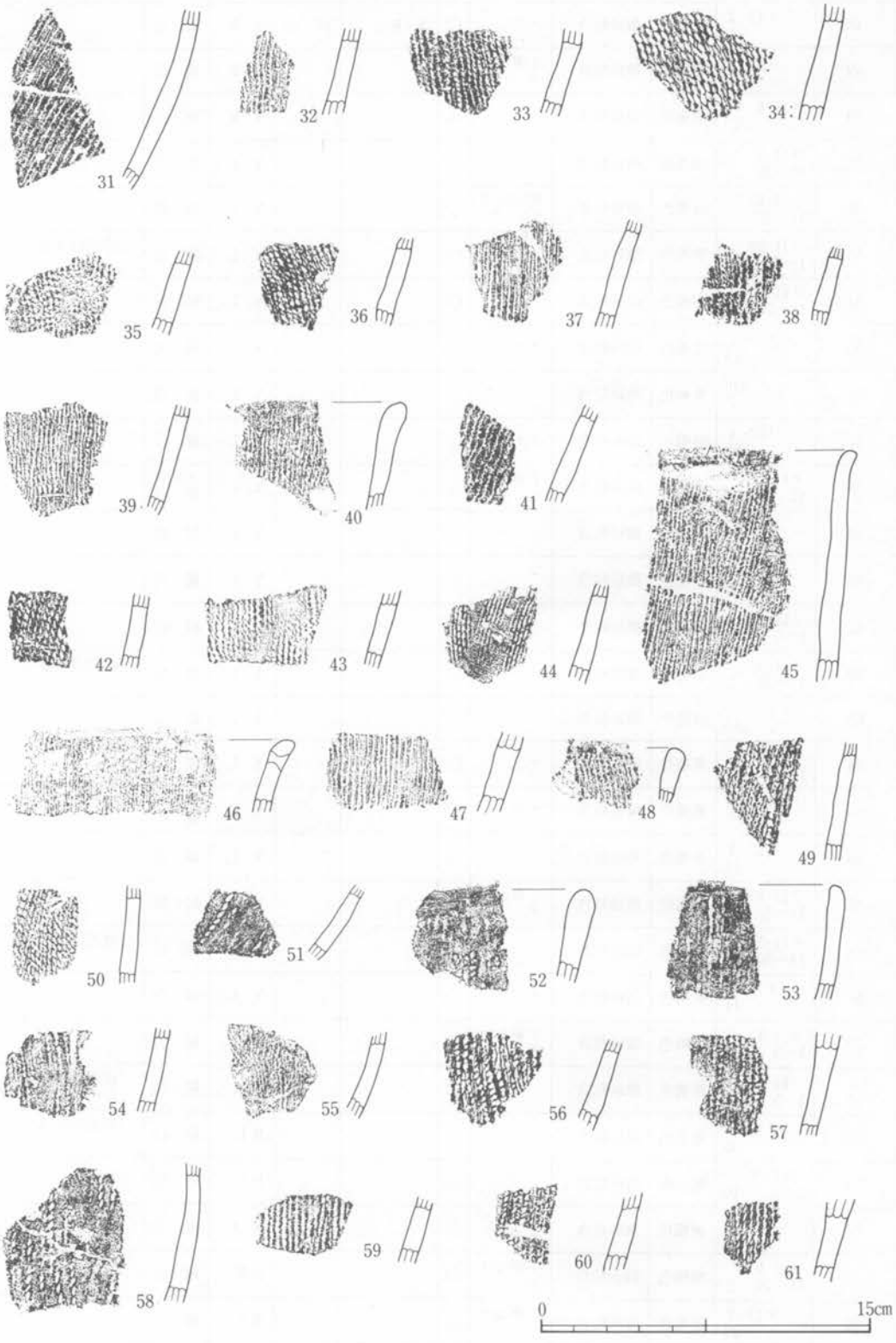
13	リ13-5 1	黄褐色	微砂粒含		○	Y-R	縦　位	Y-R	斜　行	口縁部緩やかに外反
14	チ13-3 6	赤褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	Y-R	横　位			
15	ヌ12-22 16②	暗褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	Y-R	横　位	Y-R	斜　行	
16	004 114	暗褐色	微砂粒含		○	L R	斜　行	L R	斜　行	口縁部緩やかに外反
17	リ15-19 24	暗褐色	微砂粒含		△	L R	斜　行	L R	斜　行	折返し口縁
18	ヌ12-22 3	明褐色	微砂粒含		○	L R	縦　位	L R	縦　位	口縁部緩やかに外反
19	リ15-18 1	赤褐色	微砂粒含		○	L R	斜　行	L R	縦　位	口縁部外反
20	リ13-12 3	褐　色	微砂粒含	斜方向の丁寧なナデ	○	L R	斜　行			
21	リ15-19 3	赤褐色	微砂粒含		○	L R	斜　行			口縁部外反、胴部ミガキ
22	ヌ12-13 1	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	L R	斜　行	L R	縦　位	
23	リ15-23 1	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○			Y-R	縦　位	口縁部押圧痕
24	リ12-24 2	黄褐色	岩石粒大を含む		△	J-R	斜　行	J-R	斜　行	口唇部のみ外反
25	ヌ12-22 4②	黄褐色	微砂粒含	丁寧なミガキ	○			Y-L	縦　位	
26	ヌ13-8 55	暗褐色	微砂粒含		△	Y-R	斜　行	Y-R	縦　位	口縁直立

挿図番号	グリッド 遺物番号	色調	胎　土	調整(内面)	焼成	施　文				備　考
						口唇・口縁	方　向	胴　部	方　向	
2類土器										
1	015 375	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○			Y-R	縦　位	
2	リ12-8 28	暗褐色	微砂粒含		△			Y-R	縦　位	口縁部直立
3	チ14-17 6	暗褐色	微砂粒含		△			Y-R	斜　行	口縁部緩やかに外反
4	ヌ13-3 43	黄褐色	石英細粒を含む		○			Y-R	斜　行	
5	ヌ13-3 11	黄褐色	微砂粒含		○			Y-R	縦　位	口縁部緩やかに外反
6	ヌ13-3 23	暗褐色	微砂粒含		○			Y-R	縦　位	口唇部のみ外反
7	リ12-25　36 1　1	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ				Y-R	縦　位	
8	ヌ13-3　ヌ13-8 34　25	暗褐色	微砂粒含		○			Y-R	斜　行	口縁部直立補修孔あり
9	ヌ12-22 4	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○			Y-R	縦　位	
10	007 65	黄褐色	微砂粒含 大粒の岩石含		△			Y-R	縦　位	
11	008 3	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○			Y-R	縦　位	断面に2次焼成痕あり
12	ヌ13-1 2①	黄褐色	微砂粒含		○			Y-R	斜　行	口縁部わずかに外反
13	リ11-15 1～5　9①	暗褐色	微砂粒含		△			Y-R	斜　行	
14	ヌ13-3 37	黄褐色	微砂粒含		○			Y-R	縦　位	口縁部わずかに外反


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
21
18
19
20
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0
15cm

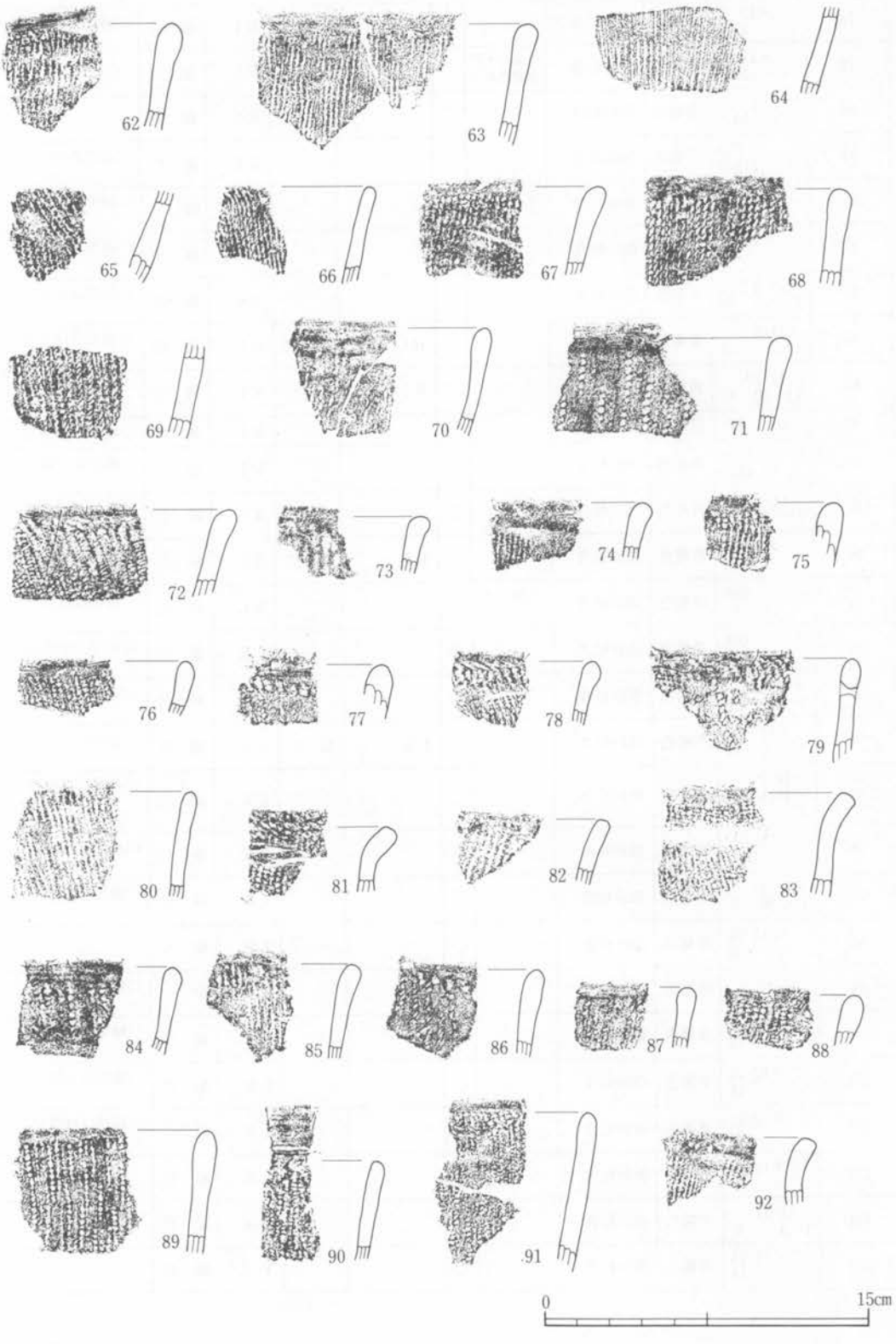
第38図　2類土器(1)

15	ヌ13-3 43	黄褐色	微砂粒含		○			Y-R	縦　位	口縁部ほぼ直立
16	ヌ12-22 4	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○			Y-R	縦　位	
17	ヌ12-16 2	黄褐色	微砂粒含		○			Y-R	縦　位	口縁部わずかに外反
18	表採	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○			Y-R	縦　位	
19	ヌ13-7 2	黄褐色	微砂粒含		△			Y-R	縦　位	
20	ヌ13-3 17	黄褐色	微砂粒含		○			Y-R	縦　位	
21	リ15-23 11	暗褐色	微砂粒含	横方向のナデ	○			Y-R	縦　位	
22	ヌ13-2 1	黄褐色	微砂粒含		△			Y-R	縦　位	
23	036 1	暗褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	Y-R	縦　位	Y-R	縦　位	口縁部わずかに外反
24	ヌ12-21 2	黄褐色	微砂粒含		○	Y-R	縦　位	Y-R	縦　位	口縁部やや外反
25	ヌ11-11 1～5　5	黄褐色	微砂粒含		○			Y-R	縦　位	
26	ヌ11-8 11～20　1	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○			Y-R	縦　位	
27	リ11-15 1～5　1	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○			Y-R	縦　位	
28	リ11-14 11～20　11	黄褐色	微砂粒含		○			Y-R	縦　位	
29	リ11-25 1～5　21	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○			Y-R	縦　位	
30	ヌ13-3 12	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○			Y-R	縦　位	
31	リ12-4　リ12-4 28　56	黄褐色	微砂粒含		△			Y-R	斜　行	
32	リ16-9 1	暗褐色	微砂粒含	ナデ	○			Y-R	縦　位	
33	ヌ13-3 20	暗褐色	微砂粒含	横方向のナデ	○			Y-R	縦　位	
34	ヌ11-6 11～20　1	暗褐色	微砂粒含		○			Y-R	縦　位	
35	ヌ13-3 16	黄褐色	微砂粒含		△			Y-R	縦　位	
36	ヌ13-3 8	褐　色	微砂粒含	ナデ	○			Y-R	縦　位	
37	リ11-20 1～5　11	褐　色	微砂粒含		○			Y-R	縦　位	
38	リ13-5 6	赤褐色	微砂粒含		△			Y-R	縦　位	
39	リ12-16 76	赤褐色	微砂粒含		○			Y-R	縦　位	岩石細粒を含む
40	ヌ13-3 32	赤　色	微砂粒含	丁寧なナデ	○			Y-R	縦　位	
41	ヌ13-3 43②	褐　色	微砂粒含	丁寧なナデ	○			Y-R	斜　行	
42	リ12-4 48	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○			Y-R	縦　位	
43	ヌ12-22 3	明褐色	微砂粒含		△			Y-R	縦　位	
44	表採	赤褐色	微砂粒含	ナデ	○			Y-R	縦　位	
45	リ12-20　リ12-25 2　1	黄褐色	微砂粒含	横方向のナデ	○	Y-R	縦　位	Y-R	縦　位	
46	ヌ12-21 1	暗褐色	微砂粒含	横方向のナデ	○	Y-R	縦　位	Y-R	縦　位	


31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
0
15cm

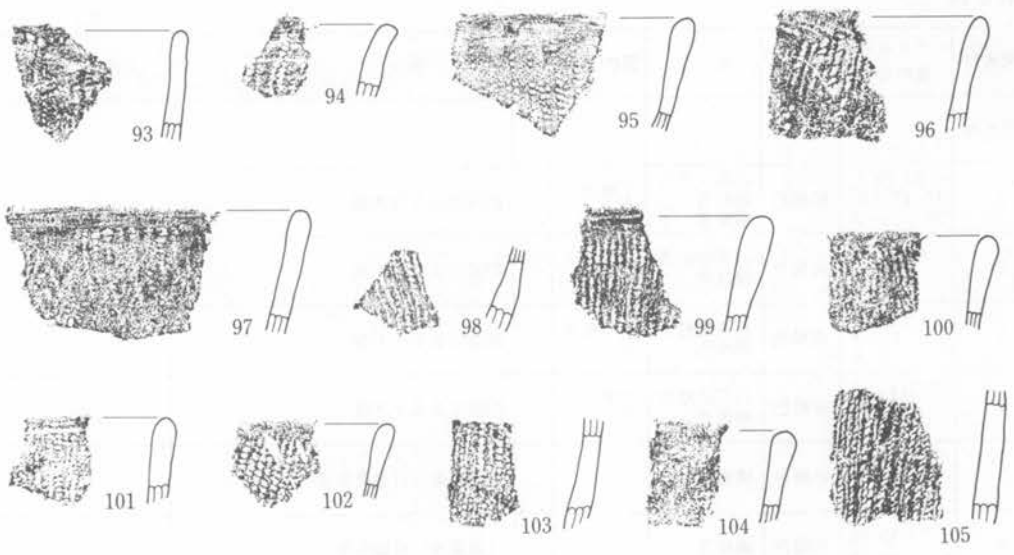
第39図　2類土器(2)

47	ヌ12-21 2	暗褐色	微砂粒含		△			Y-R	縦　位	
48	ヌ13-2 4	赤褐色	微砂粒含	ナデ	○	Y-R	縦　位	Y-R	縦　位	
49	リ13-4 2	明褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○			Y-R	縦　位	
50	ヌ11-6 1～5　20	黄褐色	微砂粒含		△			Y-R	縦　位	
51	リ11-5 11～20　7	黄褐銀	微砂粒含		△			Y-L	斜　行	
52	リ11-15 11～20　3	暗褐色	微砂粒含	横方向の丁寧なナデ	○			Y-L	縦　位	
53	リ11-20 1～5　9	暗褐色	微砂粒含		○			Y-L	縦　位	口縁部ほぼ直立
54	リ11-5 11～20　1	明褐色	微砂粒含		○			Y-L	縦　位	
55	ヌ13-2 13	赤褐色	微砂粒含	ナデ	△			Y-L	縦　位	
56	020 2	黄褐色	微砂粒含		△			Y-L	縦　位	
57	リ12-4 90	暗褐色	微砂粒含	ナデ	○			Y-L	縦　位	
58	ヌ11-1 11～20　3、4	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○			Y-L	(底部付近) 縦　位	
59	ヌ12-17 11	赤褐色	微砂粒含		△			Y-L	縦　位	
60	ヌ12-22 4	黄褐色	微砂粒含		△			Y-L	縦　位	
61	リ11-15 1～5　11	黒褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○			Y-L	縦　位	
62	リ11-9 11～20　1	暗褐色	微砂粒含		○			J-L	縦　位	口縁部ほぼ直立
63	ヌ13-3　7 1　0000	暗褐色	微砂粒含		○			J-L	縦　位	
64	ヌ11-6 11～20　3	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○			Y-L	縦　位	
65	ヌ13-3 43⑦	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○			Y-L	斜行＋ 縦　位	
66	ヌ13-3 43	黄褐色	微砂粒含		△			Y-L	縦　位	
67	リ11-15 11～20　2	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○			Y-L	縦　位	
68	ヌ11-7 11～20　3	黄褐色	微砂粒含		○			Y-L	縦　位	口縁部ほぼ直立
69	ヌ13-6 11	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○			Y-L	縦　位	
70	ヌ11-1 1～5　6	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○			Y-L	縦　位	
71	リ11-21 1～5　1	黄褐色	微砂粒含		○			J-L	縦　位	口縁部ほぼ直立
72	ヌ13-3 35	黄褐色	微砂粒含		○			RL	縦　位	口唇部やや外反
73	リ11-20 1～5　10	褐　色	微砂粒含		△			RL	縦　位	
74	ヌ13-2 7	黄褐色	微砂粒含	横方向のナデ	○			R-L	縦　位	
75	リ11-9 11～20　2	暗褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○			RL	縦　位	
76	ヌ13-3 25	赤褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○			RL	縦　位	
77	リ12-13 19	褐　色	微砂粒含	ナデ	○			RL	縦　位	

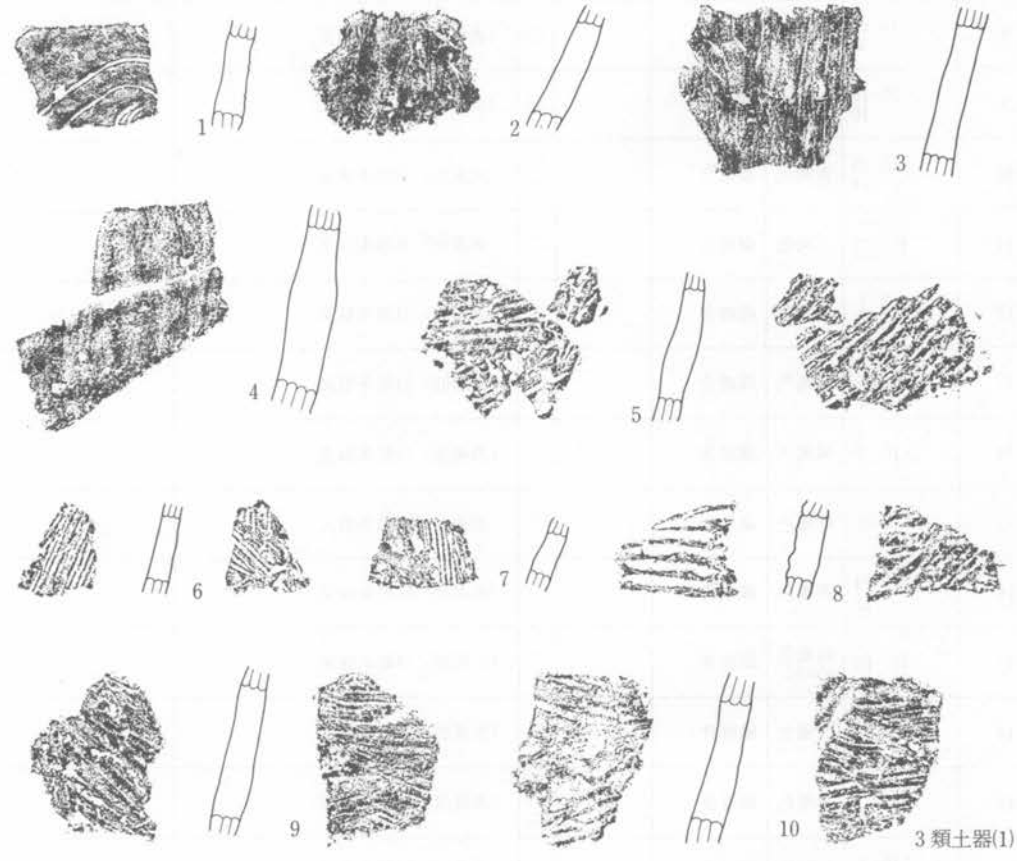

62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
0
15cm

第40図　2類土器(3)

78	ヌ13-2 19①	黄褐色	微砂粒含		○			RL	縦　位	口縁部ほぼ直立
79	ヌ13-2 19②	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ 補修孔あり	○			RL	縦　位	
80	ヌ13-2 19③	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○			RL	縦　位	
81	009 110②	茶褐色	微砂粒含		○			RL	縦　位	口縁部外反
82	リ13-10 8	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○			RL	縦　位	口縁部ほぼ直立
83	チ13-3 6	黄褐色	微砂粒含		○			RL	縦　位	口縁部外反
84	リ11-4 1～5　2	黄褐色	微砂粒含		○			RL	縦　位	口縁部ほぼ直立
85	ヌ11-6 1～5　12	黄褐色	微砂粒含		○	RL	縦　位	RL	縦　位	口縁部ほぼ直立
86	リ11-20 11～20　6	黄褐色	微砂粒含		○	RL	縦　位	RL	縦　位	口縁部ほぼ直立
87	表　採	暗褐色	微砂粒含		○			RL	縦　位	口縁部ほぼ直立
88	ヌ13-3 43②	赤褐色	微砂粒含		○			RL	縦　位	口縁部ほぼ直立
89	ヌ11-11 11～20　12	黄褐色	微砂粒含		○			RL	縦　位	口縁部ほぼ直立
90	ヌ13-3 43①	赤褐色	微砂粒含		○	RL	縦　位	RL	縦　位	口縁部内側に沈線 口縁部ほぼ直立
91	009 65、110	暗褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○			RL	縦　位	口縁部ほぼ直立
92	004 118	黄褐色	微砂粒含		○			LR	縦　位	口縁部やや外反
93	ヌ11-1 1～5　3	黄褐色	微砂粒含		○			LR	縦　位	口縁部ほぼ直立
94	ヌ13-3 43	茶褐色	微砂粒含		○	LR	縦　位	LR	縦　位	口唇部のみ外反
95	リ10-20 5、10、15、20、25　8	暗褐色	微砂粒含		○			LR	縦　位	口縁部ほぼ直立
96	ヌ13-1 15①	黄褐色	微砂粒含		△			LR	縦　位	口縁部ほぼ直立
97	ヌ11-11 11～20　5	暗褐色	微砂粒含		○			LR	縦　位	口縁部ほぼ直立
98	リ15-24 30	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○			LR	縦　位	
99	リ11-14 1～5　3	暗褐色	微砂粒含		○			LR	縦　位	口縁部ほぼ直立
100	ヌ13-8 28	黄褐色	微砂粒含		○			LR	縦　位	口縁部ほぼ直立
101	ヌ12-22 16	茶褐色	微砂粒含		○			LR	縦　位	口縁部ほぼ直立
102	ヌ12-22 4	黄褐色	微砂粒含		○			LR	縦　位	口縁部ほぼ直立
103	ヌ13-1 2	暗褐色	微砂粒含		△			LR	縦　位	
104	ヌ11-21 1～5　8	明褐色	微砂粒含		○			LR	縦　位	口縁部ほぼ直立
105	リ12-13 18	茶褐色	微砂粒含		○			Y-L	縦　位	



2類土器(4)



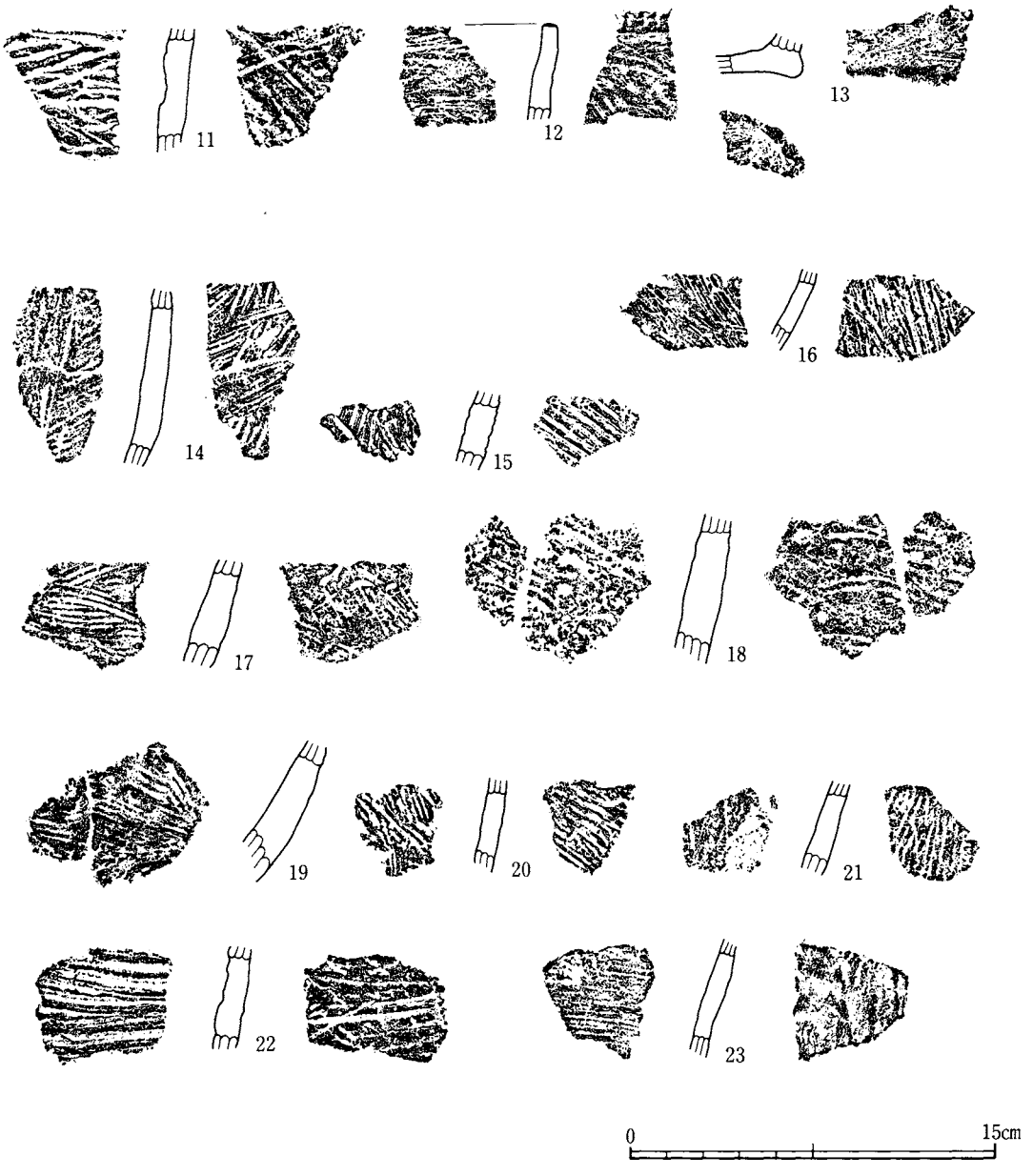
3類土器(1)

0 15cm

第41図　2類(4)・3類土器(1)

第8表

挿図番号	グリッド 遺物番号	色　調	胎　土	調整(内面)	焼成	施　　文	備　　考
3類土器							
1	リ10-19 5、 10、15、20、 25　　3	暗褐色	石英・長石 細粒含 繊維含	丁寧なナデ	○	曲線状の平行沈線	
2	リ11-10 1	黄褐色	石英細粒含 繊維含	丁寧なナデ	○	指頭によるナデ痕	
3	ヌ11-6 1～5 8	黄褐色	石英細粒含 黄褐色	丁寧なナデ	○	指頭によるナデ痕	
4	リ11-21 18	赤褐色	石根細粒含 繊維含	丁寧なナデ	○	指頭によるナデ痕	
5	リ15-15 2	赤褐色	繊維含		○	（表裏面）貝殻条痕文	
6	リ15-10 18	赤褐色	繊維含		○	（表裏面）貝殻条痕文	
7	リ15-19 20	茶褐色	繊維含		○	（表裏面）貝殻条痕文	
8	リ15-22 2	茶褐色	繊維含		○	（表裏面）貝殻条痕文	
9	リ25-19 16	赤褐色	繊維含		○	（表裏面）貝殻条痕文	
10	リ15-25 24	黄褐色	繊維含		○	（表裏面）貝殻条痕文	
11	E一括	茶褐色	繊維含		○	（表裏面）貝殻条痕文	
12	リ15-7 一括	黒褐色	繊維含		○	（表裏面）貝殻条痕文	
13	リ11-5 1～5 1	黄褐色	繊維含		○	（表裏面）貝殻条痕文	
14	リ15-7	黒褐色	繊維含		○	（表裏面）貝殻条痕文	
15	一括	赤褐色	繊維含		○	（表裏面）貝殻条痕文	
16	リ15-24 22	赤褐色	繊維含		○	（表裏面）貝殻条痕文	
17	B一括	暗褐色 (内面黒色)	繊維含		○	（表裏面）貝殻条痕文	
18	084 12．8	赤褐色	繊維含		○	（表裏面）貝殻条痕文	
19	089 98．99	赤褐色	繊維含		(底部付近) △	（表裏面）貝殻条痕文	
20	リ16-4 2	茶褐色	繊維含		○	（表裏面）貝殻条痕文	
21	チ14-14 1	黄褐色	繊維含		○	（表裏面）貝殻条痕文	



第42図　第３類土器(2)

22	リ15-18 2	暗褐色	繊維含		○	(表裏面) 貝殻条痕文	
23	リ15-39	暗褐色	繊維含		○	(表裏面) 貝殻条痕文	

4類土器　(第43図、図版19・20)

4類土器の底部は平底で、器面の施文具に竹管及び羽状または斜行の縄文を使用する土器群である。

1～10は半截竹管を用いたC字状刺突文が見られ、口縁端部は厚味を保ちながら単純におわるものと、端部付近のつままれた扁平となるものとが観察される。

11～19は、口縁部以下に斜行縄文を施文しており、このうち11～13はLR縄文、14～19はRL縄文となっている。

いづれも残存する土器片からは、斜行縄文が羽状縄文かは断定し難い。

4類土器は黒浜式土器として理解されるが、いづれも胴上半部の文様構成を示すものと考えられ、胴下半部の文様については出土土器片からは明らかでない。

また、他遺跡においてみられる本類相当土器の多様な施文様は本遺跡に関する限り見られない。

5類土器　(第44図1・2、図版20)

5類土器は本遺跡では2点のみの出土であるが、諸磯式相当の土器である。

1は、直立する口縁に平行して穿孔が廻る。

胎土はキメのこまかい粒子が均一で、器面のナデ調整も丁寧である。

2は1の胎土と同様であるが、器面は丁寧なナデ調整の後おそらく半截竹管によると考えられる曲線状の平行沈線文を施文する。

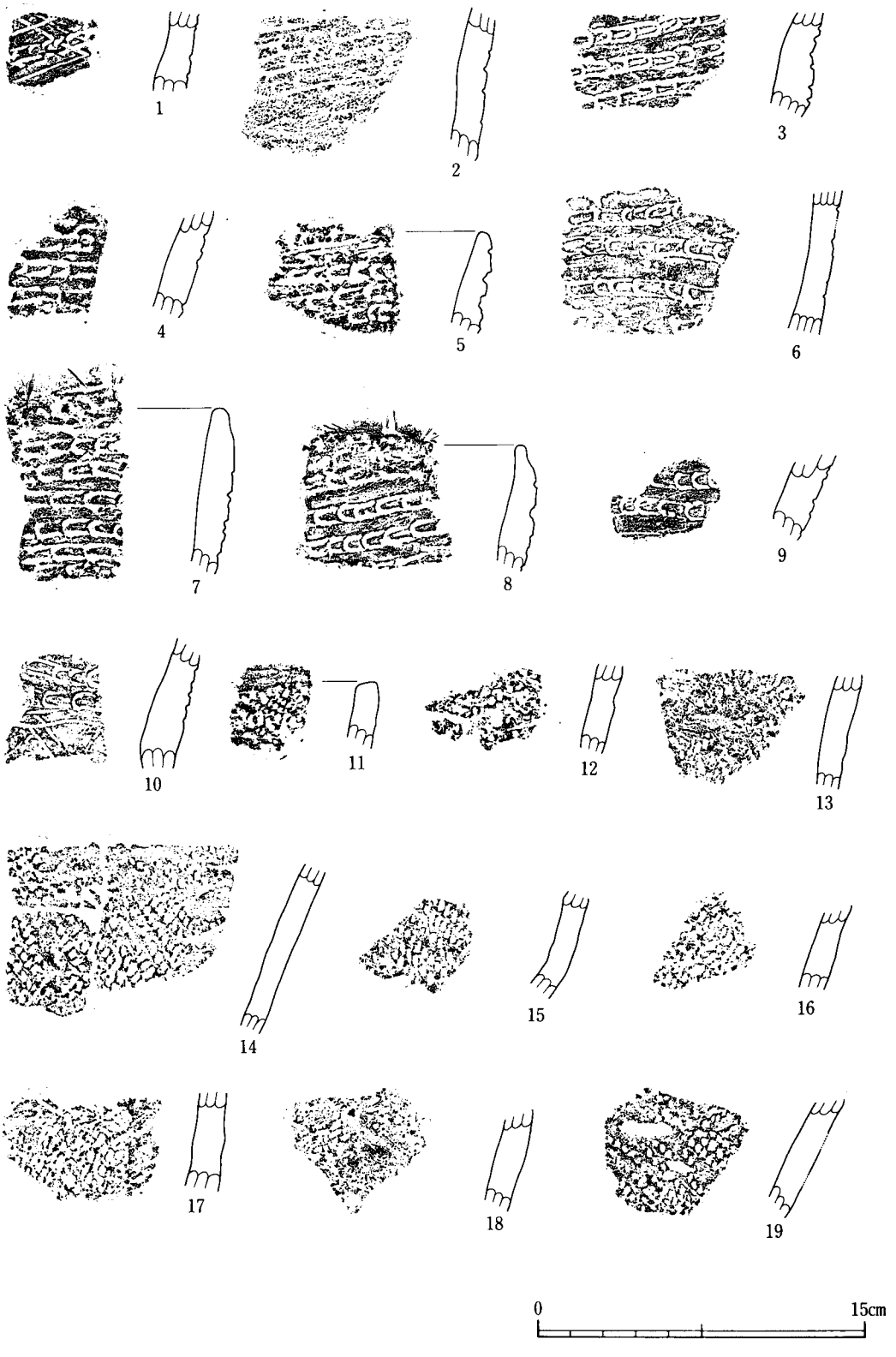
6類土器　(第44・45・46図、図版20・21・22)

6類土器は、東関東地域に広く分布する具殻文系の施文を特徴とする土器群である。

1～6は貝殻腹縁をたてた状態で連続刺突するもので、上下数単位の施文の間に半截竹管による平行沈線が走る。

7～9では貝殻の腹縁の支点をずらしながらジグサグ文様を構成し、10の底部付近では貝殻腹縁を密に連続刺突し、さらに11では磨消貝殻文とでも言えそうな沈線区画内にナデ調整による無文部分を描き出し、12・13では7～9の波状貝殻文とはやや異なるモチーフの具殻腹縁によるジグザグ文様が見られるなど、本類には浮島式土器に特徴物な様々な貝殻文の展開がみられる。

浮島III式土器から興津式土器にかけて、波状貝殻文とは異なる施文1回ごとに器面から貝殻をはなす方法がとられることが知られており、本遺跡においても、こうした影響を受けているもの



第43図　4類土器

と考えられる。

また、13は2条の沈線文によって上下がはさまれた諸磯a式土器のモチーフに類似するが、波状線が沈線ではなく、貝殻によることが異なる。

14・15は緩い撚りのRの撚糸文と、Lの撚糸文である。

16～44は半截竹管による条線文及び沈線文の土器であるが、16～19は無文地に平行沈線文という浮島Ⅰb式相当の土器である。

21～23は口縁部付近に輪積み痕を押圧したようなヒダを残し、その上から半截竹管で押し付けたように施文している。

これらの土器の胴部は無文となるようである。

27・28は、地文に撚糸文を有し諸磯a式土器に似たモチーフの古式の浮島Ⅰa式に相当する土器で、口縁部に平行する1条の押引沈線とそれにつづく山形ないしは菱形のモチーフをとる平行沈線文が見られる。

29・30は粗い平行沈線文の組違いの単位巾の構成文様、31・32も同一個体と考えられるが、集合沈線のみの文様構成は、むしろ諸磯C式土器に類似する十三菩提系統の印象を与えている。

37は口縁部外縁に半截竹管による縦位の平行沈線を有し、40・42では平行沈線が肋骨状に交差し、41では弧状の平行沈線と横位の集合沈線の交差がみられる。

45は地文に横位の撚糸文をもち、半截竹管による押引沈線を施文する浮島Ⅰa式相当の土器。

46～49は、半截竹管を斜めに連続刺突しており、この部分以外の施文様については明らかでないが、浮島III式相当の土器と考えられる。

50・54は浮島II式土器に見られる貝殻背面による押引施文、55も同じく貝殻による施文であるが、腹縁をコンパス的に展開して施文する構図をとる。

本類に限らず、腰巻遺跡においては土器の全てが小破片であり、完形土器としての文様構成を観察することはできない。

したがって、貝殻文系の施文の一部を見てその系譜や時間的前後を論ずることは控えたいが、本類全般的な観察からは浮島式、興津式とされる土器群の周辺に位置するものであることが確認された。

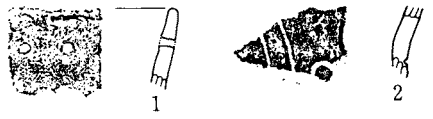
7類土器　(第46・47図、図版22・23)

7類土器は、前期末から中期初頭にかけて、特に浮島・興津両系統の土器に伴う、斜行縄文を特徴とする土器群である。

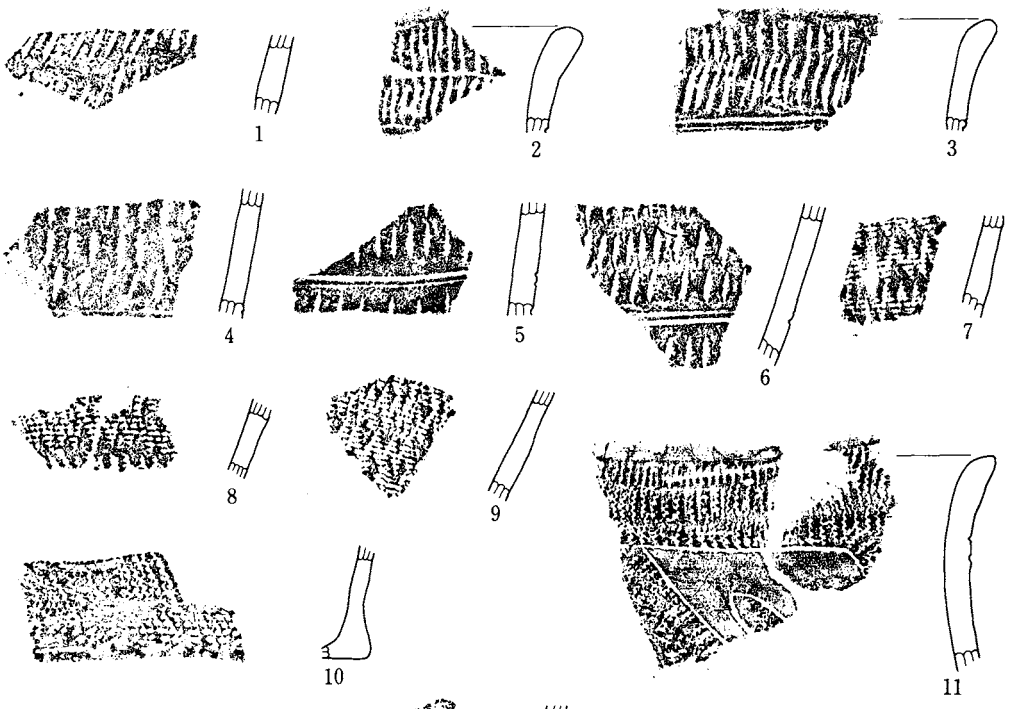
1～8は、胴部にRLの斜行縄文と口唇部に同じ施文具による斜行縄文が見られる。

器厚は厚めで、口唇部は丸味を持つつくりとなっている。

9～12は、胴部のRL斜行縄文は同じであるが、口唇部には貝殻腹縁による刺突がみられ、12は口縁が折返し様となっており、1～8の土器群は22～29に見られる横位の結節回転文の施文土



5類土器



6類土器(1)

0 15cm

第44図　5類・6類土器(1)

器を伴出する報告例もある。

30～35は結節仕様による羽状縄文の施文様であるが、30～34の結節部分からは明瞭ではなく、35のみその特徴を示している。

結節部分の上部は LR、下部は RL の縄文を配している。

36は、胴部に無節縄文を持ち、口唇部には RL の押圧縄文が見られる。

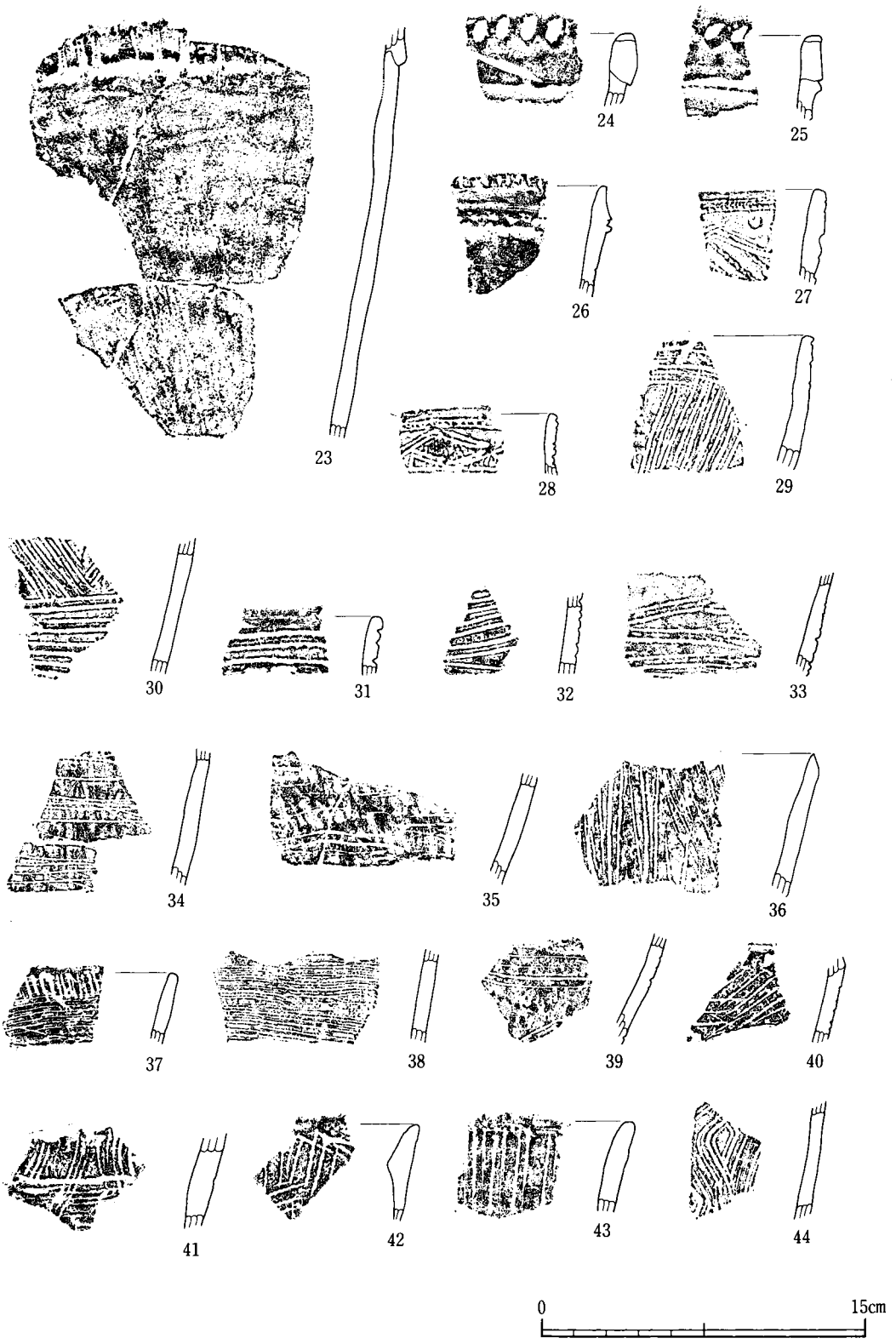
本類土器を概観すれば、1～21の斜縄文の土器は粟島台遺跡・木の根遺跡、古和田遺跡、復山谷遺跡などの県内遺跡の他、茨城県伏見遺跡、同三反田遺跡といった近県しかも東部関東地域の浮島式土器系統の土器との伴出する関係において注目されている。

また、22～29は下小野式土器類似の土器として理解されるが、下小野式土器自体中期五領ヶ台式土器との線引きの不明確な部分があり、本類では1～21の斜縄文系土器も含めて、前期末から中期初頭に至る過渡的な施文様を包含する土器のバラエティーの一つとして理解するに留めたい。

なお、本類で扱われた斜縄文系土器について、撚糸圧痕文の土器と区別し前者を粟島台Ⅰ式土器、後者を粟島台Ⅱ式土器とする分類も示されているが、浮島系の土器を伴出する点において三反田遺跡と共通する要素をもちあわせており、本類ではあえて呼称には固執しないものとする。

第9表

挿図番号	グリッド 遺物番号	色　調	胎　土	調整(内面)	焼成	施　　文	備　　考
4類土器							
1	リ15-24 17	茶褐色	繊維含		○	C字状爪形刺突文 斜格子沈線	器厚大
2	B一括②	暗褐色	繊維含		○	C字状押引沈線	器厚大
3	B一括①	茶褐色	繊維含		○	C字状押引沈線	器厚大
4	リ15-25 17	茶褐色	繊維含		○	C字状押引沈線	器厚大
5	リ15-25 16	黄褐色	繊維含		○	C字状押引沈線	器厚大
6	リ15-15 1	茶褐色	繊維含		○	C字状押引沈線	器厚大
7	リ15-19 1	茶褐色	繊維含		○	C字状押引沈線	器厚大
8	リ15-24 62	茶褐色	繊維含		○	C字状押引沈線	器厚大
9	リ15-24 64	茶褐色	繊維含		○	C字状押引沈線	器厚大
10	B一括③	暗褐色	繊維含		○	C字状押引沈線	器厚大

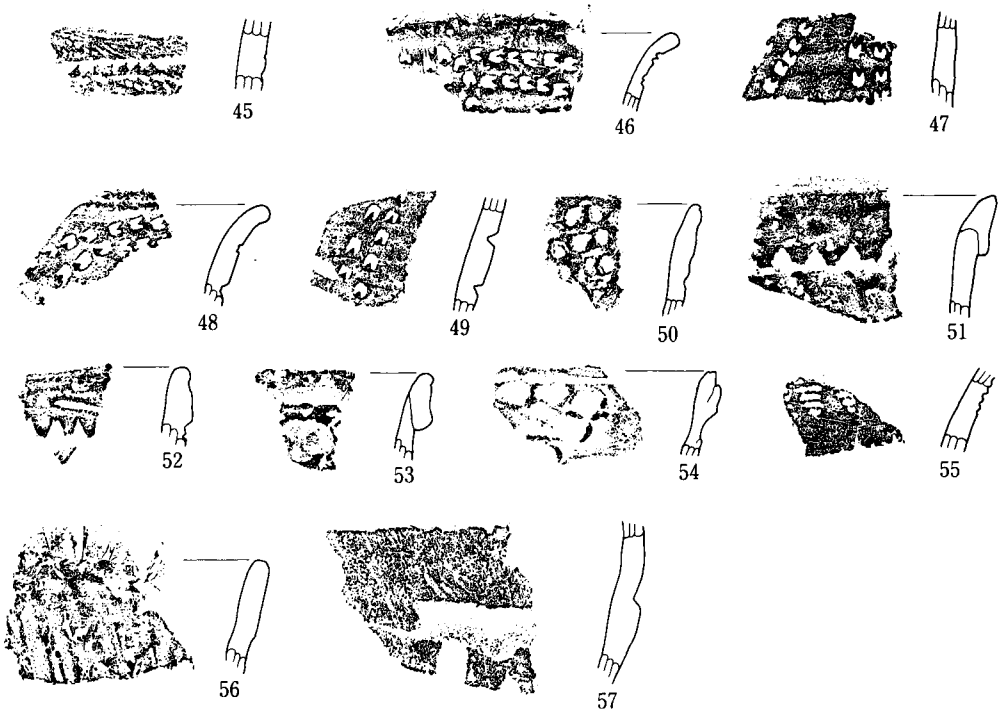


第45図　6類土器(2)

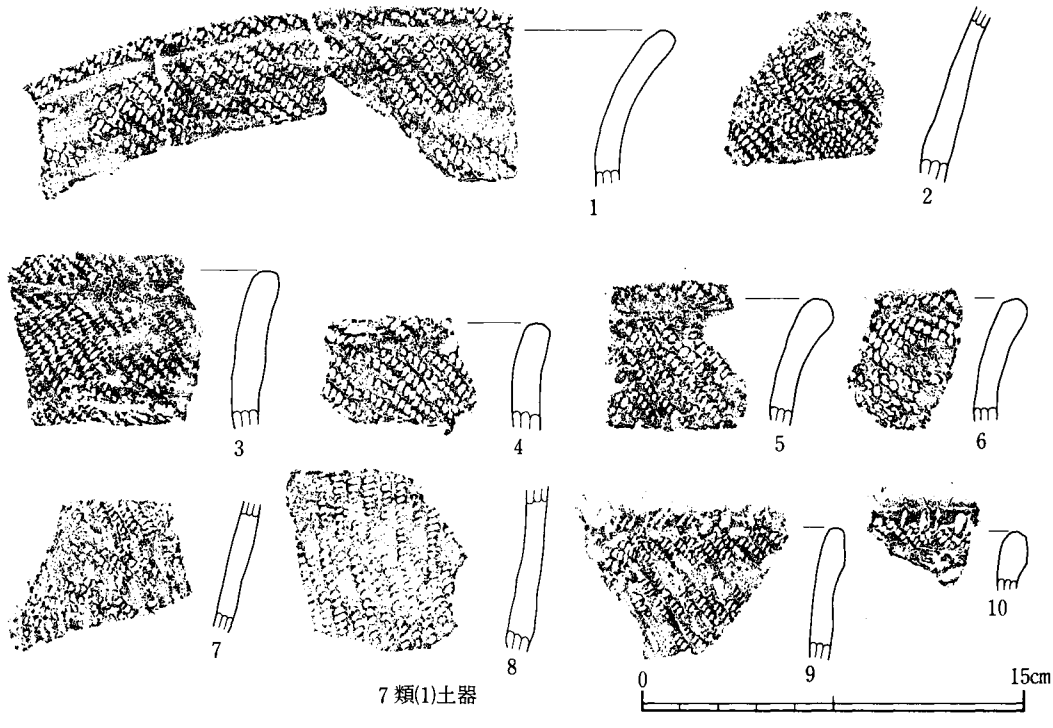
11	リ14-14 1	暗褐色	繊維含		△			LR	斜　行	器厚大
12	ヌ15-16 1	茶褐色	繊維含		△			LR	斜　行	器厚大
13	リ15-15 1②	茶褐色	繊維含		△			LR	斜　行	器厚大
14	リ15-24 2,13,14	茶褐色	繊維含		△			RL	斜　行	器厚大
15	リ15-24 10	黄褐色	繊維含		△			RL	斜　行	器厚大
16	リ15-24 58	茶褐色	繊維含		△			RL	斜　行	器厚大
17	リ15-15 1①	茶褐色	繊維含		△			RL	斜　行	器厚大
18	リ15-24 1	茶褐色	繊維含		△			RL	斜　行	器厚大
19	リ15-24 1②	赤褐色	繊維含		△			RL	斜　行	器厚大

挿図番号	グリッド 遺物番号	色　調	胎　土	調整(内面)	焼成	施　　文	備　　考
5類土器							
1	リ15-25 48	黄褐色	微砂粒含		○		口縁部直立、穿孔あり
2	リ11-14 1～5 15	暗褐色	微砂粒含		○	平行沈線	

挿図番号	グリッド 遺物番号	色　調	胎　土	調整(内面)	焼成	施　　文	備　　考
6類土器							
1	チ17-7 1③	黄褐色	微砂粒含		○	貝殻腹縁文	
2	チ17-7 1⑦	黄褐色	微砂粒含		○	貝殻腹縁文	
3	チ17-7 1⑥	暗褐色	微砂粒含		△	貝殻腹縁文	
4	チ17-7 1②	黒褐色	微砂粒含		△	貝殻腹縁文	
5	チ17-7 1⑤	黒褐色	微砂粒含		△	貝殻腹縁文	
6	チ17-7 1①	黒褐色	微砂粒含		△	貝殻腹縁文	
7	チ16-4 1	茶褐色	微砂粒含		△	貝殻腹縁文	



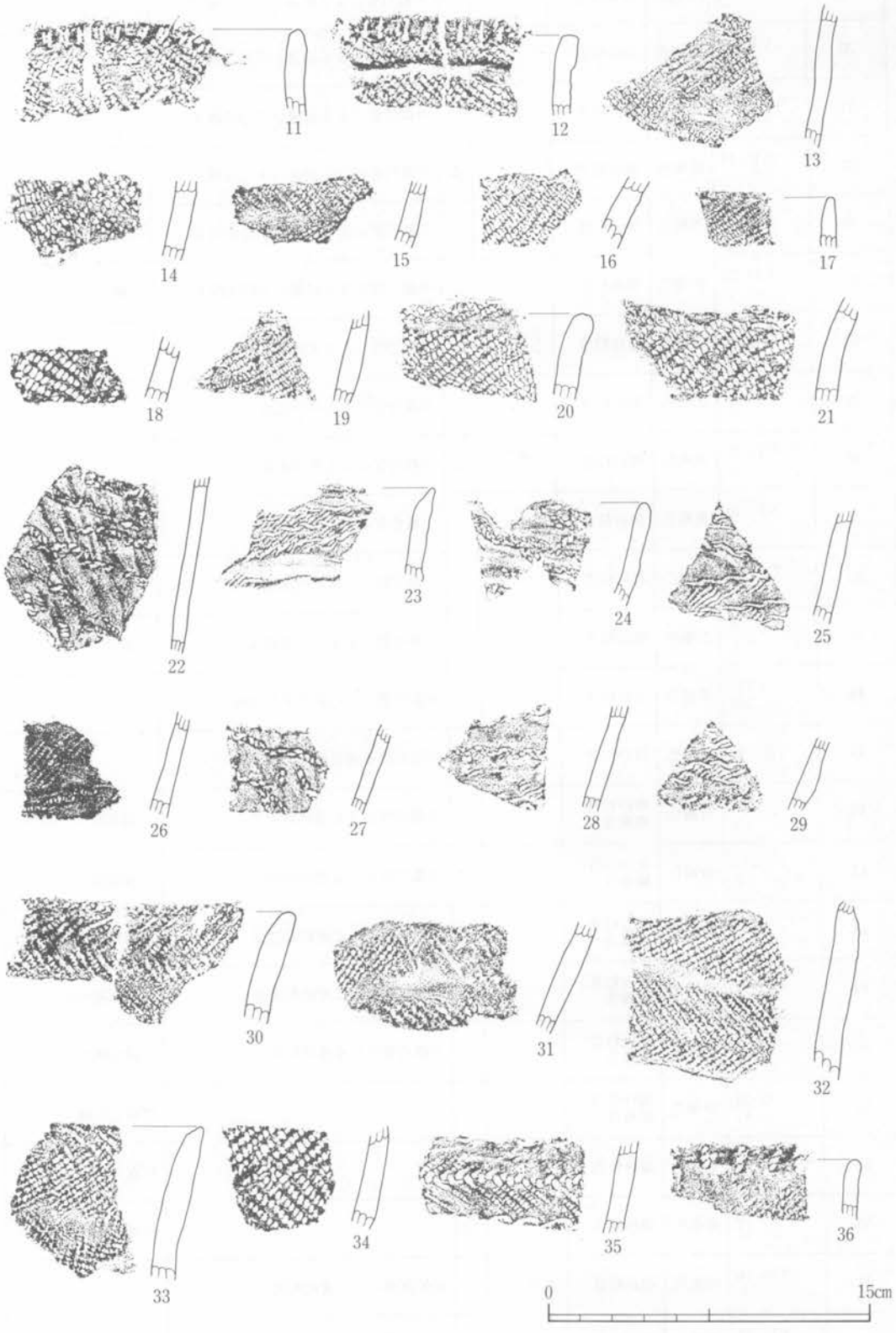
6類土器(3)



7類(1)土器

第46図　6類(3)・7類土器(1)

8	087 リ15-25 23 27	赤褐色	微砂粒含		△	貝殻腹縁文	
9	リ15-24 2	黄褐色	微砂粒含		△	貝殻腹縁文	
10	リ16-10 1	黄褐色	微砂粒含		△	貝殻腹縁文	底部付近（平底）
11	087 4	黄褐色	微砂粒含		△	貝殻腹縁文	口縁部大きく外反
12	リ16-16 120	暗褐色	微砂粒含	丁寧なミガキ	○	貝殻腹縁文	
13	110 1	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	貝殻腹縁文	
14	ヌ15-16 1	茶褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	Y-R	
15	ヌ15-16 1②	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	Y-L	
16	087 11	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	条線文	
17	リ15-19 1	黄褐色	微砂粒含		△	条線文	
18	リ12-13 1	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	条線文	
19	チ15-2 1	暗褐色	繊維含	丁寧なナデ	○	条線文	
20	リ15-19 9	暗褐色	微砂粒含		△	条線文	
21	リ10-20 一括	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	斜行条線文	
22	リ10-20 5、 10、19、20、 25 4	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	斜行条線文	
23	リ10-20 5、 10、15、20、 25 1、2、3、5	茶褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	斜行条線文	
24	リ15-12 1	黄褐色	微砂粒含		△		口唇部に刻目
25	チ14-13 5	黄褐色	微砂粒含		△		口唇部に刻目
26	087 15	暗褐色	微砂粒含		○		口唇部に刻目
27	チ15-7 2	黄褐色	微砂粒含		○	半截竹管による刺突文 地文　撚糸文	口縁部ほぼ直立
28	D一括	黄褐色	微砂粒含		○	半截竹管による平行沈線文 地文　撚糸文	口縁部やや外反
29	リ16-10 1	黄褐色	微砂粒含		○	半截竹管による組違い平行沈線文	口縁部ほぼ直立
30	リ15-15 2	黄褐色	微砂粒含		○	半截竹管による組違い平行沈線文	口縁部ほぼ直立
31	リ16-19 2	黄褐色	微砂粒含		○	半截竹管による組違い平行沈線文	口縁部緩かに外反


11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
0
15cm

第47図　7類土器(2)

32	リ15-24 32	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	半截竹管による組違い平行沈線文	
33	リ15-23 6	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	半截竹管による組違い平行沈線文	
34	リ15-20 リ15-25 1 1	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	半截竹管による組違い平行沈線文	
35	リ15-19 5	暗褐色	微砂粒含		▲	半截竹管による組違い平行沈線文	
36	チ14-23 2	茶褐色	微砂粒含		△	半截竹管による組違い平行沈線文	口縁部ほぼ直立
37	チ14-23 2	黄褐色	微砂粒含		○	半截竹管による組違い平行沈線文	口縁部ほぼ直立
38	チ14-23 2①	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	半截竹管による条線文	
39	チ14-23 2	暗褐色	微砂粒含		△	半截竹管による平行沈線	
40	ヌ13-6 1	茶褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	半截竹管による平行沈線	
41	ヌ15-16 2	黄褐色	微砂粒含		△	半截竹管による平行沈線	
42	チ13-10 1	黄褐色	微砂粒含		△	半截竹管による平行沈線	口縁部内側に稜をもつ
43	チ15-25 1①	暗褐色	微砂粒含		○	半截竹管による平行沈線文	口縁部ほぼ直立
44	089 107	黄褐色	微砂粒含		○	半截竹管による波状平行沈線文	
45	B一括	茶褐色	微砂粒含		○	竹管による連続刺突文	
46	084 5	黄褐色	微砂粒含 繊維含		○	半截竹管による連続刺突文	口縁部緩やかに外反
47	チ15-14 2	黄褐色	微砂粒含 繊維含		○	半截竹管による連続刺突文	口縁部緩やかに外反
48	084 3	暗褐色	微砂粒含 繊維含		○	半截竹管による連続刺突文	口縁部緩やかに外反
49	チ15-8 3④	黄褐色	微砂粒含 繊維含		○	半截竹管による連続刺突文	口縁部緩やかに外反
50	ヌ11-6 1～5 25	黄褐色	微砂粒含 繊維含		○	半截竹管にかる連続刺突文	口縁部緩やかに外反
51	リ15-24 81	暗褐色	微砂粒含 繊維含		△		折返し口縁
52	リ15-17 1①	茶褐色	微砂粒含		○		折返し口縁
53	リ15-20 11	黄褐色	微砂粒含		○		折返し口縁
54	ヌ15-16 1	暗褐色	微砂粒含	ナデ	○	貝殻背面による連続刺突文	
55	チ14-18 1	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	貝殻腹縁によるコンパス状	

56	リ15-18 1	暗褐色	微砂粒含		○		口縁部ほぼ直立
57	チ17-25 1	明褐色	微砂粒含	ナデ	○		

挿図番号	グリッド 遺物番号	色調	胎土	調整(内面)	焼成	施文				備考
						口唇・口縁	方向	胴部	方向	
7類土器										
1	B一括リ15 -25 26	黄褐色	微砂粒含		○	RL	斜行	RL	斜行	口縁部緩やかに外反
2	リ16-4 2②	黄褐色	微砂粒含		○			RL	斜行	口縁部緩やかに外反
3	リ15-25 37	黄褐色	微砂粒含		○	RL	斜行	RL	斜行	口縁部やや外反
4	B一括 ②	黄褐色	微砂粒含		○	RL	斜行	RL	斜行	口縁部やや外反
5	リ15-25 30	暗褐色	微砂粒含		○			RL	斜行	口縁部緩やかに外反
6	087 25	黄褐色	微砂粒含		○			RL	斜行	口縁部緩やかに外反
7	チ14-22 15	暗褐色	微砂粒含 繊維含	ナデ	○			RL	斜行	
8	リ15-25 25	暗褐色	微砂粒含		○			RL	斜行	
9	チ14-22 12	暗褐色	微砂粒含		△			RL	斜行	口唇部に刻目あり
10	チ14-22 28	黒褐色	微砂粒含		○			RL	斜行	口縁部ほぼ直立、口唇部刻目あり
11	チ14-22 14、19	黒褐色	微砂粒含		○			RL	斜行	折返し口縁 口唇部に刻目あり
12	チ14-22 7．9	黒褐色	微砂粒含		○			RL	斜行	折返し口縁 口唇部に刻目あり
13	リ15-24 42	暗褐色	微砂粒含	ナデ	○			RL	斜行	
14	リ15-24 23	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○			LR	斜行	
15	リ16-4 2①	赤褐色	微砂粒含		○			LR	斜行	
16	018 94	黄褐色	石英粒含	丁寧なナデ	○			LR	斜行	
17	リ16-23 1	黒褐色	微砂粒含		○			LR	斜行	口縁部内側にわずかに稜線をもつ
18	リ15-24 39	暗褐色	微砂粒含	ナデ	○			LR	斜行	

19	089 22	黄褐色	微砂粒含		△			L R	斜　行	
20	リ15-15 1	黄褐色	微砂粒含		○			L R	斜　行	口縁部緩やかに外反
21	リ16-13 1	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○			L R	斜　行	

22	チ15-15 2	暗褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	結節縄文	
23	B一括 ②	暗褐色	微砂粒含		○	結節縄文	口縁部薄い造り
24	チ15-15 2	暗褐色	微砂粒含		○	結節縄文	口縁部ほぼ直立
25	リ15-20 9	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	結節縄文	
26	リ10-17 3、7、8、12、13、17、18、22、23　2	黄褐色	石英粒含	ナデ	○	結節縄文	
27	チ15-15 2①	赤褐色	微砂粒含	ナデ	○	結節縄文	
28	088 38	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	結節縄文	
29	リ15-20 12	暗褐色	微砂粒含		○	結節縄文	
30	リ15-25 リ15-15 40　2	赤褐色	微砂粒含		○	羽状縄文	口縁部緩やかに外反
31	リ16-23 1	黄褐色	微砂粒含		△	羽状縄文	
32	リ15-24 78	赤褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	羽状縄文	
33	リ15-24 49	黄褐色	微砂粒含		○	羽状縄文	口縁部緩やかに外反
34	B一括 ①	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	羽状縄文	
35	リ15-19 13	黒褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	羽状縄文	
36	リ15-7	暗褐色	微砂粒含		○	R L　口唇部に圧痕文 J-L　胴部無節縄文	口縁部わずかに外反

8類土器　（第48図1～19、図版24）

8類土器は施文様として、縄文・撚糸文・竹管文・押圧痕文・刺突文・隆帯文等によるモチーフの豊富なことが特色である。

1・6はRL縄文を地文とする平行沈線文と三角刺突文、2は器表面に縦位の平行沈線文と口縁に平行な横位の連続刺突文、裏面には細い竹管による連続角押文の充塡文様となり、4・5は半截竹管による平行沈線と小刺突文からなる。

7～12は胴部に強い撚りの撚糸文を有し、口縁部には上下に連続刺突文にはさまれた平行沈線が横走する。

13は口唇部に刻目を有し、胴部には繊細な刺突文による文様を描き、14は半截竹管の背面と腹面を使い分けた押引による角押文が見られる。

15・16は細い粘土紐を添付することで文様をつくり出し、17は曲線状の平行沈線による渦巻文、18は緩やかな曲線を描く玉抱き文、19は著しく細いLの撚糸文である。

本類は、中期初頭の五領ヶ台式相当の土器である。

9類土器　（第48・49・50・51図51～57、図版24・25・26・27）

9類土器は阿玉台式土器と呼称される一連の土器群であるが、土器片という一断片資料の要素抽出による分類の所属は動揺しがちである。

土器型式の指標ともされがちな文様構成においても、中核的な地域と周辺的な地域の存在することは指摘されてすでに久しい。

特に、腰巻遺跡が北総台地に所在する一遺跡であることは、阿玉台式土器を主体として周辺の文様構成土器群の影響をも受けたであろうことは充分に理解できる。

したがって本類を構成する土器は、勝坂式土器の特徴を備えたものも含むものとする。

1～8は、広義の勝坂式土器に相当するものである。

1、2は浅鉢形の土器で、口縁部に指頭による押圧に加えて、口唇部に半截竹管による平行押引きによる角押文を有する。

口唇部の2条の平行する角押文は勝坂I式土器の中に類例を求められるが、口縁部の楕円形の圧痕は五領ヶ台式土器から勝坂I式土器に認められる特徴の一つである。

器形的には胴部に屈曲を持たず、より後出的な浅鉢の器形となっている。

3～5は、隆帯とそれに伴う爪形文の観察から勝坂I式からII式相当のモチーフを受け入れている。

6は、口唇部外側に貼り付いた隆帯上にキャタピラ文が走り、胴部に縦位のRL縄文を有する。

7は隆帯に沿う幅広の爪形文、8は隆帯に沿う細めの三角刺突文をそれぞれ有する。

いづれも、勝坂系の土器に見られる文様の要素であるが、7は阿玉台式としての分類も否定できない。

33・25は、山形口縁の形状及び頂部の刻目などの特徴から阿玉台式土器の直前か初頭に相当するものと考えられる。

9～57は阿玉台式土器に相当する土器群である。

A種　(10・11・14・16・20・29・30)

腰巻遺跡の阿玉台式土器に相当する中でも最も古式な一群である。

10・11・14・16・20は1条の角押文を特徴とし、29・30は一条の角押文による楕円状のモチーフを有すする。

B種　(9・12・13・15・17・18・21・22・23・26・28・32・34・47・48・50～54・56)

明瞭な楕円区画に沿う1条の角押文を特徴とする。

9は山形口縁で口唇部に刻目を有し、隆帯による楕円区画沿いに1条の角押文がみられる。

12・13・15・17・18・21・22・34は、いづれも弱い隆帯に沿う1条の角押文を特徴とするが、26は口唇部に刻目を有し、不規則な2条の角押文がみられ、隆帯による楕円区画沿いの角押文も一部で2条の施文となっている。

また、23・28は1条の角押文を2列別々に施文したもので、23は口唇部に刻目を有し、28の隆帯は完全な楕円区画とはならない。

47は太く明瞭な隆帯に沿う爪形文で、比較的間隔をあけており、竹管の背部による刺突と考えられる。

51～54は、輪積みの稜線を指頭で押圧したヒダ状の痕跡を特徴とし、54は縦位の角押文がジグザグ様に走る。

56は、口唇部及び隆帯に沿い1条の角押文が走る。

C種　(24・25・27・31・36～46・49)

B種でモチーフの定着化した楕円区画がさらに発達し、胴部には貝殻による刺突もみられる。

24・27・37は隆帯による楕円区画内に複列の角押文がみられ、楕円区画の中央を横断するように、上下1条の半截竹管による斜めの刺突文にはさまれた爪形刺突文を特徴とする。

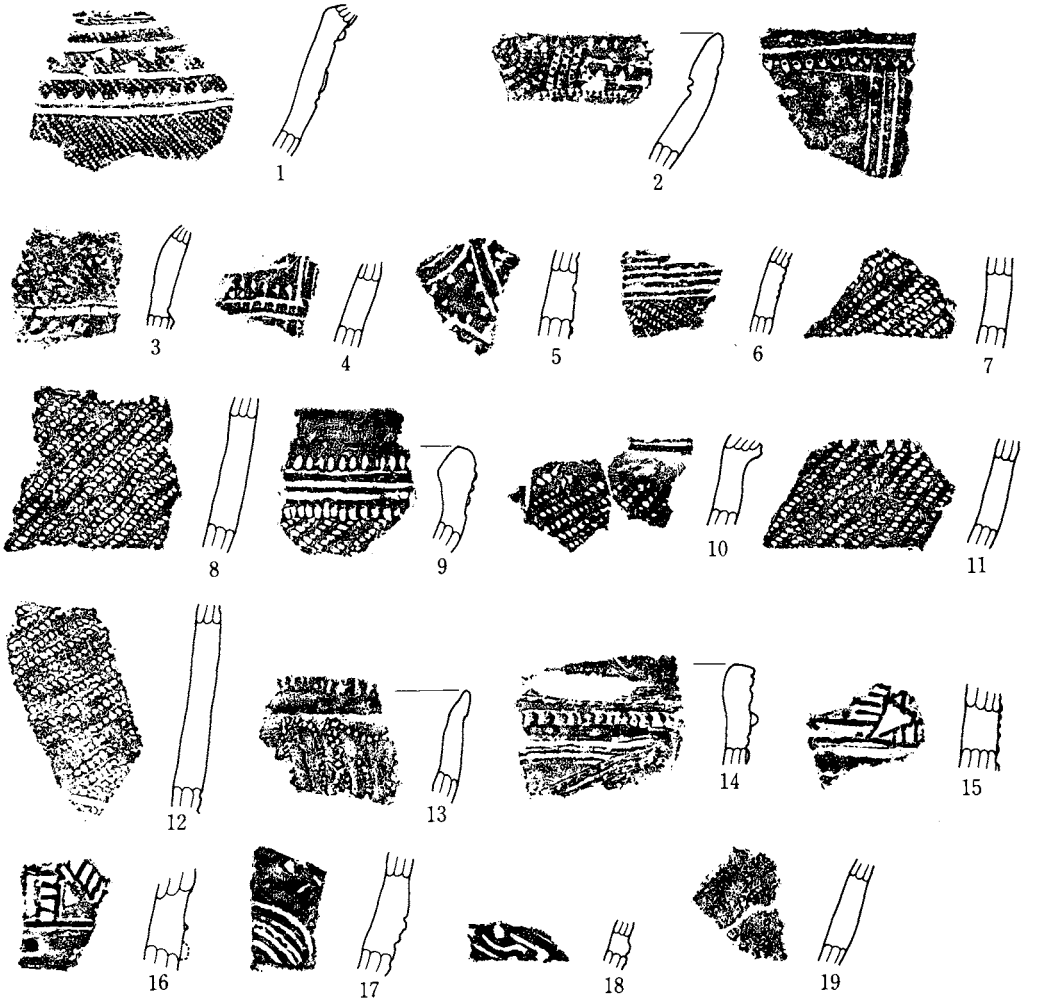
31は大形の把手を持ち、2条の平行角押文による施文様を特徴とし、隆帯に沿う角押文も2条を基本とするが、2条のうちの片側は不鮮明なものが多く、あるいはB種の1条を単位とする角押文の変種として扱うべきであるかもしれない。

25は24・27・37と似るが、楕円区画の中央を横断する爪形刺突文の上下を囲む斜めの刺突文はみられない。

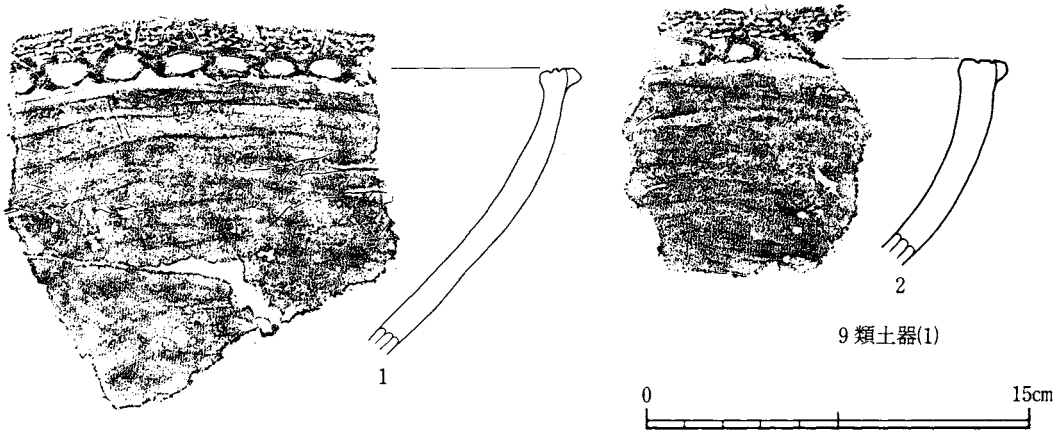
36は2条の平行角押文、38は隆帯に沿う角押文が一応2条を基調としたものとして考えられるが、施文が雑でかなり崩れている。

39～45は、いづれも貝殻の腹縁による圧痕が特徴となっている。

39・40・45の隆帯に沿う角押文は、間隔も不規則で不鮮明な状態であり、39の場合には楕円区画内に単列で施文される。



8類土器



9類土器(1)

第48図　8類・9類土器(1)

41～44は、切れ長の貝殻腹縁による連続刺突文を特徴とする。

46は、比較的小さな貝殻による刺突文と縦位の節の長い押引き沈線が見られる。

49は隆帯に沿う角押文が2条を基調とするが、施文は不鮮明で著しく乱れている。

D種　(47・48・50・55)

隆帯沿いまたは隆帯上に幅広の角押文や爪形刺突文を有する。

なお、57は平行波状沈線であるが、1条づつ別々に施文されており、この断片資料のみでは種別分類は困難である。

以上のように阿玉台式土器を観察したが、A種は阿玉台Ⅰ式の古式なもの、B種はⅠ式のやや新しいもの、C種は阿玉台Ⅱ式に、D種は阿玉台Ⅲ式にそれぞれ相当する土器群と考えられるが、縄文時代の遺跡において、単独の施文様のグループの土器のみで構成される場合の少ないことは多くの遺跡の調査で指摘されている。

土器の全体的な観察にもおよばない小破片の比較により、同一包含層から出土した多種にわたる施文様の時間的な前後について考えるのは、本遺跡においては適切でない。

10類土器　(第51・52図、図版28・29)

10類土器は、中期後半の東関東地域で最も盛期を迎えた加曽利E式土器群に相当する。

加曽利E式土器は、勝坂式土器や11類とした中峠式土器及び南部東北地方の大木式土器の影響を受けつつ、その実態を形成していった土器群と考えられている。

A種　(1・2)

沈線文とRL縄文を基調として、2は断面三角形の隆帯に沿い両側に沈線が伴う。

B種　(3～9・11～17・38)

縄文を地文として、沈線により区画または文様化した曲線によるモチーフを特徴とする。

5～7は、RL縄文を地文として弧状の沈線を有し、8は櫛掻状の集合沈線の組違いパターンとLR縄文の組合わせが見られる。

12・13は、口縁部に太めの沈線により楕円状の区画をつくり出し、その中をLR縄文で充填している。

16・17は櫛掻状の平行沈線が縦走する。

C種　(20～36)

磨消縄文を基調とする土器群。

いづれも区画内を、地文とする縄文を磨り消すことを特徴としているが、20～30は沈線による縦区画をRL縄文部分と磨消技法による無文部分をつくり出している。

33～36は縦区画をLR縄文部分と磨消技法による無文部分で構成しており、37は胴部及び口唇部に斜行するRL縄文を有する。

D種　(39～41)

3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0
15cm

第49図　9類土器(2)

その他の加曽利E式土器で、分類の困難なもの。

39・40は半截竹管による連続刺突列（複数）の下にRL多縄文を有し、口縁部は無文でほぼ直立する。

加曽利E式土器はその細分において諸説あり、必ずしも一致した分類例が示されていない。今回の観察においては、A種を加曽利E_1式、B種を加曽利E_2式、C種を加曽利E_3式にそれぞれ相当するものとした。

11類土器　（第53図、図版30）

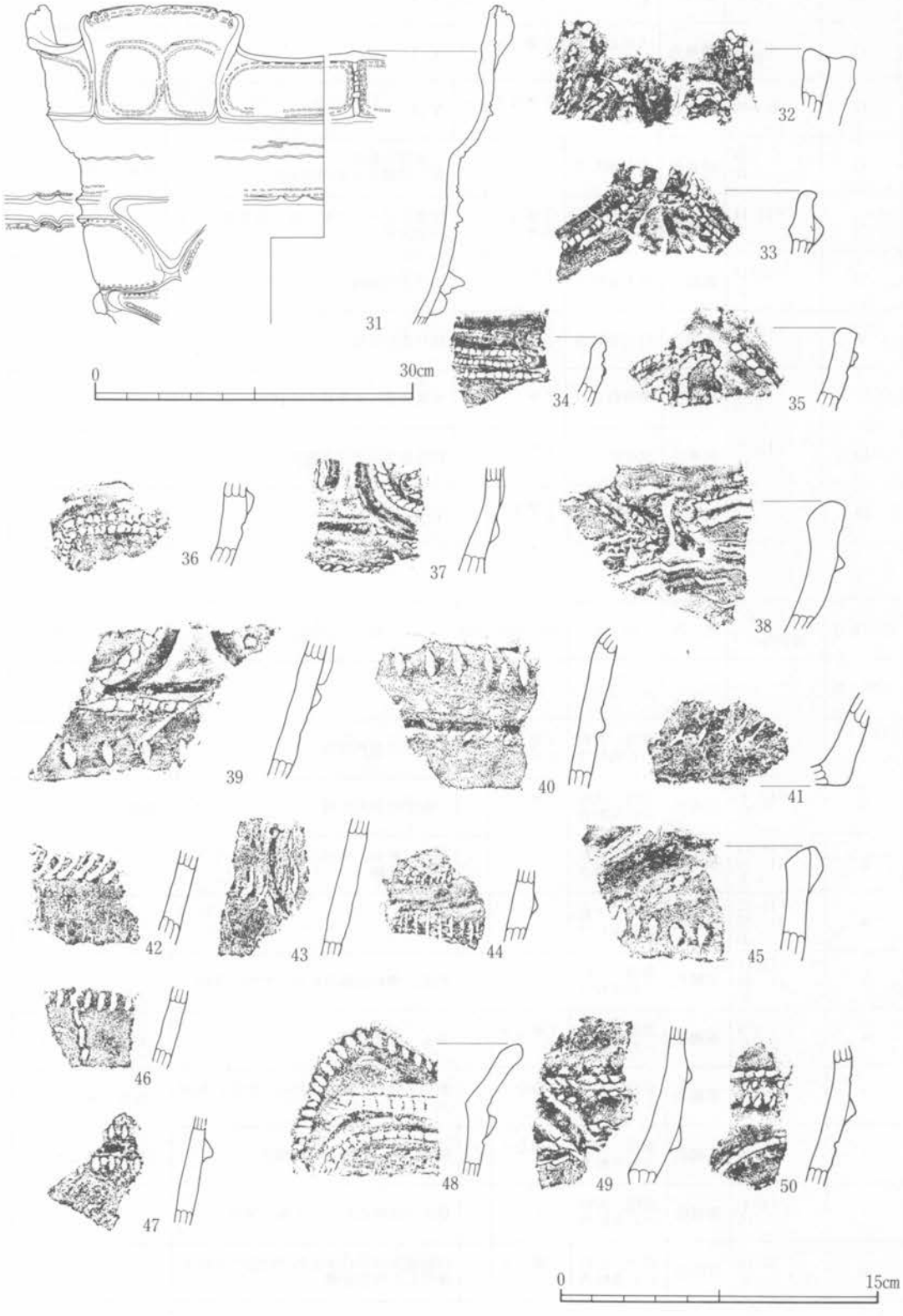
11類土器の施文様は、8類土器・9類土器・10類土器の各類型に類似するものの、いづれの分類にもなじまない一群の土器である。

1・2はともに刺突することで空間をつくり出し、x字状の文様を浮び上がらせるのを特徴としている。

本類は阿玉台式土器と加曽利E式土器を継ぐ型式の土器といわれており、一般的には中峠式土器と呼称されている。

第10表

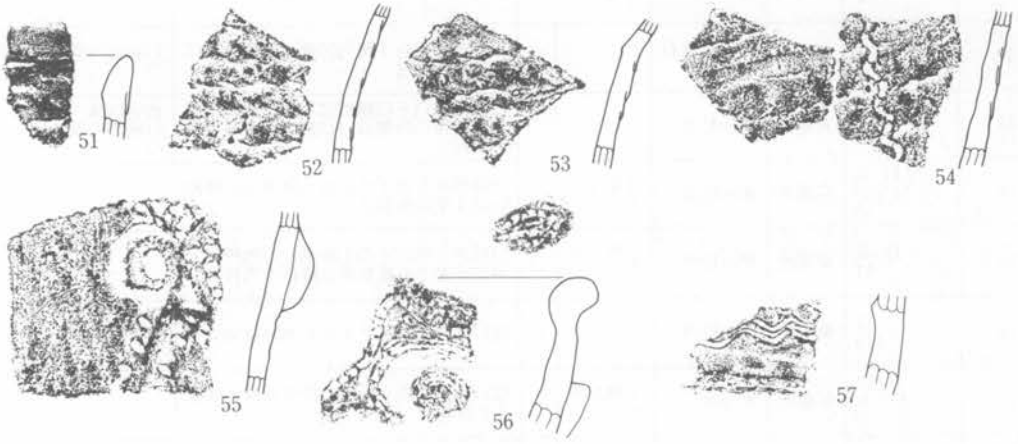
挿図番号	グリッド 遺物番号	色　調	胎　土	調整(内面)	焼成	施　　文	備　　考
8類土器							
1	リ15-15 1②	黄褐色	石英粒含	丁寧なナデ	○	平行沈線、三角刺突文 RL縄文	
2	リ15-15 1	茶褐色	雲母含		○	竹管による刺突文	浅鉢か？
3	089 107	茶褐色	雲母、石英含	ナデ	○	竹管背部による角押文 RL縄文	
4	チ17-8 1	茶褐色	石英粒含	丁寧なナデ	○	竹管による平行沈線刺突文	
5	ヌ13-6 1	黄褐色	微砂粒含		○	竹管による平行沈線と刺突文からなる三角状構成文	
6	チ17-3 1	黄褐色	岩石細粒含	ナデ	○	竹管による平行沈線　RL縄文	
7	チ13 一括	暗褐色	大粒の石英粒含	ナデ	○	Y-L	
8	チ13 一括①	暗褐色	大粒の石英粒含	丁寧なナデ	○	Y-L	
9	チ13 一括⑤	暗褐色	大粒の石英粒含	丁寧なナデ	○	竹管による平行沈線　Y-L	


31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
0
30cm
0
15cm

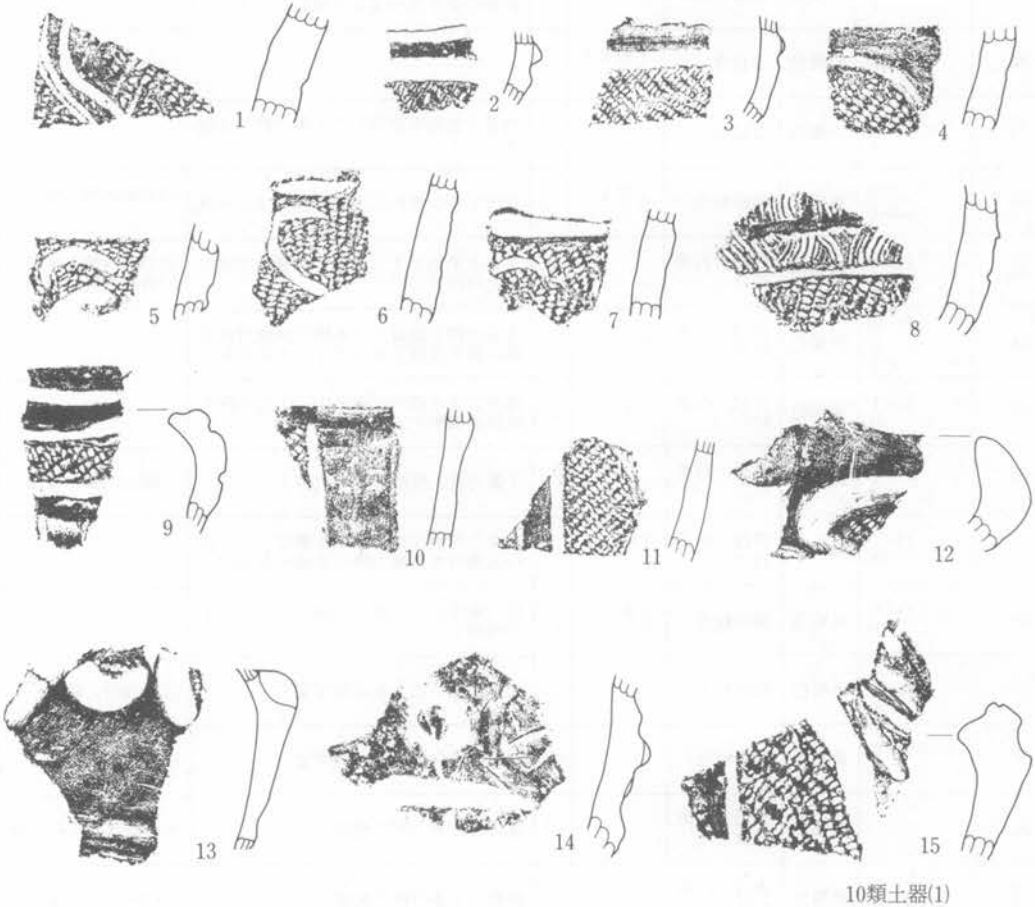
第50図　9類土器(3)

10	チ13 一括⑥	暗褐色	大粒の石英粒含	丁寧なナデ	○	Y-L	
11	チ13 一括②	暗褐色	大粒の石英粒含	丁寧なナデ	○	Y-L	
12	B一括	暗褐色	大粒の石英粒含	丁寧なナデ	○	Y-L	
13	018 10	暗褐色	岩石細粒含		△	口唇部に刻目 細い竹管による連続刺突文	折返し口縁
14	ヌ12-11 1	黄褐色	大粒の岩石粒含	丁寧なミガキ	○	隆帯に沿って半截竹管の腹背面による押引沈線	
15	リ15-18 8	黄褐色	岩石細粒含	丁寧なナデ	○	紐状添付隆線文	
16	リ15-15 2①	黄褐色	岩石細粒含	丁寧なナデ	○	紐状添付隆線文	
17	リ15-15 2②	暗褐色	微砂粒含	ナデ	△	半截竹管による同心円状文	
18	リ15-20 11	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	竹管背面による玉抱文	
19	リ15-7 1	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	Y-L	

挿図番号	グリッド 遺物番号	色　調	胎　土	調整(内面)	焼成	施　　文	備　　考
9類土器							
1	リ11-25 1～5 19	茶褐色	雲母、大粒の石英粒含	丁寧なミガキ	○	口縁部外側押圧痕	浅鉢
2	リ12-4 55	茶褐色	雲母、大粒の石英粒含	丁寧なミガキ	○	口縁部外側押圧痕	浅鉢
3	ヌ11-11 11～20 5②	茶褐色	雲母、大粒の石英粒含		○	細めで断面三角形の隆帯に沿って2条の押引沈線	
4	ヌ11-11 11～20 5①	茶褐色	雲母、大粒の石英粒含		○		
5	ヌ11-11 11～20 5	茶褐色	雲母、大粒の石英粒含	ナデ	○	断面三角形の隆帯に沿って押引沈線	
6	078 6	茶褐色	雲母、大粒の石英粒含	丁寧なナデ	○	RL　胴部縦位	口唇部丁寧なナデ
7	リ11-14 1～5 9	茶褐色	雲母、大粒の石英粒含	丁寧なナデ	○	断面三角形の隆帯に沿って巾広の角押文	口唇部丁寧なナデ
8	ヌ11-11 11～20 5	茶褐色	雲母、大粒の石英粒含	丁寧なナデ	○	隆帯に沿って細めの角押文	口唇部丁寧なナデ
9	ヌ13-1 15	黄褐色	雲母、大粒の石英粒含	ナデ	○	低めの隆帯に沿って1条の角押文	
10	リ12-19 5	茶褐色	雲母、大粒の石英粒含	丁寧なナデ	○	口唇部及び平行する形で竹管の先端を使用した押引沈線	



9類土器(4)

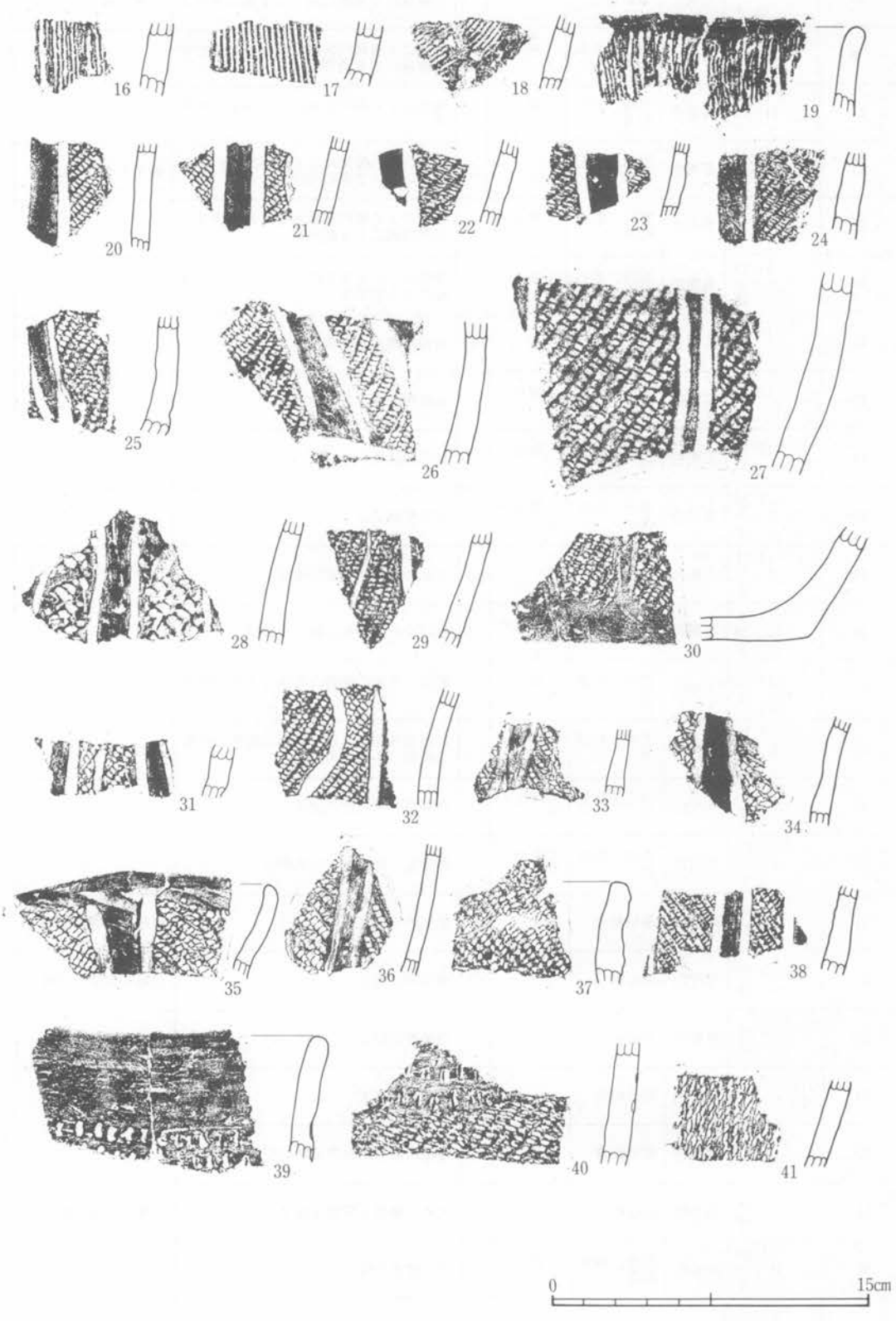


10類土器(1)

0 15cm

第51図　9類(4)・10類土器(1)

11	リ12-12 4	暗褐色	雲母含	丁寧なミガキ	○	口縁部沿いに1条の節の長めの角押文	
12	リ13-5 1	茶褐色	雲母、岩石細粒含		○	口縁部に平行す楕円区画の内側沿いに1条の角押文	口縁部内側に稜をもつ
13	リ12-7 15	黄褐色	微砂粒含		○	口縁部沿いと口縁部に平行する楕円区画の隆帯の外側沿いに節の長めの1条の角押文	波状口縁 口縁部内側に稜をもつ
14	リ11-9 11～20 10	茶褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	口縁部から垂下する低い隆帯の内側沿いに1条の角押文	
15	リ12-8 11	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	口縁部と平行する1条単位の角押文と単位分割する複数条の縦位の角押文	
16	12 119	黄褐色	微砂粒含	ナデ	△	低い隆帯に沿って1条の連続刺突文	補修孔あり
17	リ10-23 1～5 3	茶褐色	雲母含	丁寧なナデ	○	低い隆帯に沿う1条の押引沈線と曲線上の沈線文	
18	リ12-12 14	茶褐色	雲母含	丁寧なナデ	○	1条の角押文による文様区画	口縁内側に稜をもつ
19	チ15-5 1	茶褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	口縁部沿いの1条の角押文による楕円区画の中を角押文で充填している。	口縁部内側に稜をもつ
20	リ12-20 5	暗褐色	雲母含	丁寧なナデ	○		口唇部外側に刻目
21	ヌ13-1 2	赤褐色	雲母含	ナデ	○	竹管の先端を使用して1条の押引沈線文	
22	012 325④	黄褐色	微砂粒含	丁寧なミガキ	○	添付文及び楕円区画内を角押文と充填。	口縁部内側に稜をもつ
23	チ12-3 4	暗褐色	雲母、石英粒含		○	2本を単位とする半截竹管腹縁を使用した角押文	口唇部外側に刻目 口唇部内側に稜線
24	リ10-16 1～5 4	黄褐色	雲母、石英粒含	ナデ	○	1条の押引沈線による楕円区画内に異種の押引沈線でサンドイッチ状になる。	
25	リ12-4 34	黄褐色	雲母、石英粒含	ナデ	△	隆帯による楕円区画の中に巾広の押引沈線が横断する。	
26	リ11-14 1～5 8	黄褐色	雲母、石英粒含		○	半截竹管、腹線による角押文	口縁部内側に稜線
27	リ11-25 一括	茶褐色	雲母、石英粒含	丁寧なナデ	○	1条の押引沈線、2本を単位とし、楕円区画内を異種の押引沈線がある。	
28	ヌ12-11チ12-17 1　10	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	低い隆帯による楕円区画に沿って2条の角押文	
29	リ11-9 11～20 8	黄褐色	微砂粒含		○	口縁部沿いに2条の角押文	口縁内側に稜線
30	ヌ13-2 3	黄褐色	微砂粒含		○	口縁部沿いに2条の角押文	口縁内側に稜線
31		黄褐色	雲母、石英粒含		○	隆帯と2条の押引沈線	大形扇状把手付口縁
32	ヌ11－7 1～5 4	黄褐色	雲母、石英粒含		○	隆帯と1条の押引沈線	山形把手付口縁
33	リ12-7 14、18	暗褐色	雲母、石英粒含		○	口縁部沿いに2条の角押文	山形口縁
34	012 201	黄褐色	雲母、石英粒含		○	隆帯に沿って1条の角押文	緩かな波状口縁


16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
0
15cm

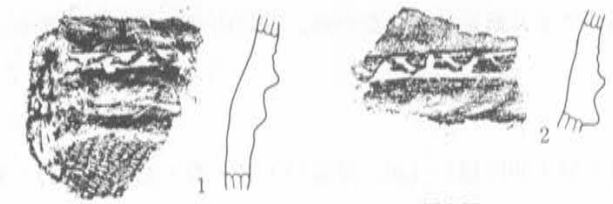
第52図　10類土器(2)

35	リ13-5 1	暗褐色	微砂粒含		○	口縁部及び隆帯に沿って1条の角押文	山形口縁
36	ヌ11-11 11～20 1	黄褐色	雲母、岩石粒含	丁寧なナデ	○	隆帯による楕円区画に沿って半截竹管の腹線による角押文	
37	ヌ11-11 11～20 5	黄褐色	雲母、岩石粒含	丁寧なナデ	○	隆帯による楕円区画沿いに1条の角押文	
38	ヌ11-17 1～5 2	茶褐色	雲母、岩石粒含		○	紐状の低い隆帯による楕円区画内に1条ないし、2条の角押文	緩やかな波状口縁
39	ヌ11-16 11～20 1	茶褐色	雲母、岩石粒含	丁寧なナデ	○	隆帯による楕円区画と1条の角押文 貝殻腹線による刺突文	
40	リ11-25 1～5 18	黄褐色	雲母、岩石粒含	丁寧なナデ	○	隆帯沿いの1条単位の角押文と貝殻腹線による刺突文	
41	ヌ13-13 3	茶褐色	雲母、岩石粒含		(底部付近) ○	貝殻腹線にる刺突文	
42	リ12-13 5	茶褐色	雲母、岩石粒含	丁寧なナデ	○	貝殻腹線による刺突文	
43	リ12-13 13	茶褐色	雲母、石英含	丁寧なナデ	○	貝殻腹線文	
44	リ11-20 1～5 3	茶褐色	雲母、石英含	丁寧なナデ	○	貝殻腹線文	
45	ヌ11-21 1～5 6	赤褐色	雲母、微砂粒含		○	太めの隆帯と貝殻圧痕文	口縁部外側に稜をもつ
46	リ11-4 12～20 2	茶褐色	雲母、石英含	丁寧なナデ	○	刻目文の節の長い押引沈線文	
47	リ12-5 4	茶褐色	雲母、石英含	丁寧なナデ	○	断面三角形の隆帯の両側に1条の角押文	
48	リ11-14 1～5 10	茶褐色	雲母、石英含		○	口唇部外側に刻目、断面三角形の隆帯の両側に1条の角押文	山形口縁
49	ヌ11-7 1～5 1	茶褐色	雲母、石英含	丁寧なナデ	○	角押文と平行波状沈線	
50	リ11-25 1～5 2	茶褐色	雲母、石英含	丁寧なナデ	○	刺突文＋沈線化した角押文	
51	リ12-8 14	暗褐色	微砂粒含		○	指頭押圧痕文	口縁部内側に稜線
52	リ12-12 26	暗褐色	微砂粒含		○	指頭押圧痕文	口縁部内側に稜線
53	リ12-12 17	暗褐色	微砂粒含		○	指頭押圧痕文	口縁部内側に稜線
54	015 015 270 7	暗褐色	微砂粒含		○	指頭押圧痕文	口縁部内側に稜線
55	ヌ12-19 1	暗褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	隆帯に沿った角押文状の圧痕文	
56	リ12-16 69	茶褐色	微砂粒含			太めの隆帯と貝殻圧痕文	耳状の特殊な把手
57	リ11-20 11～20 3	暗褐色	雲母、微砂粒含	丁寧なナデ		平行波状沈線	

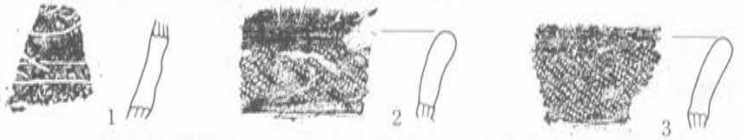
挿図番号	グリッド 遺物番号	色　調	胎　土	調整(内面)	焼成	施　　文	備　　考
10類土器							
1	091 19	茶褐色	砂粒含	ナデ	○	沈線文＋ＲＬ	
2	Ｂ一括	茶褐色	砂粒含	ナデ	○	両側を沈線にはさまれた断面三角形の隆帯＋ＲＬ 多条縄文	
3	チ13 一括(３)	黄褐色	砂粒含	丁寧なミガキ	○	両側を沈線にはさまれた断面三角形の隆帯＋ＲＬ 多条縄文	
4	リ16-16 77	暗褐色	砂粒含	丁寧なミガキ	○	沈線区画の中をＲＬ縄文で充塡。	
5	チ15-20 2(３)	暗褐色	砂粒含	ナデ	○	弧状沈線＋ＲＬ縄文	
6	チ15-19 1③	黒褐色	砂粒含	ナデ	○	弧状沈線＋ＲＬ縄文	
7	チ15-19 2①	暗褐色	砂粒含	ナデ	○	弧状沈線＋ＲＬ縄文	
8	チ12-13 34	黄褐色	砂粒含	丁寧なミガキ	○	櫛ガキ状沈線＋ＬＲ縄文	
9	チ16 一括	黒褐色	砂粒含	ナデ	○	沈線区画内をＬＲ縄文で充塡	
10	089 107	黄褐色	砂粒含	ナデ	○	沈線による縦区画内にＲＬ縄文	
11	チ15-19 1①	黄褐色	砂粒含	ナデ	○	沈線による縦区画内にＲＬ縄文	
12	チ13 一括②	黄褐色	砂粒含		○	口縁部沿いの凹状の楕円区画内にＬＲ縄文充塡	緩やかな波状口縁
13	チ13 一括①	黄褐色	砂粒含		○	口縁部沿いの凹状の楕円区画内にＬＲ縄文充塡。	緩やかな波状口縁
14	リ13-1 1	黄褐色	砂粒含	ナデ	○	隆帯による渦巻文	
15	135 64	黒褐色	砂粒含		○	沈線による縦区画内にＬＲ縄文	山形ないし波状の口縁
16	235 180	茶褐色	石英粒含	丁寧なナデ	○	櫛ガキ平行沈線文	
17	チ14-22 20	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	櫛ガキ平行沈線文	
18	チ16 一括	茶褐色	岩石細粒含	ナデ	○	Ｊ-Ｒ（無節）	
19	135 227、232	茶褐色	岩石細粒含	ナデ	○	櫛ガキ平行沈線文	
20	チ15-14 2	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	沈線による縦区画内をＲＬ縄文と磨消	
21	チ15-3 2	暗褐色	微砂粒含	ナデ	○	沈線による縦区画内をＲＬ縄文と磨消	
22	チ15-14 2	黄褐色	岩石粒含	ナデ	○	沈線によぬ縦区画内をＲＬ縄文を磨消	

23	084 8	黄褐色	岩石粒含	ナデ	○	沈線による縦区画をＲＬ縄文と磨消	
24	チ12-3 4	暗褐色	岩石粒含		△	沈線による縦区画をＲＬ縄文と磨消	
25	リ15-16 1	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	沈線による縦区画をＲＬ縄文と磨消	
26	チ14-18 30	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	沈線による縦区画をＲＬ縄文と磨消	
27	リ14-19 1	暗褐色	微砂粒含	ナデ	△	沈線による縦区画をＲＬ縄文と磨消	
28	リ15-6 2	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線による縦区画をＲＬ縄文と磨消	
29	チ15-19 1①	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	沈線による縦区画をＲＬ縄文と磨消	
30	ヌ12-23 1	茶褐色	微砂粒含		底部付近○	沈線による縦区画をＲＬ縄文と磨消	
31	チ15-20 2(1)	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	沈線による縦区画をＲＬ縄文と磨消	
32	チ15-19 1	暗褐色	微砂粒含	ナデ	○	沈線による縦区画をＲＬ縄文と磨消	
33	チ14-23 8	暗褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線による縦区画をＬＲ縄文と磨消	
34	チ14-23 4	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線による縦区画をＬＲ縄文と磨消	
35	チ14-23 1．7	暗褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線による縦区画をＬＲ縄文と磨消	
36	チ14-23 1②	暗褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線による縦区画をＬＲ縄文と磨消	
37	リ16-7 1	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	ＲＬ縄文　胴部斜行　口唇部斜行	
38	リ12-12 19	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線による縦区画をＬＲ縄文と磨消	
39	チ14-23 チ15-3 10 1	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	截断した竹管の先端による連続刺突文	
40	リ15-7 一括	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	截断した竹管の先端による連続刺突文＋ＲＬ多縄文	
41	チ11-25 1	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	Ｙ-Ｌ縦位	

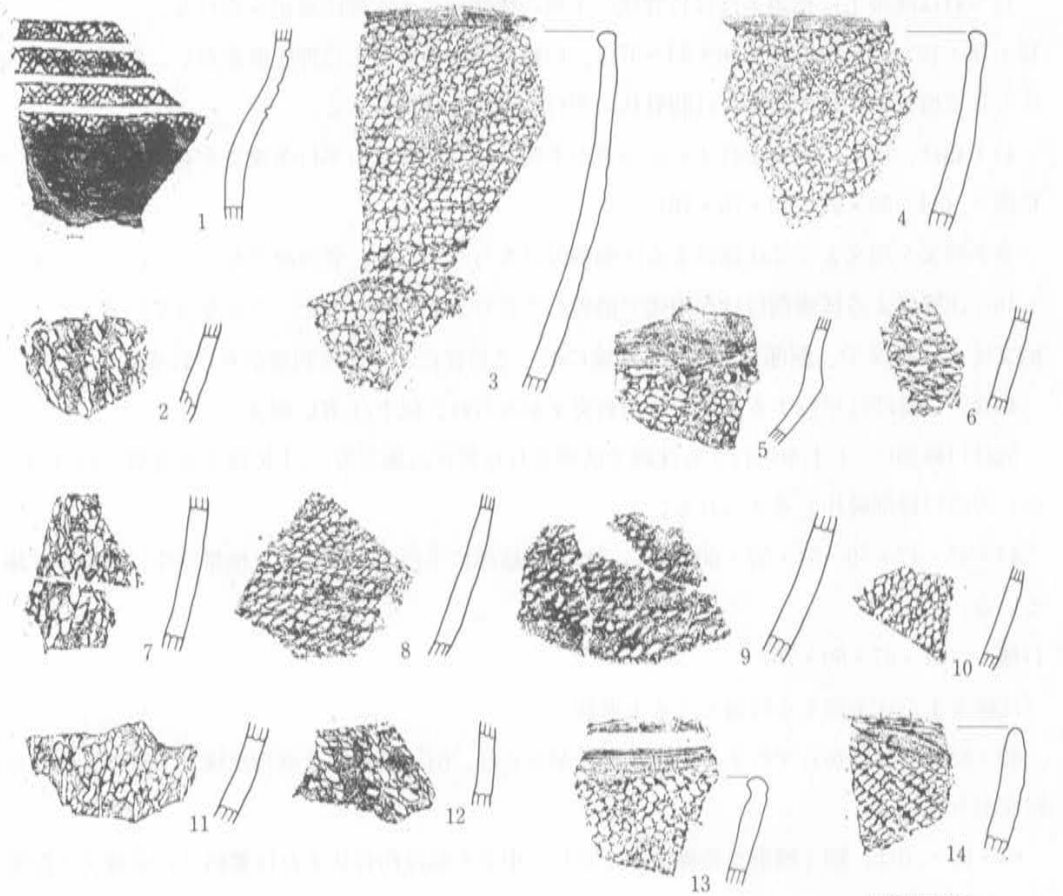
挿図番号	グリッド 遺物番号	色　調	胎　土	調整(内面)	焼成	施　　文	備　　考
11類土器							
1	リ11-19 1～5 8	茶褐色	石英粒含	ナデ	○	組違いの刺突文、ＲＬ多縄文	
2	リ11-13 11～20 1	茶褐色	石英粒含	ナデ	○	組違いの刺突文、ＲＬ多縄文	



11類土器



12類土器



13類土器(1)

0 15cm

第53図　11類・12類・13類土器(1)

12類土器　(第53図１～３、図版30)

12類土器はいづれも小破片のみの遺存であり断定はできないが、堀之内式土器に相当する土器である。

13類土器　(第53・54・55・56・57・58・59図133～136、図版30・31・32・33・34・35・36)

13類土器は、加曽利B式土器に相当する土器群である。

A種　(１)

腰巻遺跡では唯一の鍵状のフック文をもつ加曽利B_1式土器の特徴を備えた土器である。

B種　(２～43)

２～14は目の粗い縄文を地文とする。

３・４・13は口縁部内側に１条の浅い沈線を有し、いづれも丁寧なナデ調整が内壁面にみられ、器面は横位の LR 縄文を特徴とする。

15～41は隆帯上に指頭または竹管状の工具の横側面による押圧痕がみられる。

15・18・19～22・24～28・30・33～37は、口縁部外側の隆帯上に押圧痕を有し、胴部は縄文を地文として横位の平行沈線または肋骨状の平行条線文を特徴とする。

42・43は、地文に縄文を有するのか否か不明ながら肋骨状の平行条線文を有する。

C種　(44～55・57～60・75・76)

多条縄文を地文として沈線による区画割付けを行なった後、磨消部分をつくり出している。

46は沈線による区画割付けが中途で消失しており、不自然なモチーフとなっている。

地文は LR 縄文で、胴部を一巡する沈線に沿って竹管による連続刺突がみられる。

49は、口縁部に平行する３条の三角刺突文がみられ、以下は RL 縄文。

52は口縁部に、上下を平行する沈線で区画された帯状の施文帯に、LR 縄文を充填した双口土器の一方の口縁部破片と考えられる。

44・45・47・50～54・57・60は、いづれも口縁部に平行する帯状の文様帯の中に縄文を充填している。

D種　(61～67・69・70)

沈線文または条線文を特徴とする土器群。

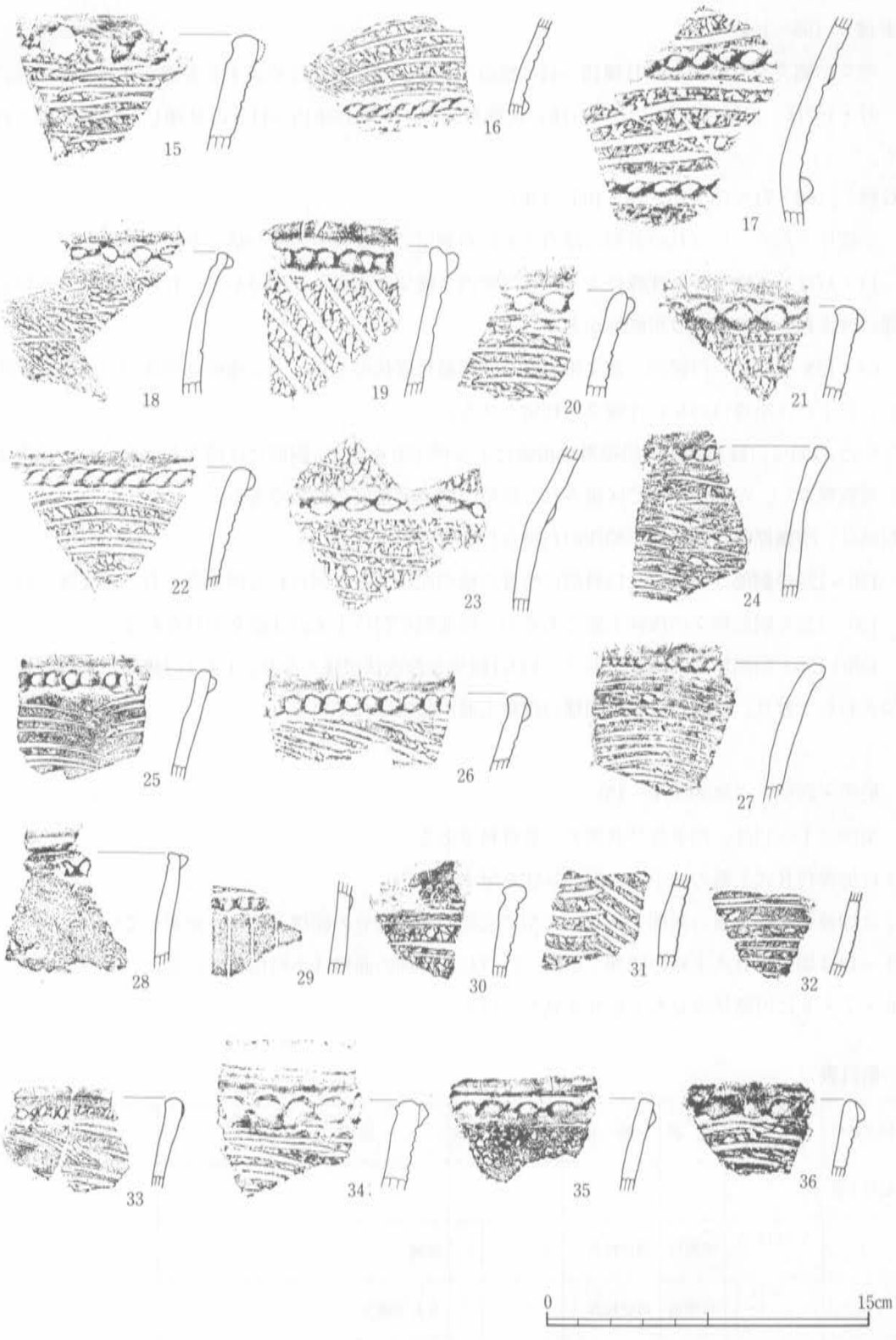
62・63は口縁部から平行する斜行沈線文がみられ、64は曲線的な平行沈線文、67は葉脈状の条線文がみられる。

65・69・70は、細く繊細な条線文が交差し、中でも65は肋骨状または葉脈状に条線文が配置されている。

E種　(56・74・77～105)

沈線に区画された縄文充填の部分と、よく磨かれた磨消部分を特徴とする。

56・74・77・79～81・83・84・86～94は、沈線による弧状区画の内を縄文で充填し、磨消部分



第54図　13類土器(2)

は丁寧に磨きを施している。

F種　(95～104)

地文に縄文を有し、本類B種15～41に類似するが、格子目状に交差する条線文を特徴とする。

97・102は、口縁部内側に1条の浅い沈線を有し、本類B種15～41との共通した特徴が見られる。

G種　(68・71～73・75・76・105～136)

小破片のため、いづれの分類に該当するのか判定できないものを一括した。

14・17はわずかながら沈線による弧状区画内に縄文を充填した部分が見られ、あるいは本類E種に含まれるものである可能性がある。

68・123～125は、口縁部に無文帯を残し、半截竹管状の工具による連続刺突部分でかるく屈曲し、以下には組違いの平行沈線文を特徴とする。

また、105は口縁部外側の紐線帯に指頭による押圧痕を施し、胴部には縄文を地文として沈線文が複数横走し、左右が沈線で区画された縦位の磨消調整痕が特徴である。

類例は、印旛郡印旛村岩戸字船作の石神台貝塚で報告されている。

126～129の胴部は無文で、口唇部に竹管の横側面によると思われる押圧痕を有する浅鉢土器。

130～132も胴部無文の浅鉢土器であるが、屈曲部に弱い1条の沈線文が見られる。

133～136も胴部無文の浅鉢土器で、133は緩やかな波状口縁となり、136は口縁部と胴部の境に段を有しており、石神台貝塚に同様の浅鉢土器が報告されている。

把手・底部　(第59図1～13)

第59図1～13は、把手及び底部の一括資料である。

1は加曽利B式土器の把手で、獣の耳状を呈する。

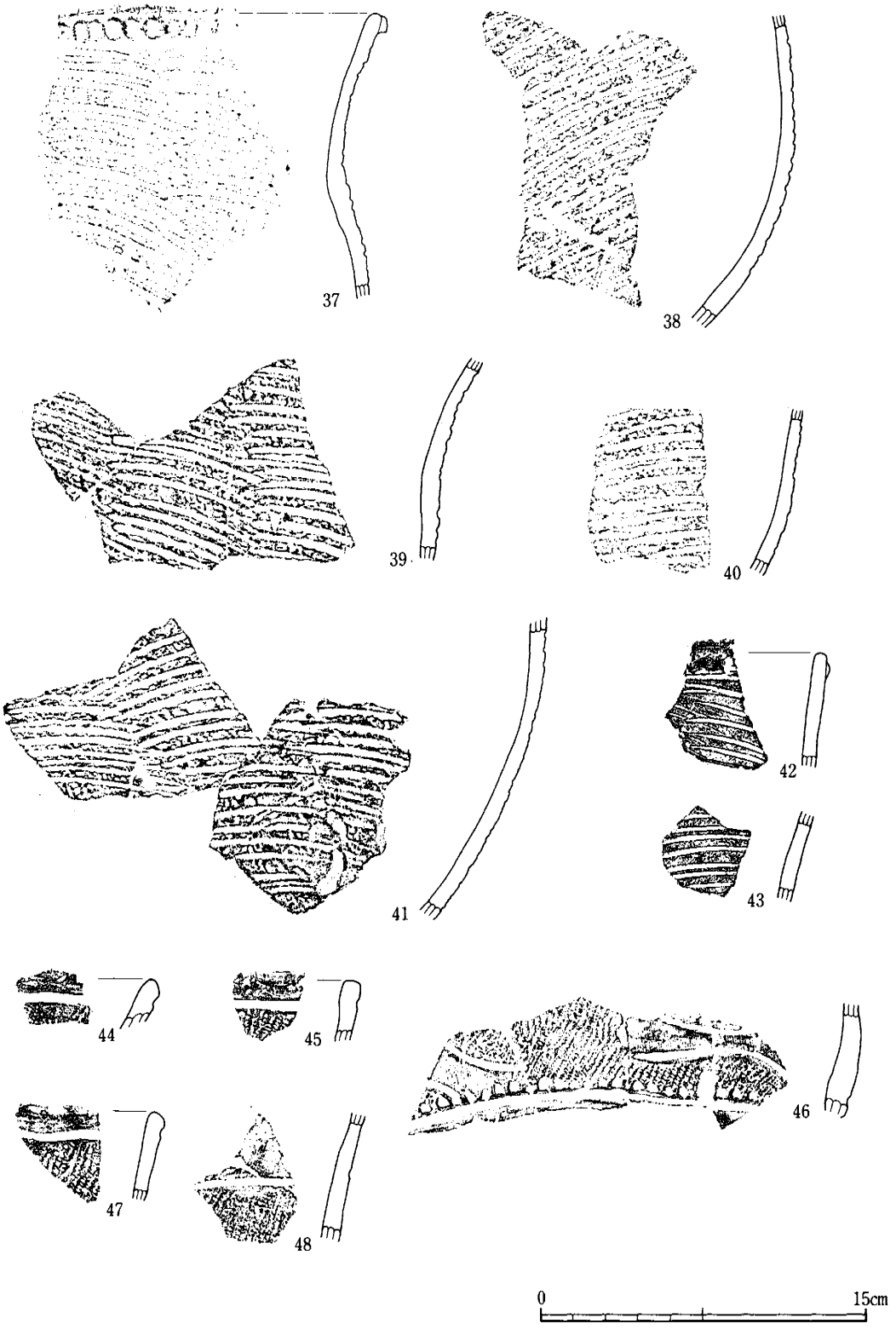
2は加曽利E式土器の底部であり、大型で底部の平底部分の面積も大きく安定している。

3～13は加曽利B式土器の底部であり、いづれも底部の面積は小形化している。

6・7・9は円筒状の立ち上がりを見せている。

第11表

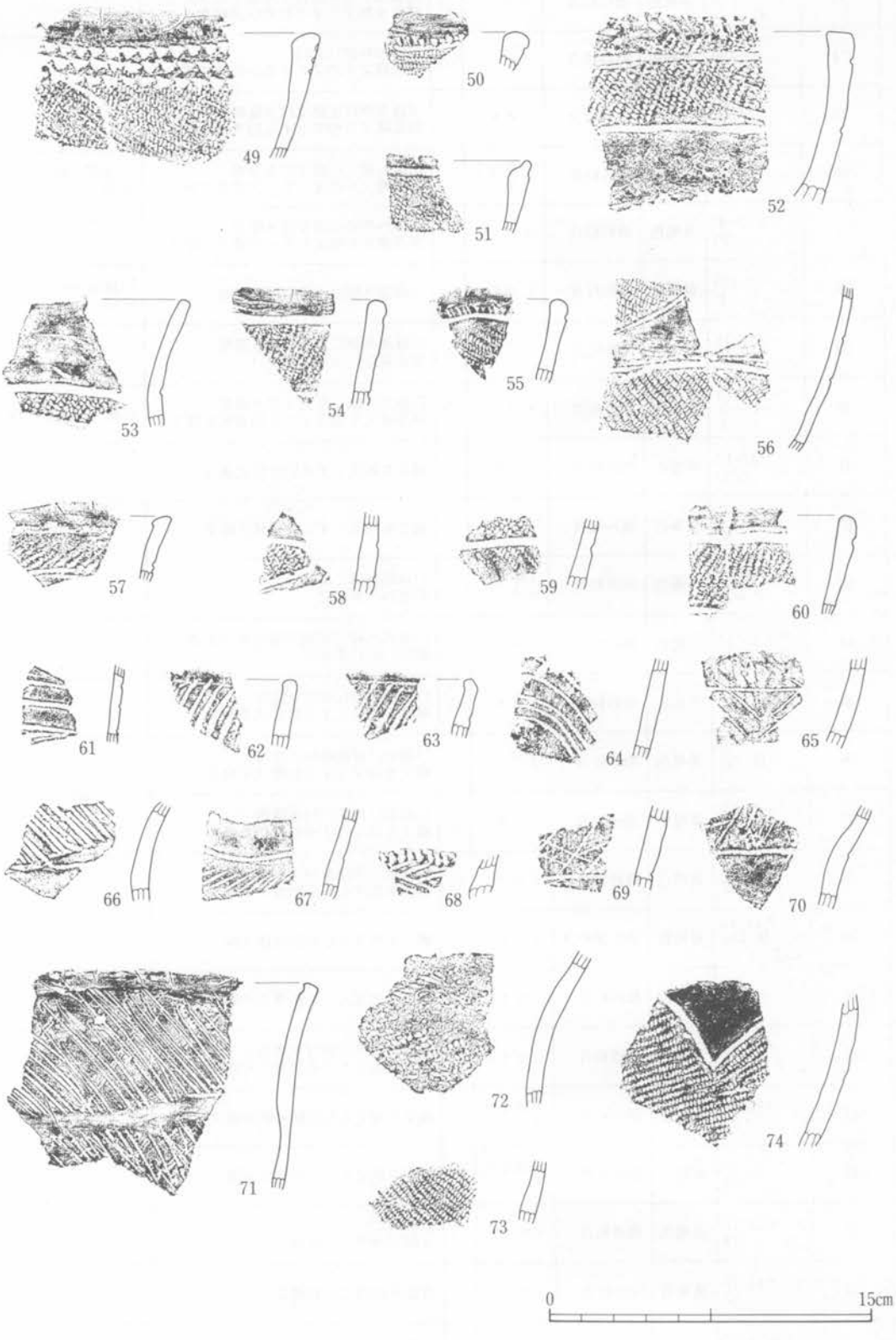
挿図番号	グリッド 遺物番号	色　調	胎　土	調整(内面)	焼成	施　　文	備　　考
12類土器							
1	リ13-5 2	暗褐色	微砂粒含	ナデ	○	沈線	
2	ヌ11-6 1～5 27	暗褐色	微砂粒含	ナデ	○	RL多縄文	
3	リ11-14 11～20 8	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	RL多縄文	



第55図　13類土器(3)

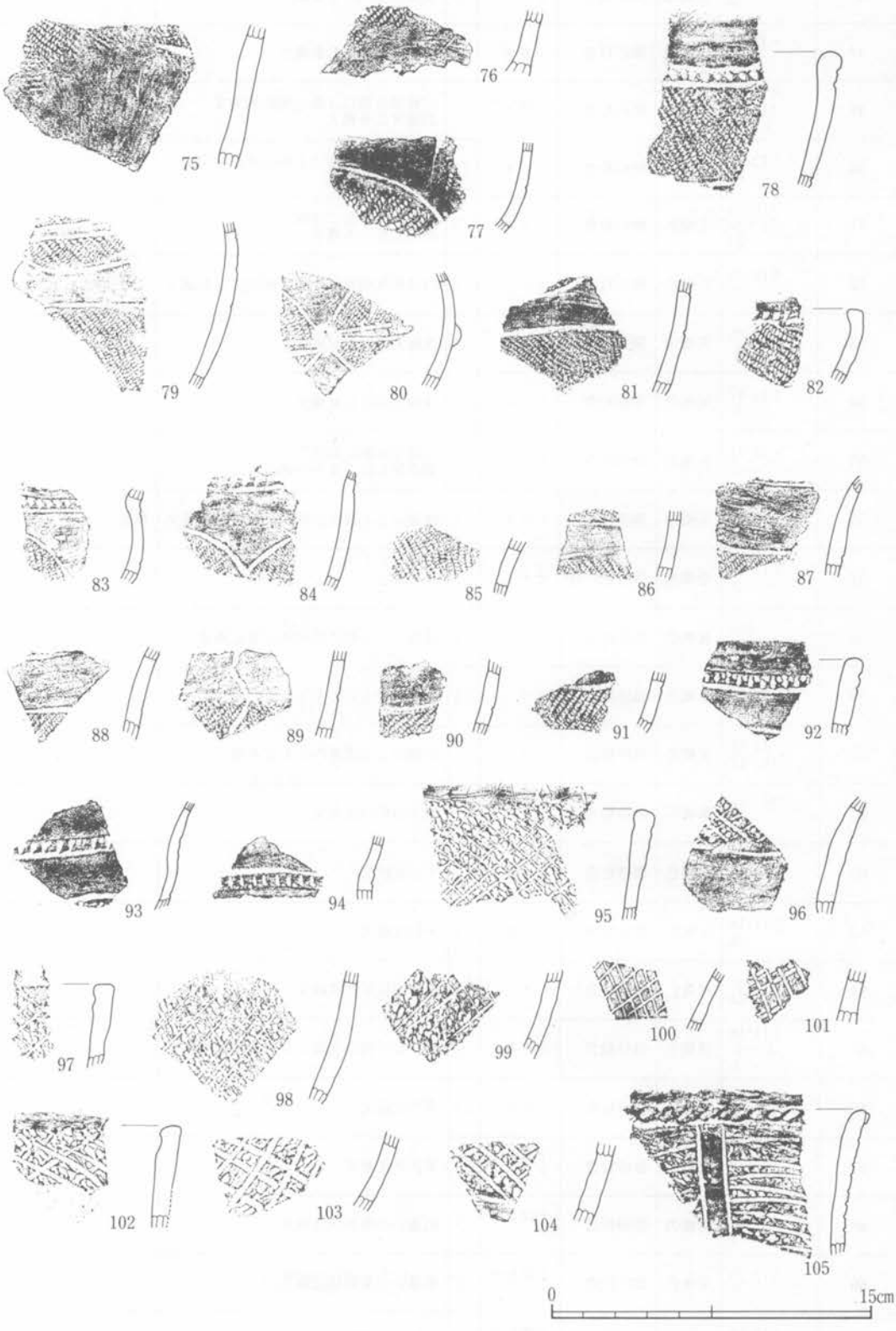
第11表

挿図番号	グリッド 遺物番号	色　調	胎　土	調整(内面)	焼成	施　　文	備　　考
13類土器							
1	リ15-15 1	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	ＬＲ縄文を地文として平行沈線文及び鍵状フック文	
2	リ12-23 4	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	ＬＲ縄文	
3	ヌ15-16 1②	茶褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	横走するＬＲ縄文	口縁部内側に一条の沈線
4	ヌ15-16 1①	茶褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	横走するＬＲ縄文	口縁部内側に一条の沈線
5	ヌ13-11 2	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	胴部の屈曲部以下ＬＲ縄文	胴部は緩やかな『く』の字状となる。
6	リ13-6 1	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	ＬＲ縄文	
7	リ12-24 1　リ13-4 1	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	ＬＲ縄文	
8	リ10-24 11-20 26	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	ＬＲ縄文	
9	リ10-24 11～20 40	暗褐色	微砂粒含	ナデ	△	ＬＲ縄文	
10	リ10-24 11～20 28	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	ＬＲ縄文	
11	リ12-17 23	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	ＬＲ縄文	
12	リ12-23 1	茶褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	ＬＲ縄文	
13	ヌ15-16 1	茶褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	斜行するＬＲ縄文	口縁部内側に一条の沈線
14	チ14-23 5	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	ＬＲ縄文	緩やかな波状口縁
15	リ12-3 33	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口縁部外側には指頭圧痕付き隆帯 胴部縄文を地文とに肋骨状沈線文	口縁部内側に巾広の沈線
16	リ12-3 26	暗褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	縄文を地文として肋骨状沈線文	
17	リ10-24 11～20 31	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	タガ状の圧痕文付きの隆帯 縄文を地文とする肋骨沈線文	
18	081　リ15-8 2　1	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	口縁部外側に圧痕文付き隆帯、胴部縄文を地文とする肋骨状沈線文	
19	リ10-24 11～20 31	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口縁部外側に圧痕文付き隆帯 胴部縄文を地文とする斜行沈線文	
20	リ12-4 25	黄褐色	微砂粒含	丁寧なミガキ	○	口縁部外側に圧痕文付き隆帯 胴部縄文を地文とする肋骨状沈線文	
21	リ10-24 11～20 31	暗褐色	微砂粒含	丁寧なミガキ	○	口縁部外側に圧痕文付き隆帯 胴部縄文を地文とする肋骨状沈線文	
22	リ12-3 6	暗褐色	微砂粒含	丁寧なミガキ	○	口縁部外側に圧痕文付き隆帯 胴部縄文を地文とする肋骨状沈線文	


49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
0
15cm

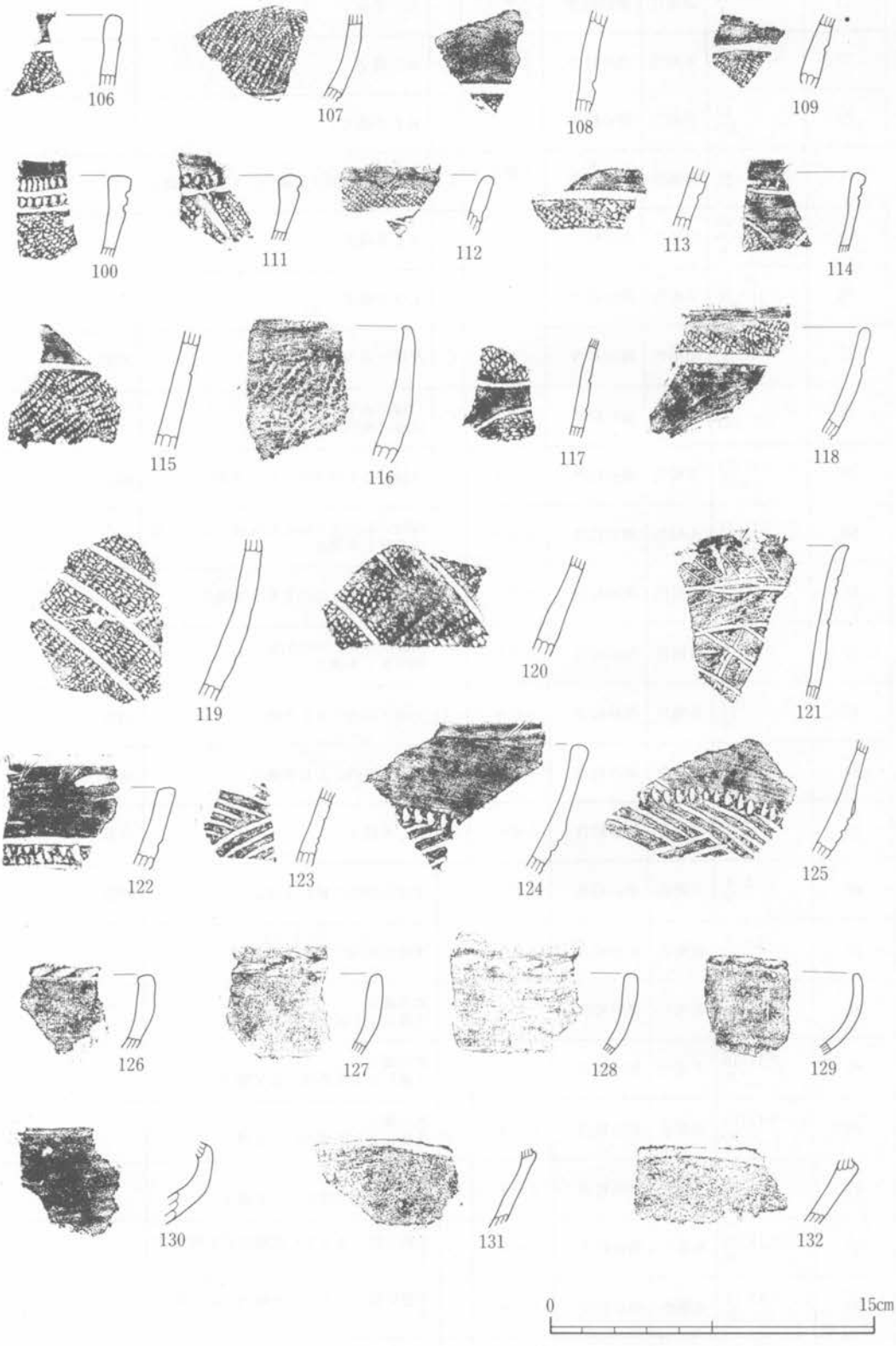
第56図　13類土器(4)

23	リ10-24 1～3 6 リ10-24 11～20 13	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	指頭による圧痕付き隆帯をはさんで、縄文を地文とする肋骨状沈線文	
24	リ10-24 11～20 22	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	口唇部外側に刻目 胴部縄文を地文とする肋骨状沈線文	
25	リ12-4 15	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口縁外側に圧痕文付き隆帯 胴部縄文を地文とする肋骨状沈線文	
26	リ12-3 11	茶褐色	微砂粒含	丁寧なミガキ	○	口縁外側に圧痕文付き隆帯 胴部縄文を地文とする肋骨状沈線文	口縁部内側に巾広の沈線
27	リ12-4 20	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	口縁外側に圧痕文付き隆帯 胴部縄文を地文とする肋骨状沈線文	
28	105 1	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口縁部外側に圧痕文付き隆帯	口縁部内側に巾広の沈線
29	リ12-11 65	黄褐色	微砂粒含		△	口縁部外側に圧痕文付き隆帯 胴部縦位の平行沈線	
30	リ11-25 1～5 1	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	口縁部外側に圧痕文付き隆帯 胴部縄文を地文とする肋骨状沈線文	口縁部内側に沈線
31	リ12-12 27①	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	縄文を地文とする肋骨状沈線文	
32	リ12-3 2	暗褐色	微砂粒含	ナデ	○	縄文を地文とする肋骨状沈線文	
33	ヌ12-11 5②③	茶褐色	微砂粒含	丁寧なミガキ	○	口縁部外縁に刻目 胴部斜行条線文	
34	リ12-13 34	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	口縁部外縁に指頭圧痕付きの隆帯 胴部、斜行条線文	
35	ヌ13-22 1	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口縁部に押圧痕付き隆帯 縄文を地文とする肋骨状条線文	
36	B一括	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	口縁部に押圧痕付き隆帯 縄文を地文とする肋骨状条線文	
37	チ14-12 3	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口縁部に押圧戸付き隆帯 縄文を地文とする肋骨状条線文	
38	チ14-12 9、16、17	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口縁部に押圧痕付き隆帯 縄文を地文とする肋骨状条線文	
39	チ14-12 5、9、10、15、25②	黄褐色	岩石細粒含	ミガキ	○	縄文を地文とした肋骨状沈線文	
40	表採	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	縄文を地文とした肋骨状沈線文	
41	チ14-12 2、13、21	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口縁部に押圧痕付き隆帯 縄文を地文とする肋骨状条線文	
42	リ12-4 27	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	縄文を地文とした肋骨状沈線文	
43	リ12-4 23	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	縄文を地文とした肋骨状沈線文	
44	チ14-17 19	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	磨消縄文 沈線区画内にＬＲ縄文	
45	チ14-17 17	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線区画内にＬＲ縄文	
46	チ14-17 6、10、29	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線区画内にＬＲ縄文	


75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
0
15cm

第57図　13類土器(5)

47	チ14-18 26	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	沈線区画内にＬＲ縄文	
48	チ14-17 7、15	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線区画内にＬＲ縄文	
49	ヌ11-21 11～20 1、3	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	口縁部外側に３条の連続刺突文 胴部ＲＬ多縄文	
50	リ12-4 80	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	波状口縁の外側に１条の連続刺突文 胴部ＲＬ多縄文	
51	リ10-24 11～20 29	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口縁部内外面に沈線 胴部ＬＲの多縄文	
52	チ15-20 2	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	口縁部外側及び沈線区画内にＬＲ縄文	双口土器
53	Ｂ一括 ①	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線区画にＬＲ縄文	
54	チ14-17 6	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線区画にＬＲ縄文	
55	ヌ12-11 1	黄褐色	微砂粒含	ナデ	△	口縁部外側に刻目 胴部ＲＬのこまかい縄文	
56	リ12-4 76	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線による弧状区画内にＲＬの多縄文	精製
57	リ15-15 2	暗褐色	雲母細片含	ナデ	○	ＲＬ縄文	
58	015 303	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	沈線による楕円区画内にＲＬ縄文	
59	ヌ13-11 2	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	沈線をはさんで上下にＲＬ縄文	
60	チ14-17 16，17	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線による区画内にＬＲ多縄文	
61	Ｂ一括 ②	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	堀りの深い沈線文	
62	チ14-18 20	暗褐色	微砂粒含	ミガキ	○	平行沈線文	
63	チ14-18 24	暗褐色	微砂粒含	ミガキ	○	平行沈線文	
64	ヌ13-3 24	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	同心円状平行沈線文	
65	ヌ11-16 1～5 1	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	鋭利な工具の先端による葉脈状沈線文	
66	チ11-6 1	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	平行沈線文	
67	105 1②	茶褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	葉脈状沈線文	
68	4 115	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	組違いの葉脈状沈線文	
69	リ12-25 2	茶褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	組違いの葉脈状沈線文	
70	チ11-16 7	茶褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	組違いの葉脈状沈線文	


106
107
108
109
100
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
0
15cm

第58図　13類土器(6)

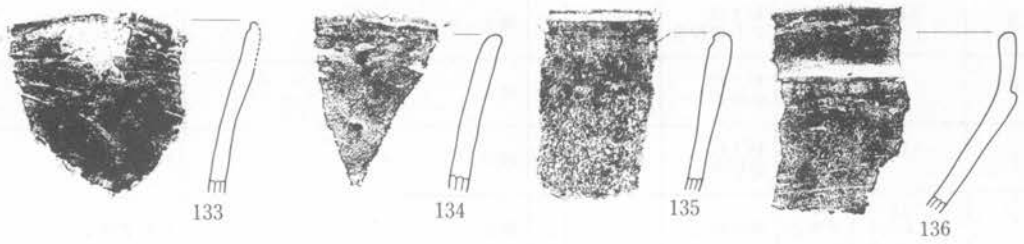
71	ヌ12-12 1	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	斜行条線文	
72	105 1	茶褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	ＲＬ縄文	
73	12 325	茶褐色	微砂粒含		○	ＲＬ多縄文	
74	Ｂ一括	黄褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	沈線による弧状区画内にＬＲの多縄文	
75	リ10-23 11～20 1	暗褐色	微砂粒含	ミガキ	○	ＲＬ多縄文	
76	リ11-9 11～20 3	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	ＬＲ多縄文	
77	リ14-21 1	暗褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線区画内にＬＲ多縄文	精製
78	107 140	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口縁部直下に連続刺突文 沈線区画内にＲＬ多縄文	
79	リ12-23 2②	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線による区画内をＲＬ多縄文	精製
80	リ12-23 2①	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	瘤状の貼付文を中心に沈線による区画内をＲＬ多縄文	
81	チ15-6 1③	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	沈線による区画内をＲＬ多縄文	
82	リ12-4 43	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口縁部外側に連続刺突文 胴部ＲＬ多縄文	
83	012 58	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線区画内にＲＬ多縄文	精製
84	リ12-3 33	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線区画内にＬＲ多縄文	精製
85	015 273	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	ＲＬ多縄文	精製
86	リ12-4 58	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線区画内にＲＬ多縄文	精製
87	リ12-4 74	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線区画内にＬＲ多縄文	
88	リ12-12 27	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	磨消縄文 沈線による区画内にＬＲ縄文	
89	チ11-16 9	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	磨消縄文 沈線による区画内にＬＲ縄文	
90	チ11-16 10	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	磨消縄文 沈線による区画内にＬＲ縄文	
91	チ11-16 13	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	磨消縄文 沈線による区画内にＬＲ縄文	
92	リ11-20 1	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	半截竹管による平行沈線内に瓜形刺突文	
93	チ15-13 2	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	半截竹管による平行沈線内に瓜形刺突文	
94	0000	暗褐色	微砂粒含	ミガキ	○	半截竹管による平行沈線内に瓜形刺突文	

95	ヌ13-11 3	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	縄文を地文とする斜格子条線文	口縁部内側に1条の沈線
96	リ10-13 2、3、7、8、12、13 17、18、23、 3	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	縄文を地文とする斜格子条線文	
97	リ13-15 1	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	縄文を地文とする斜格子条線文	口縁部内側に1条の沈線
98	ヌ13-11 3④	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	縄文を地文とする斜格子条線文	
99	ヌ13-11 3⑤	暗褐色	微砂粒含	ナデ	○	縄文を地文とする斜格子条線文	
100	ヌ15-16 2	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	斜格子条線文	
101	リ12-12 27	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	縄文を地文とする斜格子条線文	
102	リ12-16 76	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	縄文を地文とする斜格子条線文	口縁部内側に1条の沈線
103	リ12-17 22	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	縄文を地文とする斜格子条線文	
104	リ12-21 4	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	縄文を地文とする斜格子条線文	
105	リ12-4 62	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口縁外側に押圧痕付き隆帯、胴部沈線による縦位の磨消帯をはさみ、縄文を地文とする条線文	
106	チ14-17 9	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	沈線区画内にＬＲ縄文	
107	チ14-17 12	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線区画内にＬＲ縄文	
108	チ14-17 6	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	ＬＲ縄文	
109	チ14-17 16	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線区画内にＬＲ縄文	
110	チ11-16 6	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	口縁部2条の刻目文 胴部ＬＲ縄文	
111	リ11-21 28	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	口唇部外側1条の刻目文 胴部ＲＬ縄文	
112	リ15-25 2	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	口縁部ＲＬ多縄文	
113	チ15-4 3	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	沈線区画内にＬＲ縄文	
114	012 325②	暗褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口唇部直下に刻目文付きの沈線 胴部沈線による弧状区画内にＲＬ縄文	
115	リ12-13 34	暗褐色	微砂粒含	ナデ	○	沈線区画内にＬＲ縄文	
116	リ10-24 1～5 10	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	△	無文	浅鉢
117	チ15-4 3	暗褐色	微砂粒含	ナデ	○	胴部沈線による弧状区画内にＲＬ縄文	
118	リ12-25 1	暗褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口縁部ＲＬ縄文	

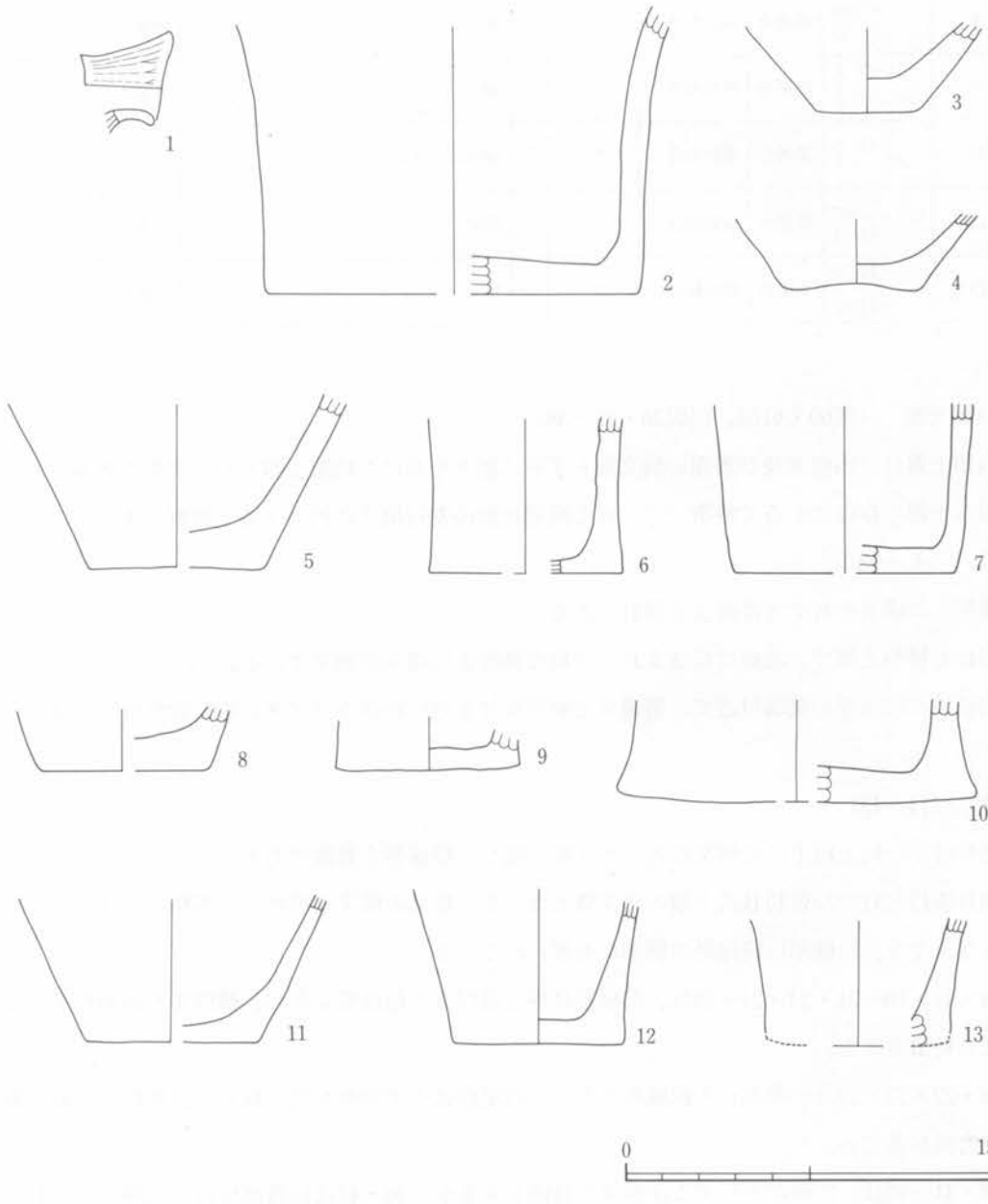
119	012 61，254	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	ＬＲ縄文を地文として３条の沈線が走る	
120	リ12-18 1	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	ＬＲ縄文を地文として３条の沈線が走る。	
121	リ16-８ 1	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口縁部付近　斜行条線文 胴部斜格子沈線文	
122	リ13-２ 1	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	胴部沈線区画内にＲＬ縄文	
123	004 121	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	組違い平行条線文	精製
124	リ12-24 1	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	口縁部無文 刻目文を境に組違い平行条線文	
125	ヌ13-９ 1	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	口縁部無文 刻目文を境に組違い平行条線文	
126	ヌ13-11 3	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口唇部押圧痕 胴部無文	精製、浅鉢
127	007 64②	暗褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口唇部押圧痕 胴部無文	精製、浅鉢
128	007 64①	暗褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口唇部押圧痕 胴部無文	精製、浅鉢
129	リ12-18 1	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口唇部押圧痕 胴部無文	精製、浅鉢
130	リ12-４ 24	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	無文	浅鉢
131	ヌ13-11 2②	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	無文	精製、浅鉢
132	007 7	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	無文	精製、浅鉢
133	リ10-12 2、3、8、12、13、17、18、22	暗褐色	微砂粒含	ナデ	○	無文	
134	ヌ16-１ 1	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	無文	
135	ヌ15-16 1	黄褐色	微砂粒含	ナデ	△	口縁部外側に１条の沈線 無文	
136	チ15-４ 3①	黒褐色	微砂粒含	ナデ	○	口縁部と胴部の境に稜をもつ	浅鉢

第11表

挿図番号	グリッド 遺物番号	色　調	胎　土	調整(内面)	焼成	施　　文	備　　考
10類， 13類	異形把手・底部						
1	リ10-22 11～20 9	暗褐色	微砂粒含	ナデ	○	耳状把手	外面こまかいケズリ
2	チ14-18 3、11、12、15、16、18	黄褐色	粘土粒含	ナデ	○	無文	外面ナデ
3	ヌ11-８ 11～20 11	茶褐色	岩石粒含	ナデ	○	肋骨状の斜線文	



13類 土器(7)



第59図　13類(7)・10類・13類把手及び底部

4	リ15-25 2	暗褐色	粘土流 岩石細粒含	ナデ	○	無文	
5	表採	黄褐色	粘土粒 砂粒含	ナデ	○	無文	外面丁寧なミガキ
6	ヌ13-9 1	茶褐色	粘土粒 砂粒含	ナデ	○	無文	外面ナデ
7	リ11-3 1～5 6	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	無文	外面丁寧なナデ
8	チ13 一括	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	縦位のこまかいケズリ	外面ナデ
9	088 21	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	無文	外面ナデ
10	リ10-23-1 -5 8	暗褐色	微砂粒含	ナデ	△	無文	外面ナデ
11	リ15-3 1	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	縦位のこまかいミガキ	外面ミガキ
12	087 12,14	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	無文	外面ナデ
13	チ14-18 7 チ14-22	茶褐色	微砂粒含	ナデ	△	無文	外面ナデ

14類土器　(第60・61図、図版36・37・38)

14類土器は、内壁面及び器面の無文部を丁寧に磨きをかけた精製土器とし、実用を本意とする粗製の土器の存在によって特徴づけられる晩期初頭の安行III式に相当する土器群である。

A種　(1～13)

隆帯上に縄文を有する帯縄文土器群である。

いづれも精製土器で、沈線にはさまれた平坦な隆帯上に縄文が施文される。

13は波状口縁部の突端付近で、帯縄文と刺突文付きのいわゆる『ブタの鼻』状貼付文が見られる。

B種　(14～43)

貼り付けた粘土紐上に爪形文に近い押圧痕を施した紐線帯土器群である。

13類B種15～41の加曽利B式土器の施文様と比べると地文の縄文が退化し、本類ではほとんど見られなくなり、口縁部の紐線帯が胴部にも現われている。

14～17・19～21・24・27～29は、口縁部に押圧痕付きの紐線帯を有し、横位または斜行する条線文を特徴とする。

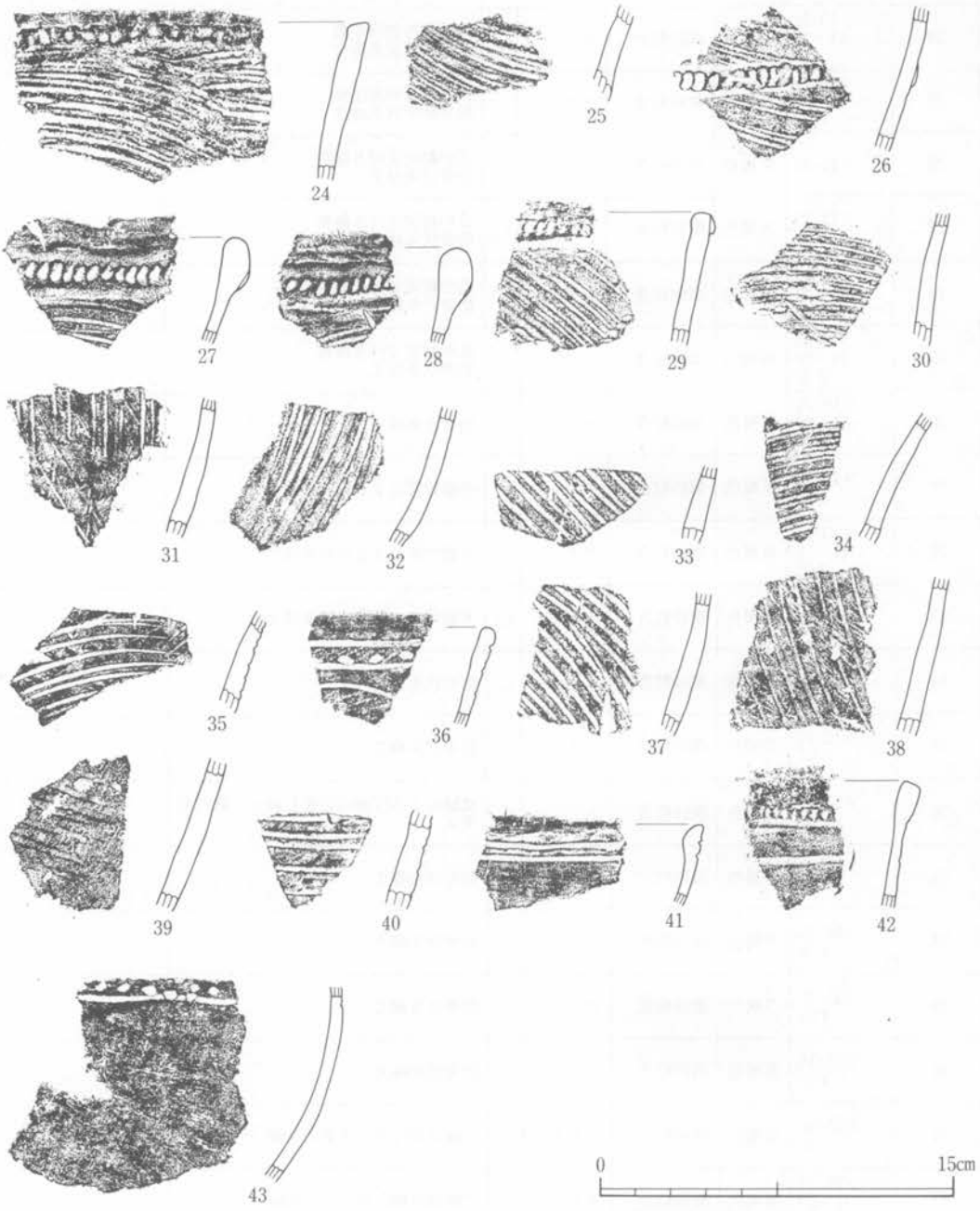
18・22・23・26は、胴部にも紐線帯を有し、内壁面はナデ調整が見られるが、粗製の土器で器面の磨滅が著しい。

36・41～43は、口縁に平行する沈線文を特徴とするが、36・42は口縁部付近に沈線と平行して連続刺突文を有する。

第60図　14類土器(1)

第12表

挿図番号	グリッド 遺物番号	色　調	胎　土	調整(内面)	焼成	施　　文	備　　考
14類土器							
1	チ15-20 2	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	瘤状貼付文、沈線による横帯区画内に縄文	
2	ヌ15-21 1①	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	ＬＲ縄文を地文とする平行沈線文	波状口縁
3	ヌ11-21 1～5 3②	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	平行沈線による文様帯の中にＲＬ縄文	
4	リ11-14 11～20 1	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	平行沈線による文様帯の中にＲＬ縄文	
5	87 34	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	平行沈線による帯状の施文帯にこまかいＲＬ縄文	
6	リ15-25 2	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	沈線で区画された文様帯内にＲＬ縄文	
7	ヌ11-6 1～5 27②	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	平行沈線で区画された文様帯内にＬＲ縄文	
8	リ11-20 11～20 10	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	口縁部沿いの文様帯にＲＬ縄文	
9	リ15-15 1⑦	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	沈線に上下をはさまれた文様帯内にＲＬ多縄文	
10	ヌ15-21 1②	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	口縁部に沿った文様帯にＲＬ縄文	
11	ヌ11-6 1～5 27①	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	沈線区画内にＲＬ縄文	
12	リ12-3 20	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	縦位の沈線区画内にＲＬ縄文	
13	リ15-15 2①	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	波状口縁区画内にＲＬ縄文	
14	リ15-15 1①	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	瓜形刺突文付き隆帯、斜行条線文	
15	リ12-3 15	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	瓜形刺突文付き隆帯、斜行条線文	
16	ヌ15-21 1④	黄褐色	微砂粒含	ナデ	△	瓜形刺突文付き隆帯、斜行条線文	
17	リ12-20 2	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口縁部外側に帯状の瓜形刺突文	口縁部内側に巾広の沈線
18	リ11-3 1～5 6	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	瓜形刺突文付き隆帯、縄文を地文とする斜行条線文	
19	リ10-21 11～20 1①	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	斜行条線文	
20	ヌ15-21 1③	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	瓜形刺突文付き隆帯 斜行条線文	
21	リ12-15 11～20 8	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	瓜形刺突文付き隆帯、斜行条線文	
22	リ15-15 1②	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	瓜形刺突文付き隆帯、斜行条線文	



第61図　14類土器(2)

23	リ10-24 1～5 7	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	瓜形刺突文付き隆帯 斜行条線文	
24	リ10-22 11～20 15	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	口縁部外側押圧痕 胴部肋骨状条線文	
25	リ10-22 11～20 18①	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	口縁部外側押圧痕 胴部肋骨状条線文	
26	チ15-25	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	瓜形刺突文付き隆帯 肋骨状条線文	
27	リ15-20 1	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	瓜形刺突文付き隆帯 肋骨状条線文	
28	リ15-10 1②	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	瓜形刺突文付き隆帯 肋骨状条線文	
29	リ10-23 11～20 2①	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	瓜形刺突文付き隆帯 肋骨状条線文	
30	リ10-21 11～20 1③	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	肋骨状条線文	
31	リ15-15 1④	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	半截竹管による平行条線文	
32	リ10-23 11～20 2②	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	半截竹管による平行条線文	
33	チ11-16 12	暗褐色	微砂粒含	ミガキ	○	半截竹管による平行条線文	
34	リ10-21 11～20 1②	暗褐色	微砂粒含	ナデ	○	肋骨状条線文	
35	リ12-12 27	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	肋骨状条線文	
36	ヌ13-17 1	黄褐色	微砂粒含	ナデ	○	沈線による区画内にＲＬ縄文と楕円刺突文	
37	チ14-18 18	茶褐色	微砂粒含	ミガキ	○	肋骨状条線文	
38	リ15-15 1③	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	肋骨状条線文	
39	リ15-10 1①	茶褐色	微砂粒含	ナデ	○	肋骨状条線文	
40	リ15-15 1⑥	黒褐色	微砂粒含	ナデ	○	肋骨状条線文	
41	チ15-8 3	黄褐色	微砂粒含	ミガキ	○	口縁に平行する２条の沈線	
42	リ10-24 11～20 1	暗褐色	微砂粒含	ナデ	△	口縁部外側に刻目文＋沈線	
43	リ15-15 2②	茶褐色	微砂粒含	丁寧なナデ	○	沈線と連続刺突文	

縄文時代の石器　（第62・63・64・65図、図版39・40・41）

打製石斧　（1～4）

1は安山岩製で、木製ソケットに差し込み式の石斧と考えられるが、刃部付近で大きく欠損しており、使用によるものと考えられる。

2は両縁部中央に大きな抉りを入れ、木製の柄に固定した分銅式の石斧である。

3は片面に自然面を残して、片面のみを調整し成形した石斧。

4は、両縁部中央付近に抉りを有する2と同様のタイプの石斧の欠損品である。

磨製石斧　（5）

5は、小形で自然面をそのまま利用しており、刃部は丁寧な磨きによって片面のみを整形している。

石鏃　（6～12）

いづれも無茎の三角鏃で、6・7・9・12は黒曜石、8はチャート、10は安山岩、11は頁岩と素材は多様である。

敲石　（1・18・20）

18・20は、手のひらで握るのに都合のよい形状の礫岩をそのまま利用したものである。

磨り石　（16・17・19・22）

16・17は砂岩、19は石英斑岩、23は礫岩の横側面を利用した磨石で、使用痕も明瞭である。

石皿　（21・23～25）

21は、砂岩製の欠損品で小破片部分のみの遺存であり、23は安山岩系の石材を用いた石皿の欠損品で、裏面には穿孔痕が残り、この面が凹状に緩やかな曲面を描くことからも、木の実等を粉砕する際の固定孔の可能性が考えられる。

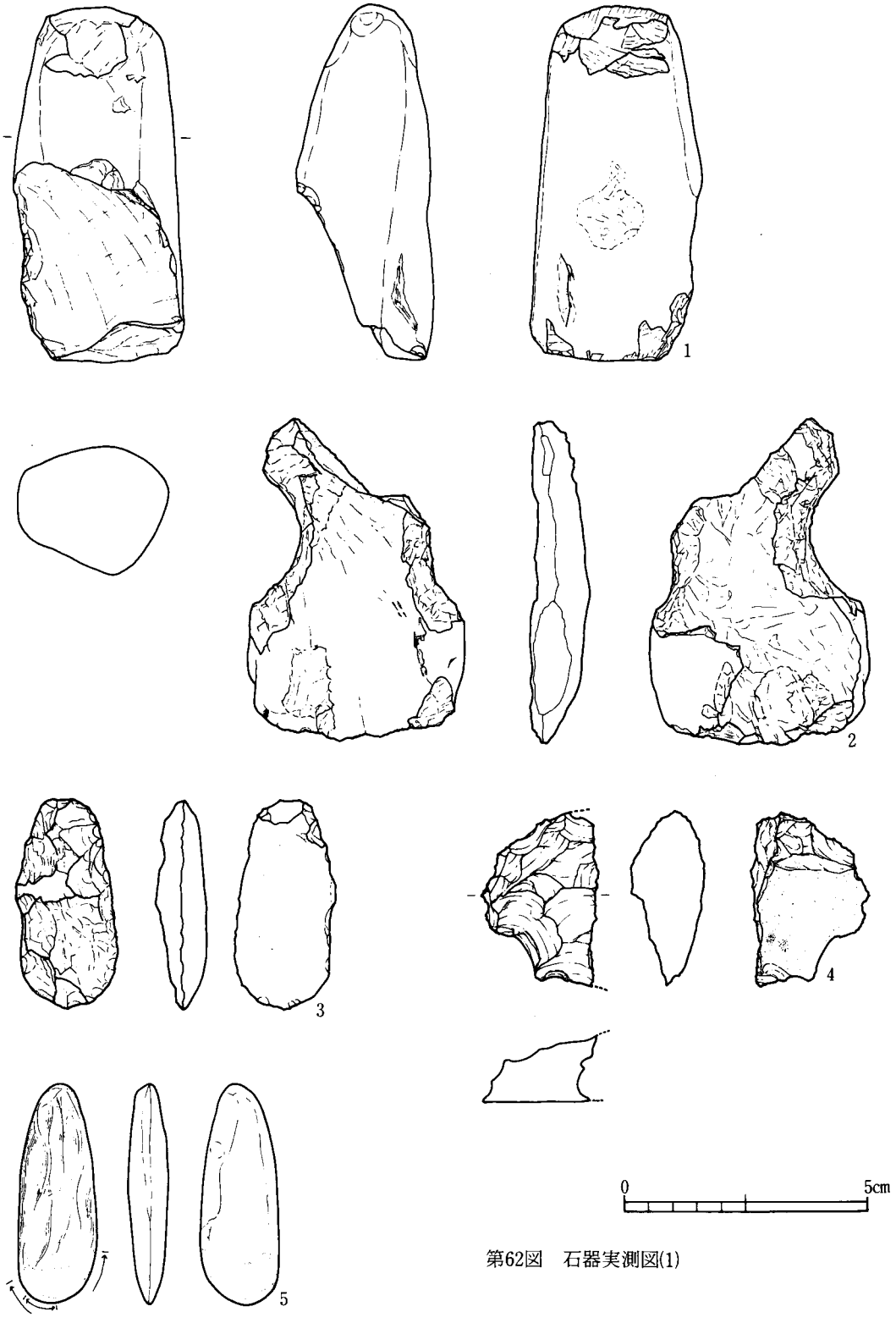
火起こしの際の磨擦痕の可能性は、石皿のバランスを考えると妥当ではない。

25は大型の自然礫を利用した石皿であり、両面ともに使用された痕跡を有している。

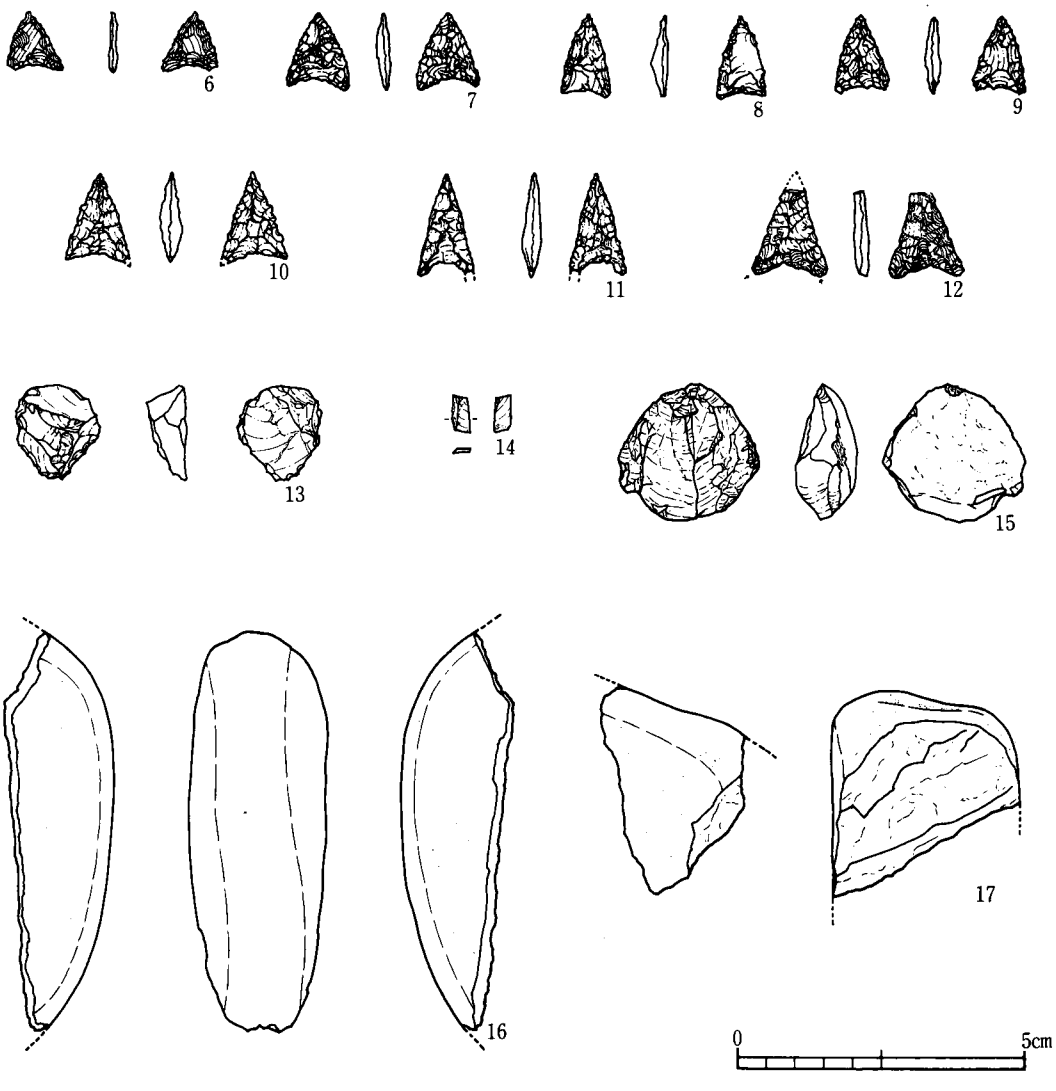
第13表

挿図番号	石器名	遺物番号	所属ブロック	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質
1	石斧	リ15－23－1	縄文時代	110.0	53.5	40.0	260	安山岩
2	石斧	リ10－12 10・15・20・25 1	〃	98.0	67.0	18.0	130	蛇紋岩
3	石斧	リ11－15　11～20 4	〃	64.0	31.5	15.5	35	安山岩
4	石斧	ヌ11－7　11～20 1	〃	53.0	36.5	22.5	40	安山岩
5	石斧	ヌ11－16　1～5 2	〃	67.0	25.0	12.5	30	粘板岩
6	石鏃	表採	〃	15.5	14.5	2.3	0.3	黒曜石
7	石鏃	表採	〃	20.0	17.0	4.0	1.0	黒曜石

8	石　　鏃	表　　採	〃	21.0	13.0	4.5	0.8	チャート
9	石　　鏃	チ14—17—3	〃	20.0	14.0	4.0	0.7	黒曜石
10	石　　鏃	チ14—17—1	〃	24.0	17.0	6.0	1.5	安山岩
11	石　　鏃	135—0168	〃	27.0	15.0	5.0	1.3	頁　　岩
12	石　　鏃	チ11—16—4	〃	22.5	20.0	4.0	1.2	黒曜石
13	削　　器	ヌ12—21—8	〃	24.0	22.0	10.0	6.2	玄武岩
14	チ　ッ　プ	ヌ13—1—10	〃	10.0	5.0	1.0	0.05	黒曜石
15	剝　　片	リ16—19—1	〃	35.5	37.5	16.0	17.7	頁　　岩
16	磨　　石	リ15—25—2	〃	102.0	29.0	37.0	130	砂　　岩
17	磨　　石	ヌ12—16—3	〃	56.0	39.0	49.0	80	砂　　岩
18	敲　　石	リ11—19　1～5 46	〃	80.0	65.0	38.0	260	礫
19	磨　　石	リ16—14—1	〃	40.0	47.0	53.0	100	石英斑岩
20	敲　　石	リ11—20　1～5 7	〃	73.0	48.0	52.0	240	礫
21	石　　皿	リ10—19　5・15 1	〃	31.0	21.0	25.0	18.6	砂　　岩
22	磨　　石	ヌ11-6　ヌ11-7 11～20　11～20 1　5	〃	87.0	62.0	46.0	345	礫
23	石　　皿	リ11—4　1～5 5	〃	140.0	112.0	63.0	920	しそ輝石角閃 安山岩
24	石　　皿	チ13—8—1	〃	115.0	111.5	38.0	690	花崗岩
25	石　　皿	212—026 チ18—16—1	〃	274.0	256.0	55.0	5,100	礫

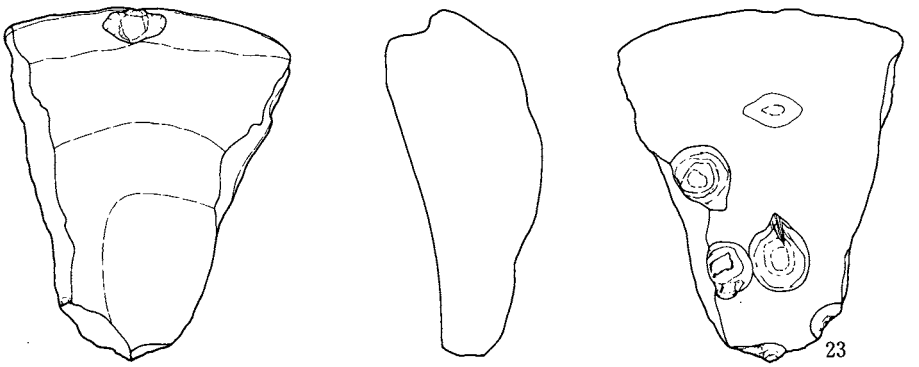


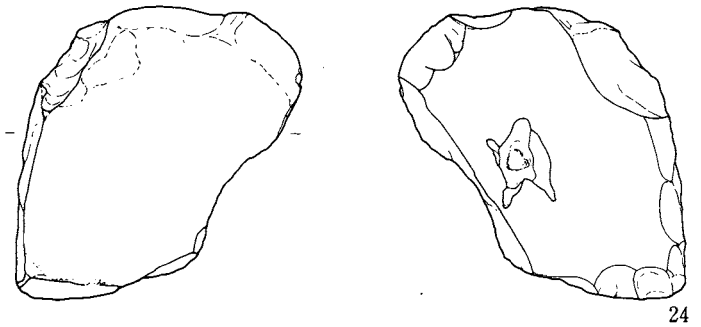
第62図　石器実測図(1)

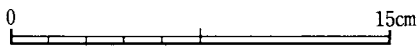


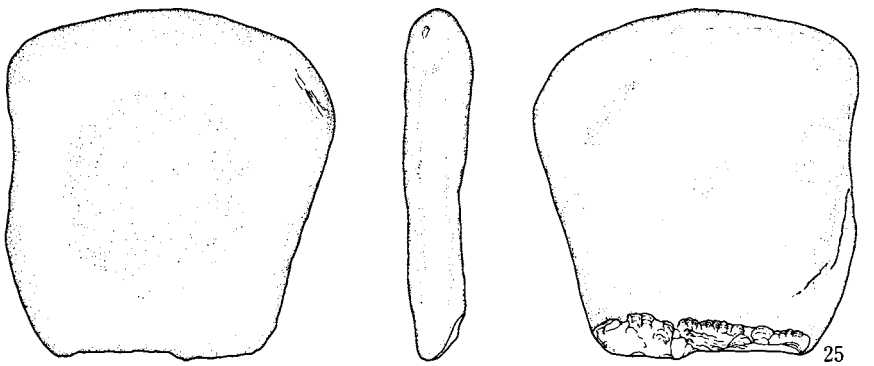
第63図　石器実測図(2)

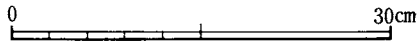
第64図　石器実測図(3)



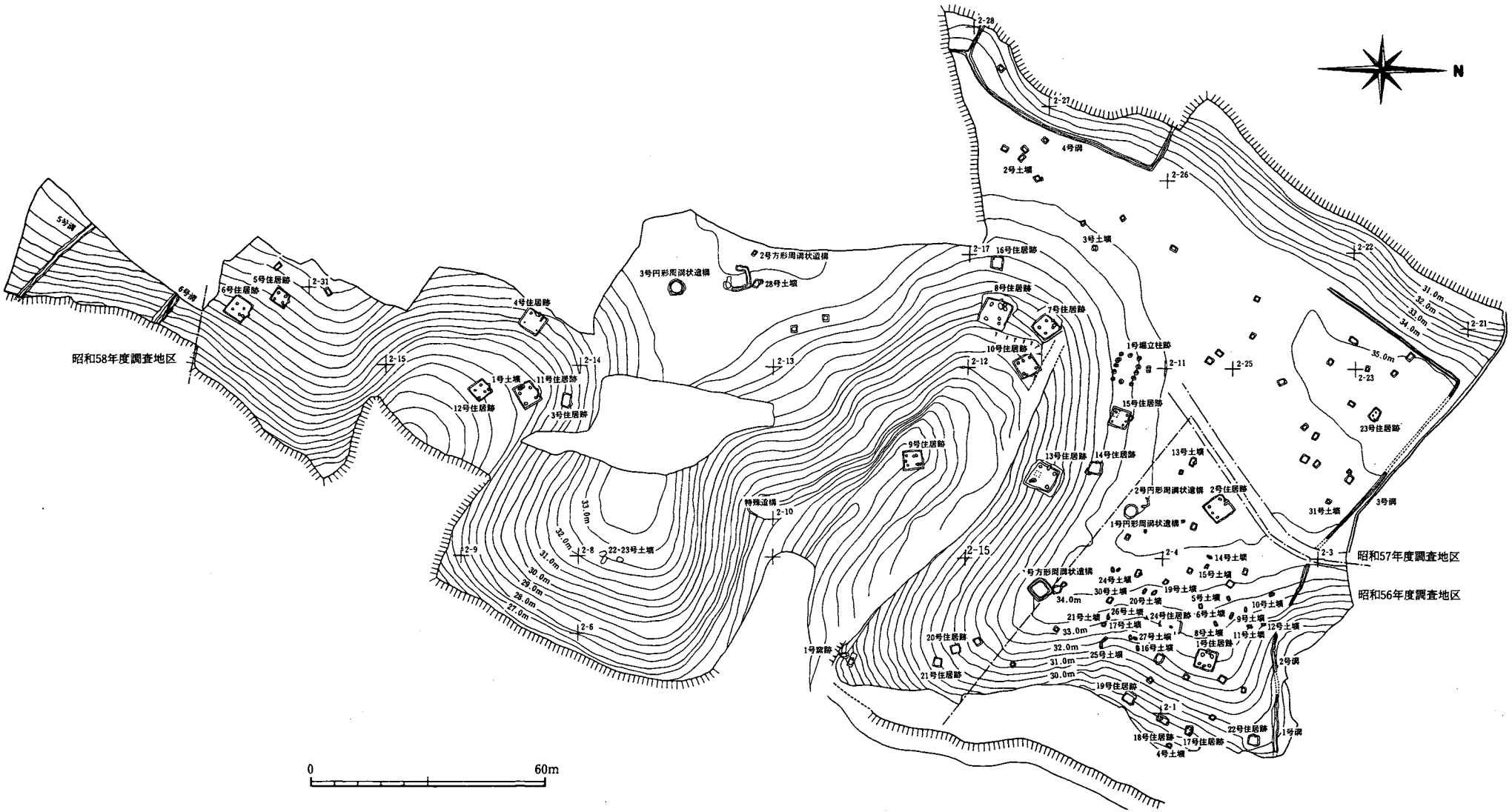








第65図　石器実測図(4)



第66図　古墳時代・歴史時代の遺構配置図

第3節　古墳時代・歴史時代

概　　観

腰巻遺跡において最も特色のある遺構を検出した時期である。

古墳時代・歴史時代の住居跡23軒、掘立柱跡1棟、特殊遺構1箇所、方形及び円形周溝状遺構5基、窯跡1箇所、中近世及び現代の炭窯50基、溝状遺構6本が含まれる。

また、土坑については先土器時代のもの1基と時期不詳の32基についても、本節で扱うこととした。

住居跡は、その多くが東南方向に開いた二つの大きな谷津に面しており、斜面を登り詰めた平坦部分には、23軒中わずかに2軒のみ検出された。

各住居跡の観察の視点は次の要領に従った。

検出状況　住居跡の出土した位置。

形状・規模　住居跡のカマドを基準とする主軸の方位、平面形及び規模（長軸×短軸）。

覆土　住居跡内に堆積した覆土の状況を土層観察図をもとにした補足。

床面　住居跡の床面のつくり及び掘方に関する特徴。

カマド　住居跡内に占める位置とカマドの状況。

柱穴　住居跡内に検出された柱穴の本数と柱穴内の土層は可能なものについての観察。

貯蔵穴　貯蔵穴の有無及びその位置。

遺物出土状況　住居跡に関係する遺物の出土位置と垂直分布。

遺物　出土遺物の器種と特徴。

1号住居跡　（009）（第67・68・69・70図、図版42・57）

検出状況　調査区の北東端の台地で東に傾斜する標高32mの斜面に位置する。

形状・規模　主軸の方位はW—18°—N、5.1m×5.0mの方形を呈し、カマドのある壁側を中心に斜面の上方外周に突出した浅い掘込み面が検出されており、上屋の構造と関連する造成部分と考えられる。

覆土　1・2層は、3・4両層の堆積に続いて急速に堆積したものと考えられ、1層中に多量の焼土を含むことは本住居跡の廃絶と関りを持つ可能性が強い。

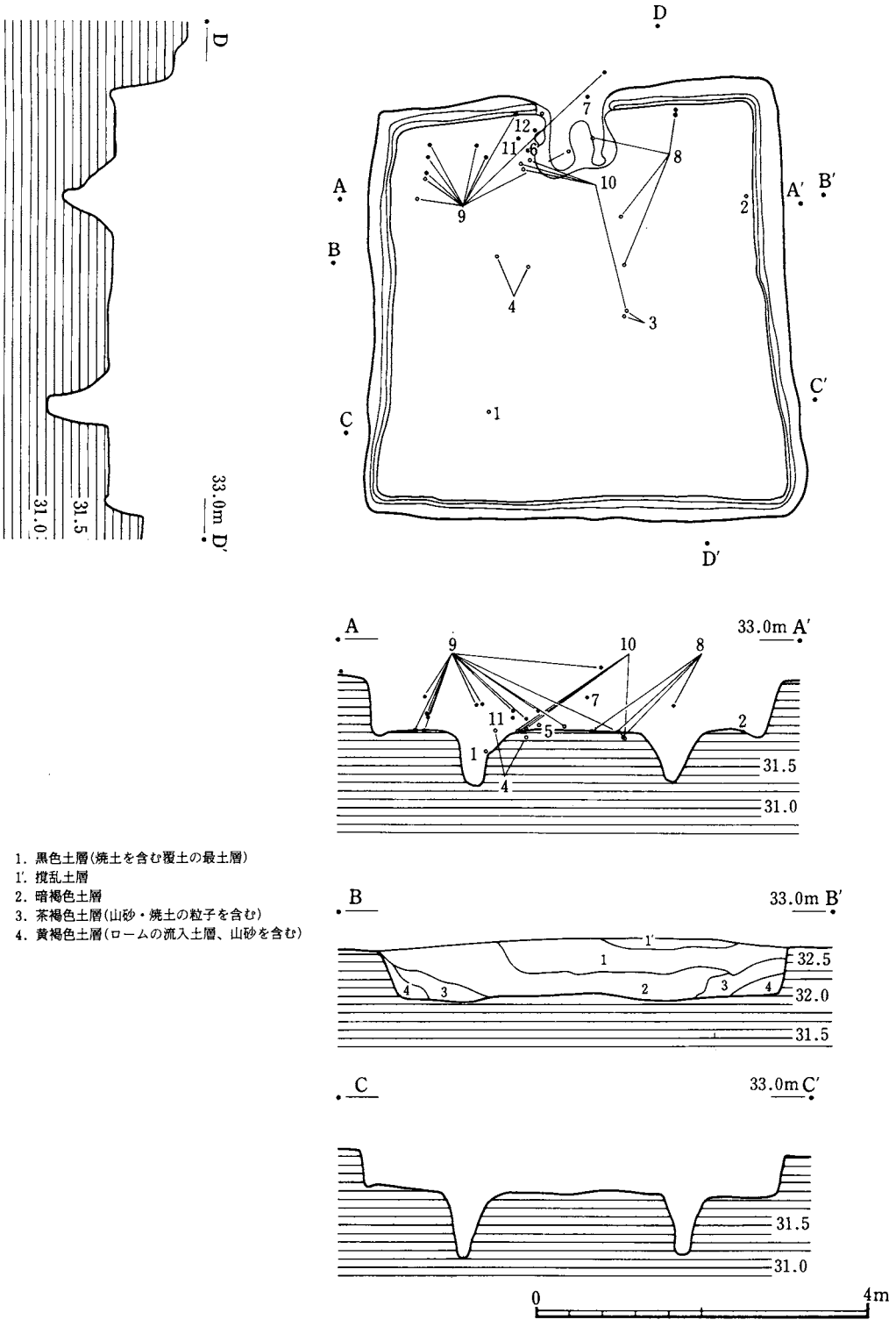
床面　貼床は見られず、ハードロームを堅くつき固めている。

床面に焼成痕は明瞭ではないが、壁面に沿う周溝内には若干の焼土粒・炭化物を検出した。

周溝は全周し、数本のピットを伴う。

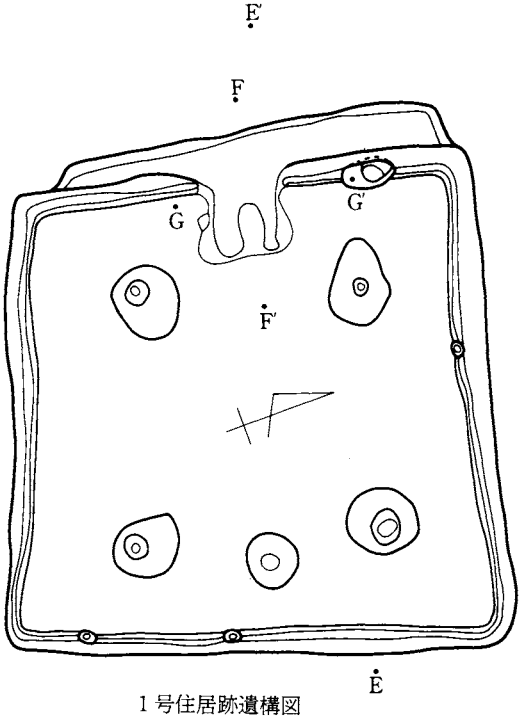
カマド　西壁の中央部分に位置し、カマドの袖部の基部はハードロームである。

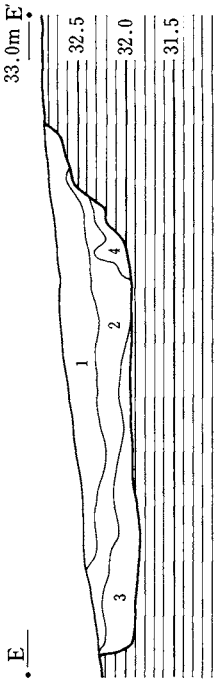
住居の構築時に既に計画的な間取りが行なわれ、カマドの位置の決定された時点で基部を掘り残



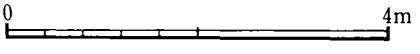
1. 黒色土層(焼土を含む覆土の最土層)
1'. 撹乱土層
2. 暗褐色土層
3. 茶褐色土層(山砂・焼土の粒子を含む)
4. 黄褐色土層(ロームの流入土層、山砂を含む)

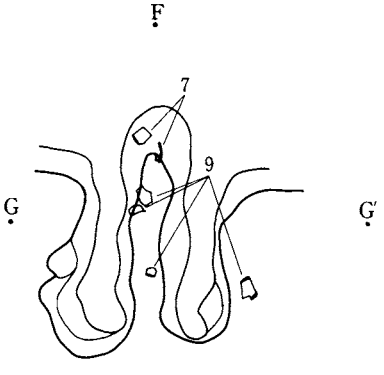
第67図　1号住居跡遺物出土状況図

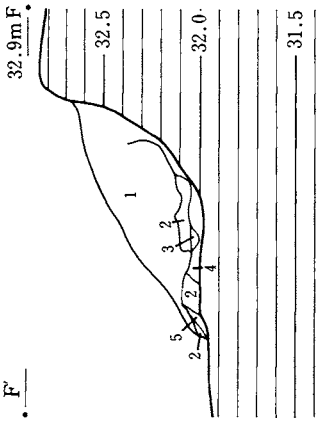


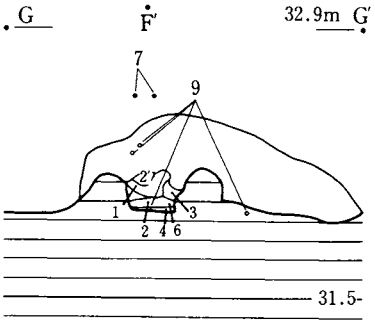


1号住居跡遺構図

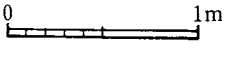








1. 暗褐色土層(覆土の崩落土に多量の山砂を混入)
2. 焼土層
2′. 暗褐色土層(山砂を主体として焼土粒を含む)
3. 山砂層(カーボン粒を多量に含む)
4. 黒褐色土層
5. 明褐色土層(焼土粒を含む山砂層)
6. ローム層(カマド床下面の土層)



1号住居跡カマド実測図

第68図　1号住居跡遺構図、カマド実測図

し、カマドの構築用粘土の使用量を最小限度に押さえている。

柱穴　柱穴は、カマドの対面に1本を加えた5本タイプである。

貯蔵穴　なし。

遺物出土状況　出土遺物はカマドを中心に検出され、1～5・8・10は床面直上の出土であり、12はカマド内の出土である。

遺物　1・2は土師器の坏であるが、いづれも器表面は横位のヘラケズリが見られるものの、磨滅が著しく内面も同様に荒れている。

4は鉢状の椀形土器、5は小型の甕で、口縁部はほぼ直立して端部で細くしぼられた形態を示している。

6・8～12は土師器の甕。

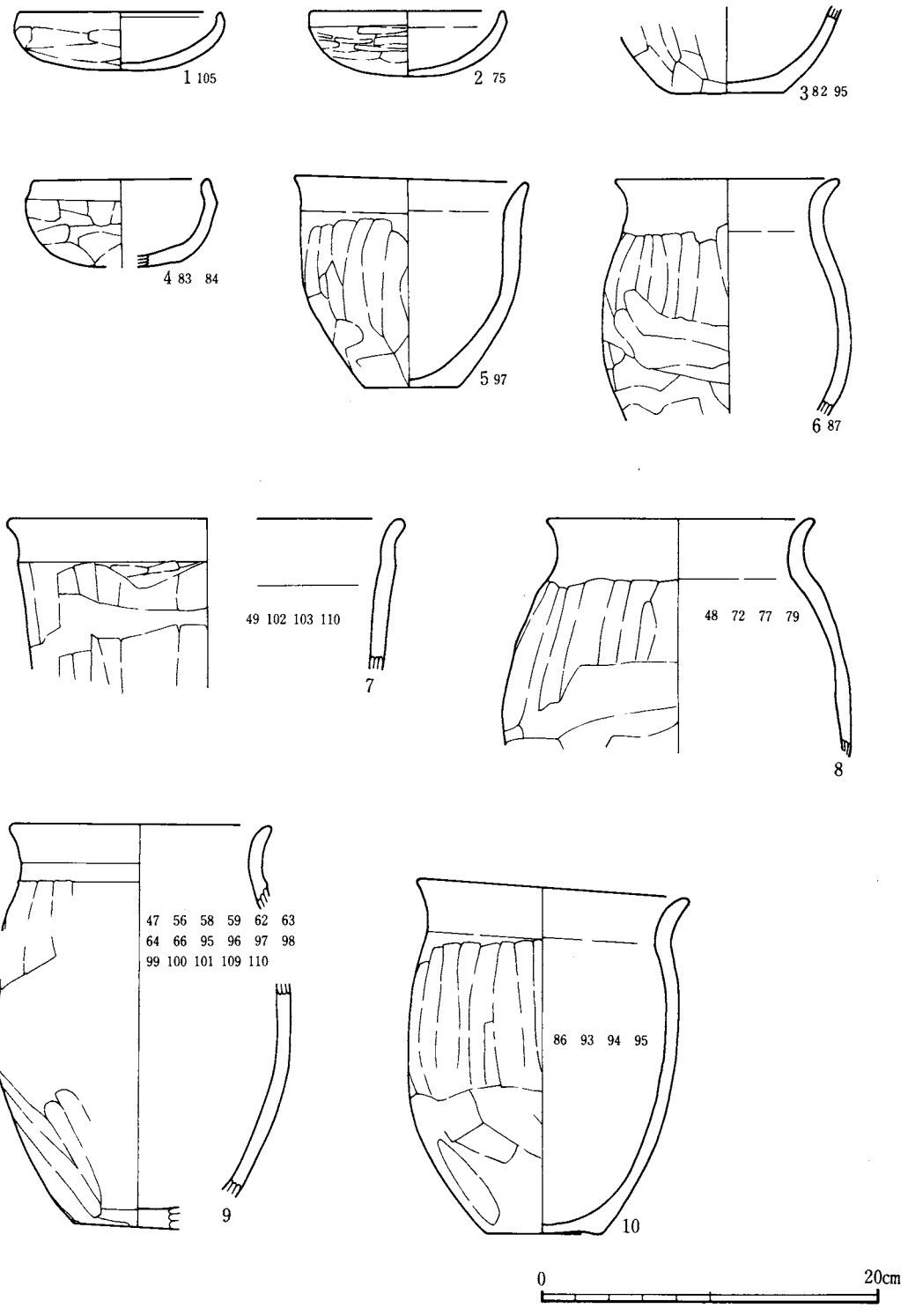
6・8～10は口縁部の外反は小さめで、胴部長の発達のきざしの認められる甕である。

7は遺存する胴部から口縁部にかけて、ほぼ直立する甑である。

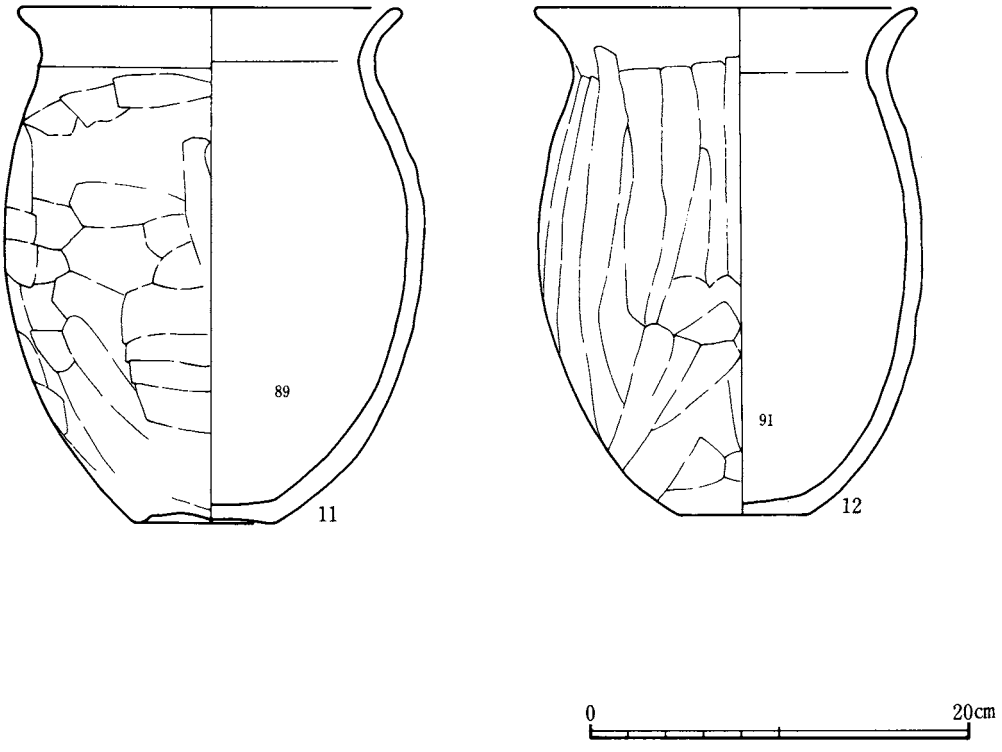
11・12は口縁部が逆八の字状に開口し、胴部は丸味を持った張りを維持しながら胴部長を増した大型の甕である。

焼成　○良好、△普通、×劣　**第14表**

No.	器種	法量（㎜）				遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴（成形・調整）
		器高	口縁径	底部径	胴部径					
1	坏	35	121	—	127	ほぼ完形	○	明褐色	大粒の粘土粒を含む 精	口唇部外面ヨコナデ　胴部内面ナデ 胴部外面横位のヘラケズリ
2	坏	39	116	—	119	完形	○	暗褐色	石英細粒を含む 精	口縁部内外面ヨコナデ　胴部両面丁寧なミガキ 胴部外面横位の丁寧なミガキ
3	甕	—	—	66	—	1/8	○	黒褐色	石英細粒を含む 粗	胴部外面下半縦位のヘラケズリ、底部付近内面、指頭による丁寧なナデ
4	椀	52	103	—	113	ほぼ完形	○	明褐色	砂粒、粘土粒を多量に含む 精	口縁部内外面ヨコナデ、底部外面に著しい剥離 胴部横位のヘラケズリ、底部内面には指頭によるナデ
5	小型甕	125	140	58	132	〃	○	内面　褐色 外面　赤褐色	石英、長石の細粒を含む 精	口縁部内外面ヨコナデ　胴部内面ナデ 胴部外面上半縦位のヘラケズリ、下半斜位のヘラケズリ、底部はヘラケズリ後のナデ
6	小型甕	—	132	—	147	3/8	○	明褐色	砂粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　胴部内面ナデ 胴部外面上半縦位のヘラケズリ、下半横位のヘラケズリ
7	甑	—	232	—	—	1/12	○	茶褐色	砂粒を含む	胴部外面上半縦位のヘラケズリ、内面ナデ
8	甕	—	157	—	206	1/2	○	内面　褐色 外面　明褐色	砂粒、岩石細粒を含む 精	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面上半縦位のヘラケズリ、下半横位のヘラケズリ
9	甕	237	153	—	177	1/2	○	暗褐色	長石細粒を含む 精	口縁部内外面ヨコナデ　胴部内面ナデ 胴部外面上半縦位のヘラケズリ、下半斜位のヘラケズリ、底部はヘラケズリ
10	甕	204	162	68	160	ほぼ完形	○	内面　明褐色 外面　暗褐色	砂粒及び岩石細粒を含む 粗	口縁部内外面ヨコナデ　胴部内面ナデ 胴部外面上半縦位のヘラケズリ、下半斜位のヘラケズリ、底部は一方向のナデ
11	甕	269	204	73	224	〃	○	内面　褐色 外面　暗褐色	砂粒を多量に含む	口縁部内外面ヨコナデ　胴部内面ナデ 胴部外面横位のヘラケズリ後のナデ　底部は一方向のナデ
12	甕	264	200	68	202	〃	○	内面　暗褐色 外面　褐　色	砂粒を多量に含む 精	口縁部内外面ヨコナデ　胴部内面ナデ 胴部外面上半縦位のヘラケズリ、下半斜位のヘラケズリ、底部は一方向のナデ



第69図　1号住居跡遺物実測図(1)



第70図　1号住居跡遺物実測図(2)

2号住居跡　(012)（第71・72・73・74・75図、図版43・58）

検出状況　調査区の北東端の台地でほぼ中央部の標高34mの平坦部分に位置する。

形状・規模　主軸の方位はN—40°—W、6.0m×5.9mの方形で掘込みの深い住居跡である。

覆土　出土遺物は2・3層中に含まれており、1層はこれらの堆積土を被うものであり本住居跡の埋没時よりも後の堆積土層と考えられる。

床面　貼床ではなく、ハードロームを堅くつき固めている。

カマド　北西壁の中央部分に位置し、袖の基部にはハードロームを掘り残した状態で構築しており、1号住居跡と同様に本住居跡構築時にカマドの位置を決定し、計画的に竪穴の掘込みを行なったものと考えられる。

柱穴　カマドの対面に１本を加えた５本タイプであり、柱穴の掘込みは浅く幅もせまいことから、柱の太さもあまり大型のものではなく10～15cm程度と考えられる。

貯蔵穴　なし。

遺物出土状況　カマド内及び床面に残留遺物が多数検出されたが、破片も多く、住居廃絶時の投棄の可能性も考えられる。

遺物　１・２は須恵器蓋であり、ともに小型化して全体に丸味をおびている。

３は須恵器坏身であるが受け部は認められず、一見蓋と見誤る程の形態を示すものの、やや陥没ぎみの底部のつくりが特徴である。

４～７は土師器の坏であり、体部器表面にはいづれも横位のヘラケズリ痕を有するが、磨滅が著しく、口縁部付近の調整が不安定である。

なお、５は床面直上の、６・７はカマド内の出土である。

８・９は鉢状の椀形土器。

10～12・14は甕であり、10は床面直上の、12・14はカマド内の出土である。

このうち、12は胴部下半のみの遺存であるが、器表面にはヘラ状工具の先端によると考えられる丁寧な磨き調整が認められる。

13は甑。

15～25・28～36は土製丸玉、26は石製臼玉、27は石製丸玉である。

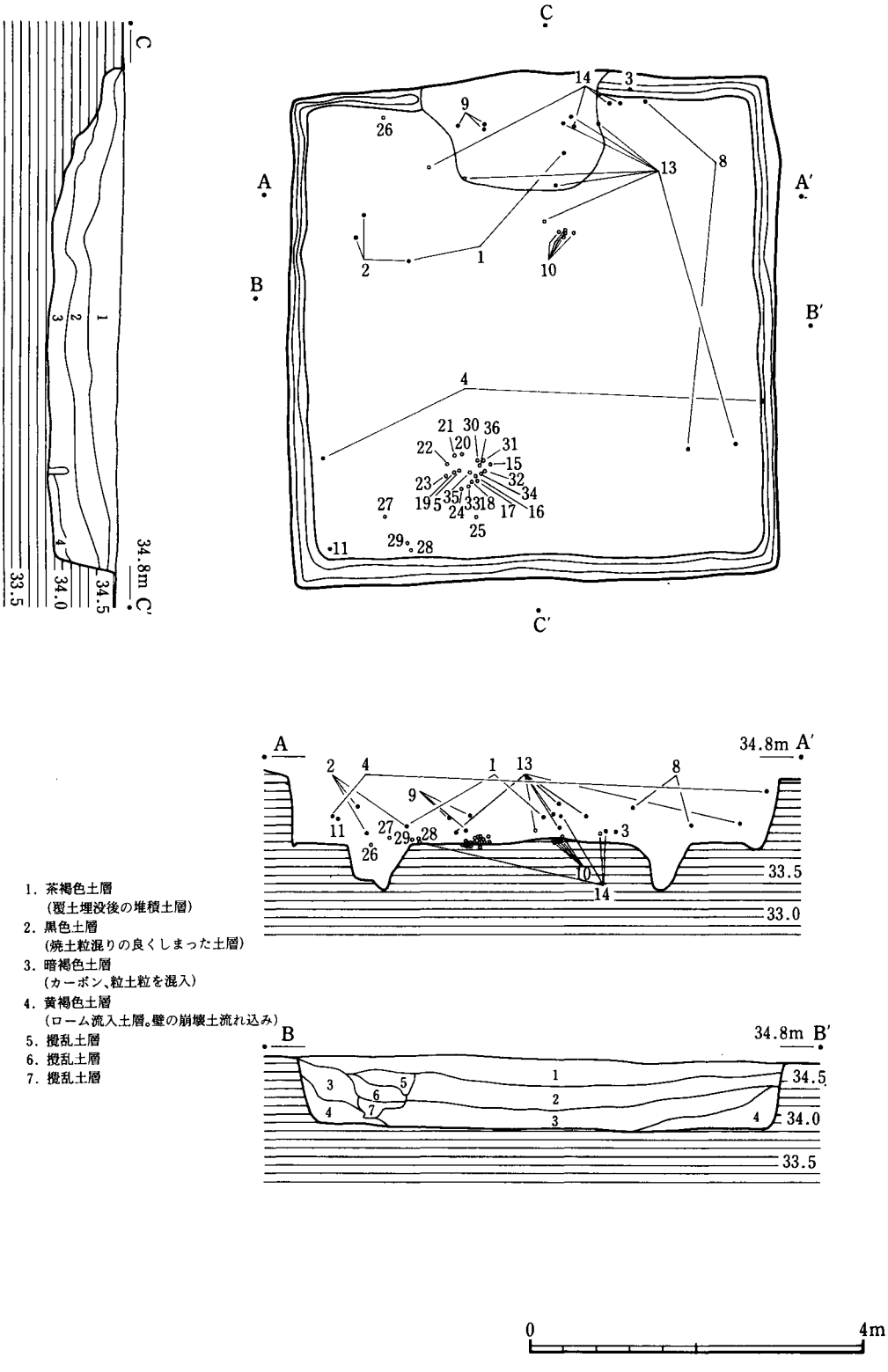
このうち、15～24・26～33・35・36は床面直上の出土であり、埋没当時一連の係累関係にあったものと考えられる。

また、付近には柱穴の存在することから、柱に掛けていた状況も想起される。

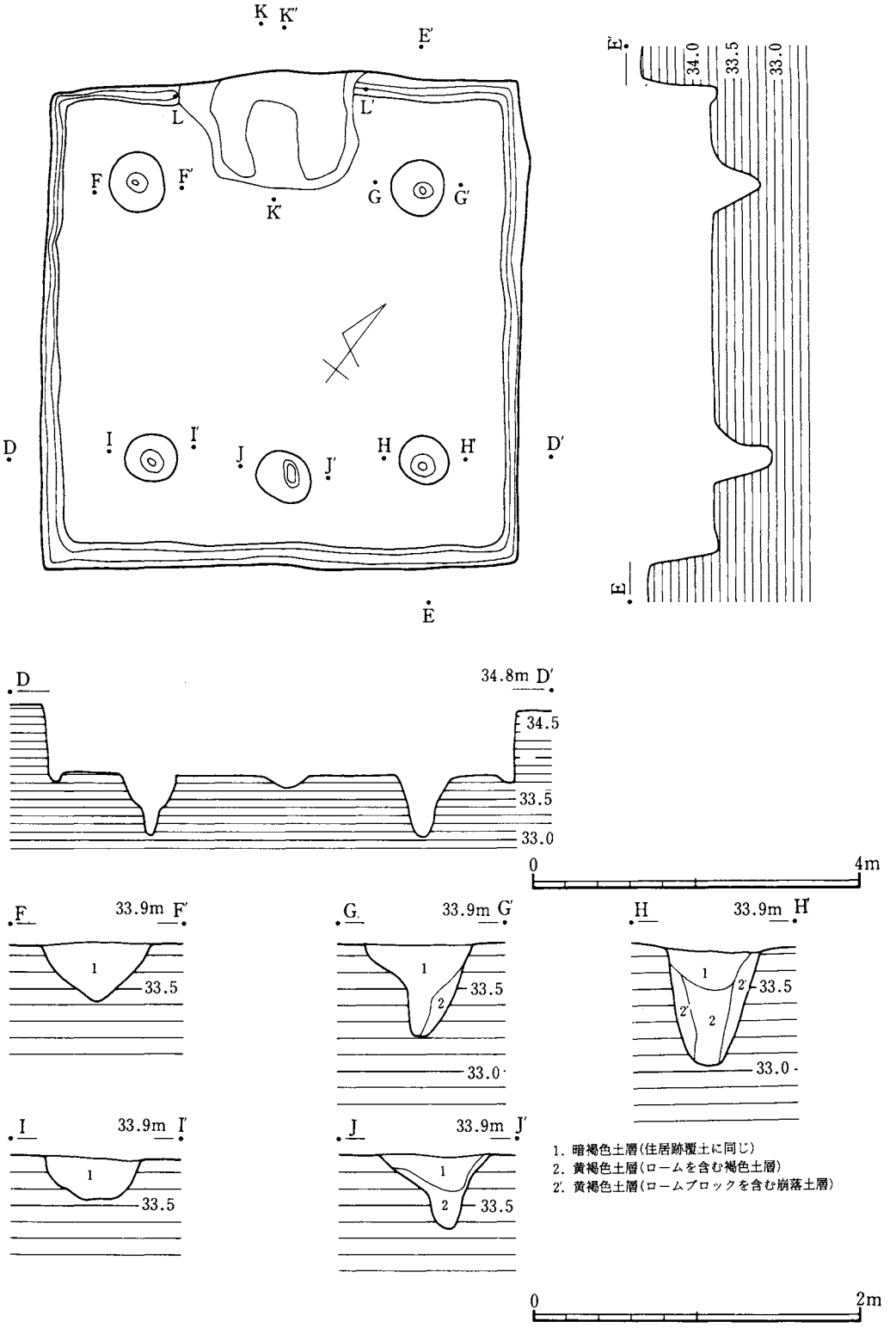
焼成　○良好、△普通、×劣　**第15表－１**

No	器種	法量（mm）				遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴（成形・調整）
		器高	口縁径	底部径	胴部径					
1	須恵器蓋	37	98	40	—	1/6	○	内面　灰白色 外面　灰黒色	緻密	胴部内外面ロクロメ　底部は回転ヘラ切り 底部付近回転ヘラケズリ
2	須恵器蓋	35	116	30	120	1/6	○	内面　灰白色 外面　灰黒色	緻密	胴部外面ロクロメ　内面回転ナデ、口縁部回転ナデ 底部付近回転ヘラケズリ
3	須恵器坏身	39	97	34	104	ほぼ完形	○	灰白色	緻密	胴部回転ナデ　内面は丁寧なナデ 底部付近　回転ヘラケズリ
4	坏	33	114	56	108	1/2	△	内面　黒褐色 外面　暗褐色	砂粒を多量に含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面は荒いナデ 胴部外面横位のヘラケズリ、底部はヘラケズリ後の一方向のナデ
5	坏	43	122	—	60	完形	○	明褐色	砂粒及び粘土粒を含む 精	口縁部外面ヨコナデ　内面は丁寧なナデ 胴部横位のヘラケズリ
6	坏	42	124	56	—	1/2	△	暗褐色	石英、雲母の細粒及び粘土粒を含む 粗	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面横位のヘラケズリ
7	坏	43	116	—	116	1/2	○	明褐色	大粒の粘土粒を含む 粗	口縁部内外面ヨコナデ内面ナデ 胴部外面横位のヘラケズリ
8	椀	—	130	—	—	1/6	○	明褐色	砂粒を多量に含む 精	口縁部外面ヨコナデ　内面は丁寧なミガキ 胴部外面横位のヘラケズリ

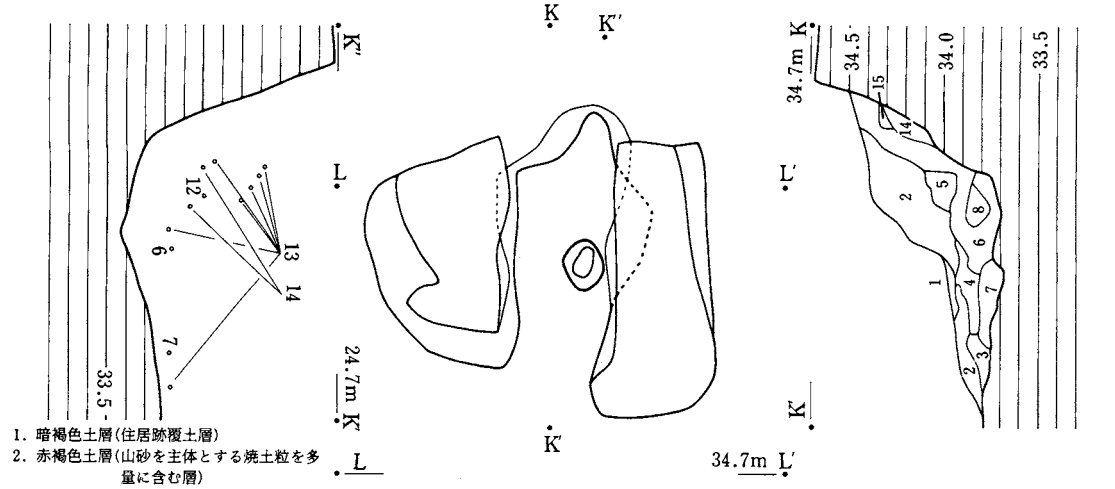
（134頁につづく）



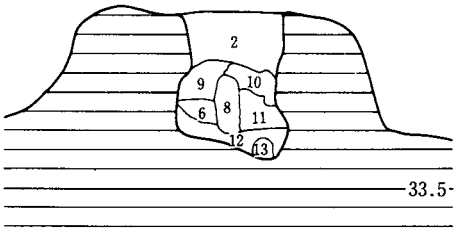
第71図　2号住居跡遺物出土状況図

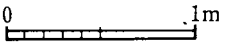


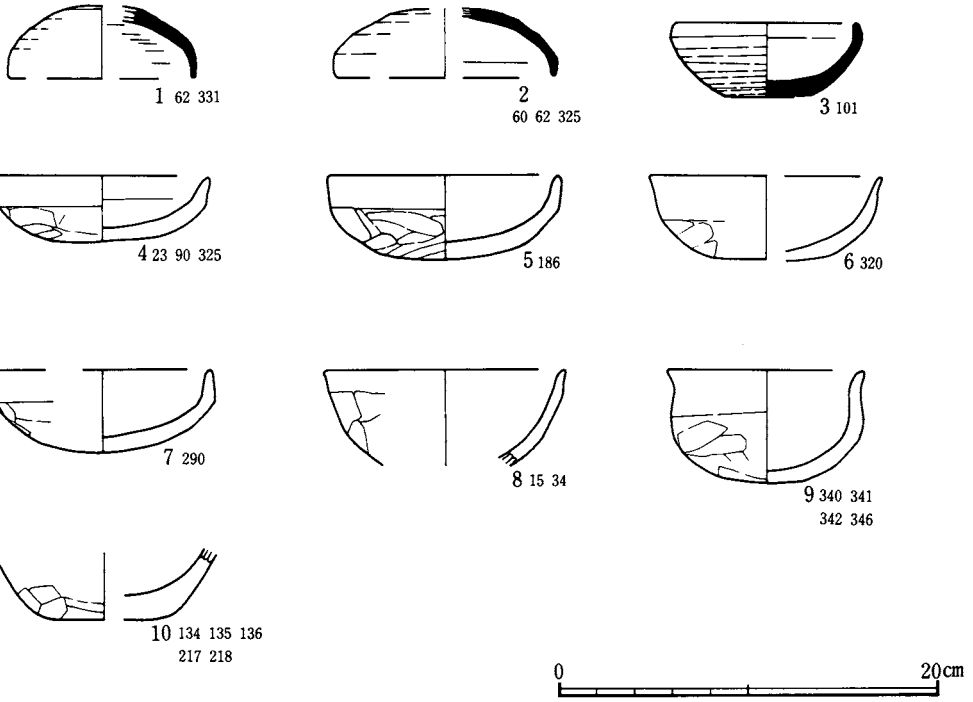
第72図　2号住居跡遺構図

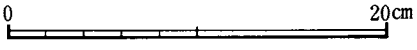


1. 暗褐色土層(住居跡覆土層)
2. 赤褐色土層(山砂を主体とする焼土粒を多量に含む層)
3. 明褐色土層(2層よりも山砂の割合の多い層)
4. 暗褐色土層(カーボン粒を含む粒子の粗い層)
5. 黄褐色土層(暗褐色土を主体とするが山砂の割合が非常に多い)
6. 暗褐色土層(4層同質で、より黒味の強い土層)
7. 黒褐色土層(粒子の粗い黒褐色土層。焼土粒を含み、6層よりも更に黒味の強い層)
8. 白色砂層(山砂の単純堆積層)
9. 暗褐色土層(6層よりも明るい山砂を主体とする層)
10. 赤褐色土層(山砂を主体とし、かなり焼土化している)
11. 赤褐色土層(山砂が焼土化して、全面赤褐色化している焼土層)
12. 暗褐色土層(焼土粒・カーボン粒を含む、砂質土層で、しまり良好)
13. ハードローム塊
14. ソフトローム層
15. 焼土塊

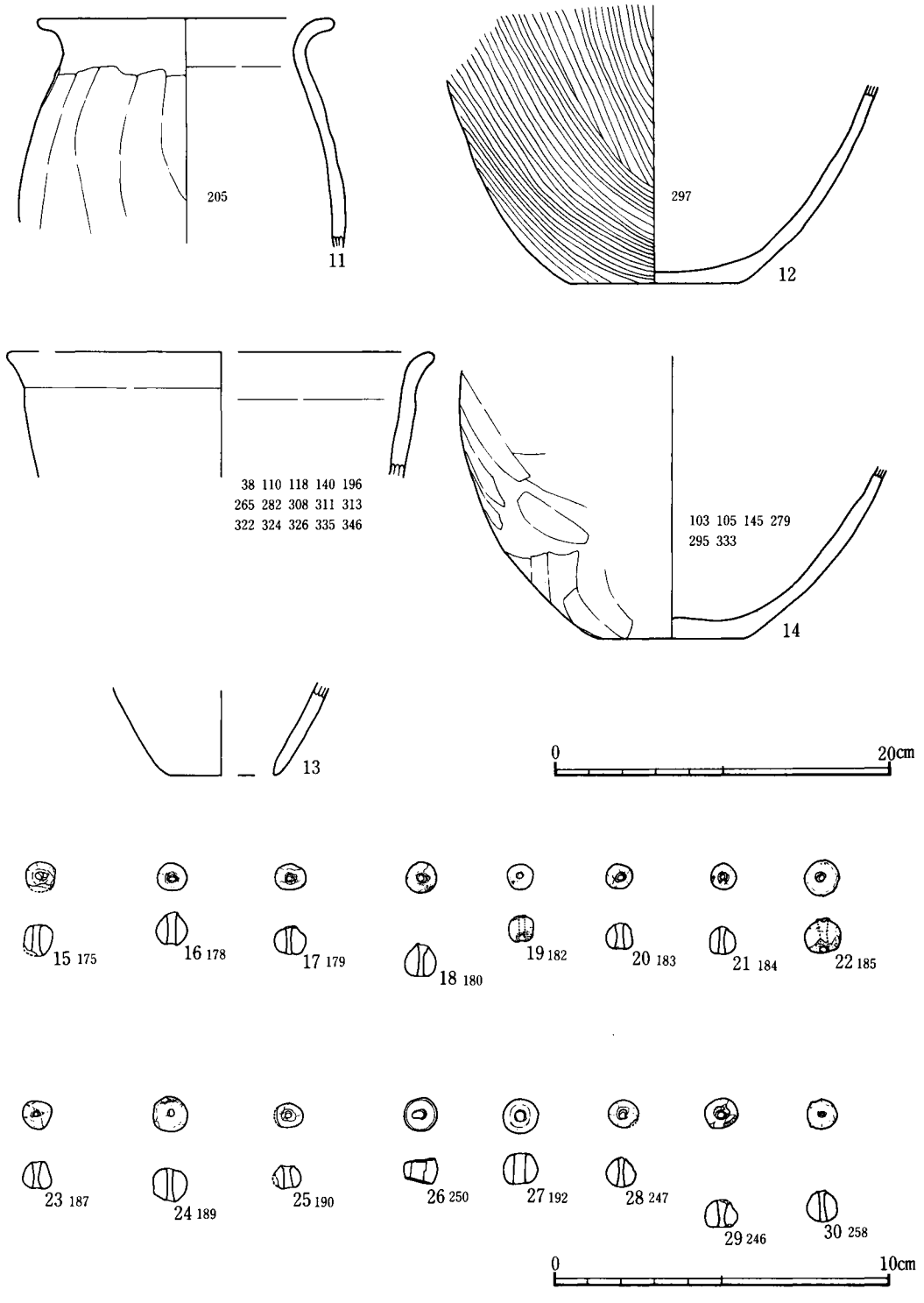




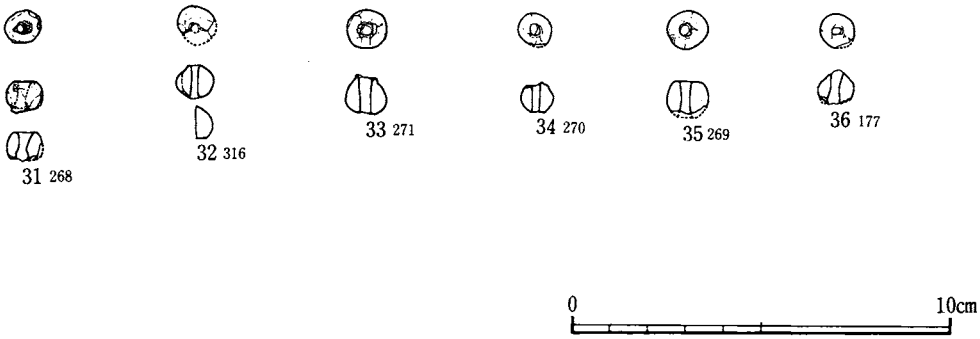




第73図　2号住居跡カマド、遺物実測図(1)



第74図　2号住居跡遺物実測図(2)



第75図　2号住居跡遺物実測図(3)

9	椀	59	105	—	102	2/3	○	褐色	砂粒を多量に含む	口縁部外面ヨコナデ　内面はナデ 胴部外面横位のヘラケズリ
10	甕	—	—	50	—	底部のみ	○	褐色	雲母、長石の細粒を含む 粗	胴部外面、横位のヘラケズリ 底部は一方向のナデ
11	甕	—	178	—	197	1/2	○	茶褐色	砂粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面はナデ 胴部外面縦位のヘラケズリ
12	甕	—	—	100	—	1/3	○	黄褐色	大粒の石英粒を含む 粗	胴部外面　丁寧なミガキ 内面はナデ
13	甑	—	257	62	—	2/3	○	黄褐色	大粒の長石粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面へラケズリ内面ナデ
14	甕	—	—	84	—	1/3	○	明褐色	砂粒を多量に含む 粗	胴部外面斜位のヘラケズリ 内面は荒いナデ

第15表－2

住居跡	名　称	径（cm）	孔径（cm）		高さ（cm）	胎土	焼成	色調		成　形	調　整
			上　端	下　端				外面	内面		
2号住居跡											
15	土製丸玉	0.87×(0.72+α)	0.23×0.19	0.28×0.19	0.96	○	○	黒褐色	褐　色	粘土を丸めて作る。	ナデ穿孔は両側から。
16	土製丸玉	0.87×0.83	0.26×0.15	0.27×0.18	0.93	○	○	黒褐色		粘土を丸めて作る。	ナデ、孔は両側からの穿孔。
17	土製丸玉	0.92×0.77	0.17×0.18	0.15×0.13	0.84	○	○	黒褐色		粘土を丸めて作る。	ナデ、一部に指紋が残る。 上下とも、粘土の飛び出しがみられる。
18	土製丸玉	0.94×0.89	0.28×0.19	0.29×0.18	0.93	○	○	黒褐色		粘土を丸めて作る。	ナデ、穿孔は両側。
19	土製丸玉	0.79×0.73	0.14×0.12	0.14×0.17	0.78	○	○	黒褐色	褐　色	粘土を丸めて作る。	ナデ、孔は片側からの穿孔。
20	土製丸玉	0.76×0.70	0.25×0.18	0.31×0.21	0.79	○	○	黒褐色	褐　色	粘土を丸めて作る。	ナデ、四角形に近い丸、孔は両側穿孔。
21	土製丸玉	0.74×0.77	0.18×0.17	0.21×0.20	0.82	○	○	黒褐色		粘土を丸めて作る。	ナデ、上部は穿孔時の粘土飛び出しが認められる。穿孔は両側から。
22	土製丸玉	1.05×0.98	0.27×0.23	0.23×0.21	0.92	○	○	黒褐色	褐　色		外面ヘラナデ、図の下側はヘラで、平坦に仕上げられる。 孔は、両側からの穿孔かと思われる。
23	土製丸玉	0.83×0.9	0.22×0.18	0.22×0.12	0.76	○	○	黒褐色		粘土を丸めて作る。	ナデ、孔は両側より。
24	土製丸玉	1.05×1.02	0.22×0.15	0.22×0.16	0.92	○	○	黒褐色		粘土を丸めて作る。	ナデ、一部に段差がみられる。

25	土製丸玉	0.72×(0.77×2)	0.24×0.15	0.3 ×0.17	0.70	○	○	黒褐色	褐　色	粘土を丸めて作る。	ナデ、孔は片側からが主体。
26	石製臼玉	1.0 ×0.99	0.41×0.22	0.34×0.27	0.42 ～0.68			淡緑色			比較的丁寧な作りだが、厚さは不均等全体に入念な磨きが施される。孔は両側が主体（1、2）、3は片側か？
27	石製丸玉	1.03×1.04	0.3 ×0.34	0.28×0.31	0.86 ～0.83			褐　色			全体に丁寧に磨かれている、孔は片側からの穿孔。
28	土製丸玉	0.89×0.81	0.28×0.20	0.28×0.16	0.83	○	○	黒褐色	褐　色	粘土を丸めて作る。	ナデ、西洋梨形、一部に指紋が残る、孔は両側穿孔。
29	土製丸玉	0.95×(0.88+2)	0.25×0.21	0.22×0.21	0.86 ～0.8	○	○	黒褐色	褐　色	粘土を丸めて作る。	ナデ、孔は両側より穿孔。
30	土製丸玉	0.87×0.88	0.21×0.11	0.22×0.13	0.9	○	○	黒褐色		粘土を丸めて作る。	ナデ、上部は穿孔時の粘土飛び出しが認められる。 穿孔は両側、孔は他のものより小さい。
31	土製丸玉	0.94×0.85	0.24×0.19	0.3 ×0.29	0.75 ～0.82	○	○	黒褐色	褐　色	粘土を丸めて作る。	ナデ、孔は両側から。
32	土製丸玉	0.97×——	0.19×——	0.21×——	0.87	○	○	黒褐色	褐　色	粘土を丸めて作る。	ナデ、一部に指紋が残り、孔は両側から。
33	土製丸玉 （西洋梨形）	1.06×1.0	0.25×0.25	0.29×0.21	0.96	○	○	黒褐色		粘土を丸めて作る。	ナデ、上部の飛び出しがあり、孔は両側穿孔
34	土製丸玉	0.74×(0.90×2)	0.29×0.23	0.26×0.18	0.82	○	○	黒褐色	褐　色	粘土を丸めて作る。	ナデ、上部は穿孔時の粘土の飛び出しがある。
35	土製丸玉	1.1×1.0	0.25×0.24	0.2 ×0.21	0.86 +α	○	○	黒褐色	褐　色	粘土を丸めて作る。	ナデ孔は両面から。
36	土製丸玉	0.96×(0.88+2)	0.36×0.2	0.34×0.25	0.94	○	○	黒褐色	褐　色	粘土を丸めて作る。	ナデ、孔は両側からの穿孔。

3号住居跡　（088）（第76・77図、図版43・59）

検出状況　調査区の南東部にあたる二つめの大きな谷津に面した、標高29.5mの南向きの斜面に位置する。

形状・規模　主軸の方位はN－22°－E、3.7m×2.7mの東西方向にやや長い長方形を呈しており、掘込みの浅い小形の住居跡である。

覆土　全体に粘土粒子が含まれており、1層は周辺のローム土層が流入したものと考えられる。

床面　本住居跡が斜面に構築されているため、床面の一部に白色粘土が露出しているのが確認されたが、ロームによる貼床等の改良造成は認められない。

カマド　北壁の中央よりやや東寄りに位置する。

構築材はローム土壌と白色粘土を混合したもので、袖の基部も含め構築している。

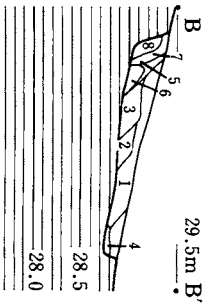
柱穴　検出されていない。

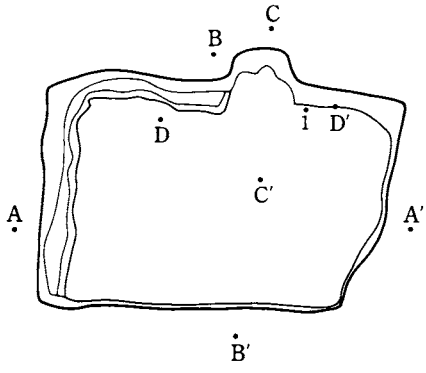
貯蔵穴　なし。

遺物出土状況　遺物はカマドの袖部付近とその周辺に数点検出されたが復元可能なものは完形品以外にはない。

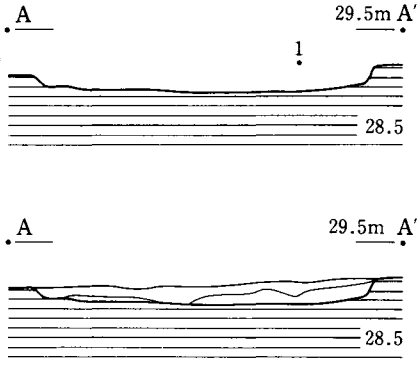
遺物　1はカマドの袖部に近接し、正立して検出されたワイングラス状の土師器の台付き甕である。

腰巻遺跡では類例を見ないが、千葉市・大北遺跡015号住居跡においてきわめて類似する遺物の出土が報告されている。

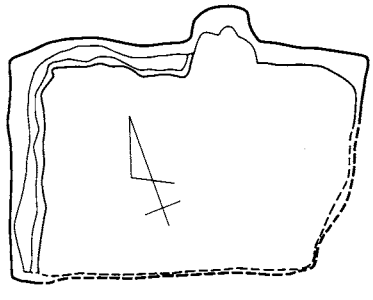




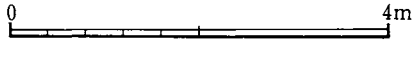
1. 暗褐色土層(明褐色土を含む)
2. 明褐色土層(明褐色土を主体とし、暗褐色土を含む)
3. 暗褐色土層
4. 暗褐色土層(粘土質・黄褐色土を含む)
5. 暗褐色土層(砂質)
6. 暗褐色土層(砂質で若干の焼土を含む)
7. 暗褐色土層(砂質)
8. 暗褐色土層(砂質)



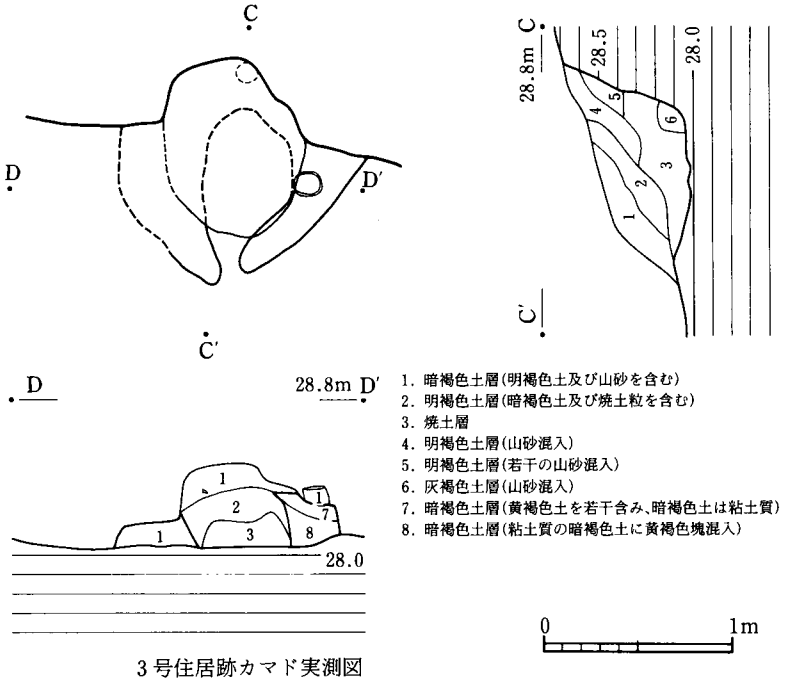
3号住居跡遺物出土状況図



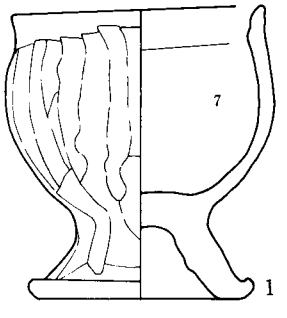
3号住居跡遺構図



第76図　3号住居跡遺物出土状況図、遺構図



3号住居跡カマド実測図

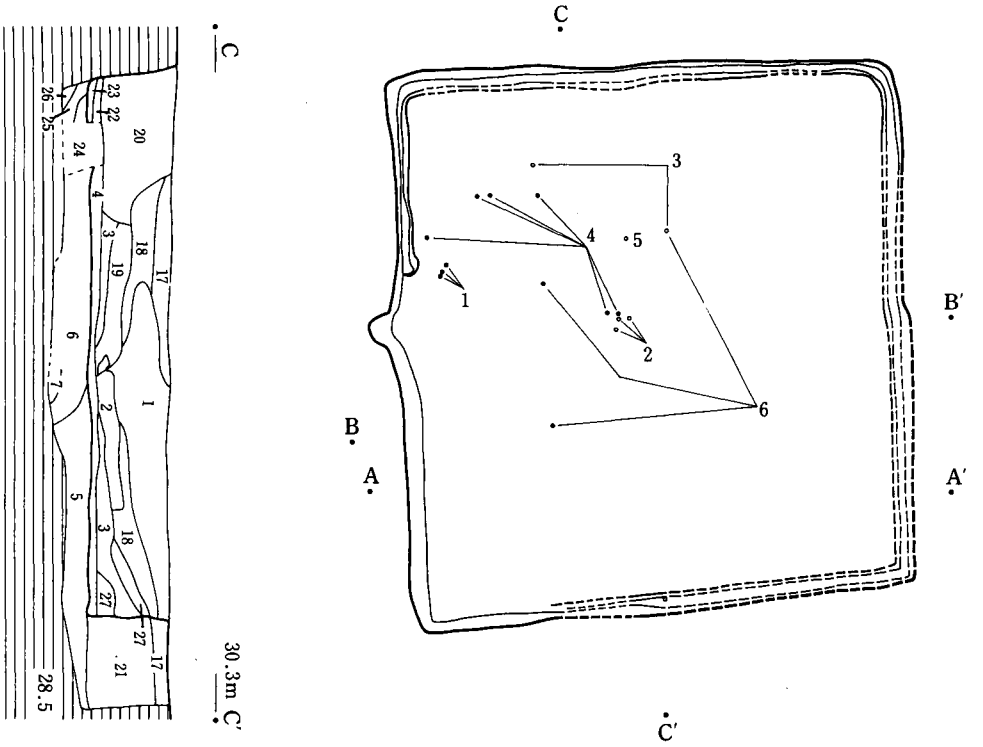


3号住居跡遺物実測図

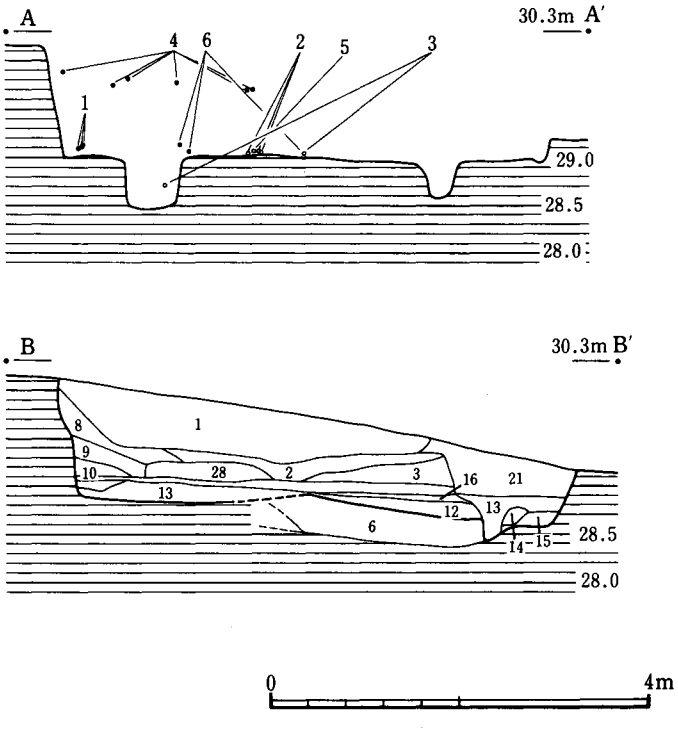
第77図　3号住居跡カマド、遺物実測図

焼成　○良好、△普通、×劣　**第16表**

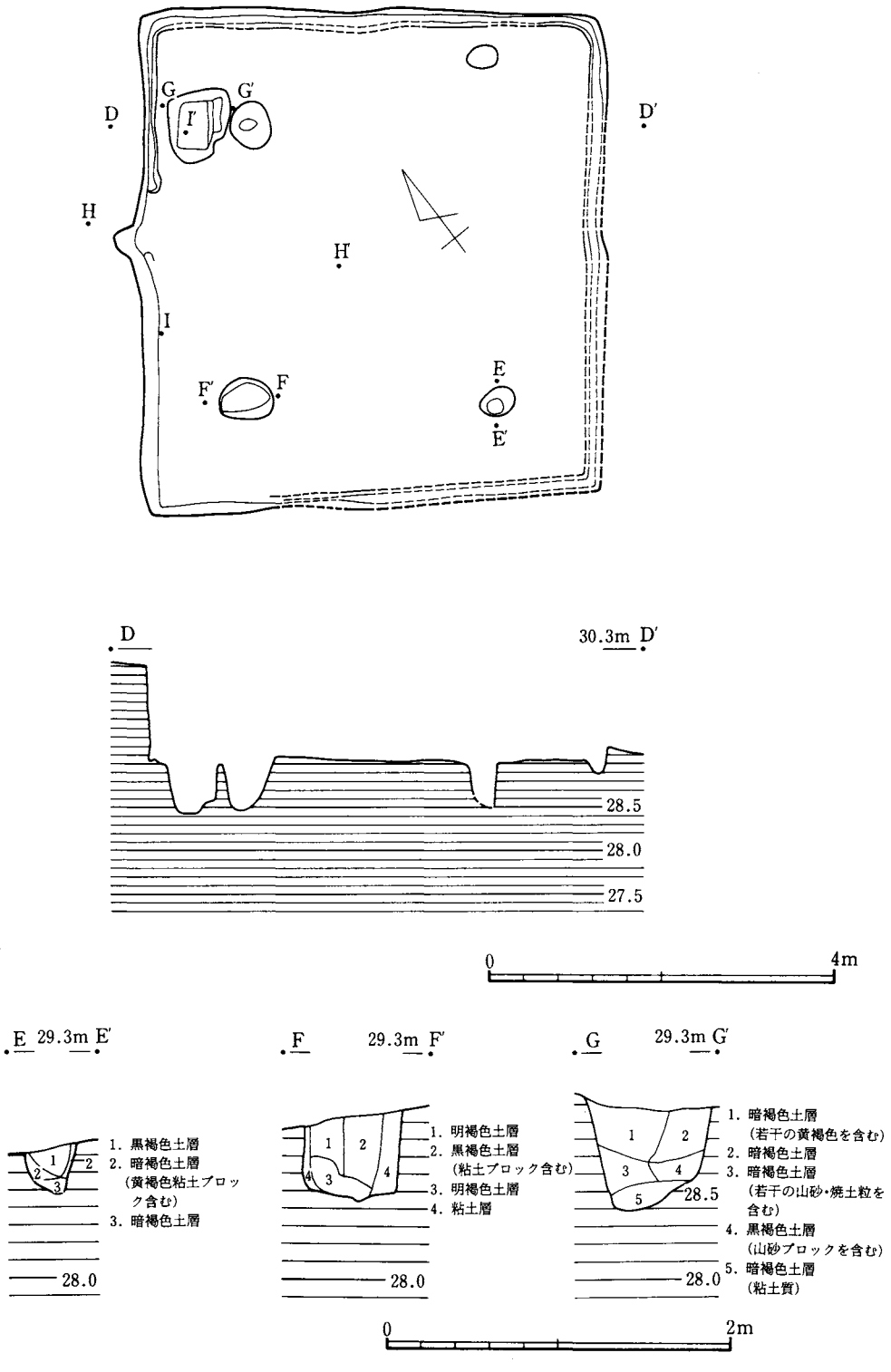
No.	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴(成形・調整)
1	台付き甕	150	133	71 (台径) 107	142	ほぼ完形	△	内面　黒褐色 外面　赤褐色	岩石細粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　胴部内面ナデ 胴部～台部縦位のヘラケズリ　台部内面回転ナデ



1. 黒褐色土層
2. 黒褐色土層(明褐色土塊を含む)
3. 黒褐色土層(明褐色土層を若干含む)
4. 黒褐色土層(明褐色土粒を含み粘土質)
5. 暗褐色土層(明褐色土を含む)
6. 暗褐色土層
7. ローム層
8. 黒褐色土層(若干の暗褐色を含み、焼土粒混入)
9. 暗褐色土層(灰質土を含み、焼土粒混入)
10. 暗褐色土層(焼土粒含む)
11. 明褐色土層(黒褐色土を含む)
12. 暗褐色土層(やや明るい色調)
13. 暗褐色土層
14. 暗褐色土層(若干の明褐色を含む)
15. 明褐色土層
16. 明褐色土層(暗褐色土を含む)
17. 暗褐色土層
18. 暗褐色土層(やや暗い色調)
19. 暗褐色土層(明褐色土塊を含む)
20. 暗褐色土層(明褐色土及び若干の焼土混入)
21. 暗褐色土層
22. 明褐色土層(粘土質で黒褐色土を含む)
23. 明褐色土を含む土層)
24. 暗褐色土層
25. 暗褐色土層
26. 明褐色土層
27. 黒褐色土層(焼土含む)
28. 黒褐色土層(明褐色を若干含み、焼土粒混入)



第78図　4号住居跡遺物出土状況図



第79図　4号住居跡遺構図

4号住居跡　(089)（第78・79・80図、図版44・59）

検出状況　調査区の南東部にあたる二つめの大きな谷津の、最も奥まった標高30.3mの南東向きの斜面に位置する。

形状・規模　主軸の方位はW—36°—N、5.7m×5.7mの方形を呈し、掘込みの深い住居跡である。

覆土　谷津特有の漆黒色の包含層中から黒褐色の覆土の掘込み部分を検出する調査となったため、遺構の範囲と限界を見きわめるのがきわめて難しい作業となった。

壁は部分的には残存していたが、ハードロームではなく谷津の包含層でもある泥炭に近い黒色の再堆積土層である。

床面　床面は水分を含めば泥炭化し、乾燥すれば亀裂の走る脆弱な黒色土の上にロームの貼床を施したもの。

床面は主軸に沿い、わずかに傾斜し、壁溝は全周したものと考えられる。

カマド　西壁のほぼ中央部分に位置し、袖部の流出が著しく平面形は推定である。

柱穴　4本タイプで、掘込みはあまり深くない。

貯蔵穴　カマドの北側、袖部右脇に長方形の平面形を呈する貯蔵穴が検出されている。

遺物出土状況　カマド周辺から貯蔵穴付近にかけて、おもに西壁寄りに検出されているが、いづれも破片であり復元可能な遺物はきわめて少ない。

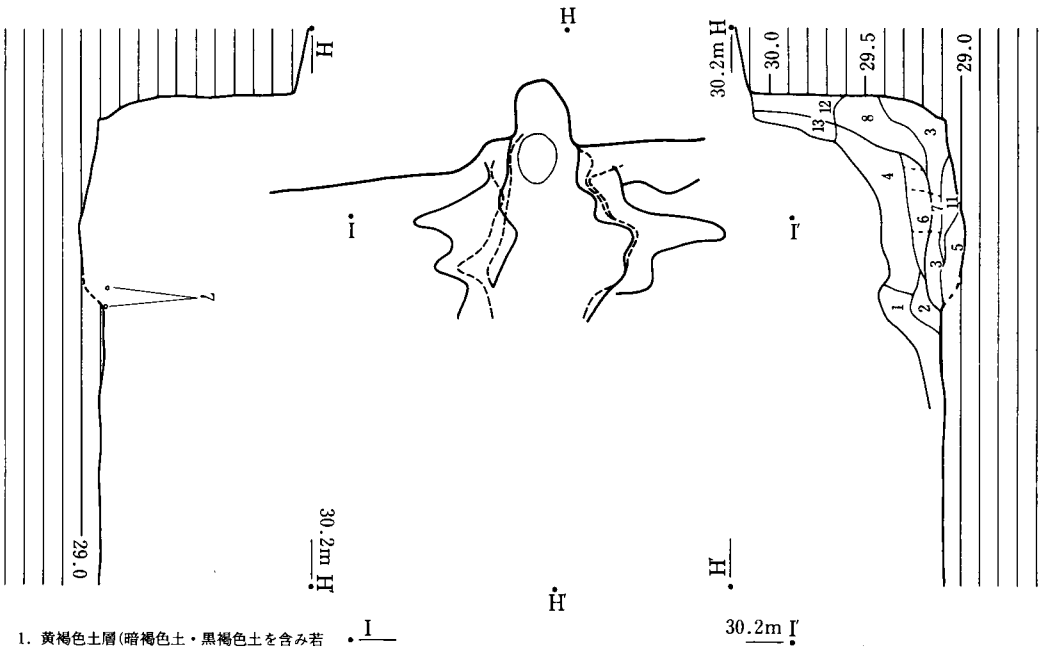
遺物　1・5は土師器の坏、5は床面直上の出土であり、いづれも体部の器表面には横位のヘラケズリが見られるが、磨滅が著しい。

2・3・6はやや深めの椀形土器、いづれも床面直上の出土である。

4・7は甕、このうち7はカマド内の出土である。

焼成　○良好、△普通、×劣　**第17表**

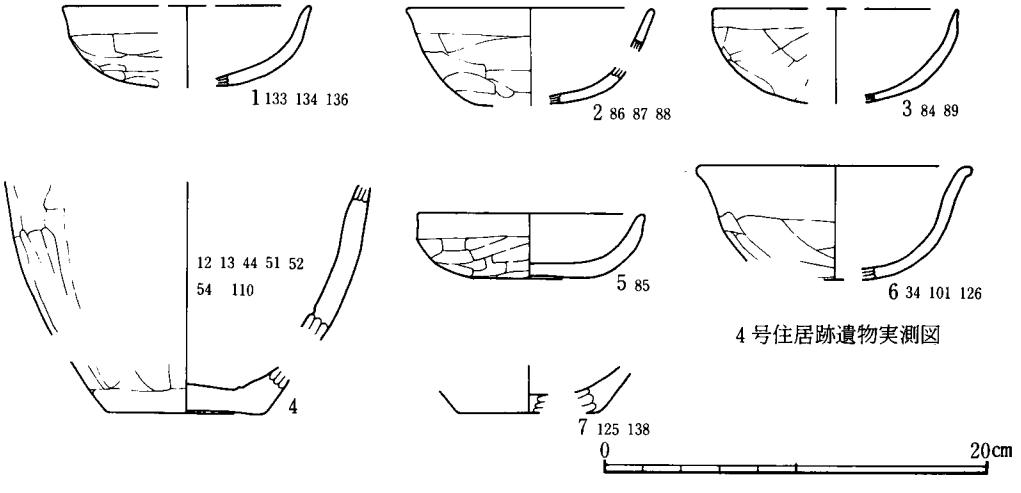
No.	器種	法量（mm）				遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴（成形・調整）
		器高	口縁径	底部径	胴部径					
1	坏	—	132	—	123	½	△	暗褐色	砂粒を含む 密	口縁部外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面横位のヘラケズリ
2	椀	(50)	133	—	—	½	○	暗褐色	砂粒を含む 密	口縁部外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面横位のヘラケズリ
3	椀	(50)	130	—	128	⅓	△	内面　黒色 外面　茶褐色	砂粒を多量に含む 粗	口縁部外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面横位のヘラケズリ
4	甕	—	—	83	—	⅓	△	内面　暗褐色 外面　褐　色	砂粒を多面に含む 粗	胴部外面縦位のヘラケズリ　内面ナデ 底部ヘラケズリ　内外面の磨滅も著しい。
5	坏	34	120	60	119	ほぼ完形	○	暗褐色	砂粒を含む	口縁部外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面横位のヘラケズリ
6	椀	60	146	—	—	⅔	○	内面　暗褐色 外面　褐　色	砂粒を含む	口縁部外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面斜位のヘラケズリ
7	甕	—	—	76	—	底部の½	○	内面　黒褐色 外面　赤褐色	石英細粒及び砂粒を含む	胴部ヘラケズリ 内面丁寧なナデ



1. 黄褐色土層(暗褐色土・黒褐色土を含み若干の焼土粒混入)
2. 黄褐色土層(山砂・若干の焼土粒混入)
3. 赤褐色土層(黄褐色土・暗褐色土を含む)
4. 暗褐色土層(若干の黄褐色土を含む)
5. 暗褐色土層(粘土質で焼土粒を含む)
6. 黄褐色土層(焼土ブロックを含む)
7. 暗褐色土層(多量の焼土粒を含みもろい)
8. 暗褐色土層(黄褐色ブロック・焼土粒混入)
9. 暗褐色土層(黄褐色土混入)
10. 黄褐色土層(焼土粒混入)
11. 暗褐色土層(粘土質・焼土ブロック混入)
12. 暗褐色土層(黄褐色土ブロック・若干の焼土粒混入)
13. 暗褐色土層(若干の黄褐色混入)

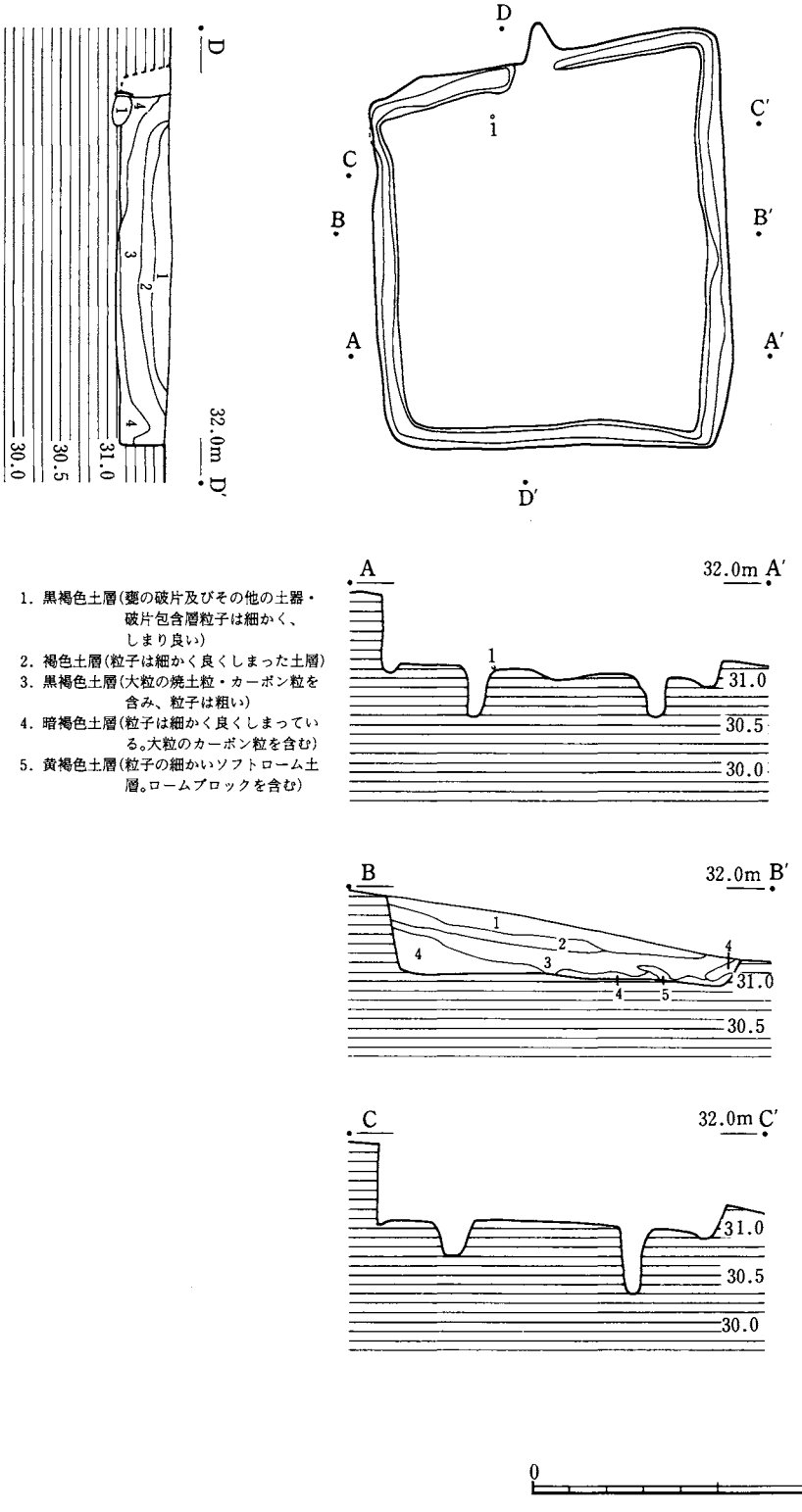
4 号住居跡カマド実測図

0 1m



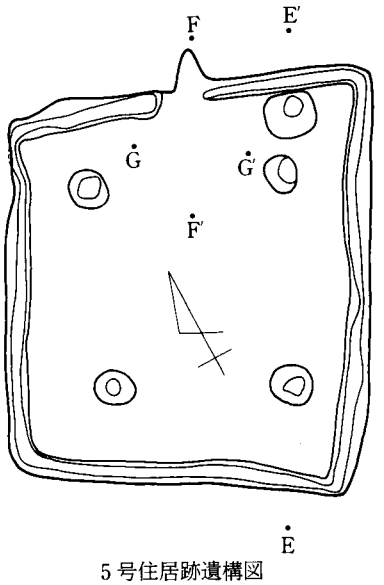
4 号住居跡遺物実測図

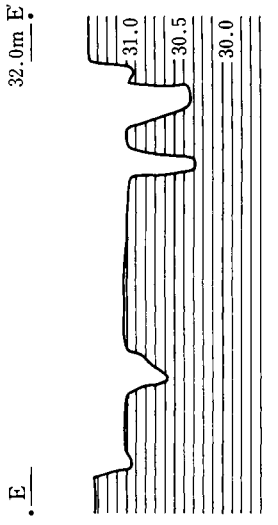
第80図　4 号住居跡カマド、遺物実測図



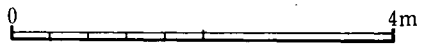
1. 黒褐色土層(甕の破片及びその他の土器・破片包含層粒子は細かく、しまり良い)
2. 褐色土層(粒子は細かく良くしまった土層)
3. 黒褐色土層(大粒の焼土粒・カーボン粒を含み、粒子は粗い)
4. 暗褐色土層(粒子は細かく良くしまっている。大粒のカーボン粒を含む)
5. 黄褐色土層(粒子の細かいソフトローム土層。ロームブロックを含む)

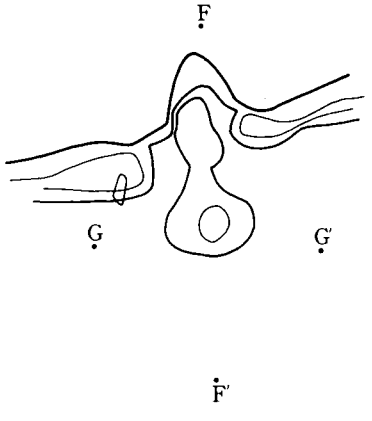
第81図　5号住居跡遺物出土状況図

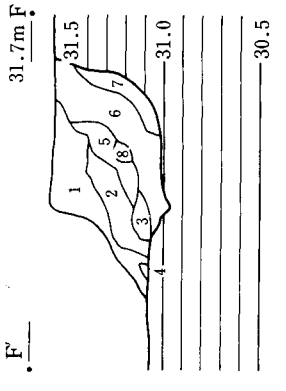


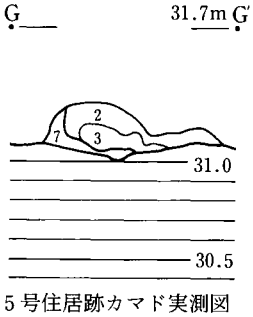


5号住居跡遺構図



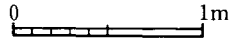






5号住居跡カマド実測図

1. 黒色土層(焼土粒を含む黒色山砂層)
2. 明褐色土層(粒子の細かい山砂層)
3. 赤褐色土層(焼土粒子の多量に含まれた山砂層)
4. ロームブロック
5. 褐色土層(山砂層)
6. 暗褐色土層(山砂流入土層、焼土粒・カーボン粒を含む)
7. 黄褐色土層(山砂層)
8. 焼土塊



第82図　5号住居跡遺構図、カマド実測図

5号住居跡　(091)（第81・82・83図、図版44・59）

検出状況　調査区の最南端にあたる台地の、標高32mの南東向きの斜面に位置する。

形状・規模　主軸の方位はN－26.5°－E、4.5m×3.8mで西壁よりも東壁側のやや長い台形状を呈している。

覆土　南北の方向には緩やかな皿状堆積を示すが、東西方向の斜面に沿い傾斜した堆積状況が見られる。

1層中に若干の遺物の破片が検出されており、2層以下よりも後の堆積が考えられる。

床面　ハードロームを堅くつき固めている。

カマド　北壁のほぼ中央部分に位置するが、袖部と本体部分は既に流出しており、住居跡の覆土観察の際に、その推定位置が不明瞭ながら認められたにすぎない。

カマドの推定位置には火床及び壁に掘込まれた煙道の痕跡が検出された。

柱穴　検出されていない。

貯蔵穴　なし。

遺物出土状況　小破片で検出されたものはその多くが1層に集中しており、2層以下の出土は完形土器1点のみである。

遺物　1は胴部の張りの弱い、長胴化した甕である。

カマドの西側の北壁ぎわから床面直上で検出された。

焼成　○良好、△普通、×劣　**第18表**

No.	器種	法量（mm）				遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴（成形・調整）
		器高	口縁径	底部径	胴部径					
1	甕	274	162	61	190	完形	△	暗褐色	長石及び岩石細粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部縦位のヘラケズリ　底部ナデ

6号住居跡　(092)（第84・85・86・87図、図版45・60）

検出状況　調査区の最南端にあたる台地の、標高30.7mの南東向きの斜面に位置する。

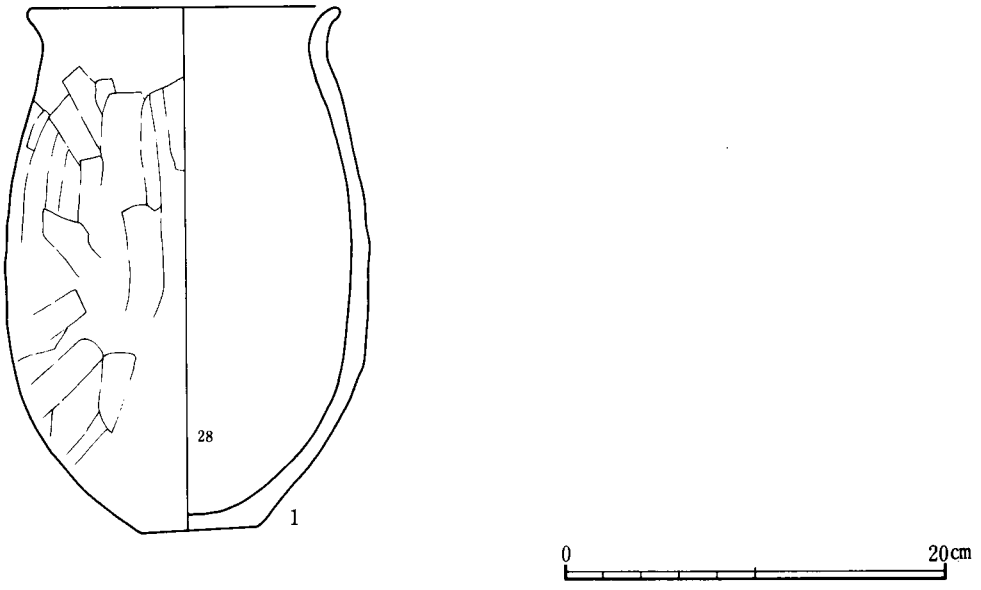
5号住居跡の南東斜面下方に位置している。

形状・規模　主軸の方位はN－33°－E、5.8m×5.7mでほぼ方形を呈し、斜面上方側と斜面下方側の竪穴の掘込みに1m程の差が認められた。

覆土　比較的薄い層が皿状に重なり、遺物出土状況からも3層以上は本住居跡廃絶後の堆積である可能性が強い。

床面　ハードロームをつき固めており、斜面に沿う東西方向の床面が僅かに傾斜する。

カマド　カマドはその痕跡から北壁のほぼ中央部分に位置するものと推定される。



第83図　5号住居跡遺物実測図

柱穴　4本タイプである。

貯蔵穴　北壁沿いのカマドの東脇に位置し、楕円形の平面形態を示す。

貯蔵穴内には完形の高坏が検出された。

遺物出土状況　遺物は竪穴の掘込み面よりも上方から検出されはじめ、平面分布では竪穴の掘込面よりも斜面の上方に遺物の分布が見られ、これらの遺物と住居跡覆土内の遺物が接合することから、本住居跡廃絶後の投棄による遺物も含まれるものと考えられる。

遺物　1は土師器の坏状土器で、床面直上の出土である。

2は小型の椀形土器。

3～6は高坏で、本住居跡内に最も多い器種である。

また、このうち3・6は床面直上の、5はカマド東脇の貯蔵穴内よりの出土である。

いづれの高坏も、坏部の中央に明瞭な稜線を有し、口縁部はこれを境に逆八の字状に外反する。

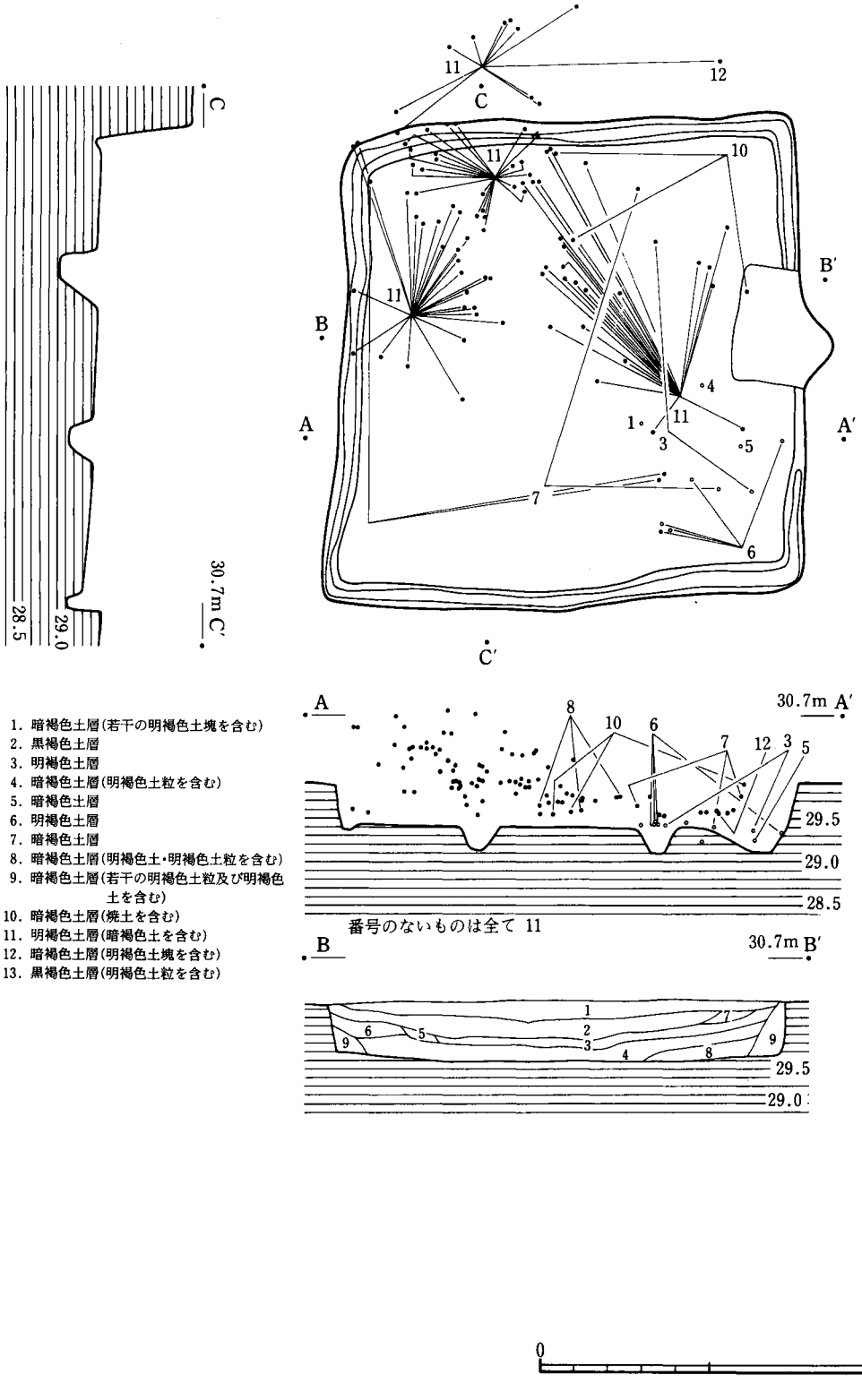
7・9は甕。

このうち7は床面直上の、9は竪穴の掘込み部外の出土である。

また、9は口縁部の開き方が大きく、他の甕とは異なる印象を与えている。

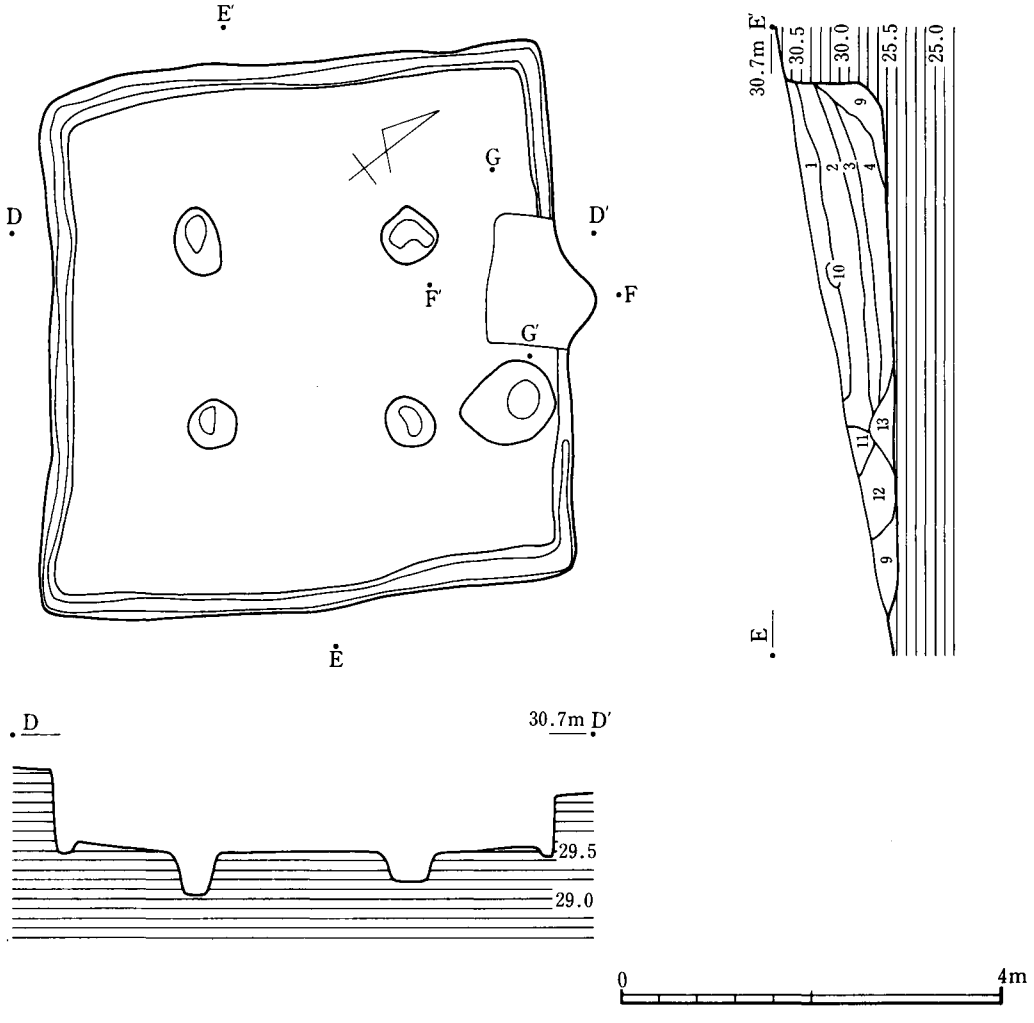
10は須恵器の甑の底部穿孔部分。

11は須恵器の大甕の、口縁部のみの遺存であり、他の部分は検出されていない。



1. 暗褐色土層(若干の明褐色土塊を含む)
2. 黒褐色土層
3. 明褐色土層
4. 暗褐色土層(明褐色土粒を含む)
5. 暗褐色土層
6. 明褐色土層
7. 暗褐色土層
8. 暗褐色土層(明褐色土・明褐色土粒を含む)
9. 暗褐色土層(若干の明褐色土粒及び明褐色土を含む)
10. 暗褐色土層(焼土を含む)
11. 明褐色土層(暗褐色土を含む)
12. 暗褐色土層(明褐色土塊を含む)
13. 黒褐色土層(明褐色土粒を含む)

第84図　6号住居跡遺物出土状況図



第85図　6号住居跡遺構図

以上の遺物のうち、1～7は本住居跡に伴うと考えられるが、8～11の遺物の分布状況の観察によれば廃絶後の投棄による可能性が強い。

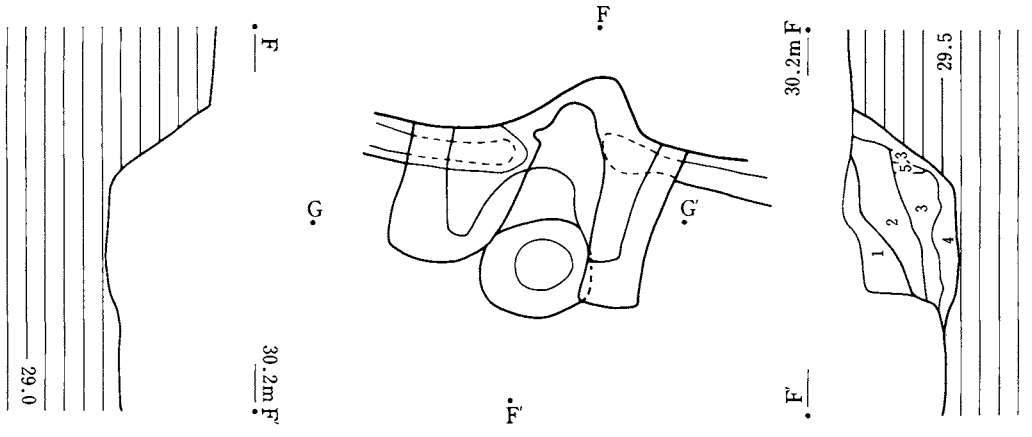
なお、12の土製丸玉はカマド内の一括遺物であり、本遺構に伴うものである。

焼成　○良好、△普通、×劣　**第19表－1**

No.	器種	法量（mm）				遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴（成形・調整）
		器高	口縁径	底部径	胴部径					
1	坏	32	(86)	—	—	ほぼ完形	○	褐色	砂粒を含む 精	胴部外面ナデ、内面底部付近を中心とした丁寧なナデ
2	椀	—	94	—	—	¼	△	内面　黒色 外面　暗褐色	砂粒を含む 粗	口縁部内外面ヨコナデ　内面はミガキ 胴部外面縦のヘラケズリ
3	高坏	101	150 (脚部径) 122	56	110	¾	○	坏部内面　黒色 外面　褐色 脚部内面　黒色 外面　褐色	砂粒を多量に含む。	坏部　口縁部外面丁寧なナデ内面丁寧なミガキ 胴部外面横位のヘラケズリ 脚部外面縦位のヘラケズリ　内面丁寧なナデ 坏部と脚部の接合は、サシ込み後のツブシが施されている。
4	高坏	101	170 (脚部径) 126	59	128	完形	○	坏部内面　黒色 外面　褐色 脚部内面　黒色 外面　褐色	砂粒及び粘土粒を含む。 精緻	坏部口縁部外面丁寧なナデ 坏部胴部ヘラケズリ後のナデ 脚部外面ヘラケズリ後のナデ、内面ヘラケズリ後のナデ 坏部と脚部の接合はサシ込み後のツブシが施されている。
5	高坏	99	157 (脚部径) 126	54	112	完形	○	坏部内面　黒色 外面　褐色 脚部内面　黒色 外面暗褐色	石英、長石の細粒を含み、精緻	口唇部ナデ胴部外面横位のヘラケズリ 口縁部外面丁寧なミガキ、内面丁寧なミガキ 脚部外面縦位のヘラケズリ、内面横位のナデ、 坏部外面横位のヘラケズリ 坏部と脚部の接合はサシ込み後のツブシが施されている。
6	高坏	—	160 (脚部径)	62	122	⅔	○	坏部内面　黒色 外面　褐色 脚部 内面　暗褐色 外面　褐色	砂粒及び岩石細粒を含む 精緻	坏部口縁部内外面ナデ　内面丁寧なミガキ 坏部胴部外面斜位のヘラケズリ 脚部外面縦位のヘラケズリ　内面ヘラケズリ 坏部と脚部の接合はサシ込み後のツブシが施されている。
7	甕	—	(220)	—	—	口縁部の½	○	褐色	石英、長石の細粒を含む 緻密	口唇部はかるくつまみ上げられている。 口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ヘラ状工具による丁寧なナデ
8	甕	—	165	—	190	½	○	内面　暗褐色 外面　褐　色	砂粒を多量に含む 粗	口縁部内外面ヨコナデ内面はナデ 胴部外面斜位のヘラケズリ
9	甕	—	(170)	—	190	¼	△	内面　褐　色 外面　暗褐色	砂粒及び岩石細粒を含む	口縁部外面ヨコナデ、胴部外面縦位のヘラケズリ内面ナデ 胴下半部に最大径があり、下ふくれ様の器形となっている。
10	甑の底部	—	—	—	—	—	○	内面　灰褐色 外面　灰　色	長石　その他の岩石細粒を含む。	
11	須恵器甕	—	224	—	—	口縁部の⅓	○	青灰色	大粒の石英及び岩石細粒を含む。	口縁は逆『八』の字状に大きく開き、口唇部は厚味のあるつくりとなっている。 口縁部外面に3段の櫛がき波状文

第19表－2

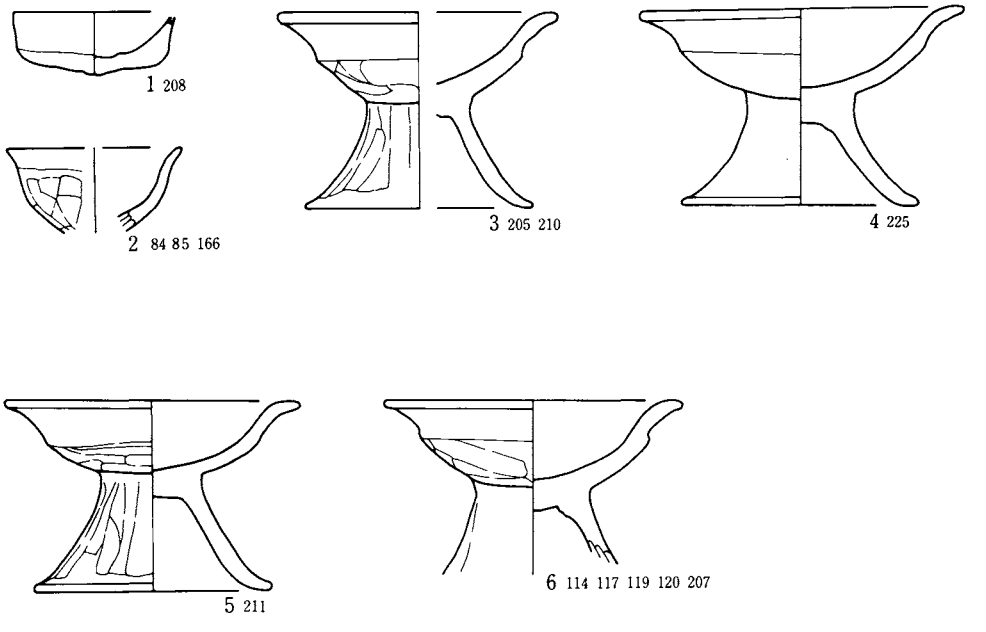
住居跡	名称	径（cm）	孔径（cm）		高さ（cm）	胎土	焼成	色調		成形	調整
			上端	下端				外面	内面		
6号住居跡											
12	土製丸玉	1.20×1.05	0.36×0.18	0.29×0.16	1.07	○	○	褐　色		粘土を丸ゆて作る。	ナデ、益球形孔は両側から球の中心ではなく片寄って位置する。



1. 暗褐色土層(土粒子を含む粒子の細かい土層)
2. 黄褐色土層(山砂粒子を多量に含む、しまりの良い土層)
3. 赤褐色土層(山砂を主体とし、焼土を多量に含む土層)
4. 黄褐色土層(ハードロームのブロック状の塊と焼土を含む土層)
5. 黒褐色土層

6号住居跡カマド実測図

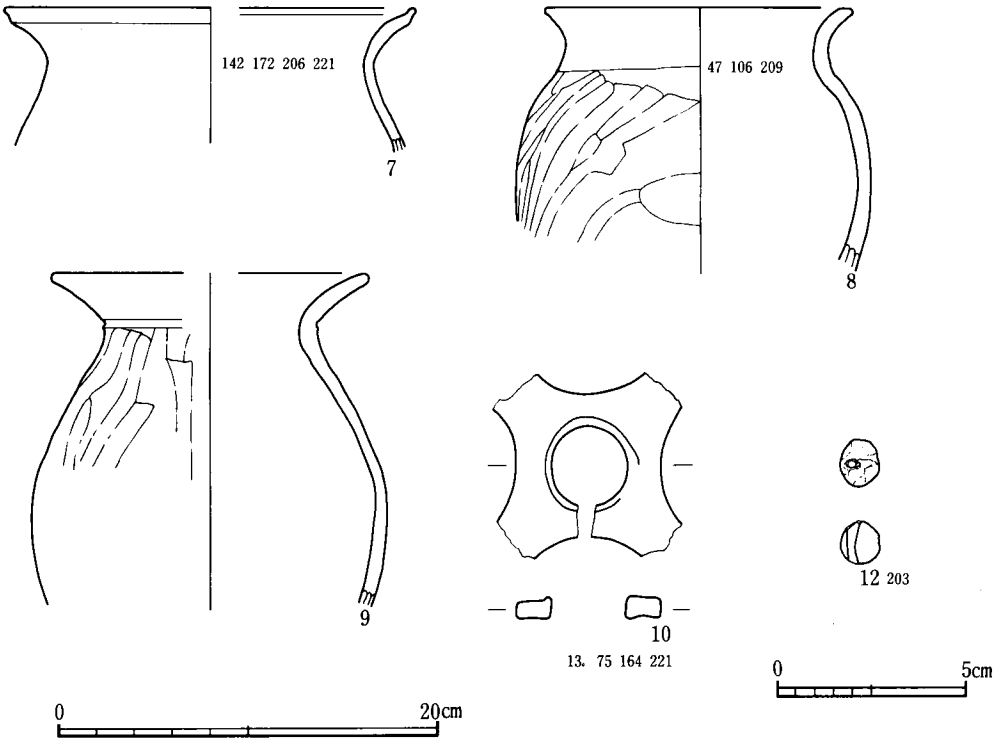
0 1m



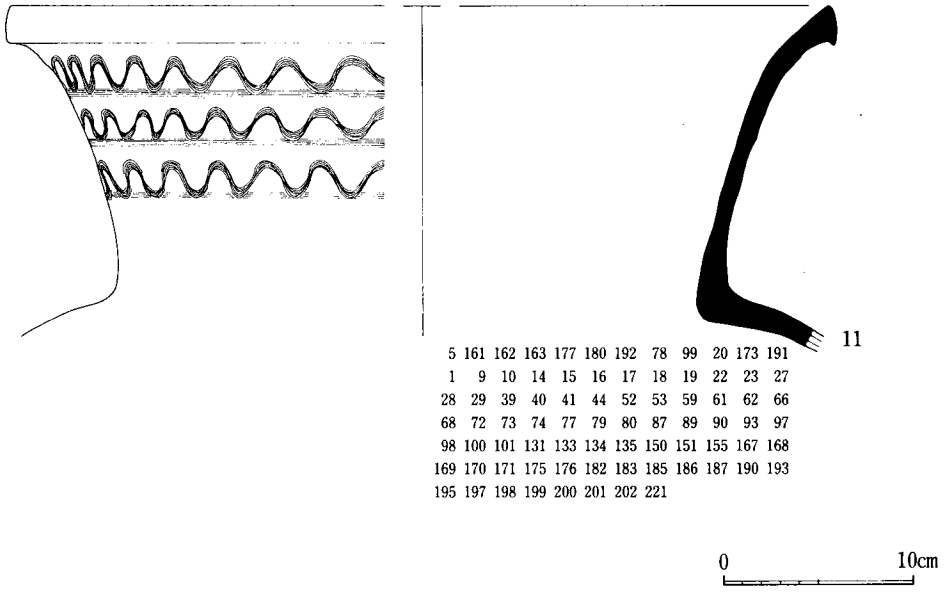
6号住居跡遺物実測図(1)

0 20cm

第86図　6号住居跡カマド、遺物実測図(1)



第87図　6号住居跡遺物実測図(2)



第87図　6号住居跡遺物実測図(2)

7号住居跡　(100)（第88・89・90図、図版45・61）

検出状況　調査区の北東寄りの、南東に開いた一つめの大きな谷津から続く、標高32.5mの急な斜面に位置する。

形状・規模　主軸の方位はN－35°－W、5.9m×5.8mのほぼ方形を呈しており、竪穴掘込み面の外側の斜面上方にみられる浅い掘込みは、上屋構造と関りのある造成部分と考えられる。

覆土　斜面に沿う東西方向の覆土の堆積は、皿状の薄い土層が交互に重なる状況を示しており、3層以上は本住居跡埋没後の再堆積土層と考えられる。

床面　床面はハードロームを堅くつき固めており、急斜面であるにもかかわらず、東西方向、南北方向ともに水平を維持している。

また、南壁ぎわの壁溝付近より4本の、いわゆる仕切溝と考えられる施設が検出された。

カマド　西壁のほぼ中央部分に位置し、遺存状態も良好である。

カマドの火袋部には、支脚の代りに高坏を倒立させて使用している。

柱穴　4本タイプで、柱穴の平面形は小規模ながら掘込みの深い安定したつくりとなっている。

貯蔵穴　西壁寄りの、カマドの東脇に位置し、隅丸方形の平面形態を示す。

遺物出土状況　遺物量は少ないが、床面直上及びカマド内の出土を特徴とする。

遺物　1・2は土製丸玉であり、このうち2は床面直上の出土である。

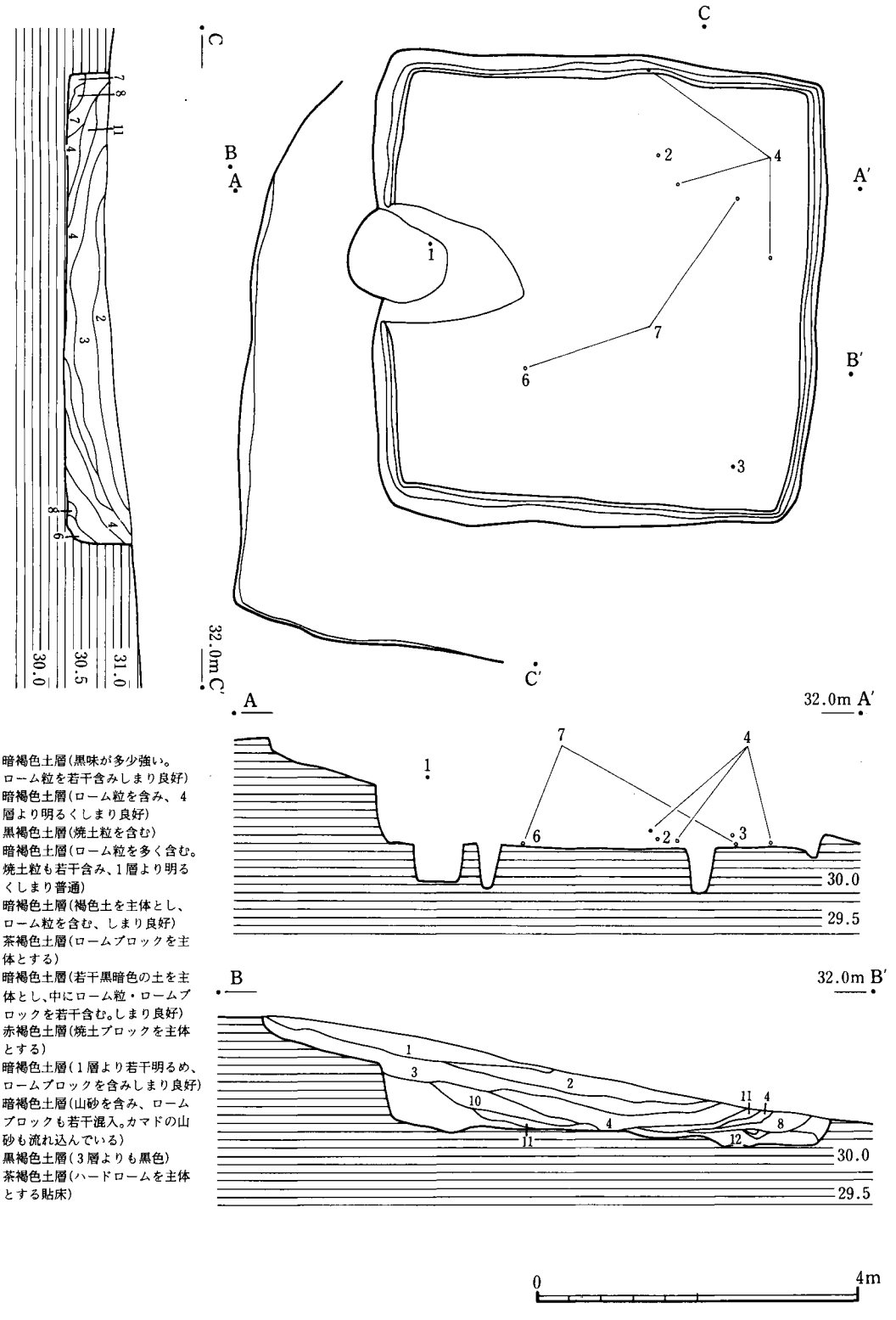
3・4は土師器坏、いづれも破片のみの出土であるが、床面直上の出土である。

5は、坏部中央に稜線を有する高坏で、カマド内から倒立して検出されており、支脚の代用とされたものと考えられる。

6は縦位のヘラケズリの見られる、口縁部のすぼまる甕、7は甑の胴下半部のみの遺存ではあるが、いづれも床面直上の出土である。

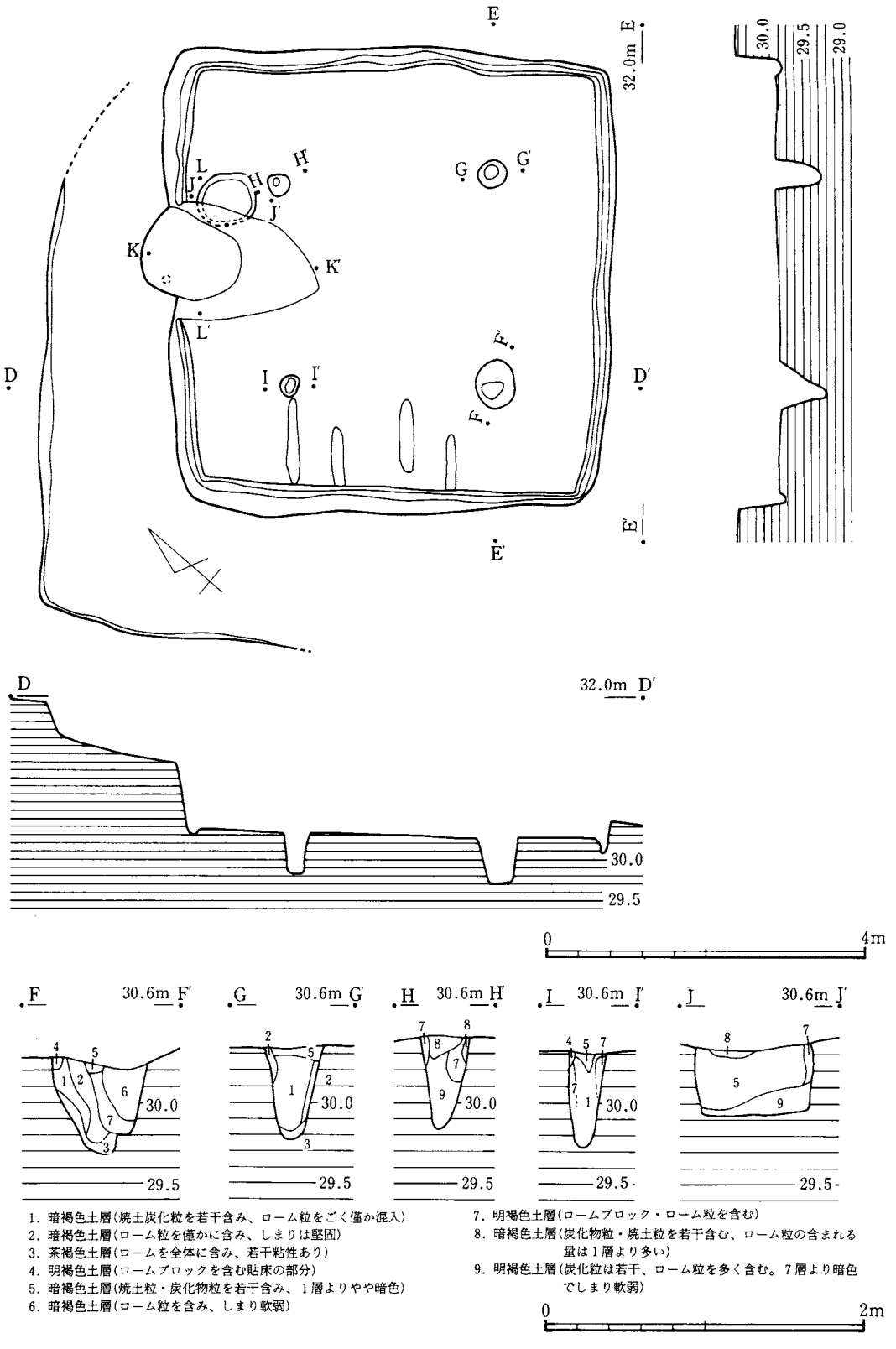
焼成　○良好、△普通、×劣　**第20表－1**

No.	器種	法量（mm）				遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴（成形・調整）
		器高	口縁径	底部径	胴部径					
3	坏	42	128	—	130	½	△	内面　褐色 外面　暗褐色	砂粒を多量に含む	口縁部外面ヨコナデ　内面は丁寧なミガキ 胴部外面横位のヘラケズリ　口唇部は磨滅は著しい
4	坏	50	(130)	—	136	⅓	○	暗褐色	大粒の岩石粒を含む	口縁部内外面　暗褐色　内面はミガキ 胴部外面ヘラケズリ
5	高坏	148	190	57	146	完形	○	内面　黒色 外面　赤褐色	砂粒を多量に含む 緻密	口縁部外面ヨコナデ　内面は丁寧なナデ 坏部外面丁寧なナデ 脚部外面縦位のヘラケズリ　内面横位の丁寧なナデ 坏部と脚部の境はサシ込みの後の押しツブシ
6	甕	—	184	—	253	⅕	△	内面　暗褐色 外面　褐　色	砂粒を多量に含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面はナデ 胴部縦位のヘラケズリ
7	甑	—	—	90	—	⅓	○	内面　赤褐色 外面　黒　色	緻密	胴部外面ヘラケズリ後の荒いナデ、内面は縦位の丁寧なミガキ

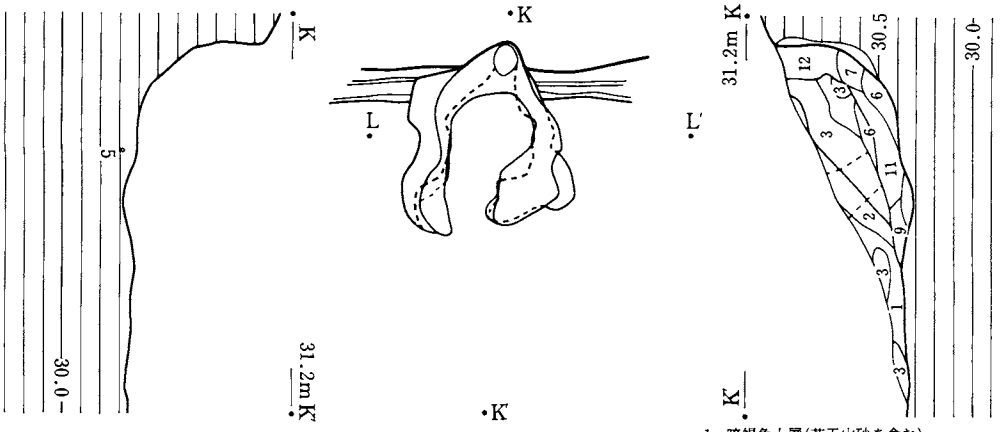


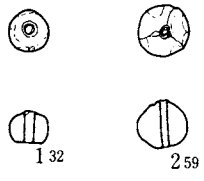
1. 暗褐色土層(黒味が多少強い。ローム粒を若干含みしまり良好)
2. 暗褐色土層(ローム粒を含み、4層より明るくしまり良好)
3. 黒褐色土層(焼土粒を含む)
4. 暗褐色土層(ローム粒を多く含む。焼土粒も若干含み、1層より明るくしまり普通)
5. 暗褐色土層(褐色土を主体とし、ローム粒を含む、しまり良好)
6. 茶褐色土層(ロームブロックを主体とする)
7. 暗褐色土層(若干黒暗色の土を主体とし、中にローム粒・ロームブロックを若干含む。しまり良好)
8. 赤褐色土層(焼土ブロックを主体とする)
9. 暗褐色土層(1層より若干明るめ、ロームブロックを含みしまり良好)
10. 暗褐色土層(山砂を含み、ロームブロックも若干混入。カマドの山砂も流れ込んでいる)
11. 黒褐色土層(3層よりも黒色)
12. 茶褐色土層(ハードロームを主体とする貼床)

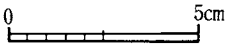
第88図　7号住居跡遺物出土状況図



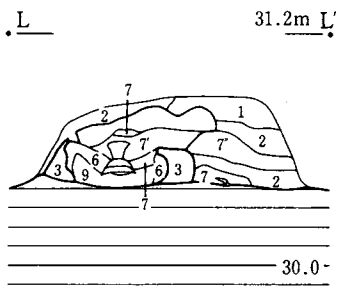
第89図　7号住居跡遺構図



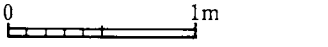


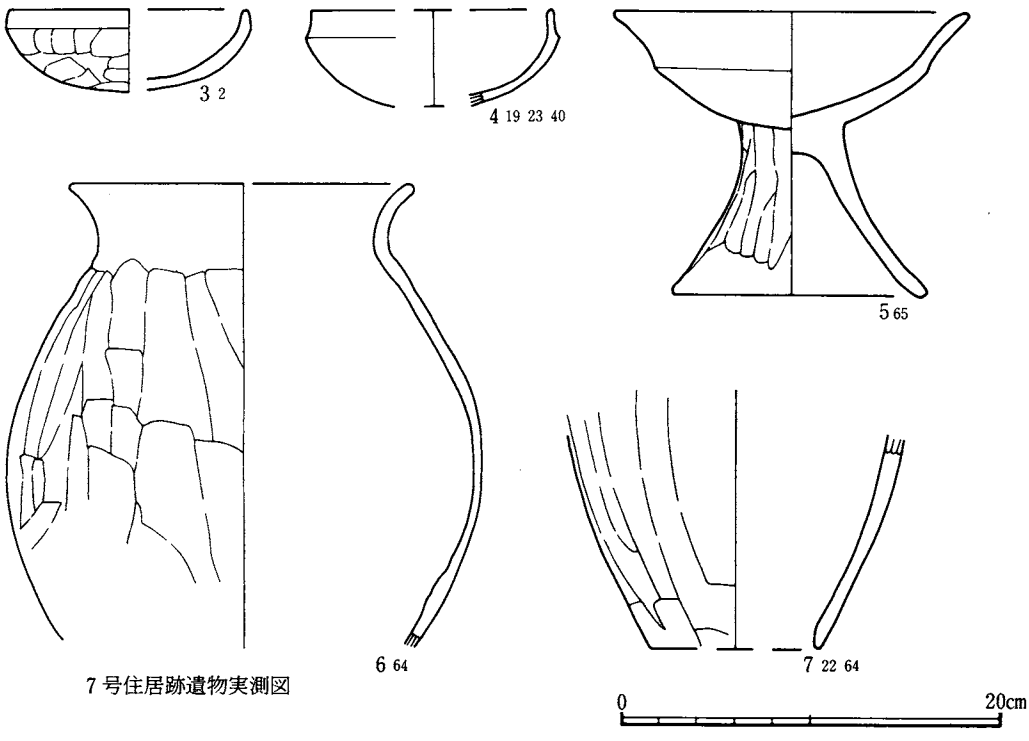


7号住居跡カマド実測図



1. 暗褐色土層(若干山砂を含む)
2. 暗褐色土層(1層より山砂多い)
3. 灰褐色土層(山砂・粘土層しまり良好)
4. 暗褐色土層(山砂を含み、炭化物粒・灰を若干含む)
5. 茶褐色土層(山砂を含み、ローム粒も多く含む)
6. 赤褐色土層(焼土塊・焼土粒を含む)
7. 黒褐色土層(炭化物粒を多く、焼土粒は若干含む)
7'. 黒褐色土層(7層より山砂を多く含み、灰色味を帯びる)
7''. 黒褐色土層(7層より山砂少なく、1層と類似)
8. 灰褐色土層(灰白色の灰を主体とする炭化物粒を多く含む)
9. 黒褐色土層(炭化物粒を7層より多く含む)
10. 暗褐色土層(山砂・ローム粒・粘土粒を若干含む。粘性若干あり)
11. 紫赤褐色土層(灰・炭化物及び焼土の堆積土層)





7号住居跡遺物実測図

第90図　7号住居跡カマド、遺物実測図

第20表－2

住居跡	名称	径(cm)	孔径(cm) 上端	孔径(cm) 下端	高さ(cm)	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	成形	調整
7号住居跡											
1	土製丸玉	1.05×1.03	0.24×0.16	0.23×0.16	0.81	○	○	淡褐色		粘土を丸めて作る。	丁寧なナデ、光沢帯る。上下に扁平な形、孔は片側穿孔。
2	土製丸玉	1.35×1.31	1.9 ×2.4	1.7 ×2.5	1.25	○	○	淡褐色			外面ヘラナデ後ヘラ磨き光沢を帯る。孔は細い棒状のものによる両側からの穿孔。

8号住居跡　(101)（第91・92・93・94図、図版46・61）

検出状況　調査区の北東寄りの、南東に開いた一つめの大きな谷津からつづく、標高31.6mの急な斜面に位置する。

形状・規模　主軸の方位はW－28°－N、7.4m×7.2mのやや東西に長い長方形を呈し、本住居跡の場合においても7号住居跡と同様に斜面上方側に造成部分が認められた。

覆土　東西方向では比較的安定した堆積状況を示し、遺物も2層以下に包含されている。

一方、南北方向では急斜面のため覆土はきわめて薄く、東壁に相当する付近はほとんど覆土がない状態であった。

床面　大部分の床面はハードロームをつき固めたものであるが、東端付近の床面は一部流出したものと考えられ、壁溝も東端の縁辺では消失している。

カマド　西壁のほぼ中央部分に位置するが、構築材として白色粘土粒混じりの暗褐色土壌を使用しているため、竪穴内の覆土除去作業中にカマドの一部について削平されている。

したがって、カマドの平面図は残存部分のみ示されていることを併記しておきたい。

柱穴　4本タイプで、柱穴の断面の掘方はあまり明瞭ではなく、斜面下方側の柱穴は深さもありしっかりとしたつくりとなっている。

貯蔵穴　北壁沿いの、カマドの東脇に位置し、方形の平面形態を示す。

これとは別に、北東コーナー付近の柱穴に近い位置に楕円形を呈する土坑状の掘込みが検出された。

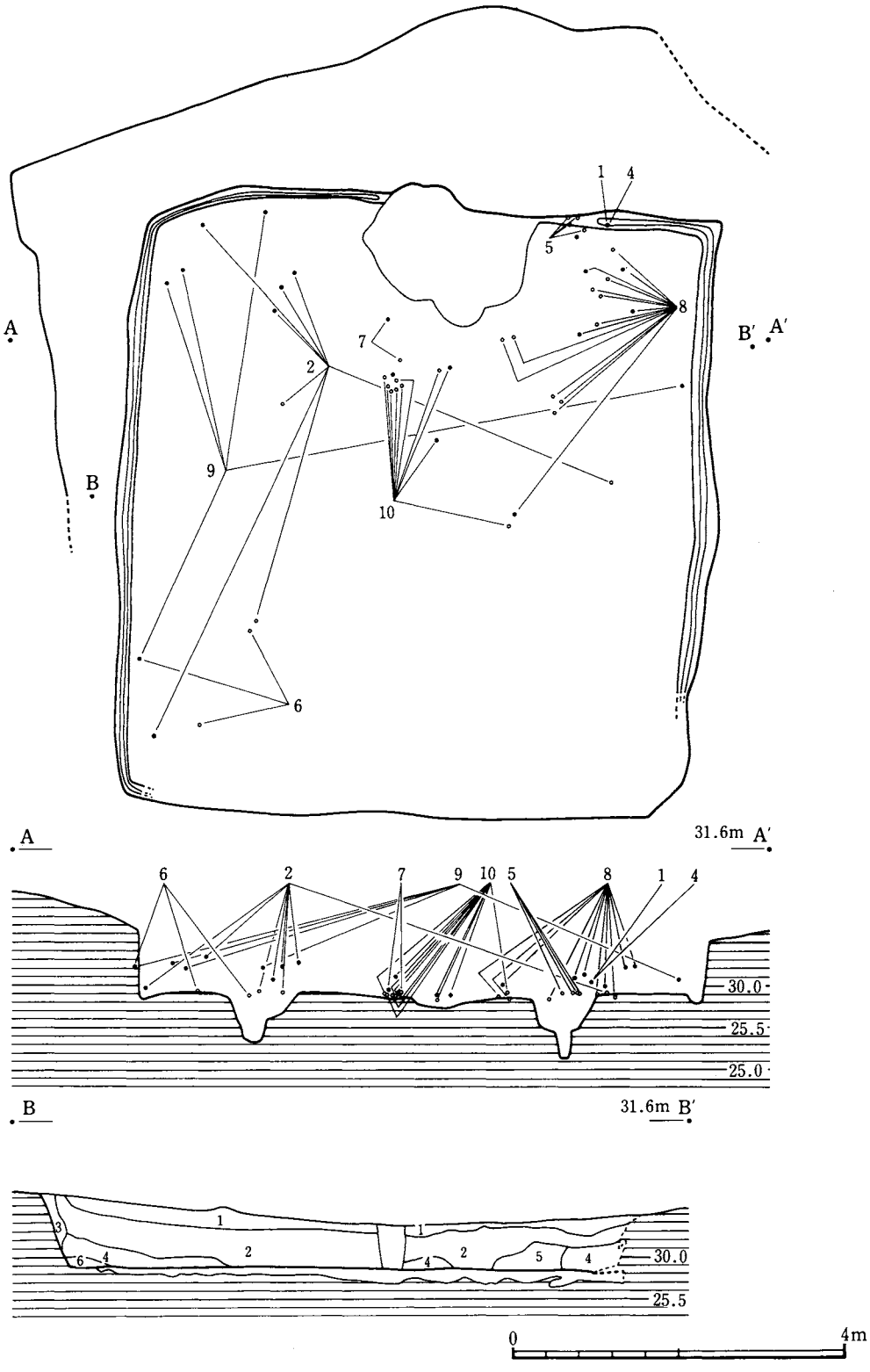
遺物出土状況　カマド周辺を中心に、斜面上方寄りの床面より検出された。

遺物　1～6は土師器の坏で、2・3・5・6が床面直上の出土である。

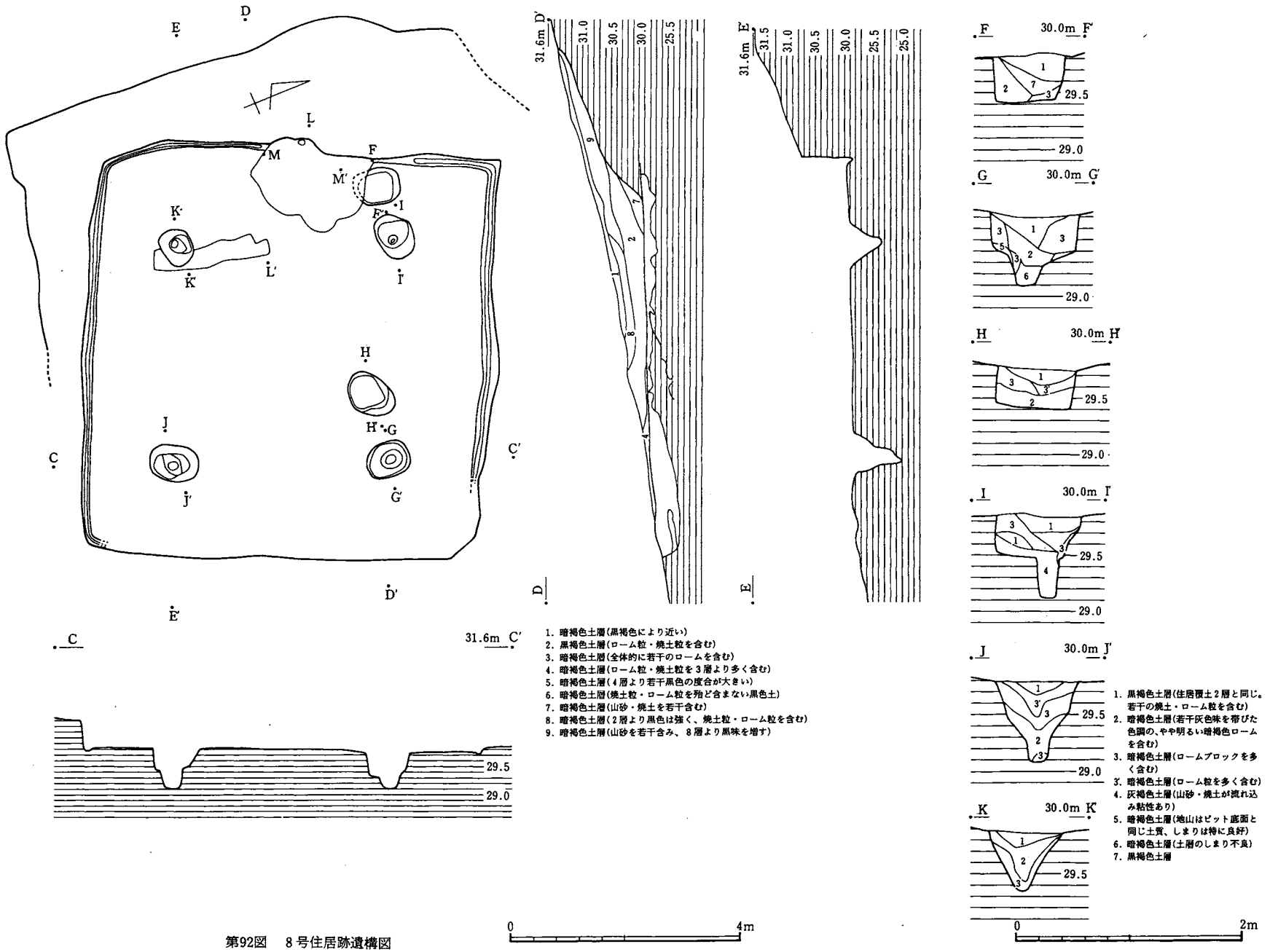
5は底部が平底となっており、あるいは坏以外の器種とすべきかもしれない。

7は床面直上出土の小型平底土器で、胴部中央に鋭い稜を有する。

8～10は甕、8・10は床面直上より検出され、いづれも口縁部は小さめで、特に8・9の口縁は逆八の字状に大きく開口する。



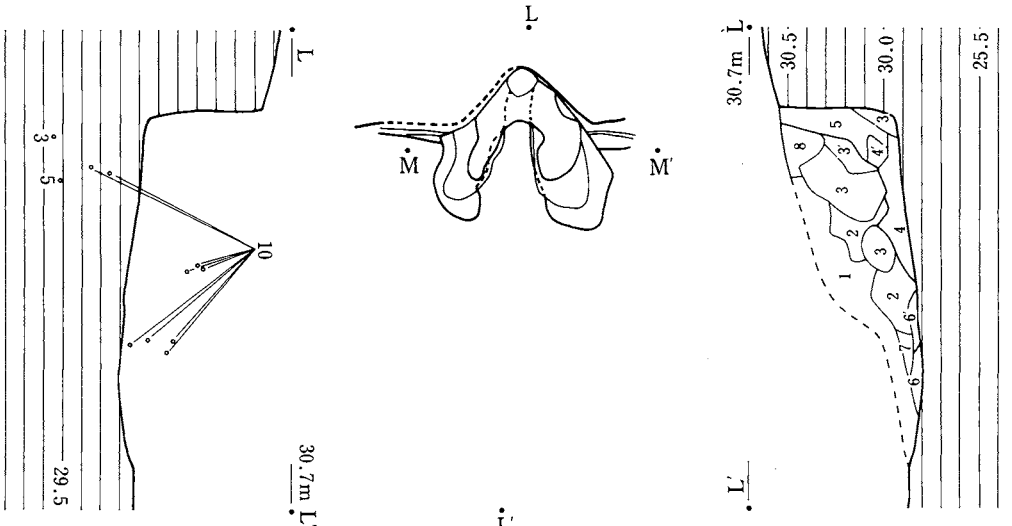
第91図　8号住居跡遺物出土状況図



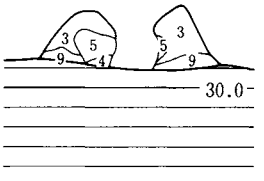
1. 暗褐色土層(黒褐色により近い)
2. 黒褐色土層(ローム粒・焼土粒を含む)
3. 暗褐色土層(全体的に若干のロームを含む)
4. 暗褐色土層(ローム粒・焼土粒を3層より多く含む)
5. 暗褐色土層(4層より若干黒色の度合が大きい)
6. 暗褐色土層(焼土粒・ローム粒を殆ど含まない黒色土)
7. 暗褐色土層(山砂・焼土を若干含む)
8. 暗褐色土層(2層より黒色は強く、焼土粒・ローム粒を含む)
9. 暗褐色土層(山砂を若干含み、8層より黒味を増す)

1. 黒褐色土層(住居覆土2層と同じ。若干の焼土・ローム粒を含む)
2. 暗褐色土層(若干灰色味を帯びた色調の、やや明るい暗褐色ロームを含む)
3. 暗褐色土層(ロームブロックを多く含む)
3'. 暗褐色土層(ローム粒を多く含む)
4. 灰褐色土層(山砂・焼土が流れ込み粘性あり)
5. 暗褐色土層(地山はピット底面と同じ土質、しまりは特に良好)
6. 暗褐色土層(土層のしまり不良)
7. 黒褐色土層

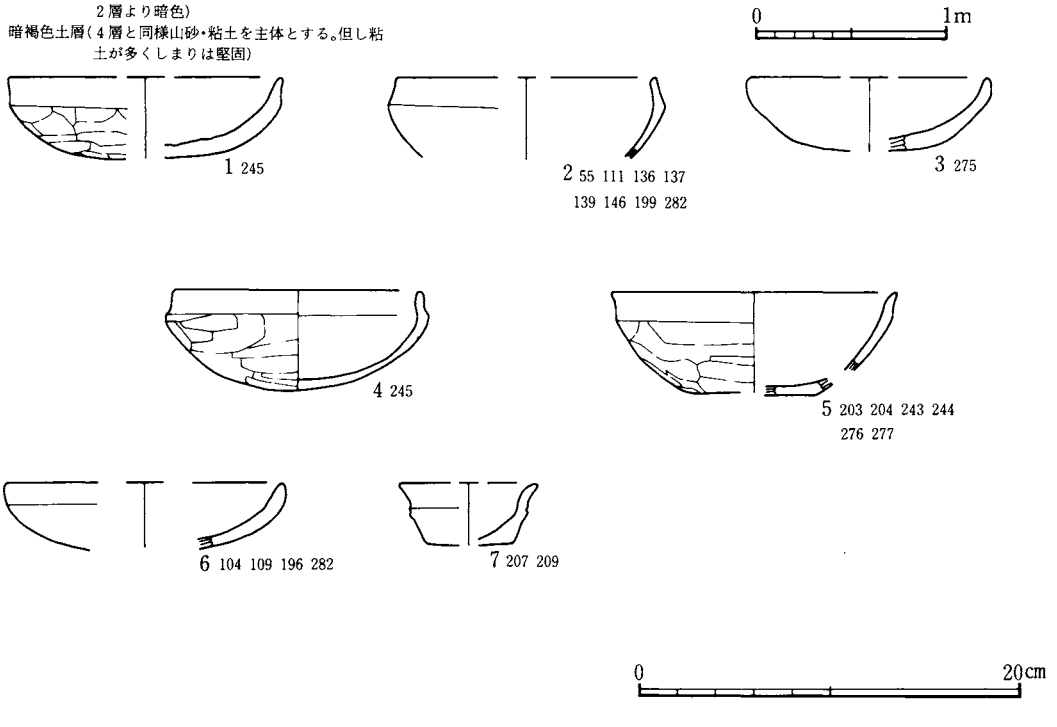
第92図　8号住居跡遺構図



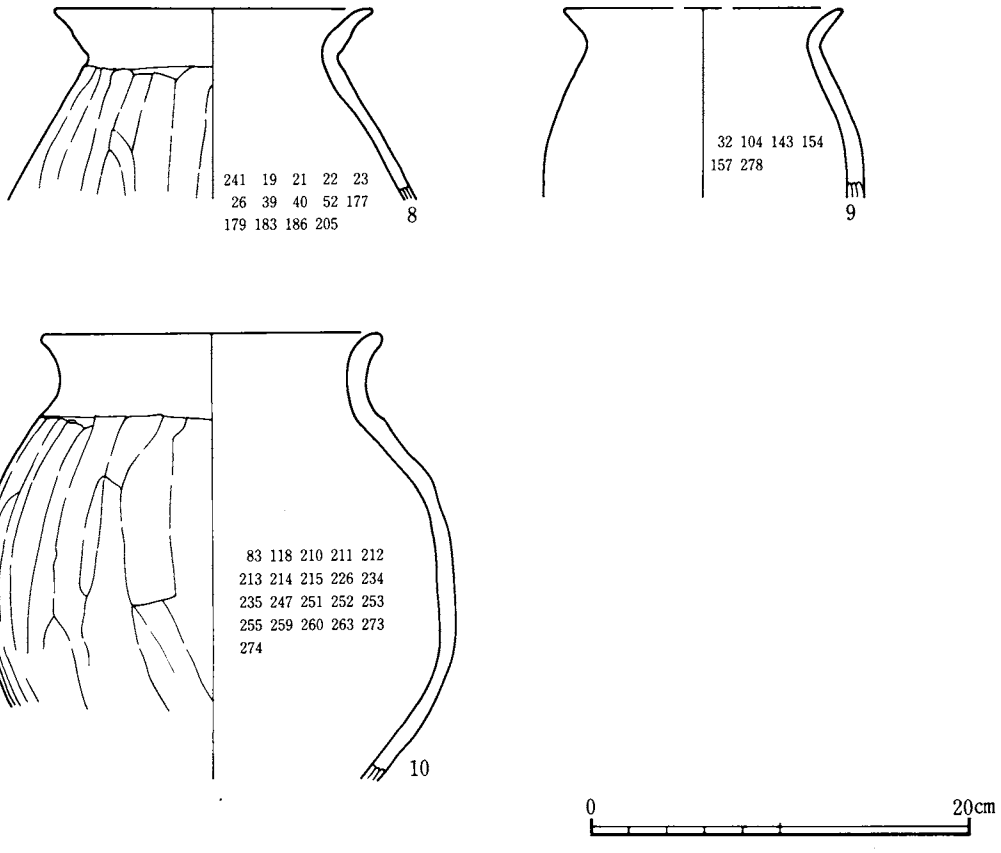
1. 暗褐色土層(黒褐色に近い土壌を主体とし、ローム粒・焼土粒を若干含み、山砂はごく少量含む)
2. 暗褐色土層(山砂を多少含み、焼土粒・ローム粒を若干含む)
3. 灰褐色土層(多量の山砂・粘土を含み、しまり良好)
3'. 焼土層(焼土ブロックを若干含む)
4. 暗褐色土層(焼土粒・焼土ブロックを含む。3層より暗色の山砂及び粘土を主体とする)
4'. 炭化物層(焼土を含む)
5. 赤褐色土層(焼土ブロックを山砂層中に多く含む)
6. 黄褐色土層(ロームブロックを含む貼床部分)
6'. 黄褐色土層(6層よりロームは若干少ない)
7. 黒褐色土層(炭化物粒を若干含む)
8. 暗褐色土層(暗褐色土を主体とし、その中に山砂を含む。2層より暗色)
9. 暗褐色土層(4層と同様山砂・粘土を主体とする。但し粘土が多くしまりは堅固)



8号住居跡カマド実測図



第93図　8号住居跡カマド、遺物実測図(1)



第94図　8号住居跡遺物実測図(2)

焼成　○良好、△普通、×劣　**第21表**

No.	器種	法量（㎜）				遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴（成形・調整）
		器高	口縁径	底部径	胴部径					
1	坏	(42)	144	—	144	½	△	暗褐色	石英の細粒を多量に含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面は荒いミガキ（剝離が著しい） 胴部外面横位のヘラケズリ
2	坏	—	140	—	148	⅛	○	暗褐色	緻密	口縁部外面から胴部内面ヨコナデ後のミガキ 胴部外一画ヘラケズリ後のミガキ
3	坏	(39)	126	—	—	⅛	△	内面　暗褐色 外面　黒褐色	砂粒、粘土粒を含む	口唇部から口縁部内面ヨコナデ　内面丁寧なミガキ 胴部外面ヘラケズリ後のナデ
4	坏	53	130	—	140	完形	○	褐色	石英、雲母の細片を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面は丁寧なミガキ 胴部外面横位の荒いヘラケズリ
5	甕	52	152	—	146	½	○	内面　暗褐色 外面　褐色	砂粒を多量に含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面は丁寧なナデ 胴部外面横位のヘラケズリ

6	坏	—	(146)	—	—	1/5	△	暗褐色	砂粒及び岩石細粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ後の丁寧なミガキ　内面ミガキ 胴部外面ヘラケズリ後のナデ
7	ミニチュア	32	(74)	(46)	62	1/3	○	暗褐色	砂粒を多量に含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ、底部は指頭によるナデ
8	甕	—	160	—	—	1/4	○	暗褐色	砂粒及び小礫を含む	口縁部はかるく屈曲し逆『い』の字状に開く、口経部内面ヘラミガキ 口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面縦位のヘラケズリ、内面丁寧なナデ、胴下半部に最大径をもち下ぶくれ様の器形。
9	甕	—	150	—	172	1/10	△	内面　暗褐色 外面　黒褐色	砂粒及び大粒の粘土粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面は丁寧なナデ 胴部外面ヘラケズリ後の縦位のナデ
10	甕	—	179	—	255	3/5	○	内面　黒褐色 外面　褐　色	砂粒及び岩石細粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面丁寧なナデ 胴部縦位のヘラケズリ

9号住居跡　(107)（第95・96・97・98・99・100・101図、図版46・62・63・64・65）

検出状況　調査区の北東寄りの、南東に開いた一つめの大きな谷津のほぼ谷底部分にあたる、標高24.2mに位置する。

9号住居跡は、従来の住居跡の構築される立地についての諸説を大きく逸脱した地形的還境の中に成立している。

形状・規模　主軸の方位はN—21°—W、5.4m×5.3mのほぼ方形を呈している。

覆土　谷津の谷底部分であるため、遺構の検出は周囲の泥炭化した腐植土と区別するため、細心の注意を要した。

住居跡の覆土1層及び2層には焼土粒が多量に含まれており、大よその範囲はこの覆土を追うことで把握された。

また、壁は予測したよりも簡単に判明した。

それは、本住居跡が埋没していた時には漆黒色の腐植土が1.5m程堆積しており、充分な水分の供給を受けていたことになり、住居跡内の覆土除去作業の進行とともに乾燥化が進み、壁との間に自然剝離的な亀裂が生じたことに起因する。

床面　床面はロームによる丁寧な貼床が確認されており、南北方向がほぼ水平であるのに対し、東西方向では緩やかな傾斜が見られる。

また、壁溝は斜面下方側にあたる縁辺部を中心に設置されている。

カマド　西壁のほぼ中央部分に位置し、遺存度も良好である。

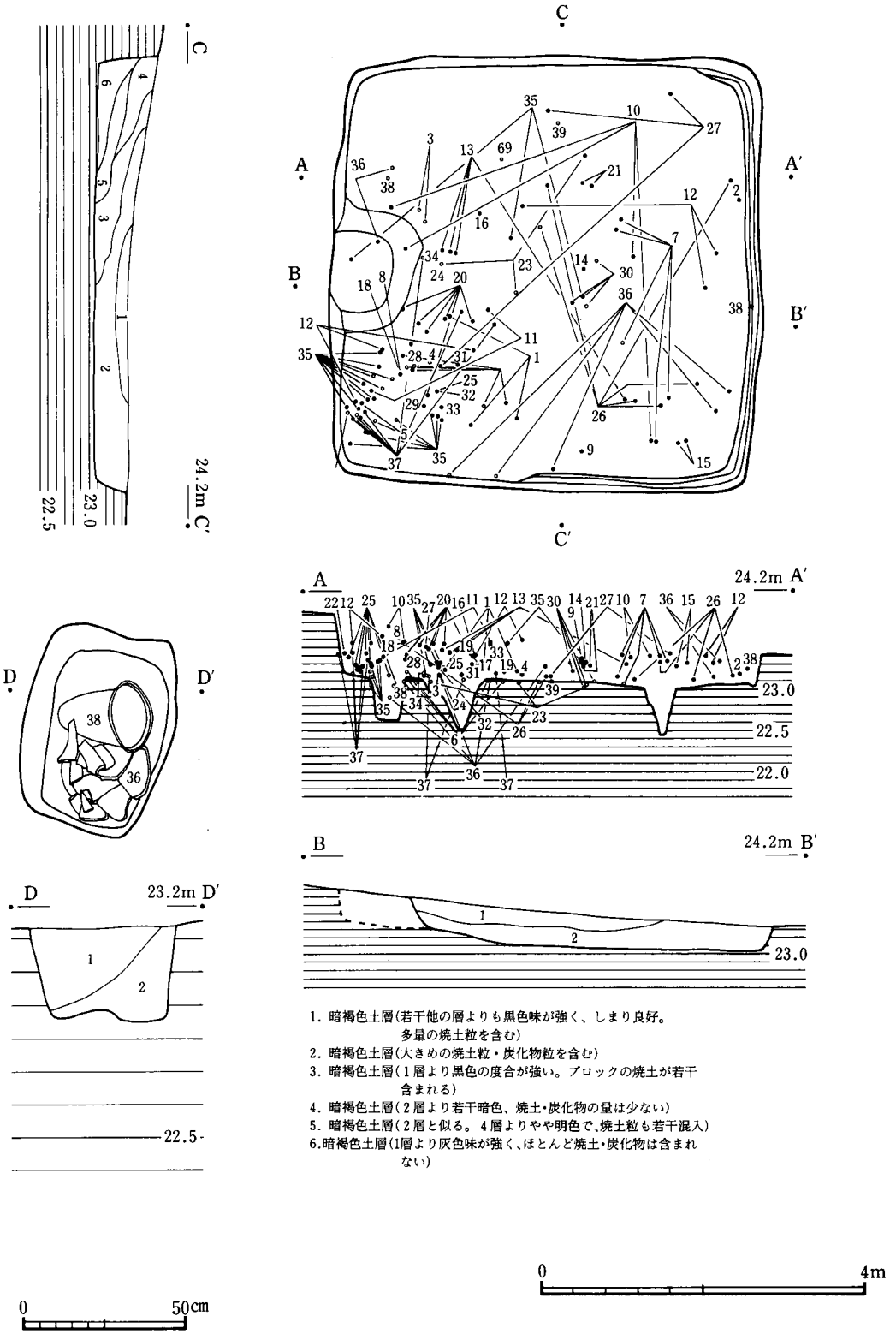
カマドの袖部は、白色粘土と山砂を混合した構築材により丁寧につくられている。

柱穴　カマドの対面に1本を設けた5本タイプで、柱穴の掘込みは深くそれぞれしっかりしたつくりとなっている。

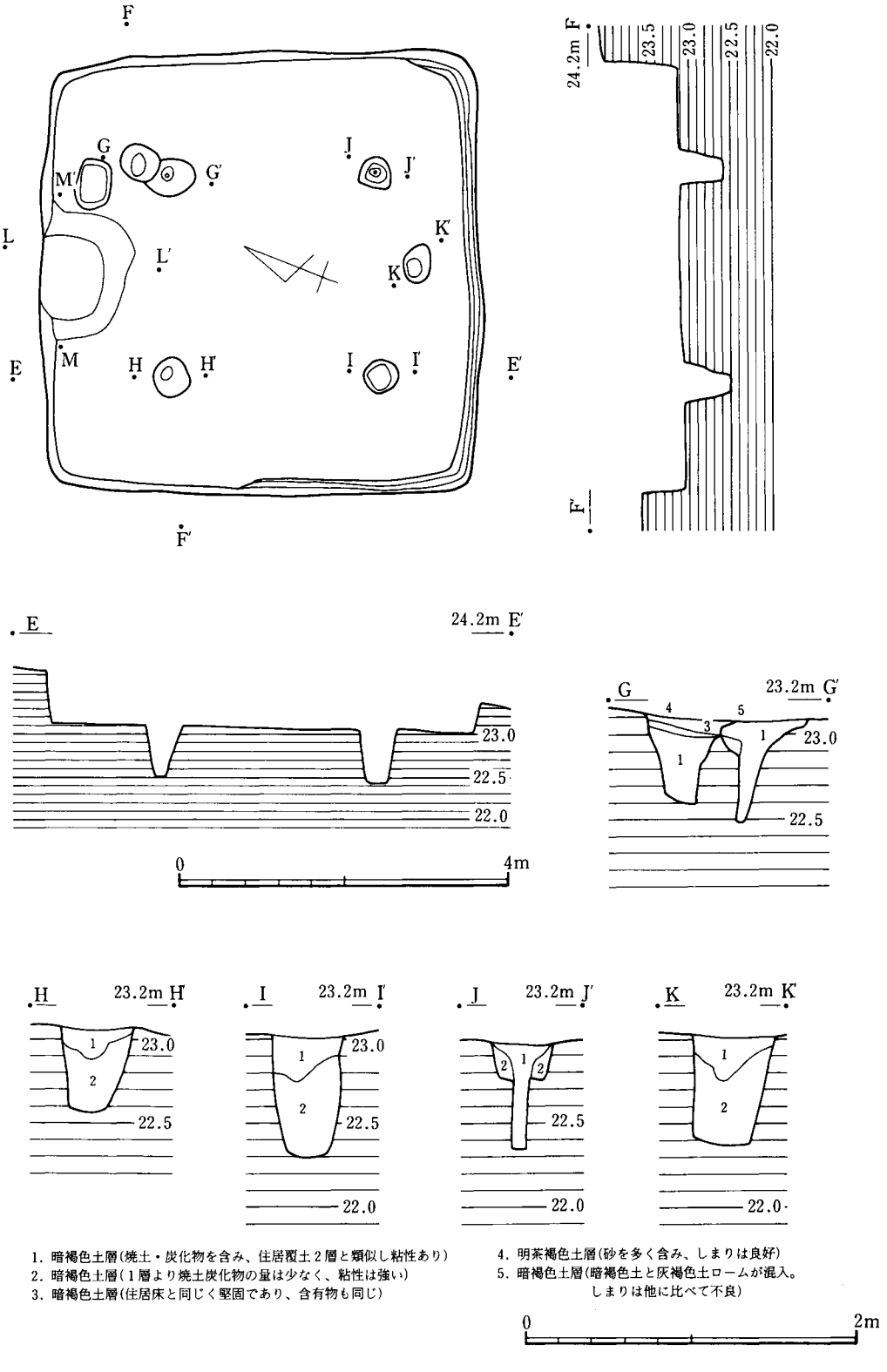
貯蔵穴　北壁寄りの、カマドの東脇に位置し、長方形の平面形態を示す。

貯蔵穴内からは甕及び甑が検出されている。

遺物出土状況　本住居跡の保存状態がきわめて良かったため、最も豊富な包蔵量を示している。



第95図　9号住居跡遺物出土状況図



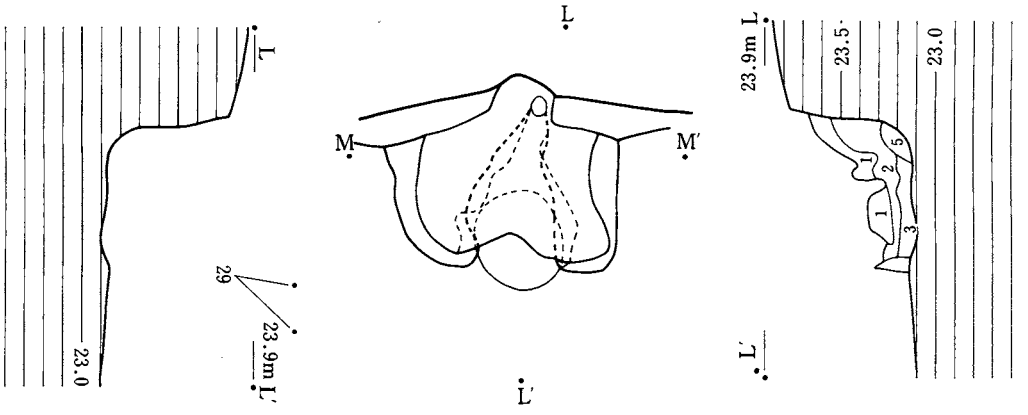
第96図　9号住居跡遺構図

遺物は住居跡覆土の全層位中から検出されており、特に2層以下に著しい。
この程度の規模の住居跡としては、坏16箇体の検出は奇異な印象すら与えている。
タルカ作遺跡において、3号住居跡で15箇体(1点は須恵器)、28号住居跡及び40号住居跡において12箇体の検出が報告されているが、いづれも器種の少ないことが特徴となっていた。
ところが、腰巻遺跡の9号住居跡の場合には、坏以外の器種さえも須恵器坏蓋2、椀形土器1、高坏4、小形甕5、甕10(復元可能な箇体のみ)、甑1という状況である。
この豊富な箇体数に限らず、同様な器種の状況は本住居跡の性格を考える上で、きわめて示唆に富むものであることが指摘される。
遺物　1～11・13～16・18は土師器の坏で、3・4・6・7は床面直上の出土である。
2は口縁部と体部の境に明瞭な屈曲を有し、口縁部はほぼ直立する。
3・4は口縁部高に比べて体部の浅いつくりが特徴となっている。
5・9は、やはり体部の浅いつくりを示すが、口縁部は5が直立、9は外反ぎみに立ち上がる。
6は、佐倉第三工業団地内の遺跡においてはしばしば見うけられる形態であるが、他の周辺遺跡においてはあまり類例を見ない坏である。
内面は丁寧なナデ調整されているものの、特別な内面処理は行なわれておらず、断定はしかねるものの東北地方の『栗囲式』と呼称される土師器坏と形態的に類似するものである。
7は欠損ながらおそらく4と同形態の坏であろう。
8・14は、口縁部と体部の境に明瞭な段を有し、須恵器坏身の模倣タイプである。
18は、口縁部の立ち上がりが短く、口唇部は磨滅により丸く変形したつくりとなっており、5と同じ系統上にあるものと言える。
12・17は須恵器坏蓋、19は椀形土器、20は小型甕である。
20は3号住居跡出土のワイングラス状の台付甕の台部を取り去った形態である。
21～24は高坏、22～24は床面直上の出土である。
このうち、22は脚部の発達した形態が見られ、24は坏部中央に稜を持ち、口縁は大きく外反するタイプの高坏である。
25・26・29・31は小型甕、このうち26が床面直上の出土である。
25・26は胴部が球状を呈し、29・31はやや胴部の張りの弱い形態を示している。
27・28・32～37は甕、32・34・35・36・37は直面直上及び貯蔵穴内より検出されている。
35は胴部中央付近に最大径があり、30・34・36・37は胴部長に発達の兆が見られる長胴タイプの形態を呈している。
39は床面直上より検出された大型の土玉。

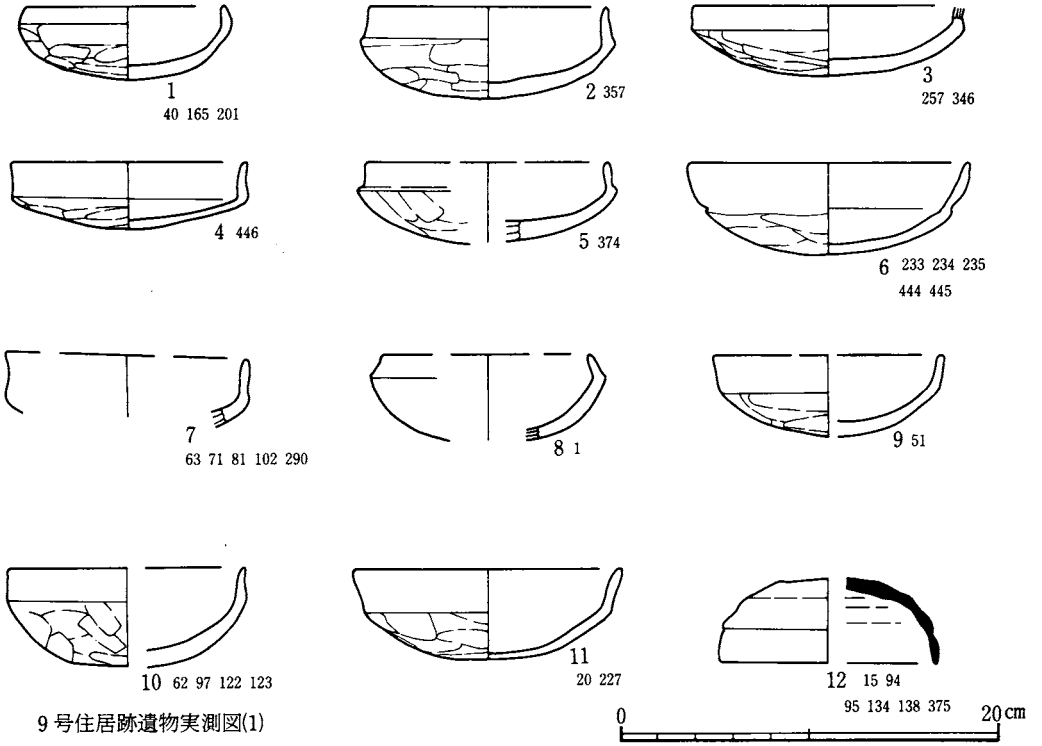
焼成　○良好、△普通、×劣　**第22表－1**

No	器種	法量（mm）				遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴（成形・調整）
		器高	口縁径	底部径	胴部径					
1	坏	38	104	—	103	ほぼ完形	△	暗褐色	石英及び砂粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面横位のヘラケズリ
2	坏	47	127	—	137	ほぼ完形	○	褐色	石英その他の岩石細粒を含む	口縁部内外ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面横位のヘラケズリ　口縁部内外面赤彩
3	坏	36	(144)	—	146	ほぼ完形	△	褐色	大粒の石英粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面横位のヘラケズリ
4	坏	36	126	—	126	完形	△	暗褐色	砂粒を多量に含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面横位のヘラケズリ
5	坏	47	144	—	172	完形	○	暗褐色	砂粒を多量に含む	口縁部外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面横位のヘラケズリ
6	坏	48	149	—	130	完形	○	内面　茶褐色 外面　暗褐色	緻密で均一な粒子の素地を使用	口縁部外面ヨコナデ後のミガキ　内面丁寧なミガキ 胴部外面横位のヘラケズリ
7	坏	—	125	—	126		△	褐色	砂粒を多量に含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ
8	須恵器坏身	41	130	—	140	½	○	暗褐色	緻密	口縁部内外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ後の丁寧なナデ、刀子状の工具による擦痕あり
9	須恵器坏身	43	122	—	114	½	○	内面　暗褐色 外面　褐色	石英細粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後のナデ
10	須恵器坏身	51	126	—	126	½	○	黒褐色	粘土粒、岩石細粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面斜位のヘラケズリ後のナデ
11	須恵器坏身	—	(112)	—	(126)	¼	○	褐色	大粒の粘土粒を含む 気泡痕あり	口縁部内外面ヨコナデ　内面は丁寧なナデ 胴部外面ヘラケズリ後の丁寧なナデ
12	須恵器蓋	44	124	—	111					口縁部内外面ヨコナデ 胴部内外面回転ナデ
13	坏	37	138	—	—	⅔	○	内面　暗褐色 外面　黒褐色	石英、その他の岩石細粒を含む粘土粒を含む	口唇部ナデ　内面荒いミガキ 胴部外面横位のヘラケズリ
14	須恵器坏身	—	(110)	—	(118)	⅛	○	暗褐色	大粒の粘土粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ 全体に磨滅が著しく胴部の調整は不明
15	須恵器坏身	—	(122)	—	(116)	⅛	△	褐色	岩石細粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ
16	須恵器坏身	—	(146)	—	—	⅛	△	淡褐色	大粒の粘土粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ後のナデ
17	須恵器蓋	—	(128)	—	—	1/20	○	灰白色	緻密	回転ナデ　口縁部と胴部の境に2条の沈線が走る
18	坏	(41)	(140)	—	(146)	1/6	△	内面　褐色 外面　暗褐色	砂粒を多量に含む 大粒の粘土粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ
19	椀形土器	—	(128)	—	(138)	1/10	△	内面　暗褐色 外面　濃褐色	岩石細粒を含み気泡がみられる。	口縁部内外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ後のミガキ
20	小型甕	95	97	60	110	½	○	茶褐色	砂粒を多量に含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面縦位のヘラケズリ
21	高坏	—	— (脚部台) 120	—	—	脚部のみ	△	暗褐色	砂粒を多量に含む	全体に磨滅が著しく調整痕は不明
22	高坏	—	— (脚部台) 124	49	—	脚部のみ	○	褐色	こまかい砂粒を含む	坏部外面ナデ　内面ナデ 脚部外面縦位のレラケズリ後のナデ　内面丁寧なナデ
23	高坏	100	153 (脚部径) 105	50	130	完形	○	坏部内面　黒色 坏部外面　赤彩 脚部内面　褐色 脚部外面　赤彩	石英細粒を含む	口縁部外面ヨコナデ　坏部内面丁寧なナデ 坏部外面横位のヘラケズリ 脚部外面縦位のヘラケズリ　内面ナデ 坏部と脚部の境はサシ込み後のオサエ
24	高坏	75	146 (脚部径) 102	51	118	ほぼ完形	○	赤褐色	石英、長石の細粒及び砂粒を含む	口縁部外面ヨヨナデ　内面ナデ 坏部外面ヘラミガキ　脚部外面縦位のヘラケズリ 内面ナデ
25	小型甕	163	174	76	187	ほぼ完形	○	暗褐色	砂粒を多量に含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面ナデ 外面縦位のヘラケズリ後のナデ　底部ヘラケズリ後のナデ
26	小型甕	159	(162)	(79)	(184)	½	○	褐色	石英、その他の岩石粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面横位のヘラケズリ　底部ヘラケズリ
27	甕	—	160	—	—	口縁部のみ	○	褐色	こまかい砂粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面ナデ 外面縦位のヘラケズリ

（170頁につづく）

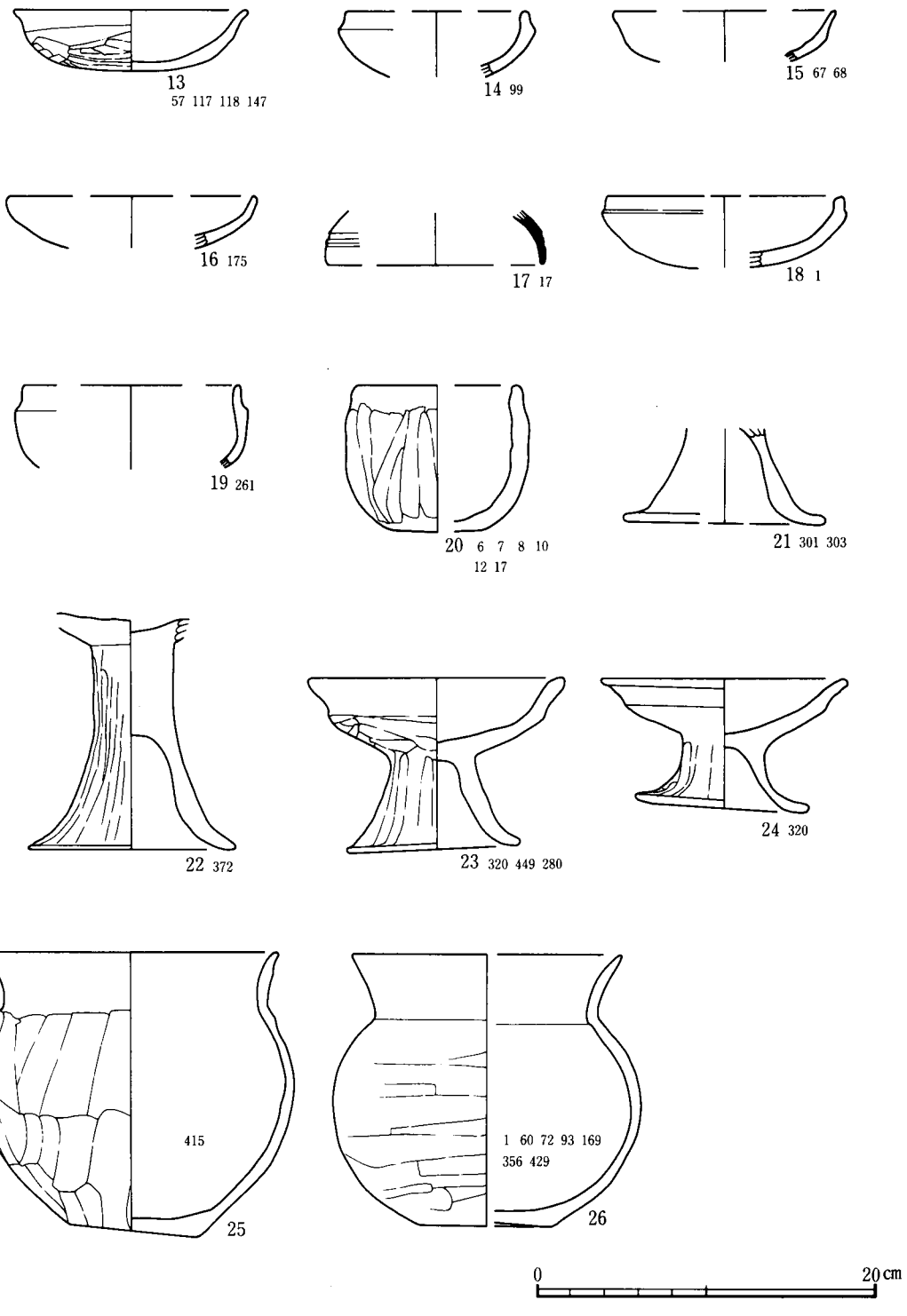


9号住居跡カマド実測図

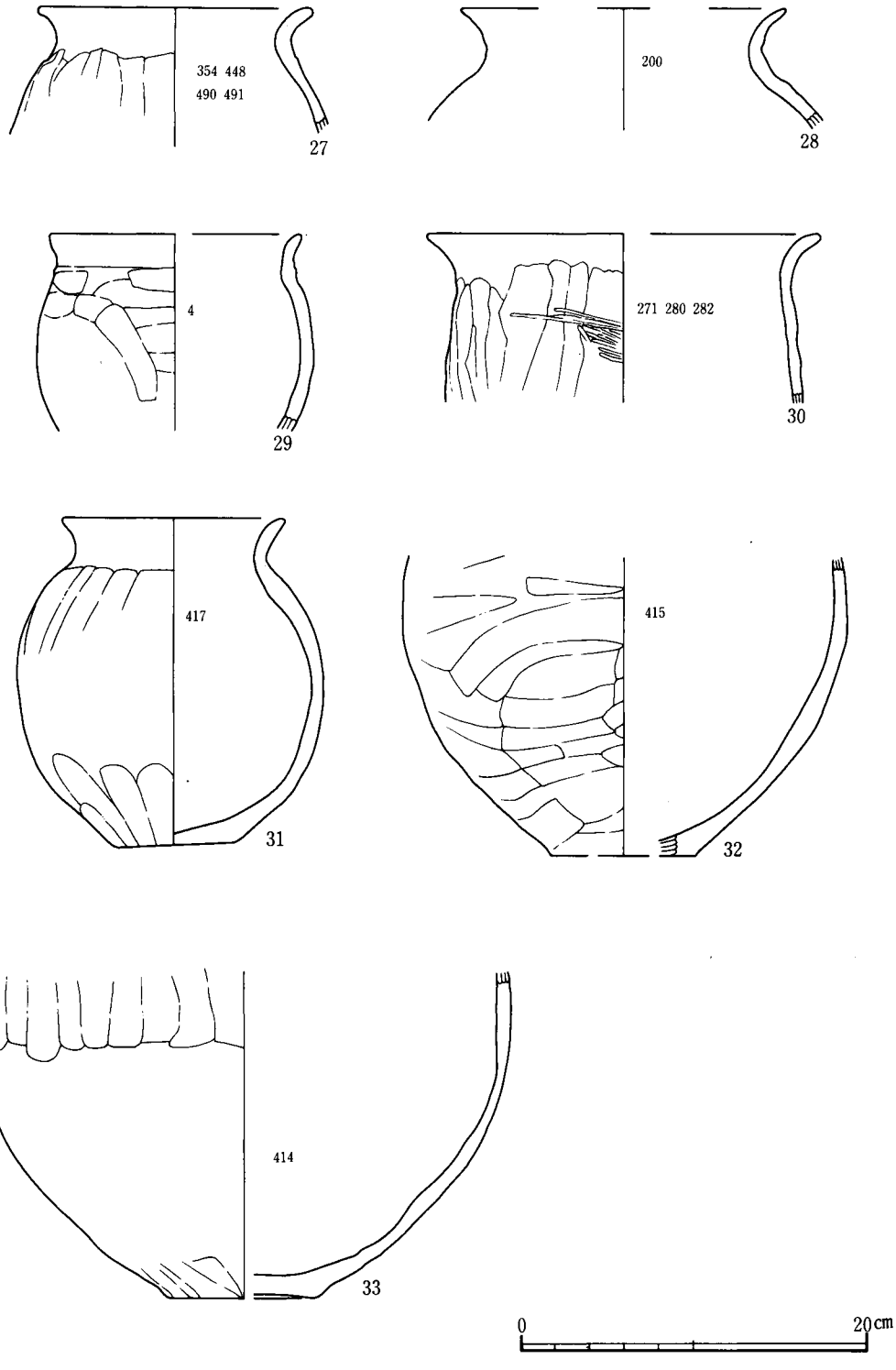


9号住居跡遺物実測図(1)

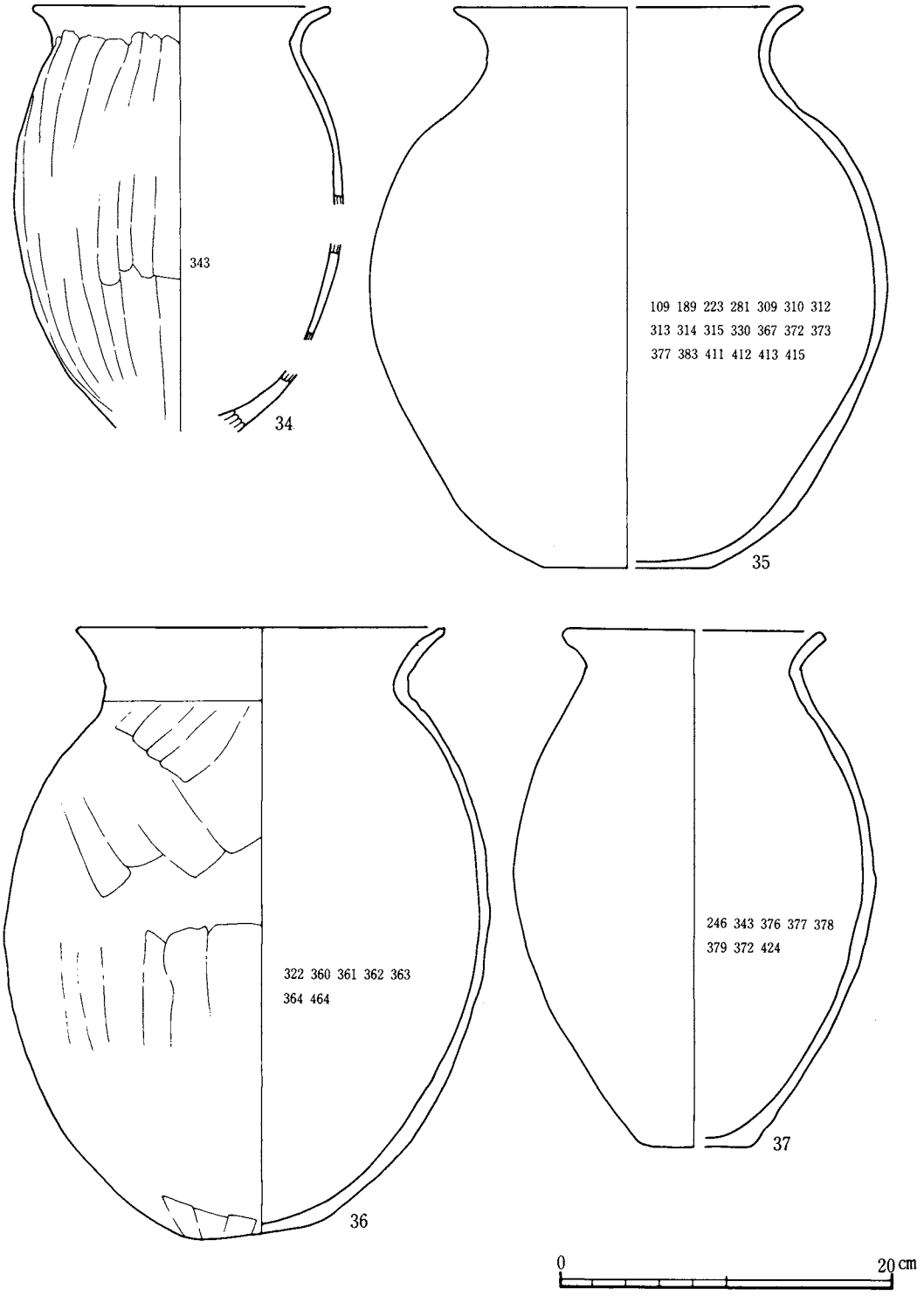
第97図　9号住居跡カマド、遺物実測図(1)



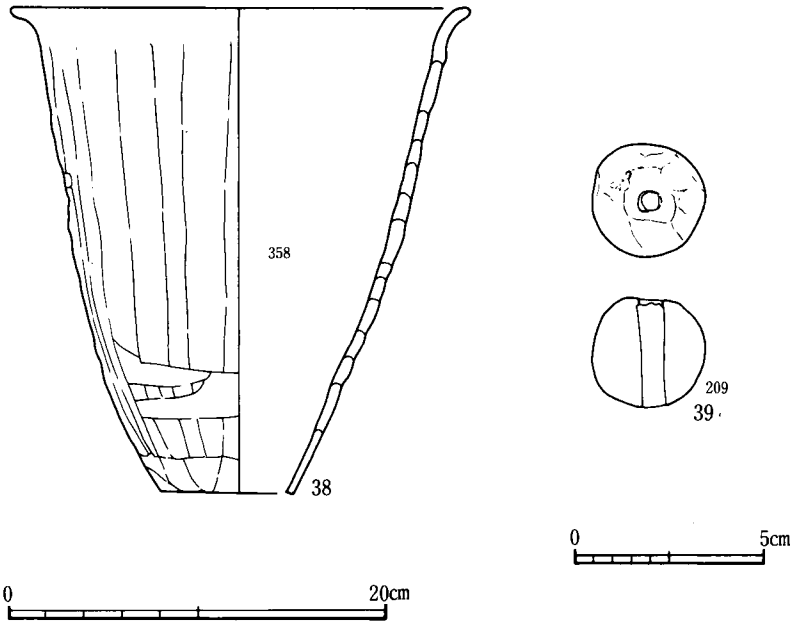
第98図　9号住居跡遺物実測図(2)



第99図　9号住居跡遺物実測図(3)



第100図　9号住居跡遺物実測図(4)



第101図　9号住居跡遺物実測図(5)

28	甕	—	(192)	—	—	⅓	○	内面　黒褐色 外面　暗褐色	石英細粒を含み気泡がみられる	口縁部内外面ヨコナデ　口頸部ナデ 胴部外面ヘラケズリ後のナデ
29	小型甕	—	144	—	160	½	○	褐色	砂粒及び岩石細粒を多量に含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面丁寧なナデ 胴部外面横位のヘラケズリ後のナデ
30	小型甕	—	130	—	—	¼	○	内面　褐色 外面　黒褐色	石英粒及び粘土粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面口頸部付近ヘラケズリ 胴部外面縦位のヘラケズリ部分的なミガキ
31	小型甕	184	130	67	178	完形	○	褐色	砂粒を多量に含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面丁寧なナデ 外面縦位のヘラケズリ　底部ヘラケズリ後のナデ
32	甕	—	—	84	260	½	○	暗褐色	長石、滑石及び粘土粒を含む	胴部外面横位のヘラケズリ
33	甕	—	—	87	312	⅓	○	内面　黒褐色 外面　暗褐色	キメのこまかいよく精練された素地を使用	胴上半部縦位のヘラケズリ　内面ヘラ状工具による荒いナデ 胴部下半部ヘラケズリ後の横位のナデ
34	甕	—	161	—	199	⅕	○	内面　黒褐色 外面　茶褐色	岩石粒を含むが素地はキメこまかくよく精練されている。	口縁部内外面ヨコナデ　内面丁寧なナデ 胴部外面縦位のヘラケズリ
35	甕	338	(210)	(100)	(324)	⅓	○	内面　暗褐色 外面　褐色	石英、滑石の細粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ後のナデ
36	甕	363	220	83	291	ほぼ完形	△	褐色	石英、長石、滑石その他の岩石細粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面丁寧なナデ 外面ヘラケズリ後の荒いナデ
37	甕	305	151	69	218	¼	△	茶褐色	砂粒を多量に含む	口唇部剝離　口縁部外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面縦位のヘラケズリ後のナデ
38	甑	255	247			完形	○	褐色	大粒の粘土粒を含む	口唇部内面から口縁部外面ヨコナデ 胴部外面縦位のヘラケズリ　内面丁寧なナデ

第22表－2

住居跡	名称	径(cm)	孔径(cm) 上端	孔径(cm) 下端	高さ(cm)	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	成形	調整
9号住居跡											
39	土玉	3.08×3.01	0.53×0.48	0.53×0.44	2.89	○	○	褐色 一部黒色		粘土を丸めてor粘土紐の巻付けが不明	半面に一次焼成痕あり ヘラナデ比較的丁寧、孔は明確ではないが両側から。

10号住居跡　(115)　(第102・103・104・105図、図版47・65・66)

検出状況　調査区の北東寄りの、南東に開いた一つめの大きな谷津に続く、標高29.7mの斜面に位置する。

形状・規模　主軸の方位はE－25°－N、5.9m×5.2mの南北にやや長い長方形を呈し、斜面上方には浅い掘込みの造成部分が検出された。

覆土　壁ぎわからの流入土層に重なるように2層以上は堆積している。

1層は周辺の地山層に類似しており、斜面上方からの流入土層と考えられる。

床面　ハードロームを堅くつき固めており、壁溝は全周する。

カマド　北壁のほぼ中央部分に位置し、遺存状態も良好であり、焚口、煙道部とも明瞭に確認できた。

柱穴　カマドの対面に1本を設けた5本タイプで、いづれも掘方の安定したつくりとなっている。

貯蔵穴　北壁寄りの、カマドの東脇に位置し、ほぼ円形の平面形態を示す。

遺物出土状況　遺物は住居跡覆土の2層以下に、復元可能なものが検出されている。

遺物　1は須恵器坏蓋。

2はやや扁平なつくりの土師器の坏。

3～5は平底の椀状の容器で、胴部は大胆なヘラケズリ痕を残している。

6も、椀状の容器で、底部は平底となり口縁部が波打っている。

底部付近に至るまで横位のヘラケズリ調整が見られ断定はできないが、甕の胴上半部を切断した、おそらく欠損品を再利用したものと考えられる。

7・8は甕、7は胴部の張りの強い球胴タイプの甕であるが、8は胴部長の発達の兆の見られる胴長タイプの甕である。

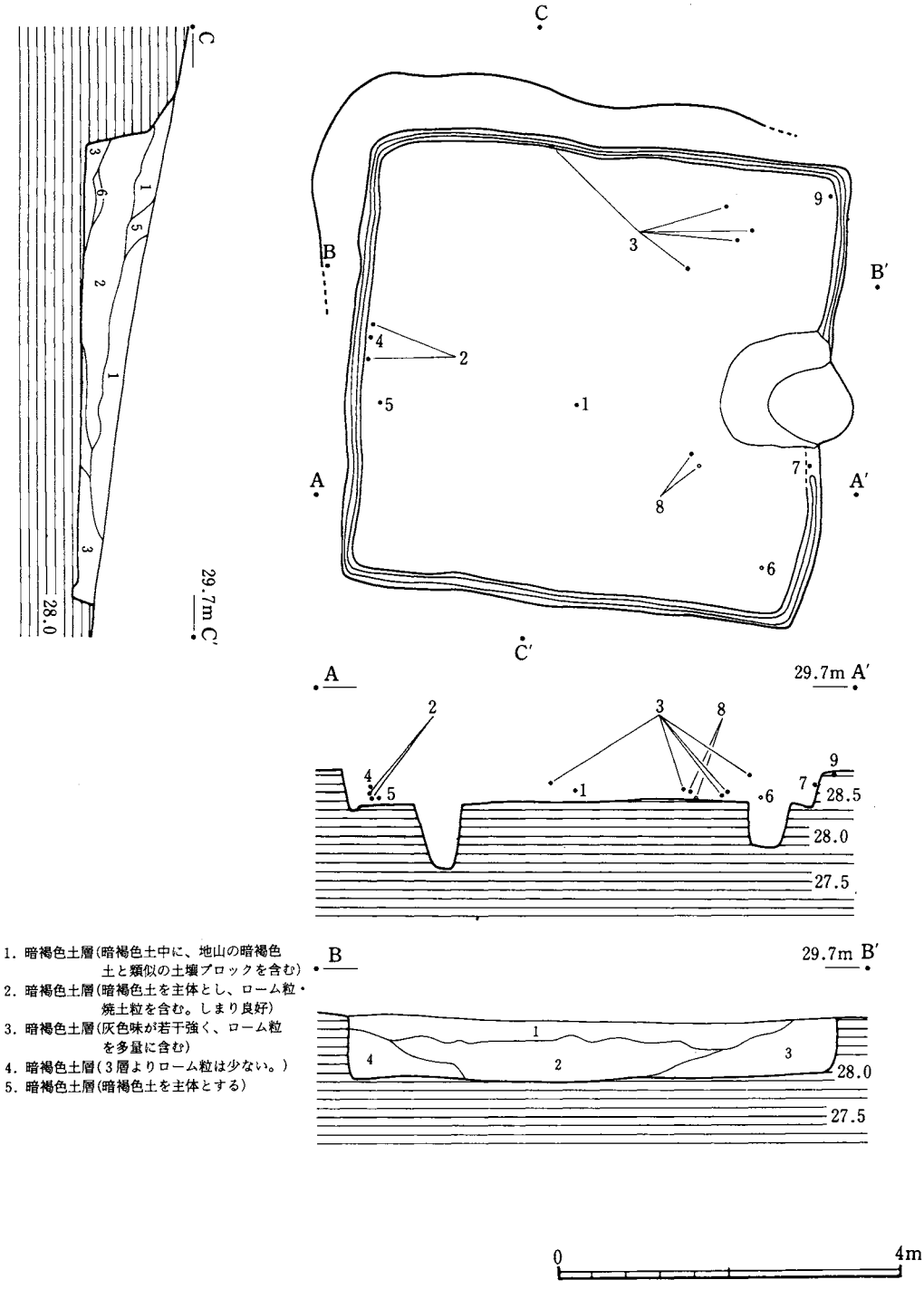
6・7はカマド内の、8は床面直上の出土である。

9は土製の紡錘車である。

焼成　○良好、△普通、×劣　**第23表－1**

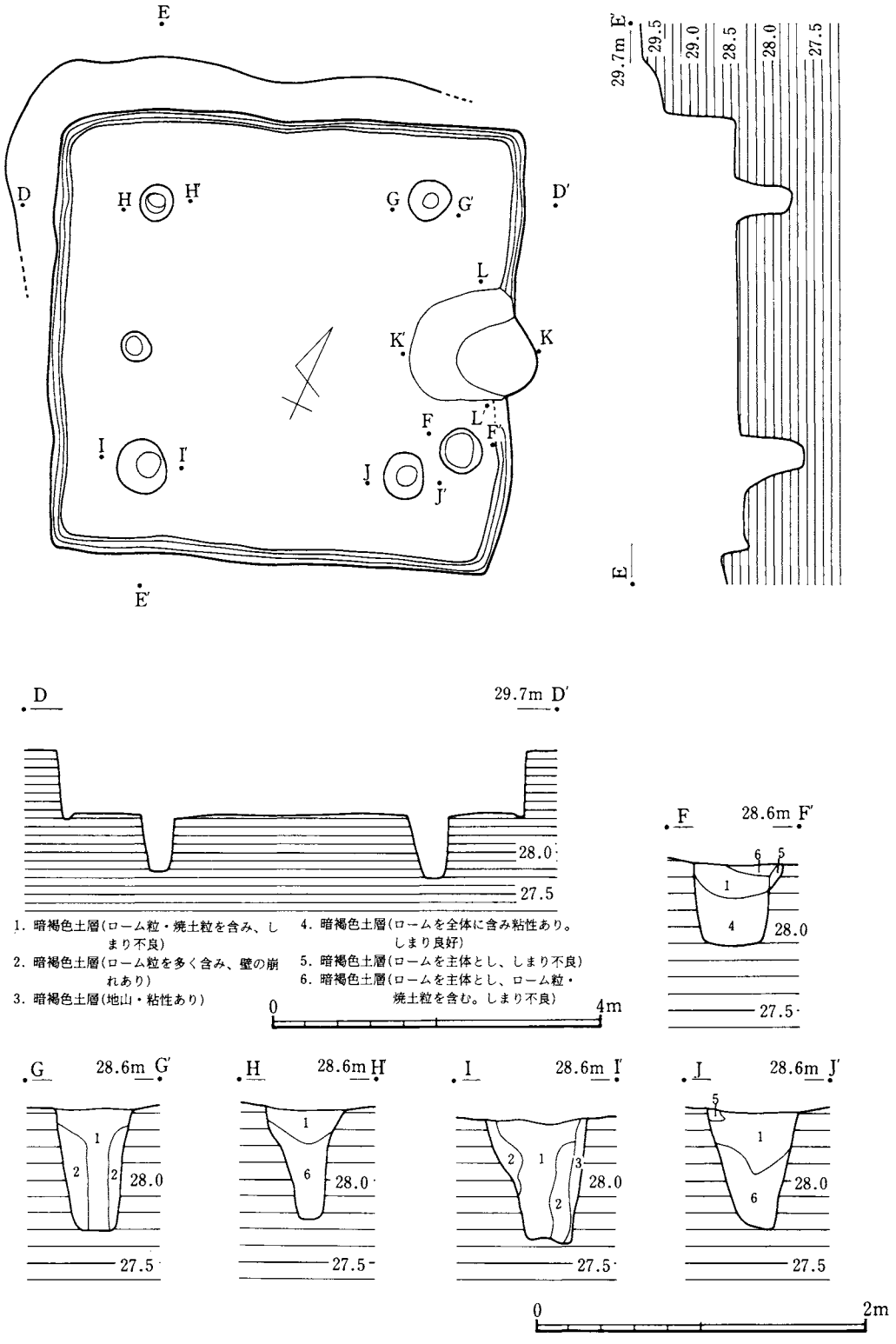
No.	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴(成形・調整)
1	須恵器蓋	40	(106)	(54)	(104)	1/3	○	灰白色	緻密	口縁部と胴部の境に1条の沈線がはしる 口縁部外面回転ナデ　胴部外面回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
2	坏	(43)	(118)	—	(114)	3/8	○	褐色	砂粒及び岩石細粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面丁寧なナデ　一部指によるオサエの跡
3	椀	53	(138)	80	130	1/2	○	暗褐色	砂粒を含む	口唇部から内面ミガキ　胴部外面横位のヘラケズリ後のナデ 口縁部外面ヨコナデ
4	椀	84	127	67	127	3/4	○	暗褐色	砂粒を含む	口縁部内外面ヨヨナデ 胴部外面ヘラケズリ後のナデ　内面荒いケズリ(?)
5	椀	66	148	87	140	完形	△	内面　明褐色 外面　褐色	砂粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　胴部外面横位のヘラケズリ 内面ナデ、一部にヘラ状工具のアタリ痕

(178頁につづく)

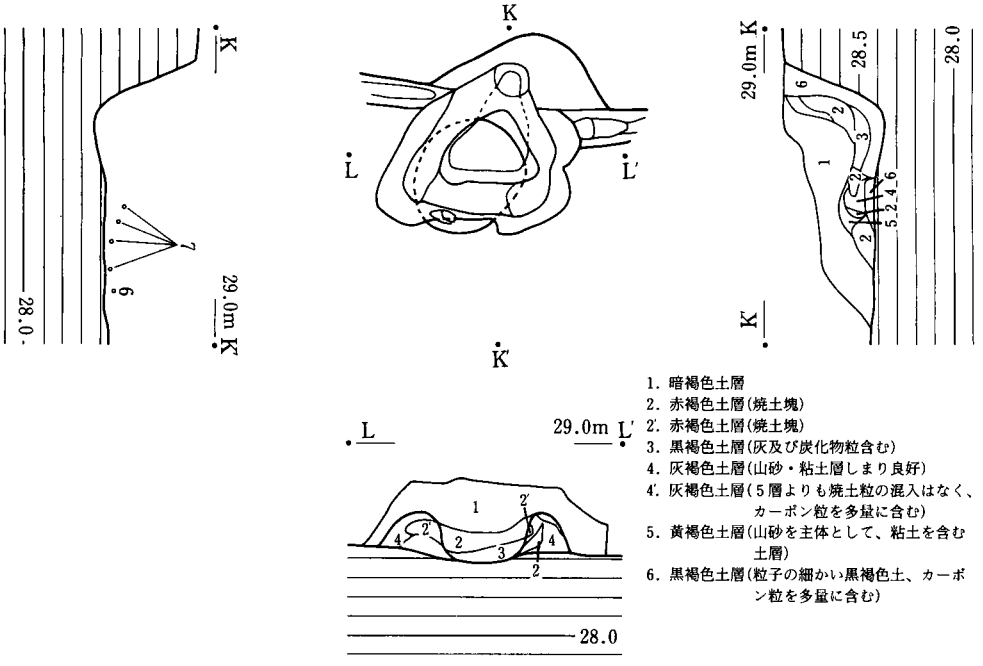


1. 暗褐色土層(暗褐色土中に、地山の暗褐色土と類似の土壌ブロックを含む)
2. 暗褐色土層(暗褐色土を主体とし、ローム粒・焼土粒を含む。しまり良好)
3. 暗褐色土層(灰色味が若干強く、ローム粒を多量に含む)
4. 暗褐色土層(3層よりローム粒は少ない。)
5. 暗褐色土層(暗褐色土を主体とする)

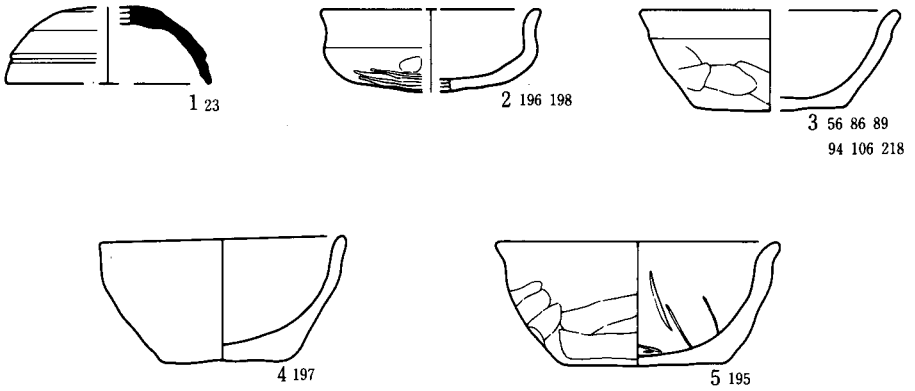
第102図　10号住居跡遺物出土状況図



第103図　10号住居跡遺構図

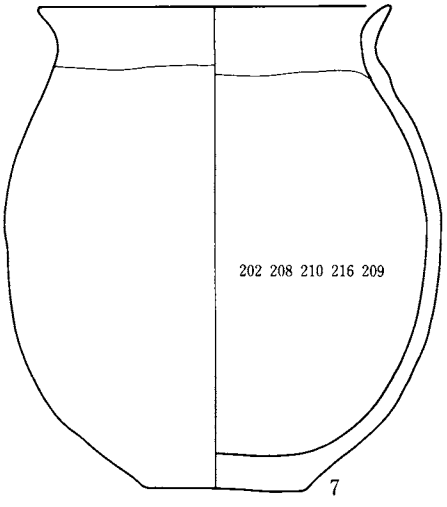


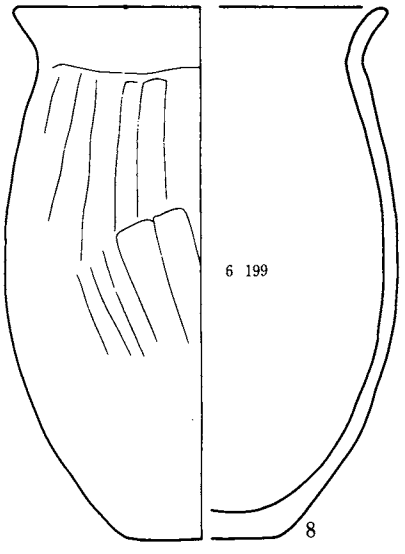
10号住居跡カマド実測図

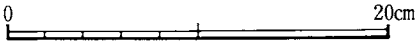


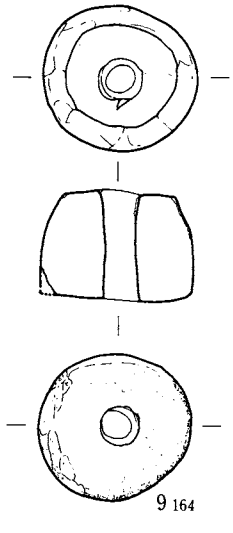
10号住居跡遺物実測図(1)

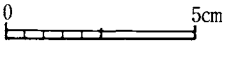
第104図　10号住居跡カマド、遺物実測図(1)



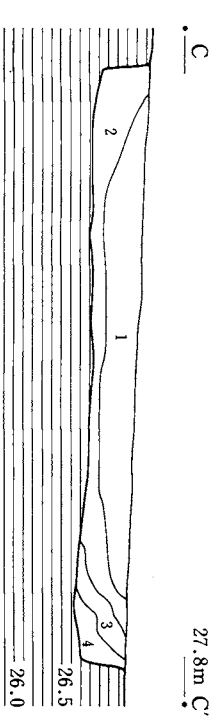


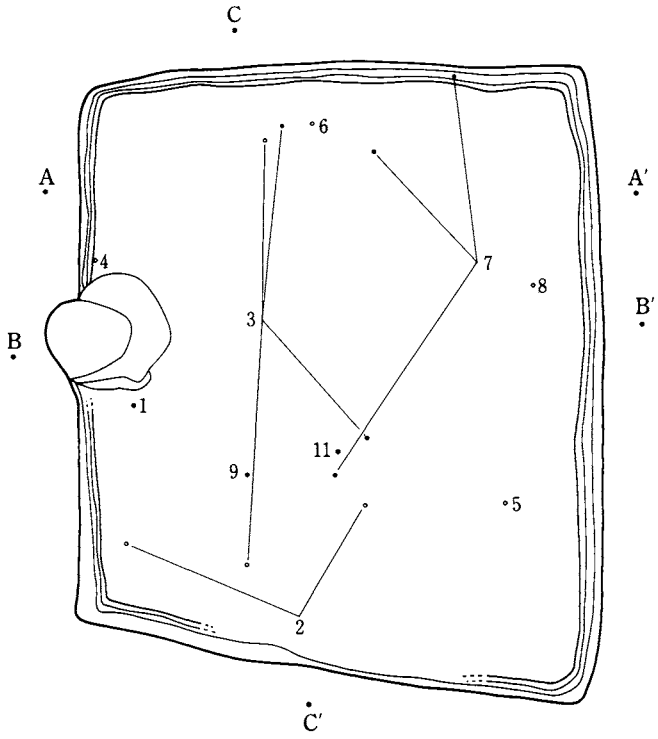


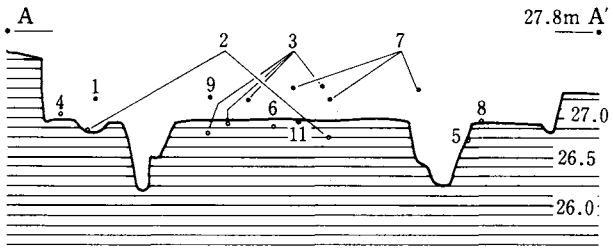


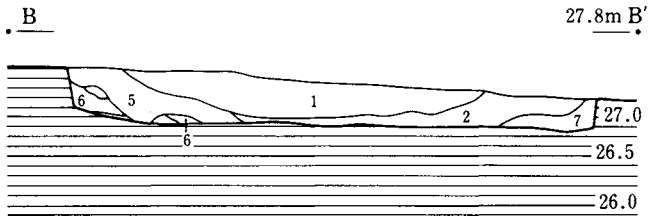


第105図　10号住居跡遺物実測図(2)

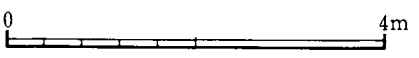




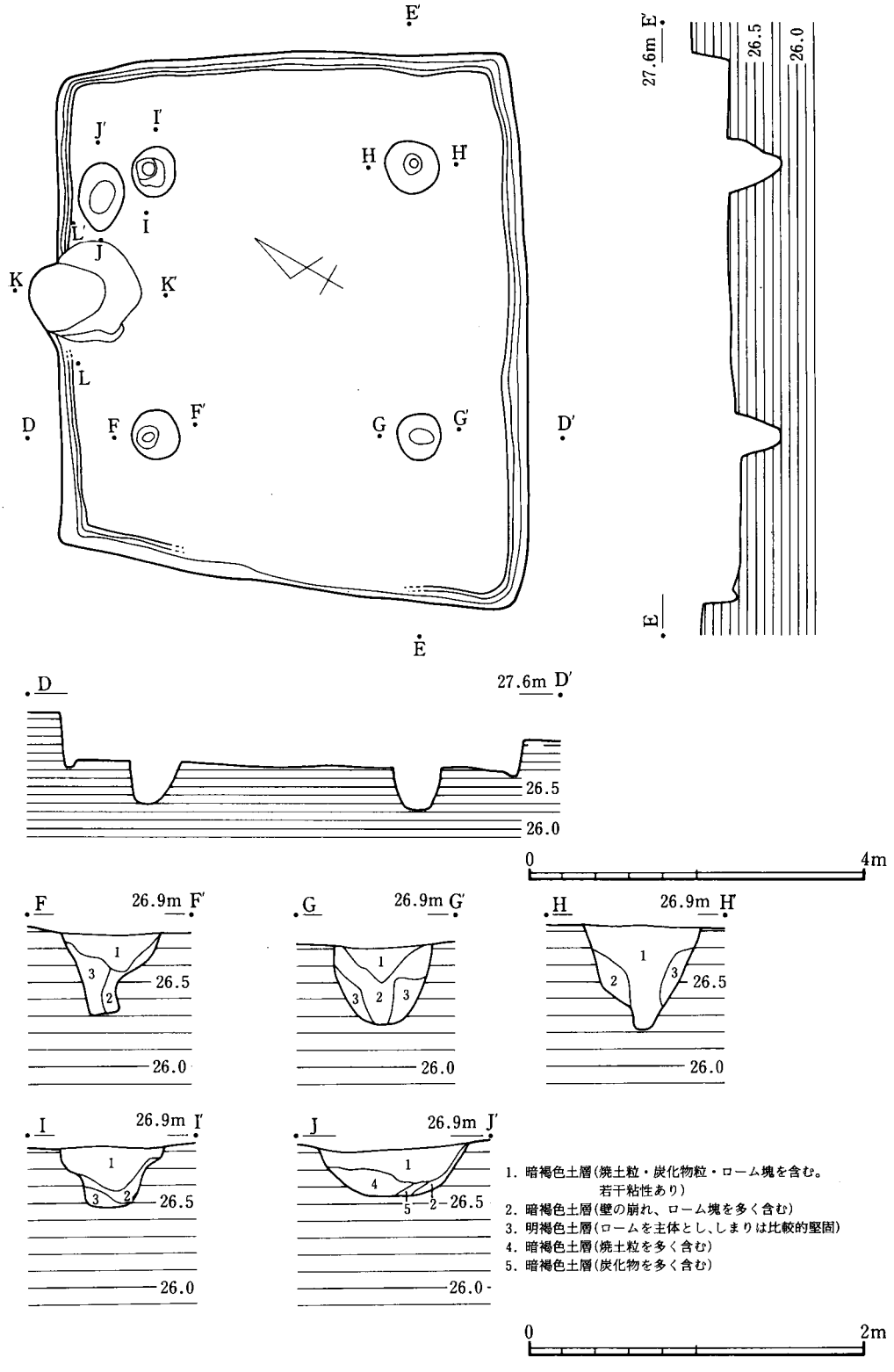




1. 暗褐色土層(ローム粒を若干含む。焼土粒を含む)
2. 暗褐色土層(1層より明色、焼土粒を含む)
3. 黒褐色土層(焼土粒・ローム粒を若干含む。しまりは1・2層より不良)
4. 茶褐色土層(軟弱なローム、壁ぎわの崩れか。暗褐色土・ロームの比率は1:2程度)
5. 暗褐色土層(山砂を全体に含み、焼土も若干混入)
6. 暗褐色土層(ブロック状の山砂・粘土を含み、焼土も若干混入)
7. 暗褐色土層(5・6層より若干暗色。ロームは少なく若干焼土を含む)



第106図　11号住居跡遺物出土状況図



第107図　11号住居跡遺構図

6	椀	90	212	83	218	完　形	△	内面　褐　色 外面　暗褐色	大粒の砂粒を含む	口唇部内外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面横位のヘラケズリ後のナデ　甕の底部付近を再利用したもの
7	甕	252	186	84	231	ほぼ完形	○	内面　暗褐色 外面　褐　色		口縁部内外面ヨコナデ　内面丁寧なナデ 胴部外面ヘラケズリ後のナデ
8	甕	277	194	79	208	ほぼ完形	△	内面　褐色 外面　淡褐色		口唇部磨滅　胴部外面ヘラケズリ後のナデ 口縁部内外面ヨコナデ　内面ナデ

第23表－2

住居跡	名　称	径（cm）	孔径（cm）		高さ（cm）	胎土	焼成	色　調		成　形	調　整
			上　端	下　端				外面	内面		
10号住居跡											
9	土製紡錘車状製品	4.0×3.75	2.9 ×2.65	大(1.0) 小(0.72)	2.9	△	○	明褐色			ヘラナデは全体に光沢をもつ。

11号住居跡　(134)　(第106・107・108図、図版47・66)

検出状況　調査区の南東にあたる二つめの大きな谷津の谷底部分にあたり、標高27.5mの低地に位置する。

本住居跡も掘込み面は黒色の腐植土層であり、検出には細心の注意を要した。

形状・規模　主軸の方位はN－27.5°－W、6.4m×5.9mの東壁側がやや長めの台形を呈している。

覆土　覆土全体に焼土粒を含み、竪穴の範囲はこの焼土粒が目安となった。

壁面は乾燥した時点において自然剝離的に亀裂が走ることで確認された。

床面　黒色腐植土の上をロームによる丁寧な貼床となっており、よくつき固められている。

床面は東西及び南北の両方向ともに緩やかに傾斜する。

カマド　西壁のほぼ中央部分に位置し、遺存状態も良好である。

柱穴　4本タイプで、柱穴の掘込みの断面は明瞭ではなく、きわめて不安定な掘方である。

遺物出土状況　遺物は、住居跡覆土の全層位中より検出されたが、2層以下に復元可能なものが集まっている。

遺物　1・2・4は、土師器の坏形土器。

1は底部に突出部ともみられる出張り部分が見られ、あるいは高坏の坏部の可能性もある。

4の坏は、口唇部が波打っており、調整も手抜きの様相が著しい。

2・4が床面直上の出土である。

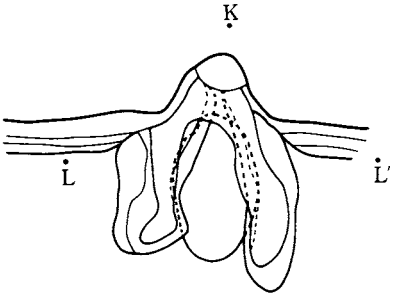
3は高坏の坏部、5・6は高坏の脚部であるが、3・6は色調及び胎土の観察から別個体のものである。

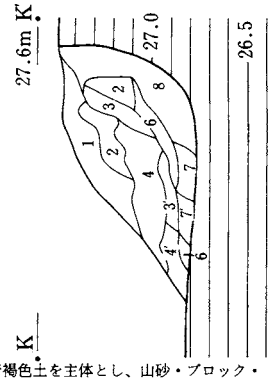
7・8は小型甕で、口縁部のつくりが簡略化されている。

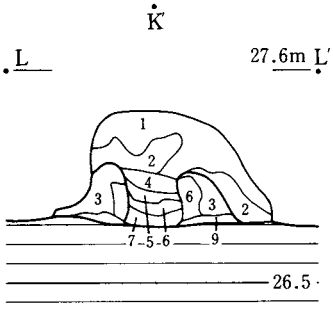
このうち、8は床面直上の出土である。

9は土製棗玉、10は土製丸玉、11は滑石製の勾玉の欠損品である。

このうち、9は床面直上より検出されている。



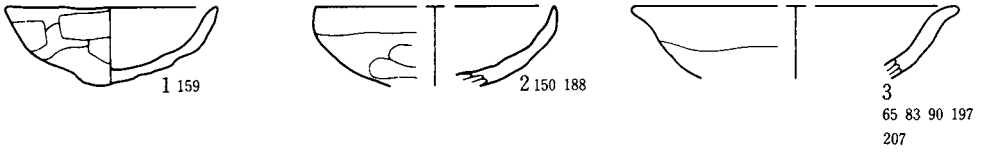


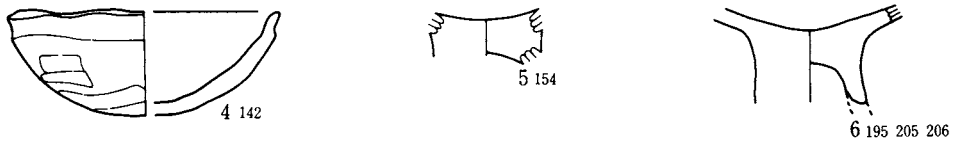


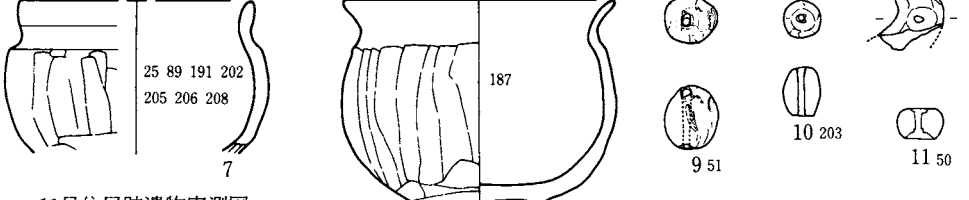
11号住居跡カマド実測図

1. 暗褐色土層(暗褐色土を主体とし、山砂・ブロック・焼土粒を含む)
2. 暗褐色土層(山砂を3層の次に含む)
3. 茶褐色土層(カマド残存部、粘土は割合少なく山砂多い)
3'. 明褐色土層(カマドの崩れ部分)
4. 暗褐色土層(暗褐色土を主体とし、若干の山砂と微量の焼土を含む)
4'. 暗褐色土層(4層より山砂を多く含む)
5. 暗褐色土層(2層と似るが2層より暗褐色土多く、焼土を若干含む)
6. 暗褐色土層(焼土ブロック・山砂を多量に含む)
7. 暗褐色土層(焼土ブロックを多量に含み、6層よりやや暗色。若干粘性あり)
7'. 暗褐色土層(7層より山砂を多く含む)
8. 暗褐色土層(焼土粒・岩化物粒を含む煙道部)
9. 灰褐色土層(粘土を多く含み、粘性あり)

0 1m





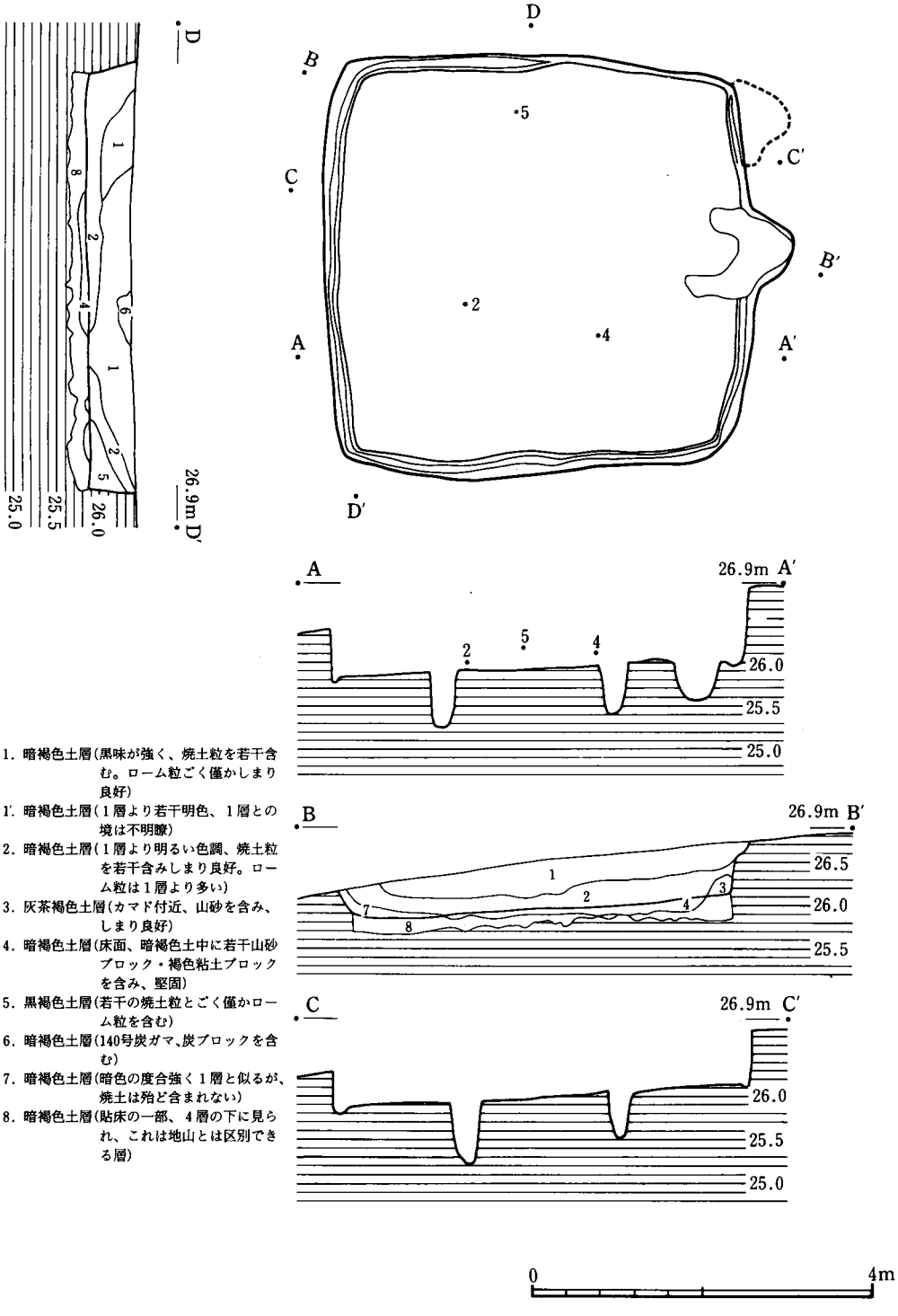


11号住居跡遺物実測図

0 20cm

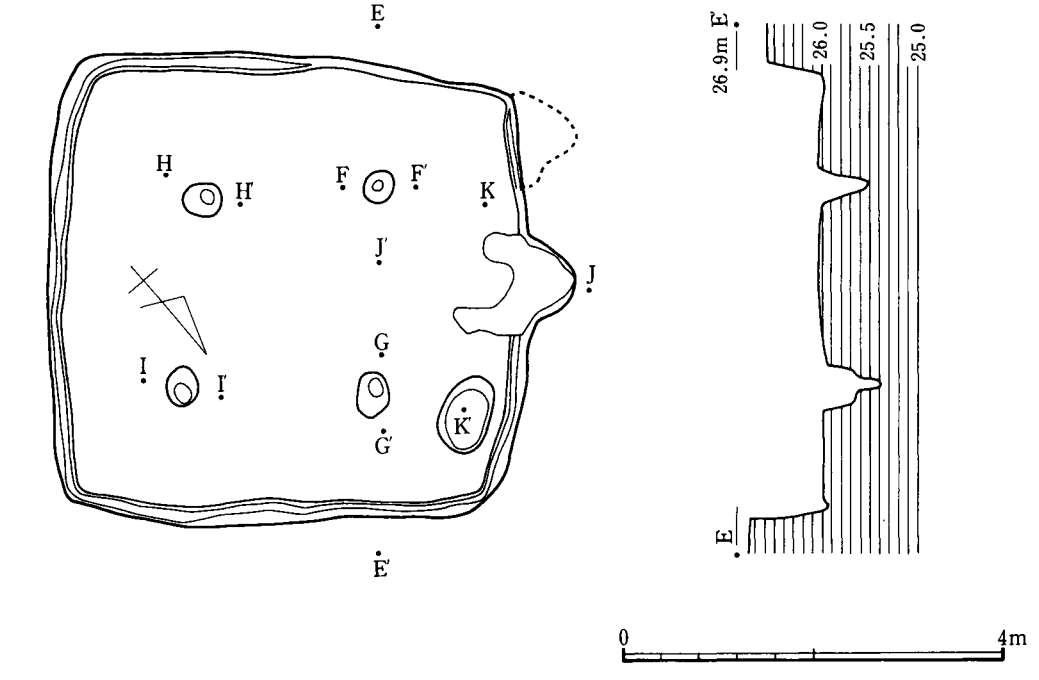
0 5cm

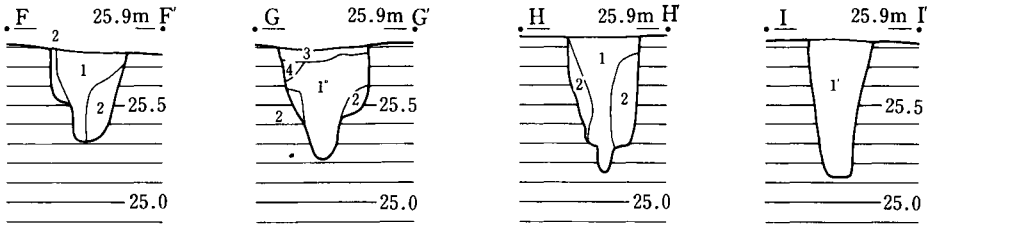
第108図　11号住居跡カマド、遺物実測図



1. 暗褐色土層(黒味が強く、焼土粒を若干含む。ローム粒ごく僅かしまり良好)
1'. 暗褐色土層(1層より若干明色、1層との境は不明瞭)
2. 暗褐色土層(1層より明るい色調、焼土粒を若干含みしまり良好。ローム粒は1層より多い)
3. 灰茶褐色土層(カマド付近、山砂を含み、しまり良好)
4. 暗褐色土層(床面、暗褐色土中に若干山砂ブロック・褐色粘土ブロックを含み、堅固)
5. 黒褐色土層(若干の焼土粒とごく僅かローム粒を含む)
6. 暗褐色土層(140号炭ガマ、炭ブロックを含む)
7. 暗褐色土層(暗色の度合強く1層と似るが、焼土は殆ど含まれない)
8. 暗褐色土層(貼床の一部、4層の下に見られ、これは地山とは区別できる層)

第109図　12号住居跡遺物出土状況図





1. 暗褐色土層(山砂ブロックを含み、しまり不良)
1'. 暗褐色土層(茶褐色土ブロックを含み、しまりは不良。ピット壁は固い)
1''. 暗褐色土層(炭化物粒を多く含み、炭化物は木柱痕。しまりは不良)
2. 暗褐色土層(暗褐色土を主体とし、茶褐色ブロックを含む。柱の固りのつき固めた部分、しまり良好)
3. 暗褐色土層(住居跡覆土とあまり区別はできない、しまり良好)
4. 灰褐色土層(粘土・山砂を含む、カマド構築材の流入)

0 2m

第110図　12号住居跡遺構図

焼成　○良好、△普通、×劣　**第24表－1**

No.	器種	法量（mm）				遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴（成形・調整）
		器高	口縁径	底部径	胴部径					
1	高坏	—	115	—	—	坏部のみ	△	内面　暗褐色 外面　褐色		口縁部内外面ヨコナデ 坏部外面横位のヘラケズリ後のナデ内面丁寧なナデ
2	坏	—	(130)	—	(128)	½	△	褐色	砂粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面に剝離痕あり
3	高坏	—	(174)	—	—	坏部のみ	○	内面　褐色 外面　赤褐色		口縁部外面ヨコナデ 坏部内面ミガキ
4	坏	54	(144)		(138)	¾	○	内面　褐色 外面　淡褐色		口唇部内面から口縁部外面ヨコナデ 胴部外面横位のヘラケズリ後のナデ
5	高坏	—	—	—	—	脚部の一部	○			
6	高坏	—	—	—	—	脚部の一部	○			
7	小型甕	—	(124)	—	(140)	⅗	△	褐色	緻密	口唇部磨滅　口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面縦位のヘラケズリ後のナデ　内面丁寧なナデ
8	小型甕	101	143	51	140	ほぼ完形	○	内面　黒褐色 外面　褐色	岩石細粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ、底部ヘラケズリ　底部に木葉痕あり 胴部外面縦位のヘラケズリ　内面丁寧なナデ

第24表－2

住居跡	名称	径（cm）	孔径（cm）		高さ（cm）	胎土	焼成	色調		成形	調整
			上端	下端				外面	内面		
11号住居跡											
9	土製東玉	1.36×1.20	0.34×0.18	0.18×0.15	1.63	砂質	×	黒褐色	褐色	粘土を丸めて作る。	ナデだが、全体に表面が荒れており若干ザラつく。
10	土製丸玉	0.98×1.00	0.21×0.18	0.18×0.12	1.33	砂質	×	赤味褐色		粘土を丸めて作る。	ナデ、全体に表面の荒れが著しくザラつく。
11	石製勾玉										欠損点

12号住居跡　(135)　(第109・110・111図、図版48・66)

検出状況　調査区の南東にあたる二つめの谷津の谷底部分で、11号住居跡よりもさらに低地の標高26.9m付近に位置する。

形状・規模　主軸の方位はW－39°－N、5.5m×4.8mの東西に長い長方形を呈している。

覆土　9号住居跡・11号住居跡と同様に、本住居跡の竪穴の覆土1・2層に焼土粒を含み、掘込み面の範囲確定の目安となった。

また、壁も同様に竪穴内の覆土の乾燥による自然剝離による亀裂が目安となった。

床面　黒色腐植土の上にロームによる貼床で、丁寧につき固められている。

床面は南北方向には水平を維持しているが、東西方向では緩やかに傾斜し、壁溝は全周する。

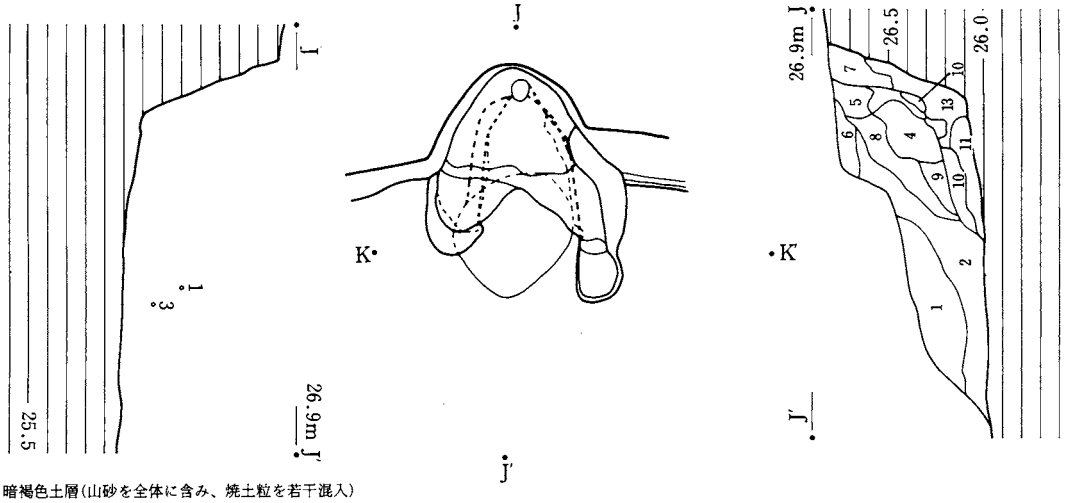
カマド　西壁のほぼ中央部分に位置し、遺存状態も比較的良い。

また、住居跡南西端コーナー付近に山砂を構築材とするカマドの残欠が見られ、新たにカマドを構築し直したものと考えられる。

柱穴　4本タイプで、柱穴の掘込み断面も安定しており、しっかりしたつくりとなっている。

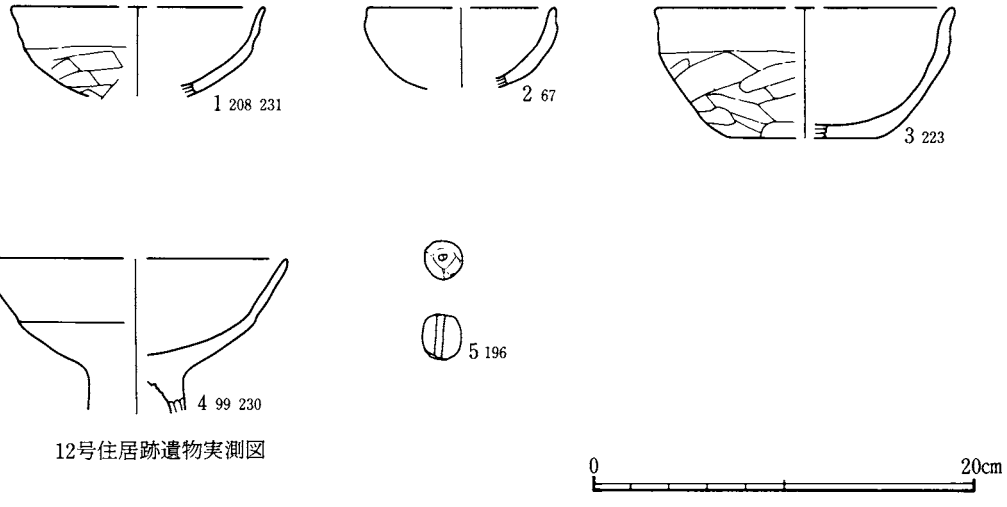
貯蔵穴　西壁寄りの、カマドの北脇に位置し、楕円形の平面形態を呈している。

遺物出土状況　遺物は竪穴内の全層位中より検出されたが、復元可能なものは2層以下の出土であり、いづれも磨滅が著しい。



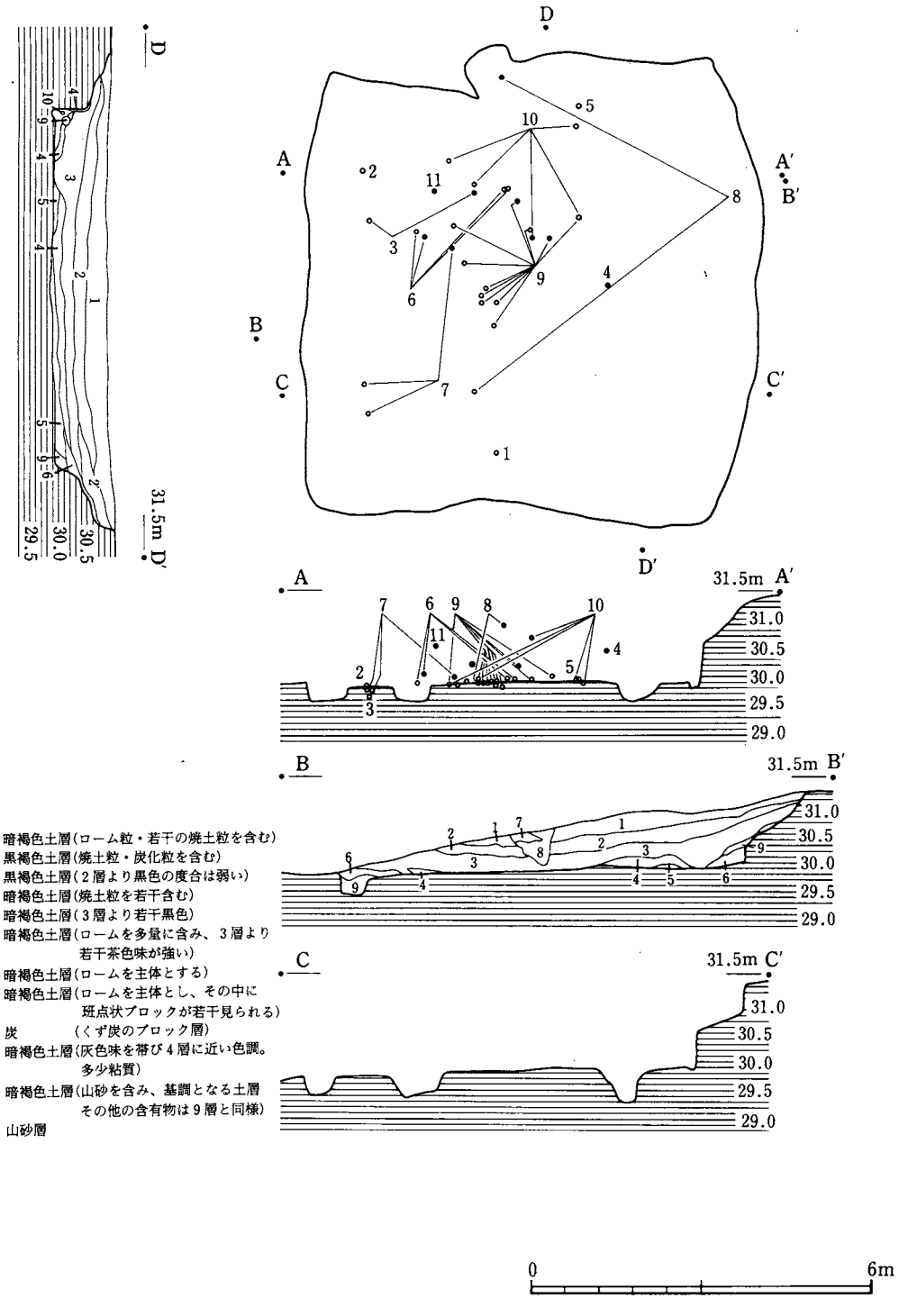
1. 暗褐色土層(山砂を全体に含み、焼土粒を若干混入)
2. 暗褐色土層(山砂・焼土粒は1層より多く含む。粒子は大きい)
3. 暗褐色土層(山砂、焼土粒を多量に含み。灰も多少含む。下部は若干粘性を帯びる)
4. 灰褐色土層(カマド残存部分、山砂・粘土を含む。)
5. 暗褐色土層(山砂・焼土を僅か含む)
6. 暗褐色土層(地山が若干焼けている)
7. 暗褐色土層(煙道部、焼土塊・山砂を多く含む煙道壁の剝落)
8. 暗褐色土層(5層の次に山砂を多く含む)
9. 暗褐色土層(山砂ブロックを含み、暗褐色土を主体とする。焼土も若干含む)
10. 赤褐色土層(焼土塊の単一層、山砂を若干含む)
11. 暗褐色土層(焼土塊・灰を含む暗褐色土、若干粘性を帯びる)
12. 暗褐色土層(若干焼土粒を含む)
13. 暗褐色土層(焼土塊を多く含む。炭化物・暗褐色の灰を含む煙道部)
14. 暗褐色土層(12層と似る、若干焼土を含むカマドの基部。全体にしまり良好で堅め)
15. 支　　脚

12号住居跡カマド実測図



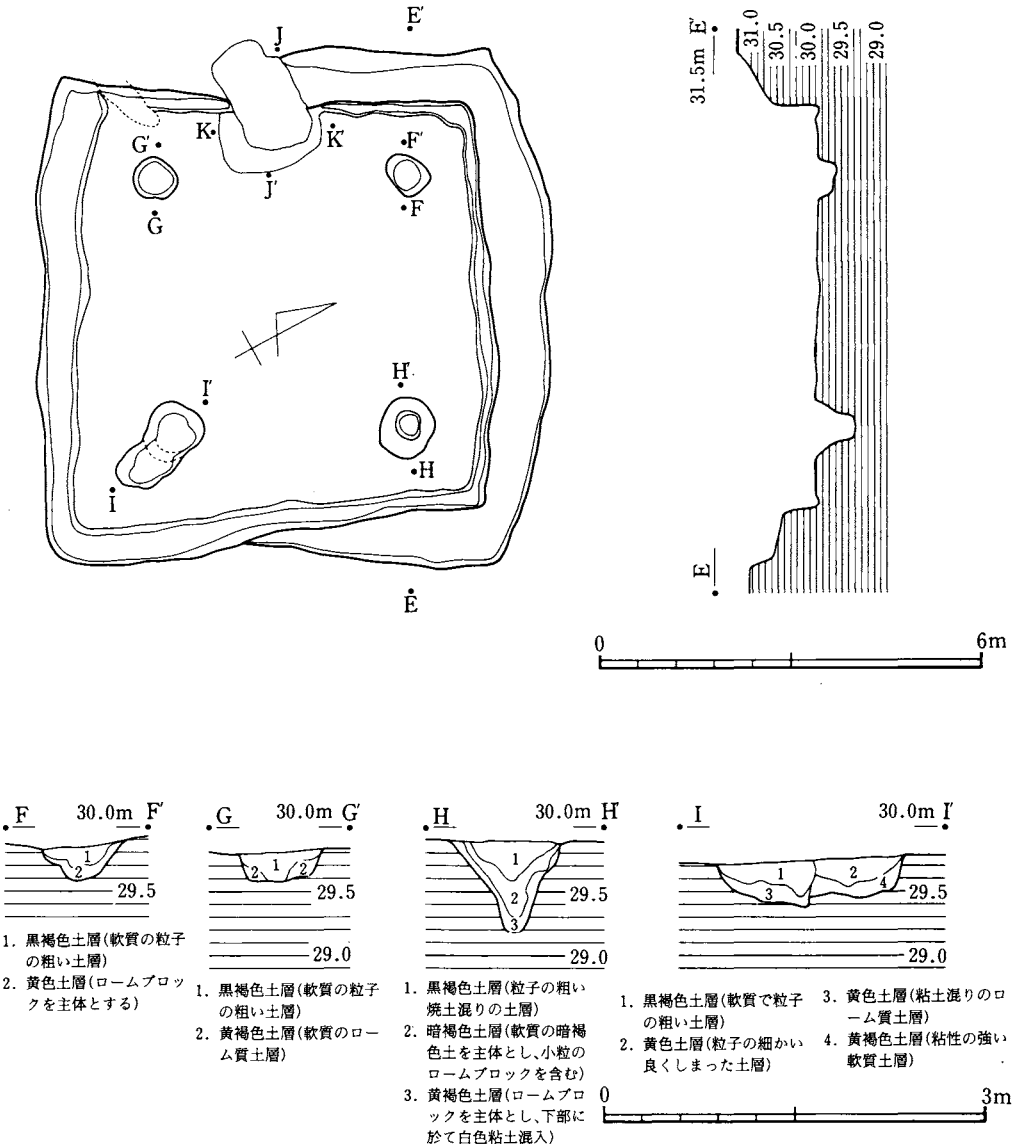
12号住居跡遺物実測図

第111図　12号住居跡カマド、遺物実測図



1. 暗褐色土層(ローム粒・若干の焼土粒を含む)
2. 黒褐色土層(焼土粒・炭化粒を含む)
2'. 黒褐色土層(2層より黒色の度合は弱い)
3. 暗褐色土層(焼土粒を若干含む)
4. 暗褐色土層(3層より若干黒色)
5. 暗褐色土層(ロームを多量に含み、3層より若干茶色味が強い)
6. 暗褐色土層(ロームを主体とする)
7. 暗褐色土層(ロームを主体とし、その中に斑点状ブロックが若干見られる)
8. 炭　(くず炭のブロック層)
9. 暗褐色土層(灰色味を帯び4層に近い色調。多少粘質)
9'. 暗褐色土層(山砂を含み、基調となる土層その他の含有物は9層と同様)
10. 山砂層

第112図　13号住居跡遺物出土状況図



第113図　13号住居跡遺構図

遺物　1・2は土師器の坏、1はカマド内の出土である。

3は底部平底の椀形土器、口縁部と体部の境に弱い稜を有し、以下には横位のヘラケズリ痕を残しており、床面直上の出土である。

4は、坏部の中央に弱い稜を有する高坏。

5は土製丸玉で床面直上より検出されている。

焼成　○良好、△普通、×劣　**第25表－1**

No.	器種	法量（mm）				遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴（成形・調整）
		器高	口縁径	底部径	胴部径					
1	坏	—	(144)	—	(120)	1/6	△	内面　赤褐色 外面　褐　色		口縁部内外面ヨコナデ　口唇部は磨滅 胴部外面横位のヘラケズリ　内面ミガキ　内面赤彩
2	坏	—	(98)	—	(101)					口縁部外面ヨコナデ　内面丁寧なミガキ 坏部外面　ヘラケズリ
3	椀	68	(158)	(80)	(154)	1/4	○	褐色	精練されたキメのこまかい素地使用	口唇部内面～口縁部外面ヨコナデ 胴部外面　横位のヘラケズリ後のナデ　内面丁寧なナデ
4	高　坏	—	(150)	(53)	(123)	1/6	○	内面　茶褐色 外面　暗褐色	精練されたキメのこまかい素地使用	口縁部外面～内面丁寧なミガキ　坏部外面～脚部外面 ヘラケズリ後の丁寧なミガキ　脚部内面荒いナデ

第25表－2

住居跡	名称	径（cm）	孔径（cm）		高さ（cm）	胎土	焼成	色調		成形	調整
			上端	下端				外面	内面		
12号住居跡											
5	土製丸玉	0.99×1.03	0.26×0.20	0.23×0.22	1.17	○	○	明褐色		粘土を丸めて作る	ナデ。

13号住居跡　(071)　(第112・113・114・115図、図版48・67)

検出状況　調査区の北東端にあたる台地の、標高31.5mの南向き斜面に位置する。

この斜面は、谷津の谷底の9号住居跡を南東の眼下に見下ろす台地の縁辺にあたる。

形状・規模　主軸の方位はW－24.5°－N、7.9m×7.9mの方形を呈しており、腰巻遺跡の中では最大の規模の住居跡である。

また、竪穴の斜面上方には浅い掘込みの造成部分が認められる。

覆土　全体に緩やかな皿状の堆積を示しており、3層以下の土層が本住居跡廃絶に伴うものと考えられる。

床面　ハードロームを堅くつき固めており、東西方向では水平を保つが、南北方向では若干の傾斜を示している。

また、壁溝は全周するが、斜面下方側では極端に幅広なつくりとなっている。

カマド　西壁のほぼ中央部分に位置し、袖部の一部に流出が見られるが、遺存状態はほぼ良好である。

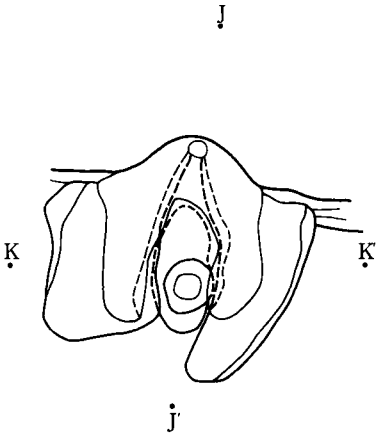
柱穴　4本タイプで、柱穴の掘込みは浅く不安定であり、南東コーナーに近い1本には掘込み位置の変更の痕跡も確認された。

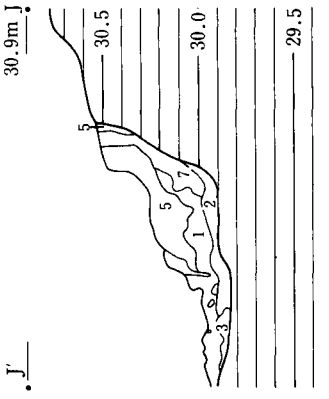
貯蔵穴　なし。

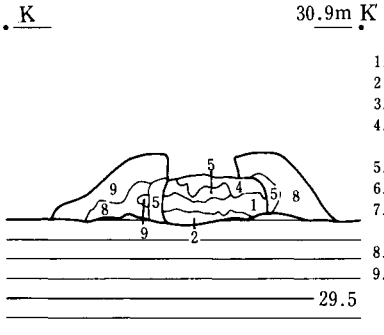
遺物出土状況　カマドの前面を中心に、南北方向に広く分布している。

層位的には、2層以上の浮き上がった小破片と、3層以下の復元可能なものに分かれる。

いづれの遺物も磨滅が著しく、内面の荒れが顕著である。



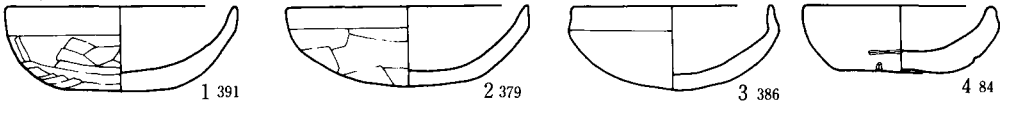


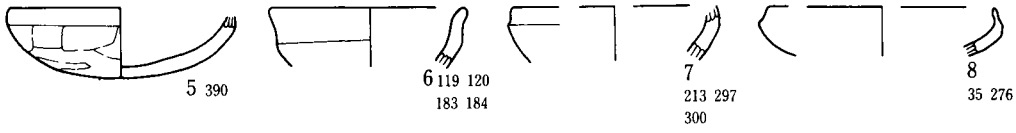


1. 暗褐色土層(山砂・焼土粒を多く含み、ところどころ焼土塊混入)
2. 暗褐色土層(若干ローム粒を含み、色調は全体に黄色味を帯びる)
3. 暗褐色土層(炭化物・炭化粒を多く含む)
4. 暗褐色土層(山砂の小ブロックをごく少量含む。焼土粒は若干、焼土塊は含まれない)
5. 暗褐色土層(1層に近く、1層より焼土塊少ない)
6. 暗褐色土層(黒色に近く、4層と似る)
7. 暗褐色土層(4層・6層と似るが、煙道部に相当する層である。焼土粒、炭化粒を僅かに含む)
8. 暗褐色土層(山砂を多量に含み、白色を帯びてしまり良好)
9. 暗褐色土層(山砂を暗褐色土中に含む)

13号住居跡カマド実測図

0 1m

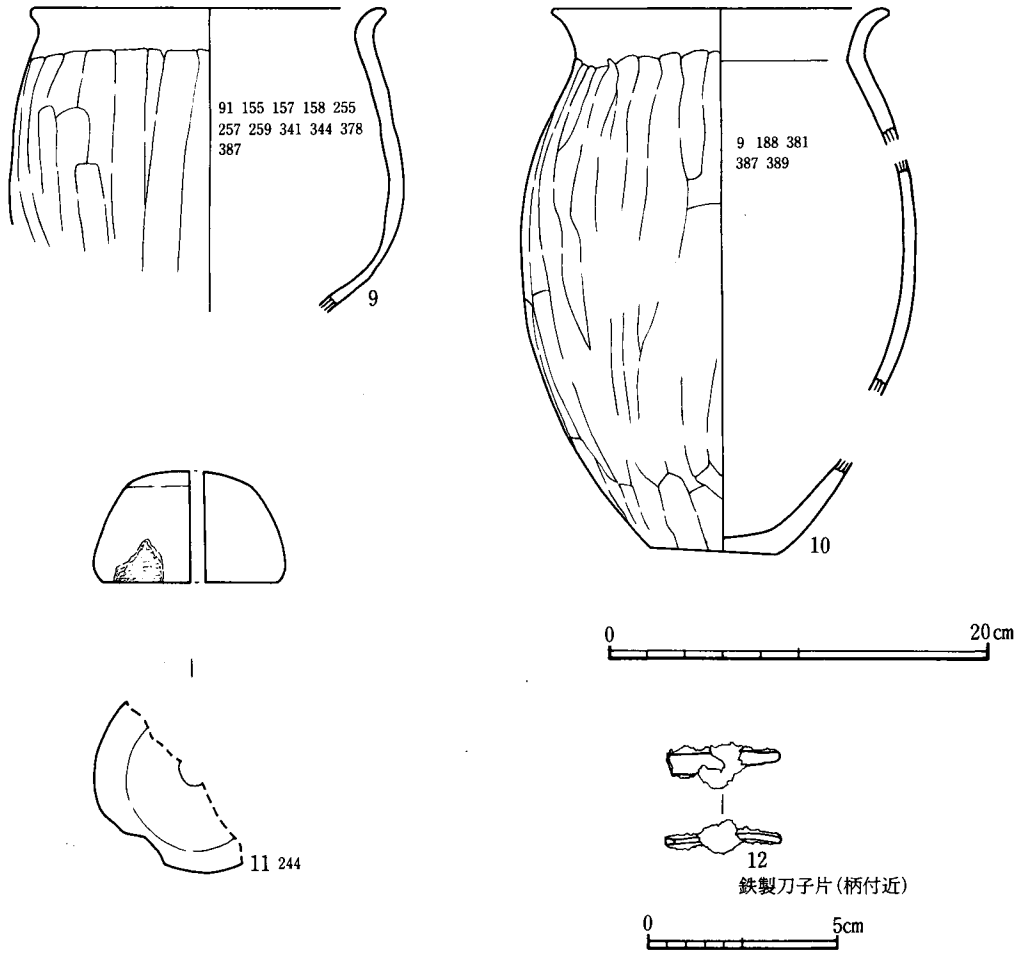




13号住居跡遺物実測図(1)

0 20cm

第114図　13号住居跡カマド、遺物実測図(1)



第115図　13号住居跡遺物実測図(2)

焼成　○良好、△普通、×劣　**第26表**

No.	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴(成形・調整)
1	坏	44	121	—	—	ほぼ完形	○	明褐色	砂粒及び粘土粒を含む、精	口縁部内外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面　横位のヘラケズリ
2	坏	41	128	—	—	完形	○	明褐色	大粒の粘土粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面　横位のヘラケズリ
3	坏	43	106		113	完形	○	暗褐色	多量の砂粒を含む精	口唇部はつまみ上げのため屈曲する　胴部外面はヘラケズリ 口縁部内外面ヨコナデ　内面荒いナデ　使用による磨滅が著しい
4	坏	34	99	60	—	完形	○	明褐色	粘土粒を含む	胴部外面ヘラケズリ　他の坏に比べて器厚が著しく厚く甕の底部を再利用したもの 内面は丁寧なミガキ　胴部には刃物の磨痕あり
5	坏	36	—	—	—	ほぼ完形	○	明褐色	砂粒及び粘土粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部外面　横位のヘラケズリ

6	坏	—	105	—	98	⅓	○	明褐色	大粒の粘土粒を含む、粗	口縁部外面ヨコナデ　内面はミガキ 口唇はかるい屈曲をもつ
7	坏	—	110	—	114	⅙	○	黒褐色	砂粒を含む 精	口縁部外面ヨコナデ　内面はミガキ 口縁部と胴部の境に稜をもつ
8	坏	—	120	—	130	⅙	○	褐色	砂粒を多量に含む 精	口縁部内外面ヨヨナデ、口唇部は細身で丸味をおびており須恵器杯のつくりに似ている、口縁部と胴部の境に稜をもつ。胴部内外面は丁寧なミカギ。
9	甕	—	188	—	210	½	○	内面　黄褐色 外面　褐　色	砂量を多量に含む	口縁部内外面ヨコナデ　内部ナデ 胴部外面　縦位のヘラケズリ
10	甕	286	178	66	208	ほぼ完形	○	褐色	密	口縁部内外面ヨコナデ　内部ナデ 胴部外面　縦位のヘラケズリ
11	土製、紡錘車	(高さ) 29	(上部半径) 17	(下部半径) 23	(最大径) 25	½	○	外表面　茶褐色 底　面　褐　色	密、堅緻で光沢あり	外部表面は光沢が出る程、丁寧なミガキを施されている。 底面はナデ調整
12	鉄製刀子(片)	(長さ) 29	(厚み) 3	(巾) 5		柄の部分				

遺物　1～8は土師器の坏、1・6～8は床面直上の出土である。

いづれも、口縁部と胴部の境目の稜線は形骸化している。

4の底部は平底となっている。

9・10は甕、床面直上の出土である。

このうち、10は口縁部は小さめで、胴部長の発達した長胴タイプの甕である。

11は土製の紡錘車、12は鉄製品おそらく刀子の柄の一部と考えられる。

14号住居跡　(072)　(第116・117・118・119図、図版49・68)

検出状況　調査区の北東端にあたる台地の、標高33.7mの南向き斜面に位置する。

13号住居跡と同じ縁辺にあたるが、本住居跡のほうが斜面上方に位置する。

形状・規模　主軸の方位はW－17.5－N、3.8m×3.5mの東西に長い長方形を呈し、掘込みの深い住居跡である。

覆土　竪穴は掘込面の面積では比較的小規模であるが、掘込みの深いつくりにより、覆土の堆積量は多く、2層以下が本住居跡廃絶に伴う堆積土層と考えられる。

床面　ハードロームをつき固めているが、後世の土坑状炭窯によりその一部を攪乱されている。

床面は東西、南北の両方向ともに水平を維持し、比較的幅広の壁溝が全周する。

カマド　西壁のほぼ中央部に位置し、袖部の一部は流出しているが、遺存状態は良い。

柱穴　竪穴内の南西コーナー付近と北東コーナー付近の2ケ所のみ検出された。

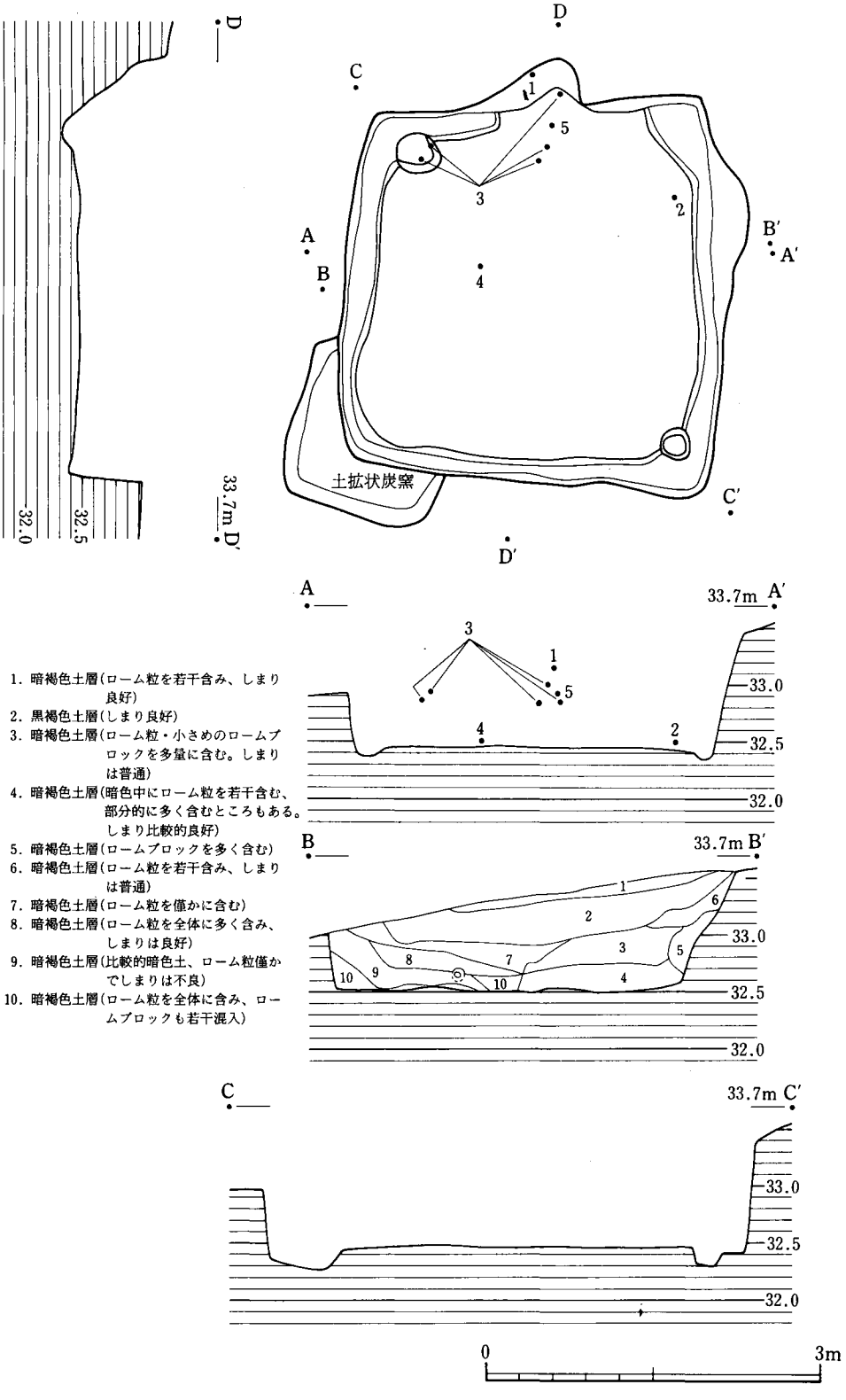
掘込みは浅く、掘方は安定さを欠いている。

貯蔵穴　なし。

遺物出土状況　遺物の出土数は少なく、カマド付近を中心に分布している。

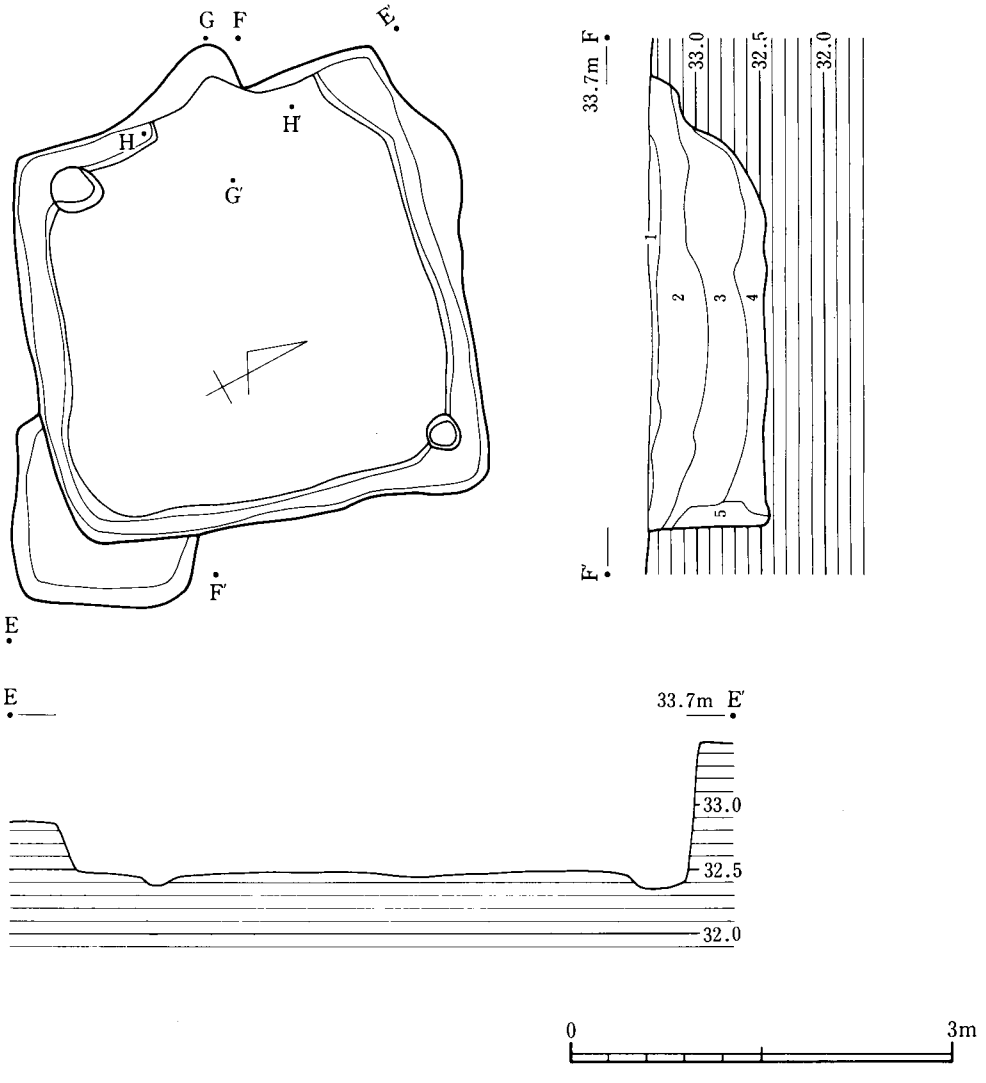
遺物　1は、口縁部のつくり及び全体の印象から須恵器の模倣品かと思われる土師器の甕。

2は、胎土に大粒の岩石粒を含む須恵器の長頸壺、3はカマド内出土の胴下半部のみの甕。



1. 暗褐色土層(ローム粒を若干含み、しまり良好)
2. 黒褐色土層(しまり良好)
3. 暗褐色土層(ローム粒・小さめのロームブロックを多量に含む。しまりは普通)
4. 暗褐色土層(暗色中にローム粒を若干含む、部分的に多く含むところもある。しまり比較的良好)
5. 暗褐色土層(ロームブロックを多く含む)
6. 暗褐色土層(ローム粒を若干含み、しまりは普通)
7. 暗褐色土層(ローム粒を僅かに含む)
8. 暗褐色土層(ローム粒を全体に多く含み、しまりは良好)
9. 暗褐色土層(比較的暗色土、ローム粒僅かでしまりは不良)
10. 暗褐色土層(ローム粒を全体に含み、ロームブロックも若干混入)

第116図　14号住居跡遺物出土状況図

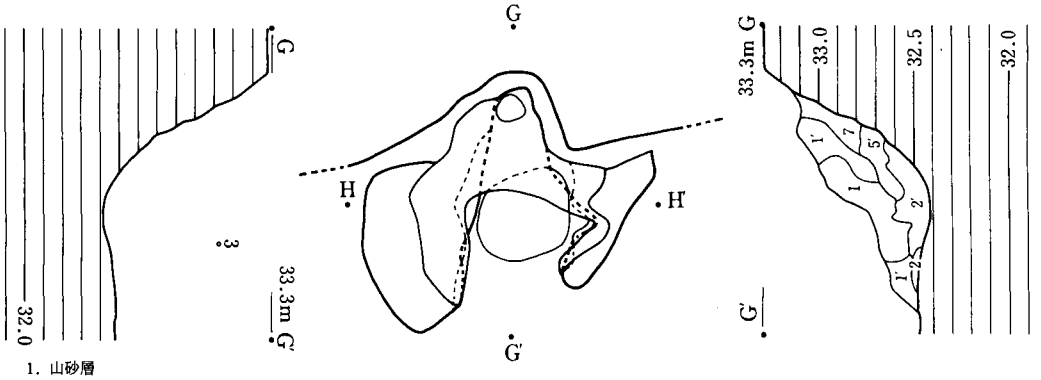


第117図　14号住居跡遺構図

4は小形の甕を再利用した、胴部に穿孔のある土師器の甑。

5は用途不明の石片。

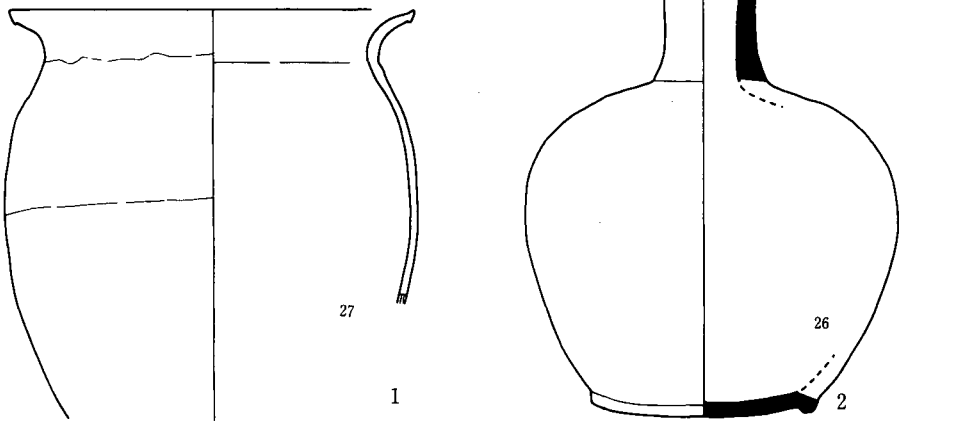
また、2の長頸壺の内部には灰白色の小箔片となった灰状の物質が充填されており、本住居跡埋没の直前まで、何らかの用途に使用されていたことが考えられる。



1. 山砂層
1'. 山砂層(山砂の量は少ない、焼土が含まれ若干暗色を呈する)
2. 暗褐色土層(ローム粒・ロームブロック若干山砂も含む。炭化物・焼土も若干混入)
2'. 暗褐色土層(炭化物・焼土ブロックを多く含む。全体的に暗赤色であり、山砂も含まれる。カマドの床に堆積した燃えかすの灰の類である)
3. 暗褐色土層(若干山砂を含む、暗褐色土が主体である)
3'. 暗褐色土層
4. 暗褐色土層(2層より焼土量は少なくロームブロック・ローム粒が含まれる。山砂を含む暗褐色土で、下部は特に粘性を持つ)
5. 赤褐色土層(山砂・焼土の内壁で、比較的大きな焼土ブロックの層である)
5'. 赤褐色土層(ブロック状の焼土・炭化物は5層より少ない)
6. 赤褐色土層(軟い焼土層)
7. 煙道部

0 1m

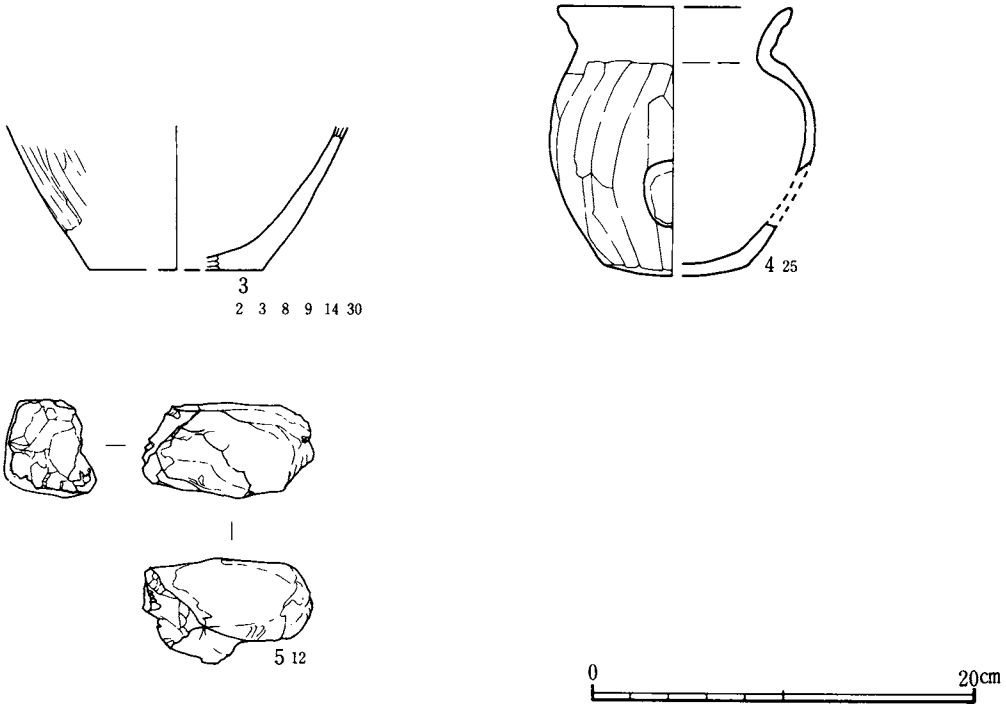
14号住居跡カマド実測図



14号住居跡遺物実測図(1)

0 20cm

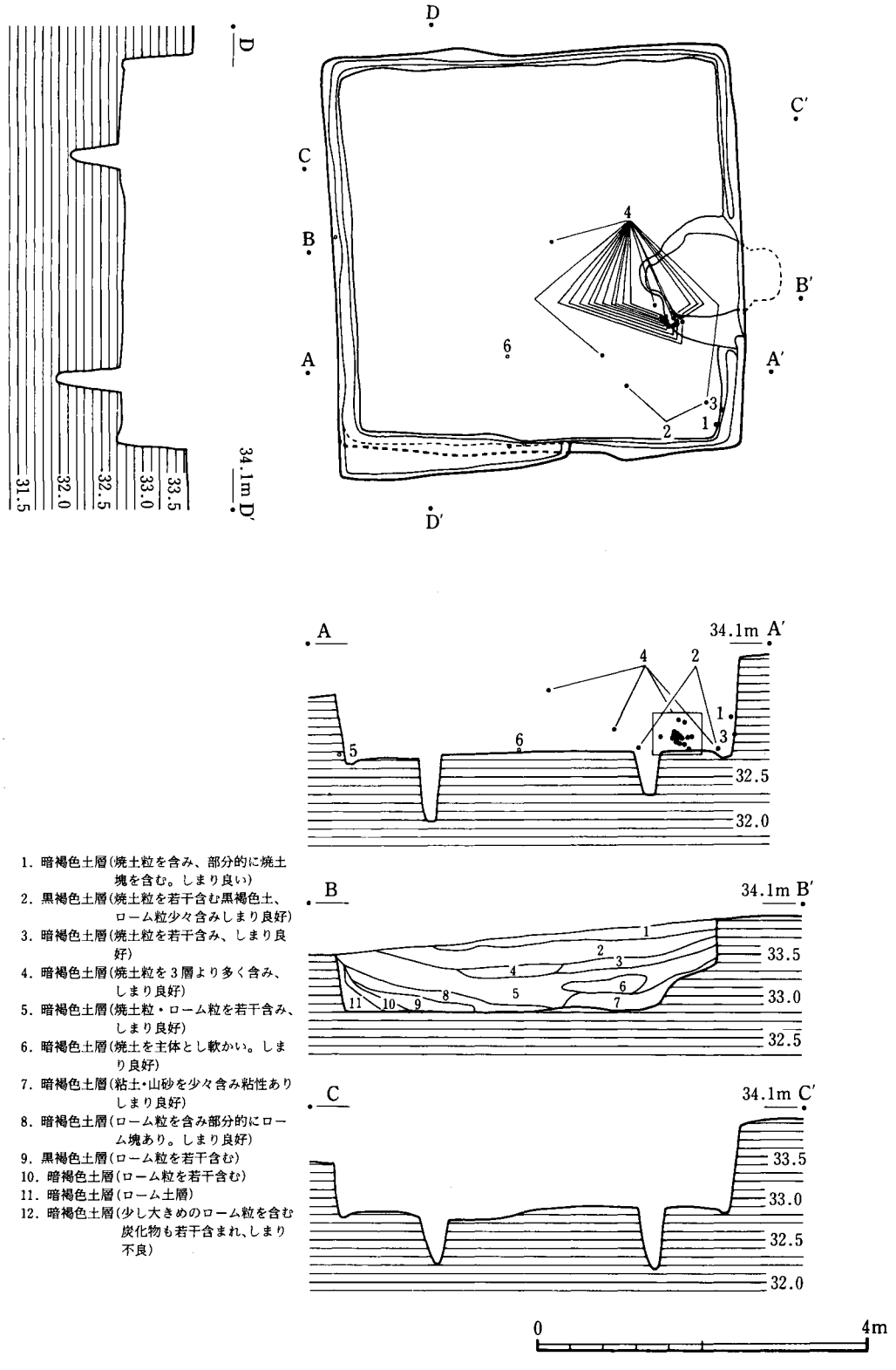
第118図　14号住居跡カマド、遺物実測図(1)



第119図　14号住居跡遺物実測図(2)

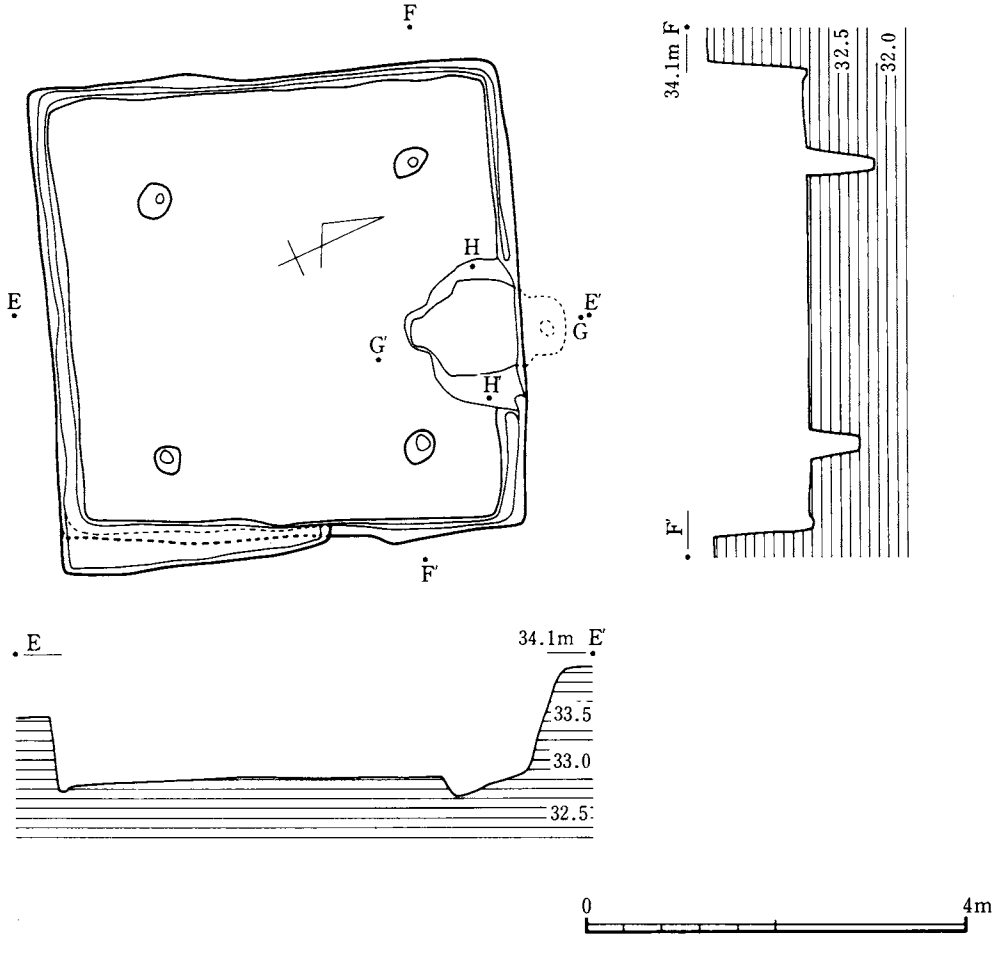
焼成　○良好、△普通、×劣　**第27表**

No.	器種	法量（㎜）				遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴（成形・調整）
		器高	口縁径	底部径	胴部径					
1	甕	—	216	—	221	⅓	○	褐色	石英、長石を含む 精	口唇部は折り返しとなり、口縁部内外面ヨコナデ 胴部上半縦位の丁寧なナデ下半横位の丁寧なナデ。内面は丁寧なナデ
2	須恵器 長経壺	262	—	123	199	ほぼ完形	○	灰白色	石英、長石粒を含む 粗	表面は剝離、磨滅が著しい。 内部には灰状の物質が充填されていた。
3	甕	—	—	91	—	底部のみ	○	明褐色	大粒の石英粒を含む。 粗	胴部底部付近、縦位のヘラケズリ 内面底部付近ヘラ状工具によるおさえ
4	甑	140	63	42	15	ほぼ完形	○	明褐色	きめのこまかい素地を使用。精	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦位のヘラケズリ。 小型甕を利用した土師器の甑。
5	石	—	—	—	—	欠損				全体としては長方体を成し、砥石というよりは何かをタタク用途の石と考えられる。



1. 暗褐色土層(焼土粒を含み、部分的に焼土塊を含む。しまり良い)
2. 黒褐色土層(焼土粒を若干含む黒褐色土、ローム粒少々含みしまり良好)
3. 暗褐色土層(焼土粒を若干含み、しまり良好)
4. 暗褐色土層(焼土粒を3層より多く含み、しまり良好)
5. 暗褐色土層(焼土粒・ローム粒を若干含み、しまり良好)
6. 暗褐色土層(焼土を主体とし軟かい。しまり良好)
7. 暗褐色土層(粘土・山砂を少々含み粘性ありしまり良好)
8. 暗褐色土層(ローム粒を含み部分的にローム塊あり。しまり良好)
9. 黒褐色土層(ローム粒を若干含む)
10. 暗褐色土層(ローム粒を若干含む)
11. 暗褐色土層(ローム土層)
12. 暗褐色土層(少し大きめのローム粒を含む炭化物も若干含まれ、しまり不良)

第120図　15号住居跡遺物出土状況図



第121図　15号住居跡遺構図

15号住居跡　(074)　(第120・121・122図、図版49・68・69)

検出状況　調査区の北東端にあたる台地の、標高34mの南向き斜面に位置する。

14号住居跡と同じ縁辺にあたり、本住居跡が西側に位置し、標高差はほとんどない。

形状・規模　主軸の方位はN－24°－E、5.0m×4.9mのほぼ方形を呈する。

覆土　竪穴の掘込みはそれほど深くなく、それぞれの土層は薄く、1層以下覆土のすべてに粒土が含まれており、本住居跡廃絶に関るものと考えられる。

床面　ハードロームを堅くつき固めており、東西方向はほぼ水平を維持しているが、主軸に沿う南北方向では若干傾斜する。

また、壁溝は全周するものと考えられるが、本住居跡構築時に、性格不明の遺構に重複して掘込まれたため、周溝内に段差が生じている。

カマド　北壁の中央部分に位置し、遺存の状態も良好である。

柱穴　4本タイプで、柱穴の掘込み断面も深く安定したつくりとなっている。

貯蔵穴　なし。

遺物出土状況　遺物はカマドの周辺を除くと、きわめて散発的な出土の状況を呈する。

遺物　1・2は胴部のやや深めの土師器坏。

3は底部が平底の小型甕で、口縁部のつくりは簡略化されている。

4は甕。

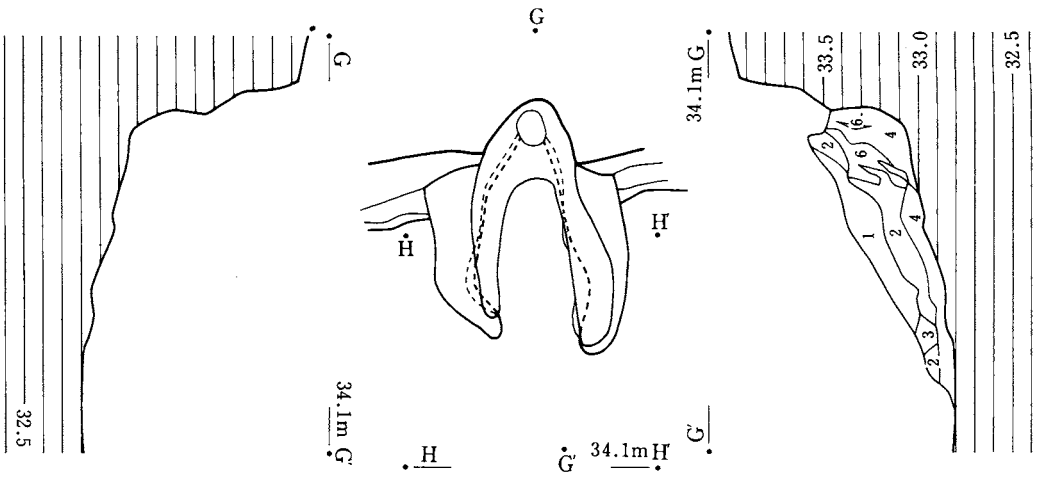
5・6は床面直上出土の土製丸玉である。

焼成　○良好、△普通、×劣　**第28表－1**

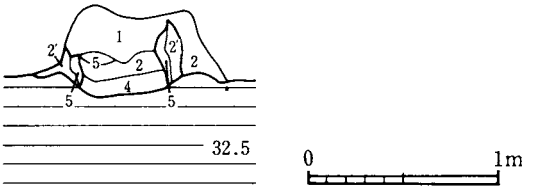
No.	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴(成形・調整)
1	坏	46	113	—	—	完形	○	褐色	石英の細粒を含む 密	口縁部外面ヨコナデ　内面ナデ 胴部横位のヘラケズリ
2	坏	36	106	62	111	½	○	褐色	砂粒を含む	口縁部外面ヨコナデ　内面は丁寧なミガキ 口唇部に擦痕あり　胴部外面は磨滅が著しい。
3	小型甕	89	121	58	118	完形	○	褐色	緻密	口縁部内外面ヨコナデ　内面はヘラ状工具による荒いミガキ 胴部外面横位のヘラケズリ
4	甕									

第28表－2

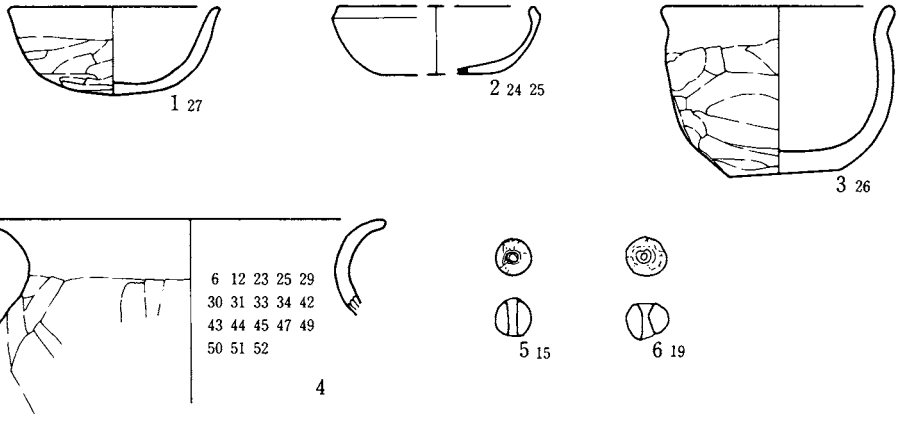
住居跡	名称	径(cm)	孔径(cm) 上端	孔径(cm) 下端	高さ(cm)	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	成形	調整
15号住居跡											
5	土製丸玉	0.92×0.95	0.25×0.18	0.22×0.17	0.97	○	○	黒褐色		粘土を丸めて作る。	ヘラナデ、若干光沢を帯る。
6	土製丸玉	1.04×0.99	0.33×0.29	0.36×0.23	0.94	○	○	黒褐色		粘土を丸めて作る。	ナデ、やや光沢を帯る。



1. 暗褐色土層(山砂を若干含む、ローム粒・焼土粒を若干含む)
2. 灰褐色土層(山砂粘土層しまり大変良い。若干焼土粒を含む)
2'. 灰褐色土層(2層の山砂層以上に灰色味が強い。乾くとかなり堅固になる)
3. 灰褐色土層(2層より山砂量は少ない。炭化粒・ブロックを若干含む)
4. 暗褐色土層(3層より山砂量は更に少ない。ロームブロック・焼土粒を若干含む)
5. 赤褐色土層(焼土粒・焼土ブロックを含む)
6. 赤褐色土層(紫紅色の焼土塊を含む)
7. 暗褐色土層(山砂を主体として若干焼土塊・焼土粒を含む)

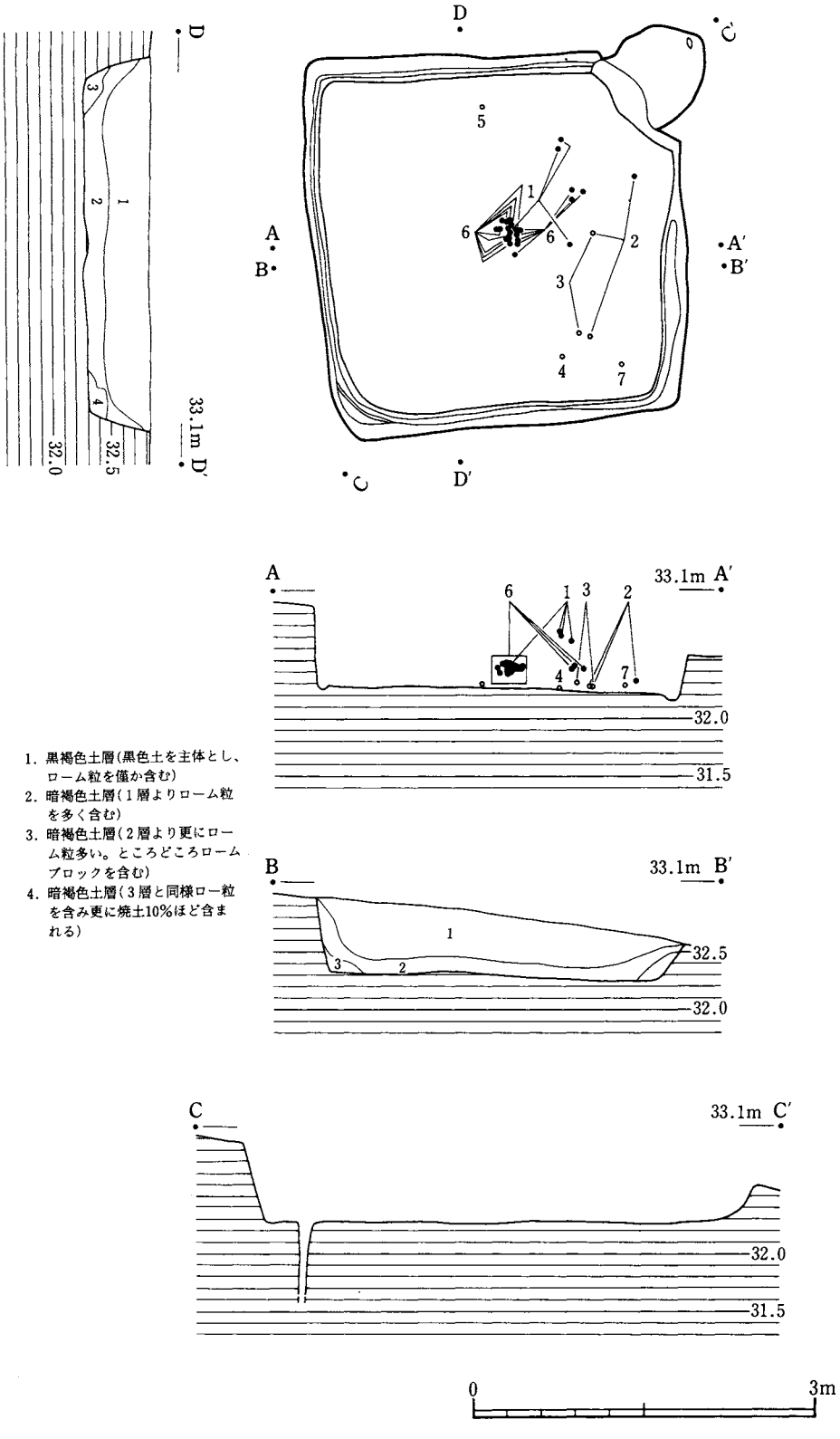


15号住居跡カマド実測図



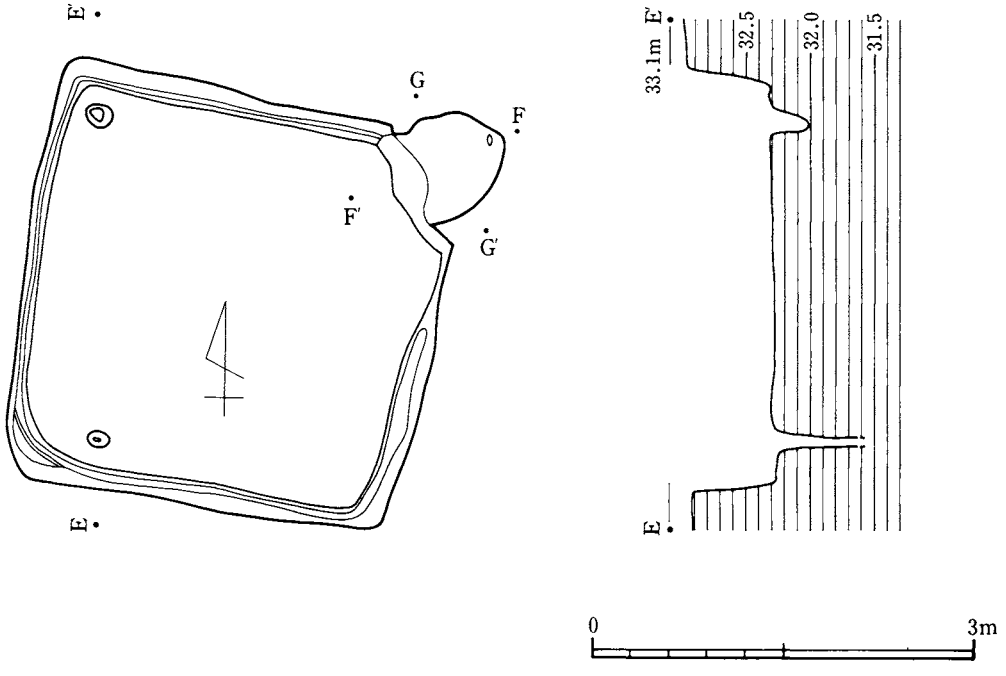
15号住居跡遺物実測図

第122図　15号住居跡カマド、遺物実測図



1. 黒褐色土層(黒色土を主体とし、ローム粒を僅か含む)
2. 暗褐色土層(1層よりローム粒を多く含む)
3. 暗褐色土層(2層より更にローム粒多い。ところどころロームブロックを含む)
4. 暗褐色土層(3層と同様ロー粒を含み更に焼土10%ほど含まれる)

第123図　16号住居跡遺物出土状況図



第124図　16号住居跡遺構図

焼成　○良好、△普通、×劣　**第29表**

No.	器種	法量（mm）				遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴（成形・調整）
		器高	口縁径	底部径	胴部径					
1	坏	38	144	100	—	½	○	茶褐色	長石及びその他の岩石粒を含む	胴部内外面回転ナデ
2	須恵器坏蓋	27	148	—	—	ほぼ完形	○	灰白色	石英、雲母、滑石の細粒を含む	頂部につまみ付き、内外面ロクロメを回転ナデにより調整している。 口唇部はかるくつままれ屈曲している。
3	須恵器坏身	42	111	73	—	ほぼ完形	○	灰白色	石英、滑石及びその他の岩石細粒を含む	胴部内外面回転ナデ　底部回転糸切り 底部付近回転ヘラケズリ

（200頁につづく）

16号住居跡　(102)　(第123・124・125・126図、図版50・69)

検出状況　調査区の北東寄りの、南東に開いた一つめの谷津に続く急斜面を登り詰めた、標高33.1mの斜面に位置する。

形状・規模　主軸の方位はE－34.5°－N、3.3m×3.2mのほぼ方形を呈している。

覆土　竪穴内の土層は単純で、短時間のうちに埋没したことを想起させる堆積状況を示す。

床面　ハードロームを堅くつき固めており、南北方向は水平を維持するが、東西方向では若干の傾斜が認められる。

また、壁溝は全周せず、カマドの手前で終る。

カマド　住居跡の北東コーナーに位置し、これは斜面の下方側にあたり、カマドの位置としては少々特異な印象を与えている。

なお、カマドの遺存状態は良好で、焚口・掛口・煙道ともに明瞭に検出された。

柱穴　斜面の上方側、すなわち西壁沿いの2ケ所のみ検出された。

柱穴の掘込みは浅く、掘方も安定を欠き、1本はネズミによる攪乱を受けており、底は検出されていない。

貯蔵穴　なし。

遺物出土状況　遺物の出土数は僅かであるが、後述する特殊遺構出土の須恵器甕と接合する小破片を出土している。

遺物　1は土師器の坏、体部にはロクロ目が認められる。

2は須恵器蓋、床面直上の出土である。

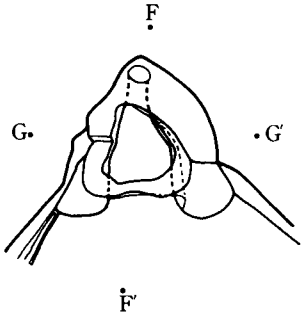
3は須恵器坏身、床面直上の出土である。

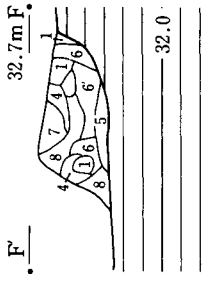
4・6は小型甕、このうち、4は床面直上の出土である。

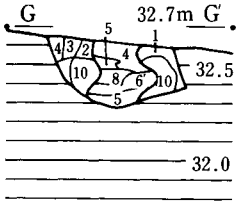
5は、底部のつくりが傾斜しており、均整のとれていない土師器の甕。

7は、床面直上で正立して検出された須恵器甕で、器表面には平行タタキ目を有し、胴部の最も張りのある部位に2条の平行沈線を一巡させ、底部付近では大胆なヘラケズリの調整を加えているのが認められる。

4	小型甕	160	152	85	161	完形	○	暗褐色	石英及び砂粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　底部ヘラケズリ後のナデ 胴部外面ヘラケズリ　内面丁寧なナデ
5	甕	292	248	121	453	完形	○	褐色	素地な均質でよく精練されている 石英、滑石の細粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面は丁寧なナデ 胴部外面縦位のヘラケズリ　口縁部先端付近折り返し口縁 底部ヘラケズリ後のナデ
6	小型甕	164	150	76	150	3/4	○	茶褐色	石英、滑石の細粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面丁寧なナデ、口唇直下にはヘラ状工具により胴部外面ヘラケズリ後のナデ、平担部をつくり出している。精練されたキメのこまかい素地を使用
7	須恵器甕	335	200	150	285	完形	○	灰白色	大粒の石英、滑石粒を含む	口唇部は折り返し付きの有段となっている。 口縁部内外面ヨコナデ、口縁はゆるやかに波をうっている。 胴部外面タタキメ　内面丁寧なナデ 底部付近ヘラケズリ　底部は輪重式の面を指頭で押えナデ。

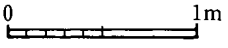


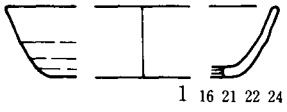


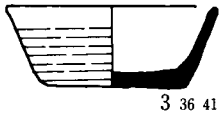


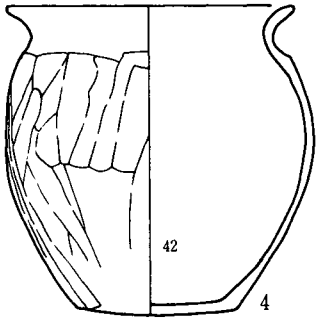
1. 山砂・粘土層
2. 山砂・粘土層(焼土を含み、1層に近くしまり良好)
3. 暗褐色土層(山砂を含む)
4. 暗褐色土層(若干山砂を含む)
5. 暗褐色土層(焼土・山砂を含む、灰色味を帯びる)
6. 暗褐色土層(焼土ブロックを含む、山砂も多く含む)
6'. 暗褐色土層(6層より山砂の見える量は少なく、焼土も若干少ない)
7. ロームブロック・ローム粒を含む)
8. 暗褐色土層(山砂・焼土を若干含む暗褐色土)
9. 暗褐色土層(焼土ブロックを含む、山砂・粘土からなるカマド内面が焼けた所)

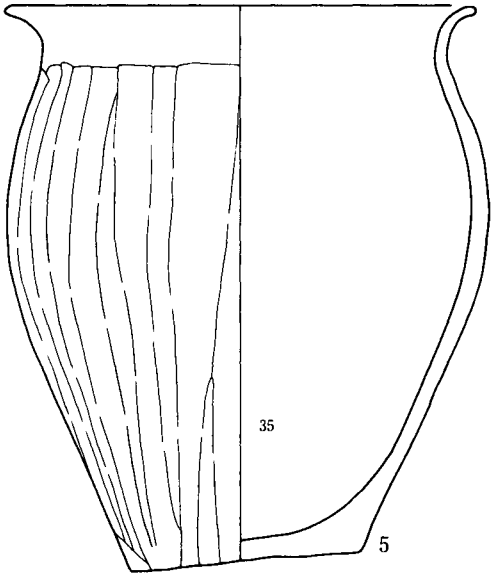
16号住居跡カマド実測図

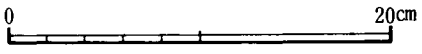






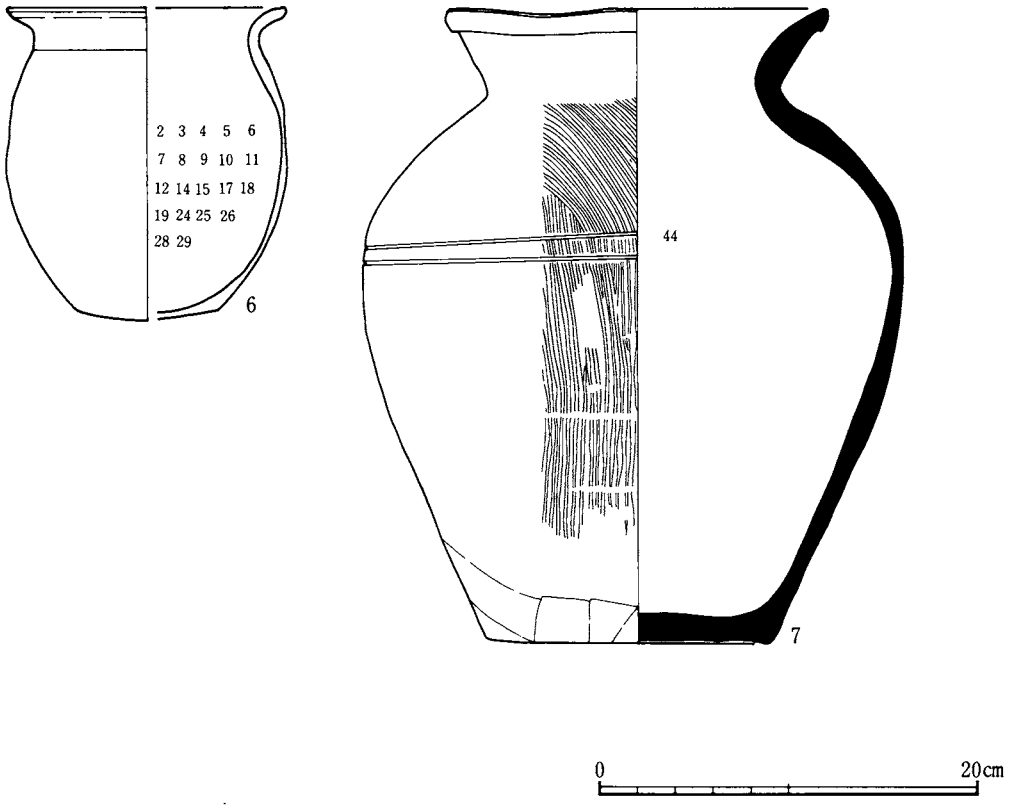






16 号住居跡遺物実測図(1)

第125図　16号住居跡カマド、遺物実測図(1)



第126図　16号住居跡遺物実測図(2)

17号住居跡　(002)　(第127・128図、図版51・70)

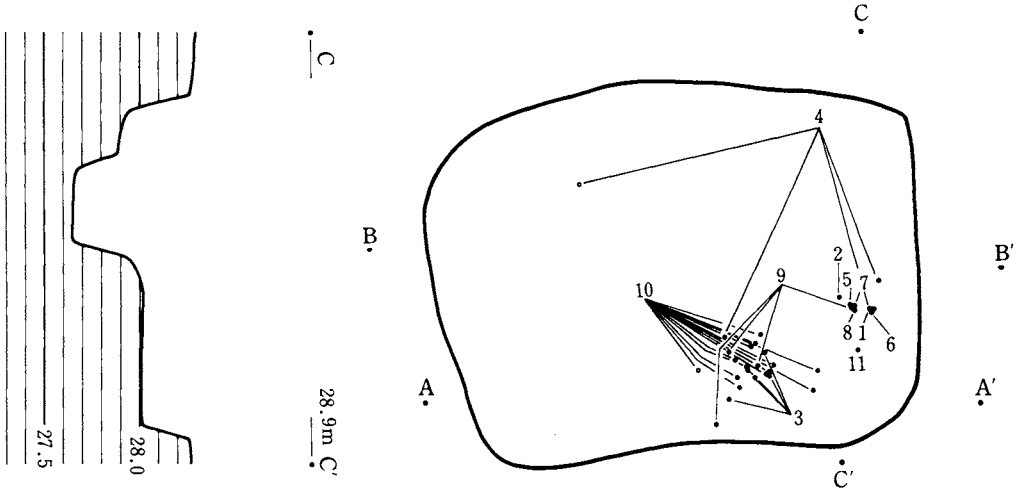
検出状況　調査区の北東端にあたる台地の、標高28.9mの北向きの斜面の縁辺に位置する。

形状・規模　主軸はN－14.5°－E、2.6m×1.9mの東西方向に長い隅丸方形を呈し、小形の住居跡である。

覆土　竪穴の掘込みは浅く、短時間による埋没と考えられる。

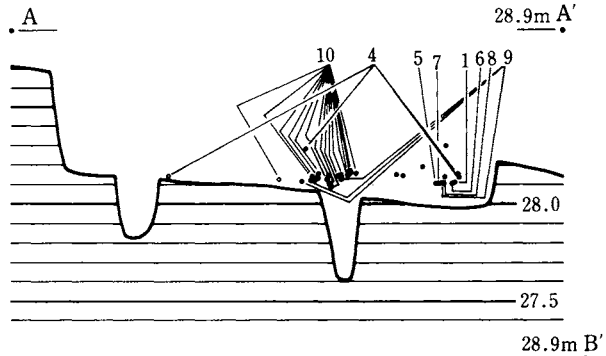
床面　床面はソフトロームのままであり、つき固めた形跡は認められず、南北方向は水平を保つが、東西方向には傾斜が修正されていない。

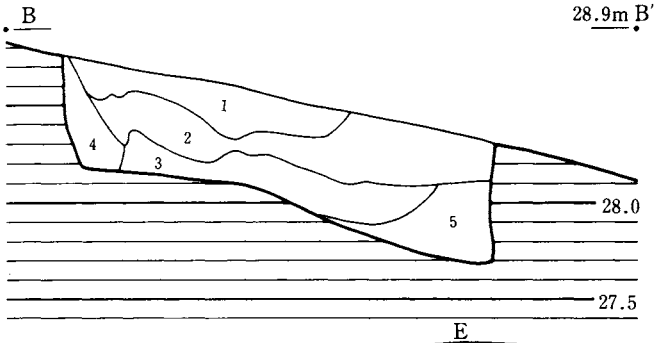
また、壁溝は検出されていない。

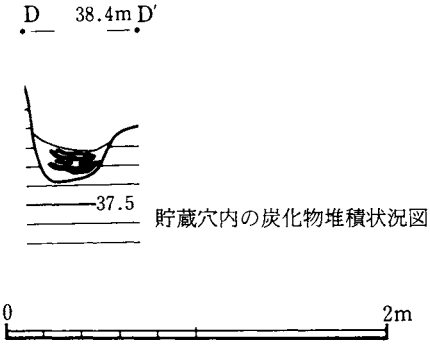


17号住居跡遺物出土状況図

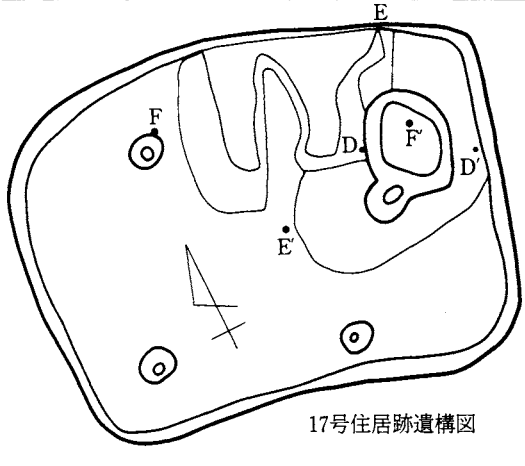
1. 黒色土層
2. 明褐色土層(焼土粒を含む)
3. 暗褐色土層
4. 茶褐色土層
5. 暗褐色土層(3層よりしまりの良い土層)





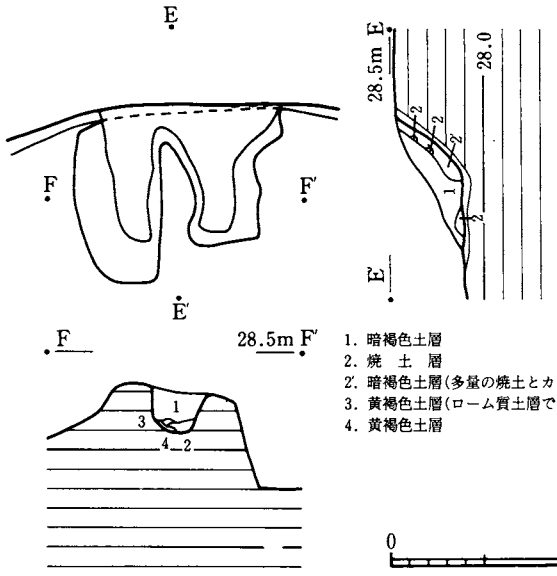


貯蔵穴内の炭化物堆積状況図

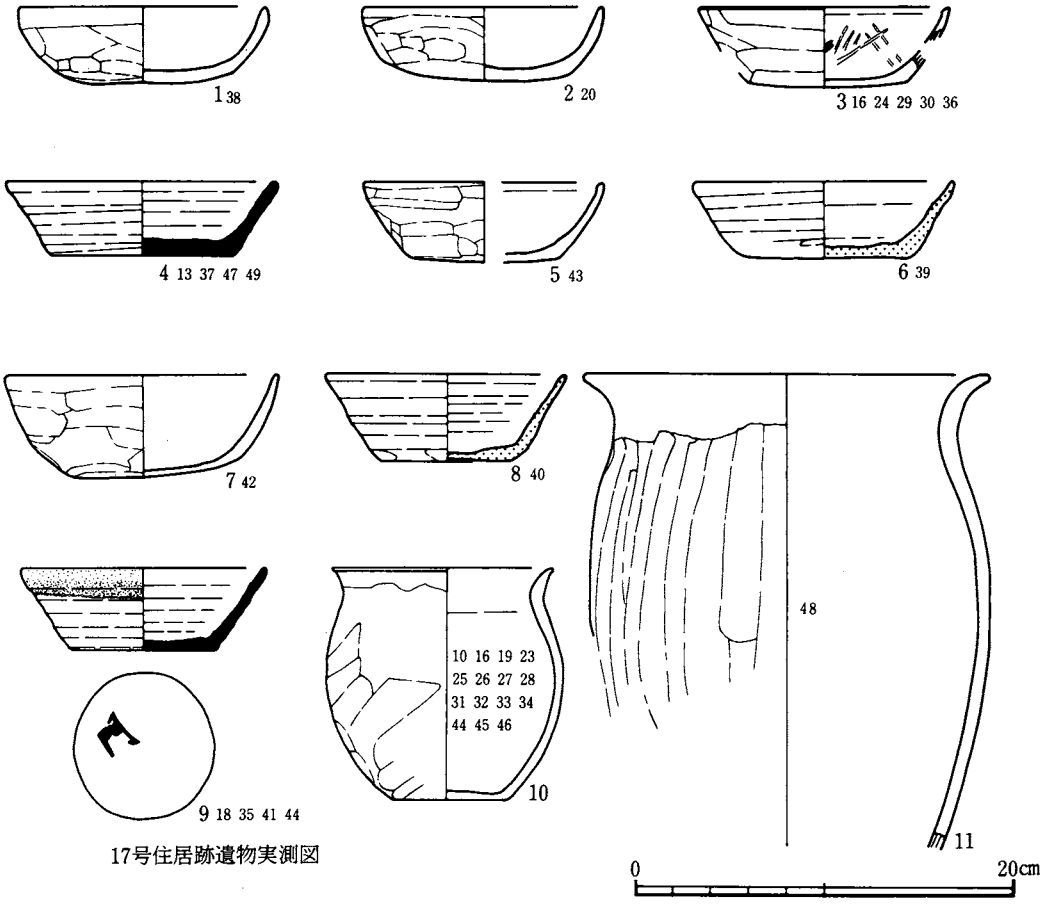


17号住居跡遺構図

第127図　17号住居跡遺物出土状況図、遺構図



17号住居跡カマド実測図



17号住居跡遺物実測図

第128図　17号住居跡カマド、遺物実測図

カマド　北壁の中央よりやや東寄りの部分に位置し、本住居跡の中にカマドの占有する面積の大きいことが特徴である。

カマドの袖部はロームを掘り残し、袖部内側にのみ粘土と山砂の混合材を使用している。

柱穴　竪穴の面積の小さいことに比べて、4本所在するのも不自然な印象を与えているが、柱穴の掘込みは深く、掘方も安定したつくりとなっている。

貯蔵穴　北壁寄りの、カマド東脇に連なるように位置する。

土層観察によれば、覆土には多量の炭化物を含む層が確認された。

貯蔵穴の底部は白色粘土が露呈している。

遺物出土状況　不定形の、きわめて小形の遺構であるにもかかわらず、出土数は豊富である。

遺物　1～3・5・7は土師器の坏、4は床面直上の出土である。

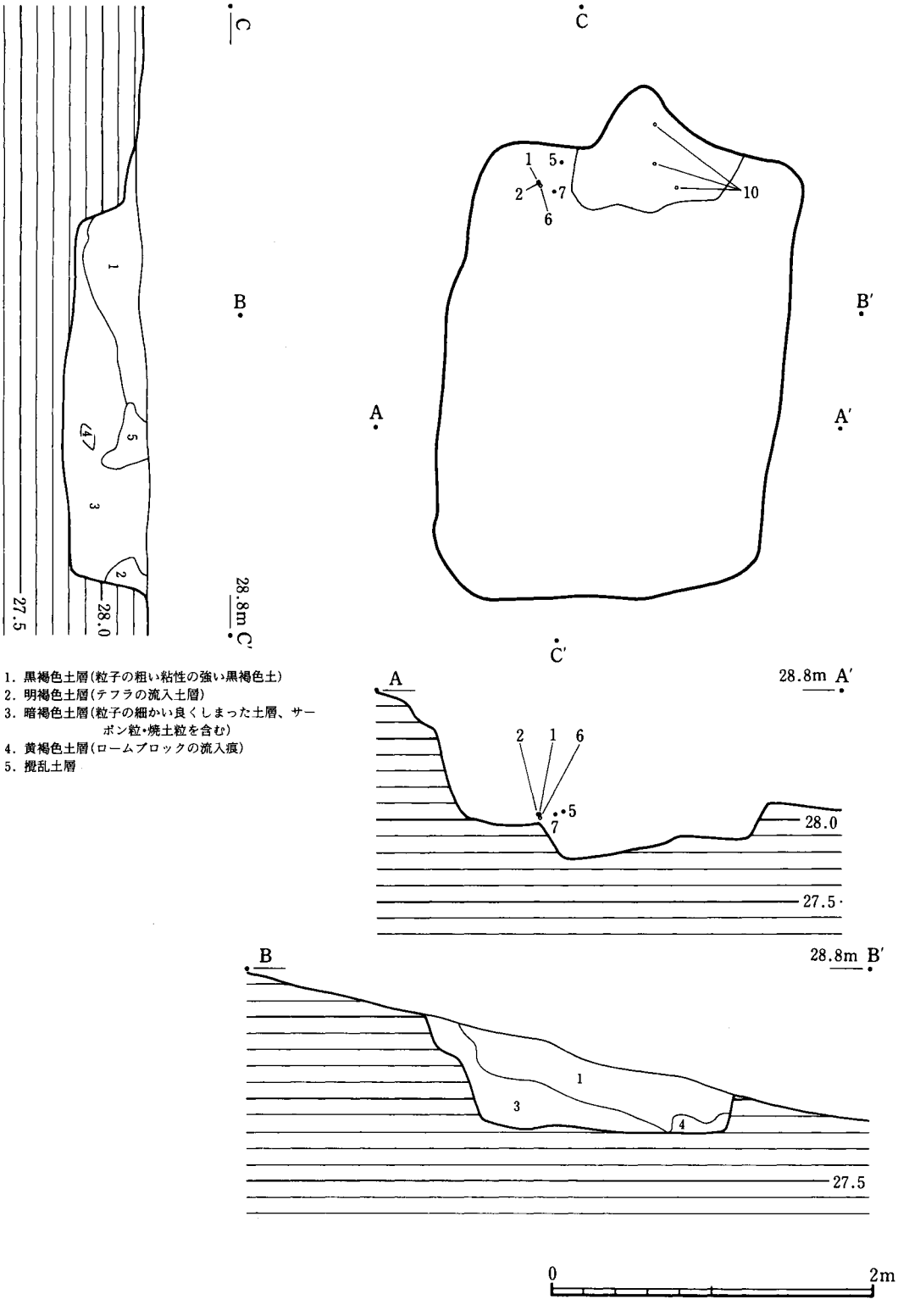
いづれも、底部は丸底で体部には横位のヘラケズリ調整が見られる。

4・9は須恵器坏身、4の底部は回転ヘラ切り後の一方向のナデ調整、9の底部は回転ヘラ切り、底部付近は手持ちヘラケズリの調整が見られ、9の底部には『門』の墨書がある。

6・8は焼きのあまい土師器的な焼成で、成形技法的には須恵器として扱うことの可能な土師質須恵器で、6の底部は回転ヘラ切り後の手持ちヘラケズリ調整、8の底部は回転ヘラ切り後の一方向のナデ調整と底部付近の手持ちヘラケズリの調整が見られる。

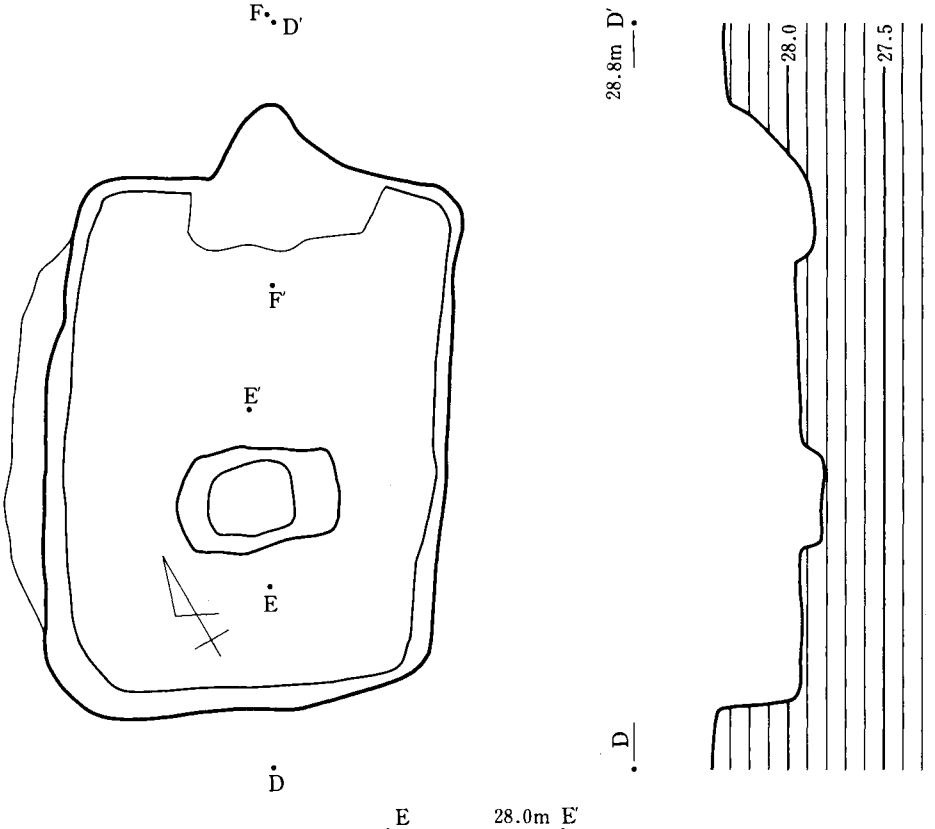
焼成　○良好、△普通、×劣　**第30表**

No.	器種	法量（mm）				遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴（成形・調整）
		器高	口縁径	底部径	胴部径					
1	坏	40	130	92	133	完形	○	茶褐色	岩石細粒を含む	内面ナデ　口唇部内外面ヨコナデ 外面ヘラケズリ　内面に炭化物の付着痕あり、底部に木葉痕をヘラ書きする。
2	坏	39	128	95	130	完形	○	内面　褐色 外面　茶褐色	石英細粒を含む 精	内面丁寧なミガキ　口唇部内外面ヨコナデ 外面ヘラケズリ後の丁寧なミガキ
3	坏	41	132	85	—	½	○	明褐色	砂粒を含む 精	内面丁寧なナデの後細い棒状の工具によるミガキ、底部はヘラケズリ後のナデ 外面荒いヘラケズリ
4	須恵器杯身	39	144	96	—	完形	△	灰白色	雲母の細片、石英粒を含む	胴部内外面ロクロメ 底部は回転ヘラ切り後の一方向のナデ
5	坏	42	128	80	—	½	○	明褐色	砂粒を含む	内面丁寧なミガキ　口唇部ヨコナデ 外面ヘラケズリ（底部は荒いヘラケズリ）
6	土師質須恵器杯身	40	140	70	—	ほぼ完形	△	灰褐色	雲母、石英、長石等の岩石粒を含む	胴部内外面ロクロメ　底部は回転ヘラ切り後の手持ちヘラケズリ
7	坏	53	144	91	—	完形	○	内面　茶褐色 外面　褐色	雲母、石英の細粒を含む	内面丁寧なミガキ　口唇部ヨコナデ 外面ヘラケズリ（底部はヘラケズリ後のナデ） 内面は丁寧なミガキ
8	土師質須恵器坏身	45	130	70	—	完形	△	灰褐色	雲母、石英、長石等 大粒の岩石粒を含む	胴部内外面ロクロメ　底部は回転ヘラ切り後のヘラナデ 底部付近　手持ちヘラケズリ
9	須恵器坏身	43	130	76	—	完形	△	灰白色	雲母の細片、石英粒を含む	胴部内外面ロクロメ　底部は回転ヘラ切り後のナデ調整底部に「門」の墨書あり 底部付近回転ヘラケズリ、口縁部は還元炎による黒色化がみられる。
10	甕	121	119	61	127	⅙	△	内面　茶褐色 外面　黒褐色	細石粒を含む 粗	胴部外面縦位及び斜位のヘラケズリ後のナデ、底部はヘラケズリ後のナデ 胴部内面丁寧なナデ　口縁部内外面ヨコナデ
11	甕	—	219	—	214	¼	○	褐色	雲母、石英の細粒を含む、精	内面丁寧なナデ　口縁部内外面ヨコナデ 外面縦位の丁寧なヘラケズリ

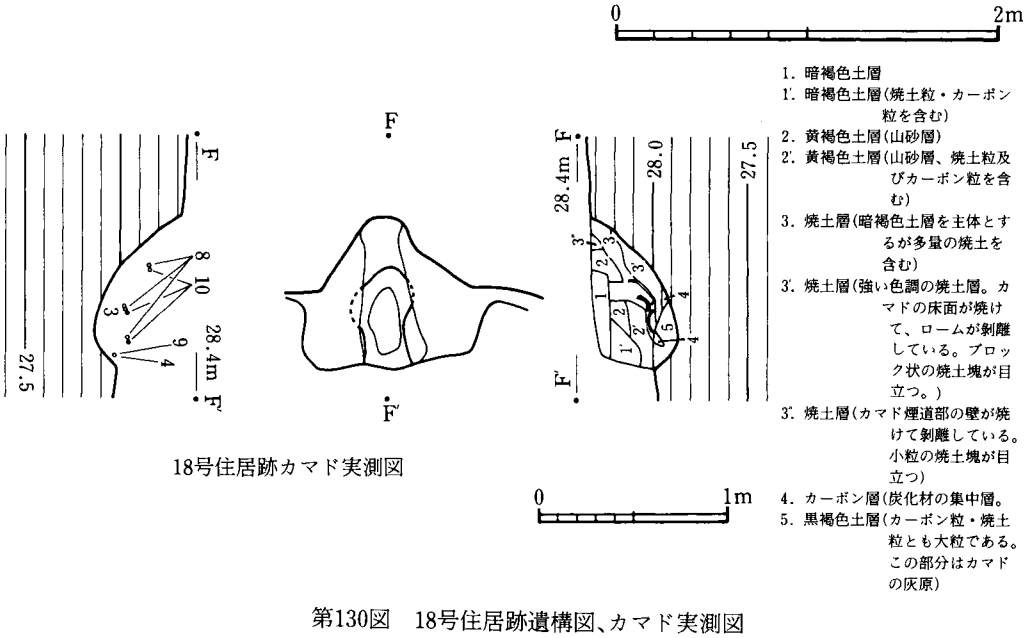


1. 黒褐色土層(粒子の粗い粘性の強い黒褐色土)
2. 明褐色土層(テフラの流入土層)
3. 暗褐色土層(粒子の細かい良くしまった土層、サーボン粒・焼土粒を含む)
4. 黄褐色土層(ロームブロックの流入痕)
5. 攪乱土層

第129図　18号住居跡遺物出土状況図



18号住居跡遺構図



18号住居跡カマド実測図

第130図　18号住居跡遺構図、カマド実測図

坏は壁ぎわより重ねられた状態で検出されており、上から4・1・6僅かな間隔があき、8・9・7・5の順となっている。

10は小型甕、11は長胴化した甕、このうち10は床面直上の出土である。

18号住居跡　(003)　(第129・130・131図、図版52・71)

検出状況　調査区の北東端にあたる台地の、標高28.8mの北向きの斜面の縁辺に位置する。18号住居跡は、17号住居跡の東に隣接している。

形状・規模　主軸の方位はN－36.5°－E、3.2m×2.1mの南北に長い長方形を呈する小形の住居跡である。

覆土　竪穴の掘込みは浅く、17号住居跡と同様に短時間により埋没したものと考えられる。

床面　急な斜面に位置しているが、東西・南北の両方向ともに水平を保ち、ハードロームをつき固めている。

竪穴のほぼ中央部には平面形が方形を呈する掘込みが検出され、壁溝は検出されていない。

カマド　北壁の中央部に位置し、袖部も山砂と白色粘土の混合材により構築されている。

柱穴　柱穴は検出されていない。

貯蔵穴　なし。

遺物出土状況　17号住居跡と同様に、平面形態の小さいことに比べて、出土数は豊富である。遺物はカマド内及び中央部の掘込み部分の周辺に集まり検出された。

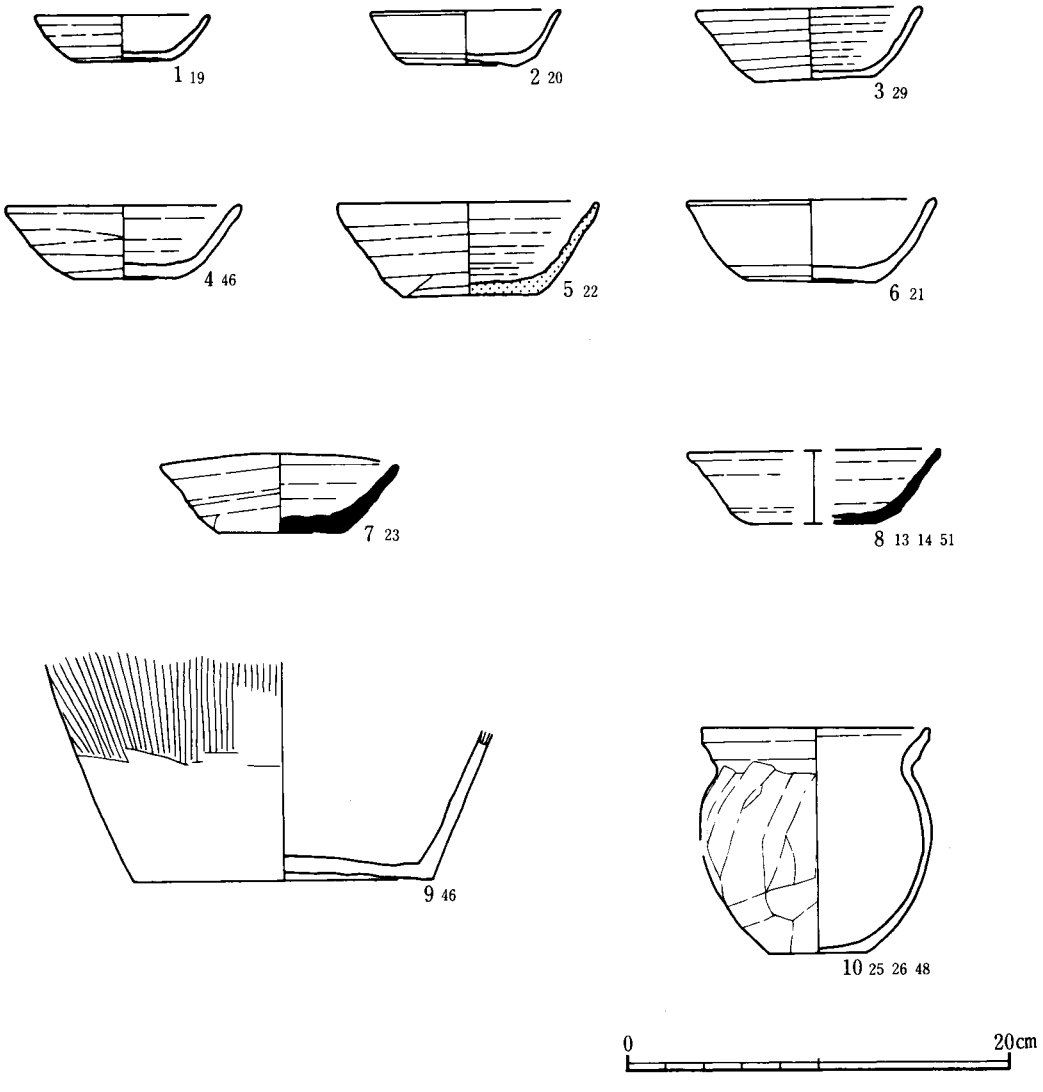
遺物　1～4・6は土師器の坏、3・4はカマド内からの、6は床面直上の出土である。いずれもロクロ使用の土師器であり、1の底部は切り離し後の回転ナデ調整と底部付近の回転ヘラケズリの調整、2の底部は回転糸切りの後に周囲を回転ヘラナデ調整と底部付近の回転ヘラケズリの調整、3の底部は切り離し後の回転ナデ調整と底部付近の回転ヘラケズリの調整、4の底部は回転糸切りと底部付近の回転ヘラケズリの調整、6の底部は回転ヘラ切りと底部付近の回転ヘラケズリの調整が、それぞれ観察される。

5は土師質の須恵器坏、底部は回転ヘラ切り、底部付近は回転ヘラケズリのそれぞれ調整が見られ、7・8は焼きのあまい須恵器坏である。

7は、底部切り離し後に一方向のヘラナデ調整と底部付近に手持ちヘラケズリの調整が見られる。

8は床面直上の出土で、底部切り離し後に周囲を手持ちヘラナデの調整と底部付近に手持ちのヘラケズリの調整が見られる。

9は胴部にタタキ目のある甕の胴下半部、10は小形甕、いづれもカマド内の出土である。

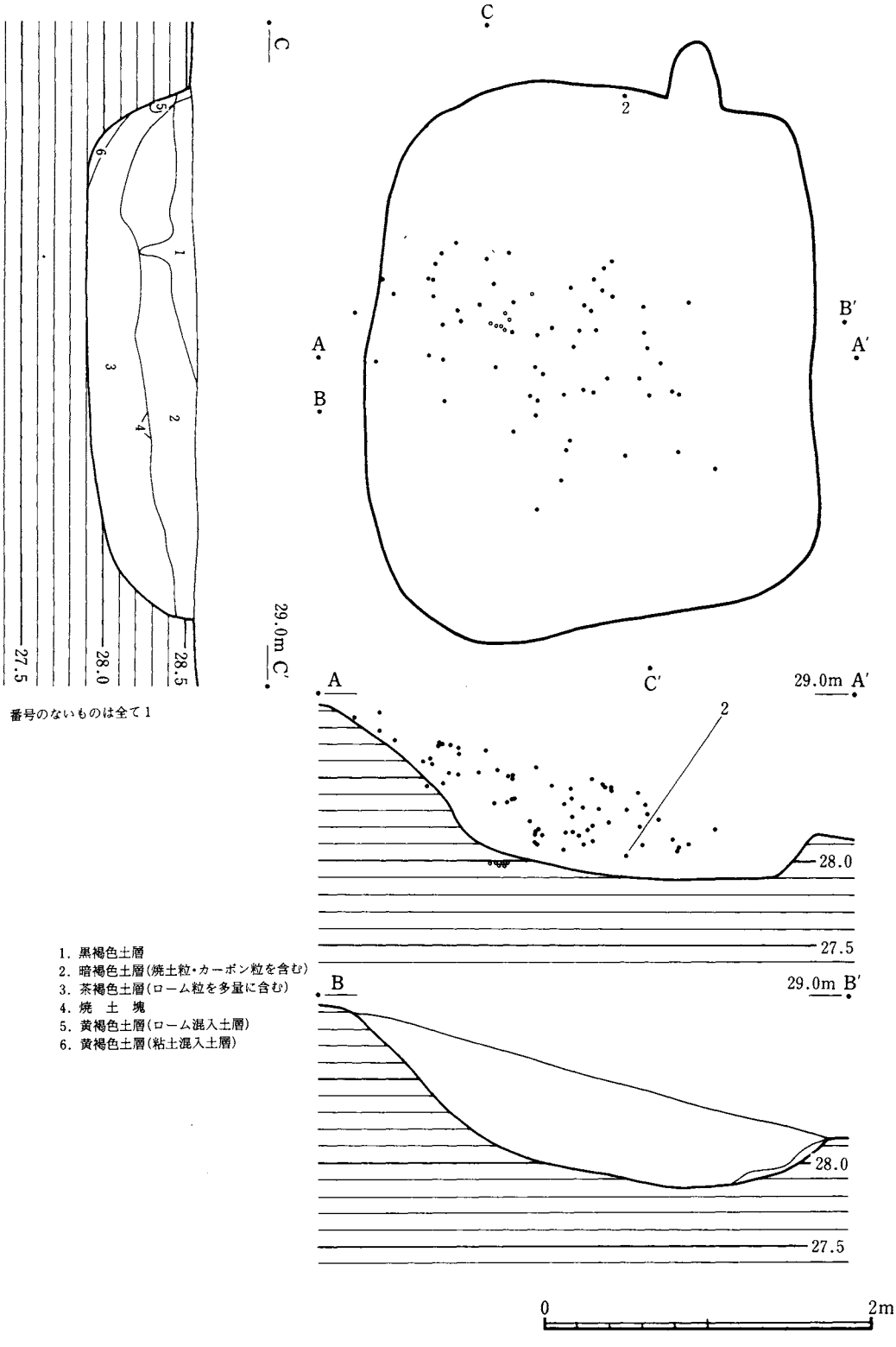


第131図　18号住居跡遺物実測図

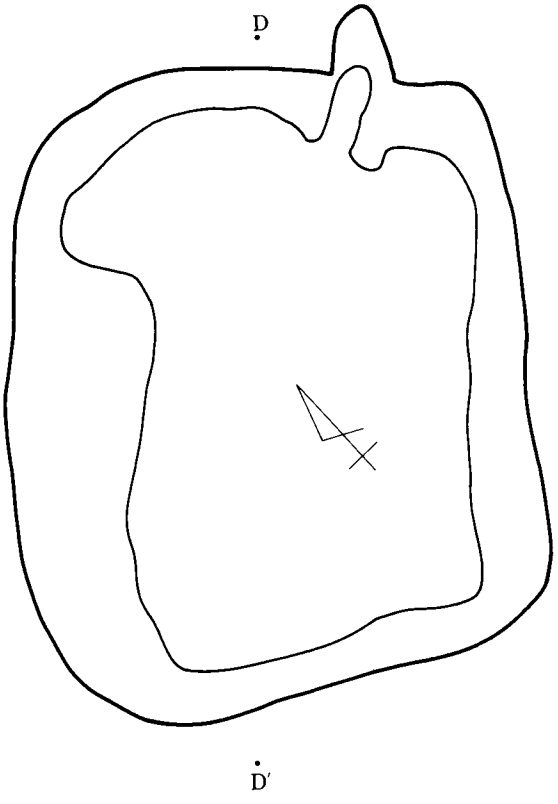
焼成　○良好、△普通、×劣　**第31表**

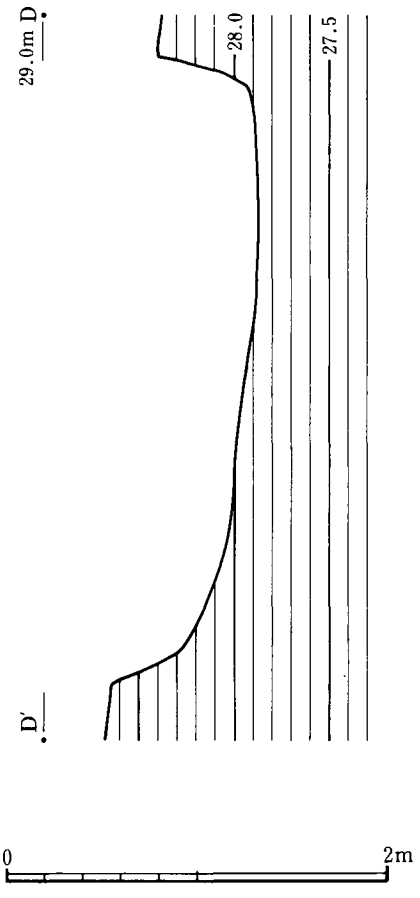
No.	器種	法量（mm）				遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴（成形・調整）
		器高	口縁径	底部径	胴部径					
1	坏	24	93	49	—	完形	○	褐色	岩石細粒を含む粗	胴部回転ナデ　底部切り離し後の回転ヘラケズリ（周囲）底部付近回転ヘラケズリ
2	坏	28	102	59	—	完形	○	黒褐色	岩石細粒を含む粗	胴部回転ナデ　底部回転糸切り後の回転ヘラケズリ（周囲） 底部付近　回転ヘラケズリ

（212頁につづく）

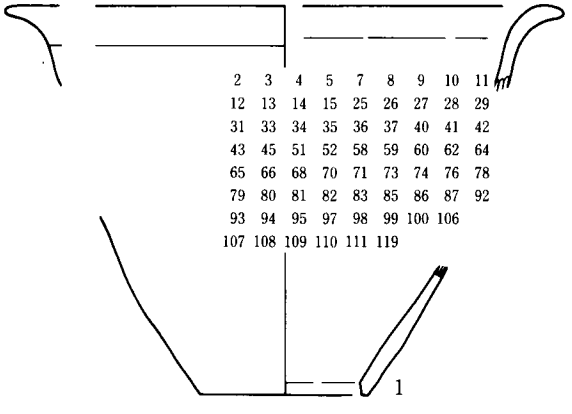


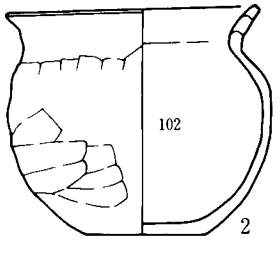
第132図　19号住居跡遺物出土状況図

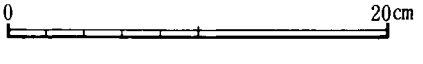




19号住居跡遺構図







19号住居跡遺物実測図

第133図　19号住居跡遺構図、遺物実測図

3	坏	37	120	62	—	完　形	○	茶褐色	石英、長石細粒を含む 精	胴部内外面ロクロメ　底部切り離し後の回転ヘラケズリ（周囲） 底部付近　回転ヘラケズリ
4	坏	38	125	54	—	完　形	○	褐色	石英細粒を含む 精	胴部回転ナデ　底部回転糸切り 底部付近回転ヘラケズリ
5	土師質 須恵器坏	48	139	72	—	完　形	×	黒褐色	砂粒を多量に含む 粗	胴部内外面ロクロメ　底部多方向へのヘラ調整のため切り離しの方法は不明。 底部付近　手持ちヘラケズリ
6	坏	43	132	66	—	完　形	○	褐色	砂粒を多量に含む 粗	胴部回転ナデ（ロクロメは弱い）　底部回転ヘラ切り 底部付近　回転ヘラケズリ
7	須恵器坏	41	126	68	—	完　形	△	灰白色	岩石細粒を含む 気泡が著しい。粗	胴部ロクロメ　底部切り離し後の一方向のナデ 底部付近　手持ちヘラケズリ
8	須恵器坏	118	120	52	122	ほぼ完形	△	内面　黒褐色 外面　暗褐色	石英細粒を含む 粗	胴部外面上半部縦位のヘラケズリ後のナデ、下半部横位の胴部外面ナデ 口縁部内外面ヨコナデ、口唇部は軽くつままれて内傾する。
9	大型甕	—	—	160	—	¼	○	内面　灰褐色 外面　暗褐色	石英、長石の細粒を含む。 粗	胴部外面はタタキメ、内面は荒いナデ 底部は同心円状の輪重ね式。
10	小型甕									

19号住居跡　(004)　(第132・133図、図版52・72)

検出状況　調査区の北東端にあたる台地の、標高29mの北向き斜面の縁辺に位置する。

19号住居跡は、18号住居跡の東に隣接している。

形状・規模　主軸の方位はN－36.5°－E、3.4m×2.7mの南北に長い隅丸方形を呈する小形の住居跡である。

覆土　17号住居跡・18号住居跡と同様に短時間に埋没したものと考えられる。

床面　ソフトロームのままであり、つき固めた形跡は認められず、東西・南北の両方向ともに傾斜ぎみである。

これは、竪穴の掘方そのものが安定を欠くものであることに起因する。

なお、壁溝は検出されていない。

カマド　北壁の中央より東寄りに位置するが、壁を楔状に掘込み、袖部を構築した形跡はない。

柱穴　検出されていない。

貯蔵穴　なし。

遺物出土状況　遺物は全体的に竪穴内に散っており、すべて小破片であることから、投棄された可能性が強い。

遺物　1は床面直上で検出された甑。

2は小形甑。

焼成　○良好、△普通、×劣　**第32表**

No.	器種	法量（mm）				遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴（成形・調整）
		器高	口縁径	底部径	胴部径					
1	甑	—	297	90	—	¼	△	明褐色	石英の細粒を含む 精	口縁部内外面ヨコナデ　胴部内面丁寧なナデ 胴部上半縦位の荒いナデ
2	小型甕	116	133	63	137	完　形	△	明褐色	岩石細粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　胴部内面ナデ 胴部上半縦位、下半横位のヘラケズリ後にナデ 口唇に沈線による段をもつ。

20号住居跡　(006)　(第134・135図、図版53・72)

検出状況　調査区の北東端にあたる台地の、標高30.7mの東に傾斜する斜面に位置する。

形状・規模　主軸の方位はN－14°－W、2.3m×2.2mのほぼ方形を呈する小形の住居跡である。

覆土　竪穴の覆土中に炭化材及び焼土が検出され、突発的な埋没の可能性が強い。

床面　ハードロームをつき固めており、南北方向は水平を保つが、東西方向では若干傾斜する。なお、壁溝は検出されていない。

カマド　北壁の中央部分に位置し、壁を楔状に掘込み構築しており、袖部は検出されていない。

柱穴　北西コーナー寄りに1本のみ検出され、柱穴の掘込みは浅いが掘方は安定している。

貯蔵穴　なし。

遺物出土状況　遺物は全域に分布するが、床面直上の出土を含め豊富な出土数である。

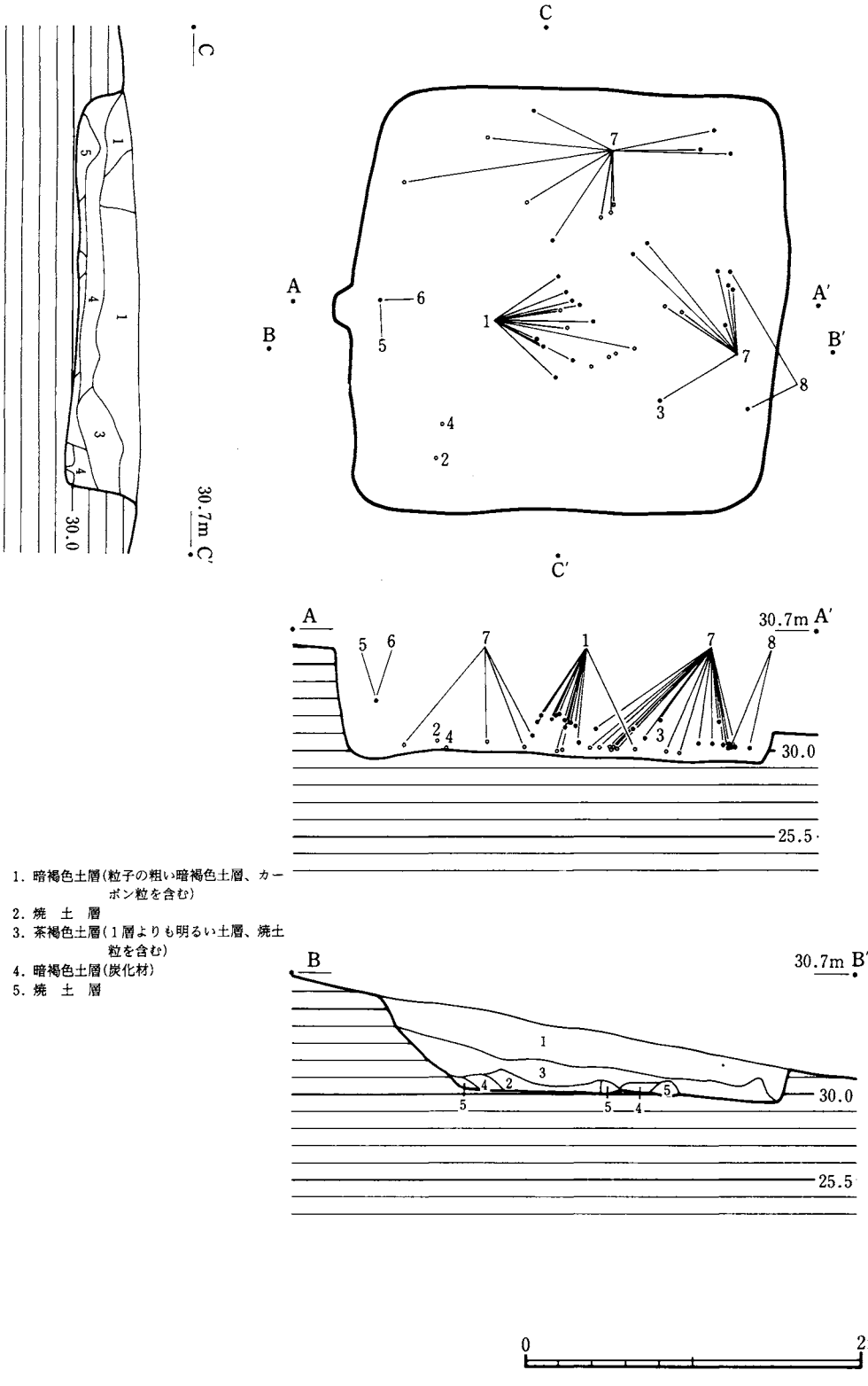
遺物　1～6はいづれもロクロ使用の土師器坏、1・2・4が床面直上の出土である。

1の底部は回転糸切り後の一方向のナデ調整と底部付近の手持ちヘラケズリの調整、2の底部は回転ヘラ切りと底部付近の回転ヘラケズリ調整、3の底部は切り離し後の一方向のナデ調整、4の底部は回転ヘラ切りと底部付近の回転ヘラケズリ調整、5の底部は切り離し後の一方向のナデ調整と底部付近の手持ちヘラケズリの調整、6の底部は回転ヘラ切り後のナデ調整と底部付近の手持ちヘラケズリの調整がそれぞれ観察される。

7・8は長胴化した土師器の甕で、このうち7は床面直上の出土であり、8は口唇部のつくりから須恵器の模倣的な土師器甕である。

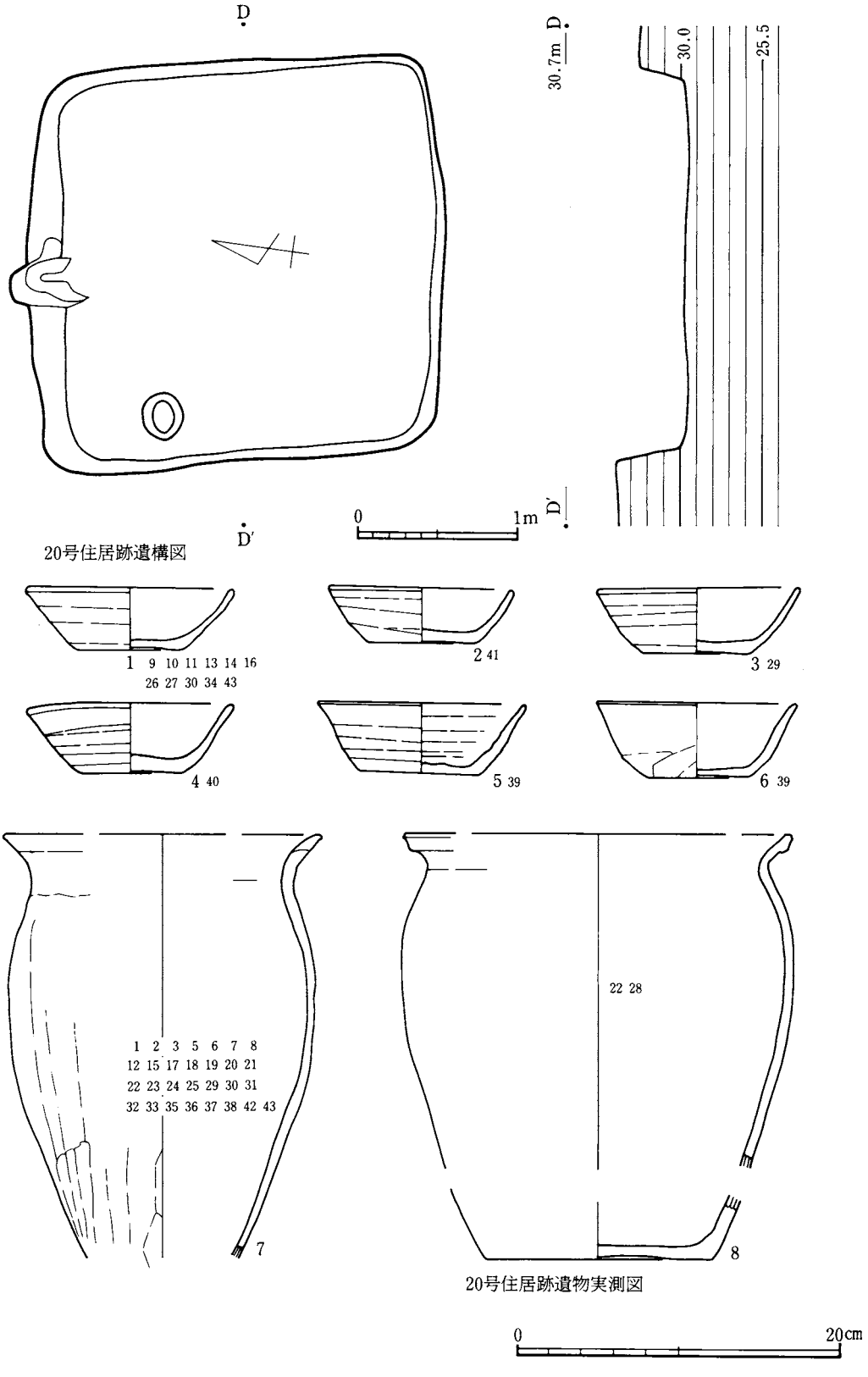
焼成　○良好、△普通、×劣　**第33表**

No.	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴(成形・調整)
1	坏	39	129	64	—	ほぼ完形	○	明褐色	雲母、長石の細片を含む。精	胴部外面ロクロメ、内面丁寧なミガキ、内面には使用による黒色付着物あり 底部は回転糸切り後のナデ
2	坏	34	114	67	—	ほぼ完形	○	内面　黒色（内黒） 外面　暗褐色	砂粒を多量に含む。	胴部外面ロクロメ、内面は丁寧なナデ 底部付近回転ヘラケズリ　底部は回転ヘラ切り
3	坏	40	128	68	—	ほぼ完形	○	暗褐色	砂粒を多量に含む。粗	胴部回転ナデ　内面は丁寧なナデ 底部付近回転ヘラケズリ、底部切り離し後のナデ
4	坏	42	130	63	—	完形	○	茶褐色	雲母、石英の細粒を含む。精	口唇部ヨコナデ、胴部外面ロクロメ、内面回転ナデ 底部付近回転ヘラケズリ、底部は回転ヘラ切り
5	坏	42	135	74	—	ほぼ完形	○	内面　黒褐色 外面　暗褐色	砂粒を多量に含む。粗	胴部内外面ロクロメ、底部切り離し後の一方向のナデ 底部付近回転ヘラケズリ
6	坏	45	125	63	--	完形	×	黒褐色	砂粒を多量に含む粗	胴部回転ナデ　底部回転ヘラ切り後のナデ 底部付近手持ちヘラケズリ
7	甕	—	200	—	191	2/3	△	暗褐色	砂粒を多量に含み崩い	口縁部内外面ヨコナデ 胴部上半縦位のヘラケズリ後のナデ、下半斜位のヘラケズリ後のナデ。
8	甕	—	244	140	247	1/3	○	内面 脚部黄褐色 底部黒色 外面胴部 茶褐色 底部付近 黒褐色	岩石粒及び砂粒を含む。	口縁は口唇部で折り返しがつき、内外面ともヨコナデ 胴部上半外面タタキメ、下半横位のナデ 底部は輪重ね式の表面をヘラナデ

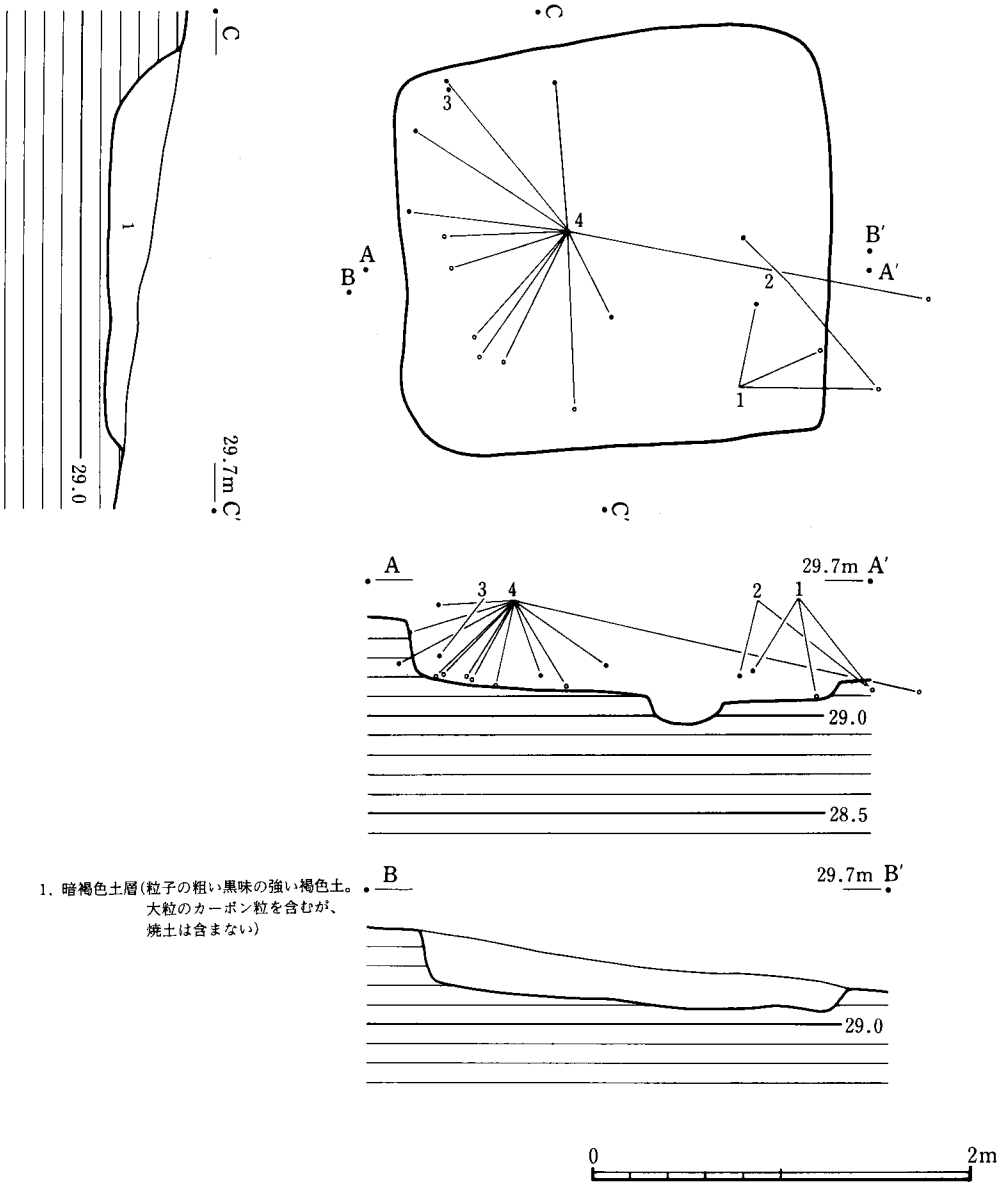


1. 暗褐色土層(粒子の粗い暗褐色土層、カーボン粒を含む)
2. 焼　土　層
3. 茶褐色土層(1層よりも明るい土層、焼土粒を含む)
4. 暗褐色土層(炭化材)
5. 焼　土　層

第134図　20号住居跡遺物出土状況図



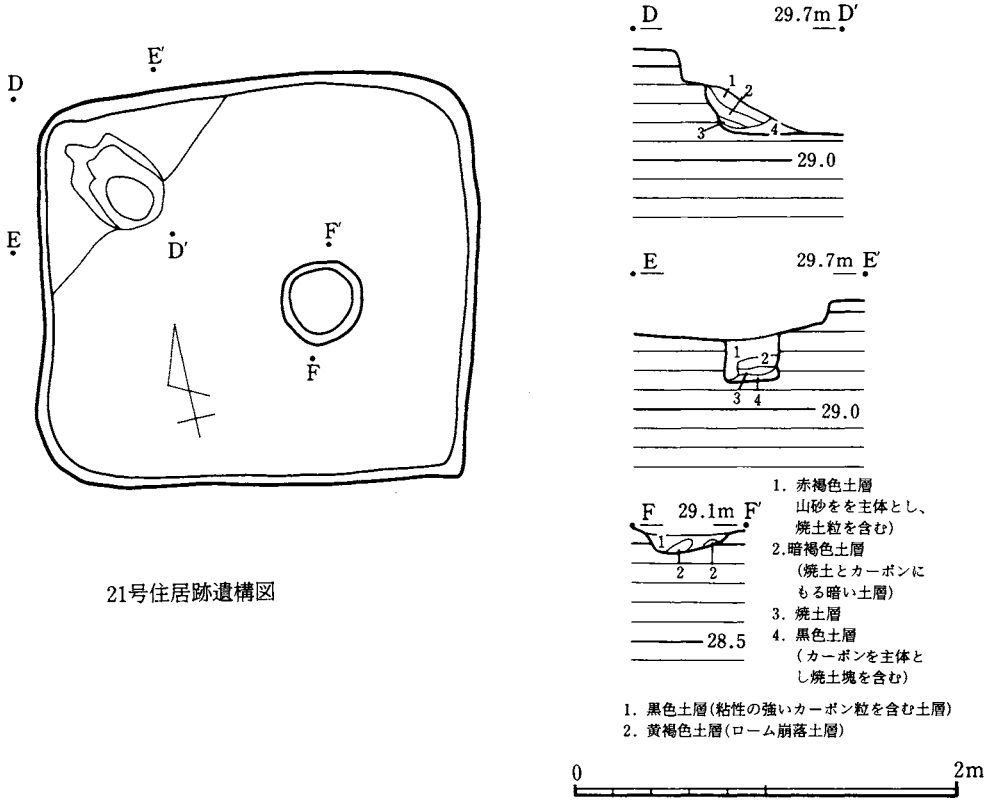
第135図　20号住居跡遺構図、遺物実測図



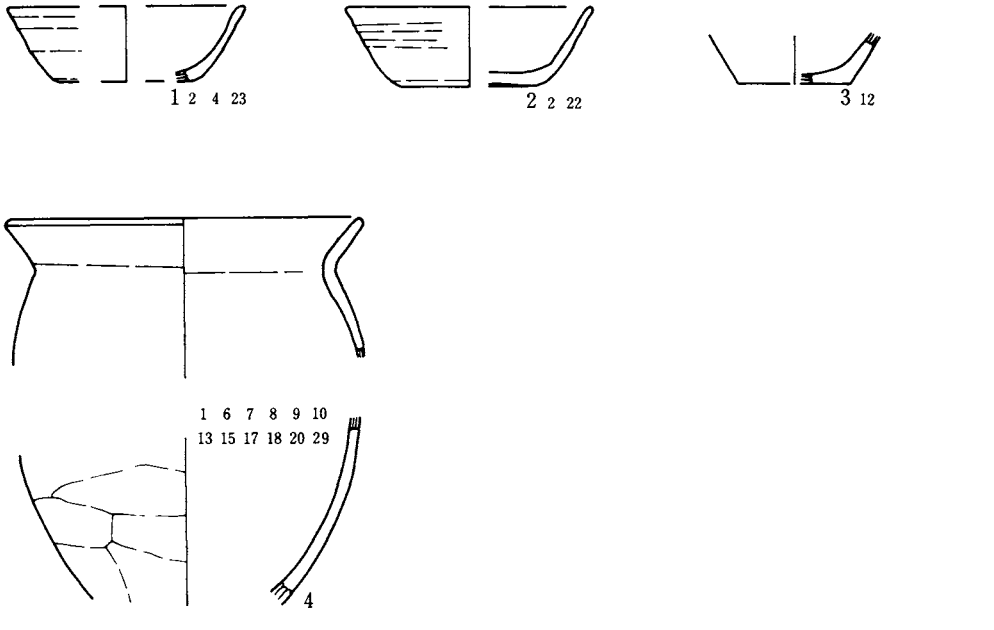
1. 暗褐色土層(粒子の粗い黒味の強い褐色土。大粒のカーボン粒を含むが、焼土は含まない)

0 2m

第136図　21号住居跡遺物出土状況図



21号住居跡遺構図



21号住居跡遺物実測図

第137図　21号住居跡遺構図、遺物実測図

21号住居跡　(005)　(第136・137図、図版53・73)

検出状況　調査区の北東端にあたる台地の、東に傾斜する標高29.7mの斜面に位置する。21号住居跡は、20号住居跡の斜面下方にあたる。

形状・規模　主軸の方位はN－37.5°－W、2.7m×2.5mの東西に長い長方形を呈する小形の住居跡である。

覆土　覆土は単純な堆積を示し、竪穴の掘込みの浅いこともあり、詳細は不明である。

床面　ハードロームをつき固めており、東西・南北の両方向ともに僅かに傾斜を示す。なお、壁溝は検出されていない。

カマド　竪穴の北西コーナーにソフトロームを掘り残し、さらにソフトロームを小規模に掘込む状態で構築されており、袖部はソフトローム部分が代用となっているものと考えられる。

柱穴　検出されていない。

貯蔵穴　なし。

遺物出土状況　遺物は全域に広く散乱している。

遺物　1～3はロクロ使用の土師器坏、いづれも床面直上の出土である。

1の底部は回転ヘラ切りと底部付近の回転ヘラケズリ調整、2の底部も回転ヘラ切りと底部付近の回転ヘラケズリ調整が観察される。

4は床面直上出土の甕である。

焼成　○良好、△普通、×劣　**第34表**

No.	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴(成形・調整)
1	坏	39	126	70	—	1/3	○	内面赤褐色(赤彩) 外面明褐色	砂粒を含む 精緻	胴部外面ロクロメ、内面回転ナデ、底部回転ヘラ切り 底部付近回転ヘラケズリ
2	坏	41	132	72	—	1/2	○	明褐色	石英細粒を含む 精緻	胴部内外面ロクロメ、底部回転ヘラ切り 底部付近回転ヘラケズリ
3	坏	—	—	60	—	1/6	○	内面　褐色 外面　暗褐色	岩石細粒を含む 粗	胴部外面横位のナデ 内面指頭による荒いナデ
4	甕	—	186	—	—	3/4	△	暗褐色	岩石細粒を含む 粗	器厚は胴中央部では薄く、底部を欠くが輪積みからはずれており、割れ口が焼成されており、意図的に切断され、甑的に使用されていた可能性もある。胴部外面横位のヘラケズリ

22号住居跡　(018)　(第138・137・140図、図版54・73)

検出状況　調査区の北東端にあたる台地の、北に面した標高29.9mの斜面の縁辺に位置する。22号住居跡は、17号住居跡の西に隣接している。

形状・規模　主軸の方位はW－5°－N、3.0m×3.0mの方形を呈する小形の住居跡である。

覆土　一部に木根による撹乱を受けているが、床面まではその影響は達していない。

2層以下の覆土が本住居跡廃絶に伴う堆積土と考えられる。

床面　地山の白色粘土層が露呈しており、貼床は認められない。

また、床面は東西方向は水平を保つが、南北方向を若干の傾斜が認められる。

カマド　南壁の中央部分に位置し、袖部は山砂と白色粘土の混合材により構築されている。

柱穴　検出されていない。

貯蔵穴　なし。

遺物出土状況　遺物は覆土の最下層である3層中に集中して検出された。

遺物　1・3は須恵器坏身で、1の底部は回転ヘラ切り後の一方向のナデ調整と底部付近の手持ちヘラケズリ調整、3の底部は回転ヘラ切りと底部付近の回転ヘラケズリ調整が観察される。

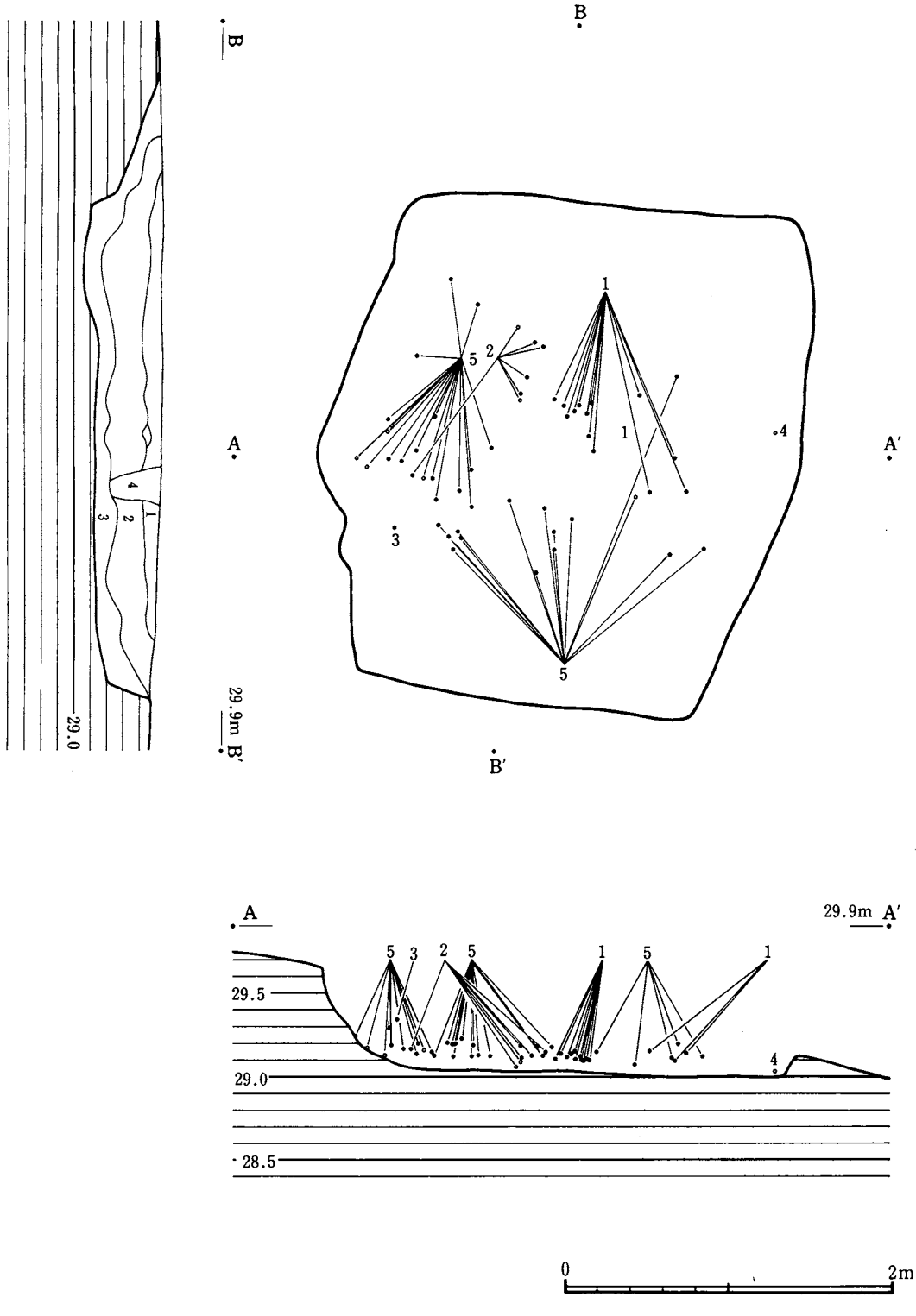
2・4はロクロ使用の土師器により近い杯、2の底部は回転ヘラ切りと底部付近の回転ヘラケズリ調整が観察され、4の底部は回転ヘラ切り後の一方向のナデ調整と底部付近の手持ちヘラケズリの調整が見られ、底部には『厨』の墨書が確認された。

これらの杯のうち、2・4が床面直上の出土である。

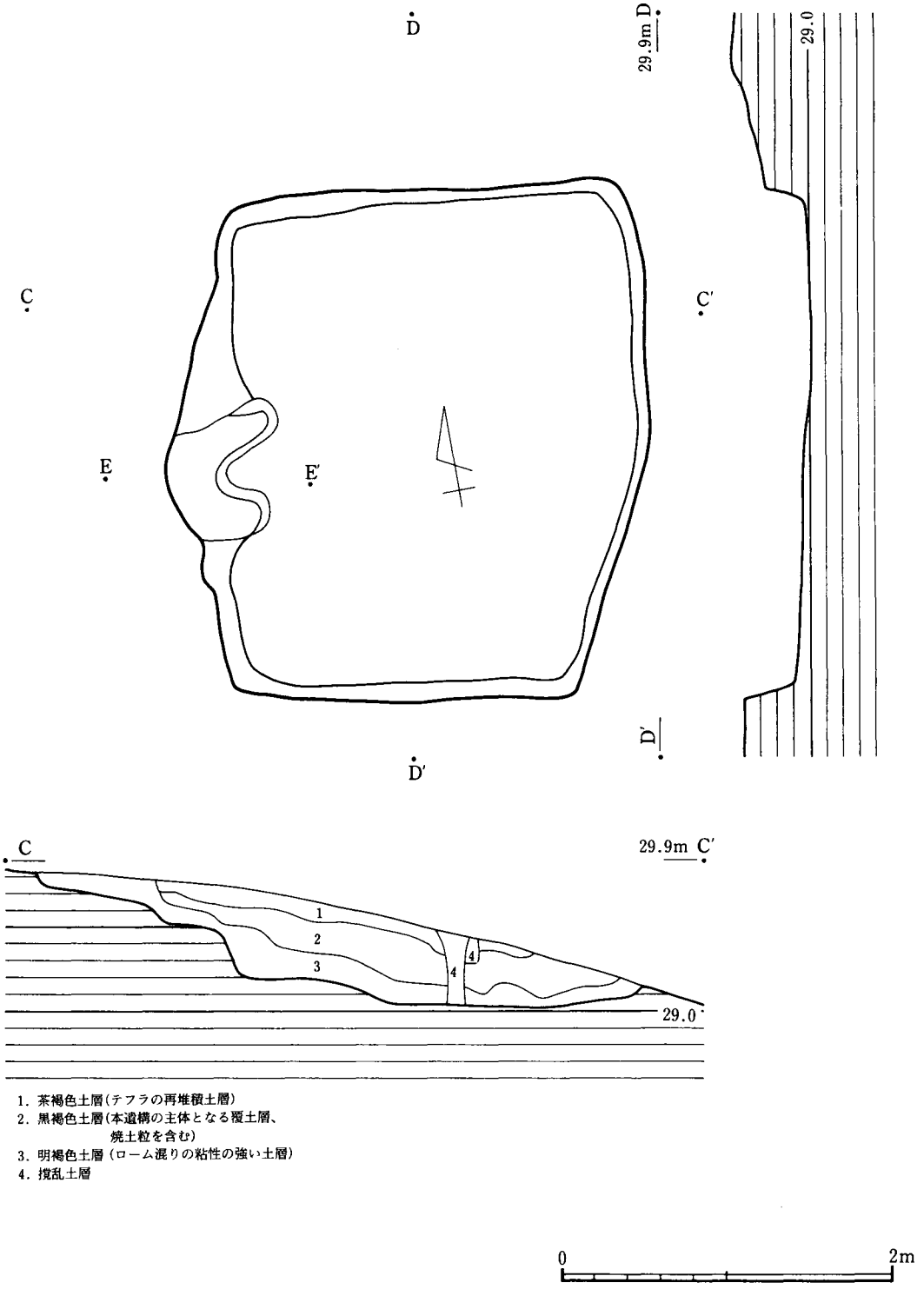
5は床面直上出土の長胴タイプの甕である。

焼成　○良好、△普通、×劣　**第35表**

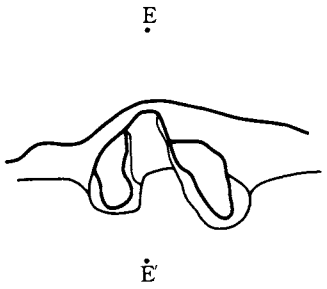
No.	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴(成形・調整)
1	須恵器坏身	42	130	72	—	ほぼ完形	×	黒褐色	砂粒を多量に含む	胴部回転ナデ、回転ヘラ切り後の一方向のナデ 底部付近手持ちヘラケズリ　内面は回転ナデ
2	坏	45	137	66	—	ほぼ完形	○	内面　黒褐色 外面　暗褐色	砂粒を多量に含む	胴部回転ナデ　底部は回転ヘラ切り 底部回転ヘラケズリ　内面回転ナデ
3	須恵器坏身	39	122	63	—	完形	×	黒褐色	大粒の岩石粒を含む 粗	胴部回転ナデ　底部は回転ヘラ切り 底部付近回転ヘラケズリ
4	坏	41	126	67	—	完形	○	内面　暗褐色 外面　黒褐色	長粒及び砂粒を含む	胴部回転ナデ　内面は回転ナデ　底部回転ヘラ切り後の一方向のナデ 底部付近手持ちヘラケズリ　胴部外面に木質の付着物あり
5	甕	326	192	66	—	1/5	○	内面　赤褐色 外面　暗褐色	砂粒を多量に含む 粗	口縁部は『く』の字状に屈曲する。 胴部外面縦位のヘラケズ　内面ナデ。



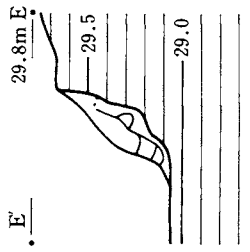
第138図　22号住居跡遺物出土状況図



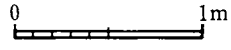
第139図　22号住居跡遺構図

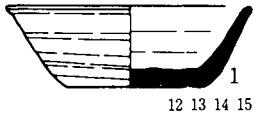


22号住居跡カマド実測図

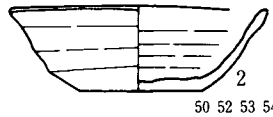


1. 暗褐色土層(山砂を主体とする、カマド天井部崩落土層)
2. 暗褐色土層(カーボンを多量に含む)
3. 炭化物層(カマドの煙道部分)
4. 黄褐色土層(カマドの熱で表面を焼かれた山砂層)

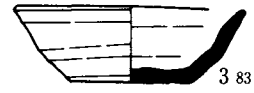


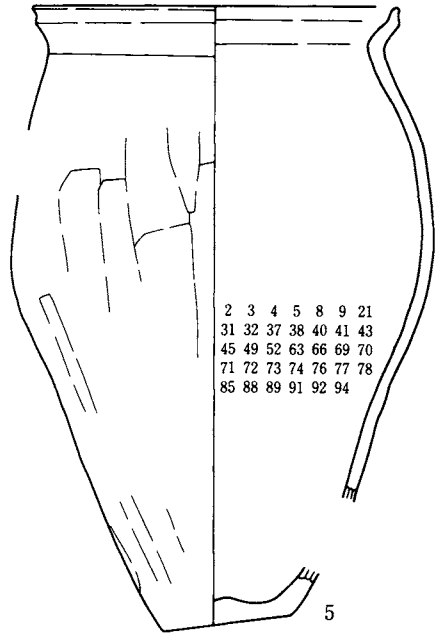


12 13 14 15 16
17 20 26 28 29 51

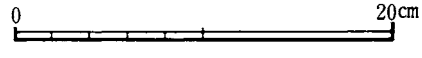


50 52 53 54
55 74 75

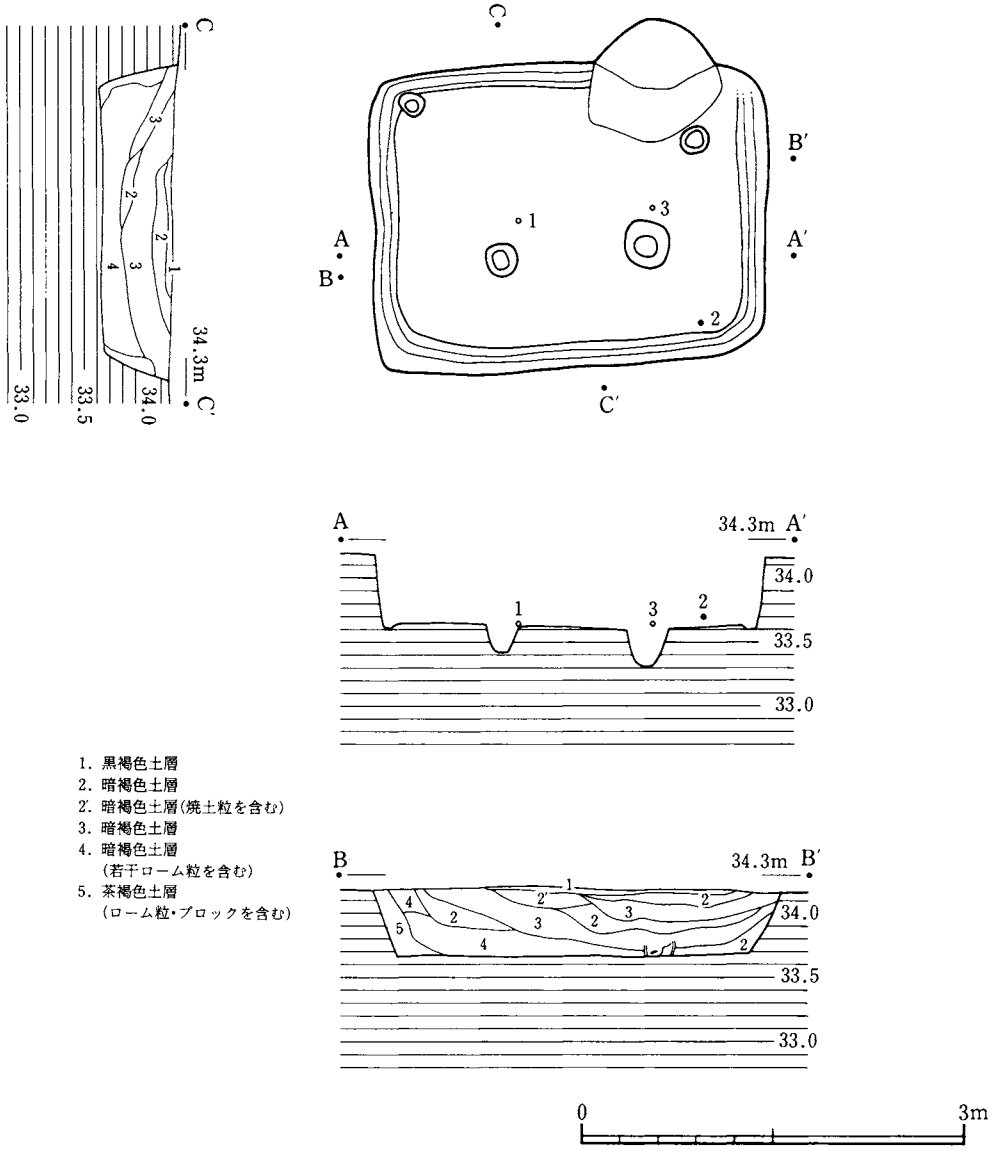




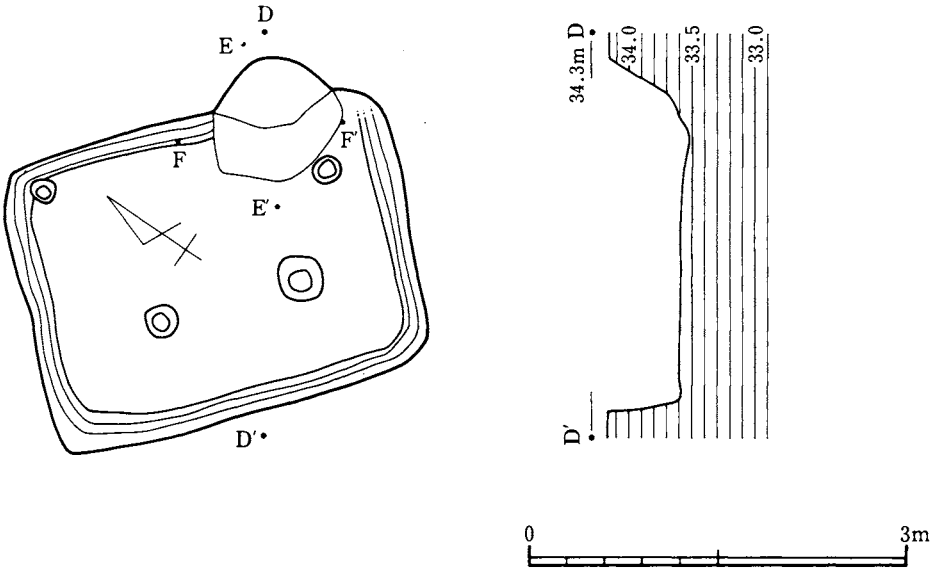
22号住居跡遺物実測図



第140図　22号住居跡カマド、遺物実測図



第141図　23号住居跡遺物出土状況図



第142図　23号住居跡遺構図

23号住居跡　(108)　(第141・142・143図、図版54・73)

検出状況　調査区の最北端の、標高34.3mの平坦な台地に位置する。

形状・規模　主軸の方位はE－43.5°－N、3.1m×2.7mの東西に長い長方形を呈する小形の住居跡である。

覆土　3層以上は埋没後の再堆積による土層と考えられる。

床面　ハードロームを堅くつき固めており、東西・南北の両方向とも水平を保つ。
また、壁溝は全周に近い状況で巡り、カマドの東脇で突如として終る。

カマド　北壁の中央より東寄りに位置し、袖部に若干の流出は見られるものの、遺存状態は良好である。

柱穴　4本タイプで、北壁沿いのものは両コーナーに接近して掘込まれるが、他の2本は竪穴の中央寄りに互いに近接して掘込まれている。

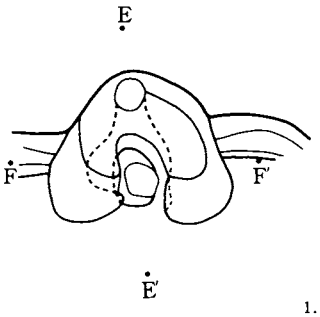
貯蔵穴　なし。

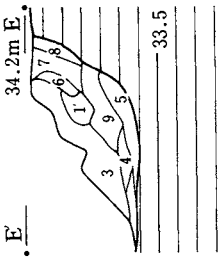
遺物出土状況　遺物はきわめて少量で、器種も乏しい。

遺物　1は須恵器杯身で、磨滅のため底部付近の調整は観察できない。
床面直上の出土である。

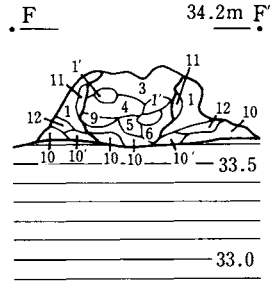
2は須恵器蓋であるが、かえりの有無は欠損のため確認できない。

3は口唇部に段を有する土師器甕、床面直上の出土である。

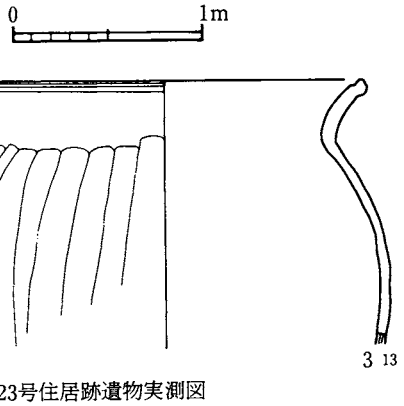




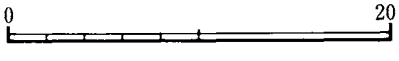
1. 山砂層
1'. 山砂ブロック
2. 暗褐色土層(山砂を若干含む)
3. 暗褐色土層(山砂を含む)
4. 暗褐色土層(山砂・炭化粒を若干含む)
5. 明褐色土層(ローム粒・焼土を含む)
6. 暗褐色土層(焼土ブロック・山砂を含む煙道の壁)
7. 暗褐色土層(若干炭化粒・山砂を含む煙道部)
8. 暗褐色土層(山砂・灰を若干含み、紫紅色の焼土ブロックも含む)
10. 暗褐色土層(ソフトロームを主体とする)
10'. ローム土層(ロームを主体とし、若干炭化物を含む)
11. 明褐色土層(焼土ブロックを主体とするカマドの内壁)
12. 暗褐色土層(山砂・粘土を含み、暗色を増す)



23号住居跡カマド実測図



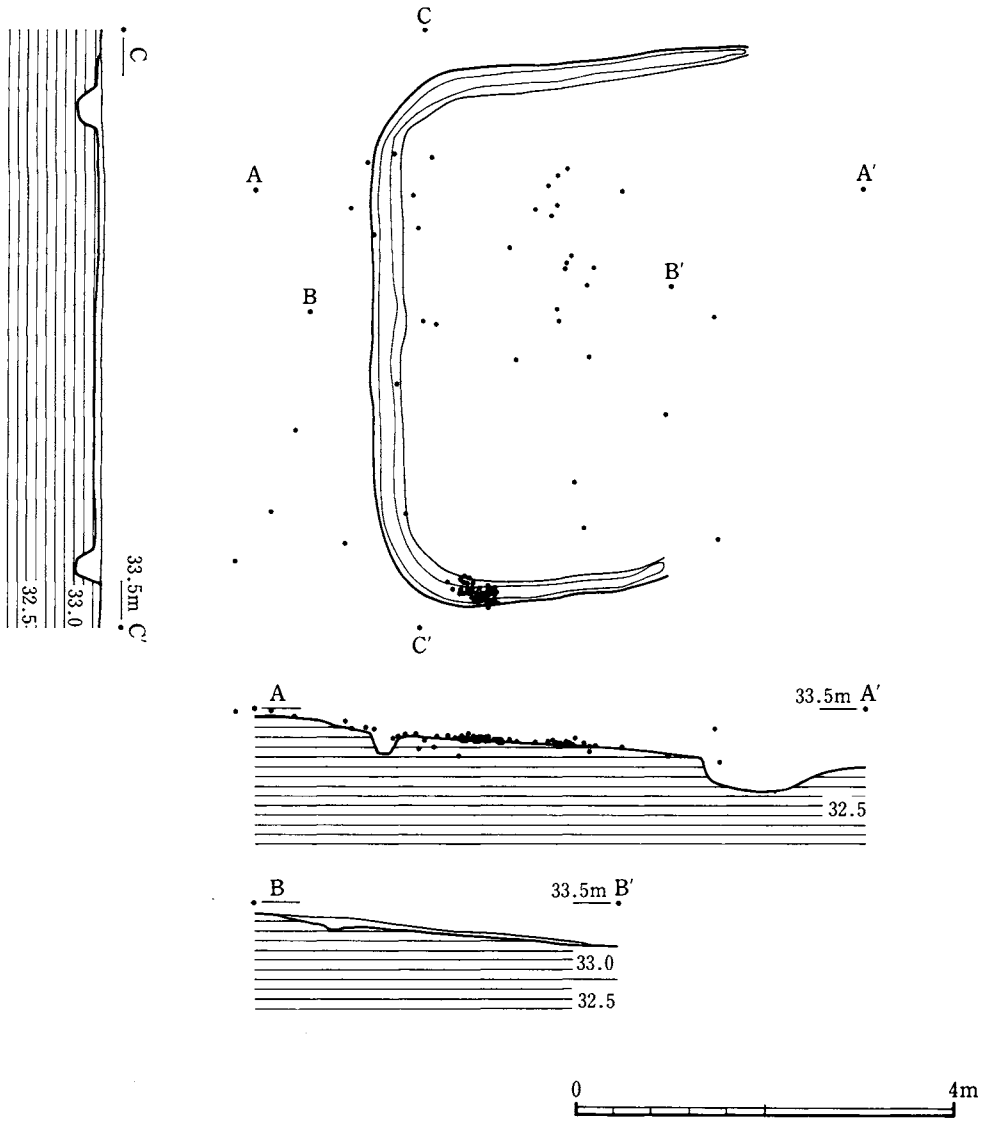
23号住居跡遺物実測図



第143図　23号住居跡カマド、遺物実測図

焼成　○良好、△普通、×劣　**第36表**

No.	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴(成形・調整)
1	須恵器坏身									
2	須恵器坏蓋	—	—	—	—					
3	甕	—	210	—	233	½	○	内面　茶褐色 外面　暗褐色	石英、長石の細粒を含む	口唇部内外面ヨコナデ　口縁部には段をもつ 胴部縦位のヘラケズリ



第144図　24号住居跡遺物出土状況図

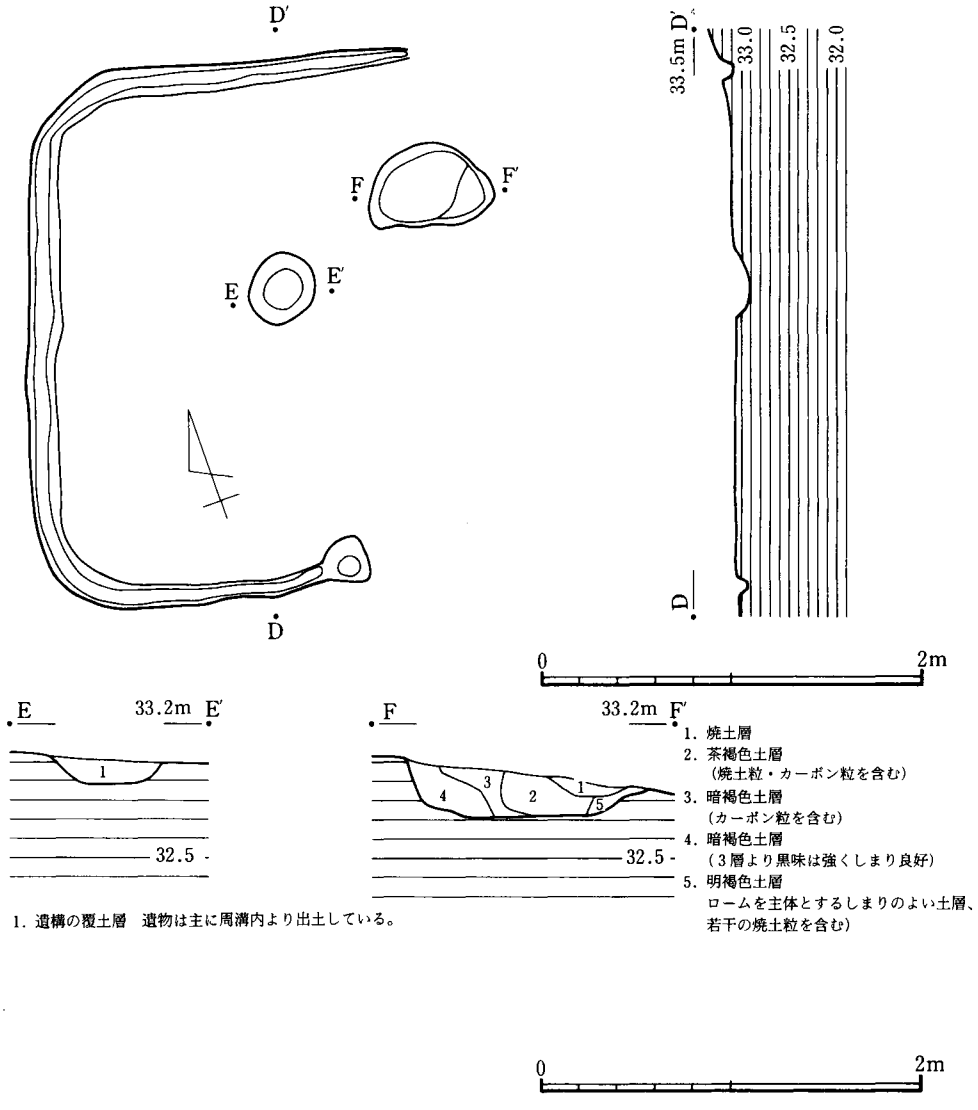
24号住居跡　(010)　(第144・145図、図版55)

検出状況　調査区の北東端にあたる台地の、標高33.2mの北向き斜面に位置する。

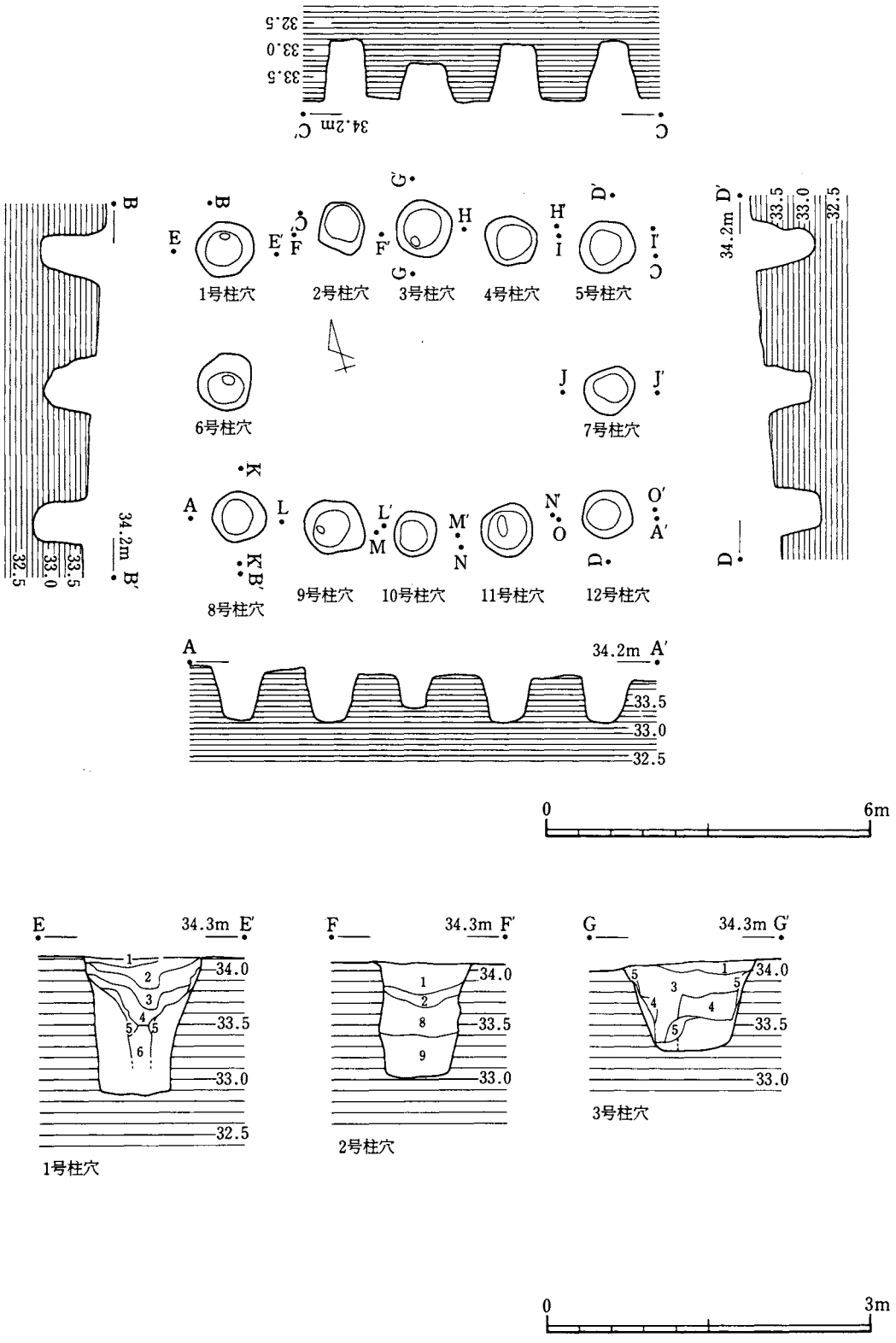
本住居跡は溝と土坑状の掘込み部分のみの検出であり、規模その他の判定は困難である。

遺構内、おもに溝の中であるが、出土の遺物はすべて縄文土器であり、溝の一端はピット状の掘込みで停止している。

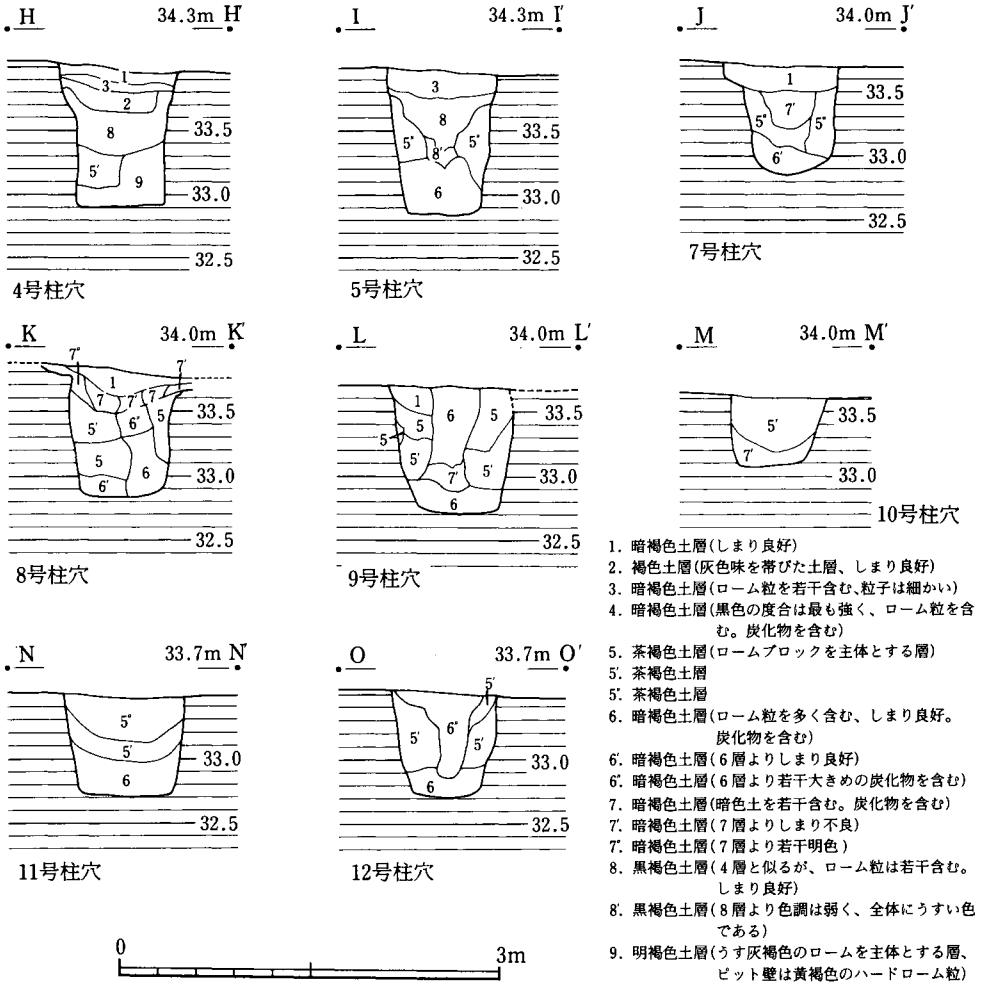
時期の判断を可能とする根拠がきわめて弱いため、住居跡の残欠として記録するに留めたい。



第145図　24号住居跡遺構図



第146図　1号掘立柱跡柱列配置図



第147図　1号掘立柱跡柱穴実測図

1号掘立柱跡　(105)　(第152・153図、図版55)

腰巻遺跡ではただ1棟のみの検出である。

2間×4間で長軸をW－18°－Nにとり、調査区の北東端にあたる台地の、標高34.2mの平坦地に位置している。

眼下には9号住居跡や特殊遺構の含まれる谷津を見下ろす地勢を占める。

柱穴は、柱列となるエレベーション図A－A'及びC－C'の観察から、相対する3号柱穴と10号柱穴の掘込みが前後する柱穴よりも浅くなっていることが確認された。

1号掘立柱跡は本来、2間×3間として設計され、3号及び10号柱穴は補助的ないしは上屋構造物のつくりに影響された掘方を示しているものと考えられる。

また、1号柱穴・3号柱穴・5号柱穴・9号柱穴・12号柱穴には柱痕状の断面が観察された。

柱　穴　　第37表

柱穴番号	開口部(m)		底径(m)		深さ(m)	柱穴番号	開口部(m)		底部(m)		深さ(m)
	最大	最小	最大	最小			最大	最小	最大	最小	
1号柱穴	1.04	0.48	0.84	0.45	1.24	2号柱穴	1.00	0.72	0.84	0.64	1.06
3号柱穴	1.08	0.80	1.04	0.68	0.76	4号柱穴	1.00	0.72	0.92	0.68	1.12
5号柱穴	1.04	0.68	0.96	0.56	1.14	6号柱穴	1.04	0.68	0.96	0.52	0.90
7号柱穴	0.92	0.64	0.88	0.52	0.86	8号柱穴	1.00	0.64	0.96	0.36	1.00
9号柱穴	1.20	0.72	1.00	0.64	0.98	10号柱穴	0.84	0.56	0.80	0.48	0.54
11号柱穴	1.00	0.80	0.96	0.72	0.76	12号柱穴	0.92	0.64	0.91	0.56	0.82

特殊遺構　(106)　(第148・149・150・151・152・153・図、図版74・75・76)

検出状況　調査区の北東寄りの、南東に開く一つ目の谷津に面した、標高26.2mの北向きの急斜面に位置する。

本遺構は、平面形及び掘込み等の通常の遺構的性格には欠けるが、出土遺物のきわめて特殊な状況から特殊遺構と仮称しておきたい。

遺物出土状況　急斜面に無数の須恵器片が折り重なるように堆積して検出され、一箇所に土器を捨てたとするにはあまりにも整然と、しかも土器片の一片一片が実に細かく打ち砕かれて堆積している状況が観察された。

整理作業中に接合、復元された遺物の表面には、石またはそれに類する硬い物質で打撃を加えた剝離と蜘蛛巣状の破損の痕跡が明瞭に観察された。

遺物　1は須恵器坏身、口縁部は短く内反する。

2は土師器のミニチュア土器、器表面には繊細なヘラケズリの痕跡を残している。

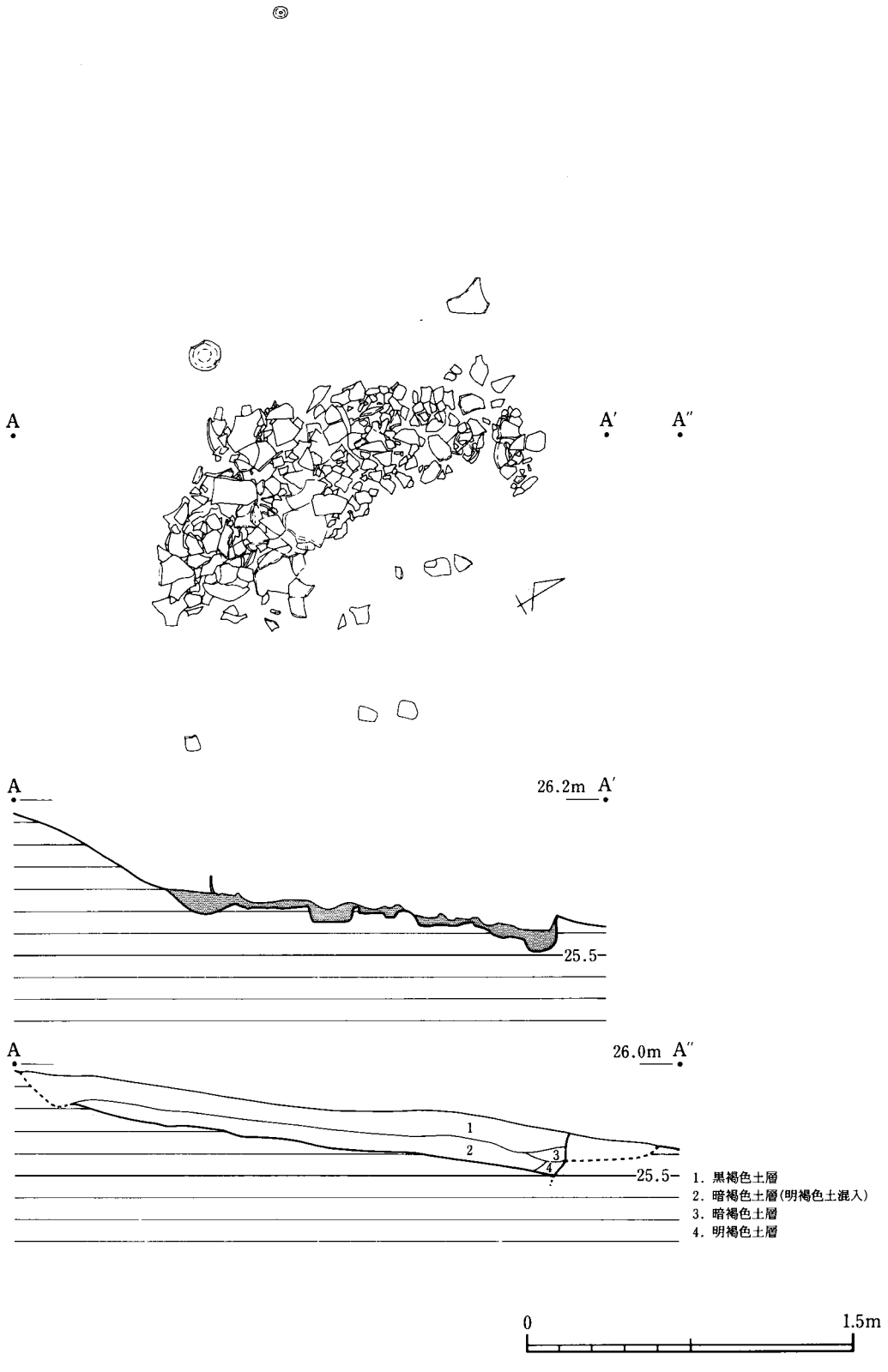
3は高坏の脚部、縦位のヘラケズリの痕跡も磨滅のため微かなものとなっている。
また、坏部は検出されていないが、坏部との接合は貼り合わせによるものと考えられ、腰巻遺跡の他の住居跡出土の高坏の接合方法とは明らかに異なるタイプの高坏である。

4は土師器の小形甕、2・4は地山面に正立して検出された。

5は須恵器甕、内面は丁寧なナデ調整と外面には平行タタキ目を有し、胴部肩口には1条の沈線を巡らせ、この部分より上方と口縁部の一部には緑色の自然釉が付着している。

6・7は灰白色の、表面にタタキ目のある横瓶。
6は内面は丁寧なナデ調整を有し、7は内面に円心円文が見られ、製作時における裏面からの当て板の痕跡を残すものである。

8は須恵器の大甕で、口縁には櫛掻き線文を4段に施文し、胴部表面には平行タタキ目、内面



第148図　特殊遺構遺物出土状況図

には当て板による円心円文を有する。

9は須恵器の大甕で、底部は丸味を持った尖り底である。

口縁部には2段の櫛条工具の先端による平行刺突文を持ち、胴部は張りの強い形態となっている。

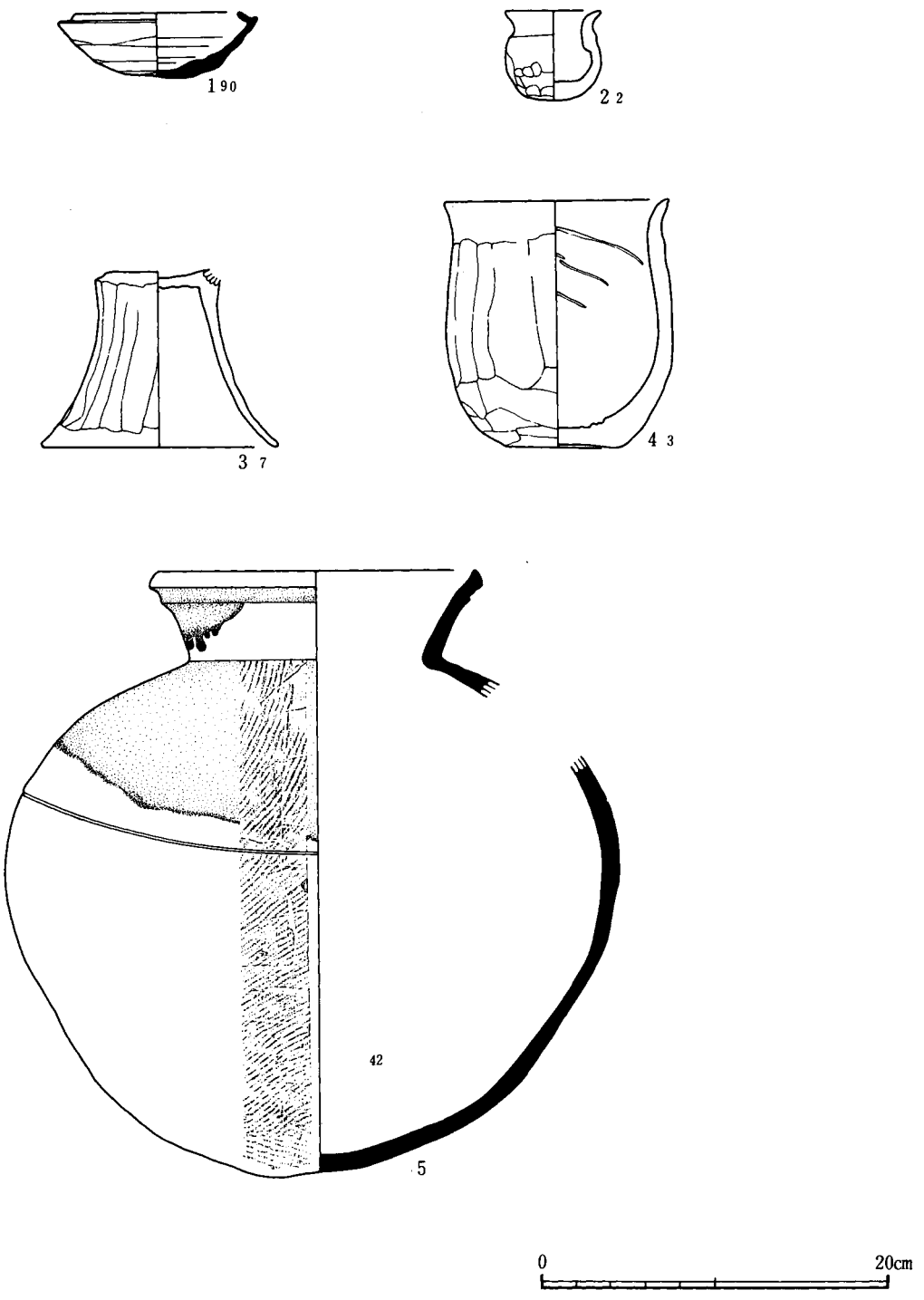
器表面は平行タタキ目を有し、その上に口縁部、肩口を中心に緑色の自然釉が付着している。

内面は丁寧にナデの調整を受けている。

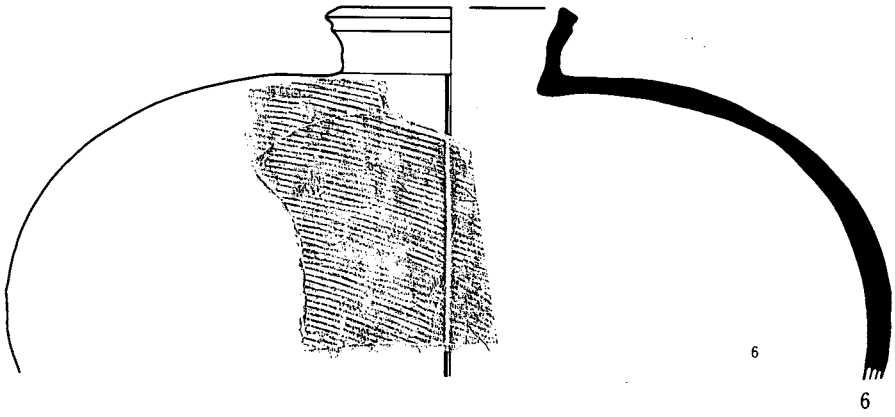
また、9の口縁部の平行刺突文は成田ニュータウン公津原古墳群H－40号墳に類似の須恵器甕の出土が報告されている。

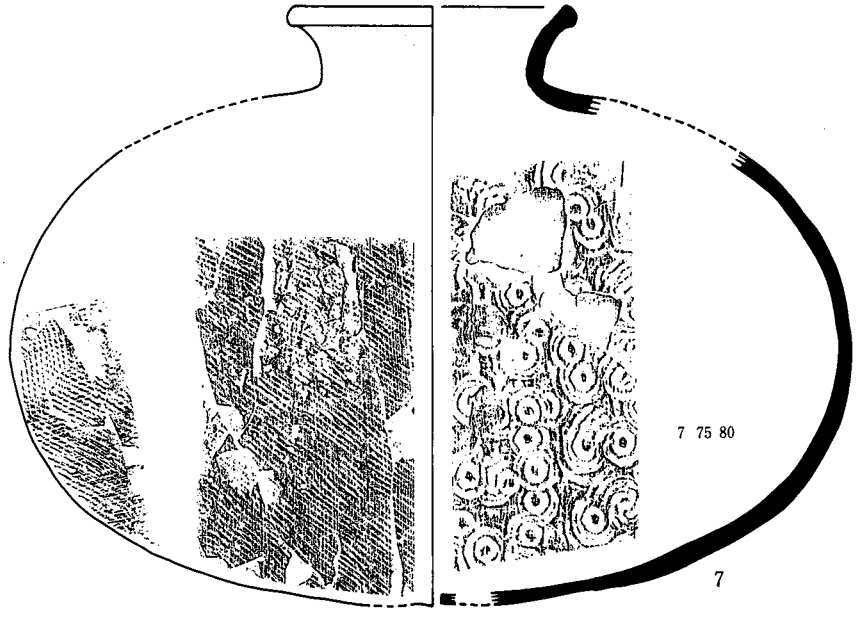
焼成　○良好、△普通、×劣　**第38表**

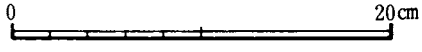
No.	器種	法量（mm）				遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴（成形・調整）
		器高	口縁径	底部径	胴部径					
1	須恵器坏身	38	94	—	116	ほぼ完形	○	灰白色	素地はキメのこまかいよく精練されたもの	口縁部は胴部から大きく『く』の字状に屈曲する。 胴部内外面　回転ロクロメ
2	ミニチュア	52	56	—	56	完形	○	茶褐色	滑石様の細粒と砂粒を含む	口縁部内外面ヨコナデ　内面は指頭によるナデ 胴部外面にはこまかく繊細なヘラケズリ
3	高坏	—	—	—	—	½（脚部のみ）	○	茶褐色	砂粒及び粘土粒を含む	脚部外面縦位のヘラケズリ　内面丁寧なナデ 坏部と脚部の境はサシ込み後の指頭によるオサエ 器面全体は磨滅が著しい。
4	小型甕	141	131	69	132	ほぼ完形	○	暗褐色	砂粒及び大粒の岩石粒を含む	口縁は胴部の延長のまま立ち上がる。口縁部内外面ヨコナデ 胴部上半縦位のヘラケズリ　下半横位のヘラケズリ 内面はヘラ状工具による荒いナデ 底部には工具の先端を使った木葉痕あり
5	須恵器甕	365	184	—	359	ほぼ完形	○	灰白色	石英、滑石の細粒を含む	口縁部には2段の稜をもつ、胴部は球状で丸底を呈する。 口縁部内外面回転ナデ 胴部外面並行タタキメ　内面はナデ 口縁部から胴上半部にかけて緑色自然釉
6	須恵器横瓶	—	120	—	474	⅓	○	灰白色	石英、滑石の細粒を含む	口縁部立ち上がりは短かめで口唇には2段の稜をもつ 胴部は一部にタタキメを残すが横突部分ではナデ 内面は指頭によるオサエの痕跡をのこす 中央にははり合せによるラインがみられる。
7	須恵器横瓶	(312)	145	—	450	½	○	灰褐色	素地は精練されたものを使用	口縁部立ち上がりは短かめで口唇は丸味をもつ 中央ではり合せ 胴部にはタタキメ、内面には同円心状のオサエ痕
8	須恵器甕	—	327	—	490	⅙	○	灰黒色	長石、滑石粒を含む 砂粒を多量に含む	口唇部に凹線の切れ込みをもち口縁部には4段の並行櫛目文による文様帯をもつ、口縁部内面回転ナデ 胴部外面並行タタキメ　内面同心円様のオサエ痕
9	須恵器甕	616	296	—	541	ほぼ完形	○	灰白色	素地はキメの細かいよく精練されたものを使用	口唇部は若干波うつものの全体としては胴部が球状で丸底でバランスのよい器形を呈する。 口縁部には2条の沈線によって区画されて2段の施文帯をもち それぞれ中を櫛状工具の先端を使った刺突文で充塡している 口縁部内面回転ナデ　胴部外面斜方向の並行タタキメ　内面はナデ 全体に緑色の自然釉



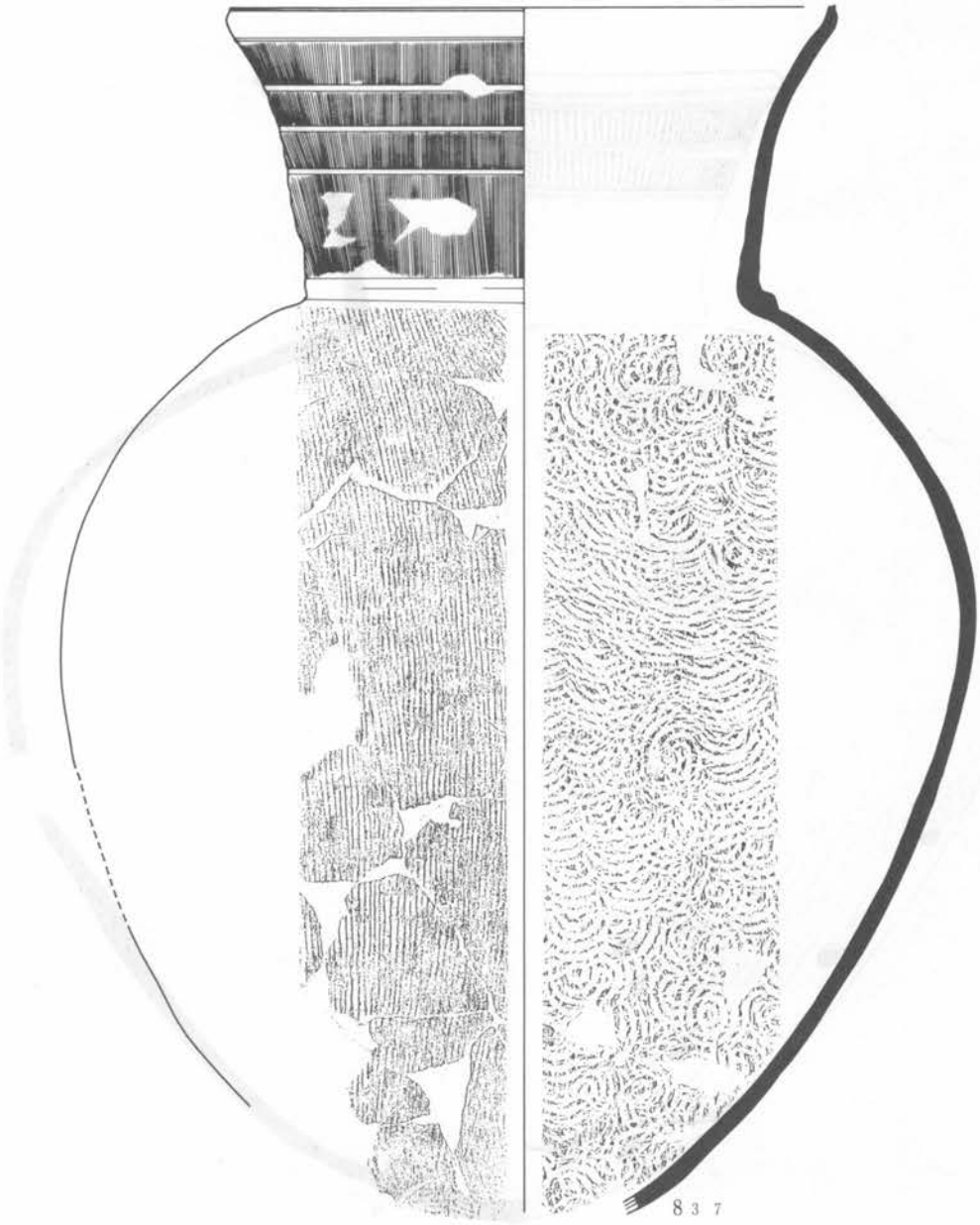
第149図　特殊遺構遺物実測図(1)



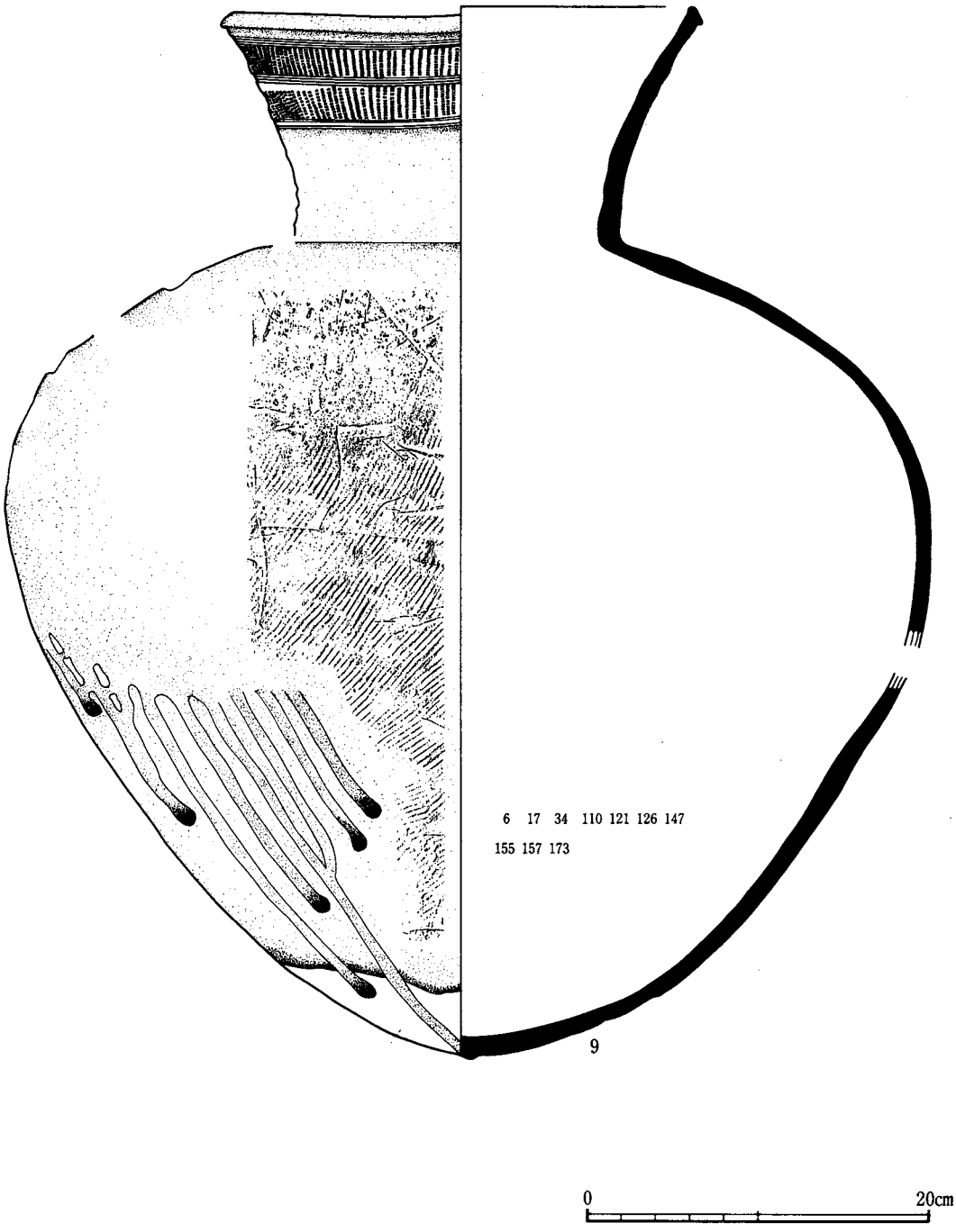




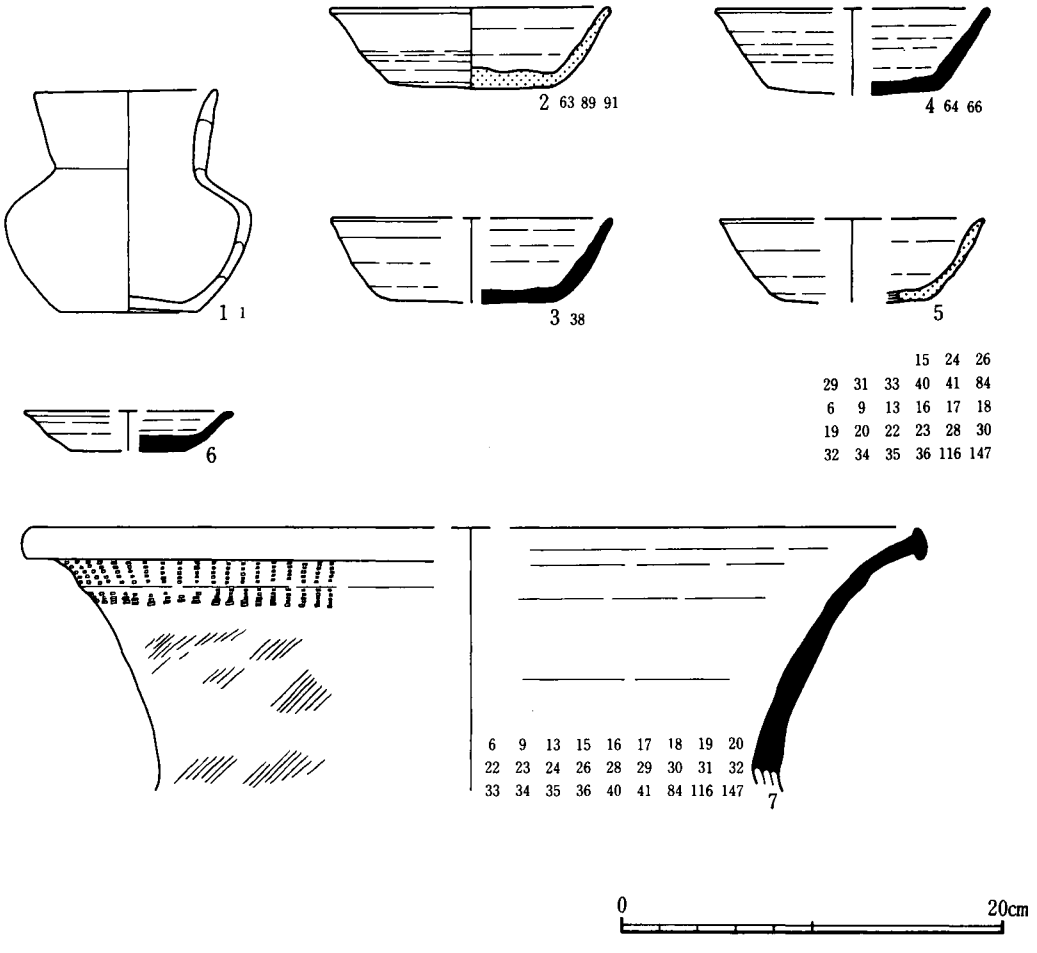
第150図　特殊遺構遺物実測図(2)



第151図　特殊遺構遺物実測図(3)



第152図　特殊遺構遺物実測図(4)



第153図　一括遺物

一括遺物　（第153図、図版77）

1は、調査区の最南端の台地の、東に傾斜する斜面の先端付近に倒立した状態で検出された土師器の広口壺。

2～7は昭和58年度に向山谷津遺跡（212－026）として調査された区域の5号溝より出土した一括遺物である。

2は土師質の須恵器坏身で、底部は切り離し後のナデ調整が見られる。

3・4は須恵器坏身で、3の底部は回転ヘラ切り後の4方向への手持ちヘラナデ調整、4の底部は回転ヘラ切りがそれぞれ観察された。

5は土師質の須恵器坏身で、底部は回転糸切り後のナデ調整が見られる。

6は須恵器坏身で、底部は回転糸切りが観察された。

7は須恵器の大甕、口縁部には櫛条工具の先端による平行刺突文を有する。

一括遺物　　焼成　○良好、△普通、×劣　**第39表**

No.	器種	法量（mm）				遺存度	焼成	色調	胎土	諸特徴（成形・調整）
		器高	口縁径	底部径	胴部径					
1	土師器広口短頸壺	126	97	72	150	完形	○	外面　明褐色 内面　黒褐色	砂粒、岩石粒を含む	内外面丁寧なナデ 底部ヘラ状工具による丁寧なナデ
2	土師質須恵器坏身	42	150	81	—	完形	○	外面　茶褐色 内面　灰黒色	砂粒、岩石細粒を含む	ロクロ成形　回転ナデ 底部付近回転ヘラケズリ　底部切り離し後のナデ
3	須恵器坏身	45	144	90	—	½	○	灰白色	大粒の石英、長石粒を含む	ロクロ成形　回転ナデ 底部付近手持ちヘラケズリ　底部回転ヘラ切り後の四方向への手持ヘラナデ
4	須恵器坏身	44	150	86	—	⅓	△	灰白色	雲母、石英細粒を含む	ロクロ成形　回転ナデ 底部回転ヘラ切り
5	土師質須恵器坏身	43	140	74	—	⅓	○	黒褐色	砂粒を含むがキメは細かい	ロクロ成形　回転ナデ 底部回転糸切り後のナデ
6	須恵器坏身	20	110	60	—	¼	○	灰褐色	精練されたキメの細かい素地を使用	ロクロ成形　底部回転糸切り 口唇部を中心に緑色の自然釉
7	須恵器大甕	43	114	—	—	口縁部の⅔	○	灰白色	精練されたキメの細かい素地を使用	ロクロ成形 口唇部直下には櫛状工具による2段の連続刺突帯がある。

周溝状遺構

腰巻遺跡では、方形のもの2基、円形のもの3基の合計5基の周溝状遺構が検出されている。いづれも、伴出する遺物に乏しく時期は確定できない。

1号方形周溝状遺構　(078)　(第154図、図版78)

調査区の北東端にあたる台地の、標高33.9mの平坦部分に位置する。

規模は3.0m×3.0mの方形を呈し、溝は全周し、最大幅は0.45mであり、出土遺物は検出されていない。

2号方形周溝状遺構　(081)　(第155図、図版78)

調査区のほぼ中央の台地の、標高34.5mの平坦部分に位置する。

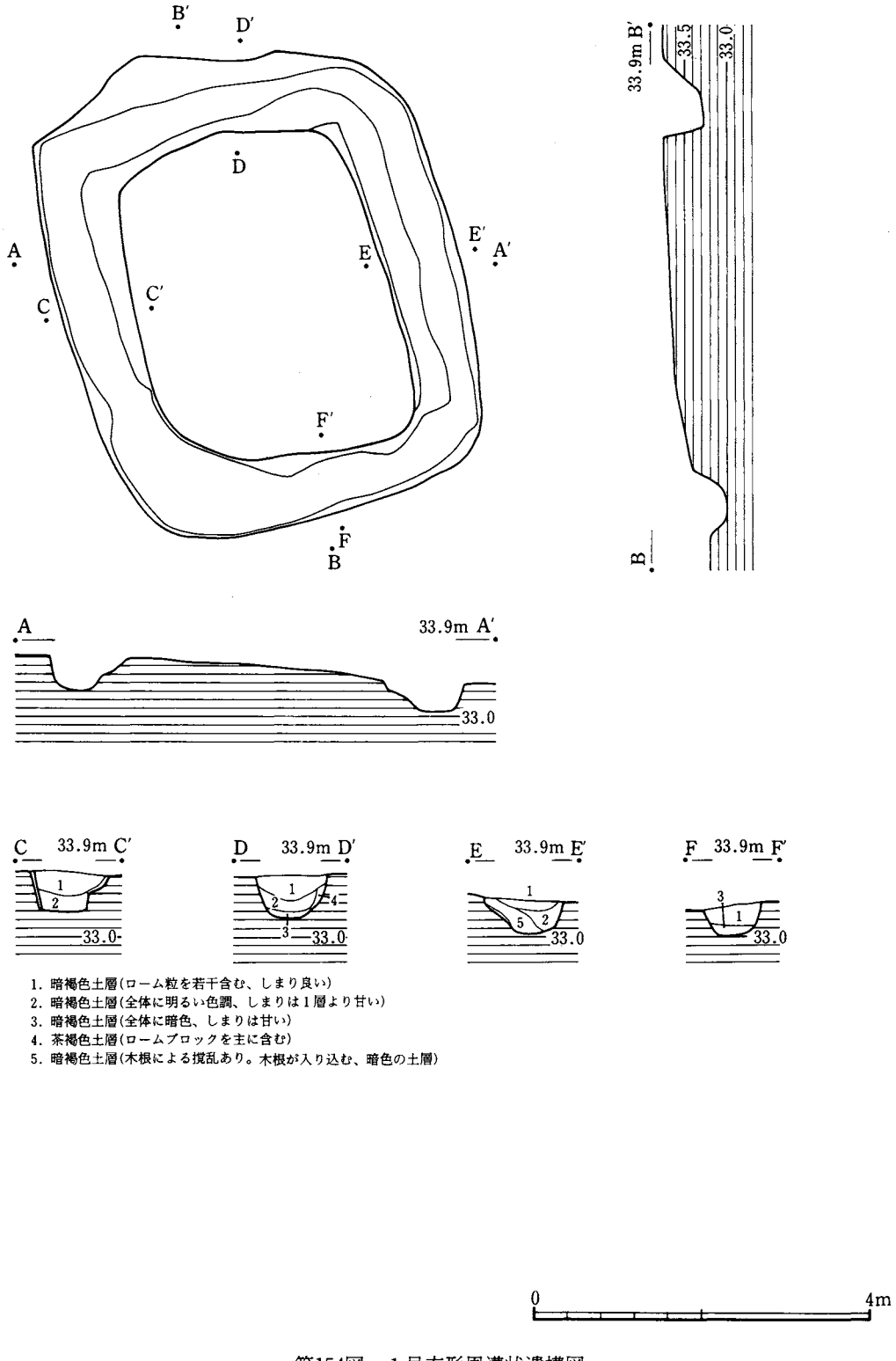
規模は5.8m×4.8mで、溝は全周せず南西コーナー部分を中心に¼程切れている。

溝の最大幅は0.6mである。

1号円形周溝状遺構　(013)　(第156図、図版79)

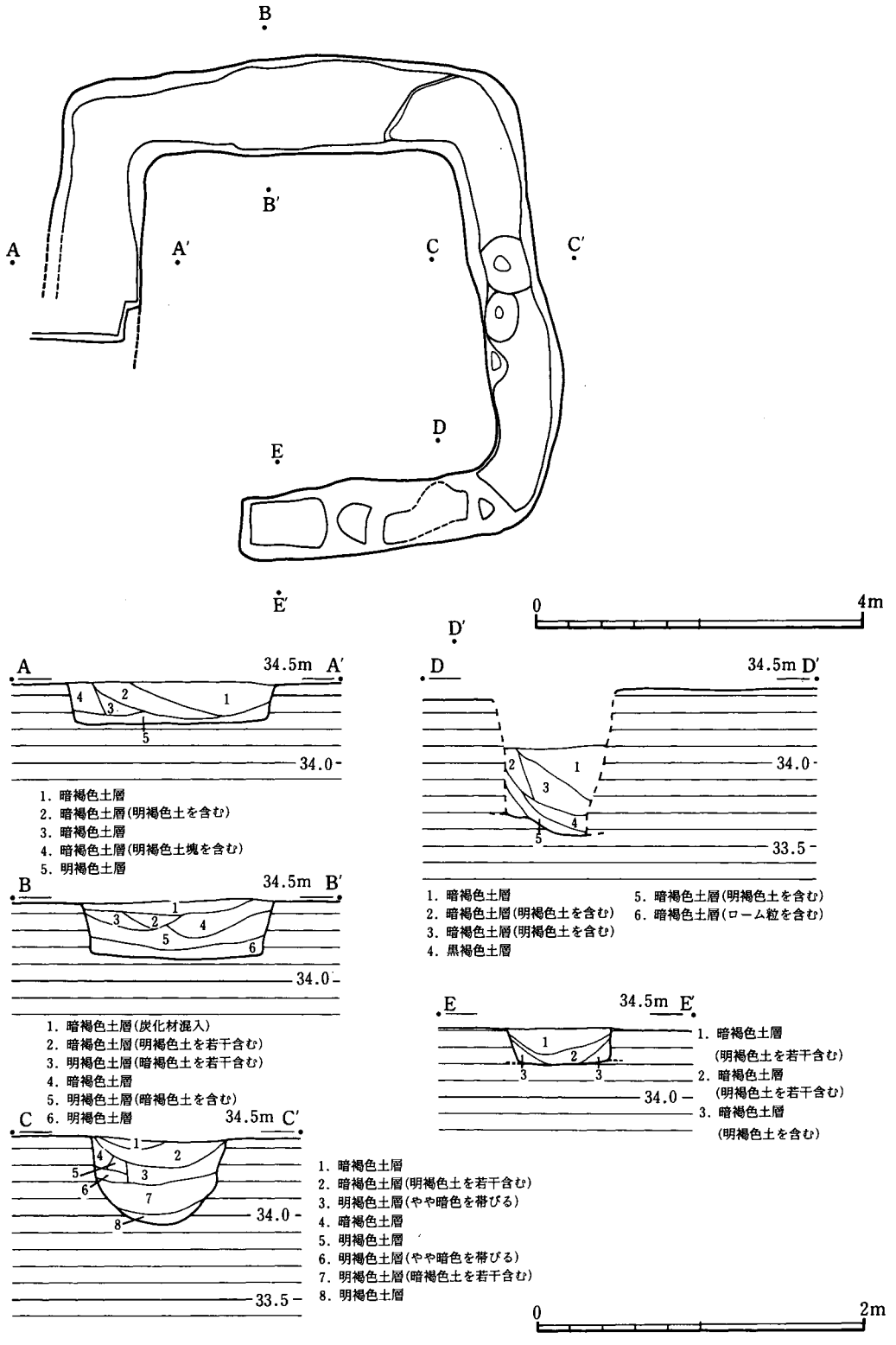
調査区の北東端にあたる台地の、標高34.7mの平坦部分に位置する。

規模は3.9m×3.5m、周溝は全周し、最大幅は0.4mであり、出土遺物は検出されていない。

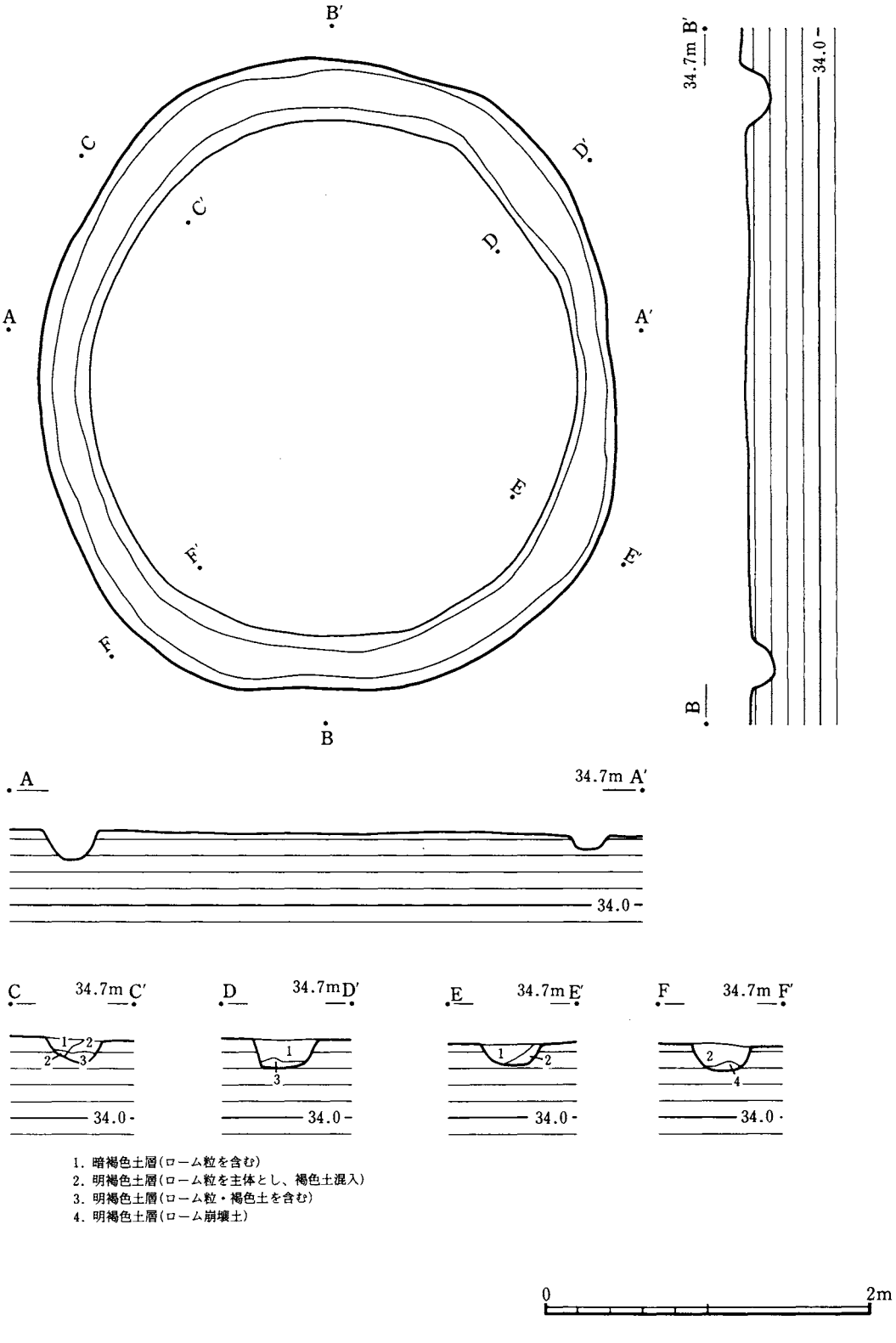


1. 暗褐色土層(ローム粒を若干含む、しまり良い)
2. 暗褐色土層(全体に明るい色調、しまりは1層より甘い)
3. 暗褐色土層(全体に暗色、しまりは甘い)
4. 茶褐色土層(ロームブロックを主に含む)
5. 暗褐色土層(木根による撹乱あり。木根が入り込む、暗色の土層)

第154図　1号方形周溝状遺構図

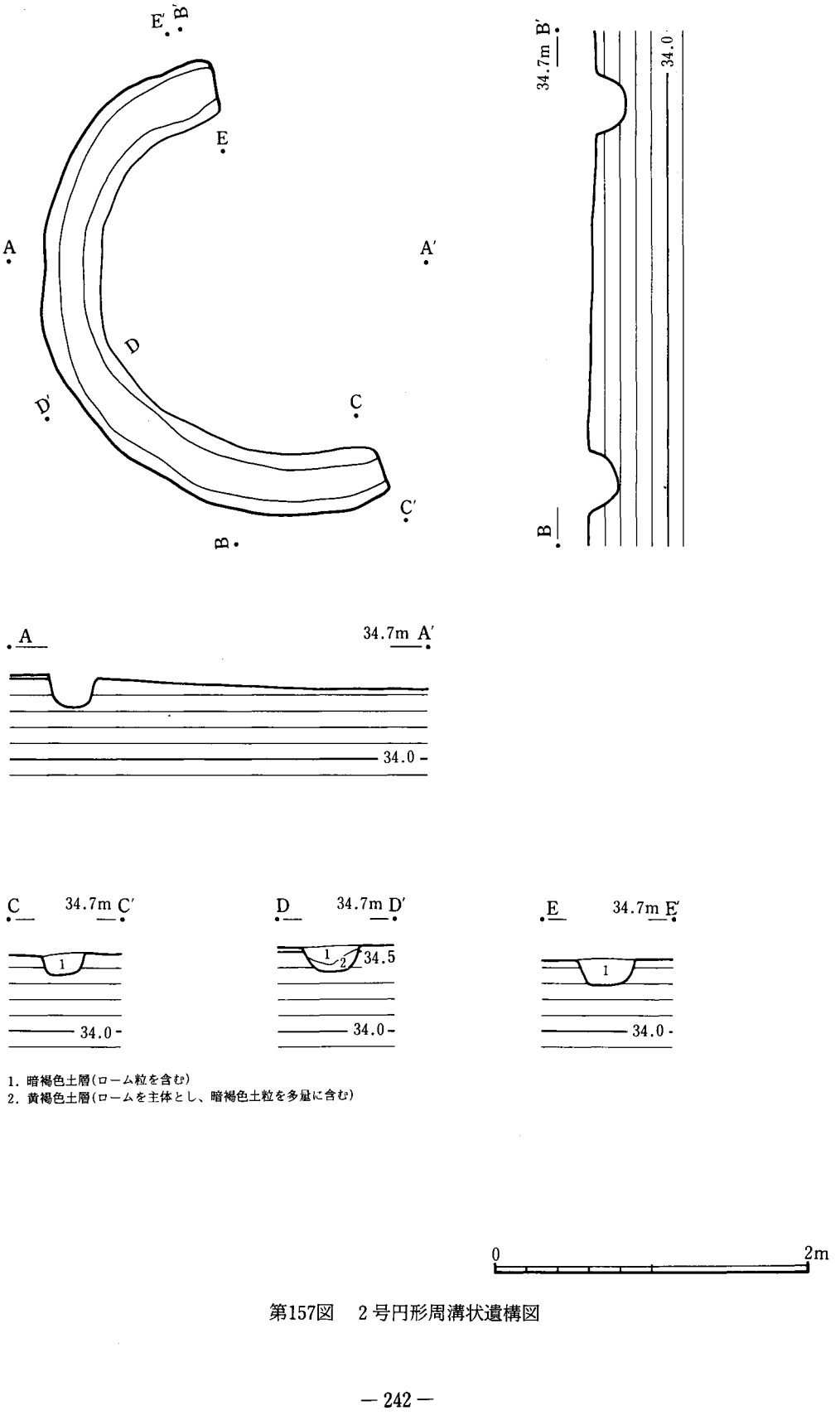


第155図　2号方形周溝状遺構図



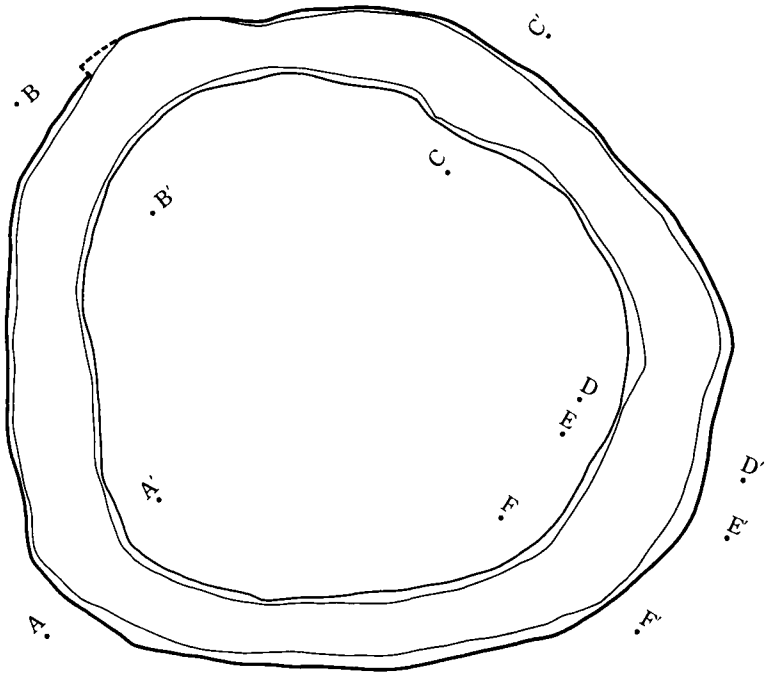
1. 暗褐色土層(ローム粒を含む)
2. 明褐色土層(ローム粒を主体とし、褐色土混入)
3. 明褐色土層(ローム粒・褐色土を含む)
4. 明褐色土層(ローム崩壊土)

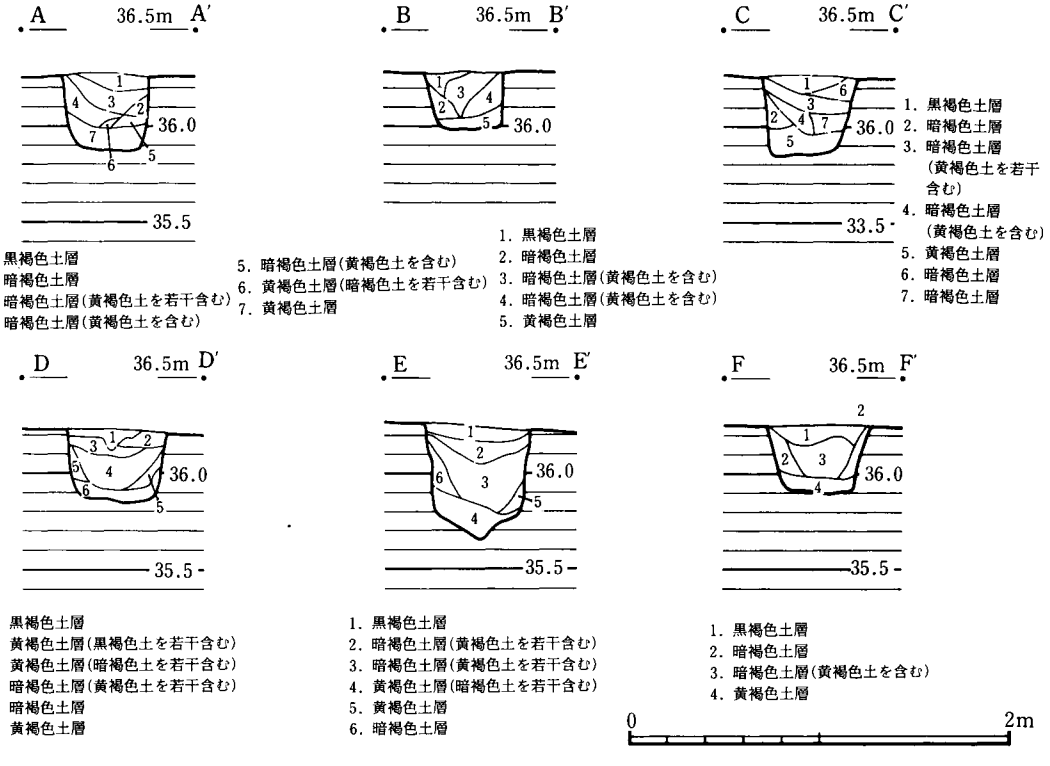
第156図　1号円形周溝状遺構図



1. 暗褐色土層(ローム粒を含む)
2. 黄褐色土層(ロームを主体とし、暗褐色土粒を多量に含む)

第157図　2号円形周溝状遺構図





第158図　3号円形周溝状遺構図

2号円形周溝状遺構　(014)　(第157図、図版79)

調査区の北東端にあたる台地の、標高34.7mの平坦部分に位置する。

1号円形周溝状遺構とは隣接する。

周溝は半周程で消滅し、出土遺物も検出されていない。

3号円形周溝状遺構　(084)　(第158図、図版80)

調査区の中央の台地の、標高36.5mの平坦部分に位置する。

規模は3.8m×3.5m、溝の最大幅は0.6mであり、周溝は全周するが出土遺物は検出されていない。

炭窯　(第159・160・161・162・163・164・165・166・167・168図、図版80・81)

炭窯は2つのタイプに分類される。

方形の平面形態を示し、煙道・焚口等の施設の有無については明確でないものと、瓢形で円形の焼成部と円形の掘込み部から構成され、焼成部の先端に煙道部を設定するタイプのものである。

前者は近世のものとされるが資料に乏しく定かではない。

また、後者は現代のものであり現在も使用されているタイプの炭窯である。

土坑状炭窯タイプ　(1号炭窯～50号炭窯)

各炭窯ともに、堆積物の観察によれば、壁ぎわに赤色の焼土が多量に検出されるほか、大量の屑炭が土層と交互に重なりを見せ、最上層には多量のロームが用いられており、このローム土層の下部が焼成を受けているのが特徴である。

このタイプの炭窯は、炭の材料となる燃料がある程度燃焼した時点でロームの被せ、蒸焼状態にするものと考えられる。

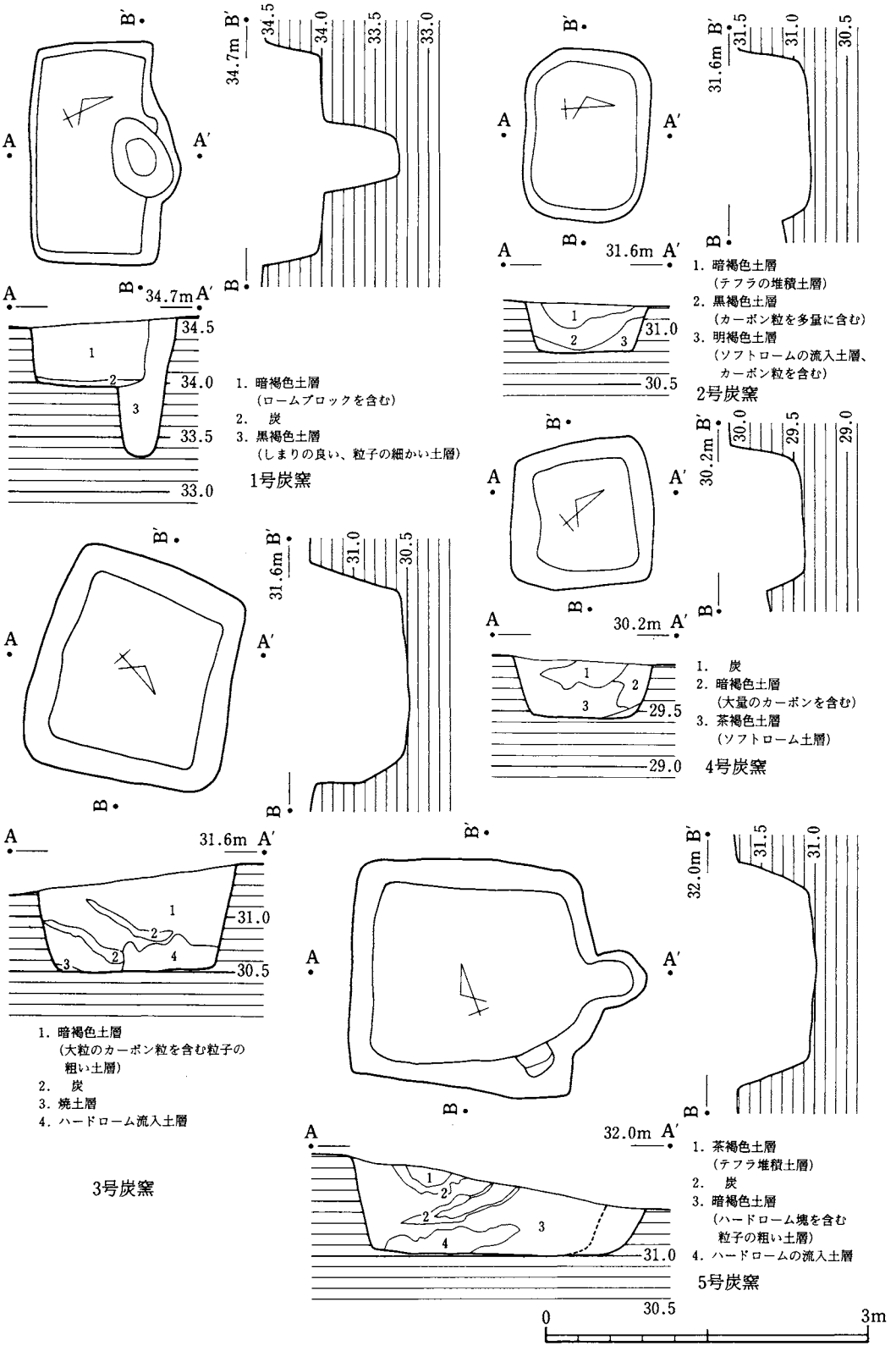
瓢形炭窯タイプ　(51号炭窯)

壁は天井部とともに白色粘土でドーム状に構築されるものと考えられる。

焚口には焼成部の直前、つまり瓢形のくびれ部に位置している。

1号窯跡　(104)　(第169図、図版82)

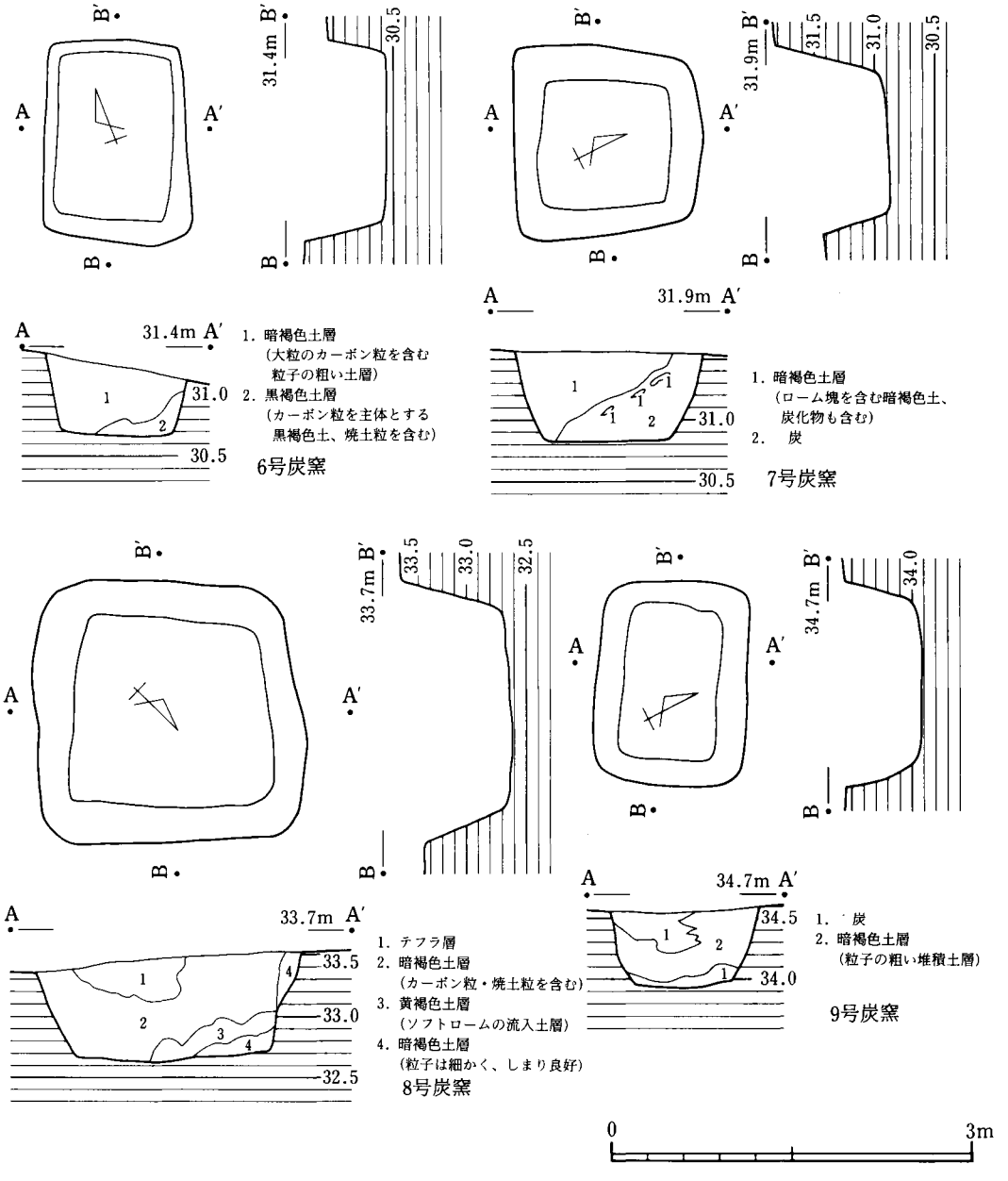
調査区の北東端にあたる台地の、東に張り出した斜面の先端に位置し、標高は煙突部分の掘込み面で24.5mである。(255頁につづく)



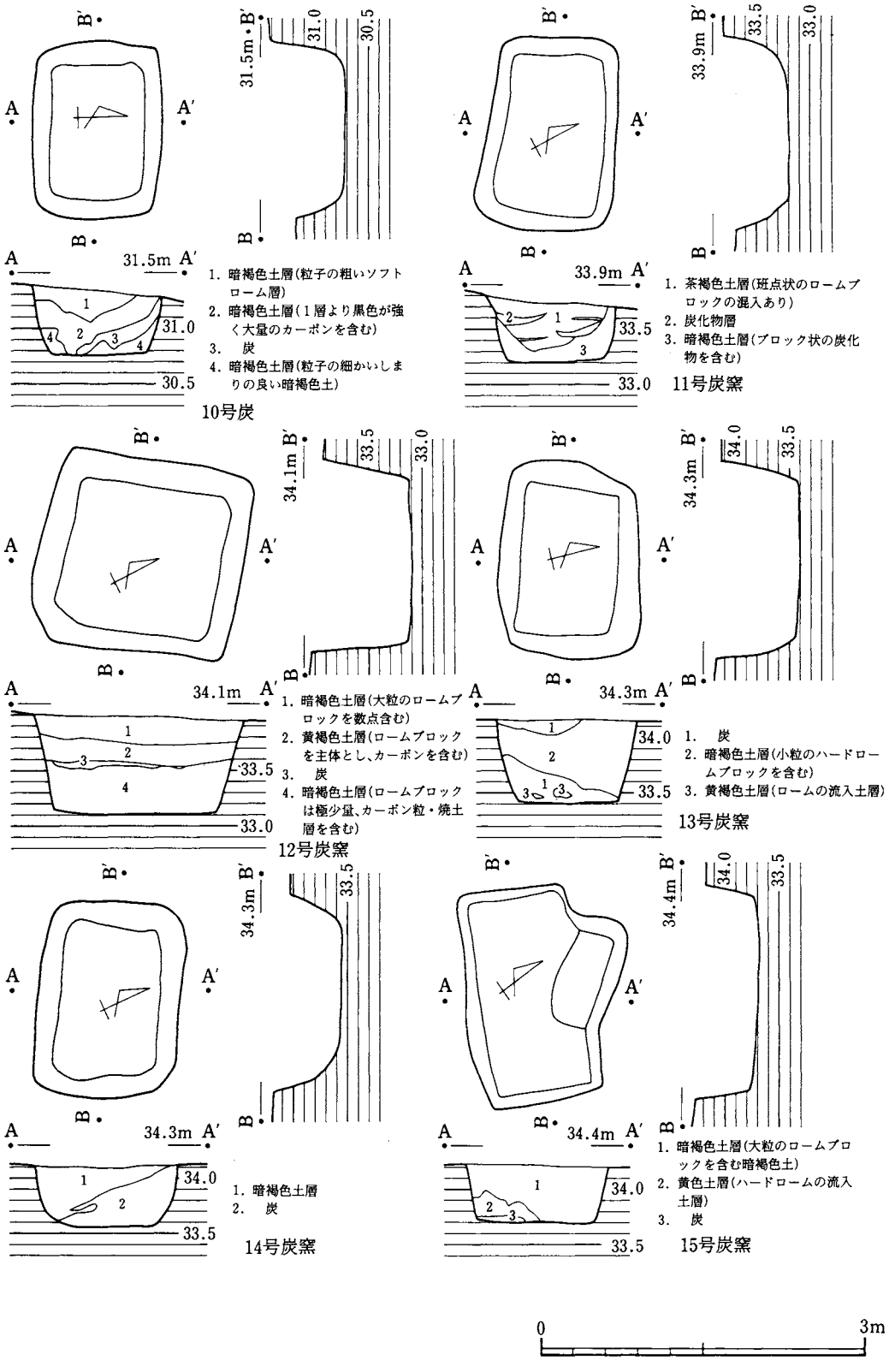
第159図　土坑状炭窯遺構図(1)

第40表

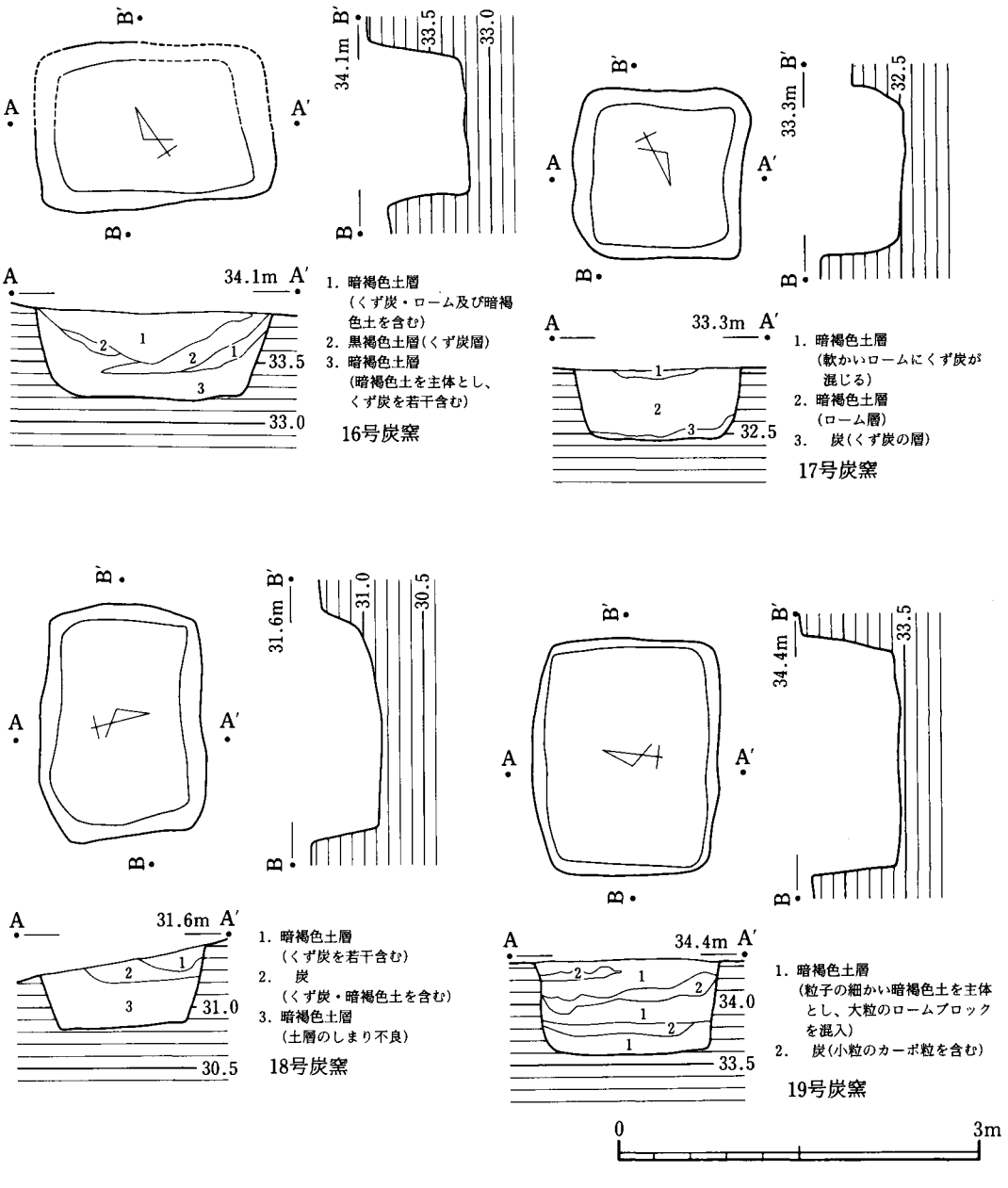
炭窯番号	遺構番号	形　状	開口部（m）		炭窯番号	遺構番号	形　状	開口部（m）	
			最　大	最　小				最　大	最小
1	034	方　形	2.1	1.4	26	121	方　形	1.3	1.2
2	029	方　形	1.6	1.2	27	117	方　形	2.2	1.6
3	033	方　形	2.1	1.9	28	120	方　形	2.2	1.9
4	026	方　形	1.4	1.4	29	112	方　形	2.0	2.0
5	028	方　形	2.8	2.1	30	147	方　形	2.2	1.7
6	032	方　形	1.7	1.2	31	124	方　形	1.6	1.2
7	027	方　形	1.6	1.6	32	144	方　形	1.6	1.4
8	031	方　形	2.2	2.2	33	130	方　形	2.1	1.4
9	030	方　形	1.7	1.3	34	123	方　形	2.1	1.3
10	025	方　形	1.7	1.2	35	126	方　形	1.9	1.5
11	008	方　形	1.8	1.2	36	125	方　形	2.0	2.0
12	020	方　形	1.9	1.7	37	131	方　形	2.1	1.7
13	021	方　形	1.8	1.3	38	143	方　形	2.4	2.4
14	022	方　形	1.8	1.3	39	141	方　形	1.9	1.5
15	023	方　形	2.0	1.5	40	138	方　形	1.6	1.6
16	076	方　形	2.0	1.4	41	140	方　形	1.4	1.3
17	077	方　形	1.4	1.4	42	119	方　形	1.5	1.5
18	079	方　形	1.9	1.3	43	035	方　形	1.8	1.4
19	080	方　形	2.0	1.5	44	036	方　形	1.5	1.2
20	133	方　形	2.2	1.5	45	037	方　形	2.3	2.0
21	142	方　形	1.5	1.5	46	060	方　形	1.5	1.5
22	148	隅　丸	1.6	1.2	47	073	方　形	1.8	1.4
23	082	方　形	2.3	1.5	48	075	方　形	2.1	1.8
24	085	方　形	1.6	1.4	49	146	方　形	1.6	1.5
25	113	方　形	1.6	1.6	50	118	方　形	2.1	1.7
					51	007	瓢　形	4.0	2.1



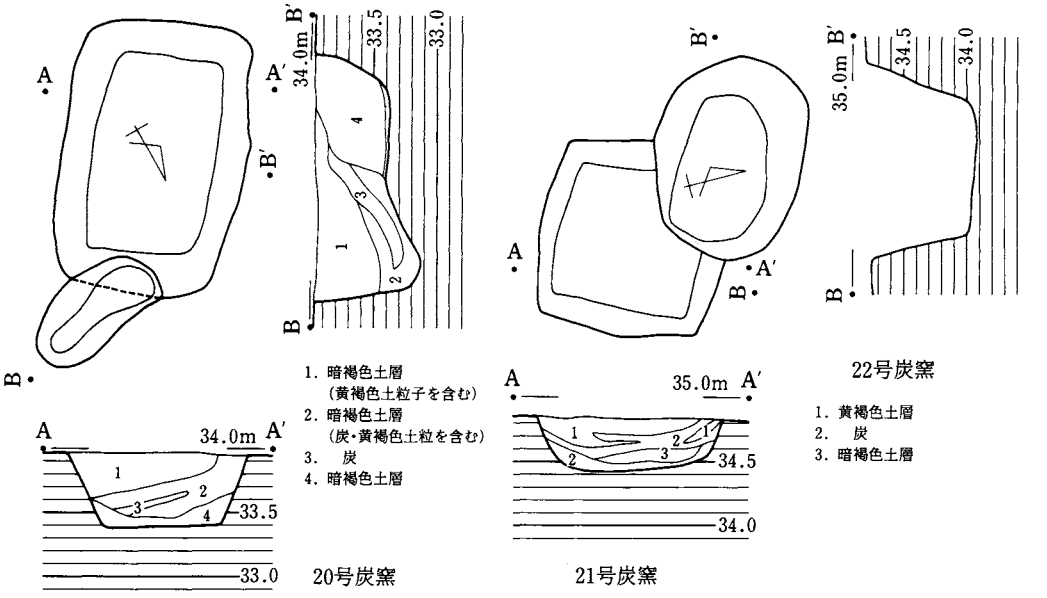
第160図　土坑状炭窯遺構図(2)

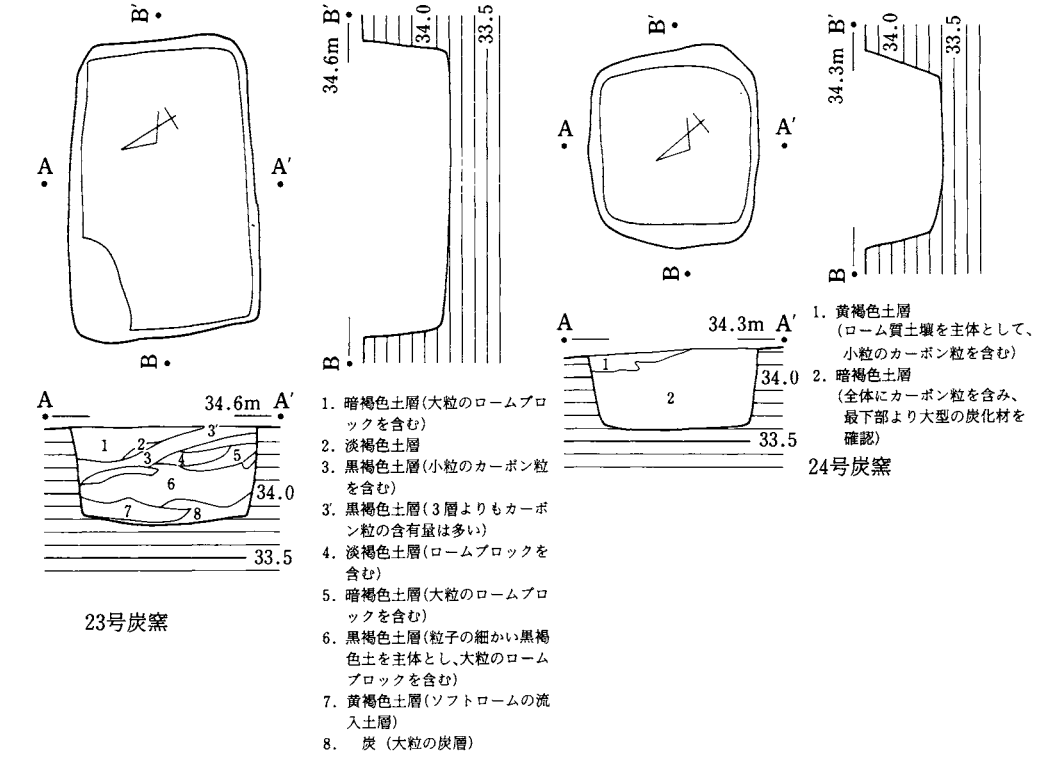


第161図　土坑状炭窯遺構図(3)

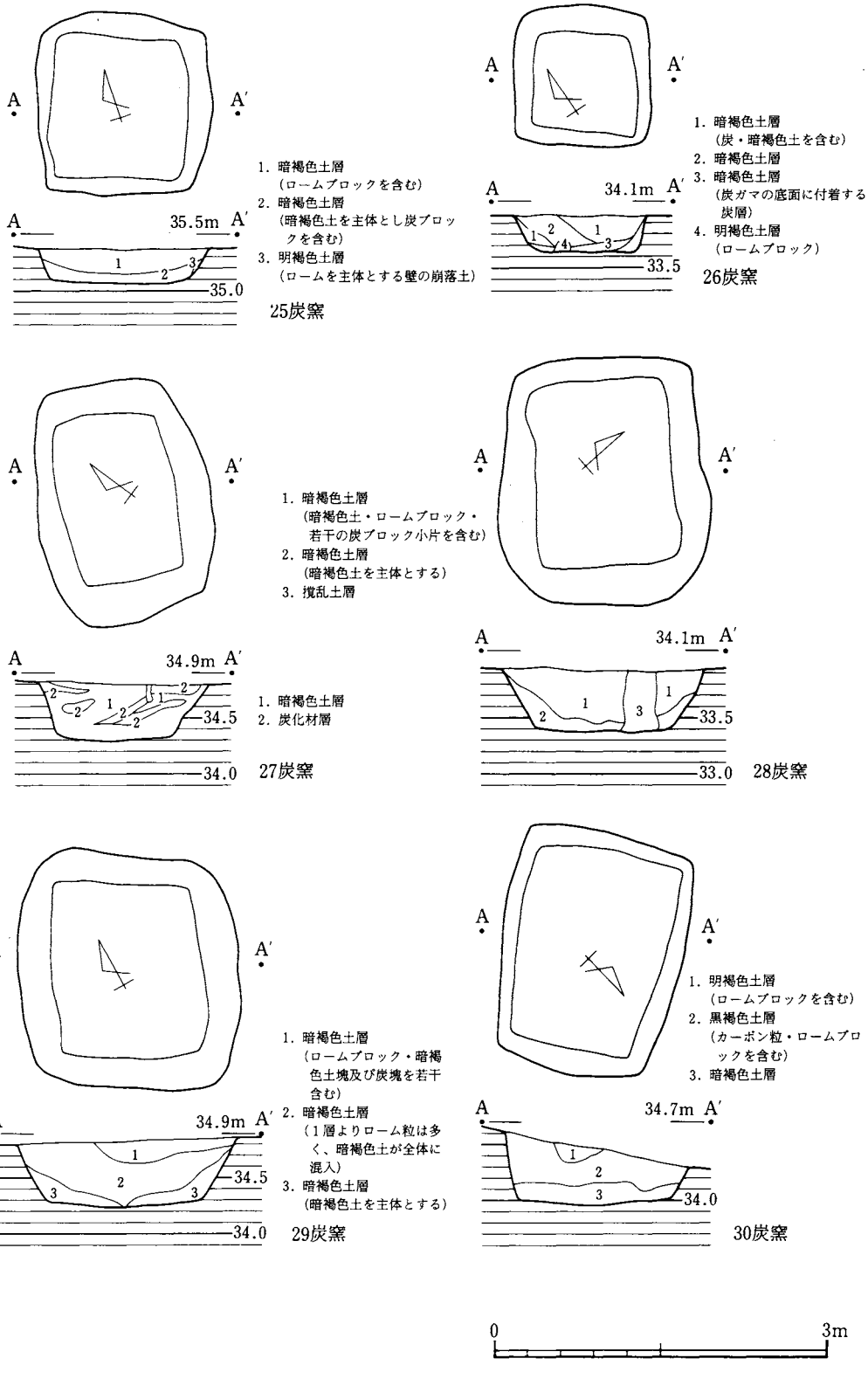


第162図　土坑状炭窯遺構図(4)

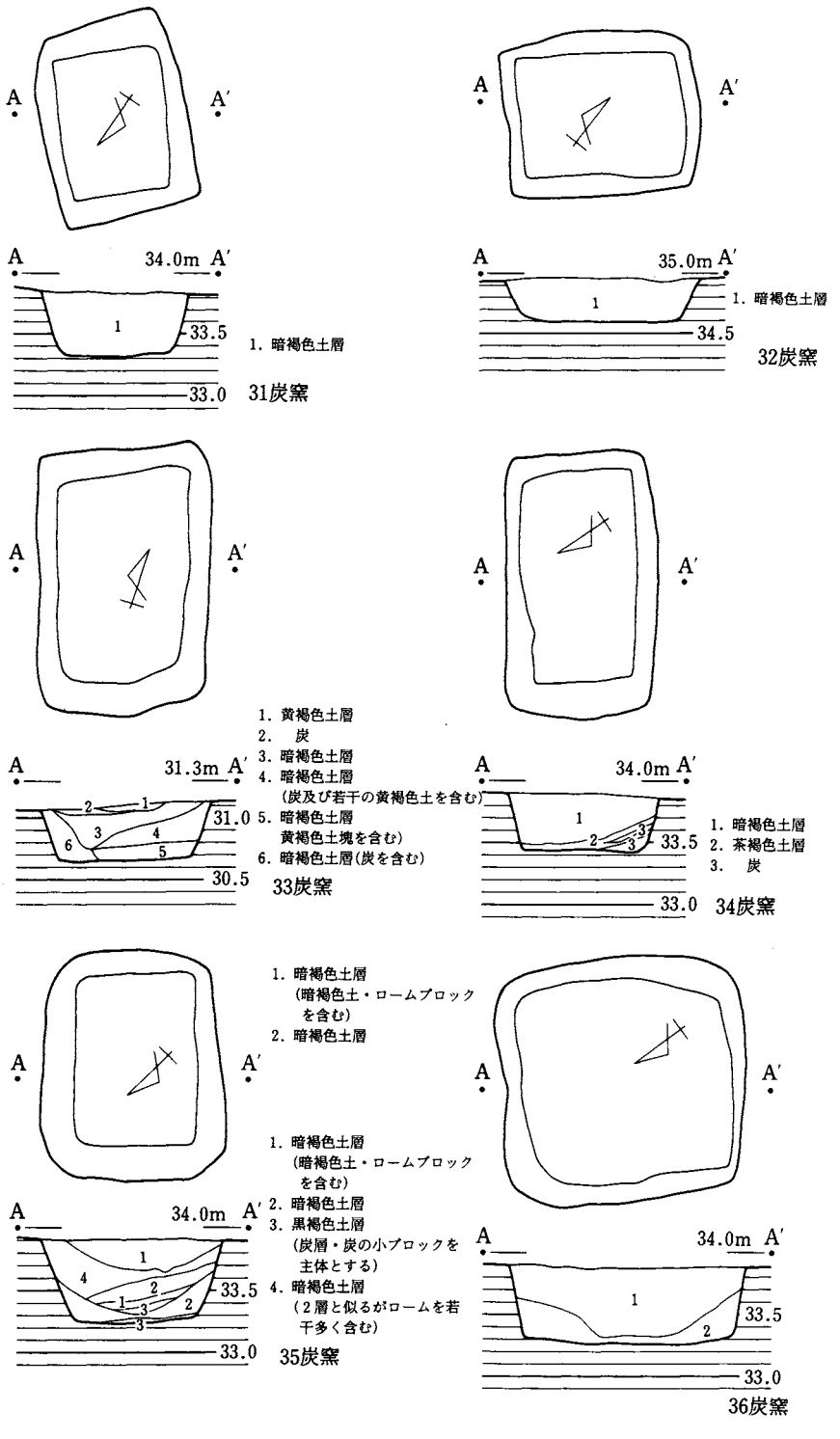




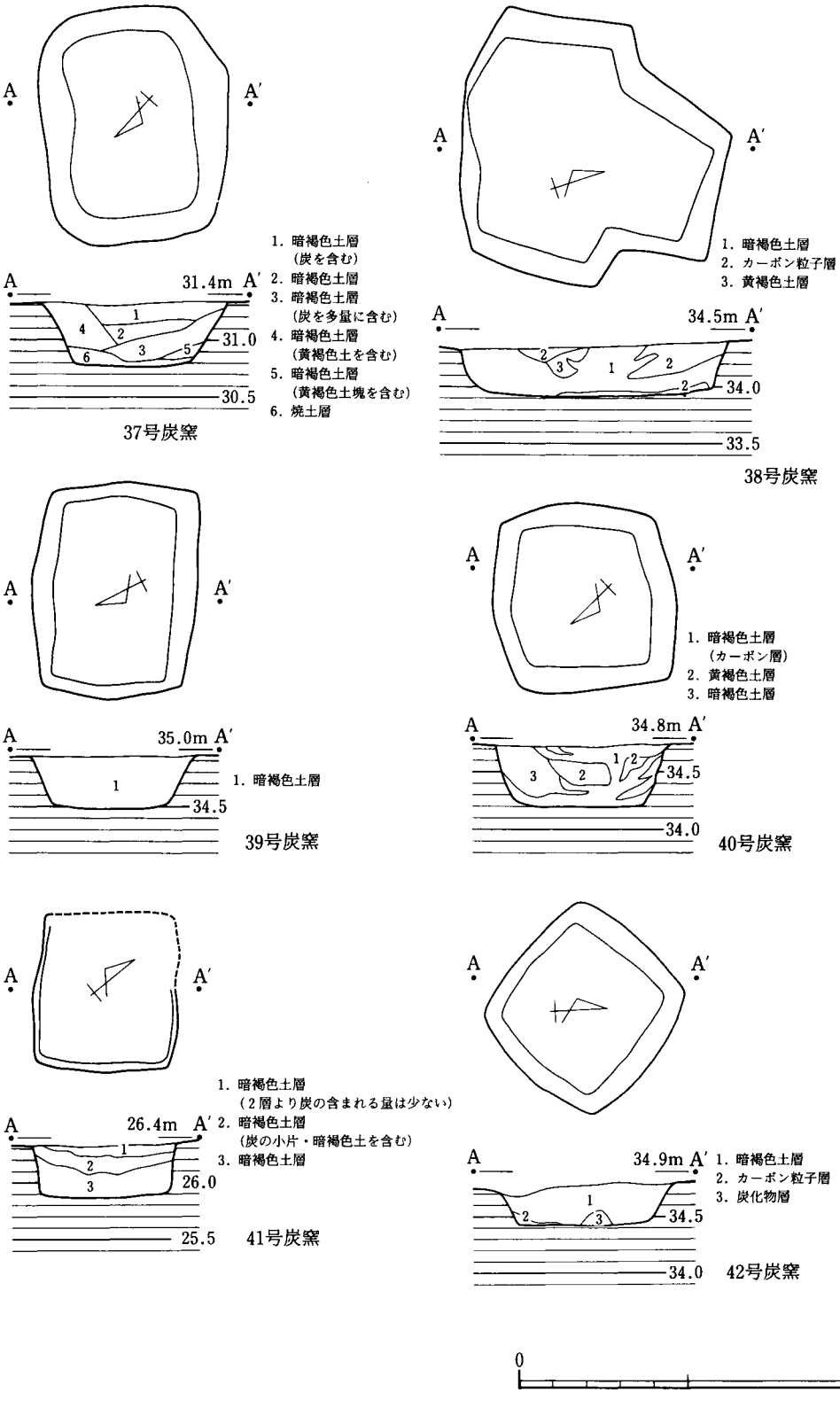
第163図　土坑状炭窯遺構図(5)



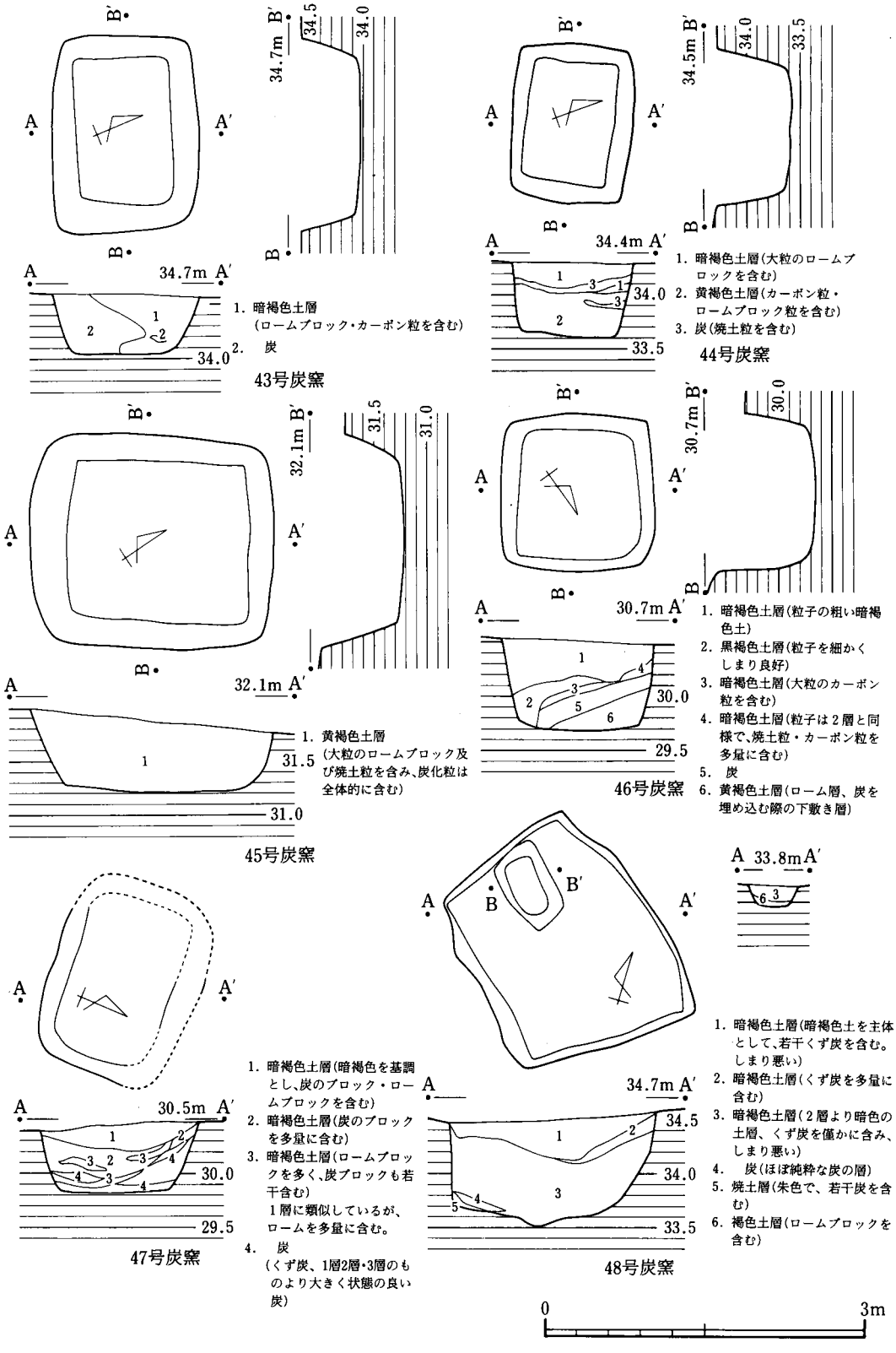
第164図　土坑状炭窯遺構図(6)



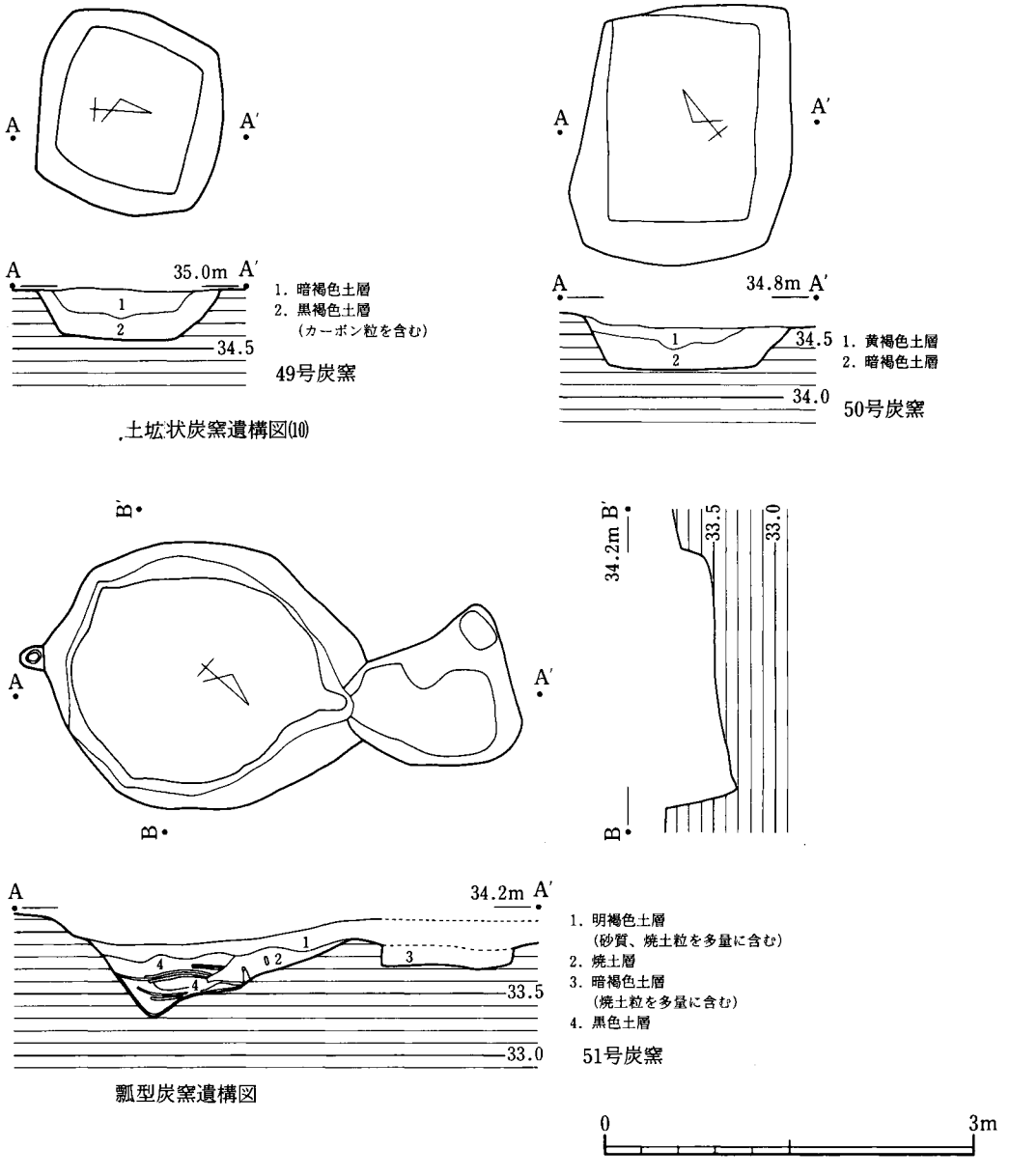
第165図　土坑状炭窯遺構図(7)



第166図　土坑状炭窯遺構図(8)



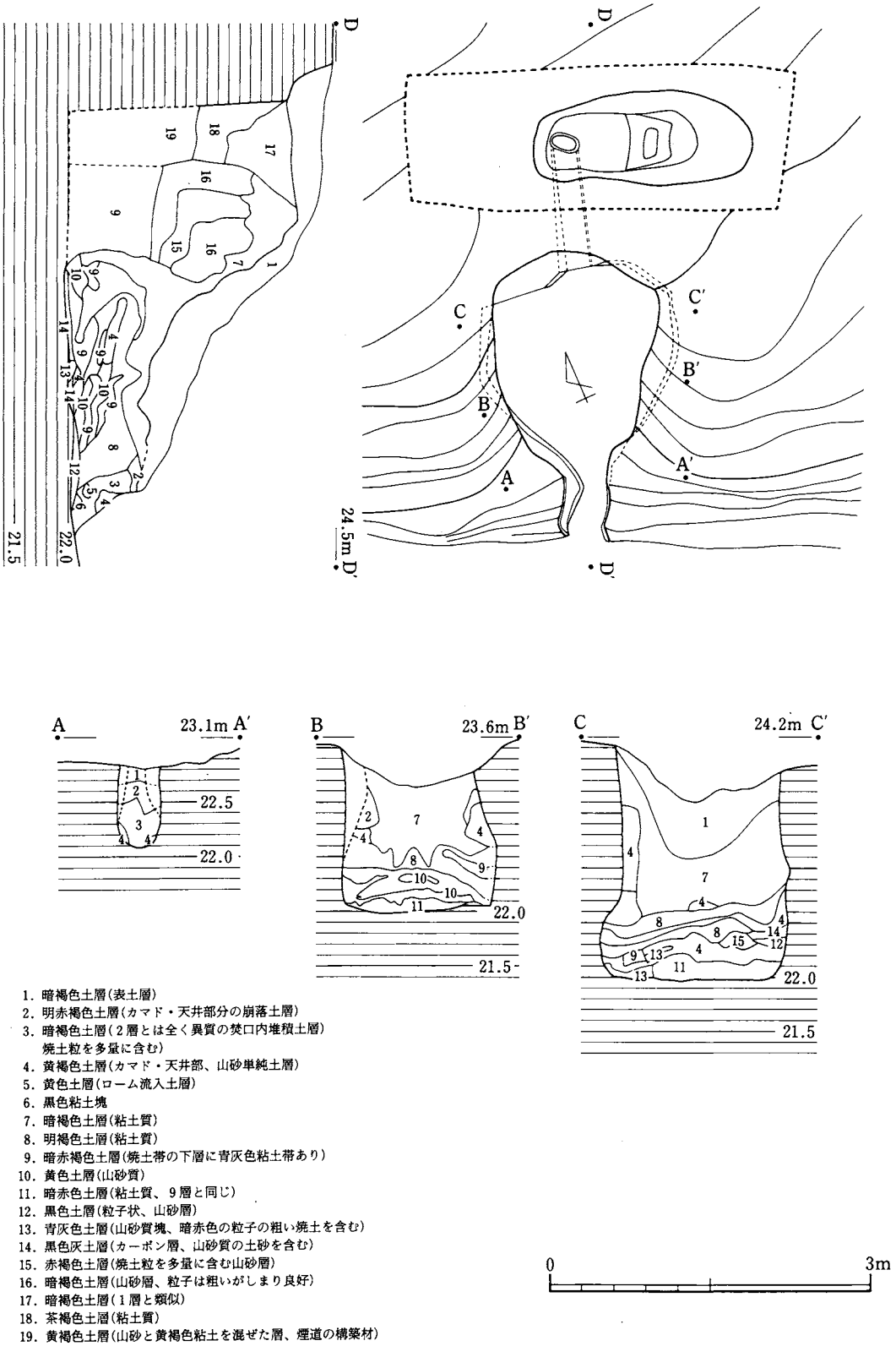
第167図　土坑状炭窯遺構図(9)



第168図　土坑状炭窯、瓢型炭窯遺構図

窯の壁は黒褐色に炭化しているが、焼成部内の残留遺物は炭を含めて全く検出されていない。焚口部最大幅　0.36m、焼成部最大径　1.9m（南北方向）・最小径1.86m（東西径）、煙道奥行長1.2m、煙突部分（垂直部分）　1.2mの各計測値が観察された。

(257頁につづく)



1. 暗褐色土層(表土層)
2. 明赤褐色土層(カマド・天井部分の崩落土層)
3. 暗褐色土層(2層とは全く異質の焚口内堆積土層)
   焼土粒を多量に含む)
4. 黄褐色土層(カマド・天井部、山砂単純土層)
5. 黄色土層(ローム流入土層)
6. 黒色粘土塊
7. 暗褐色土層(粘土質)
8. 明褐色土層(粘土質)
9. 暗赤褐色土層(焼土帯の下層に青灰色粘土帯あり)
10. 黄色土層(山砂質)
11. 暗赤色土層(粘土質、9層と同じ)
12. 黒色土層(粒子状、山砂層)
13. 青灰色土層(山砂質塊、暗赤色の粒子の粗い焼土を含む)
14. 黒色灰土層(カーボン層、山砂質の土砂を含む)
15. 赤褐色土層(焼土粒を多量に含む山砂層)
16. 暗褐色土層(山砂層、粒子は粗いがしまり良好)
17. 暗褐色土層(1層と類似)
18. 茶褐色土層(粘土質)
19. 黄褐色土層(山砂と黄褐色粘土を混ぜた層、煙道の構築材)

第169図　第1号窯跡遺構図

燃焼部は焚口部の直後と考えられるが確認はできなかった。
焼成部は不正円形の平面形態を呈し、煙道の構築には破線部分の地山を2.4m程掘込み、さらに煙突部分にあたる1.2mを垂直に掘込む。
一方、焼成部奥壁の床面付近から水平にトンネル状の煙道を掘り進み、さきほどの煙突部分にL字状に継げている。
本遺構の性格が窯であることは疑う余地もないが、何を焼成する目的をもって構築された窯であるのかは明確にできなかった。
なお、本遺構の灰原に相当する斜面にもトレンチ調査を試みたが、資料は得られていない。
また、窯本体内部の堆積物は、すべて天井部の崩落によるものと考えられる。

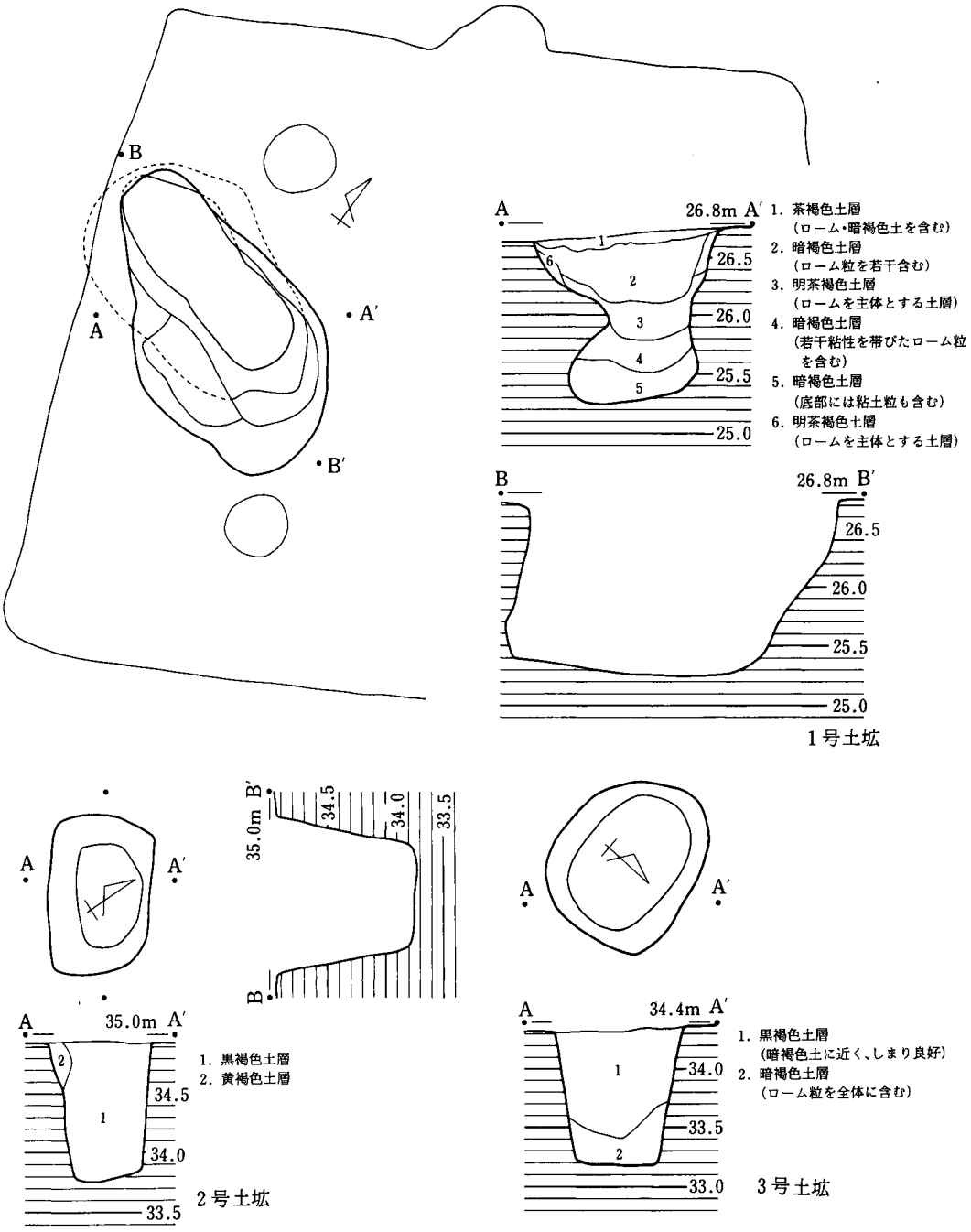
土坑　(170・171・172・173・174・175図、図版83・84・85・86・87・88・89・90)

腰巻遺跡では土坑が33基検出された。
このうち、33号土坑は先土器時代のCブロックに関連するものと考えられるが、出土遺物との関係については第1節先土器時代の項を参照していただきたい。
その他の土坑については、伴出遺物もないことから時期は確定しがたいので、特徴的な土坑だけを補足しておきたい。

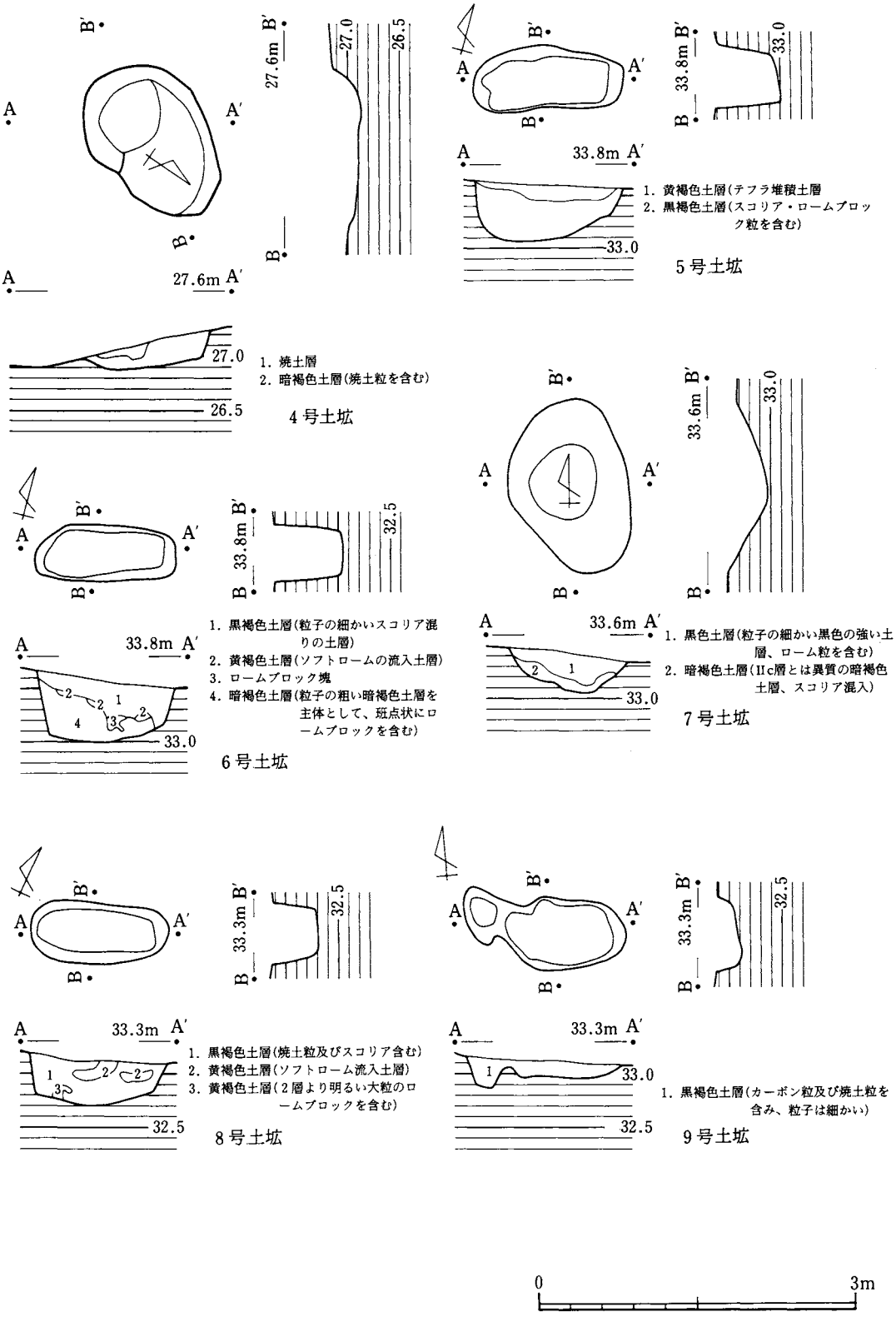
1号土坑　(153)　(第170図、図版83)
12号住居跡の貼床を除去した後に検出された。
開口部の長軸2.8m、短軸1.5m、深さ1.5mの大形の土坑である。
出土遺物は検出されておらず、古墳時代以前のものである。

4号土坑　(001)　(第171図、図版84)
調査区の北東端にあたる台地の、標高27.6mの北向き斜面の縁辺に位置する。
覆土には焼土を多量に含んでおり、むしろ炉穴的な性格を有する遺構の可能性も含まれるが、底面には焼成を受けた痕跡は確認されておらず、本分類としつ扱うこととした。

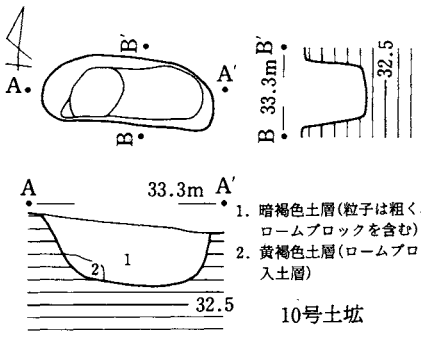
33号土坑　(070)　(第175図、図版90)
先土器時代のCブロックに近接して検出され、VI層中から掘込み面が確認されている。
長軸1.2m、短軸0.9m、深さ0.36mの不整円形の平面形態を呈している。



第170図　土坑遺構図(1)

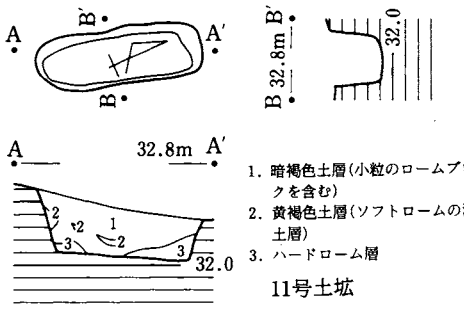


第171図　土坑遺構図(2)



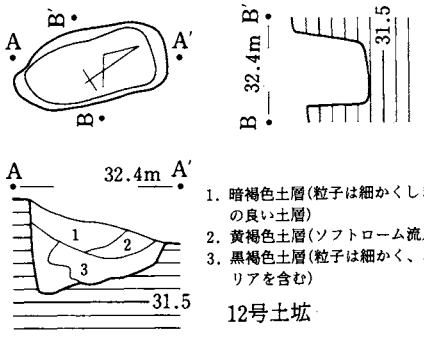
1. 暗褐色土層(粒子は粗く、大粒のロームブロックを含む)
2. 黄褐色土層(ロームブロックの流入土層)

10号土坑



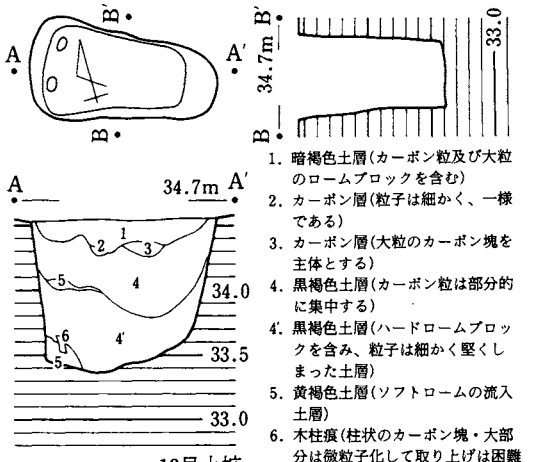
1. 暗褐色土層(小粒のロームブロックを含む)
2. 黄褐色土層(ソフトロームの流入土層)
3. ハードローム層

11号土坑



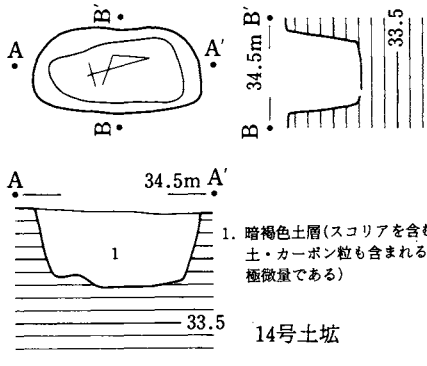
1. 暗褐色土層(粒子は細かくしまりの良い土層)
2. 黄褐色土層(ソフトローム流入土層)
3. 黒褐色土層(粒子は細かく、スコリアを含む)

12号土坑



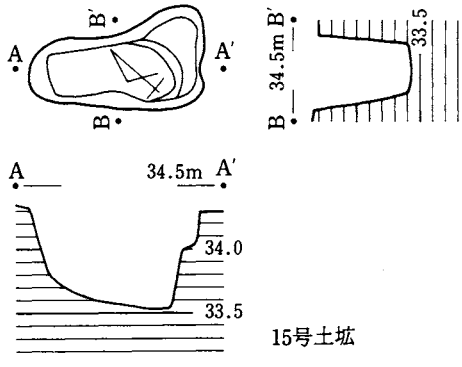
1. 暗褐色土層(カーボン粒及び大粒のロームブロックを含む)
2. カーボン層(粒子は細かく、一様である)
3. カーボン層(大粒のカーボン塊を主体とする)
4. 黒褐色土層(カーボン粒は部分的に集中する)
4'. 黒褐色土層(ハードロームブロックを含み、粒子は細かく堅くしまった土層)
5. 黄褐色土層(ソフトロームの流入土層)
6. 木柱痕(柱状のカーボン塊・大部分は微粒子化して取り上げは困難であったが、ごく僅か繊維質の鮮明な木炭片を確認)

13号土坑

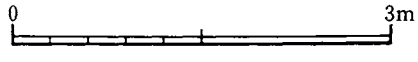


1. 暗褐色土層(スコリアを含む、焼土・カーボン粒も含まれるが、極微量である)

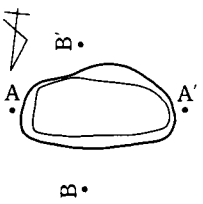
14号土坑

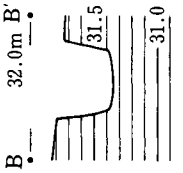


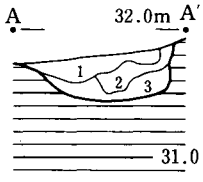
15号土坑



第172図　土坑遺構図(3)

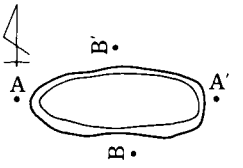


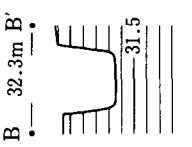


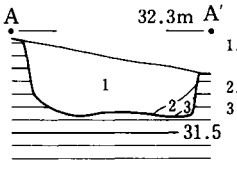


1. 暗褐色土層(粒子の粗い、スコリア混じりの土層)
2. 黒褐色土層(粒子の粗い土層で、ソフトロームがブロック状に混入)
3. 黄褐色土層(ソフトロームの流入土層)

16号土坑

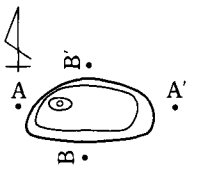


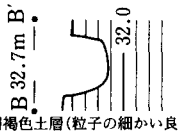


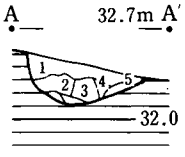


1. 暗褐色土層(カーボン粒の薄い皿状堆積層を含む)
2. 黄褐色土層(ソフトロームの流入土層)
3. 暗褐色土層(粒子の細かい暗褐色土層)

17号土坑

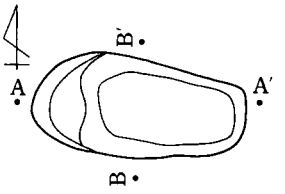


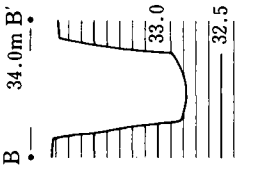


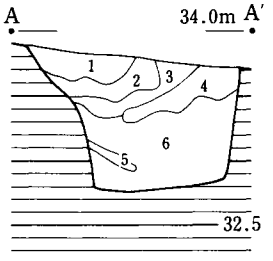


1. 明褐色土層(粒子の細かい良くしまった土層、スコリアを含む)
2. 暗褐色土層(ローム粒の割合の大きい土層)
3. 黒褐色土層(粒子の粗い粘性の強い土層)
4. 黄褐色土層(ソフトロームの流入土層)
5. 明褐色土層(土層よりは粒子は粗く、カーボン粒を多量に含む)
6. 黄褐色土層(ソフトロームの流入土層)
7. 黒褐色土層(粒子の細かい良くしまった土層。4層よりも黒色が強く大粒のカーボン粒を含む)

18号土坑

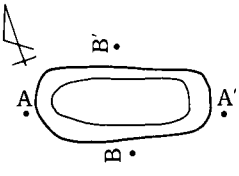


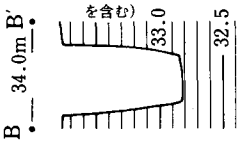


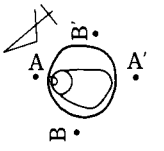


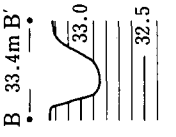
1. 黄褐色土層(ソフトローム流入土層)
2. 暗褐色土層(粒子の粗い、スコリア混じりの土層)
3. 黄褐色土層(ソフトロームを主体とし、大粒のロームブロックを含む)
4. 暗褐色土層(全体的に大粒のロームブロックを含み、非常にもろい)
5. 黄色土層(ハードローム流入土層、壁の崩壊による土層)

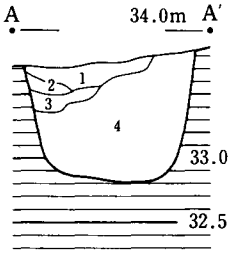
19号土坑





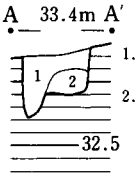






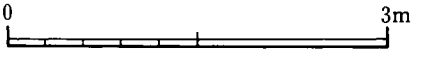
1. 黄褐色土層(ソフトロームの流入土層)
2. 暗褐色土層(粒子の粗い、スコリア混じりの土層)
3. 黄褐色土層(上層よりも粒子は粗く、ロームブロックを含む)
4. 黒褐色土層(粒子の細かい良くしまった黒褐色土層スコリアを含む)

20号土坑

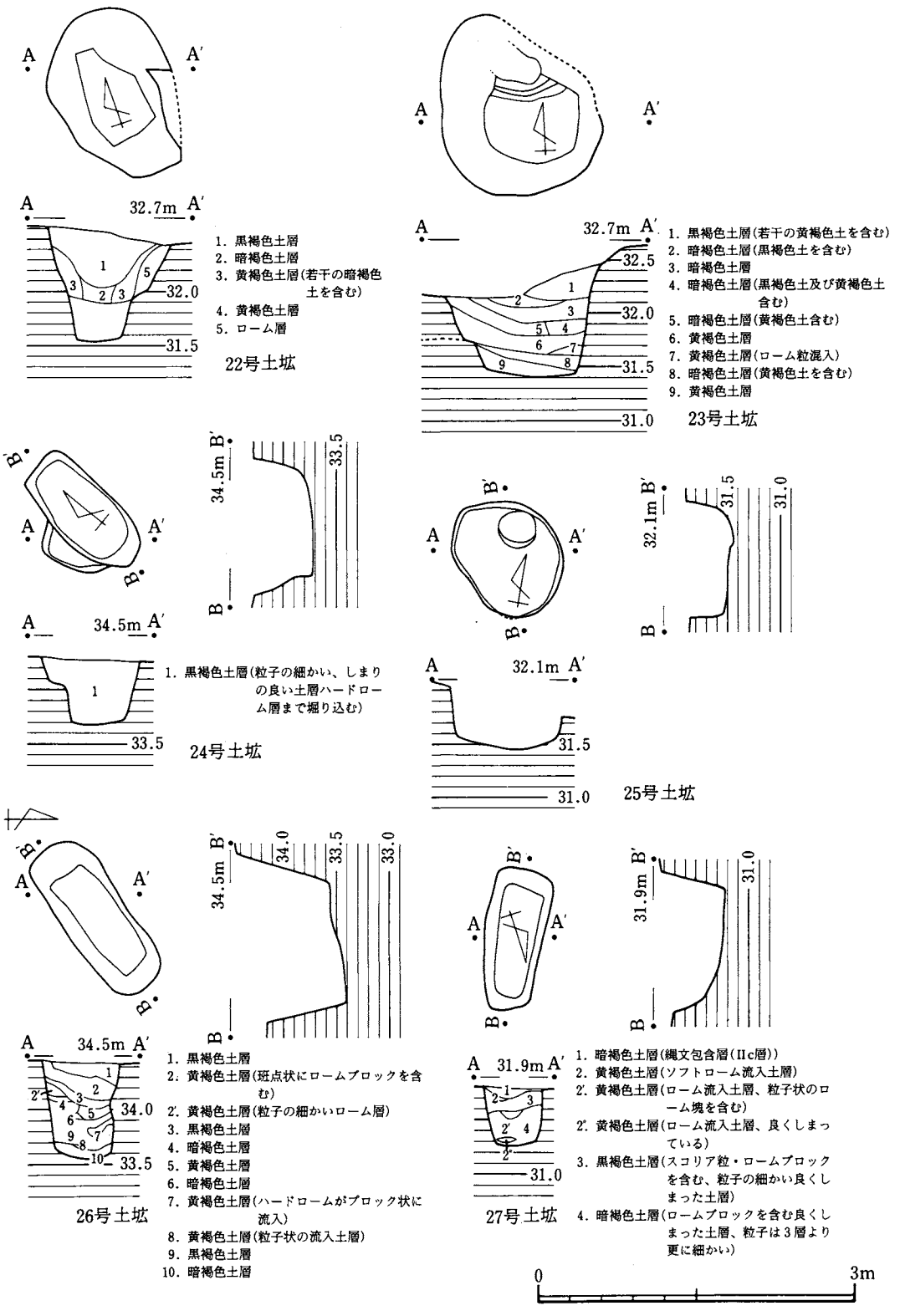


1. 黒褐色土層(粒子の粗い、スコリア混じりの土層)
2. 暗褐色土層(粒子の細かい、良くしまった土層)

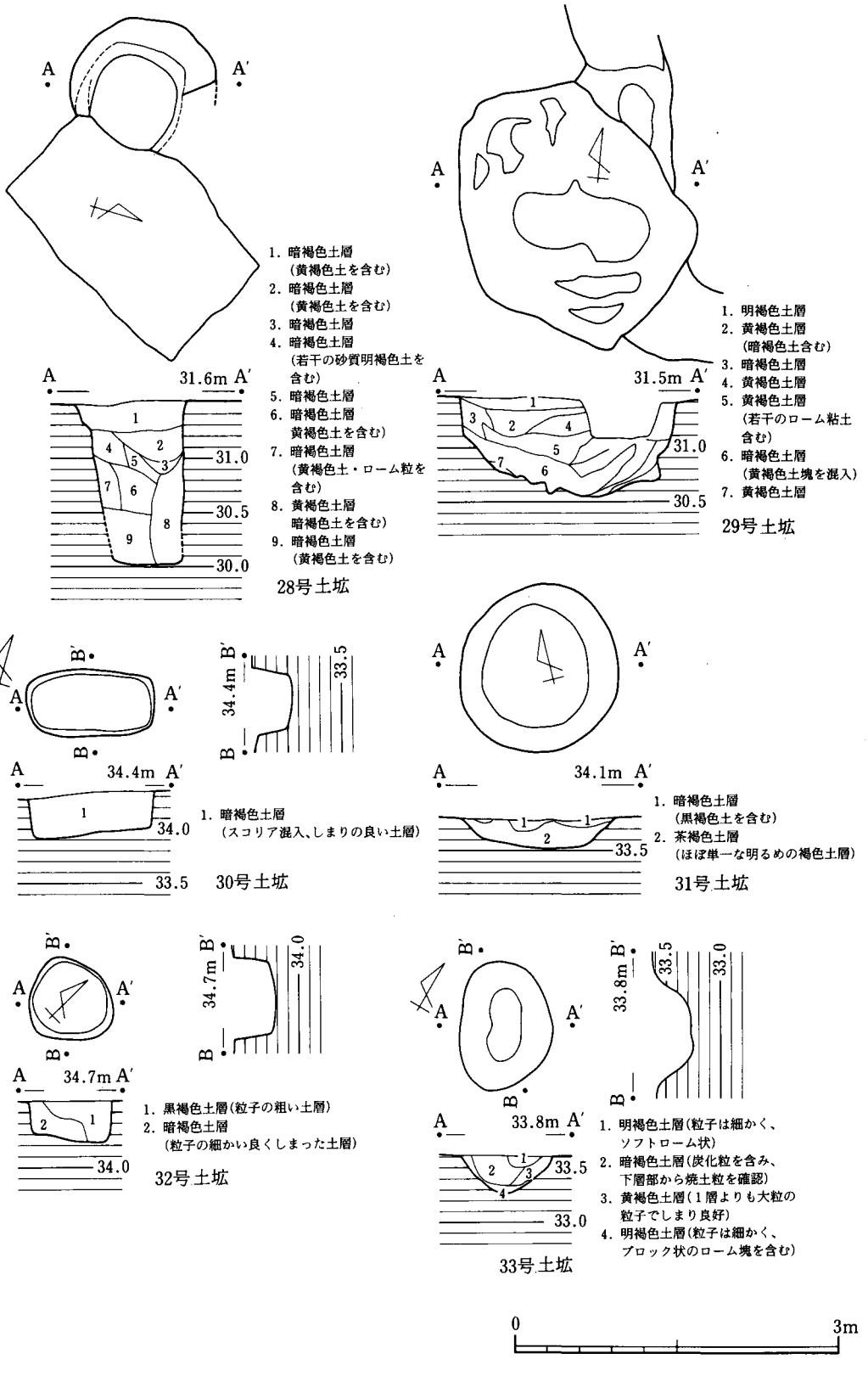
22号土坑



第173図　土坑遺構図(4)



第174図　土坑遺構図(5)



第175図　土坑遺構図(6)

第41表

土坑番号	遺構番号	形　状	開口部（m）		底部（m）		深さ(m)
			最　大	最　小	最　大	最　小	
1 号 土 坑	153	楕 円 形	2.8	1.5	2.0	0.8	1.4
2 号 土 坑	145	方　　形	1.4	0.9	0.9	0.6	1.3
3 号 土 坑	149	隅　　丸	1.5	1.2	1.2	0.8	1.2
4 号 土 坑	001	楕 円 形	1.6	1.1	1.3	0.8	0.3
5 号 土 坑	038	隅丸方形	1.4	0.6	1.1	0.4	0.6
6 号 土 坑	039	隅丸方形	1.3	0.5	1.1	0.4	0.6
7 号 土 坑	019	楕 円 形	1.6	1.2	0.7	0.6	0.3
8 号 土 坑	040	隅丸方形	1.3	0.6	1.1	0.4	0.4
9 号 土 坑	041	楕 円 形	1.5	0.7	1.0	0.5	0.3
10 号 土 坑	042	隅丸方形	1.3	0.5	1.0	0.4	0.5
11 号 土 坑	043	隅丸方形	1.3	0.5	1.2	0.3	0.5
12 号 土 坑	044	隅丸方形	1.2	0.6	1.0	0.4	0.7
13 号 土 坑	045	楕 円 形	1.5	0.7	1.1	0.7	1.2
14 号 土 坑	046	隅丸方形	1.3	0.7	1.0	0.5	0.6
15 号 土 坑	047	楕 円 形	1.4	0.6	1.2	0.4	0.8
16 号 土 坑	048	楕 円 形	1.2	0.7	1.1	0.5	0.4
17 号 土 坑	049	隅丸方形	1.4	0.5	1.3	0.4	0.6
18 号 土 坑	050	楕 円 形	1.0	0.5	0.8	0.4	0.4
19 号 土 坑	051	楕 円 形	1.7	0.8	1.1	0.5	1.0
20 号 土 坑	052	隅丸方形	1.4	0.6	1.1	0.3	1.0
21 号 土 坑	053	円　　形	0.5	0.5	0.5	0.3	0.4
22 号 土 坑	087(土坑2)	楕 円 形	1.6	1.2	0.9	0.6	1.1
23 号 土 坑	087(土坑1)	楕 円 形	1.7	1.5	0.9	0.8	1.0
24 号 土 坑	054	楕 円 形	1.2	0.8	1.0	0.5	0.6
25 号 土 坑	057	楕 円 形	1.2	0.9	1.1	0.9	0.6
26 号 土 坑	058	隅丸方形	1.6	0.6	1.1	0.4	0.9
27 号 土 坑	059	隅丸方形	1.3	0.6	1.0	0.4	0.6

28号土坑	095	円　形	1.3	1.1	0.8	0.7	1.5
29号土坑	096	楕円形	2.4	2.1	—	—	0.9
30号土坑	055	隅丸方形	1.2	0.6	1.1	0.5	0.4
31号土坑	122	円　形	1.5	1.5	1.1	1.0	0.3
32号土坑	056	楕円形	0.8	0.8	0.7	0.6	0.4
33号土坑	070	楕円形	1.2	0.9	0.7	0.3	0.4

溝状遺構

1号溝　(024)　(第176図、図版91)

調査区の北東端にあたる台地の北西縁辺部に位置する。

2号溝　(017)　(第176図、図版91)

調査区の北東端にあたる台地の北縁部に位置する。

3号溝　(111)　(第176・177図、図版91)

調査区の北端にあたる台地の北西縁辺部に位置する。

4号溝　(110)　(第178・179図、図版92)

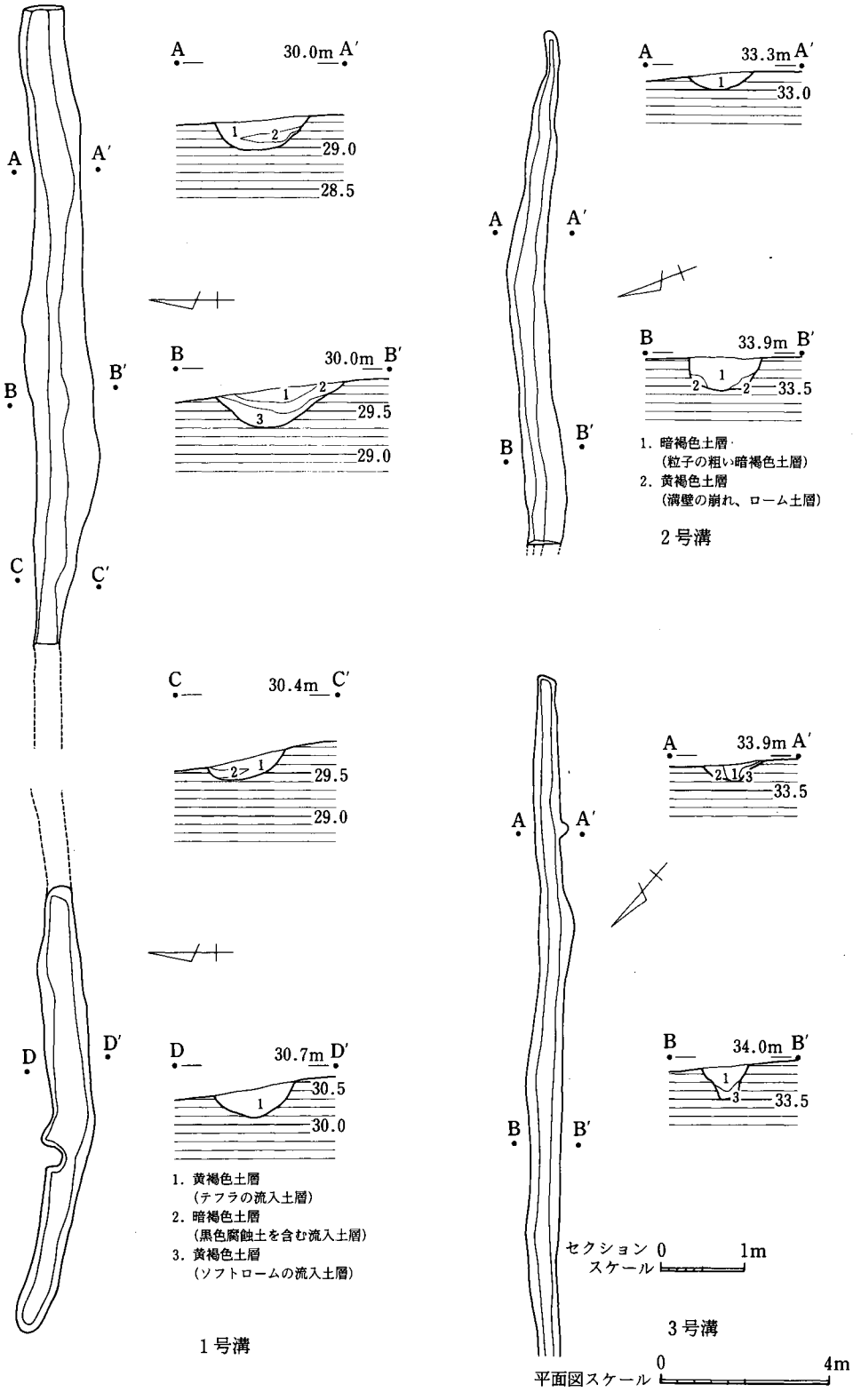
調査区の北端にあたる台地の南西縁辺部に位置する。

5号溝　(026－001)　(第180図、図版93)

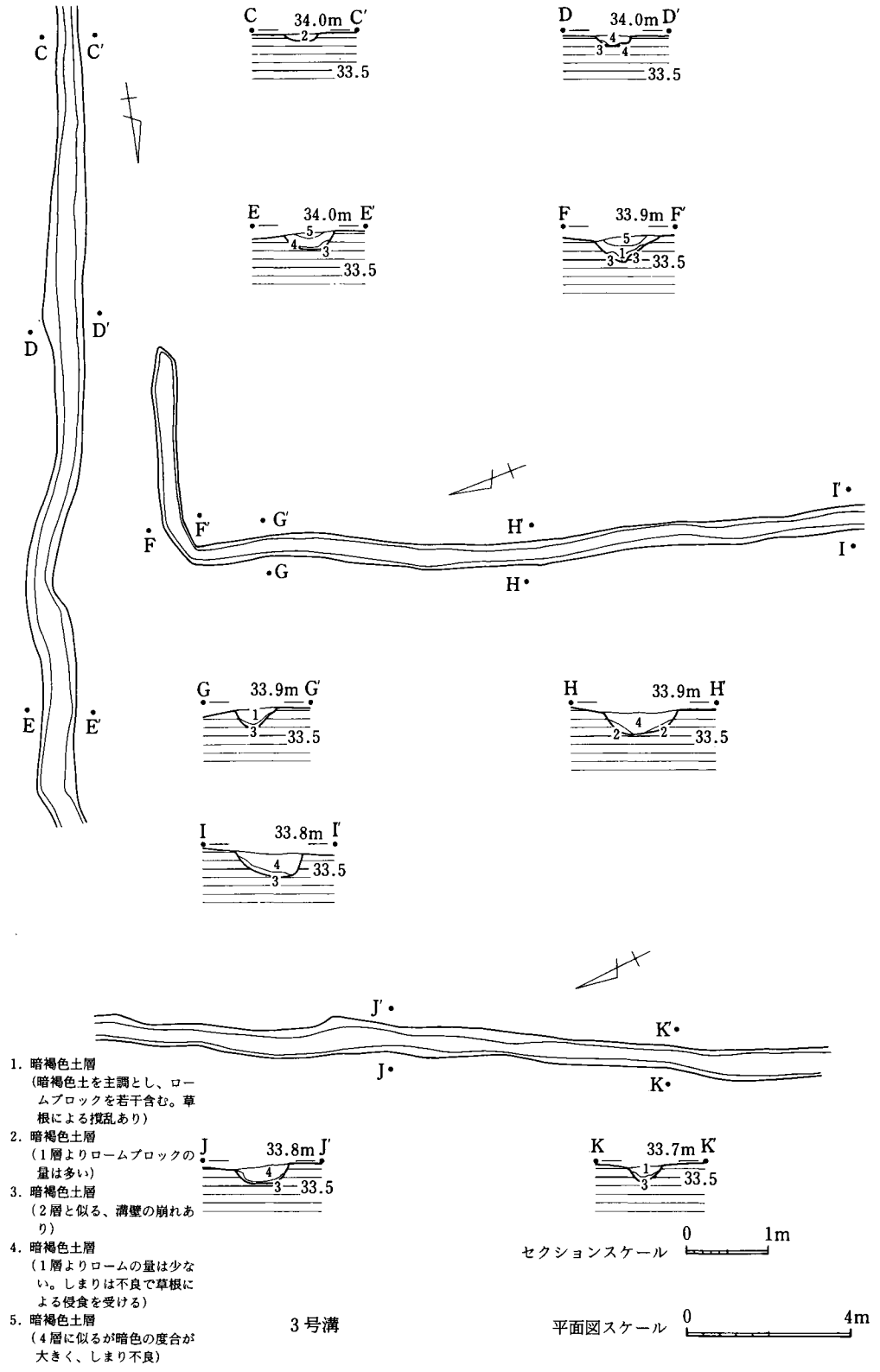
昭和58年度に、向山谷津遺跡として調査された区域に位置し、須恵器を主体とする多量の遺物が検出された。

6号溝　(026－002)　(第180図、図版93)

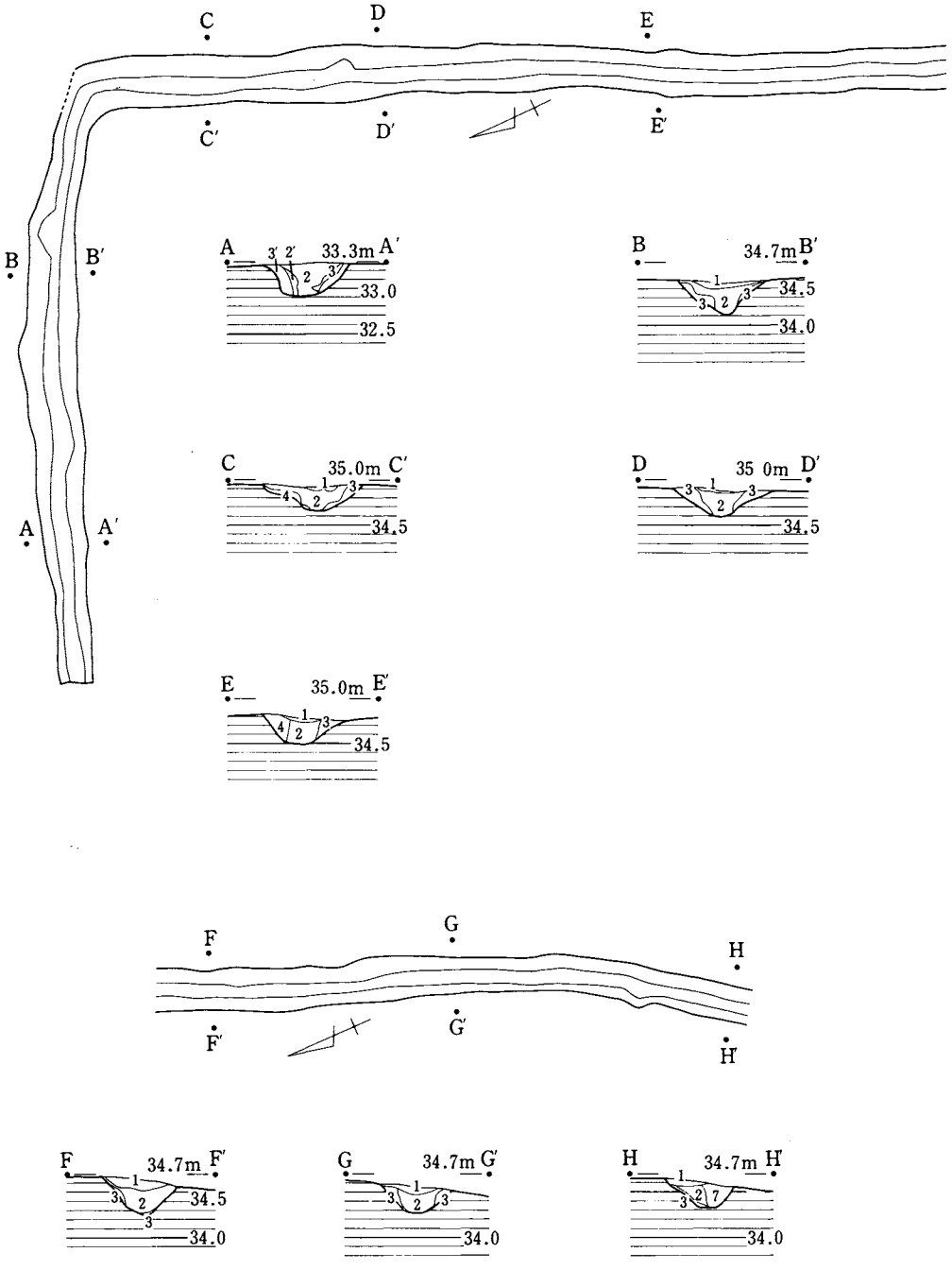
5号溝と同様に昭和58年度の調査区に位置し、5号溝より幅広であるが、遺物は全く検出されていない。


A
A′
30.0m
29.0
28.5
B
B′
30.0m
29.5
29.0
C
C′
30.4m
29.5
29.0
D
D′
30.7m
30.5
30.0
1. 黄褐色土層
（テフラの流入土層）
2. 暗褐色土層
（黒色腐蝕土を含む流入土層）
3. 黄褐色土層
（ソフトロームの流入土層）
1号溝
33.3m
33.0
33.9m
33.5
1. 暗褐色土層
（粒子の粗い暗褐色土層）
2. 黄褐色土層
（満壁の崩れ、ローム土層）
2号溝
34.0m
セクション スケール 0 1m
3号溝
平面図スケール 0 4m

第176図　溝遺構図(1)


C 34.0m C′
D 34.0m D′
E 34.0m E′
F 33.9m F′
G 33.9m G′
H 33.9m H′
I 33.8m I′
J 33.8m J′
K 33.7m K′
33.5
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
G
G′
H
H′
I
I′
J
J′
K
K′
1. 暗褐色土層
(暗褐色土を主調とし、ロームブロックを若干含む。草根による撹乱あり)
2. 暗褐色土層
(1層よりロームブロックの量は多い)
3. 暗褐色土層
(2層と似る、溝壁の崩れあり)
4. 暗褐色土層
(1層よりロームの量は少ない。しまりは不良で草根による侵食を受ける)
5. 暗褐色土層
(4層に似るが暗色の度合が大きく、しまり不良)
3号溝
セクションスケール 0 1m
平面図スケール 0 4m

第177図　溝遺構図(2)

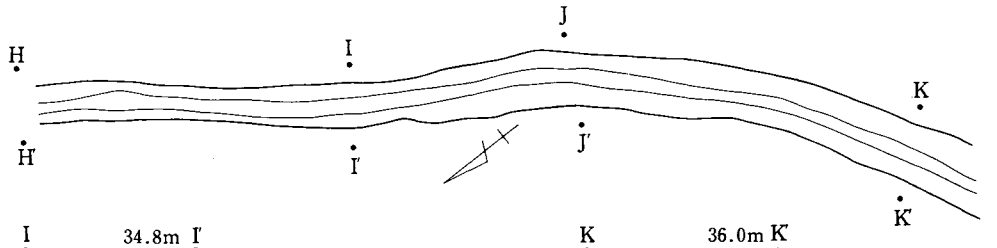


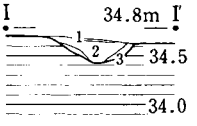
4号溝

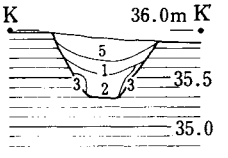
セクションスケール 0 1m

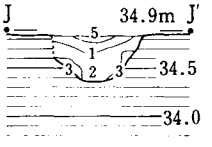
平面図スケール 0 4m

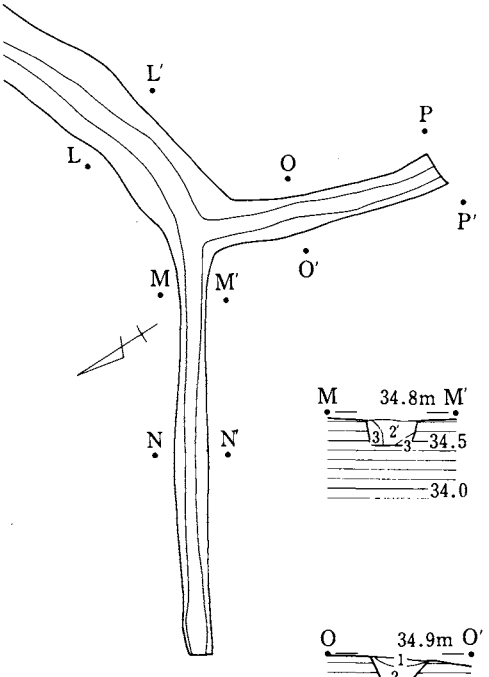
第178図　溝遺構図(3)

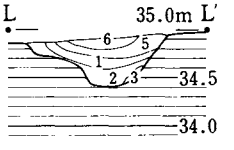


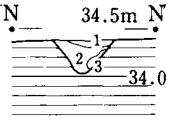


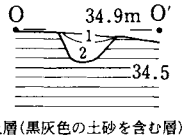


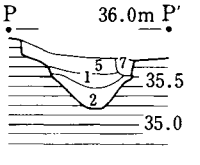












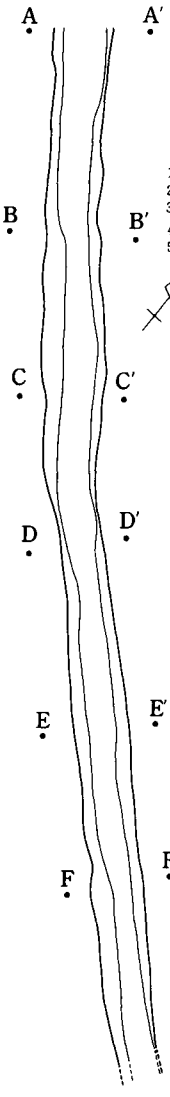
1. 暗褐色土層(黒灰色の土砂を含む層)
2. 暗褐色土層(しまり良好)
2'. 明褐色土層(黒色土を含む)
3. 明褐色土層(ロームを含む溝壁の崩れ部分、
3'. (若干撹乱あり)
4. 暗褐色土層(草根による撹乱が入り淡色である)
5. 暗褐色土層(2層と似る、しまり良好)
6. 暗褐色土層(ロームブロックを含み、草根による撹乱あり)
7. 撹乱土層

セクションスケール 0 1m

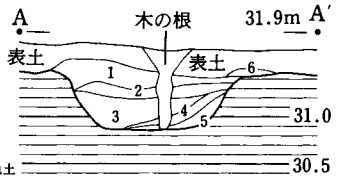
4号溝

平面図スケール 0 4m

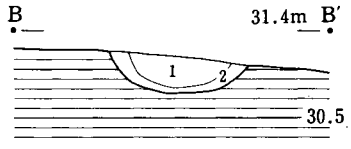
第179図　溝遺構図(4)



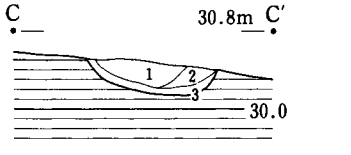
5号溝



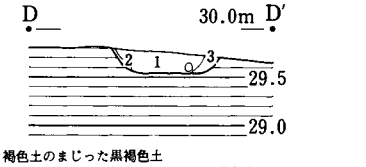
1. 黒褐色土
2. 新期テフラがシミ状に褐色土にまじった黄褐色土
3. 新期テフラがわずかにまじった褐色土
4. 暗褐色土
5. 新期テフラと褐色土がまじった黄褐色土
6. 暗褐色土



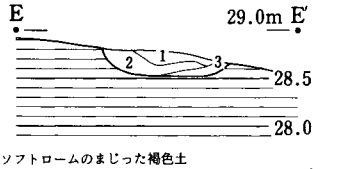
1. ハードローム粒、ソフトローム、褐色土、焼土粒のまじった黒褐色土
2. ハードローム粒のまじった、ソフトローム主体の黄褐色土



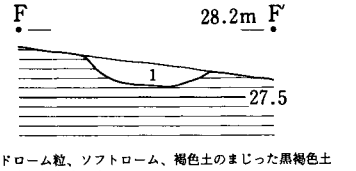
1. 褐色土主体で、ソフトローム、黒褐色土のまじった褐色土
2. 黒褐色土の中に褐色土がシミ状にまじった暗褐色土
3. ソフトロームと褐色土からなる黄褐色土



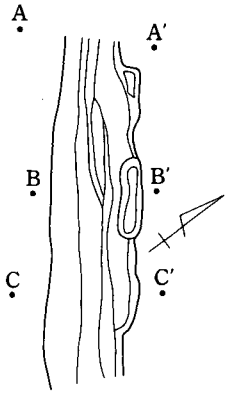
1. 褐色土のまじった黒褐色土
2. ソフトロームに黒褐色土のまじった黄色土
3. 新期テフラと思われる黄褐色土



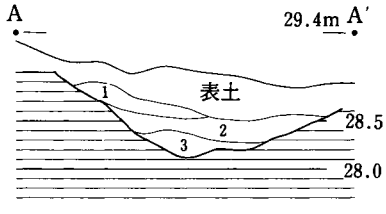
1. 少しソフトロームのまじった褐色土
2. ハードローム粒、ソフトローム、褐色土のまじった黒褐色土
3. 黄褐色土



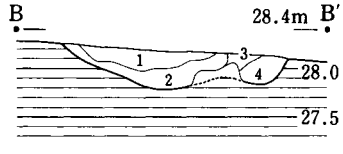
1. ハードローム粒、ソフトローム、褐色土のまじった黒褐色土
上部中央は褐色土が多い。



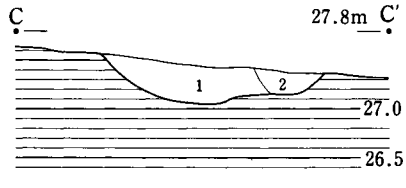
6号溝



1. 暗褐色土
2. 黒褐色土
3. 暗黄褐色土



1. 新期テフラのまじった暗褐色土
2. 新期テフラのまじった黒褐色土
3. 褐色土
4. 暗褐色土



1. 黒褐色土
2. 暗褐色土

セクションスケール 0 2.5m

平面図スケール 0 5m

第180図　溝遺構図(5)

第3章　考　　察

第1節　先土器時代

腰巻遺跡の先土器時代のブロックは、A～Hまでの8ケ所の遺物集中地点と、IIc層縄文土器の包含層からIII層にかけての遺物集中地点であるNo.1～No.3地点の3ケ所を加えた計11ケ所が検出された。

遺物の出土層位は、IIc層からIII層中を主体とする浅い地点がA・Cブロック及びNo.1～No.3地点の5ケ所、VI層からVII層を主体とする深い地点がB・C・D・E・F・G・Hの各ブロックの7ケ所である。

佐倉第三工業団地関連の遺跡では、昭和50年に調査された星谷津遺跡において、VII層以下の遺物の絶対量の少ないことが指摘されている。

腰巻遺跡は工業団地用地内の最北端に位置し、星谷津遺跡とほぼ1.2kmの距離を計るとはいえ、Bブロックに見られるVII層下部の炭化物・焼土粒を伴うと考えられる多数の石器類が検出されたのをはじめ、下部の文化層における検出量では星谷津遺跡・立山遺跡を凌ぐものであった。

Bブロックではナイフ形石器3点、石刃2点、石核4点。

Dブロックでは石核1点。

Eブロックではナイフ形石器1点。

Fブロックでは石刃19点、削器1点、石核5点。

Gブロックでは小型砕片状の刃器2点、石刃4点。

以上のように、本遺跡の各ブロックのVII層出土遺物についてその組成に注目すれば、かつて古内茂により指摘されたユニット間の比較・検討からの分類による、いくつかのタイプを想起させることとなった。

すなわち、タイプA　石器の器種は少ないが、他と比べて出土量が多い。特定石器の卓越。

タイプB　石器の量は割合少ないが一応の器種をそろえている。

タイプC　石器は1～2点で剝片が大半を占める。出土総数は50～60点で100点を越えるものは少ない。

タイプD　石器はほとんど存在せず、剝片が10～20点、あるいはそれ以下の出土量を示すにすぎず、接合関係が認められない時には帰属時期の判定も困難さを伴う。

タイプE　いわゆる礫群として把らえられるものであるが、剝片やまれに石器の出土も見られる。

以上が、各タイプの要約であるが、こうした視点に立ち本遺跡の下層文化層の各ブロックを検討してみたい。

Bブロックの石器類の組成はタイプA的であり、Fブロックの場合には石刃の著しく多いこと

から、タイプCの剝片剝離作業が行われる性格を有するブロックと見られる。
また、Fブロック内は遺物の集中部分から2ないし3ケ所の小拠点がみとめられ、この小拠点を単位ユニットと考えて、接合資料をもとに相互の関係を位置づけるべきであるとも考えられるが、今回は出土遺物の平面分布から見た石器類の集合をブロックと仮称したにとどまり、複合されたユニットの存在のありうることは言及しておかねばならない。

また、BブロックとFブロックはさほど距離のないことから、製品としての石器を中心とするBブロックに素材剝片を中心とするFブロックが何らかの形で関与する関係にあったことが考えられる。

なお、素材となった石質には安山岩・頁岩・チャートが共通して見られるほか、黒曜石の量がきわめて少ないことが特徴的であり、星谷津遺跡の場合と同じ傾向にある。

IIc層からIII層中を主体とする上層の文化層の石器組成について同様の視点から検討するならば、Aブロックはナイフ形石器5点、石刃1点で、これはタイプA的な性格に相当する。
No.1地点は錐3点、尖頭器1点、削器3点、掻器1点、石核4点という器種のバラエティーに富むタイプB的な内容を示している。
No.2地点は有舌尖頭器1点の単独出土であり、他の出土地点との関りについては確かめられない。
No.3地点はNo.1地点と比較的距離も近く、後者がタイプB的な性格であるのに対して前者は石器に乏しく剝片を主体とするタイプCの様相を呈している。

下層の文化層におけるFブロックと比較すると、No.3地点は調整剝片の多いことからタイプCの中でも終末工程的、換言すれば再加工されることのない剝片の増加する性格を有することになり、Fブロックの再加工可能な素材剝片の多数存在するタイプCとは区別する意味でタイプCとしておきたい。

このように、腰巻遺跡では下層文化層においてAとCの異なるタイプの内容を有するブロックが近距離に存在し、上層文化層においてもA・B・Cという異なるタイプの内容を有するブロックがさほど距離を置くことなく存在することが観察されたことになる。

タイプの異なる性格のブロックが存在することについて、これらが接合関係を有することが検証されれば相互に関りを持つ集団として理解することも可能となるが、本遺跡においては同一の石材を用いていることは推定されるものの直接の接合関係は見られず、むしろ異なるタイプのブロックの組み合わせの様相そのものの存在が当時の人々の生活形態の実態を示しているものと理解しておきたい。

このことが、石器生産拠点における工程上の分業的生産形態としての実態を示すものであるのか、使用目的が異なるための器種選択を反映した結果としてのブロック別のタイプ差であるのか、今後の周辺遺跡のブロック及びユニットの内容分析の実施機会を待ち、さらに検討を重ねていくこととしたい。

第2節　縄　文　時　代

腰巻遺跡の縄文時代の遺構は、明確に指摘できるものは存在しない。
土坑のいくつかについては、その検出状況から縄文時代のものと考えられているが、確実な根拠に欠けるため、とりあえず時期不詳という扱いをしておきたい。

調査区の全域にわたり、包含層より出土した土器片は多岐にわたる分類指標により詳細な区別が可能な内容を持つものである。

しかし、包含層出土という前提のもとでは詳細に区別された土器片群と言えども時間的前後の関係は検証されず、土器片、特にその文様の系統的変化を軸とした編年作業は、本遺跡の縄文時代を理解するうえで適切なものではない。

したがって、今回の観察は出土土器をその特徴から類別し、それらの類別のいくつかの組み合わせについて従来より縄文時代の大きな時間的区分として広く認められた範囲の中で把握しておくにとどめた。

撚糸文系土器群のうち口縁部に縄文または撚糸文を有する1類土器と、口縁部から施文の見られなくなる2類土器、及び胎土中に繊維を含み底部尖底を主体とする3類土器を縄文時代早期とする。

胎土に繊維を含みながらも竹管による刺突文及び斜行縄文を特徴とする4類土器、半截竹管による平行沈線の見られる5類土器、貝殻腹縁をづらしながら施文する特徴のある6類土器を縄文時代前期とする。
なお、斜行縄文及び結節回転文を特徴とする7類土器は過渡期としての性格を有し、縄文時代前期末から中期初頭あたりに落着くものと考えられ、前期として扱うものとする。

細い竹管によるこまかい角押文を充填するモチーフを多用し繊細な文様を特徴とする8類土器隆帯と幅のある角押文により楕円区画や、胎土に多量の金雲母を混入する9類土器、沈線文と磨消縄文を巧みに使いこなした10類土器、8類土器・9類土器・10類土器それぞれの影響下に成立し、それぞれの特徴を取り入れているとされる11類土器を縄文時代中期とする。

12類土器及び磨消縄文と沈線文、縄文を地文とする条線文を特徴とする13類土器を縄文時代後期とする。

14類土器は精製土器と粗製土器によって特徴づけられる縄文時代晩期とする。

ほぼ5つの大きな時期区分のすべてにわたり、腰巻遺跡では土器片を採集できたわけであるが、調査区が南北に長いため、縄文時代の人々の活動の拠点にも変化がみられるのではないかとの視点から、第181図では重量による出土状況分布図の作成を試みた。

第181図によれば、早期の土器群の出土傾向は、リ－11・12・13・15、ヌ－11・12・13の各グリッド、すなわち台地の先端部に集中している。

前期の土器群は、チ－14・17、リ－10・15・16、ヌ－13・15の各グリッドにある程度のまとま

りりを見せている。

中期の土器群は、チ－13・14・15、リ－10・11・12・13・14・15・16、ヌ－11・12・13の各グリッドに集中が見られる。

後期の土器群は、チ－11・13・14・15、リ－10・11・12・13・15・16、ヌ－11・13・15の各グリッドに集中が見られる。

晩期の土器群は、リ－10・11・15、ヌ－11・14の各グリッドにある程度のまとまりを見せている。

上記の観察結果によれば、チ－14グリッドにおいて早期から徐々に遺物量を増しており、この傾向はリ－10グリッドでより顕著なものとして示されている。
ともに、全時期を通して遺物の出土が顕著であることを示している。

また、リ－11とリ－12グリッドでは早期に豊富な出土量を計りながらも前期では激減し、中期・後期で急増したのもつかの間に晩期では他のグリッド同様に激減する。

リ－15グリッドでは前期に急激に増加し、中期以降には他のグリッドとは反対に激減しており特異な状況を示している。
腰巻遺跡全体の状況は、前期に著しく土器量が減少する中にあって、リ－15グリッドのみに全時期を通して最大量の集中が見られ、当該時期の中心的な生活拠点であったことがわかる。

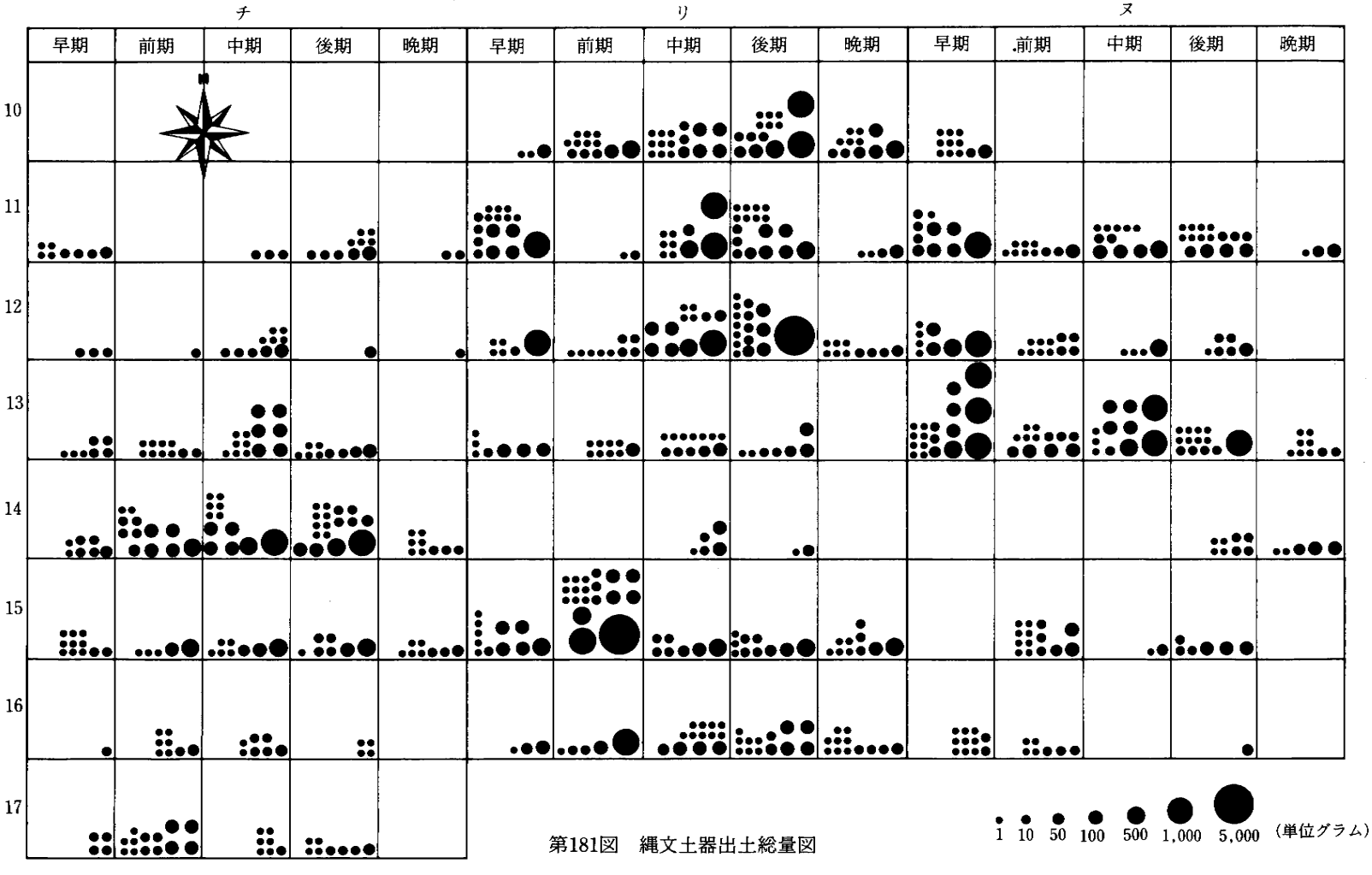
さらに、中期・後期には再び北端の台地先端部に土器量の集中が見られるようになり、晩期には全ての地区において土器量の激減が見られる。

早期11,481グラム、前期11,886グラム、中期14,239グラム、後期15,492グラム、晩期2,267グラムが各時期の土器片出土量の小計であるが、土器量は早期から順調に増加していき後期で最もピークに達していることがわかる。

参考までに中期勝坂式土器（復製品）器高30cm・口径20cm・器厚0.8～1.2cm程度のもので１個体2,500グラム、後期加曽利B_3式土器（波状口縁と磨消縄文を特徴とする実物）器高21cm・口径20cm・器厚0.6～0.8cm程度のもので１個体1,000グラムである。

早期から後期にわたる土器量増加と晩期における急激な減少は、単に粘土消費量のみに関るのではなく、土器の用途や適合性といった機能面による土器生産技術の発達に裏付けられた土器形態の多様化を象徴していることも考慮しなければならないことは言うまでもないことである。

こうした視点から腰巻遺跡の縄文時代を観察すると、各時期とも数個体分の土器量の検出であることがわかり、台地上に住居跡等の定住を示す遺構もなく遺物の分布も台地の先端部を好む傾向が窺えることから、季節的なキャンプまたは狩猟の場所として利用された台地である可能性が強い。



第181図　縄文土器出土総量図

第3節　古墳時代・歴史時代

腰巻遺跡の特色を最も表わしているのは、斜面に構築された住居跡群である。
第3節では、住居跡出土の遺物について概観するとともに、住居跡群の存在した背景についても若干の考察を加えることとしたい。

1　住居跡出土の遺物

古墳時代の集落出土の遺物に関しては、最近ようやく千葉県内全域にわたる集成と編年案が提示されてきており、特に坏形土器の場合には従来からの系統上にあるものと、須恵器の模倣坏の存在することなどを根拠とする編年作業が試みられている。

佐倉第三工業団地内には当該時期の遺跡として、昭和59年度に『タルカ作遺跡』を刊行するにあたり、最近の編年案の傾向を踏まえながら4つの大きい群別に各器種の分類を行なった。

腰巻遺跡の出土遺物に関しても、タルカ作遺跡で行なわれた分類基準により整理し、表示することとした。(第182図・第183図(1)及び(2))

第1群・第2群の土器は本遺跡においては該当する遺物はない。

第3群の指標は、口縁部立ち上がりの発達した明瞭な受部を有する、いわゆる羽釜状の形態を引き継ぐ須恵器坏身で、本遺跡に該当する遺物は見られない。

第4群の指標は、口縁部立ち上がりの短小化と器形の小型化の窺われる須恵器坏身を伴うグループであり、9号住居跡出土の須恵器坏蓋（9－12）は陶邑編年のII型式第1段階相当と考えられる。

9号住居跡は、口縁部と体部の境に明瞭な段を残すC類模倣坏（9－4）をはじめ、口縁部と体部の境に稜線を残すことで僅かに受け部を表現するC類模倣坏（9－5)、E類模倣坏（9－5)、F類（9－6）といった土師器坏を出土している。

伴出する須恵器の観察によれば、9号住居跡の出土品は第4群として分類されるが、土師器坏の内容には第3群的な要素を残すものも含まれる。

なお、9号住居跡出土の高坏は坏部の中央に稜を有しており、口縁部はこれを境に外反し、甕（9－30・34・37）は長胴タイプで小振りの口縁部はくの字状に小さく外反する。

特殊遺構出土の須恵器坏身は、小型化した器形のうえ、口縁部はさらに短小化して強く内傾する陶邑編年のII型式第5段階から第6段階相当であり、今回新に第5群として分類を追加するとともに、『タルカ作遺跡』における分類の際、第4群とした4号住居跡の尖底状の須恵器坏身(4－12）は、新設の第5群中に編入させるのが適当と考えられ、加筆・訂正しておきたい。

第5群中には前述の特殊遺構をはじめ、1号住居跡～8号住居跡、10号住居跡～13号住居跡の出土遺物が該当する。

この中で、7号住居跡出土の土師器坏（7－4）は、口縁部と体部の境の稜線が形骸化してお

り、伴出する高坏は比較的大型で、坏部の中央に稜線を有し、丸味を持つ体部とは対照的に口縁部はこれを境として大きく内弯ぎみに外反する。

6号住居跡出土の高坏（6－4・5）は、やや小型ながら7号住居跡出土の高坏と同形態を示しており、ともに第5群中に含まれるものと考えられる。

その他第5群とした土師器坏の口縁部と体部の境の稜線は、全く意識されておらず、口縁部にヨコナデ調整を行なうことで僅かに体部と区別されるつくりとなっている。

このような坏は、1号住居跡（1－2）、2号住居跡（2－4・5・6）、4号住居跡（4－1・5）、10号住居跡（10－2）、13号住居跡（13－1・3・8）、15号住居跡（15－1・2）に見られ、1号住居跡には口縁部が著しく小さくて胴部からそのまま直立する小型甕（1－5）、比較的口頸部のしまりの弱い甕（1－10・11）、胴部からそのまま延長されたような口縁部を有する甑（1－7）が伴出している。

2号住居跡では、須恵器坏蓋2点、須恵器坏身1点が見られ、口縁端部は緩やかに内反する。また、2号住居跡には胴下半部のみの遺存ではあるが、丁寧なヘラミガキの施された甕が伴出している。

10号住居跡は須恵器坏蓋（10－1）を出土しており、9号住居跡出土の須恵器坏蓋（9－12）と2号住居跡出土の須恵器坏蓋（2－1・2）の中間的な形態を示しているものと考えられる。また、10号住居跡は底部平底の椀形土器（10－5）を伴出しており、同様な椀形土器は12号住居跡（12－3）においても出土している。

なお、3号住居跡出土のワイングラス状の台付甕（3－1）に伴出する遺物はないが、千葉市大北遺跡015号住居跡において、胴下半部にヘラミガキの見られる甕とともに検出されており、第5群として分類されるものである。

なお、前出の特殊遺構には2個体分の横瓶が出土している。
横瓶はいづれも中央部分の口頸部から沈線を周廻させており、この部分が製作時の接合部にあたるものと考えられる。

横瓶は口縁部及び口唇部の単調なつくりが美濃須衛窯址群の老洞古窯跡群1号窯及び稲田山古窯跡群第11号窯出土の横瓶と形態的に類似するが、確定はできない。
また、陶邑II型式第6段階及びIII型式第2段階において、内面に同心円文のある横瓶が生産されており、形態的にはやや印象が異なるものであり、直接的な時期決定の根拠とするわけにはいかないものの、特殊遺構に関連する遺物が一時期に堆積したことは出土状況より明らかであることから、本遺構の成立を陶邑編年のII型式第5段階からIII型式第2段階相当の時間の幅で理解しておきたい。

なお、同時に検出された3個体の須恵器甕は、均整のとれた搬入品であり、おそらく東海地方のいづれかの古窯跡を生産地とするものと考えられるがいづれも尖底状の丸底を呈しており、底部タタキ出しの省略化は見られない。

底部径が広く、口縁部径とあまり差のない扁平な印象を与える須恵器坏身（23－1）を出土する23号住居跡は、第5群につぐ第6群として新たに分類しておきたい。

次に、須恵器坏身とともにロクロ使用の土師器坏を出土するグループを第7群として新たに分類する。

第7群には14号住居跡・16号住居跡・17号住居跡・18号住居跡・19号住居跡・20号住居跡・21号住居跡・22号住居跡が該当する。

14号住居跡出土の須恵器の長頸壺（14－2）は、きわめて粗雑な胎土であり、肩口の丸味の強い後出的な印象を与えている。

甕（14－1）は、胴部に張りのない口縁部が急角度で外反する器形であり、第6群の甕に見られる諸特徴と同様な傾向にある形態を示しており、このタイプの甕は本遺跡においては第6群と第7群としての分類の指標の一つである。

また、14号住居跡には胴部に穿孔して甑として利用したものと考えられる小型甕（14－4）を伴出している。

16号住居跡は、口縁端部がかるくつままれて屈曲し、頂部のつまみは扁平で回転を利用したヘラケズリの見られる須恵器蓋（16－2）が特徴である。

伴出する須恵器坏身（16－3）は、平底で口縁部径と底部径の差は小さく、ロクロ使用の土師器の坏もやや幅広の器形を呈するが、口縁部と底部径の差は小さい。

また、土師器の甕で、胴部の丸いもの（16－4）は小型であり、器高の大きなものは口頸部の大きなしまりの弱いタイプとなっている。

須恵器の甕（16－7）は、肩口の張りが強く、口頸部の強くしぼり込まれた器形で、口縁部は先端部分で折り返し口縁となっている。

17号住居跡は、ロクロ未使用の坏が17－1・2・3・5・7であり、このうち3・5・7は平底に近い形態である。

また、ロクロ使用の土師器坏は、17－6・8であり、須恵器の坏身（17－4・9）の底部はいづれも回転ヘラ切り後の調整、9の底部付近には回転ヘラケズリ調整が特徴である。

甕は、胴部の丸い小型甕と、口唇部が単調なつくりとなる大型の甕が見られる。

18号住居跡は、すべてロクロ使用の坏である。

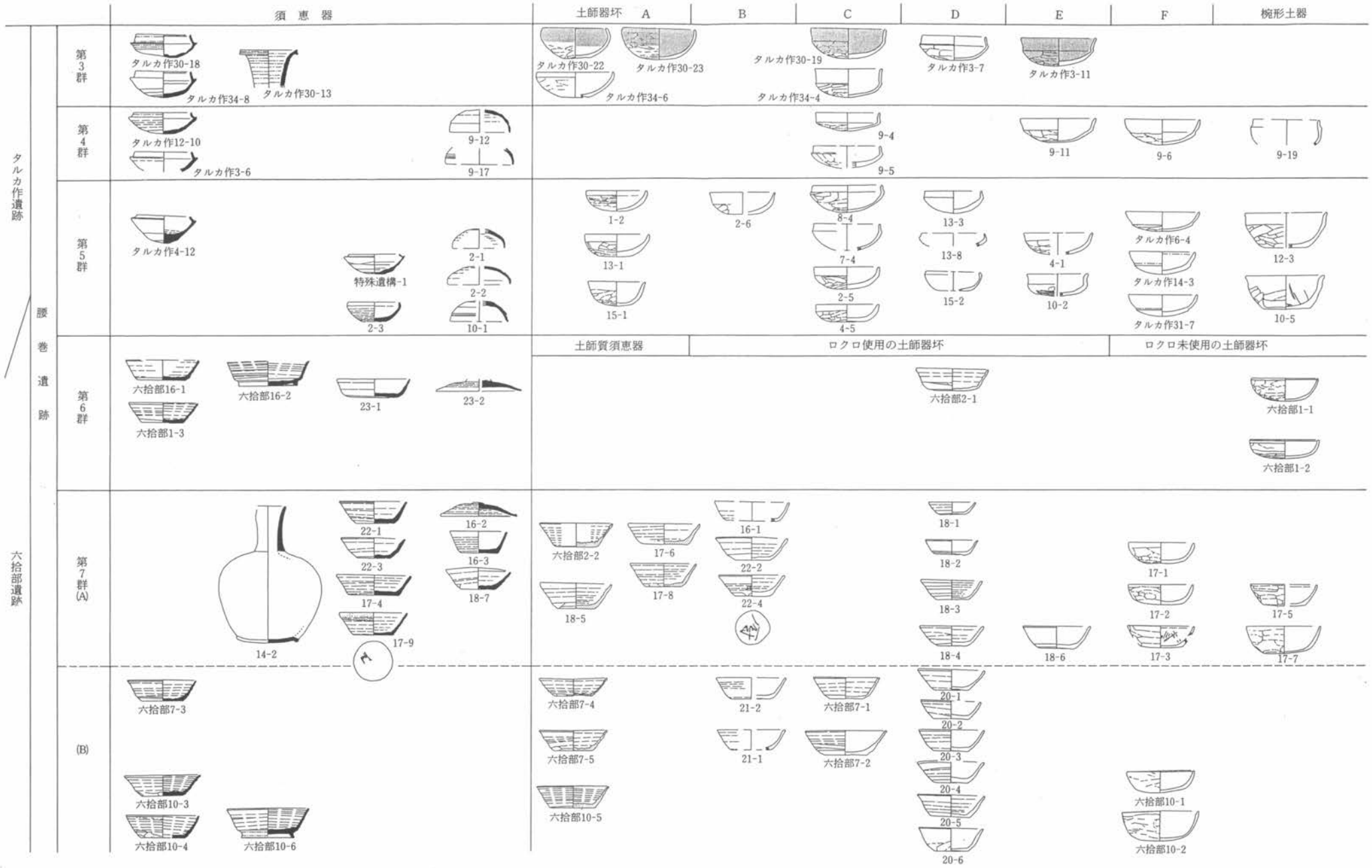
18－1・2・3・4・6は土師器坏であり、底部は回転糸切りの後、周囲に回転ヘラケズリ調整と底部付近に回転ヘラケズリを特徴とする1・2・3と、底部の糸切り痕を残したまま調整されていない4、6が見られる。

5は、土師質の須恵器であり、いわゆる黒色処理の行われたクスベ土器ではない。

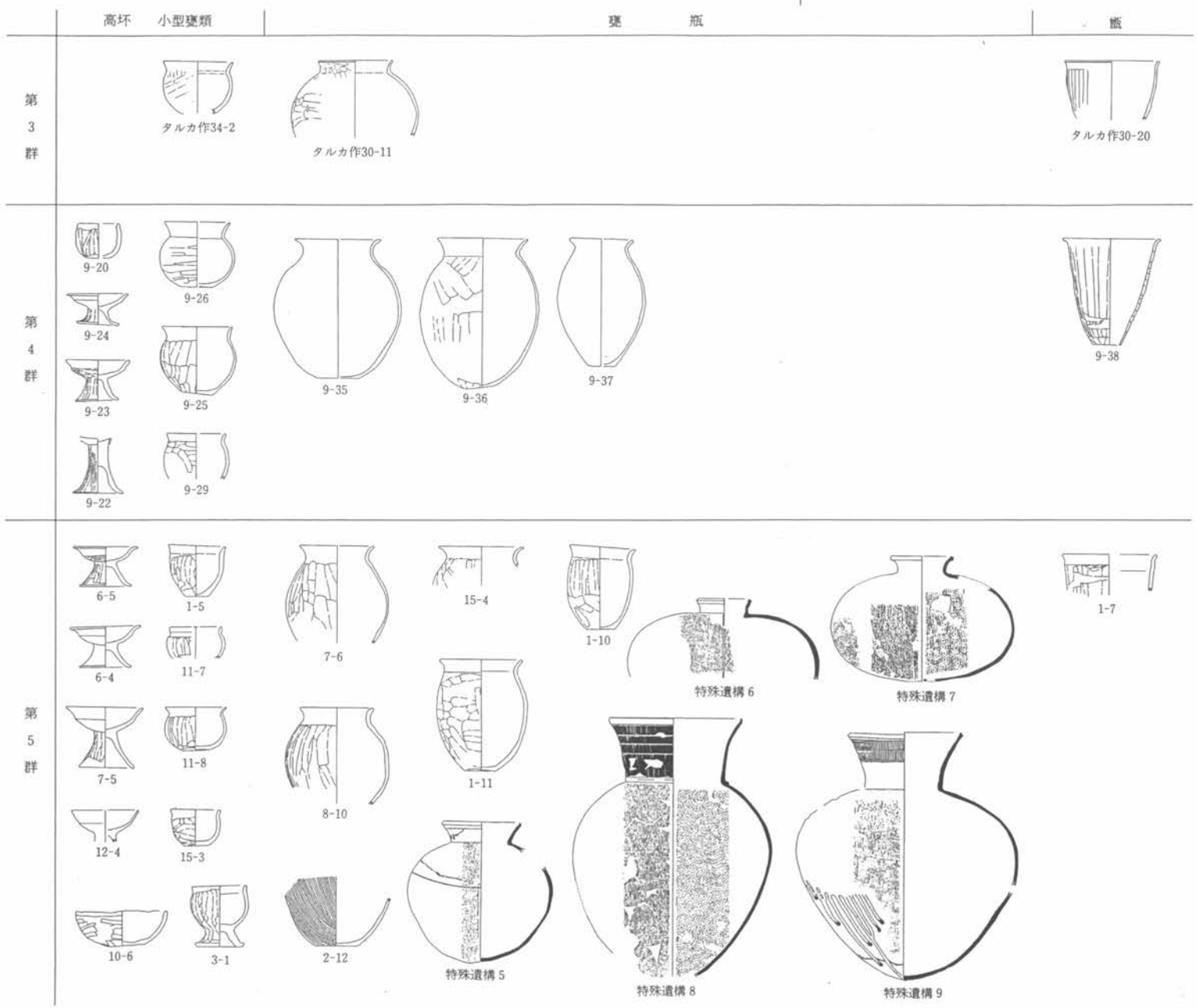
5の土師質須恵器と7の須恵器は、その形態においてもきわめて類似している。

甕は、大小の形態が異なるものを伴出し、17号住居跡と同じ様相を呈している。

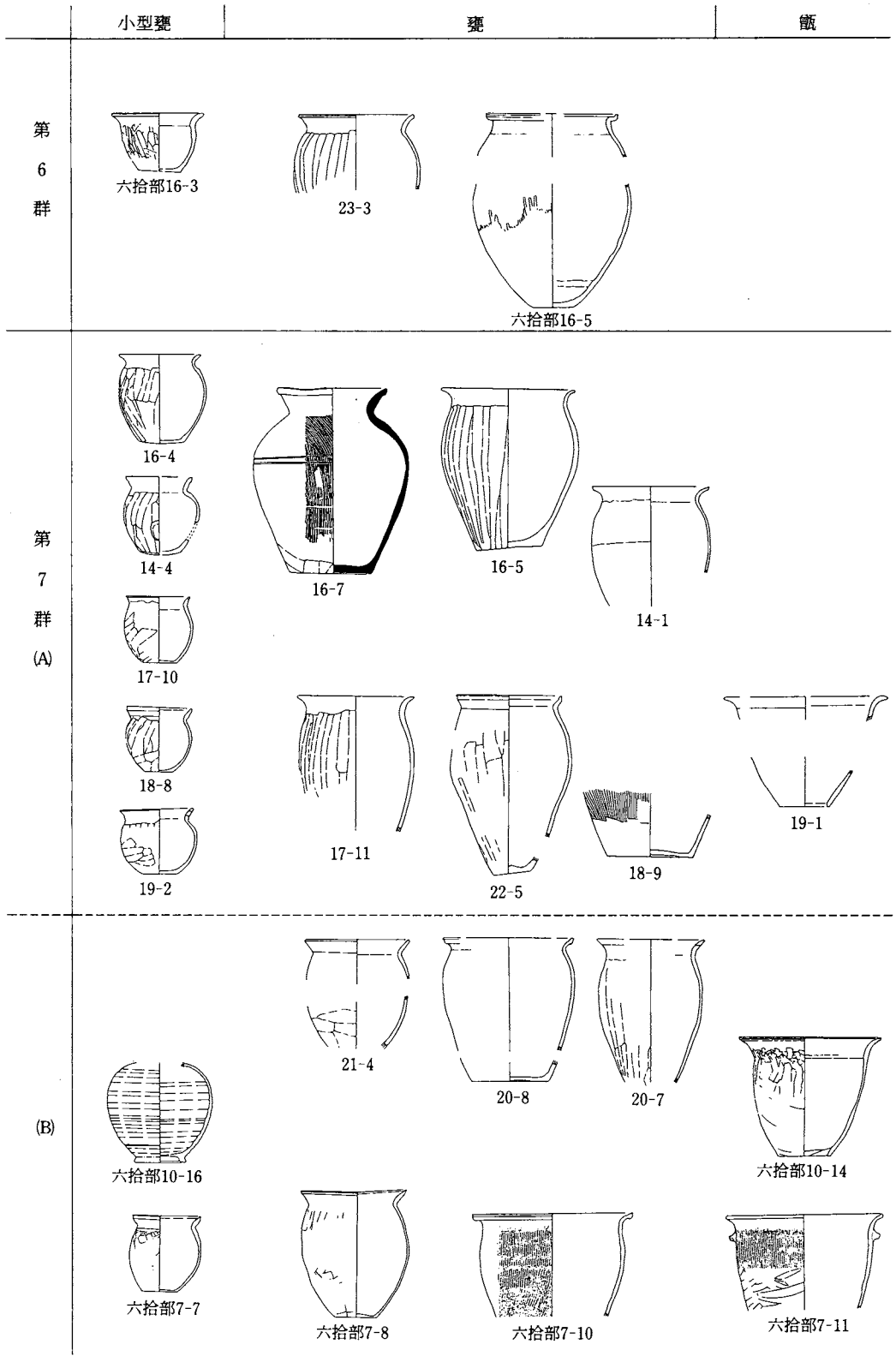
19号住居跡は、出土遺物に乏しく断定し難いが、小型甕（19－2）は17号住居跡及び18号住居



第182図　腰巻遺跡古墳・歴史時代土器分類表（住居跡番号－挿図番号）



第183図　(1)腰巻遺跡古墳・歴史時代土器分類表



第183図　(2)腰巻遺跡古墳・歴史時代土器分類表

跡出土の小型甕と差のないものである。

22号住居跡も坏はすべてロクロ使用である。

土師器坏は、底部に回転ヘラ切りの痕跡と底部付近に回転ヘラケズリ調整のもの(22－2)、底部に回転ヘラ切り後の一方向のナデ調整と底部付近に手持ちヘラケズリ調整のもの（22－4）がある。

須恵器の坏身では、底部に回転ヘラケズリ後の方向のナデ調整と底部付近に手持ちヘラケズリ調整のもの(22－1)と、底部に回転ヘラ切りの痕跡と底部付近に回転ヘラケズリ調整のもの(22－3）がある。

土師器坏及び須恵器坏身の技法の観察によれば、17号住居跡・18号住居跡・19号住居跡・22号住居跡いづれも同時期のものである可能性が強い。

以上の住居跡とは少々内容の異なる住居跡が2軒存在する。

すなわち、いづれも須恵器を伴出せず、ロクロ使用の土師器坏が主体となる器種構成を示す住居跡である。

20号住居跡出土の坏は、底部に回転糸切り後のナデ調整のみのもの(20－1)、底部に回転ヘラ切りの痕跡と底部付近に回転ヘラケズリの調整のもの（20－2・4)、底部に切り離し後のナデ調整と底部付近の回転ヘラケズリの調整のもの（20－3・5）がある。

21号住居跡のロクロ使用の土師器坏（21－1・2）も、底部に回転ヘラ切りの痕跡と底部付近の回転ヘラケズリ調整が見られ、20号住居跡と同時期のものと理解しておきたい。

以上の観察結果から、腰巻遺跡における竪穴の変遷を考えてみたい。

9号住居跡と特殊遺構の含まれる谷津の場合について検討すれば、9号住居跡がやや先行し、特殊遺構及び第5群の各住居跡である7号住居跡・8号住居跡・10号住居跡・13号住居跡・15号住居跡が古墳時代最終末の集落を構成していたものと考えられる。

これに続き、14号住居跡・16号住居跡が現われるものの、この2軒を最後に谷津周辺から竪穴は消滅し、台地の反対側にあたる北斜面の縁辺部に展開する第7群の17号住居跡・18号住居跡・19号住居跡・22号住居跡及び20号住居跡と21号住居跡への変遷の可能性が考えられる。

2　腰巻遺跡における竪穴構築の背景

腰巻遺跡の最も古い時期にあたるグループ内に、谷津の谷底部分に位置する9号住居跡が該当することに本遺跡の特色がある。

古墳時代後期の集落の立地については、タルカ作遺跡において確認されたごとく、台地の平坦部を中心に考えられてきた。

9号住居跡がこのような谷底に存在し、しかも一竪穴出土の遺物としては特異な出土数を示すことから、本住居跡が谷津を利用する目的のもとに成立したことを想起させるのである。

台地に入り組む谷津の開発は、古墳時代全般を通して行なわれたものと考えられるが、後期群集墳の盛んにつくられた7世紀においては、組織的に新田の開発も可能であったと考えられる。

労働の単位は血縁・地縁で結ばれた家族及び一族による形態から、帰属する社会の膨張とそこから生ずる矛盾の中で動員の対象となった人的資源の投入による新田の開発の一端が、腰巻遺跡の竪穴の変遷の原因の一つと考えられる。

常陸国風土記・行方郡の条によれば、箭括氏麻多智による谷津の開墾に関して、当時の人々の生産に対する計り知れない意欲と夜刀の神に対する恐れの意識が切実に表現されている。

彼らの恐れた夜刀の神とは、蛇おそらくマムシのことと思われるが、「…蛇の身にして、頭に角あり。率引して、難を免るる時、見る人あらば、家門を破滅し、子孫継がず。凡て、此の郡の側の郊原に甚多に住めり。…」とあり、むしろ八百万の神の一つとして信心にも似た心境が語られている。

風土記はさらに、「…今より後、吾、神の祝と為りて、永代に敬ひ祭らむ。…」として社を建て（夜刀社）自ら神官となってまつりを行なったと伝えている。

9号住居跡の多数の坏と甕は、台地の縁辺にはりつくように開墾された水田に働く小集団により、夜刀の神との争いの中で行なわれた7世紀後半の一族的開墾の痕跡を示すものとして考えられるのである。

7世紀後半は、律令体制の基盤とも言うべき徴税制度の確立が全国規模で実施され、戸籍の作成と戸籍に基づく定期的な耕地の割換制度が導入された。
いわゆる班田収授の制であるが、その実態は大化改新により唐の土地公有制度である均田法にならい、耕地を耕作者に口分田として給し、一代限りの耕作を保障したものである。

職員令によれば、諸国の戸口名簿、諸国の田、渠池・山川・藪沢は民部省の管轄とされ、国司は戸口・簿張、勧課農桑、田宅・徭役、郡司の監察を職掌とし、郡司は直接に農民と農業経営の管理を職掌としており、里長（郷長）も郡司と同様の効果のもとに7世紀前半までの存地の豪族の末裔を体制内に組み込む施政が展開された。

また、賦役令義解によれば、国司・郡司に河川堤防の管理・修営を義務づけ、雑徭の徴発が500人を超えるときには中央政府に報告させることとしており、前代において古墳の造営に動員されたであろう農民は、和銅3年（710年）平城京遷都に伴う造営工事直後の帰郷民の多くが飢餓のため路傍にて死んだことを記した続日本紀の例をはじめ、国家的事業から国郡単位では手に負えない災害復旧工事までも動員の対象となっていたことが窺われる。

災害復旧工事の際には、中央政府に直属する解工集団、養老5年（721年）に医卜方術にすぐれた者として賞賜の対象となった恵我宿祢国成・河内忌寸人足、堅部使主石前らに代表される施工技術者を、天平宝字5年（761年）の陂池の堰堤構築の適地調査、神護景雲3年（769年）の尾張国鵜沼川の大洪水に関するごとく派遣し、天平宝字6年（762年）の決壊した狭山池堤の修営には、83,000人もの徭役を動員したことが続日本紀に記述されている。

こうした雑徭のうち、国司、郡司による小規模な灌漑施設工事もまた徭役に依存してくり返され、早くも編戸の民に疲弊による没落の現象が見られるようになるのである。

前出の常陸国風土記は、「……壬生連麿（ミブノムラジマロ）、初めて其の谷を占めて、池の堤を築かしめさ。時に、夜刀の神、池の辺の椎株に昇り集まり、時を経れども去らず…」として再び谷津を開墾しようとした壬生連麿の前に夜刀の神が現われるが、箭括氏麻多智の時とは異なり、実力行使により夜刀の神を排除する様子を伝えている。

壬生連麿は池の堤を構築し、池の水を灌漑に用いることを意図している姿が示されており、その造成工事には編戸の農民も徭役として動員されたであろう事を窺わせ、同時に風土記編纂の官令が和銅6年（713年）に下され常陸国風土記が養老7年（723年）に当時、安房・上総・下総の按察使に任ぜられた常陸守藤原宇合により編纂を終えていることから、8世紀初頭前後の墾田開発の一端を示しているものと考えられる。

腰巻遺跡において、谷津を墾田化する試みを9号住居跡の存在に求めたわけであるが、この手狭な入り組みを呈した谷津は口分田として当初より編戸に給するタイプの湿地ではなく、新たに開墾された新田としての理解が適当と考えられる。

9号住居跡は、竪穴内に残された多数の日用雑器を使用する集団の集う建物であり、これを率いる統率者はかつて古墳の被葬者として所衆に遍く君臨した首長の末裔などを中心とした一族的な経営体の長であり、おそらく付近の水田に必要な水の権益を有する実力の持ち主であろう。

当時の開墾の規模が、谷津の全域にわたっていた痕跡は見あたらないが、腰巻遺跡の台地の縁辺近くの谷津を水田とした場合、夏季の乾燥と雨後の冠水を調整するためには谷津の水源ともなっている岩富地区に池を構築するのが最も有効な手段である。

工業団地の造成により現在は消滅してしまったが、岩富地区には最近まで腰巻遺跡の下に広がる谷津の最も奥まった部分に池が存在しており、谷津に水田を所有する神門地区の人々により利用されていたことが確認されている。

また、この池には、岩富地区の尾根頂部に位置する通称『せいしばの池』（明治36年に創立し、大正中期に市内鏑木へ移転するまで製糸工場弥富館が所在したため、地元の人々の愛称となっている。）から絶えることなく水が流入していたことが地元の人々により指摘されている。

『せいしばの池』の半分は厳寒期においても凍ったことがないことも伝えられており、現在でも湧水は豊富なようである。

造成でその姿を消したとはいえ、こうして流入した水を池として管理したであろうことは、古墳時代においても充分に可能であったと考えられる。

さらに、この池を見下ろす北側の台地上には、長軸及び直径がそれぞれ50mにも及ぶ二重周溝の前方後円墳と円墳を含む古墳時代後期の群集墳が犇めいているのである。（池向Ⅰ遺跡）

腰巻遺跡のもう一つの特色を成すのは第7群の住居跡群の存在である。

いづれも台地の縁辺部に位置し、きわめて小形化しており、17号住居跡・18号住居跡・19号住居

跡・22号住居跡の場合にはそれぞれカマドは検出されたものの居住の用を成さないつくりとなっている。

さきの常陸国風土記・香島郡の条は、『…峯谷は犬の牙なし、邑里と交錯れり。山の木と野の草とは、自ら内庭の藩籬を屏て、澗の流れと岸の泉とは、朝夕の汲流を湧かす。嶺の頭に舎を構りて、松と竹と垣の外を衛り、谿の腰に井を掘りて、…』として卜部氏の居住の様子を詳細に記述している。

8世紀の初頭においては、このような居住の形態はめずらしくないことを示す一つの例であろう。

振り返るに、腰巻遺跡の4軒の小竪穴は住居跡と呼ぶにはあまりにも簡略と言わざるを得ない、にもかかわらず、17号住居跡のごとく7枚の坏が次々と重ねられるようにして検出されており、谷津の谷底に所在した9号住居跡とはまた性格の異なる特異さが窺えるのである。
17号住居跡・18号住居跡・19号住居跡・22号住居跡の4軒の竪穴が居住に適していないことは明らかであるが、いづれのカマドも北西または北の壁に構築されており、このことはこれら4軒の竪穴が谷津を渡る南風の季節に使用されたことを示している。

すなわち、他に生活の拠点を有し、同じ地域の水田経営に関りを持つ集団による農作業用の出先の小屋として使用されたものと理解しておきたい。

22号住居跡出土の土師器坏の底部には『厨』の墨書が確認された。
厨は食料を司る役所を意味し、本来は地方の国及び郡衛跡・宮寺跡よりこの墨書が出土している。22号住居跡の場合には、共同の炊出し小屋としてこの器を含む多数の坏を常備しておいたものと考えられるのである。

また、17号住居跡出土の須恵器坏身の底部には『門』の墨書が確認されており、あるいはこれらの竪穴を使用した集団相互または帰属する集団との関係を示しているものとも考えられる。

竪穴の形態にこうした変革をもたらしたのは、一つには谷津の開発状況の変化であり、さらにはこの地域の包括される社会の実態に基づくものであったことは想像に難しくない。

養老6年（722年）の「良田100万町歩の開墾」計画、養老7年（723年）の「三世一身の法」、天平15年（743年）の「墾田永年私財法」、天平18年（746年）の「寺家による土地買収の禁止」、天平勝宝3年(751年)の「富民が私財を出挙して宅地を質にとることの禁止」、天平神護元年(765年）の「寺院以外の墾田開発の禁止」、宝亀10年（779年）の「百姓の銭財出挙の利がし1倍を過ぎることの禁止」、「国司らが規定以上に官稲出挙することの禁止」、延暦2年（783年）の「私寺の新設、寺領の拡大の禁止」、延暦3年（784年）の「国司の私田経営と開墾の禁止」「王臣家・諸司・寺家の山林藪沢の占有禁止」、延暦4年（785年）の「国司による正税流用の禁止」、延暦14年（795年）の「百姓が田宅地を寺に売却することの禁止」、延暦16年（797年）の「親王・王臣家庄長の私佃経営の禁止」という形で、中央政府は8世紀の全期間を通して土地政策に苦慮したことを窺わせている。

中央政府の官命として打ち出される土地政策は、実はそれぞれの時点における懸案となっている社会的実態の進行を裏付けているとも言えるのである。

腰巻遺跡における初期の住居跡は同族的な統率者を頂点とする水田経営による所産であり、同族的な共同作業体がいかに解体、再編成されたのかその原因は一元的なものではないと思われるが、前述の中央政府による墾田開発の積極策は次第に成長しつつあった富裕な勢力に弾みをつける結果となり、後に次々と出される抑制策は富裕な勢力内の消長を招き、国家的な仏教擁護政策と合俟って延暦2年（783年）には禁止令を出さなければならないほどの私寺の増加が見られたものと思われる。

17号住居跡と22号住居跡から出土した『門』と『厨』の墨書土器及び、昭和59年度に調査された工業団地内の六拾部遺跡出土の瓦塔の存在は、こうした背景を窺わせる要因ともなっている。

腰巻遺跡の台地の縁辺部に連なる4軒の竪穴は、実年代が8世紀後半に該当し、戸別の農業経営が行き詰まり、耕地と人の両方ともに富裕な勢力のもとに組み込まれた結果生じる請作的な枠の内で谷津の農作業に携わる集団の炊き出し小屋として使用されたとの理解が可能である。

万葉集にはしばしば仮廬（かりいほ）を枕詞とした歌が見られ、山間・僻地にある田畑の耕作時に用いられたであろう小屋の存在したことを暗示している。

眼下の谷津をはさんだ北方には、ほぼ同時期の六拾部遺跡の竪穴群が邑里を成しており、腰巻遺跡の4軒の竪穴のみで自立した生産・消費の単位集団であった可能性はきわめて薄い。

また、腰巻遺跡の台地上の平坦面には当該時期の遺構が乏しく、おそらく畑または山林として活用の対象となっていたものと考えられる。

なお、腰巻遺跡の9号住居跡に近接して特殊遺構が検出されているが、出土遺物のうち完形品（小型甕とミニチュア土器）は正立して、他の遺物は打ち砕かれて検出されており、きわめて祭祀的に印象を与えている。

常陸国風土記・行方郡の条に見る夜刀の神のごとく、谷津のもつ神秘的な恐怖に対する祭祀であるのか、作物の豊饒を祈願するなど農作業に関る祭祀であるのか探る由もないが、谷津をめぐる人々の開墾にまつわるエピソードを秘めた遺物であることは想像に難くない。

従来、調査の及ぶことの難しい谷津にさえ古代の人々の生活跡の存在することが証明されたわけであり、このことは今後の調査において、先入観にとらわれることなく今回の出土例を検討し、調査範囲の設定が行なわれるよう望まれる。

当該時期の遺跡の性格は、単に検出された遺構・遺物のみでなく、周辺の地理的環境をも含めた生活圏の中で検証されなければならないことが改めて明らかとなったのである。

参考文献

(ア) 新井和之　「黒浜式土器」『加藤晋平、小林達雄、藤本強　編　縄文文化の研究４、縄文式土器Ⅰ』　昭和57年

『荒砥二之堰遺跡』　昭和55年度県営圃場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書　(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団　昭和55年

『木葉下遺跡Ⅰ、Ⅱ』　茨城県教育文化団文化財調査報告第21集、第22集　(財) 茨城県教育文化財団　昭和58、59年

(イ) 石井則孝　「古墳時代（集落の実態Ⅳ)」『古代の集落』　歴史新書34　昭和57年

『石神台貝塚、戸ノ内貝塚』　北総台地における縄文時代後期、晩期貝塚の調査　印旛村史編纂委員会　昭和59年

今村啓爾　「五領ケ台式土器の編年－その細分および東北地方との関係を中心に－」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要、第４号』　昭和60年

岩崎卓也、松尾昌彦　「夜刀の神と開発」『えとのす28常陸国風土記の世界』　昭和60年

「印旛沼周辺の古墳時代後期土器の変遷」　古墳時代後期土器勉強会資料　昭和61年

(オ) 「大北遺跡」　千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　(財) 千葉県文化財センター　昭和61年

(キ) 「木苅峠」　千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　(財) 千葉県文化財センター　昭和50年

「木の根」　成田市木の根No.５、No.６遺跡発掘調査報告書　(財) 千葉県文化財センター　昭和56年

(ク) 「栗山」　小金井市文化財調査報告書Ⅳ　小金井市教育委員会　昭和50年

(コ) 「神谷原Ⅱ」　八王子市椚田遺跡調査会　昭和57年

「小町田遺跡」　国道122号線道路改修工事に伴う埋蔵文化財調査　(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団　昭和60年

「古和田台遺跡」　縄文前期集落址発掘調査報告　古和田台遺跡調査会　昭和48年

「五丹歩遺跡」　主要地方道成田安食線道路改良工事（住宅関連事業）地内埋蔵文化財発掘調査報告書　(財) 千葉県文化財センター　昭和60年

(サ) 酒井清治　「資料紹介各地の初期須恵器をめぐって－関東地方」　檜崎彰一監修『日本陶磁の源流須恵器出現の謎を探る』　昭和59年

坂口勉　「古代人民の生活条件」『古島敏雄・和歌森太郎・木村礎　編集　郷土史研究講座２　古代郷土史研究法』　昭和45年

「佐倉市江原台遺跡」　佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書Ⅱ　(財) 千葉県文化財センター　昭和55年

(シ) 「佐倉市立山遺跡」　佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　(財) 千葉県文化財センター　昭和58年

「佐倉市タルカ作遺跡」　佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　(財) 千葉県文化財センター　昭和59年

「佐倉市星谷津遺跡」　(財) 千葉県文化財センター　昭和53年

(ス) 「新橋遺跡」　新橋遺跡発掘調査報告書　富里村村史編纂委員会　昭和53年

(ス) 特別展　須恵器展　愛知県陶磁資料館　昭和57年

「陶邑Ⅰ・Ⅲ」　大阪府文化財調査報告書第28輯　第30輯　(財) 大阪文化財センター　昭和51年　昭和53年

(セ) 清藤一順　「縄文時代集落の成立と展開」　－国分谷周辺区域における前期、中期として　(財) 千葉県文化財センター研究紀要２　昭和52年

関和彦　「風土記の史的研究の方法」　「古代村落とその周辺」『風土記と古代社会』　昭和59年

(タ) 谷井彪　「勝坂式土器」『縄文文化の研究５、縄文土器Ⅱ』　昭和56年

谷岡武雄　「条里制と古代集落の復元」『古島敏雄・和歌森太郎・木村　礎編集　郷土史研究講座２　古代郷土史研究法』　昭和45年

(ト) 戸沢充則　「日本の旧石器時代」　講座日本歴史１、原始、古代１　歴史学研究会、日本史研究会編集　昭和61年

(ナ) 中村浩　『和泉陶邑窯の研究－須恵器生産の基礎的考察』　昭和56年

「中山新田Ⅰ遺跡」　常陸自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ　(財) 千葉県文化財センター　昭和60年

「No.７遺跡」　新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅴ　(財) 千葉県文化財センター　昭和60年

(ニ) 「新山台遺跡」　東関東自動車埋蔵文化財調査報告書　(財) 千葉県文化財センター　昭和60年

西弘海　「七世紀の土器の時期区分と型式変化」『土器様式の成立とその背景』　昭和61年

西村正衛　「阿玉台土器の編年」　「千葉県香取郡神崎町新貝塚」　「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚」『石器時代における利根川下流域の研究－貝塚を中心として－』　昭和59年

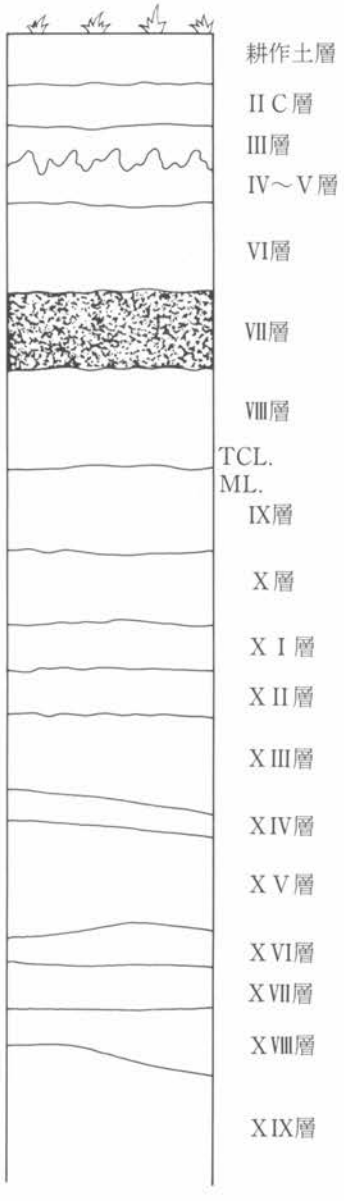
「日本史年表」　東京学芸大学日本史研究室編　昭和59年

(ヌ) 「貫井」　小金井市文化財調査報告書Ⅴ　小金井市教育委員会　昭和53年
(ネ) 「根崎遺跡」　千葉都市モノレール関係埋蔵文化財発掘調査報告書　(財) 千葉県文化財センター　昭和61年
(ノ) 八賀晋　「古代の農耕と土壌」『竹内理三編　古代の日本2　風土と生活』　昭和46年
(ハ) 「飯山満東遺跡」　千葉県都市公社　昭和50年
(ヒ) 「常陸国風土記（行方郡及び香島郡の条）」『風土記』　秋本吉郎校注日本古典文学大系
「平賀」　平賀遺跡群発掘調査報告書　平賀遺跡群発掘調査会　昭和60年
(フ) 古内茂　「先土器時代遺跡の構造について」　－特に木苅峠遺跡を中心として－　『研究紀要Ⅰ』　(財) 千葉県文化財センター　昭和51年
(ホ) 「房総における奈良、平安時代の土器」　シンポジウム資料史館同人　市立市川考古博物館　昭和58年
(ミ) 「三反田遺跡（一、二次）」　茨城県勝田市教育委員会、三反田遺跡調査会　昭和53年
「美濃須衛古窯跡群資料調査報告書」　各務原市教育委員会　昭和59年
(ム) 「向台遺跡」　主要地方道成田安食線道路改良工事（住宅関連事業）地内埋蔵文化財発掘調査報告書　(財) 千葉県文化財センター　昭和60年
(メ) 森本伊知郎　「勝坂式土器の文様様成について」－関東と中部における比較－信濃史学会　信濃第37巻第4号　昭和60年
(モ) 「六拾部遺跡」　佐倉市教育委員会　昭和61年

写真図版

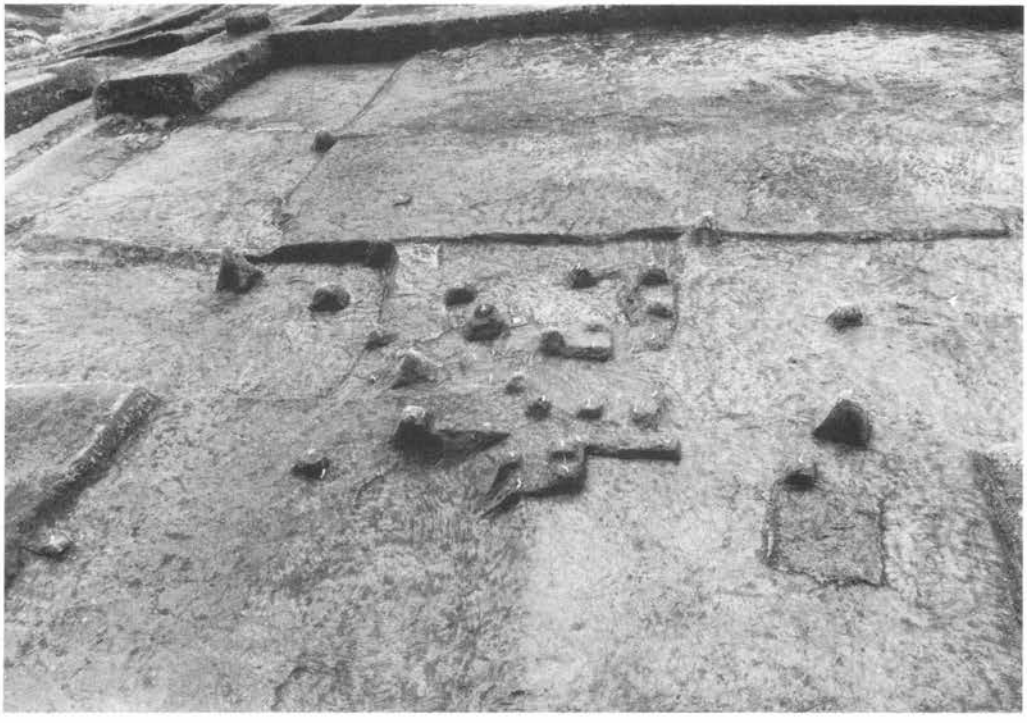
昭和56年度腰巻遺跡調査区

昭和57・58年度腰巻遺跡調査区

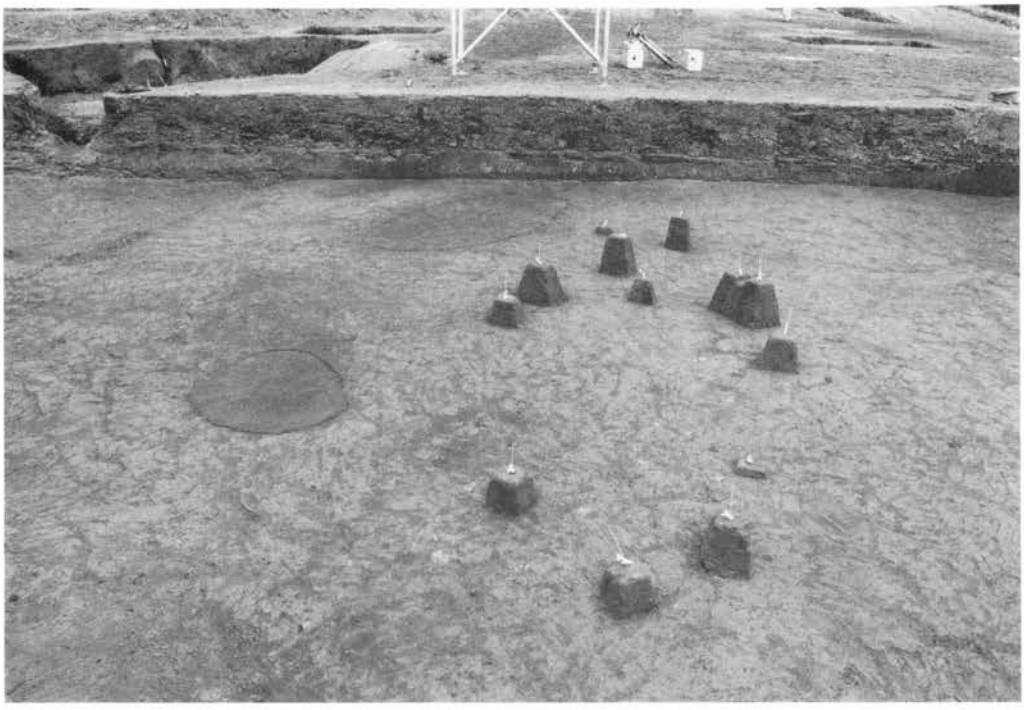

耕作土層
II C層
III層
IV～V層
VI層
VII層
VIII層
TCL.
ML.
IX層
X層
X I 層
X II層
X III層
X IV層
X V層
X VI層
X VII層
X VIII層
X IX層

腰巻遺跡の層序

先土器時代・Aブロック



先土器時代・Bブロック

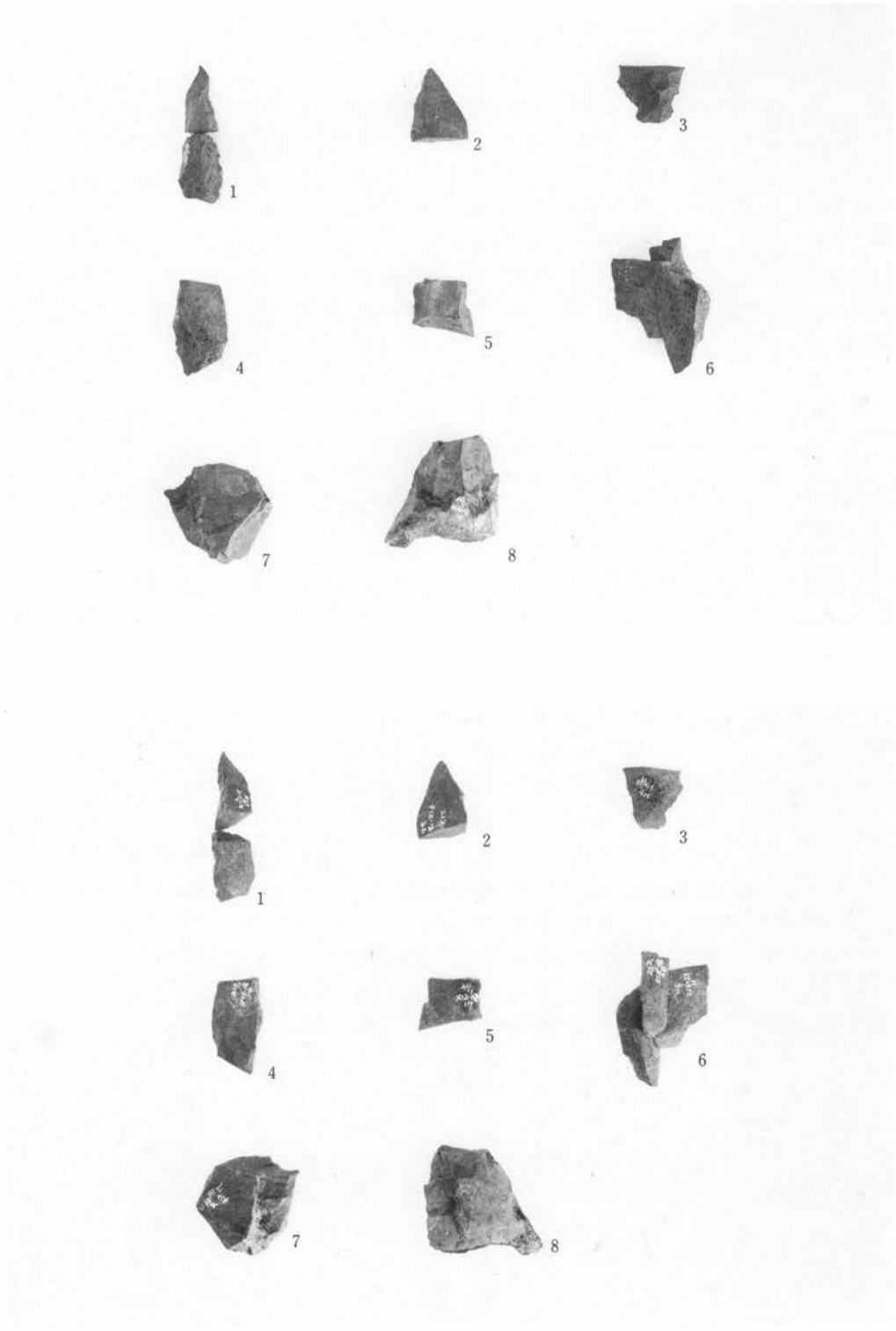


先土器時代・Cブロック

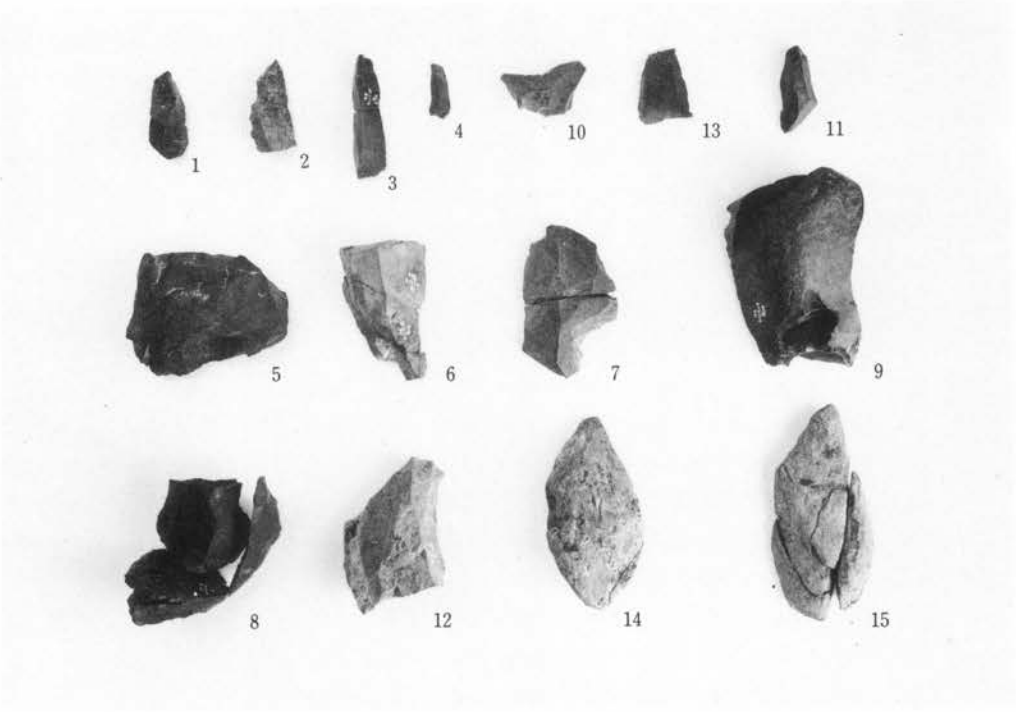
先土器時代・Dブロック

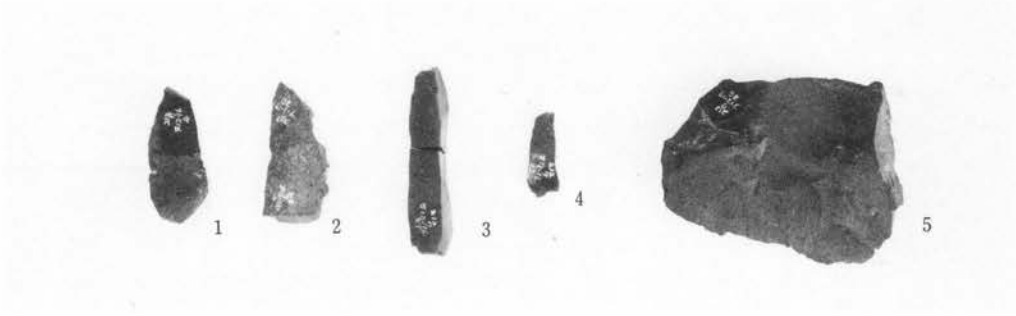
先土器時代・Fブロック

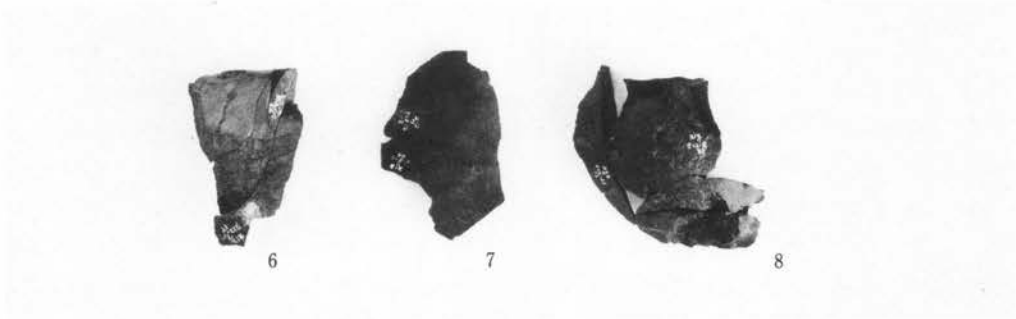
先土器時代・№1地点



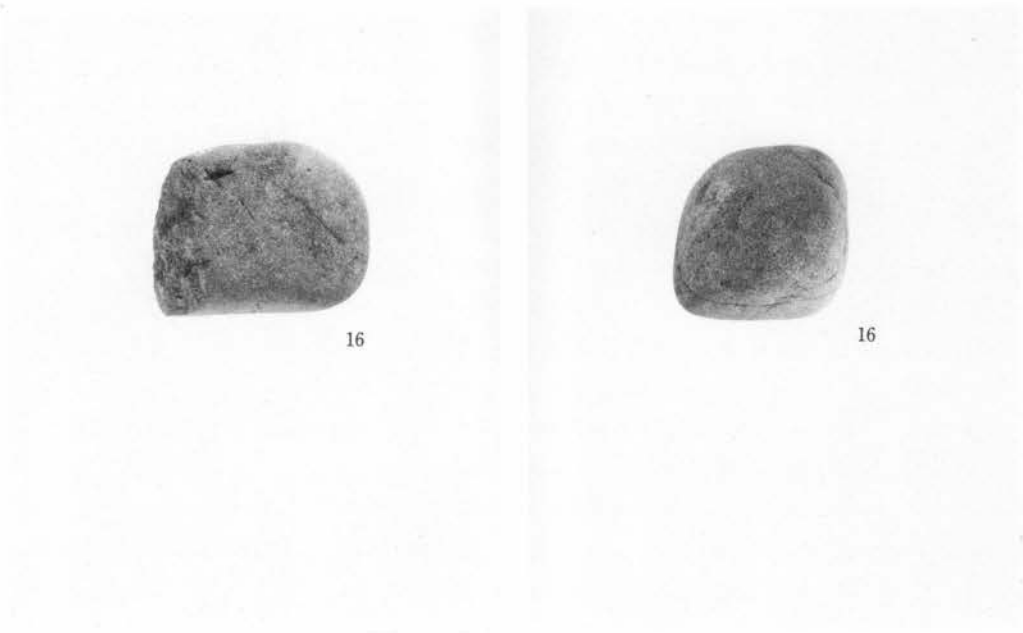
Aブロック出土遺物



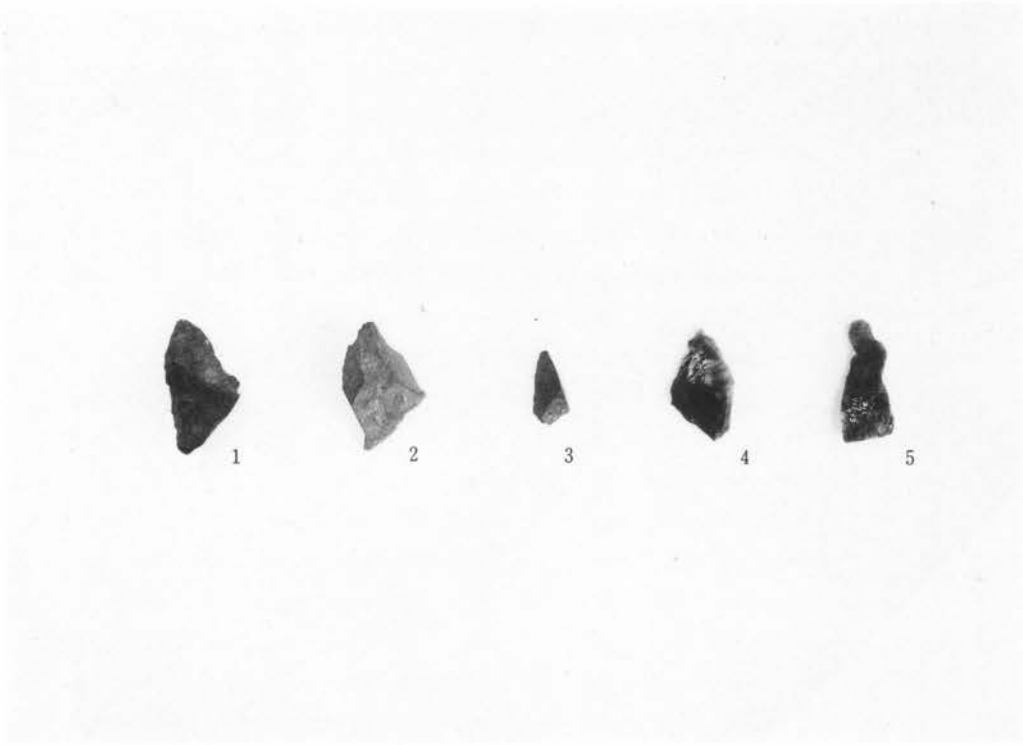




Bブロック出土遺物 (1)

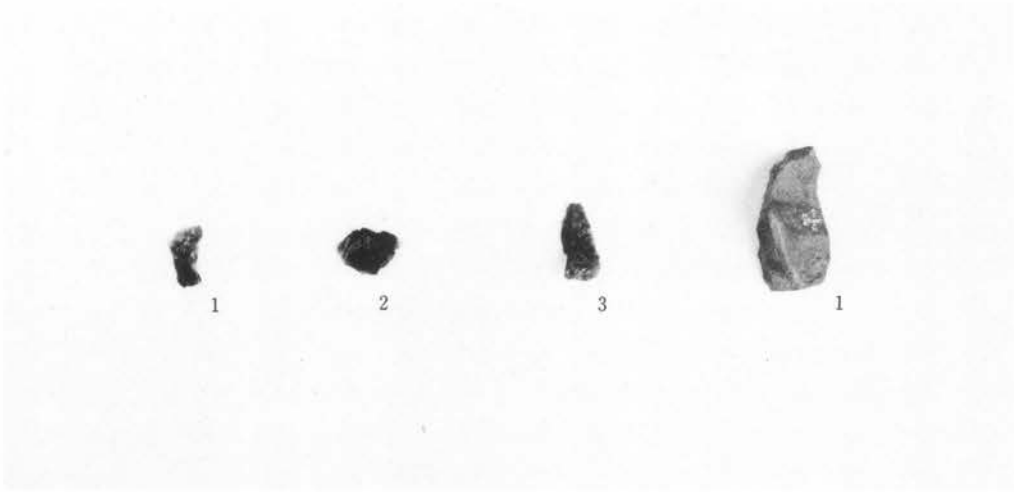


Bブロック出土遺物 (2)



Cブロック出土遺物

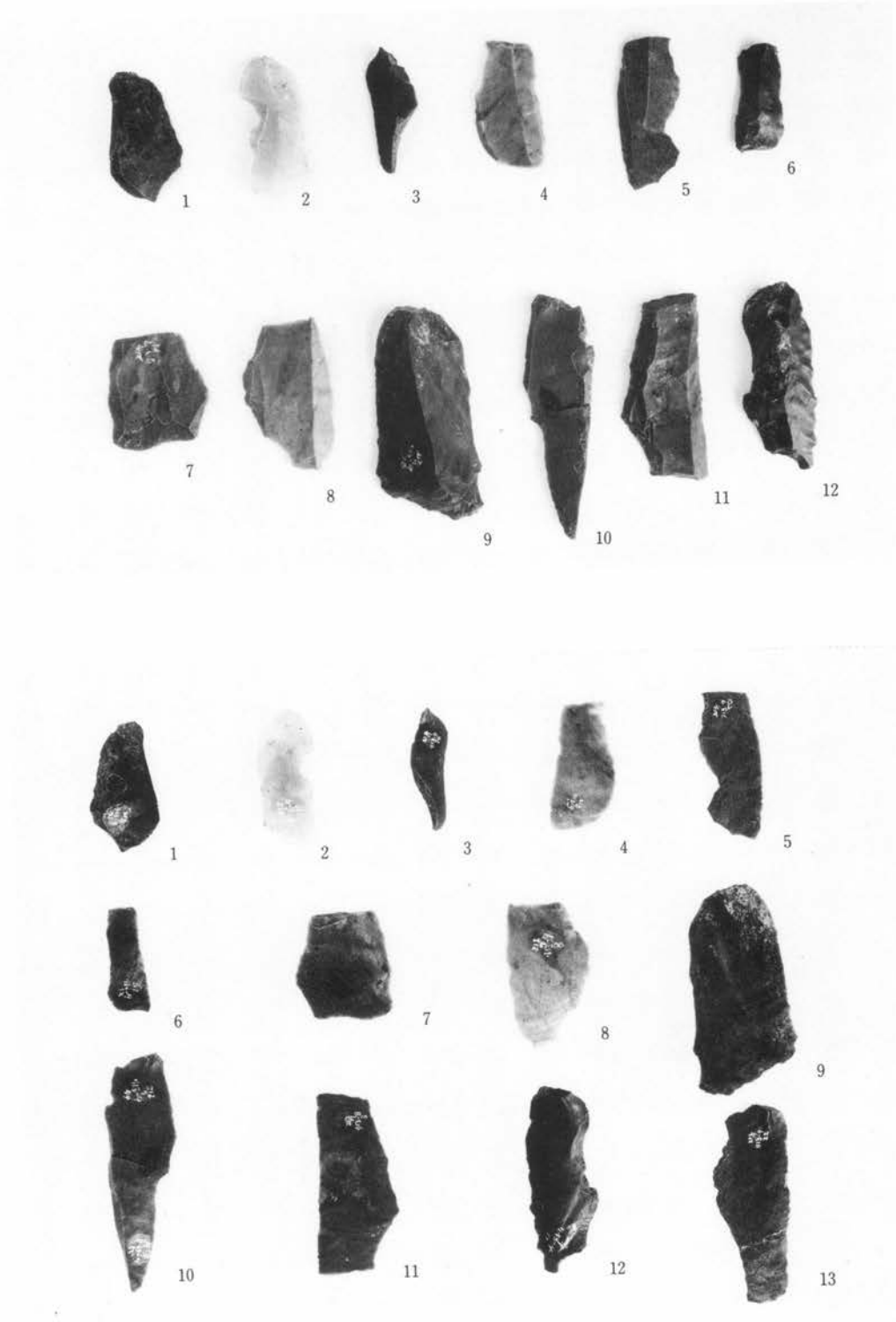
Dブロック出土遺物



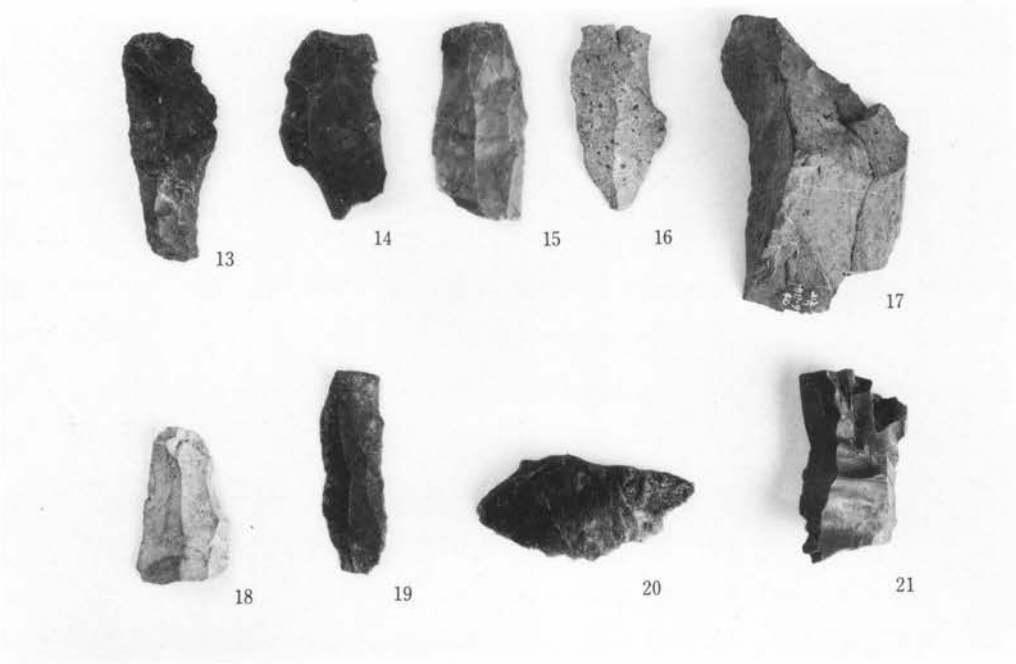
Hブロック出土遺物

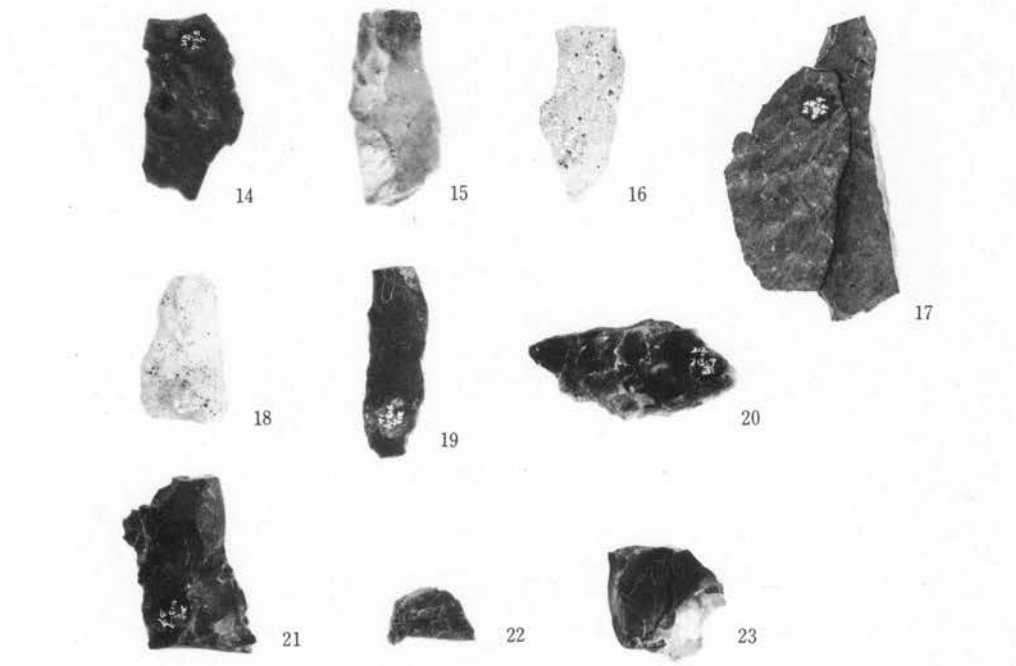
Eブロック出土遺物　(1)

Eブロック出土遺物　(2)

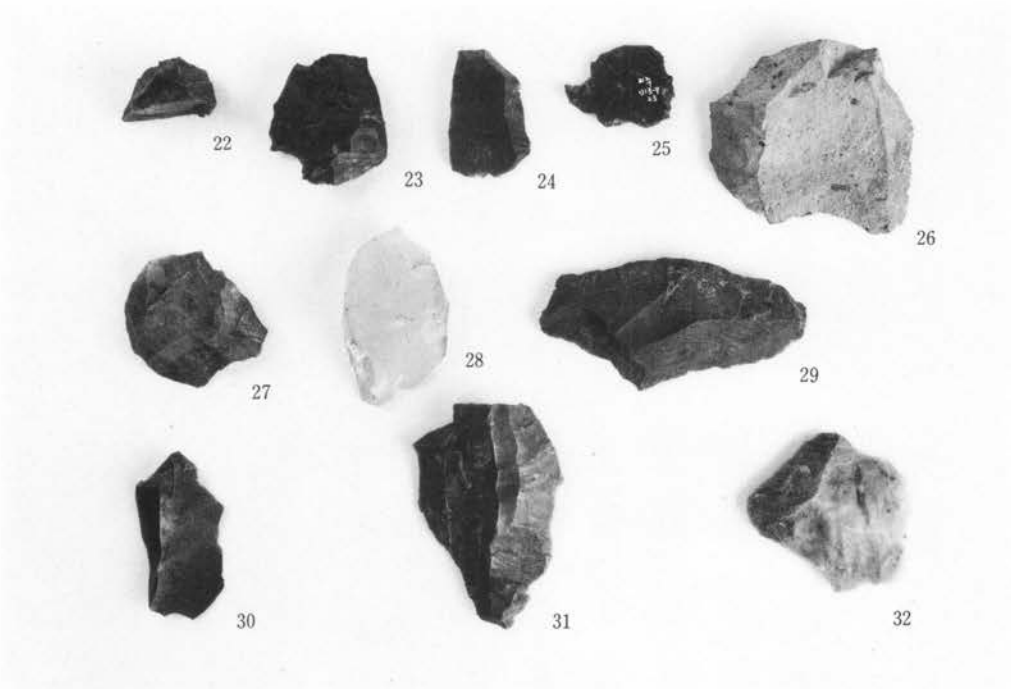


Fブロック出土遺物 (1)

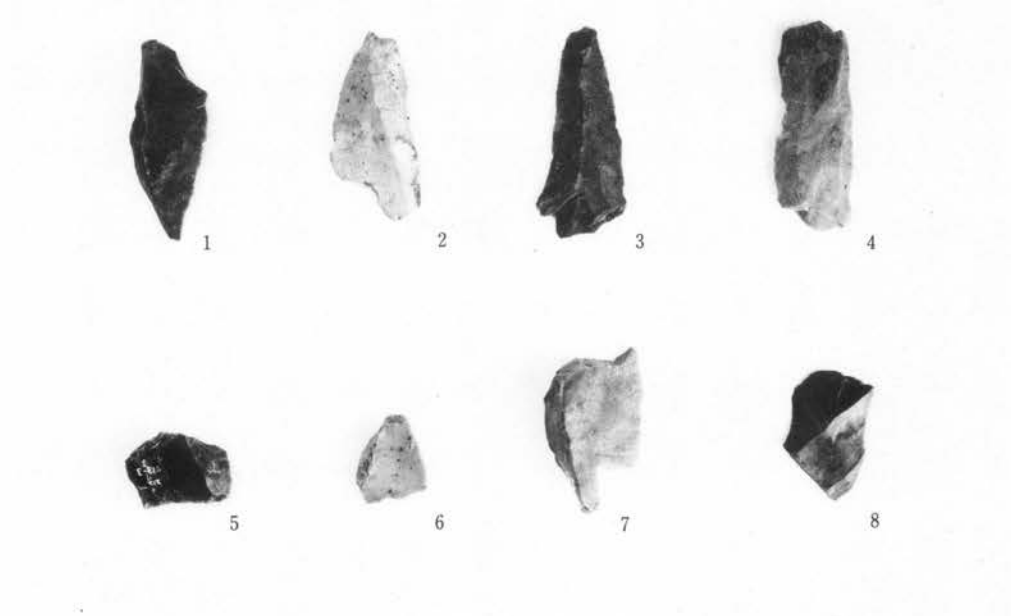




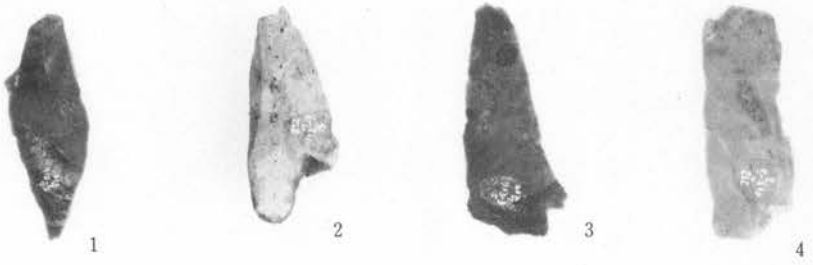
Fブロック出土遺物 (2)



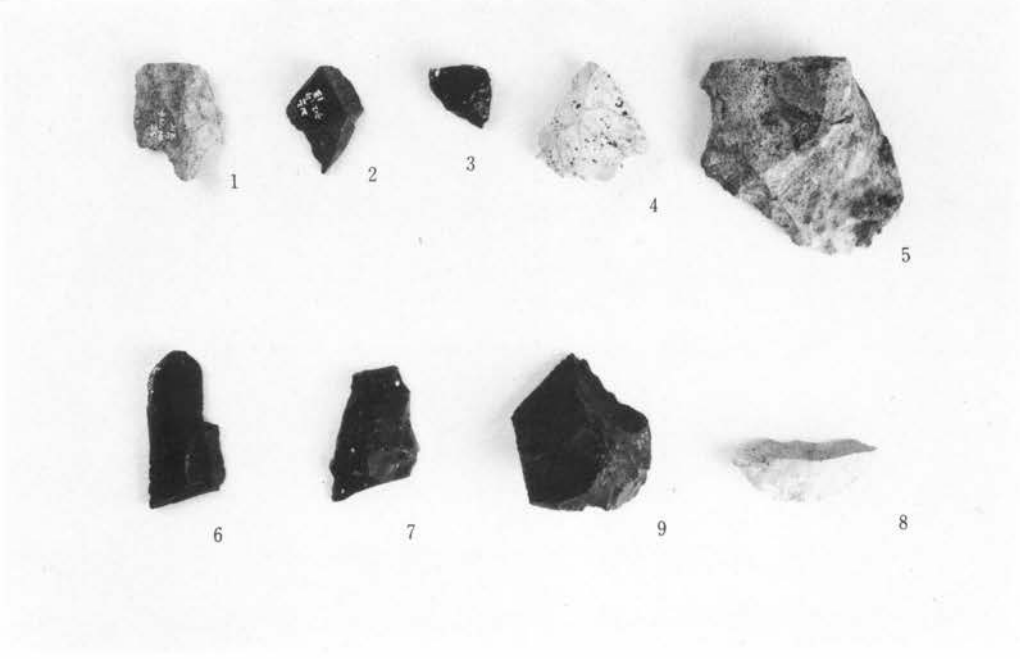
Fブロック出土遺物　(3)



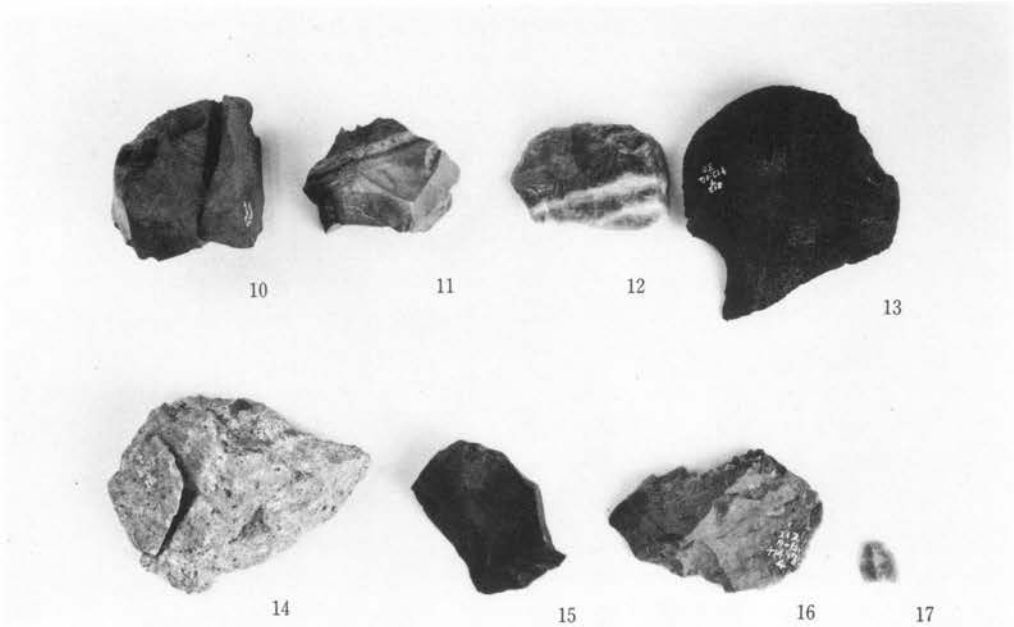
Gブロック出土遺物　(1)



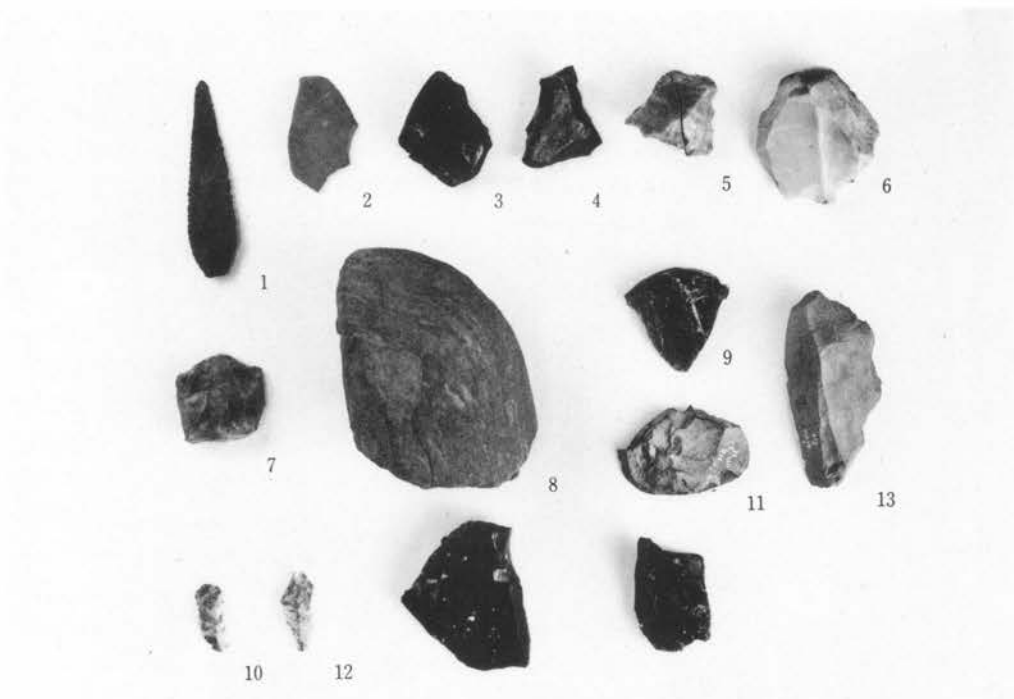
Gブロック出土遺物 (2)



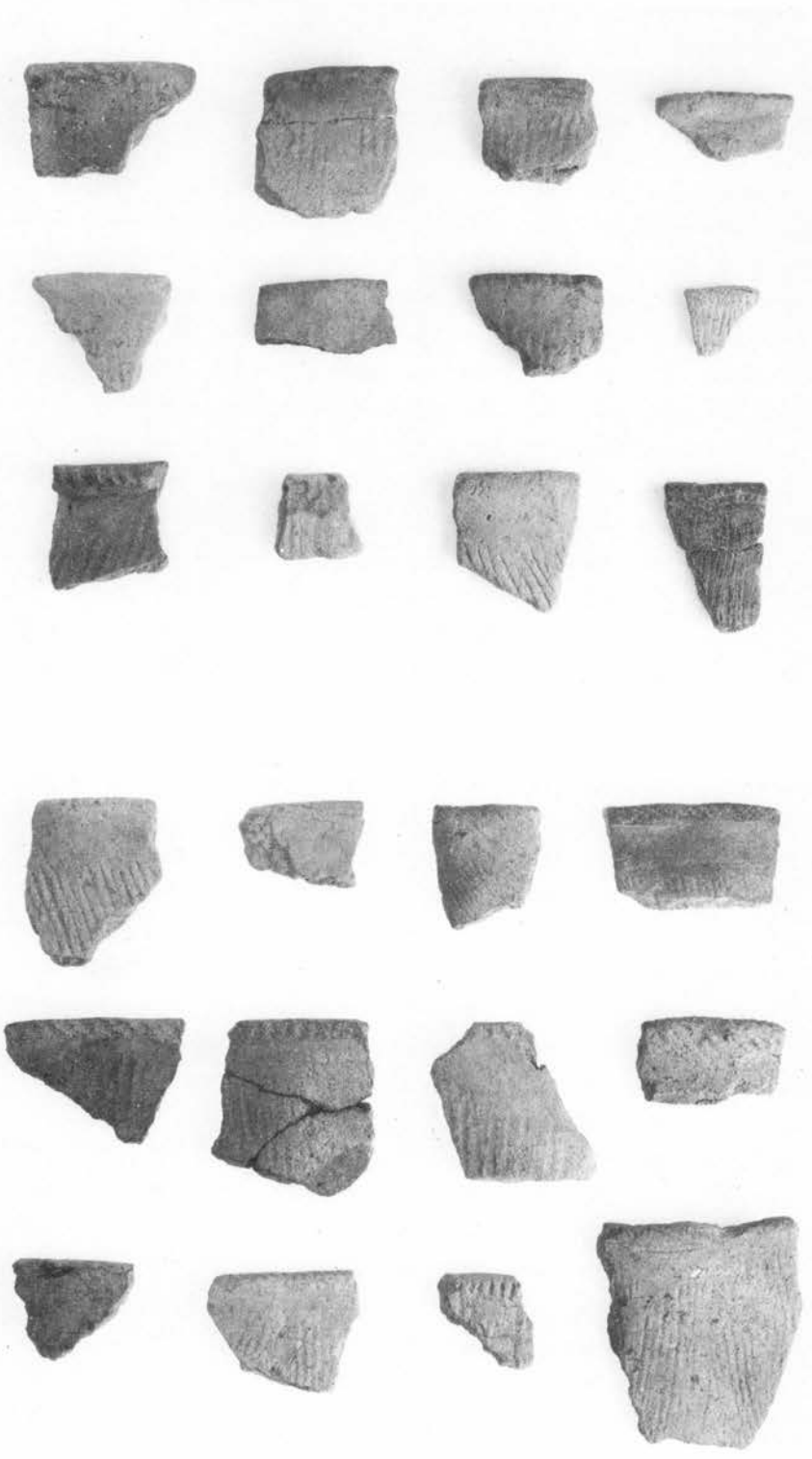
No.1地点出土遺物 (1)



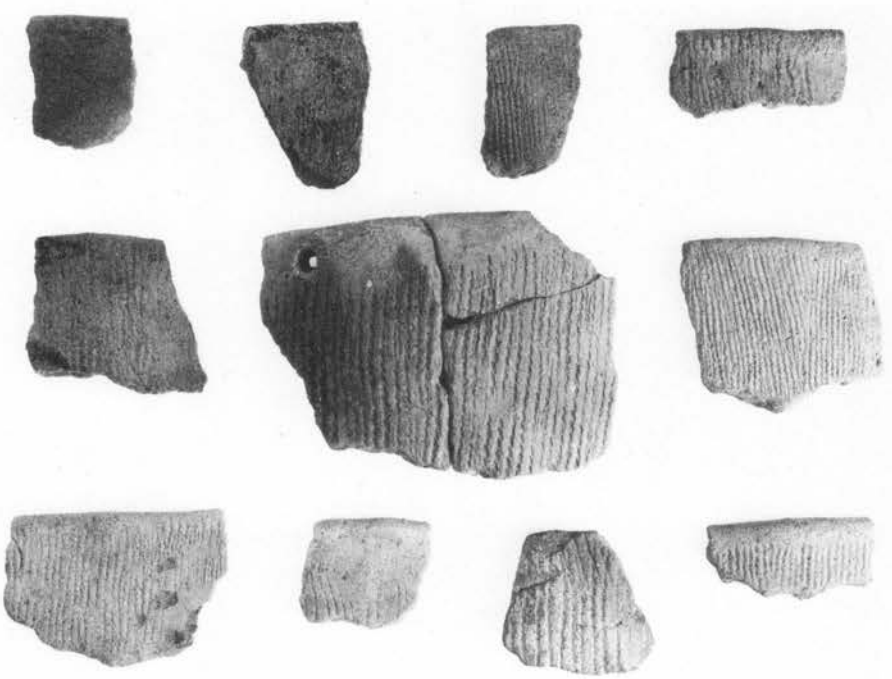
No. 1 地点出土遺物　(2)



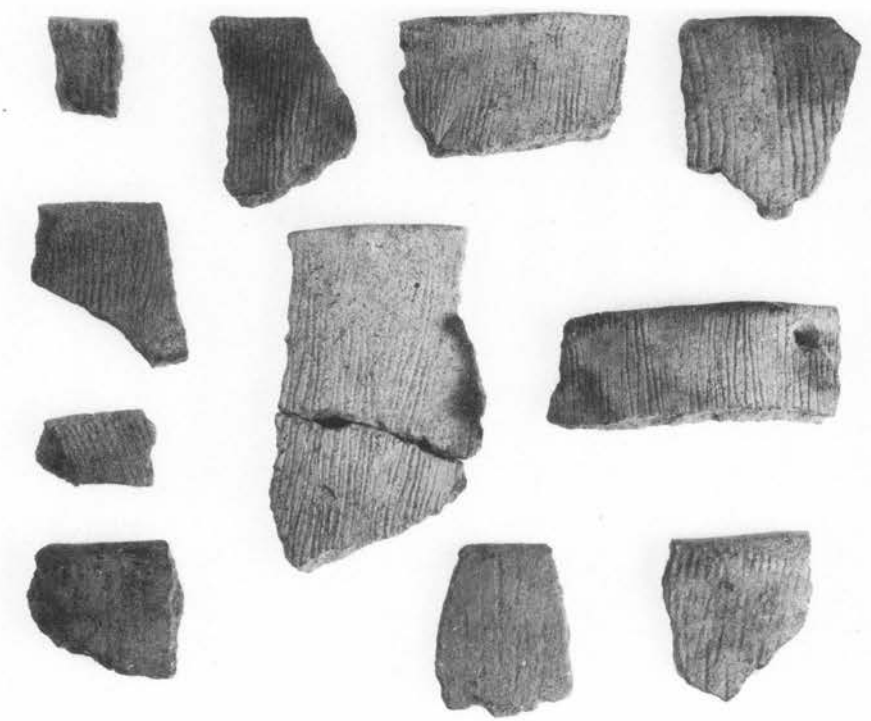
No. 2 地点・No. 3 地点出土遺物



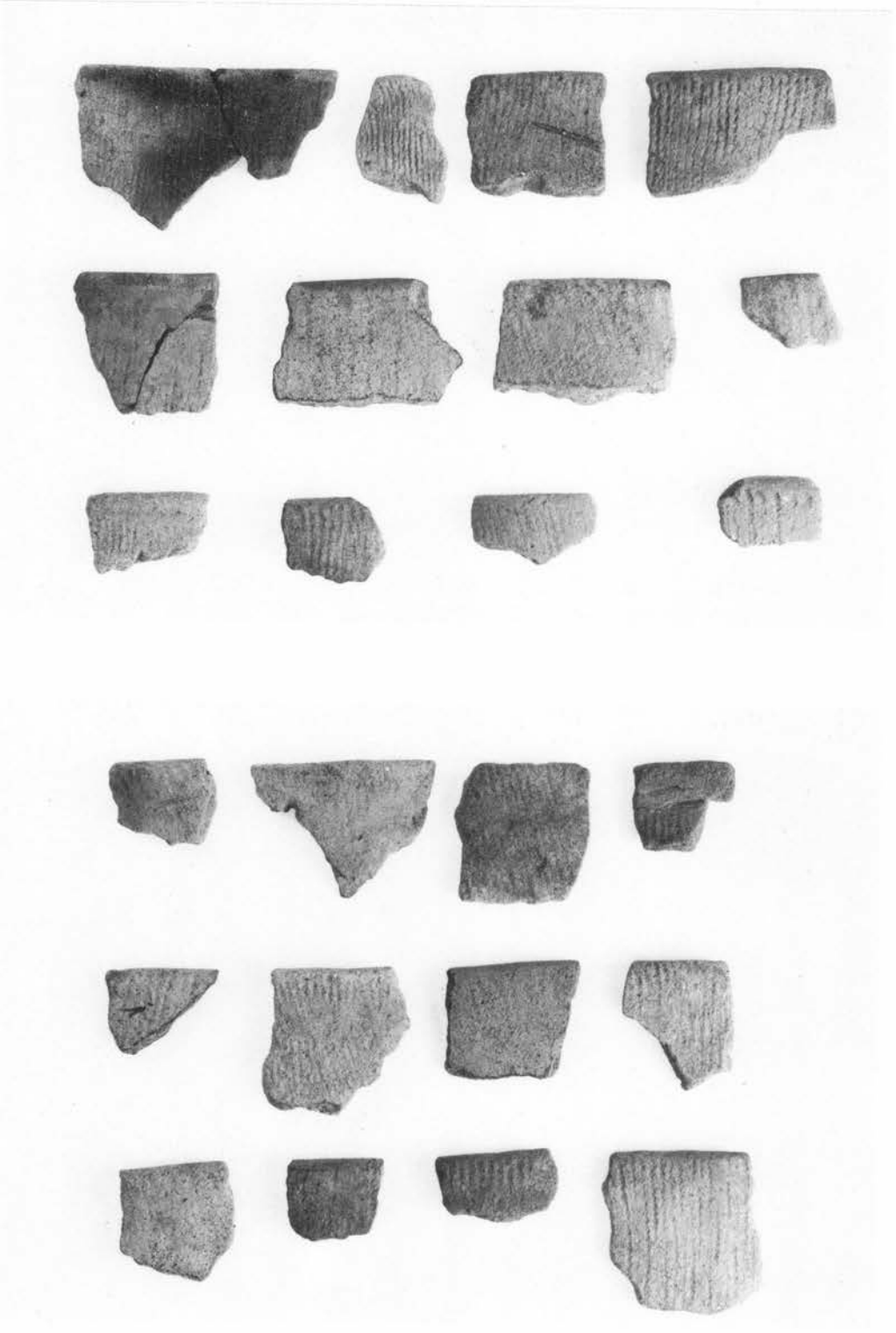
1類土器 (1)



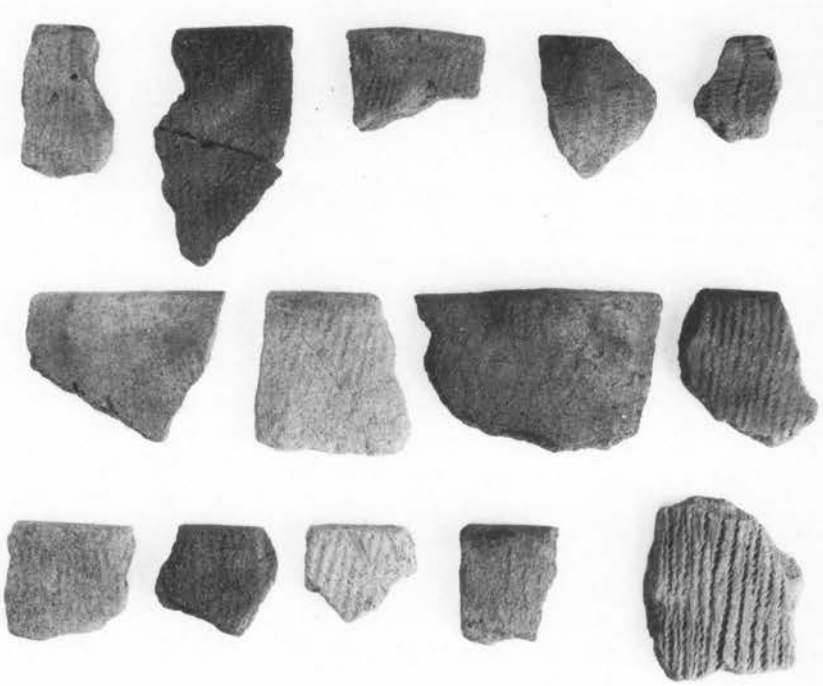
1類 (2)・2類土器



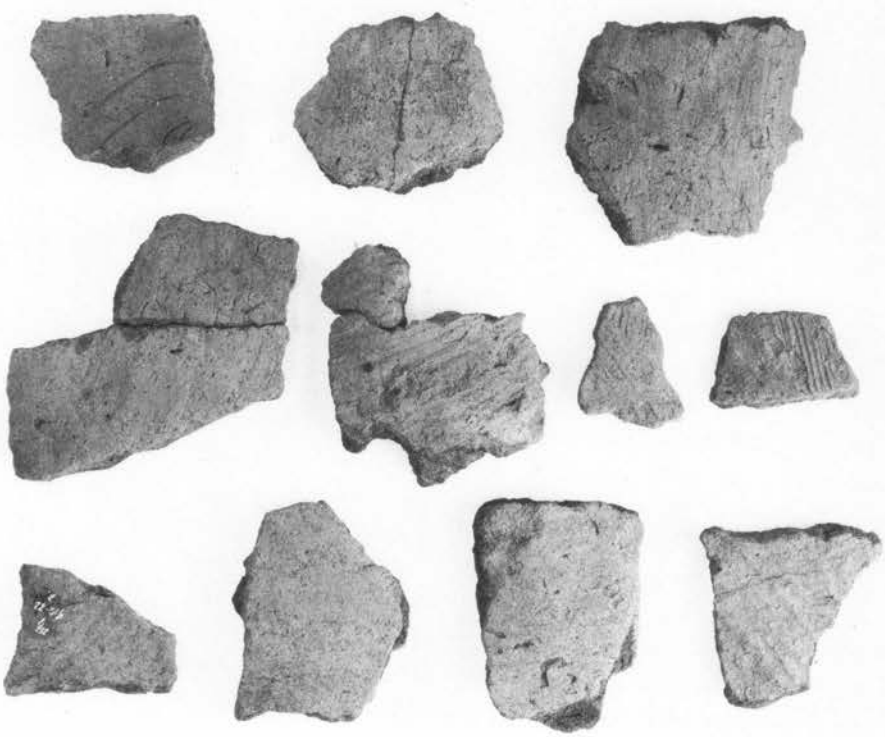
2類土器 (1)



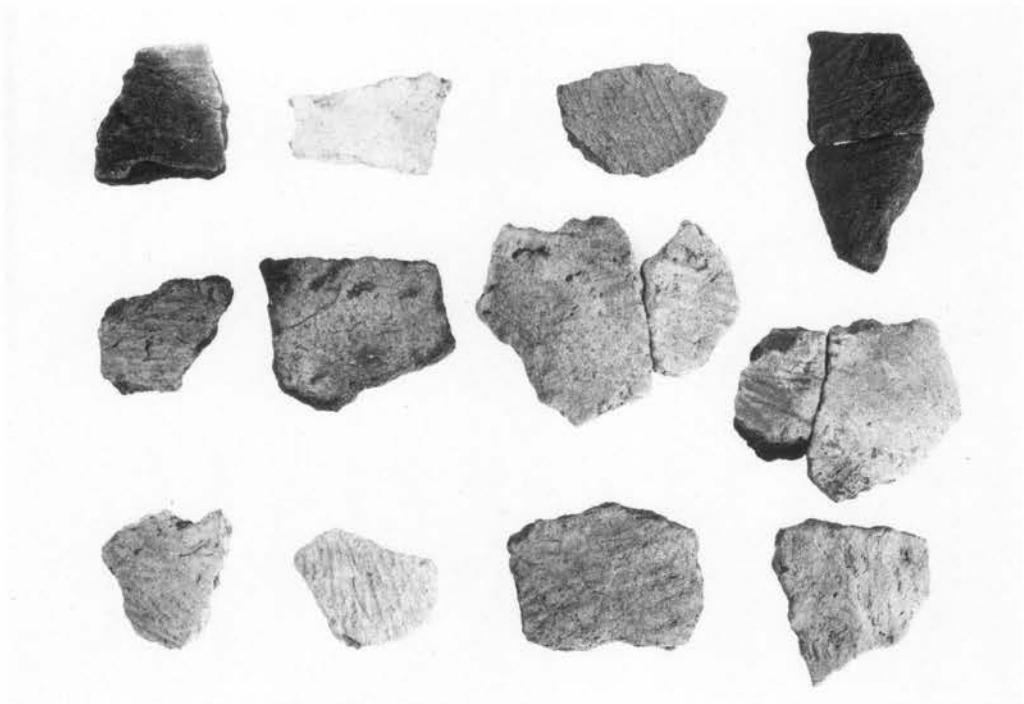
2類土器 (2)



2類土器　(3)

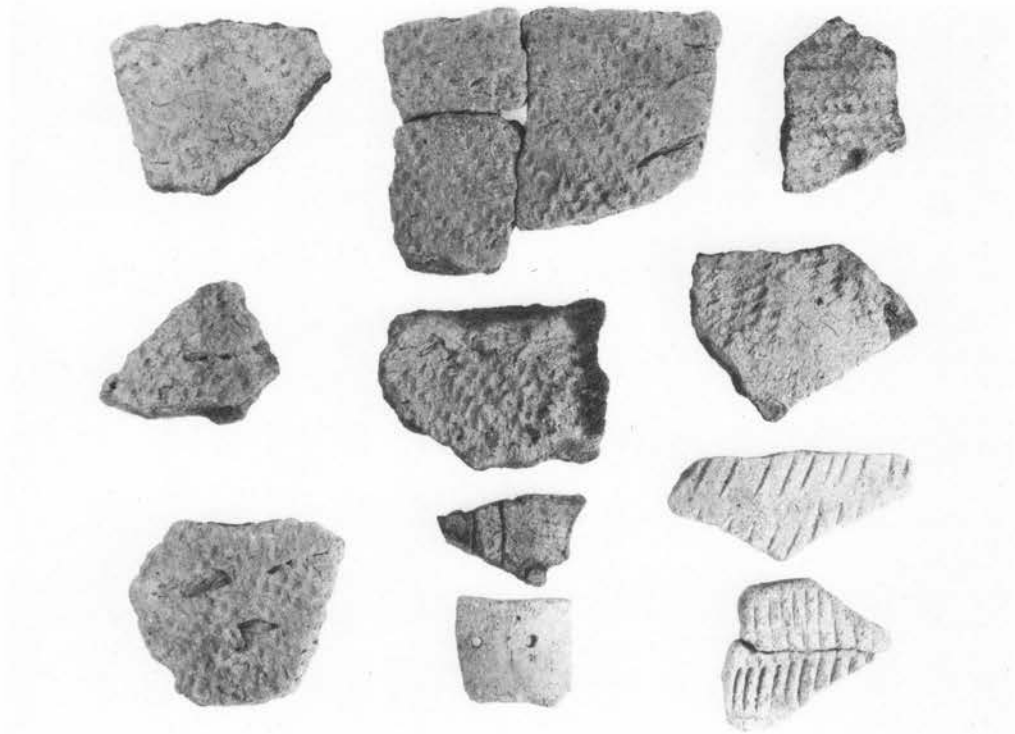


3類土器　(1)

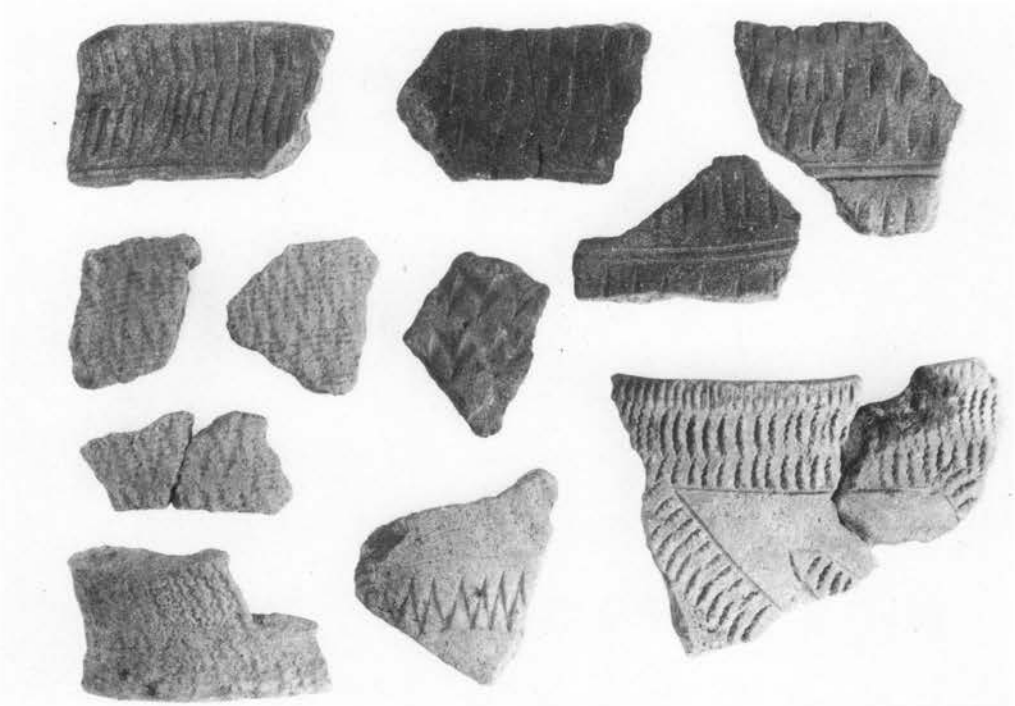


3類土器 (2)

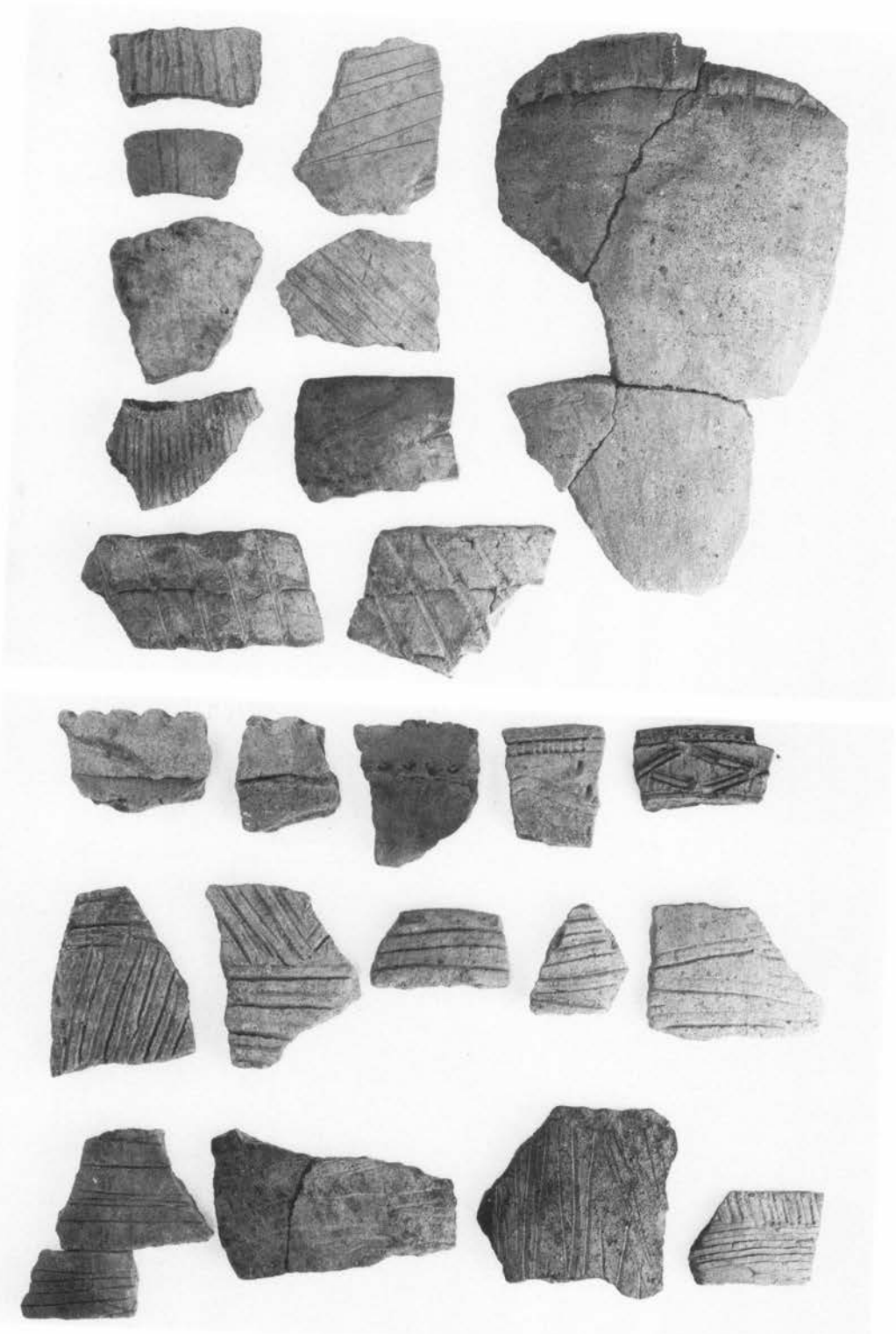
4類土器 (1)



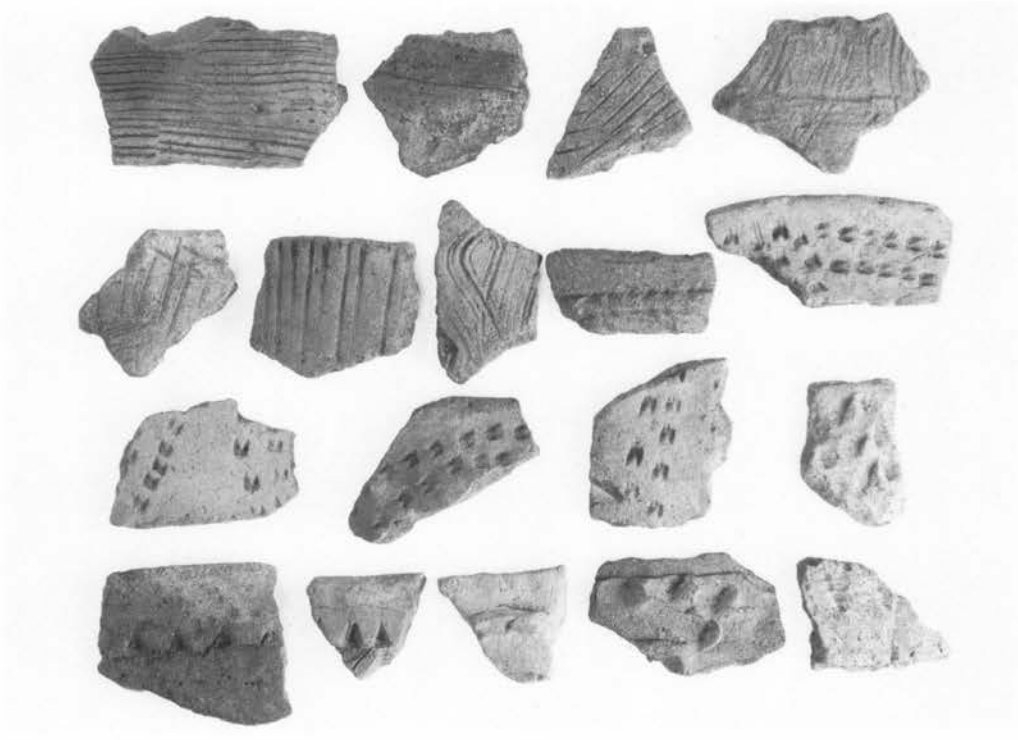
4類　(2)・5類土器



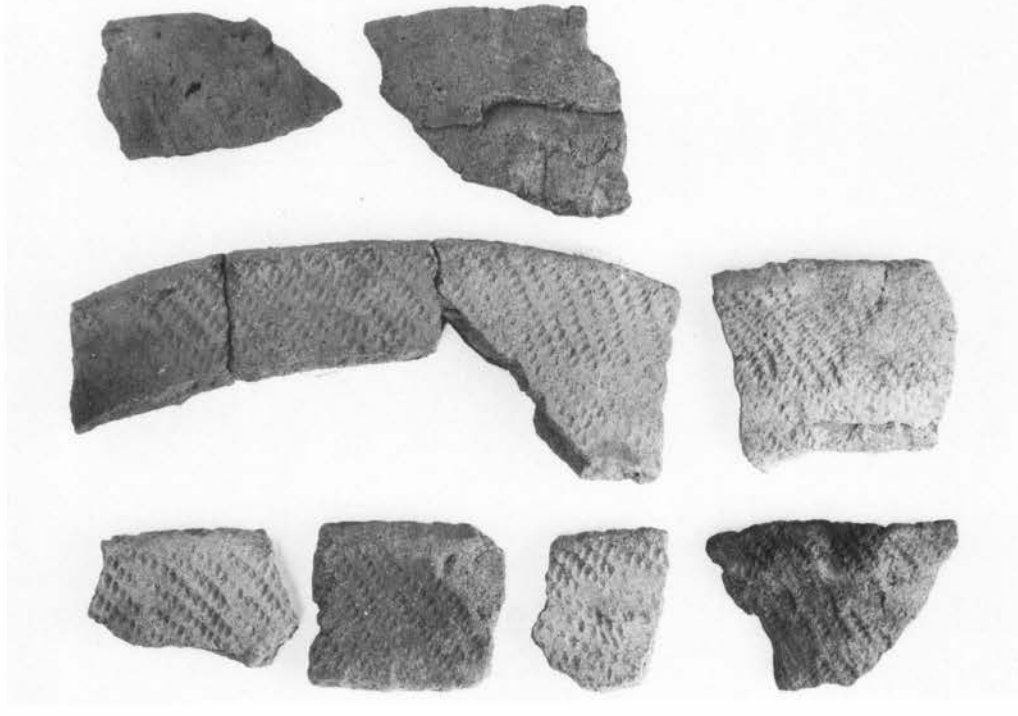
6類土器　(1)



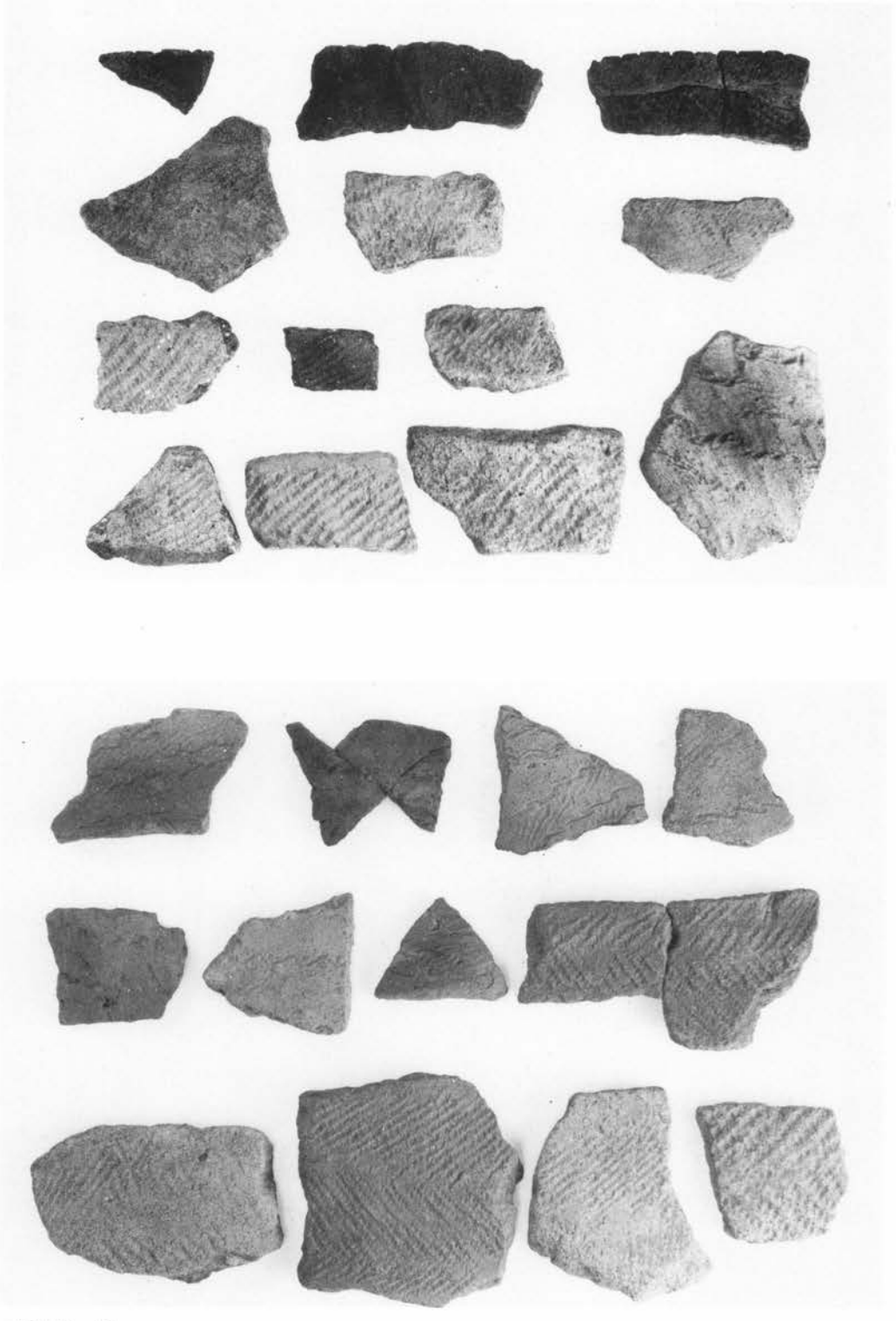
6類土器 (2)



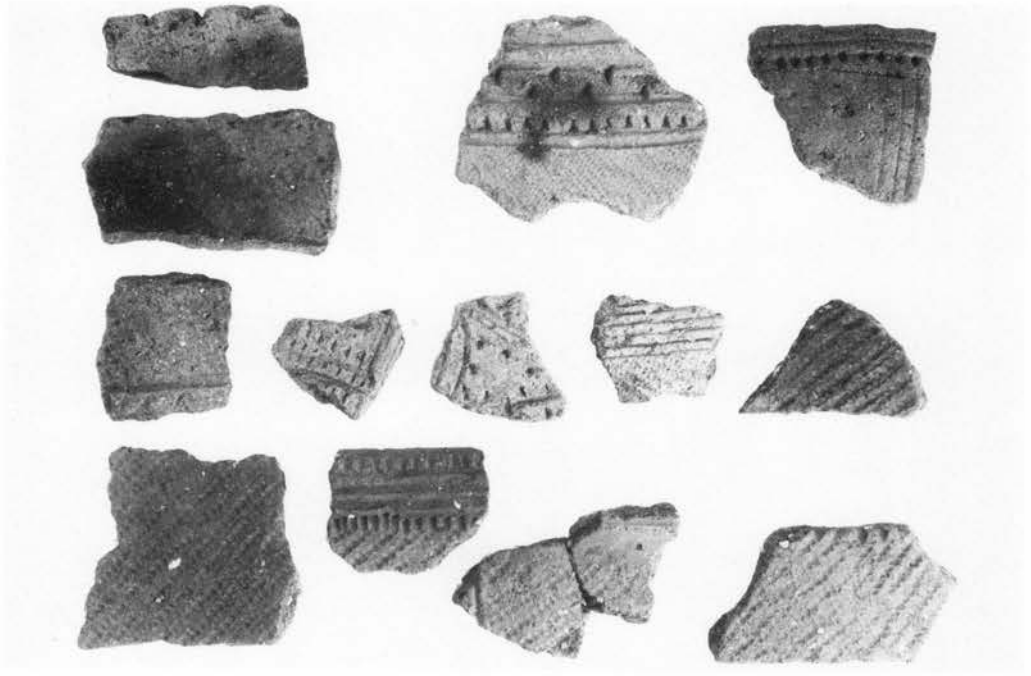
6類土器 (3)



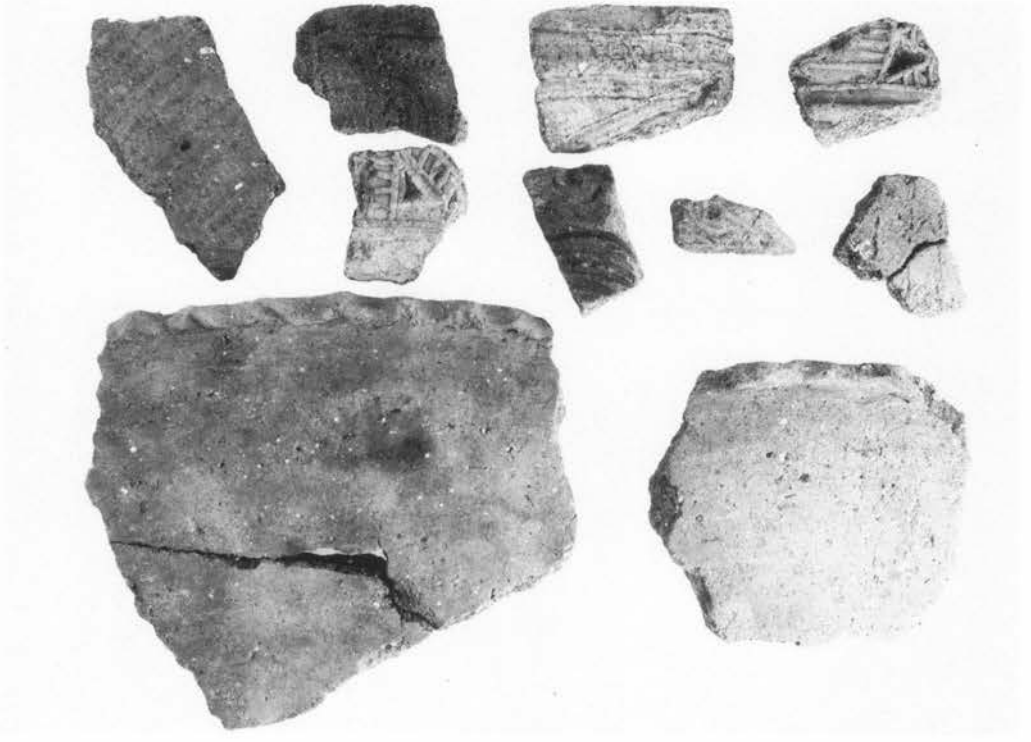
6類 (4)・7類土器 (1)



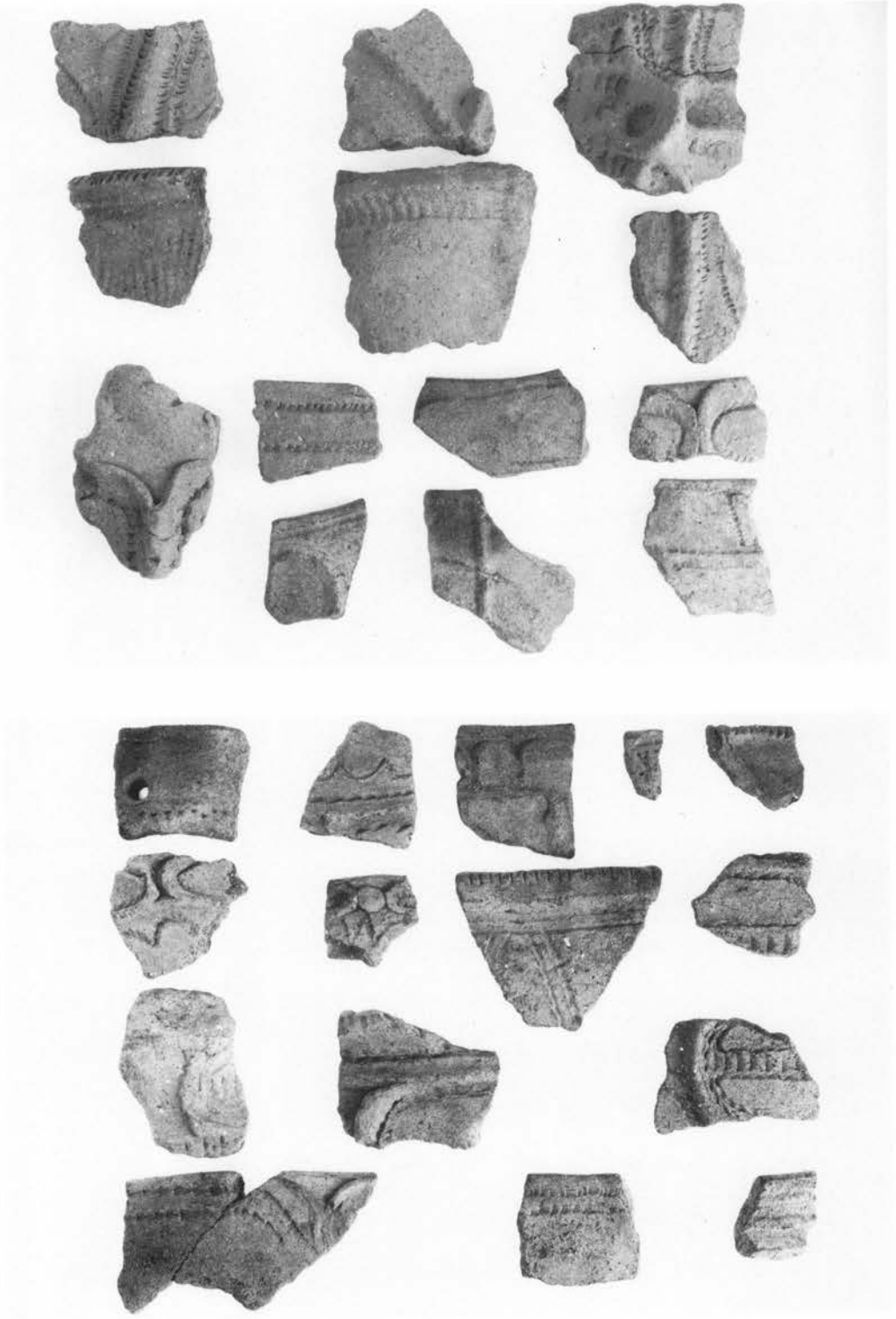
7類土器 (2)



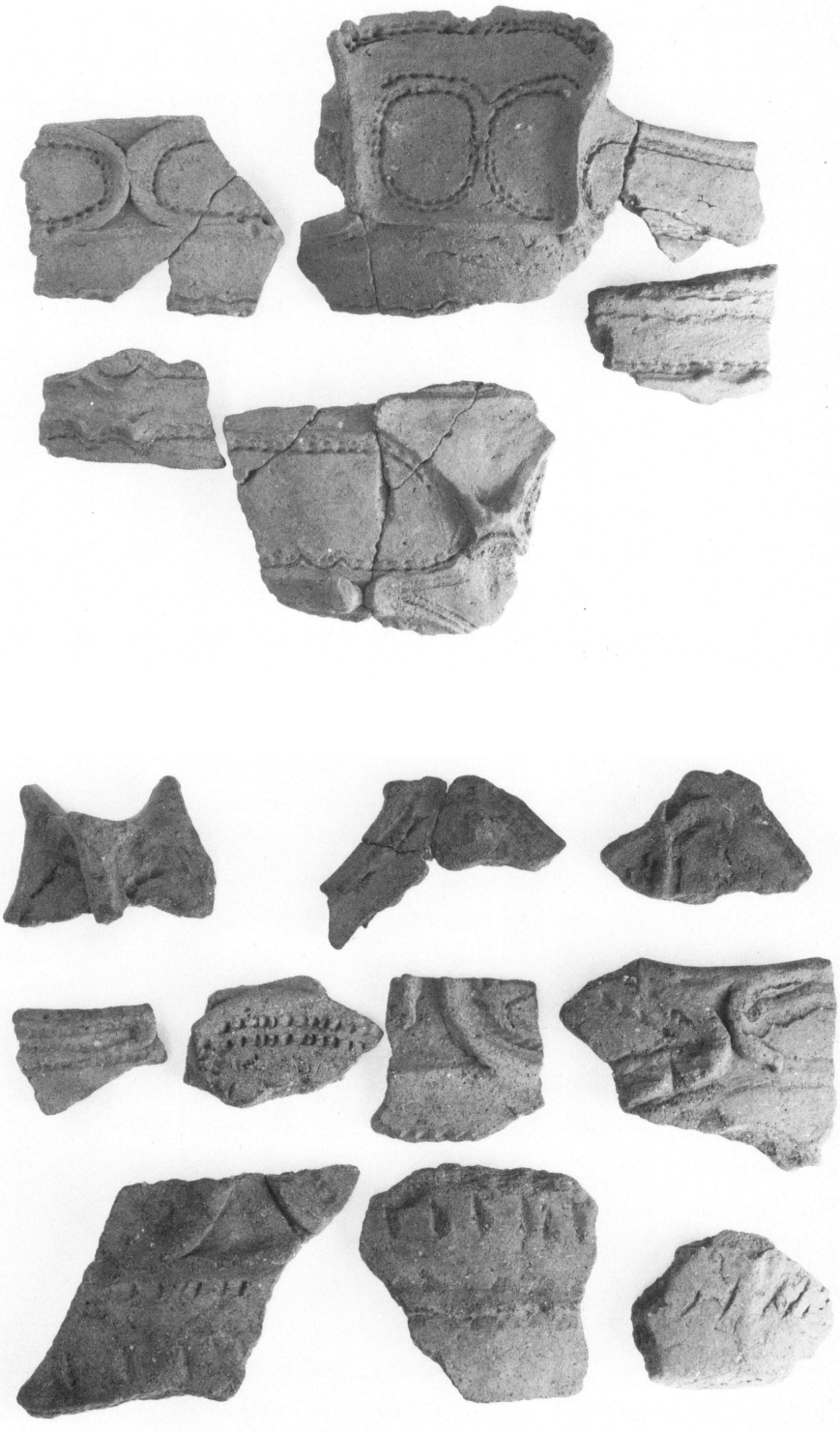
8類土器 (1)



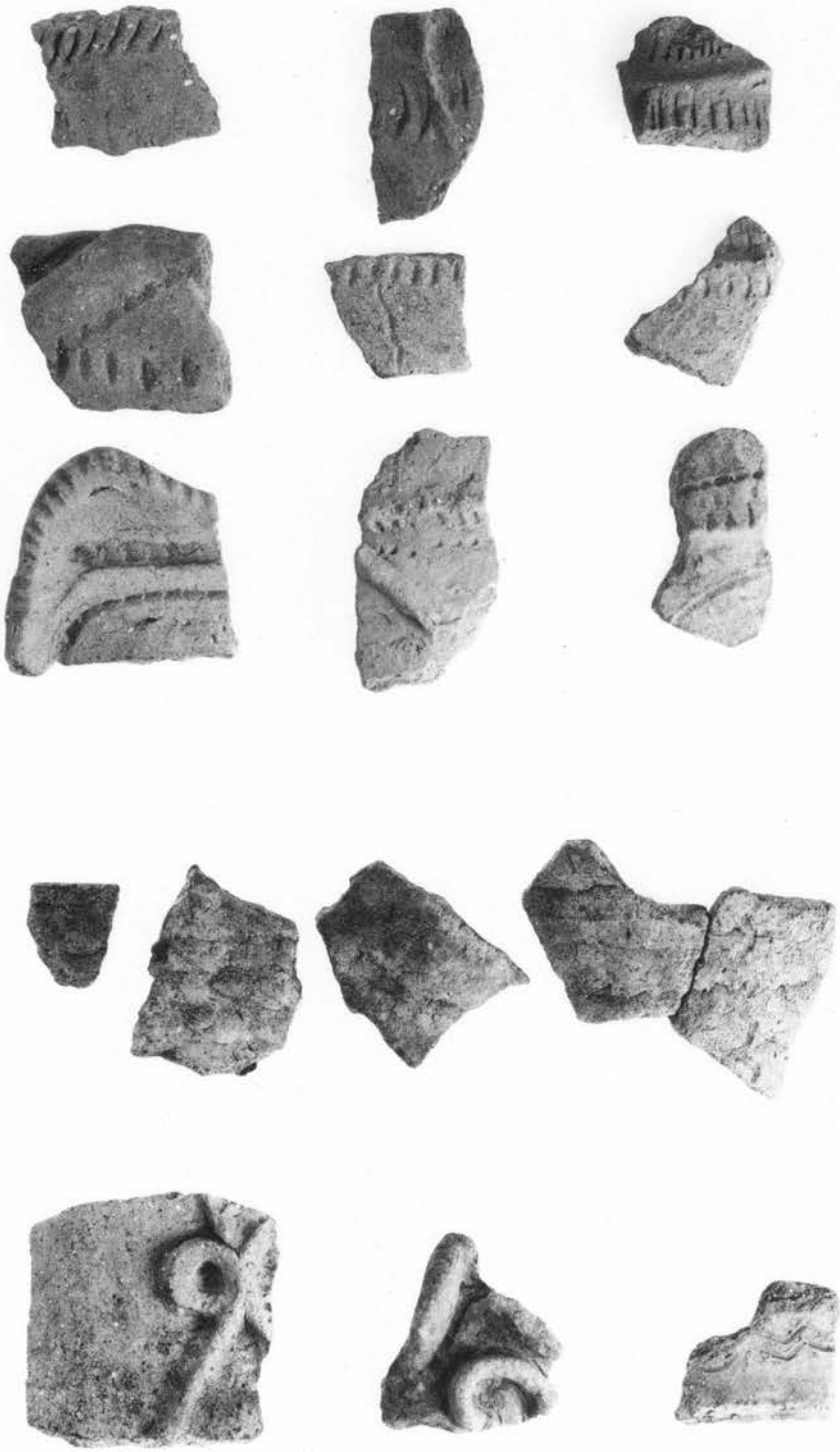
8類 (2)・9類土器 (1)



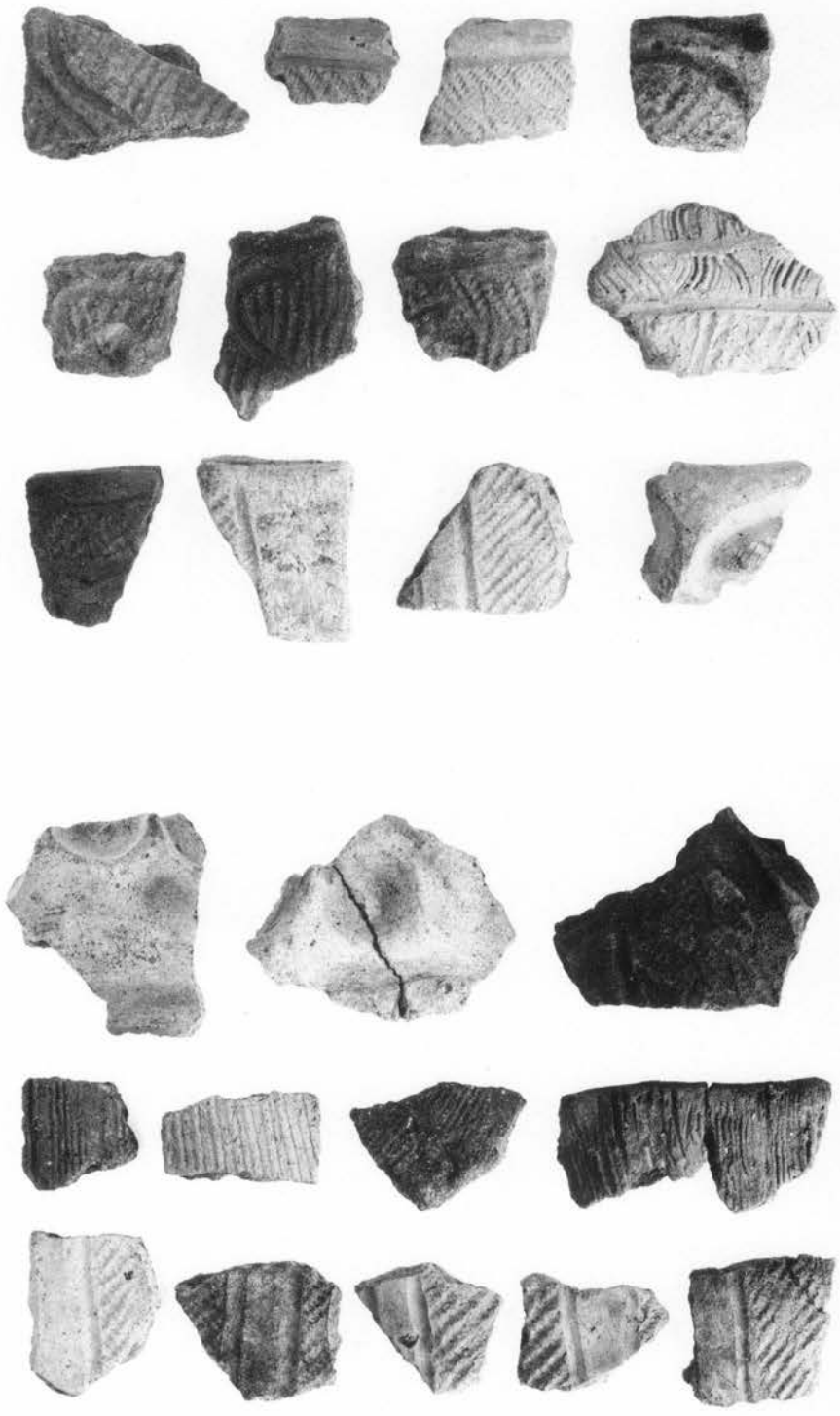
9類土器 (2)



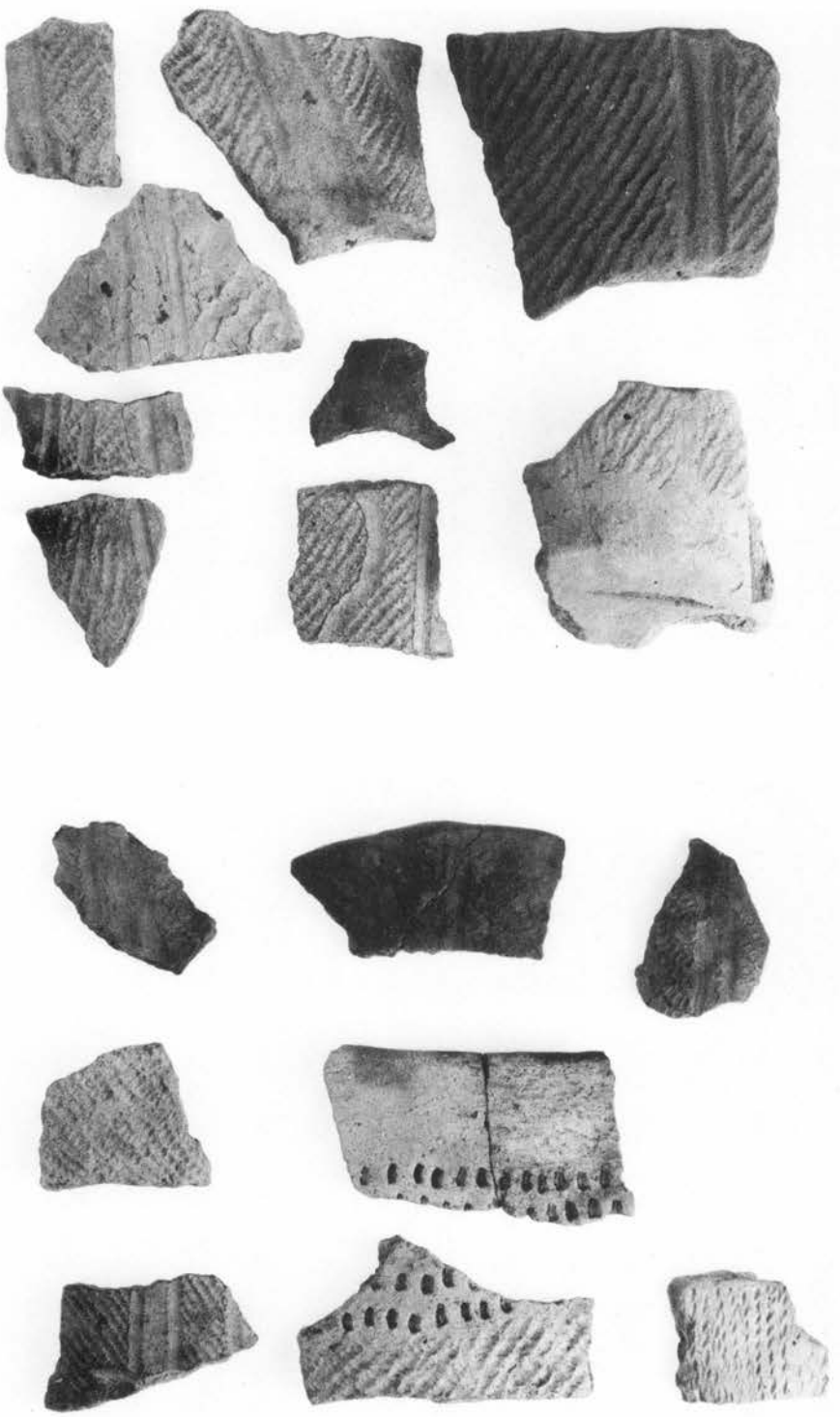
9 類土器 (3)



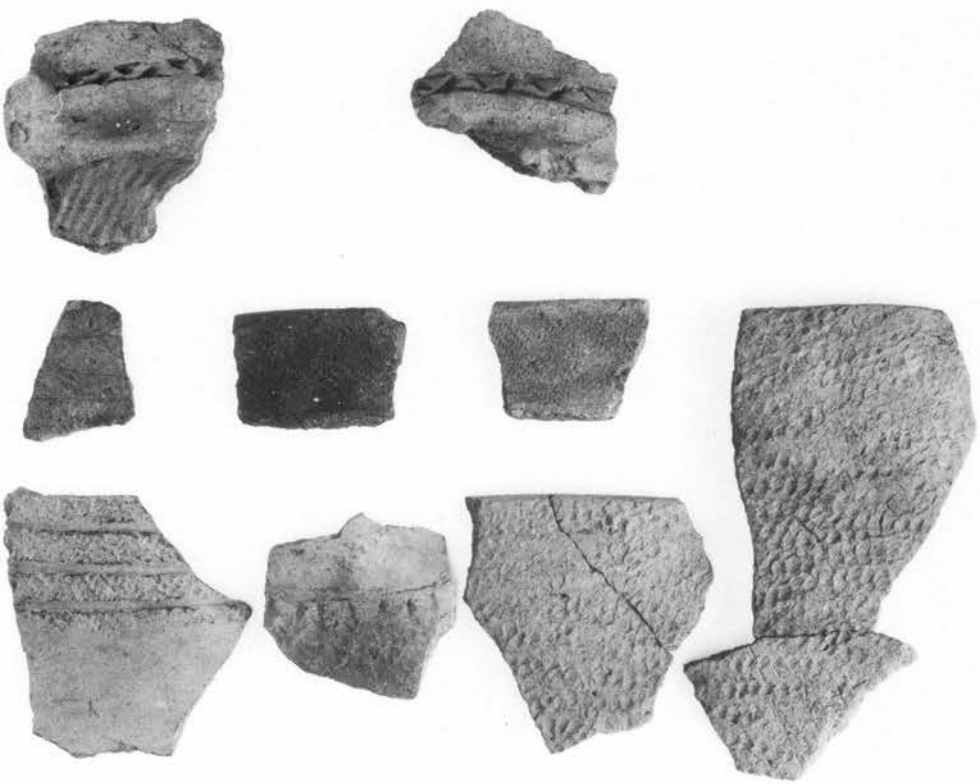
9類土器 (4)



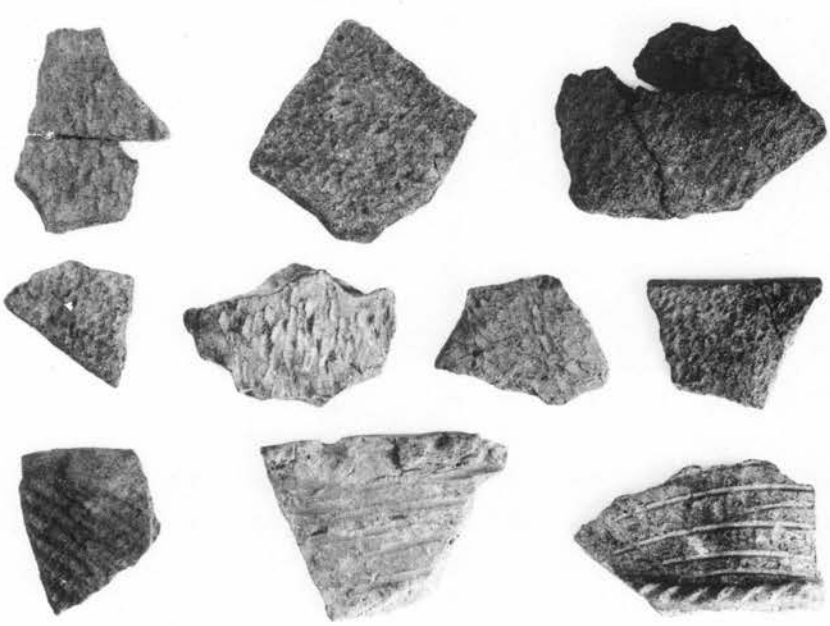
10類土器 (1)



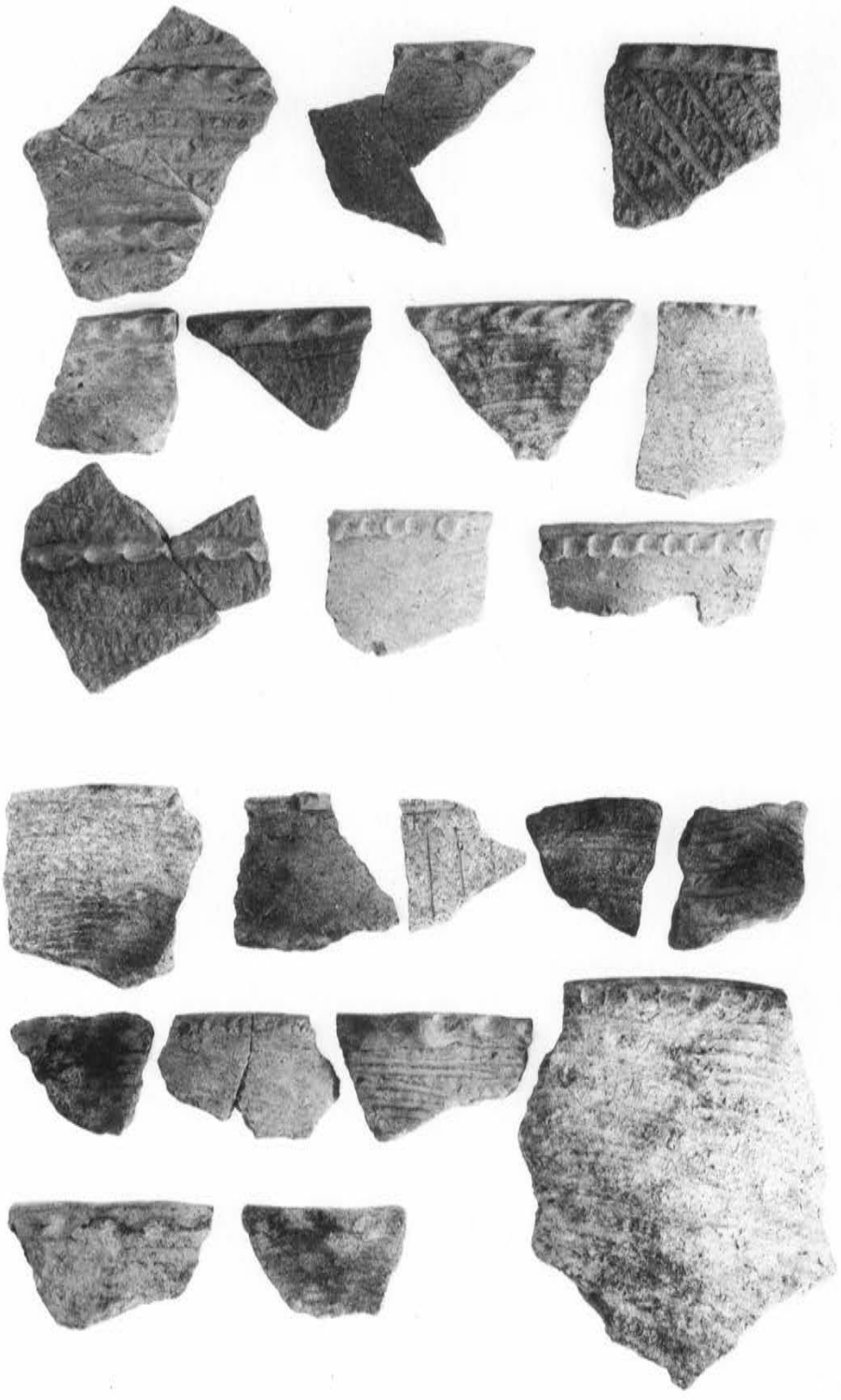
10類土器　(2)



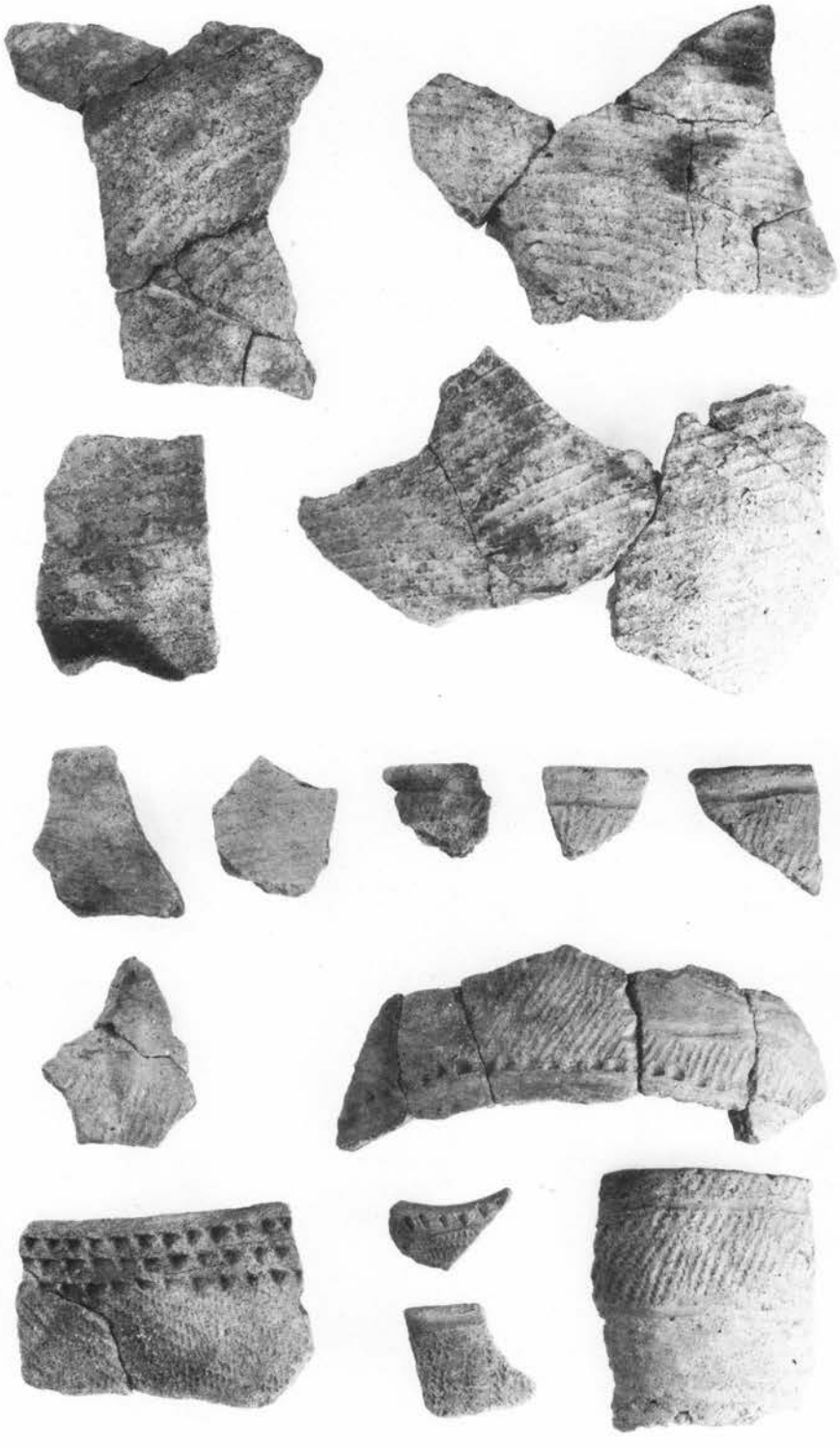
11類・12類・13類土器



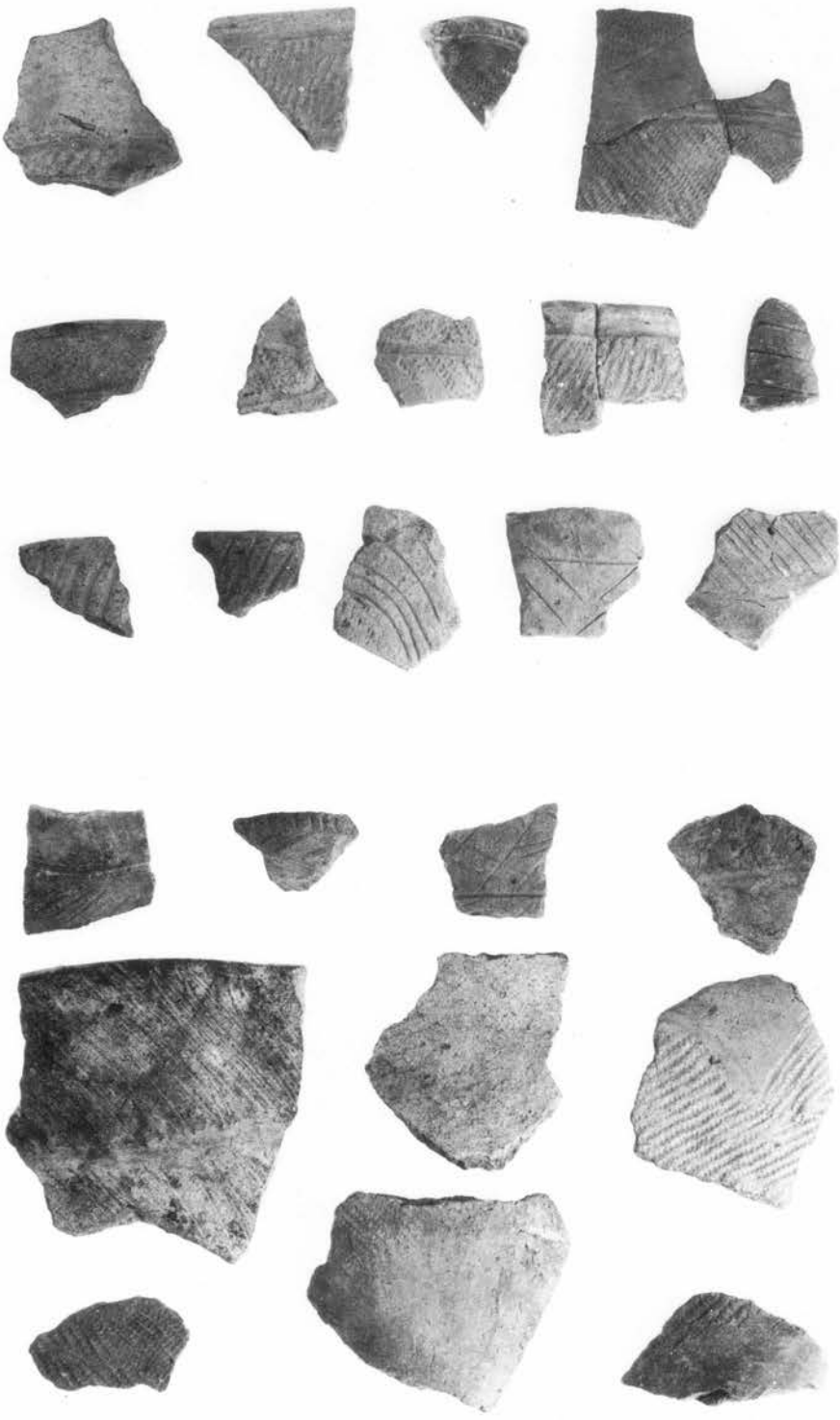
13類土器 (1)



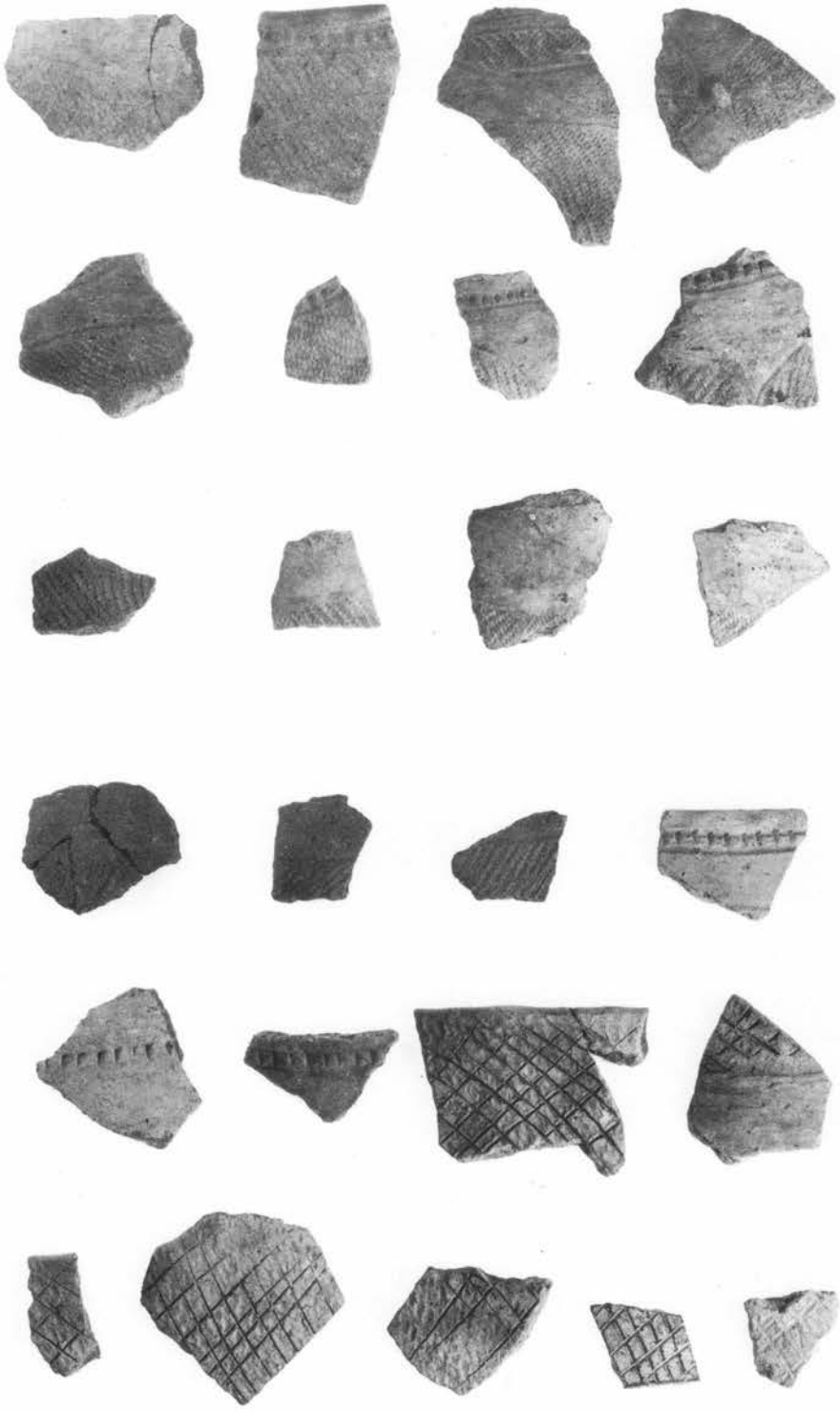
13類土器　(2)



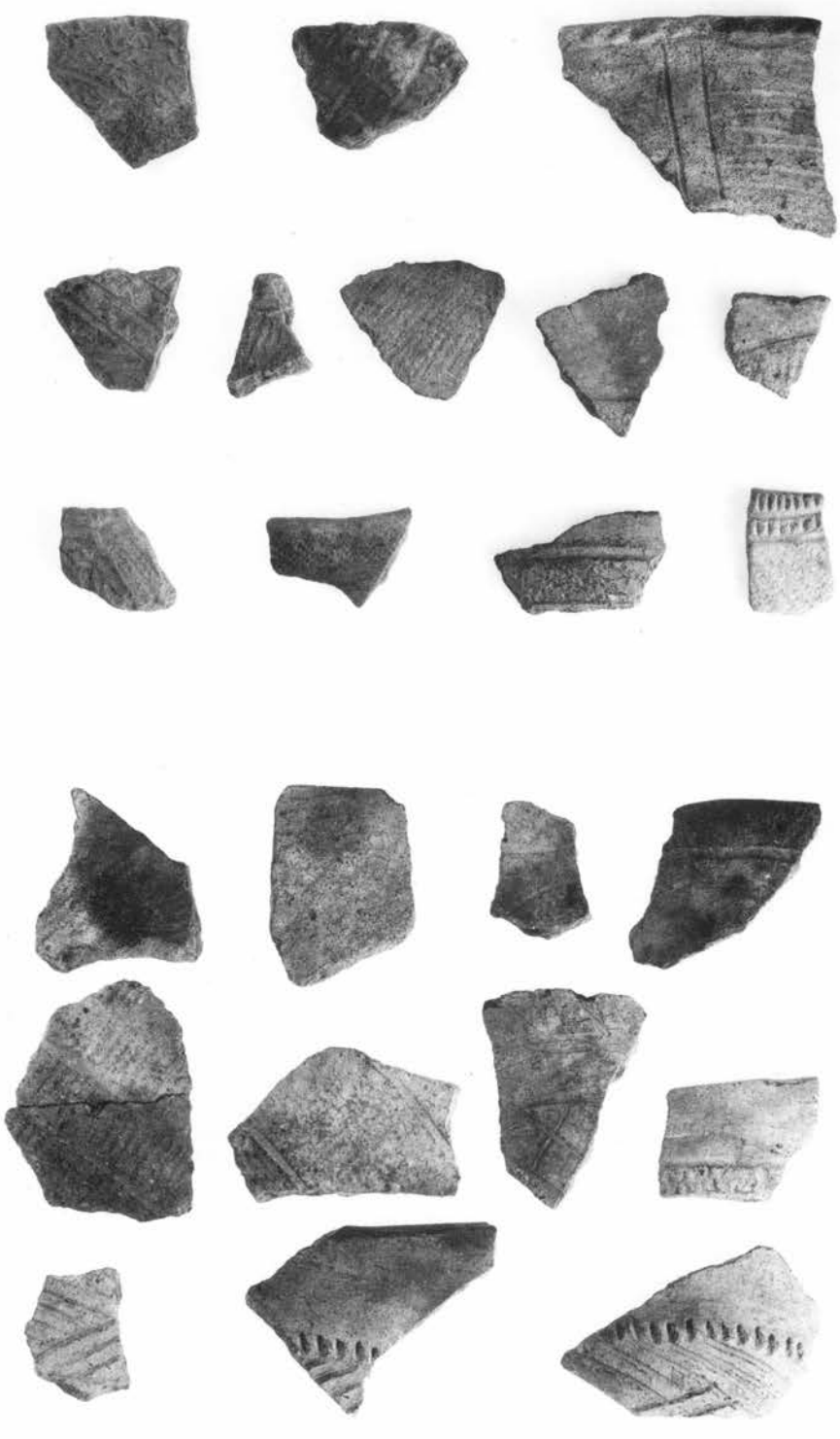
13類土器 (3)



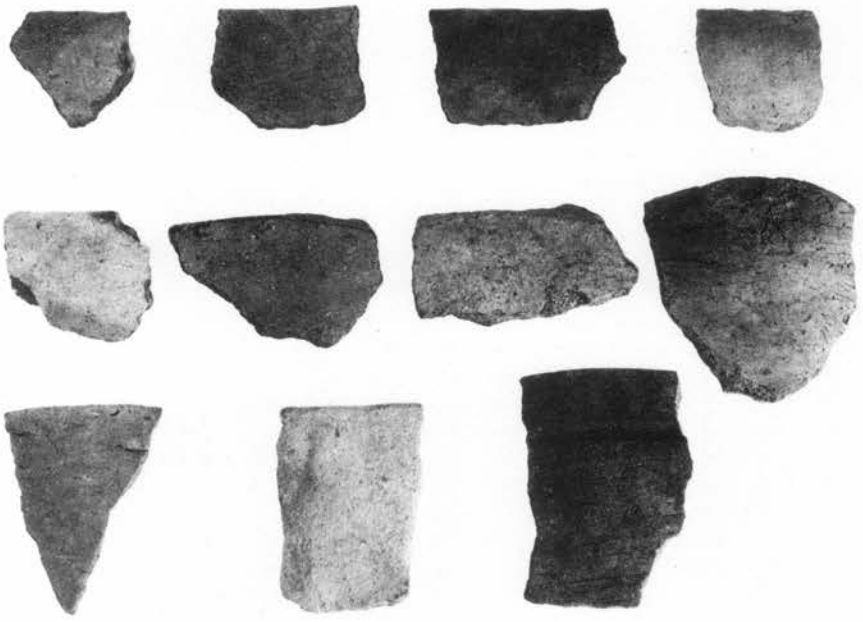
13類土器 (4)



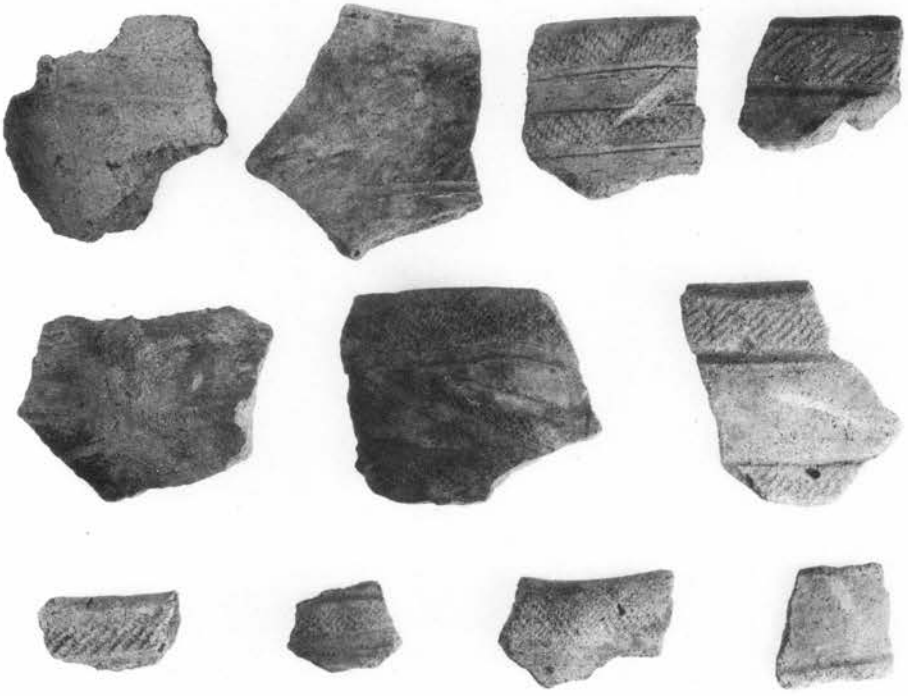
13類土器　(5)



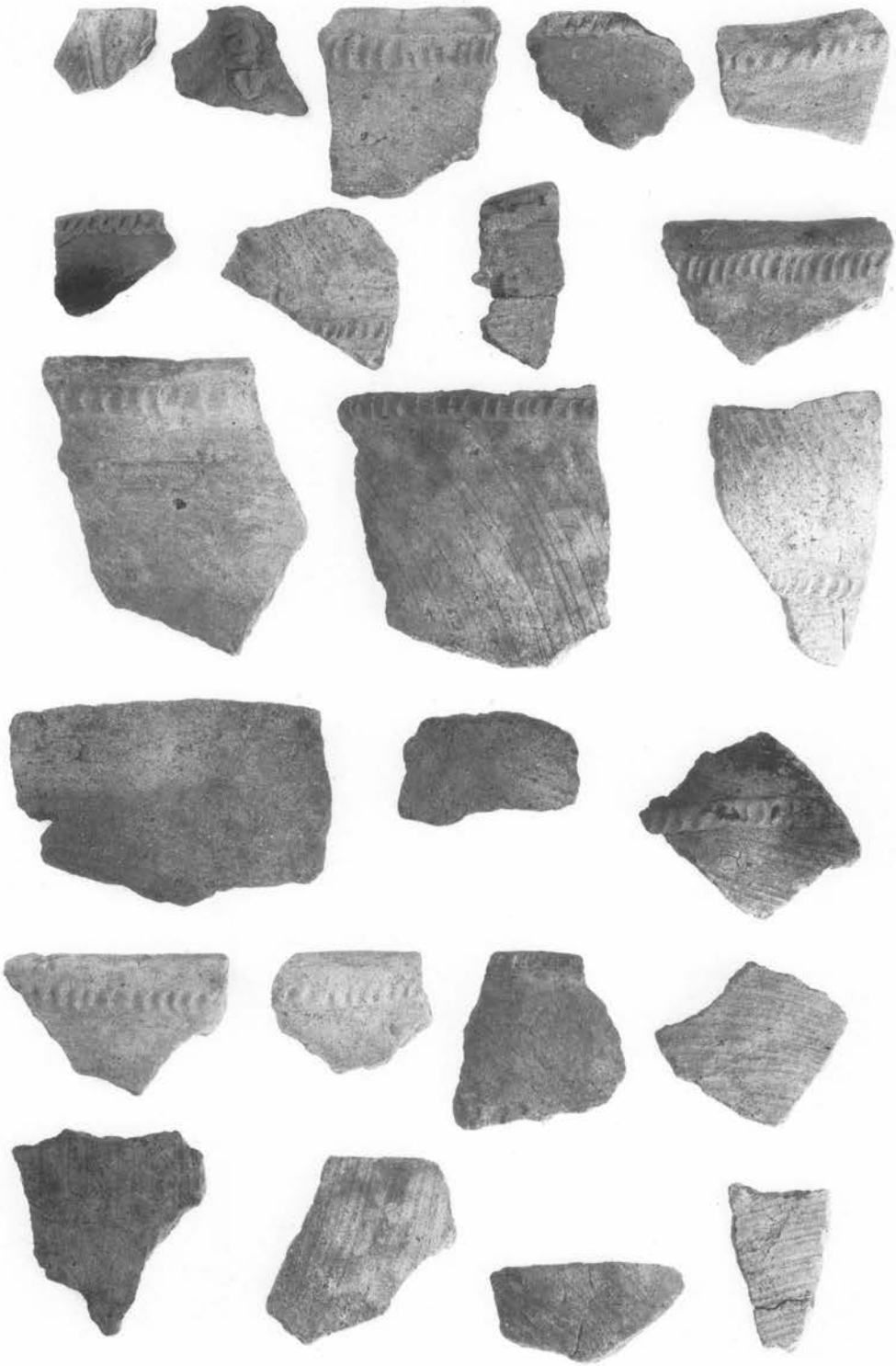
13類土器　(6)



13類土器 (7)



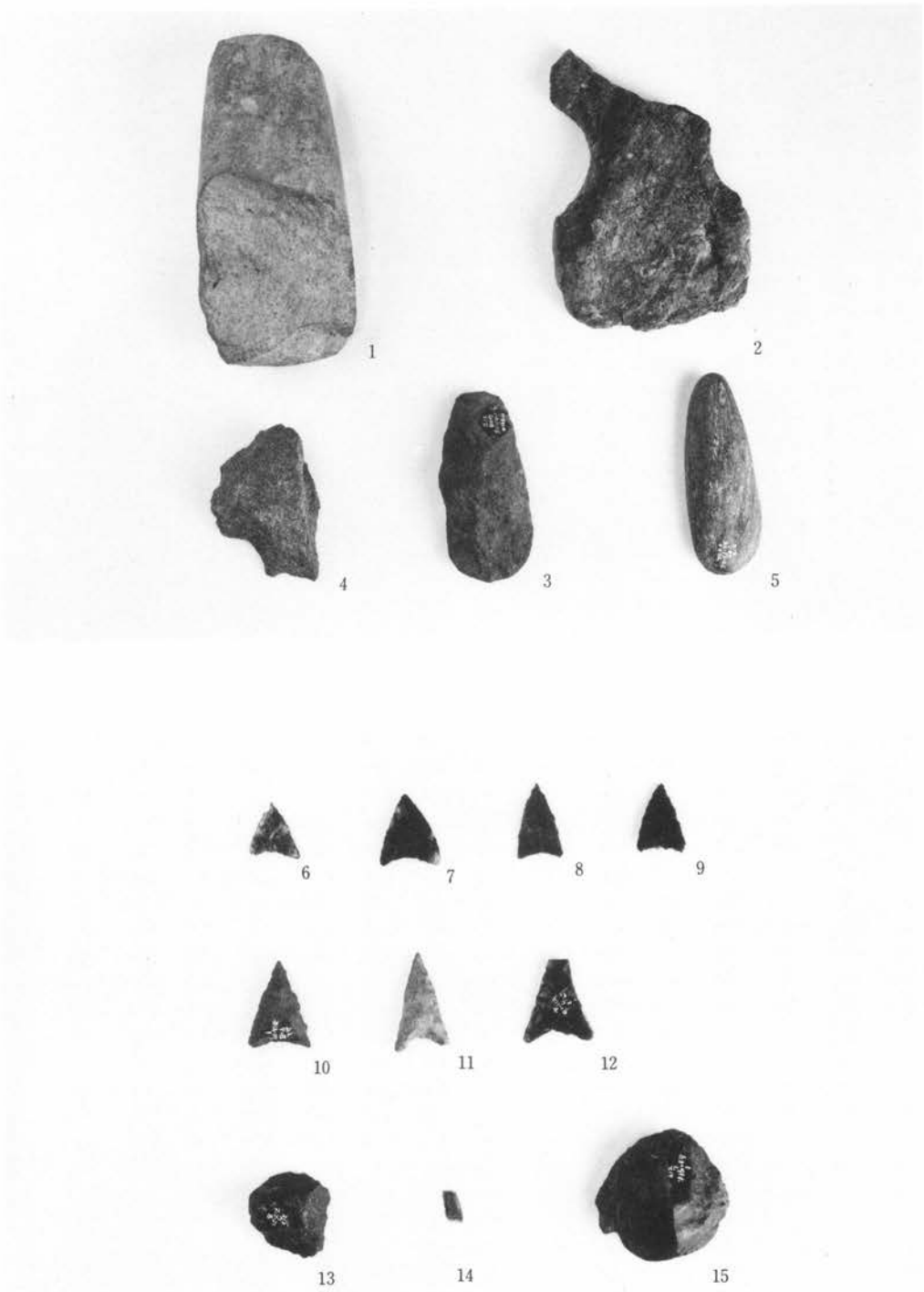
14類土器 (1)



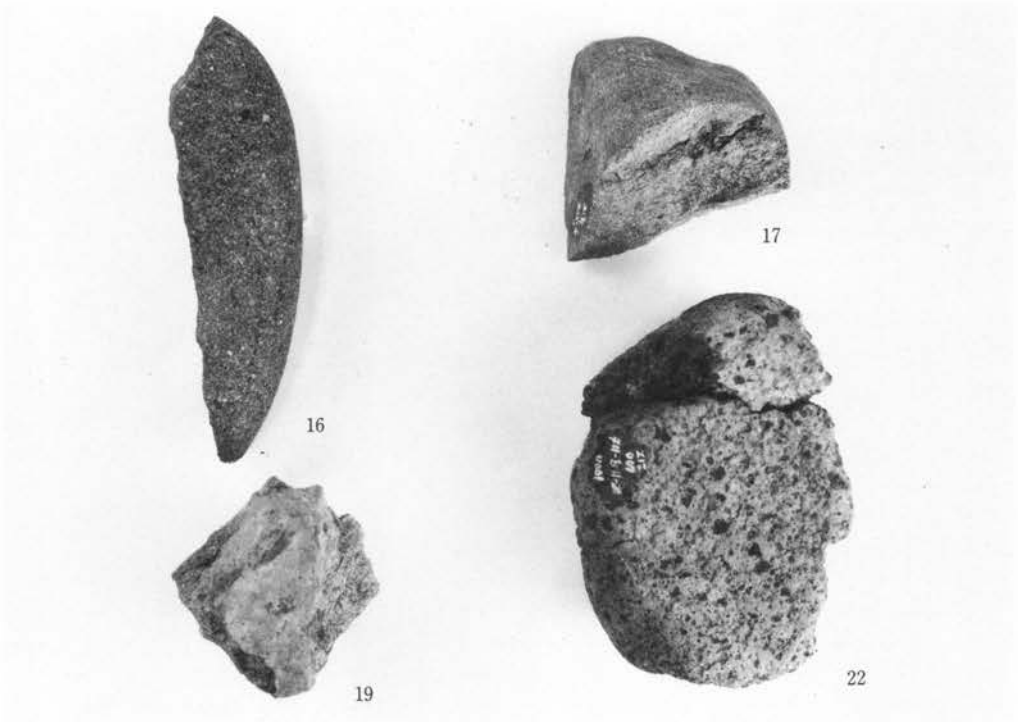
14類土器 (2)

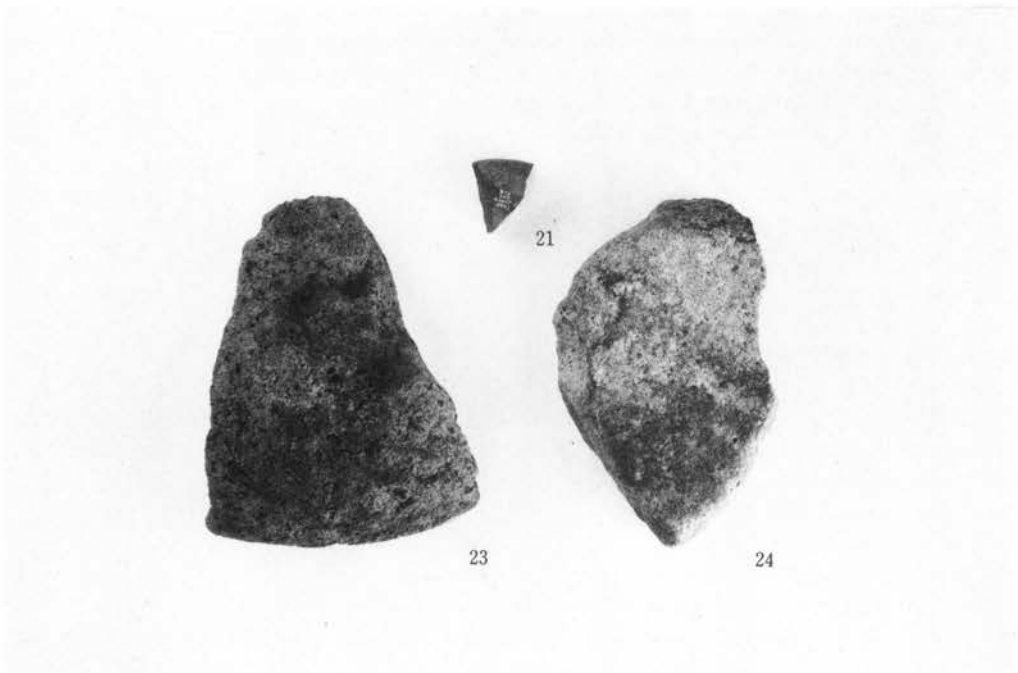
14類土器　(3)

斜面に集まる住居跡



縄文時代・石器 (1)





縄文時代・石器　(2)

23

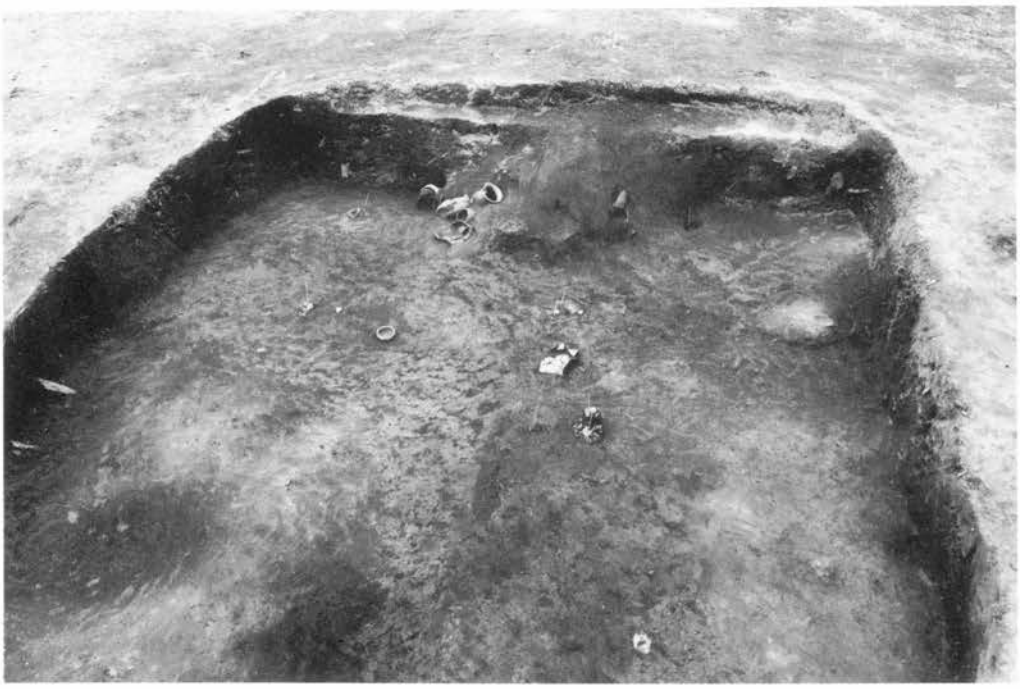
23

18

20

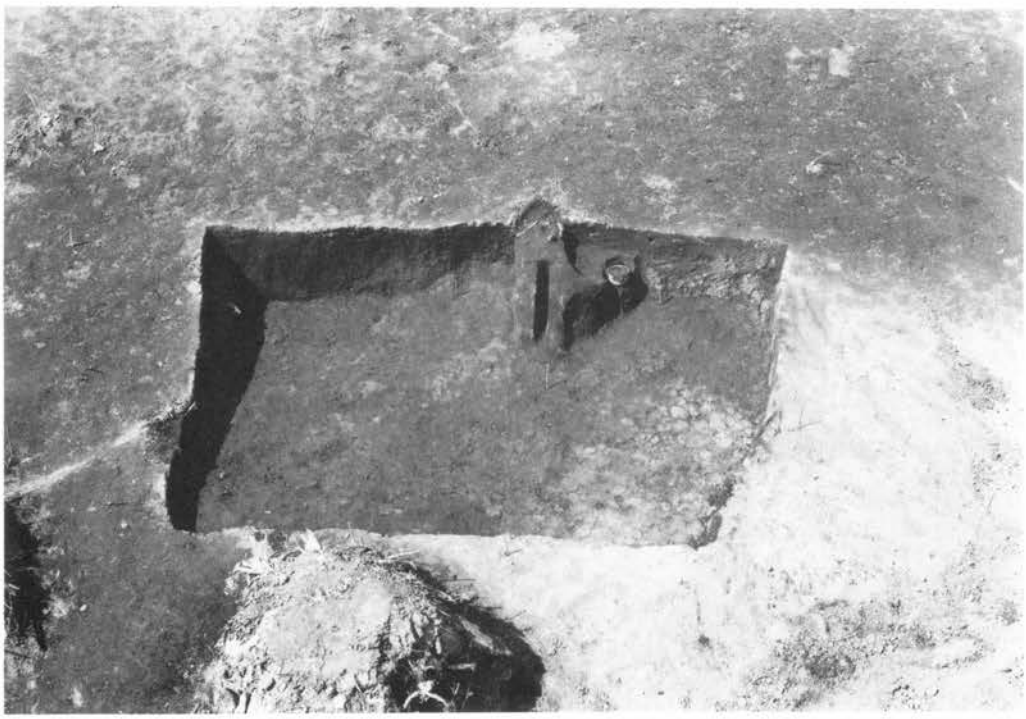
25

縄文時代・石器 (3)



1号住居跡

2 号住居跡

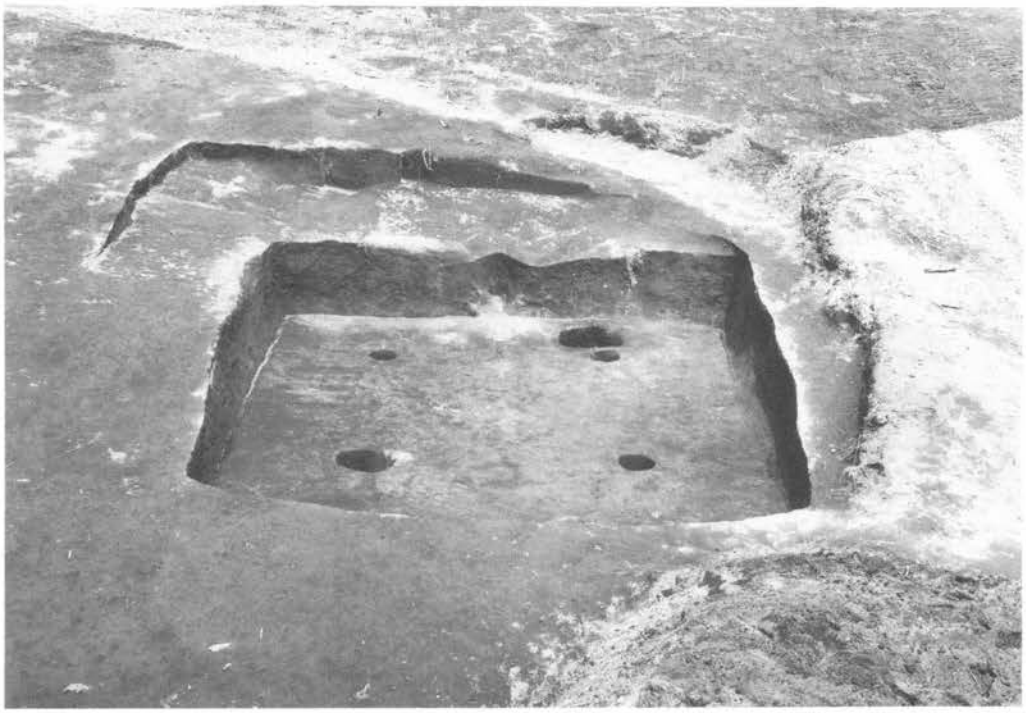


3 号住居跡

4 号住居跡

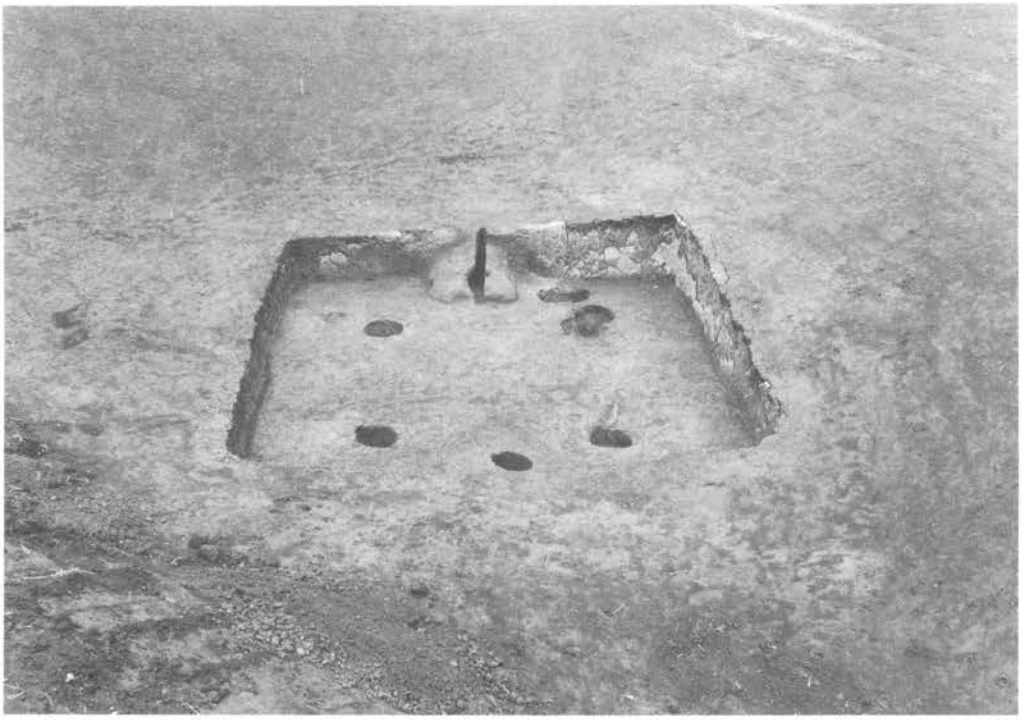
5 号住居跡

6 号住居跡

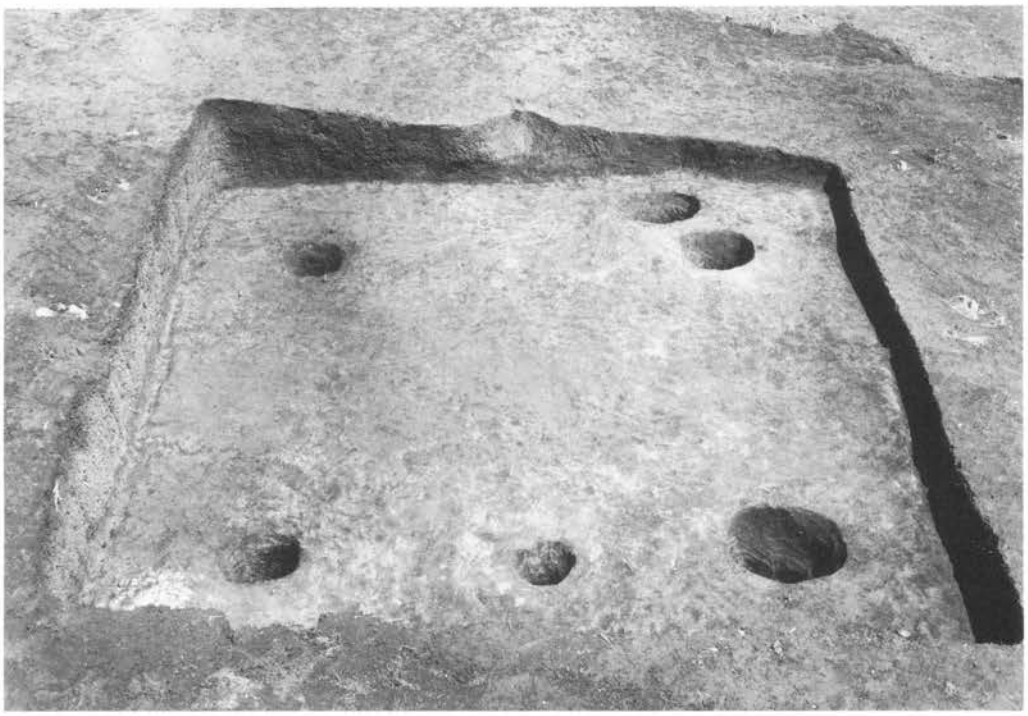


7 号住居跡

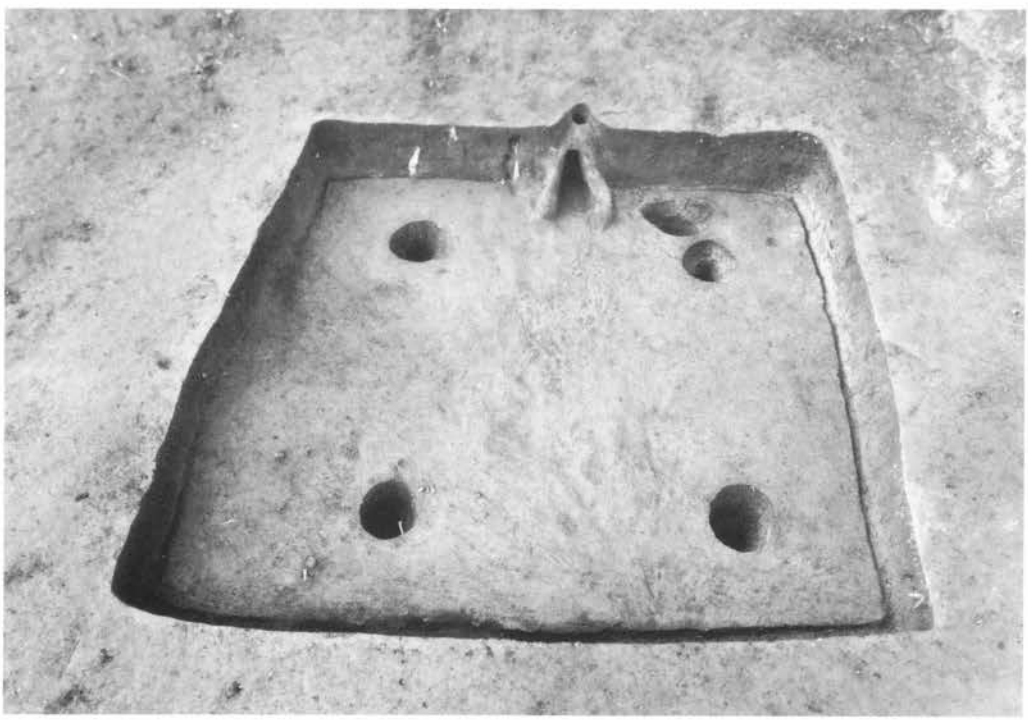
8 号住居跡



9 号住居跡

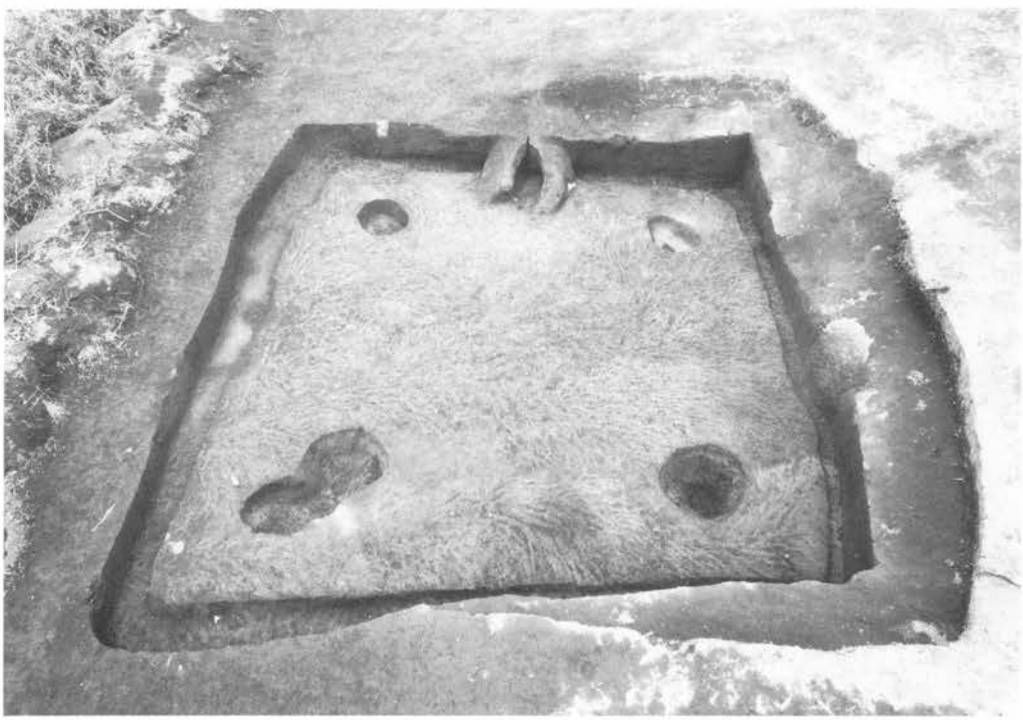


10号住居跡



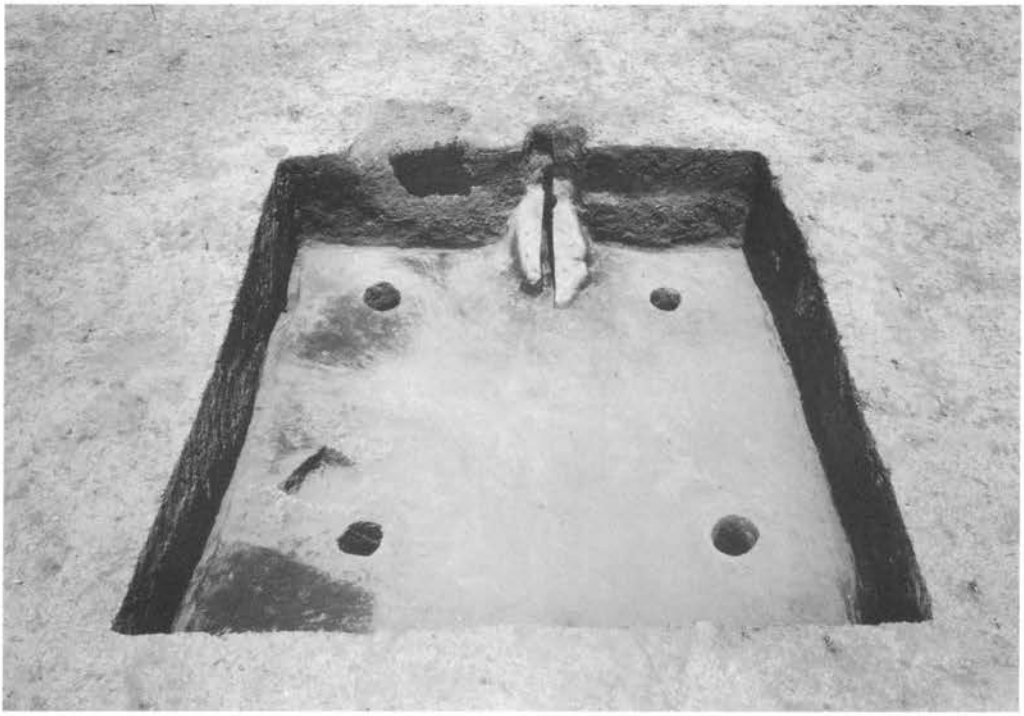
11号住居跡

12号住居跡

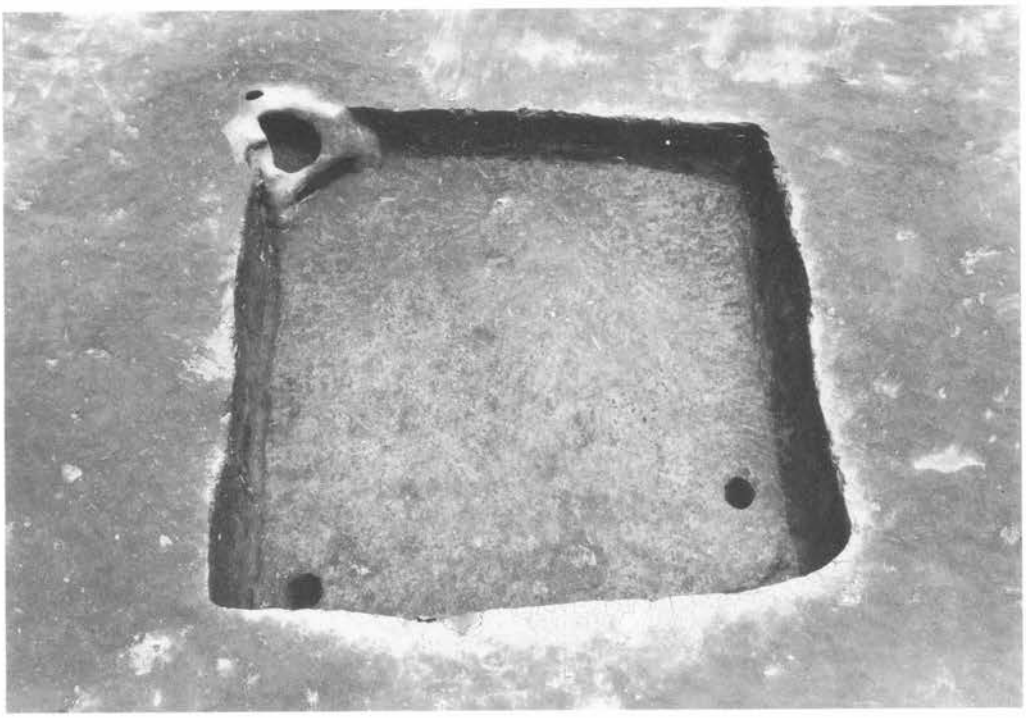


13号住居跡

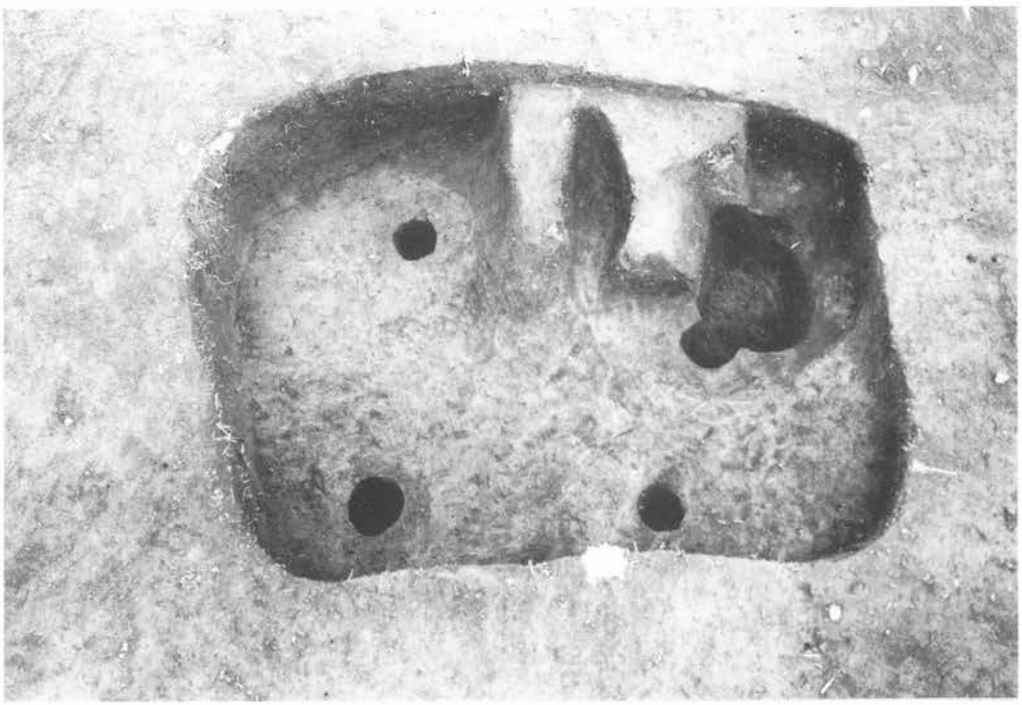
14号住居跡



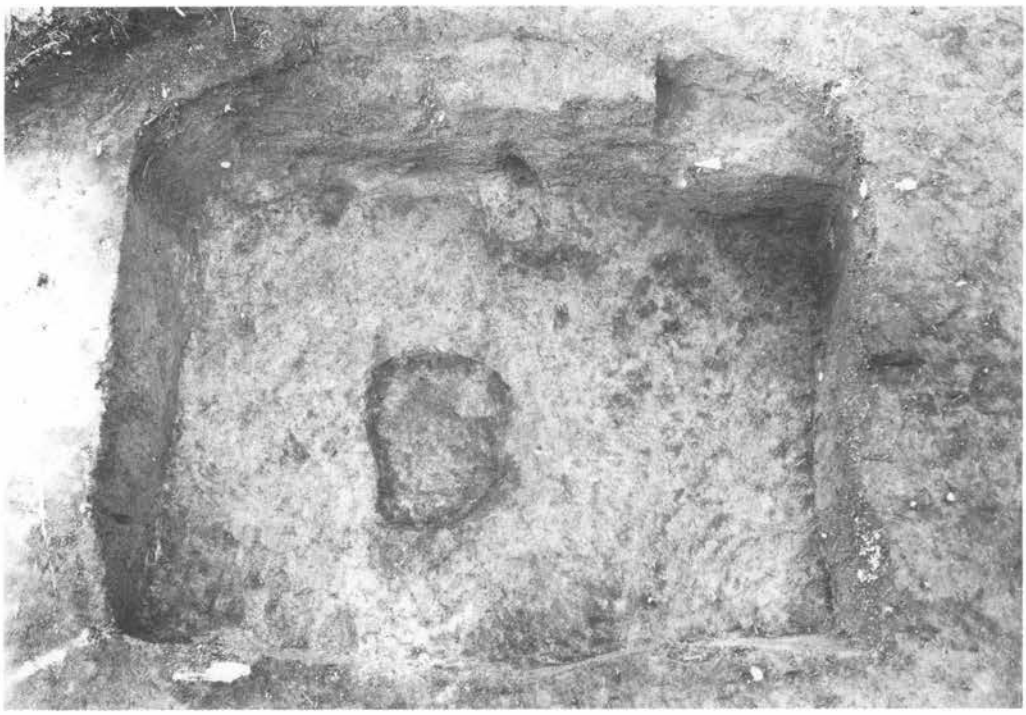
15号住居跡



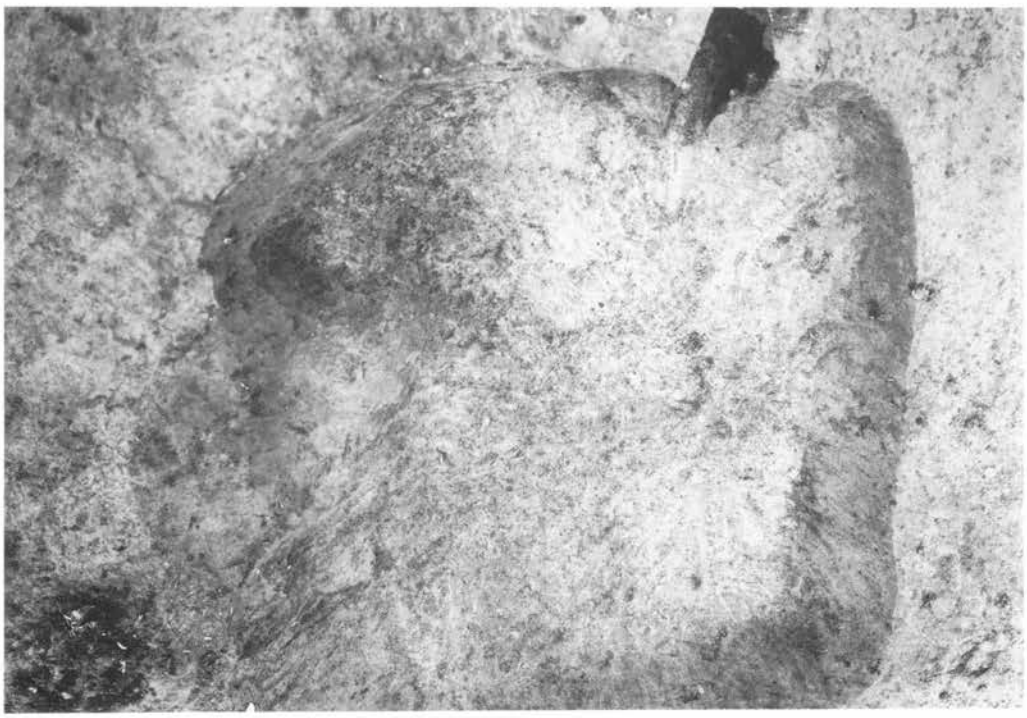
16号住居跡



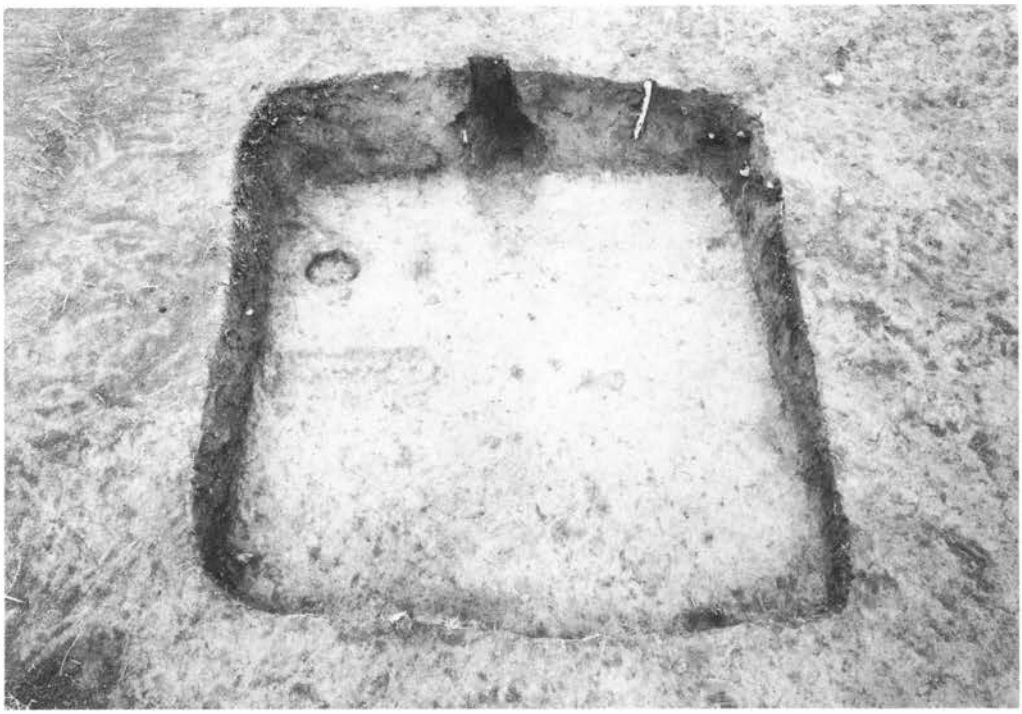
17号住居跡



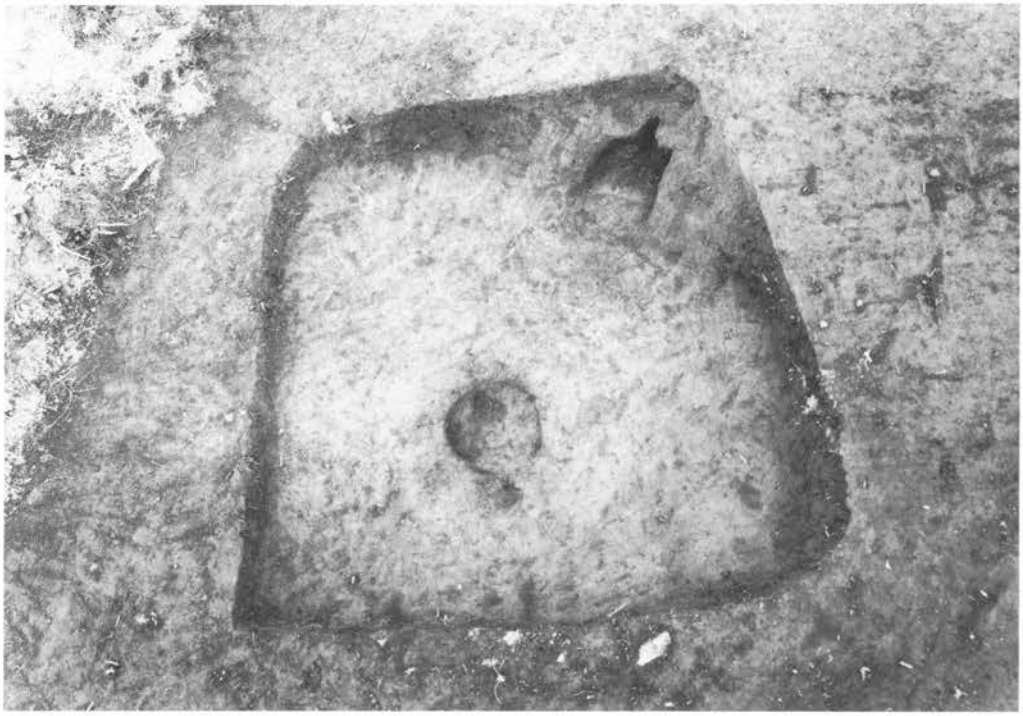
18号住居跡



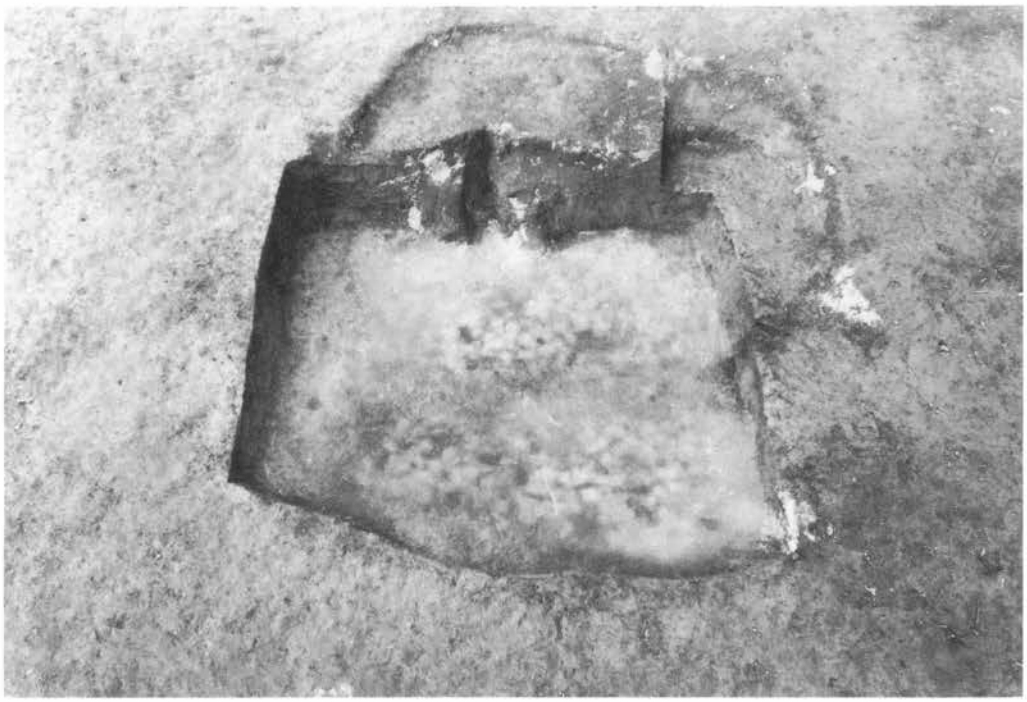
19号住居跡



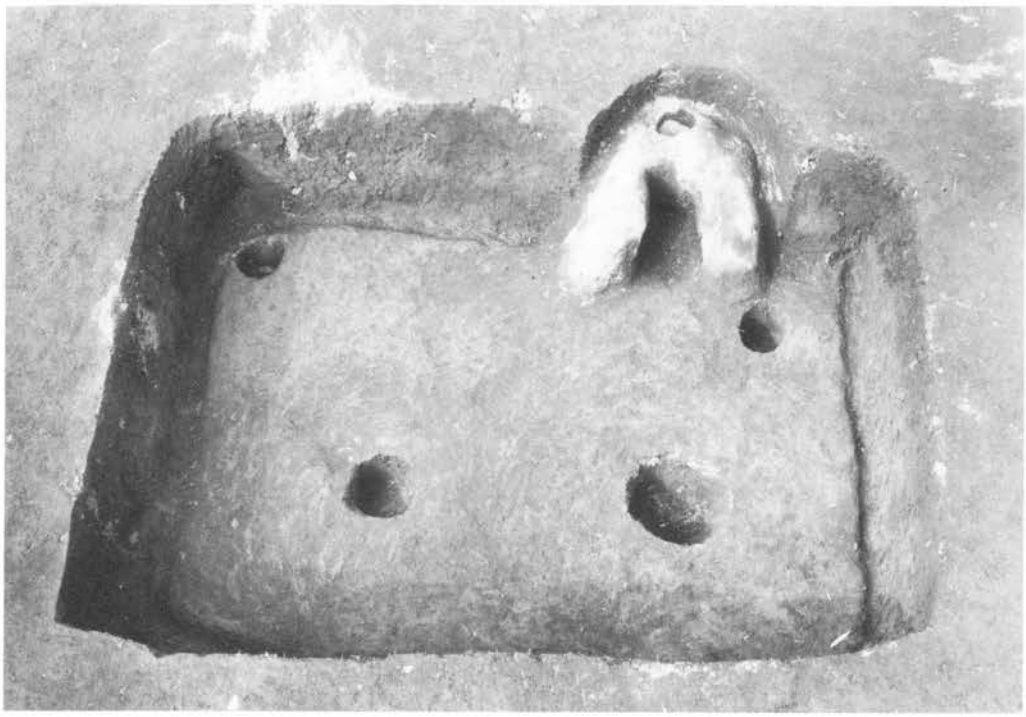
20号住居跡



21号住居跡

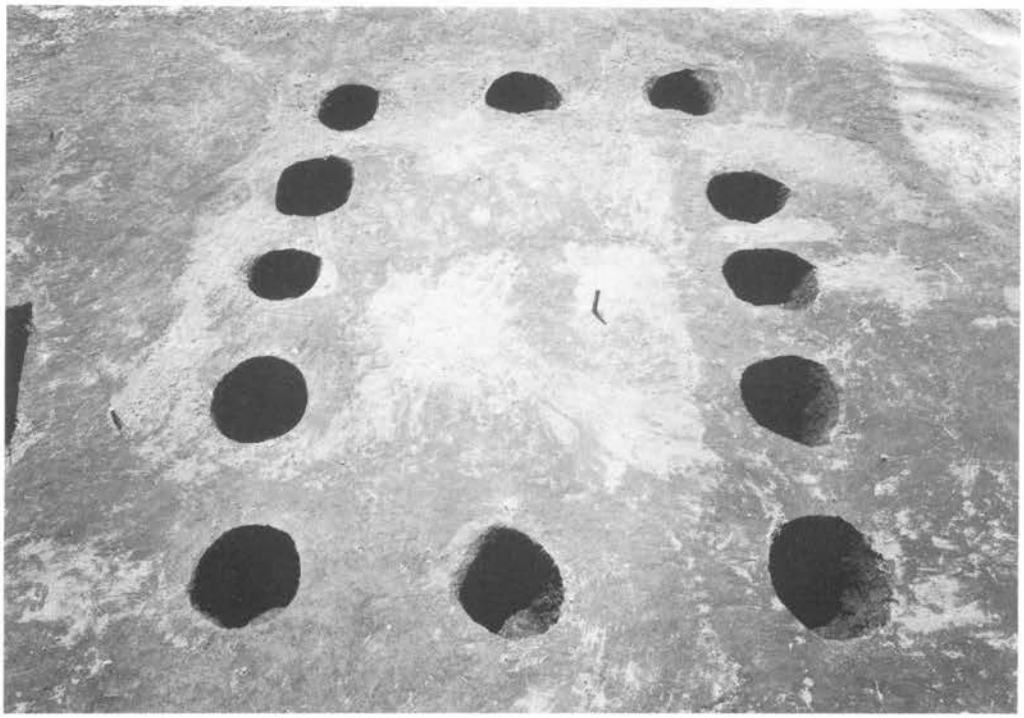


22号住居跡

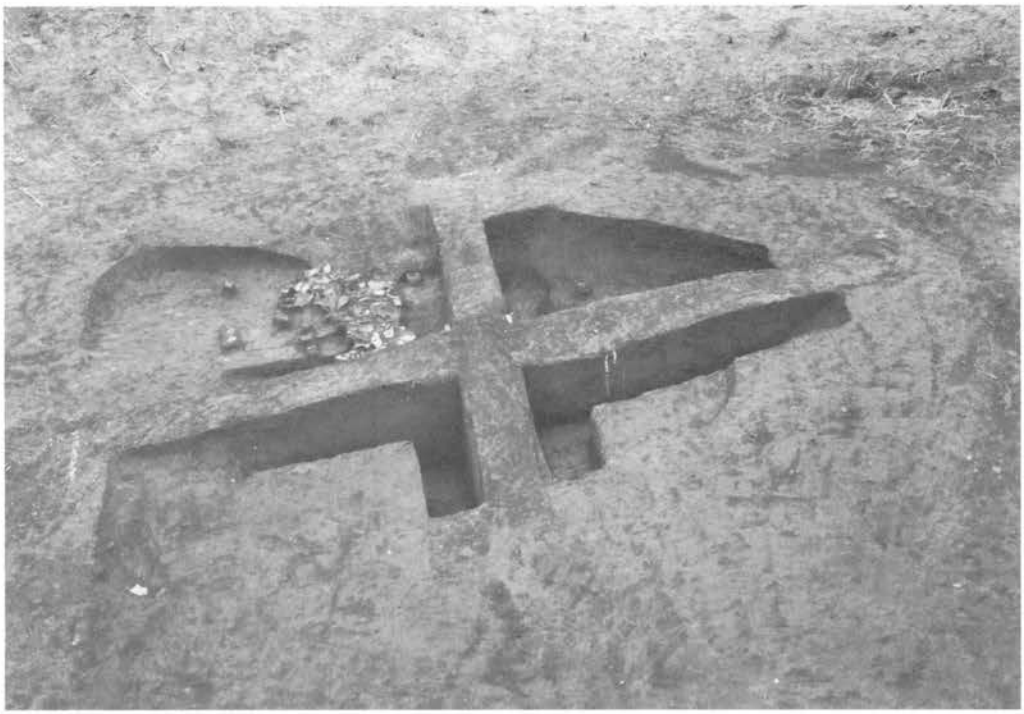


23号住居跡

24号住居跡



1号掘立柱跡



特殊遺構

1

2

4

5

6

8

9

10

11

12

1号住居跡出土遺物

3

4

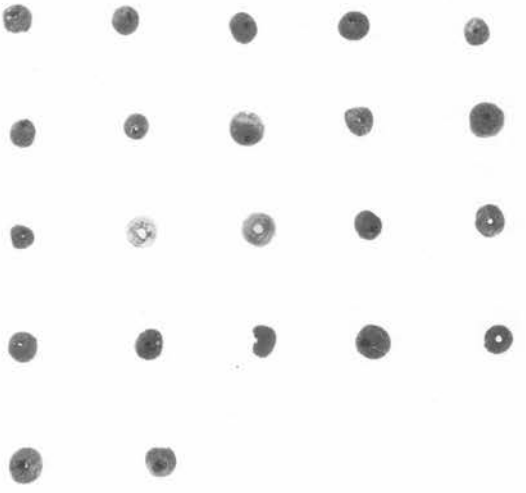
5

9

11

12

14



2号住居跡出土遺物

1

3号住居跡出土遺物

1

2

5

6

4号住居跡出土遺物

1

5号住居跡出土遺物

3

4

5

6

8

11

6号住居跡出土遺物

5

6

7 号住居跡出土遺物

4

5

8

10

8 号住居跡出土遺物

1

2

3

4

6

23

11

24

13

9号住居跡出土遺物 (1)

25

26

29

31

33

34

9 号住居跡出土遺物 (2)

35

36

37

38

9 号住居跡出土遺物 (3)

9号住居跡出土遺物 (4)

10号住居跡出土遺物 (1)

8

10

10号住居跡出土遺物　(2)

1

4

8

11号住居跡出土遺物

12号住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

9

10

11

11

13号住居跡出土遺物

1

2

3

1

2

14号住居跡出土遺物

3

4

15号住居跡出土遺物　(1)

15号住居跡出土遺物　(2)

16号住居跡出土遺物

1

2

3

4

6

7

10

8

9

11

17号住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

9

10

18号住居跡出土遺物

1

2

19号住居跡出土遺物

2

3

4

5

7

6

20号住居跡出土遺物

4

21号住居跡出土遺物

1

2

3

4

1

5

22号住居跡出土遺物

3

23号住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

特殊遺構出土遺物 (1)

6

7

特殊遺構出土遺物　(2)

8

9

特殊遺構出土遺物　(3)

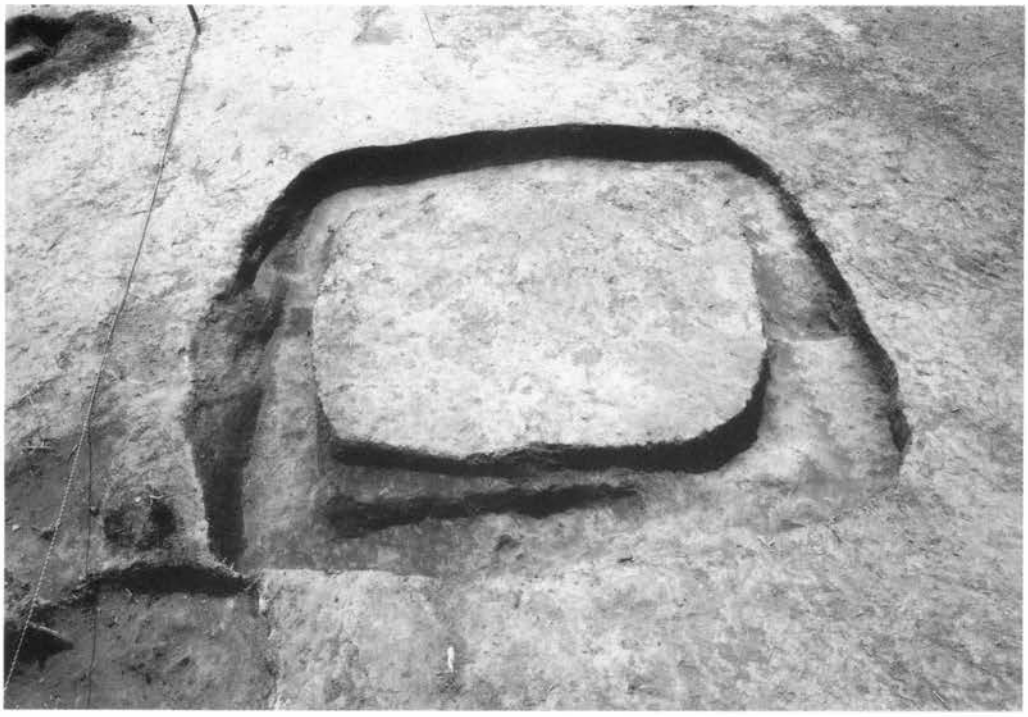
1

2

4

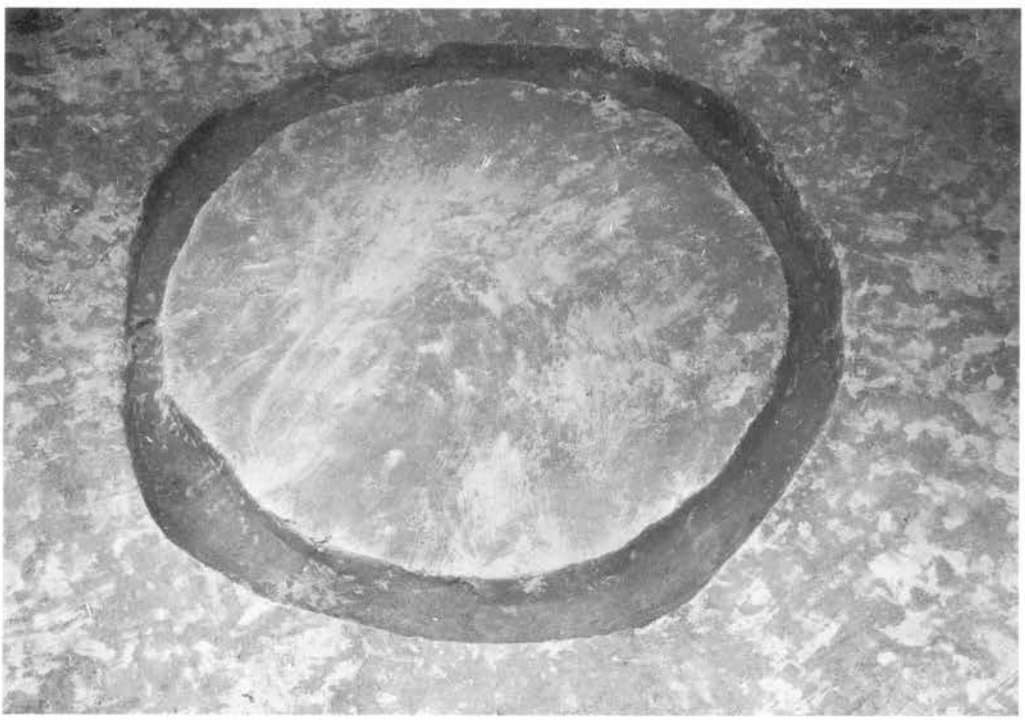
7

一括遺物

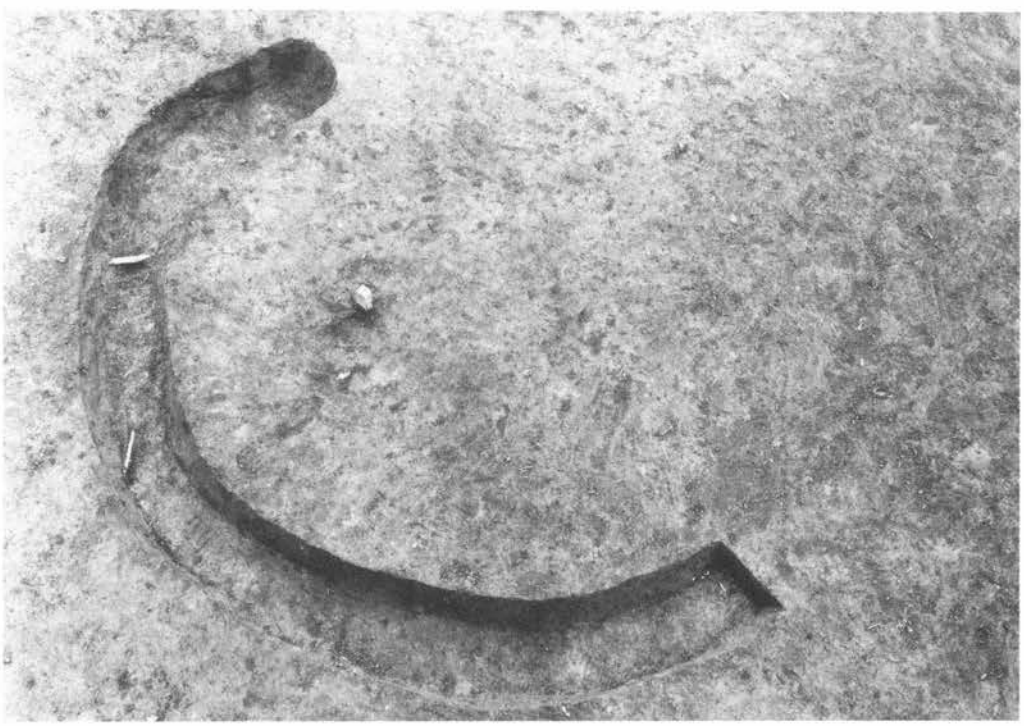


1号方形周溝状遺構

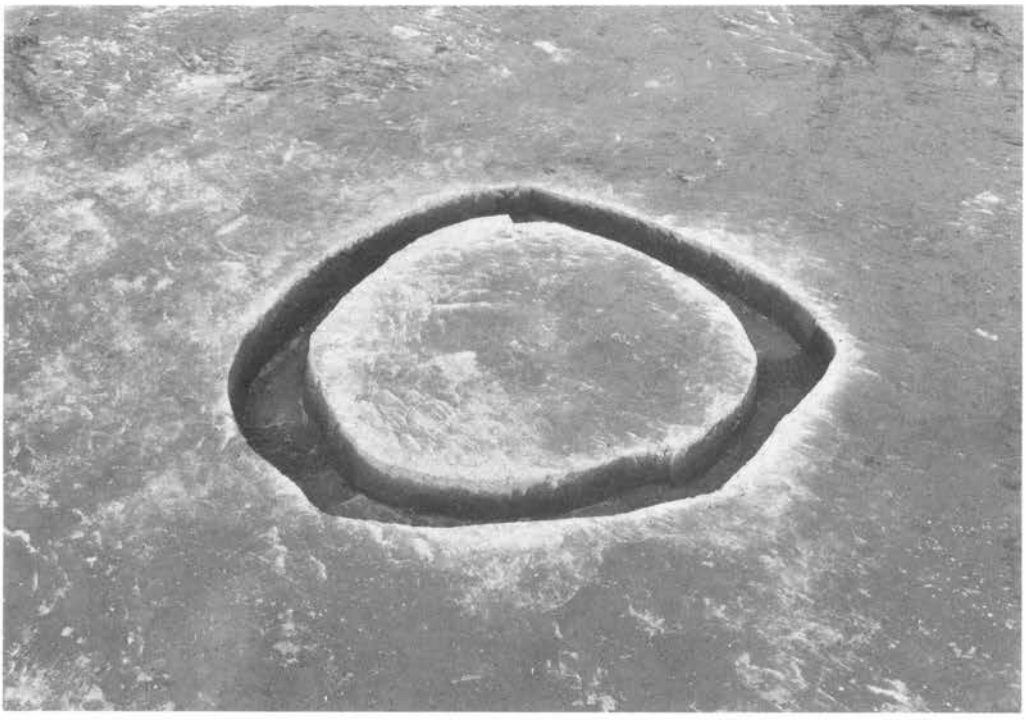
2号方形周溝状遺構



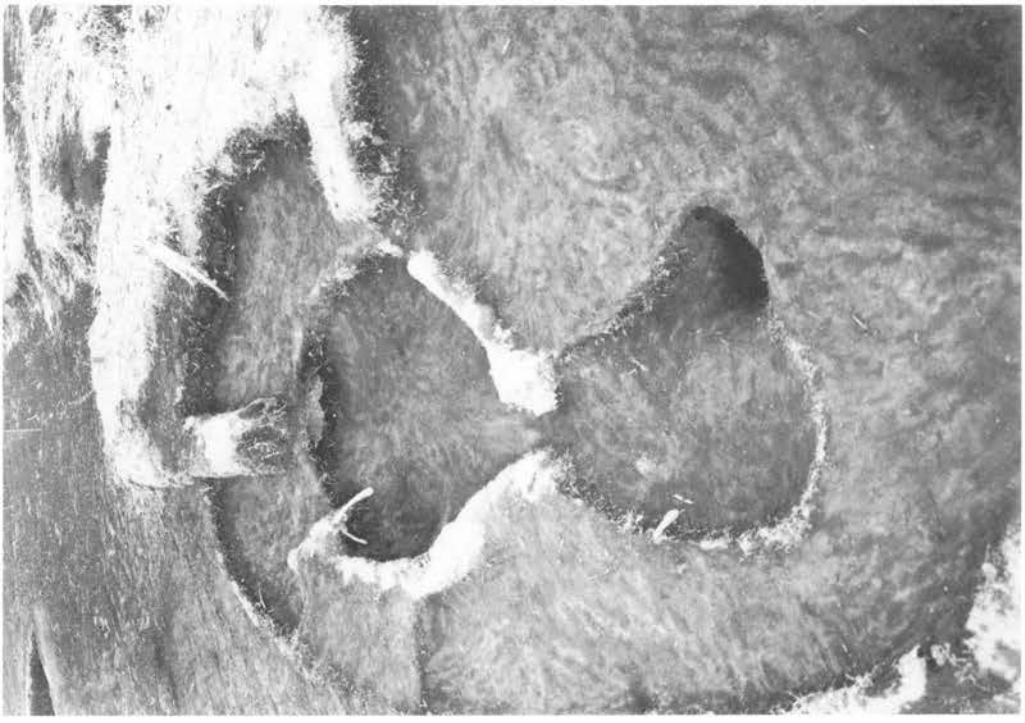
1 号円形周溝状遺構



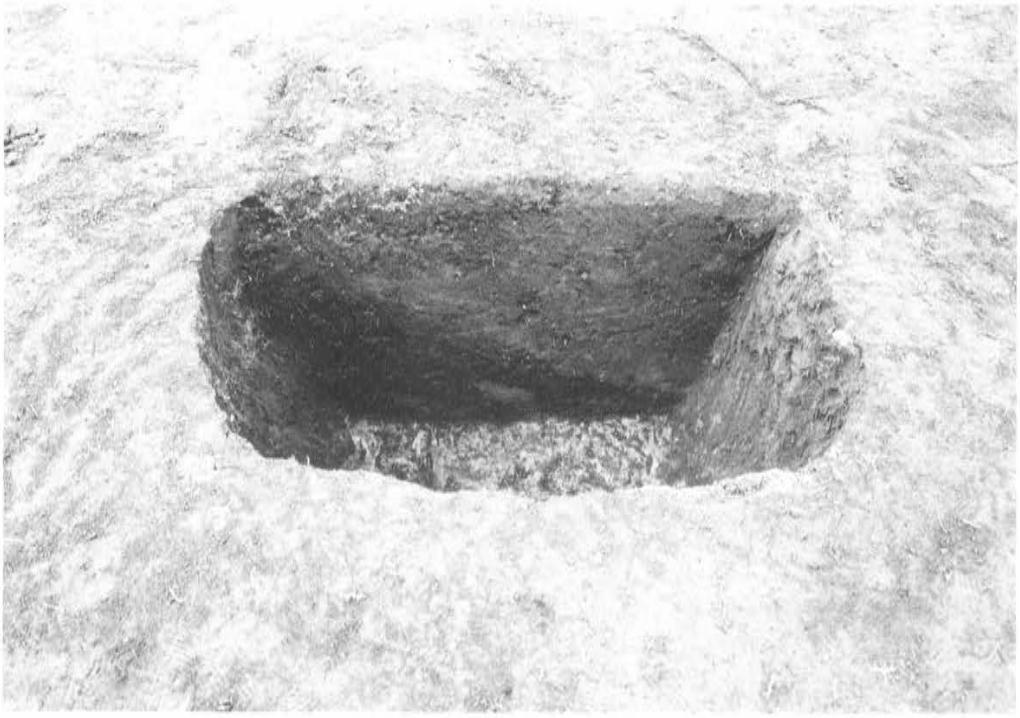
2 号円形周溝状遺構



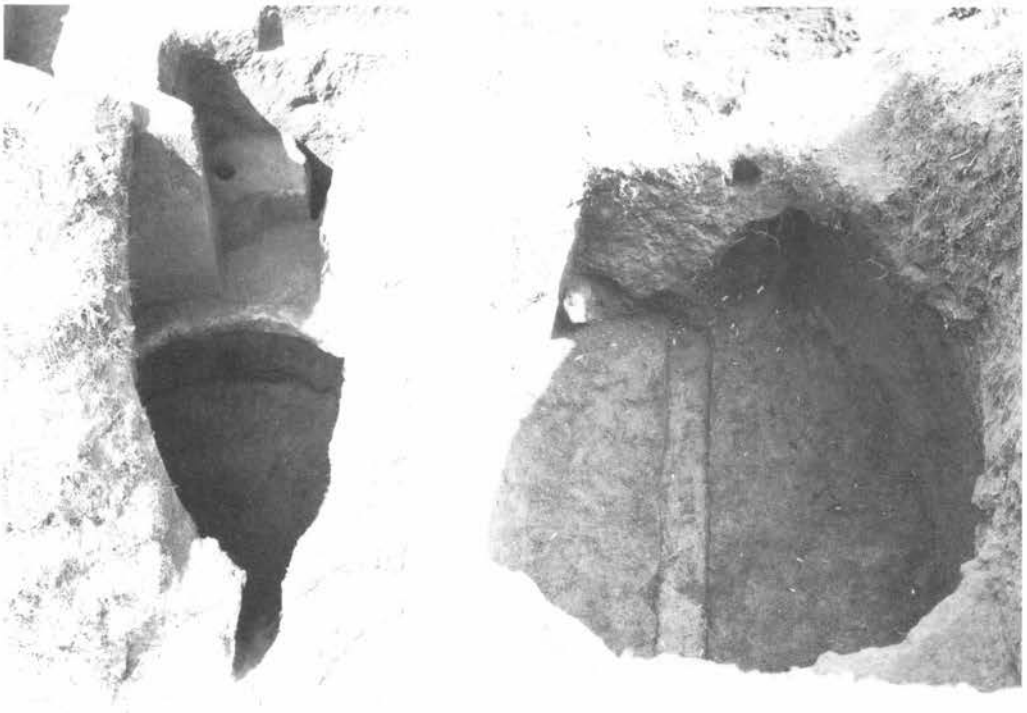
3号円形周溝状遺構



瓢形炭窯



12号土坑状炭窯

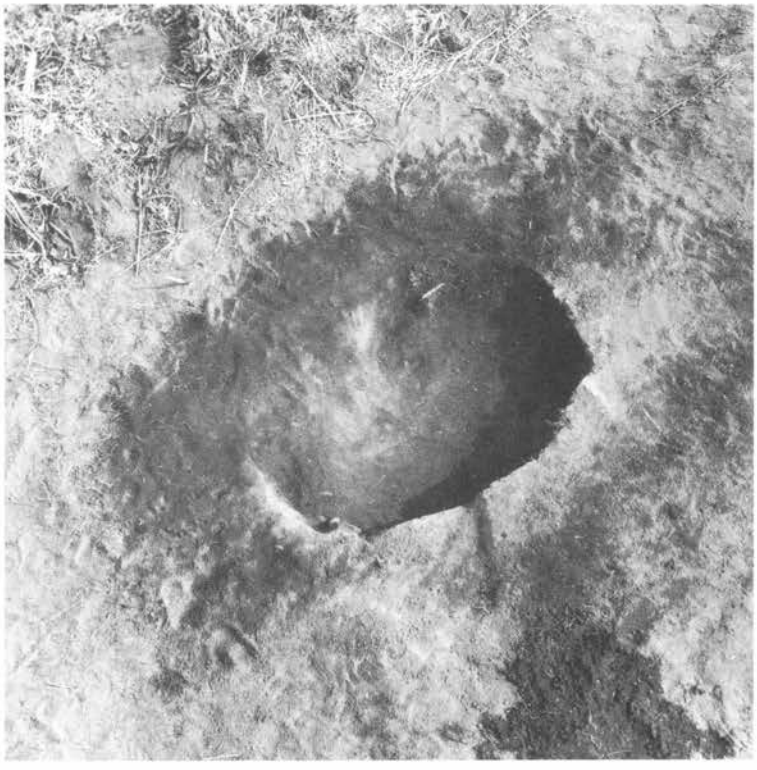


1号窯跡

1号土坑

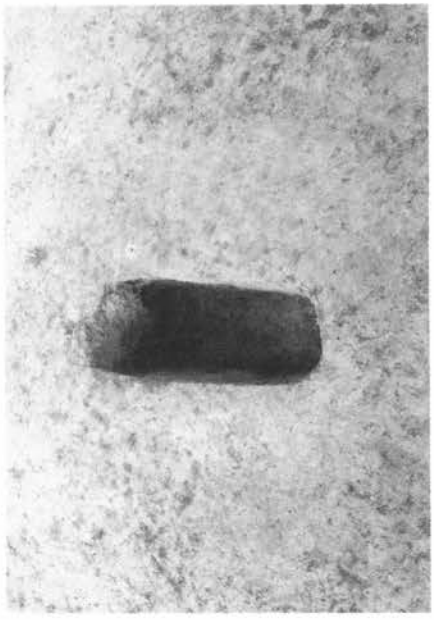
2号土坑

3号土坑

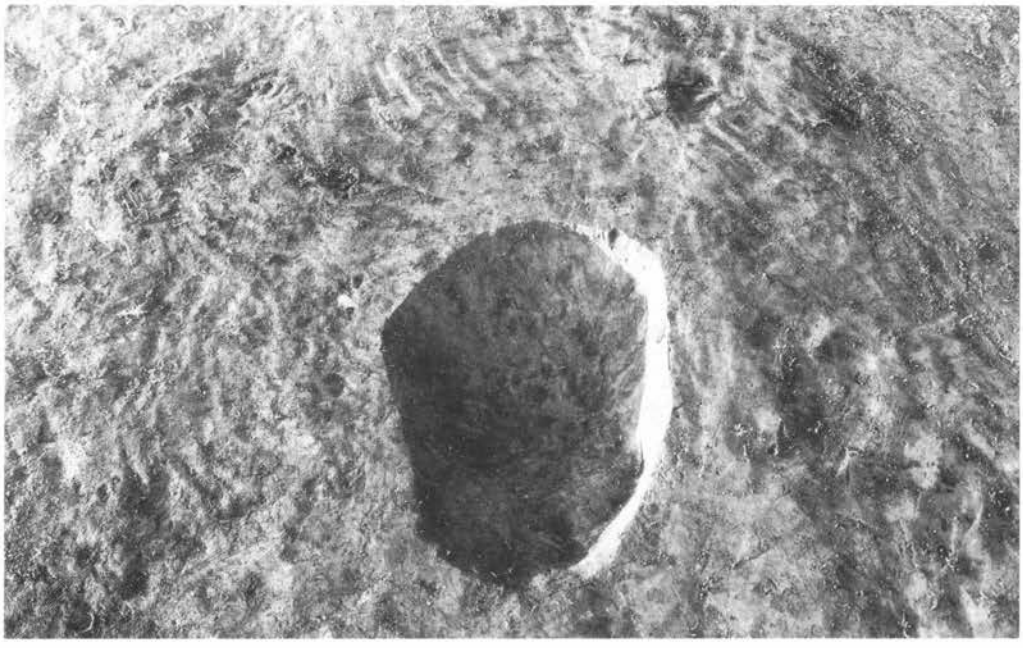


4号土坑

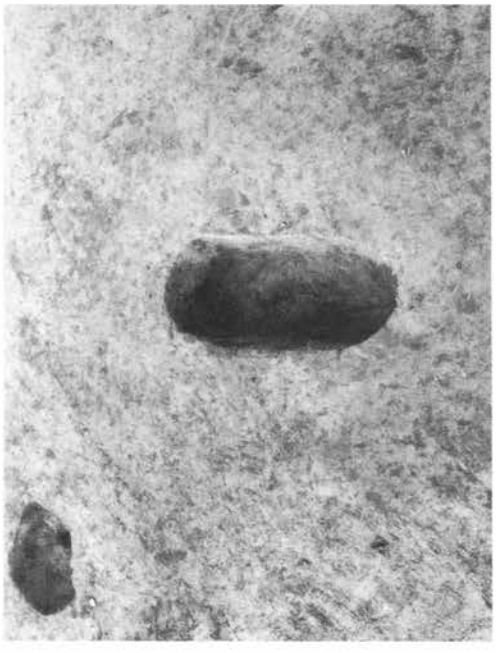
5号土坑



6号土坑

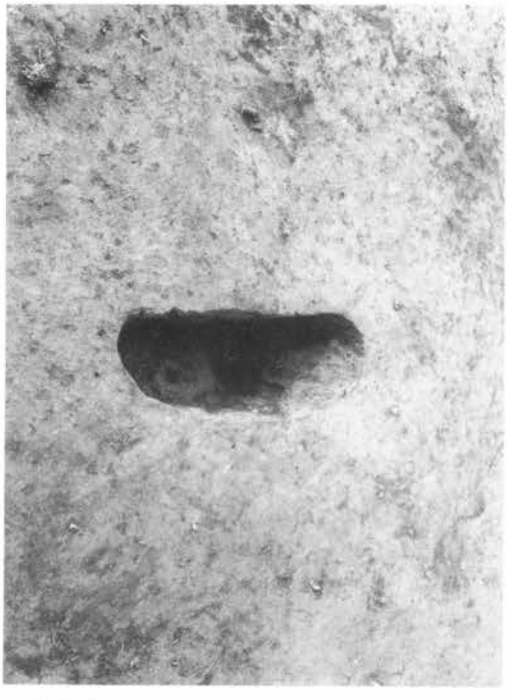


7号土坑



8号土坑

9号土坑

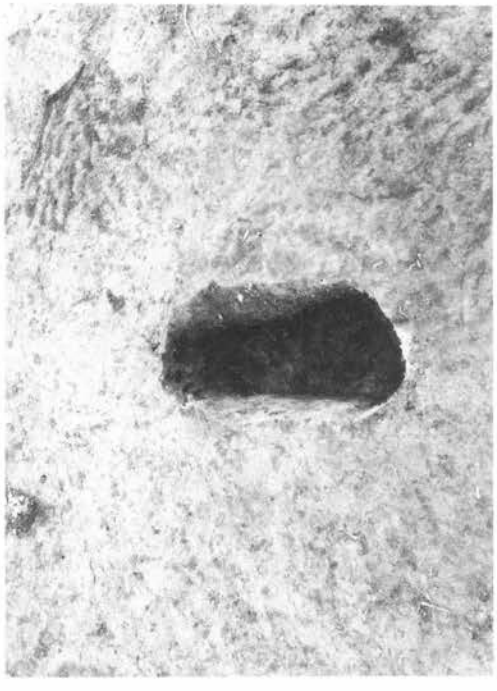


10号土坑

11号土坑

12号土坑

13号土坑



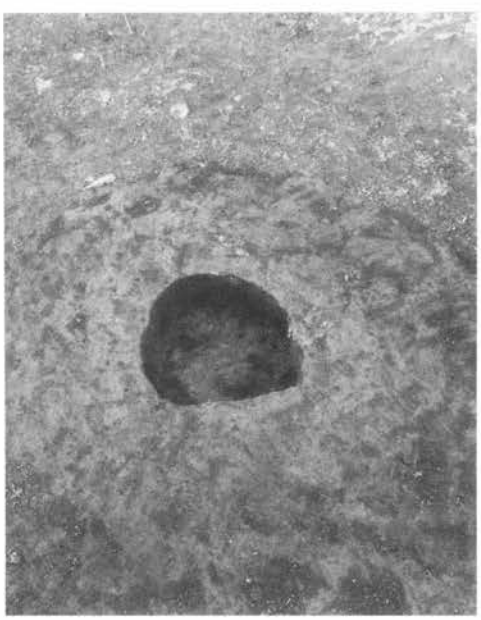
14号土坑

15号土坑

16号土坑

17号土坑

18号土坑



21号土坑

22号・23号土坑

26号土坑

27号土坑

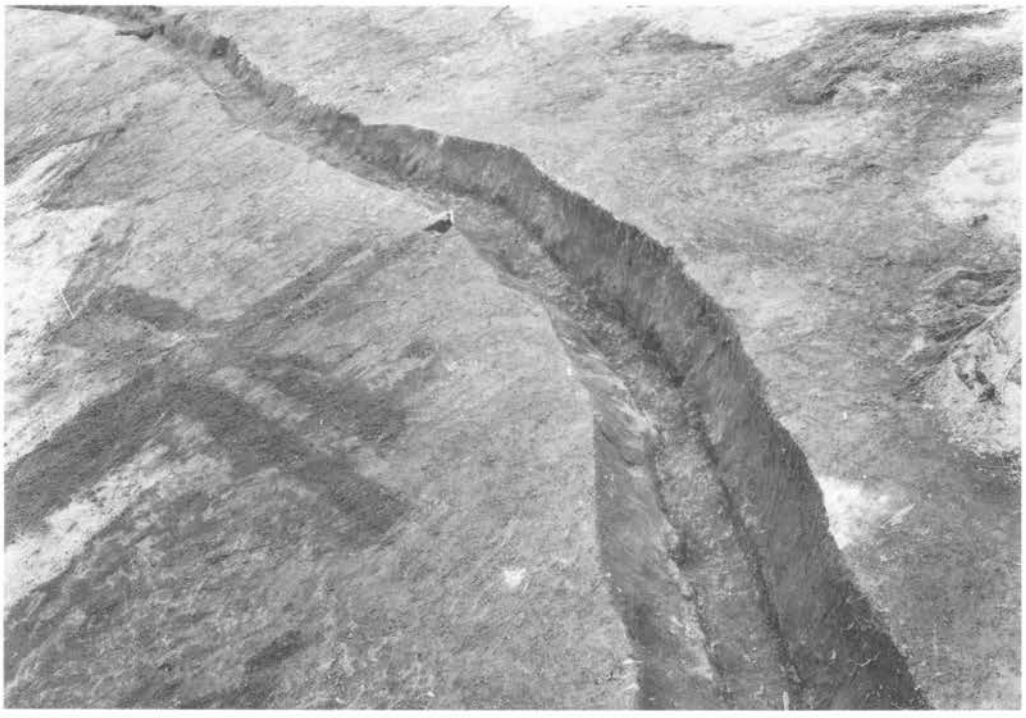
28号土坑

32号土坑

33号土坑

1号・2号溝

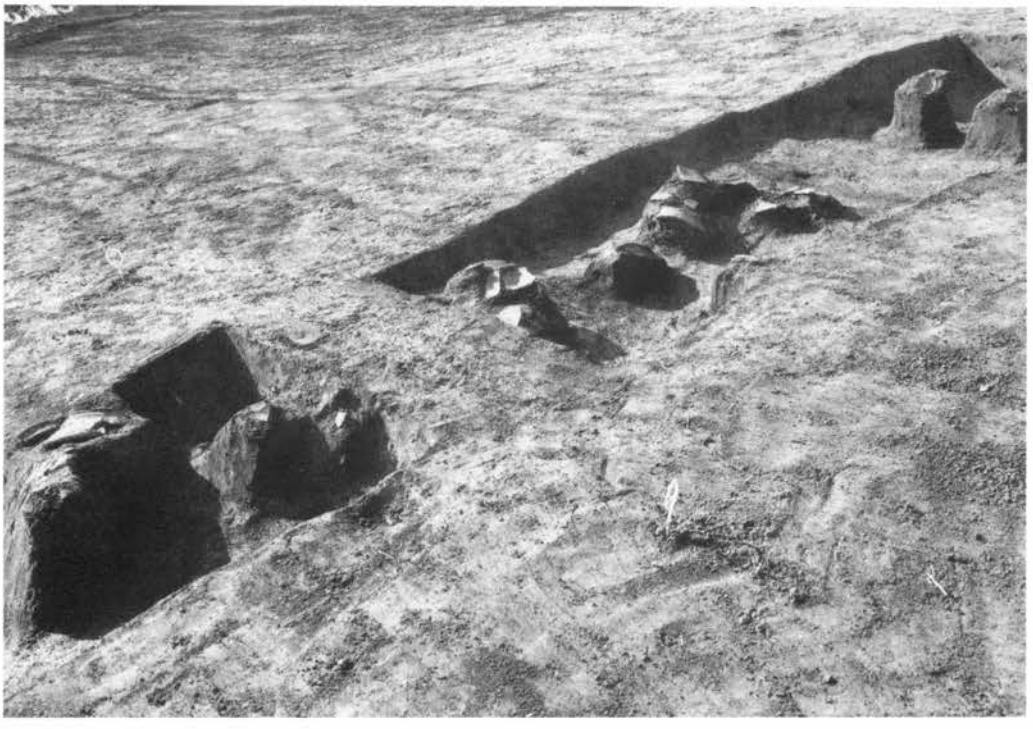
3号溝



4 号溝

昭和58年度調査区全景

5 号溝



6 号溝

昭和62年3月20日　印刷
昭和62年3月31日　発行

佐倉市腰巻遺跡

発行　千葉県土地開発公社
〒280 千葉市市場町7番9号
財団法人 千葉県文化財センター
〒280 千葉市葛城2丁目10番1号
TEL 0472（25）6478㈹
印刷　㈲みつわ軽印刷社